

PeopleSoft®

EnterpriseOne 8.9
アップグレード・ガイド
PeopleBook
(Windows ベース・システム)

2003 年 9 月

PeopleSoft EnterpriseOne 8.9
アップグレード・ガイド (Windows ベース・システム) PeopleBook
SKU AC89JUGN0309

Copyright 2003 PeopleSoft, Inc. All rights reserved.

本書に含まれるすべての内容は、PeopleSoft, Inc. (以下、「ピープルソフト」) が財産権を有する機密情報です。すべての内容は著作権法により保護されており、該当するピープルソフトとの機密保持契約の対象となります。本書のいかなる部分も、ピープルソフトの書面による事前の許可なく複製、コピー、転載することを禁じます。これには電子媒体、画像、複写物、その他あらゆる記録手段を含みます。

本書の内容は予告なく変更される場合があります。ピープルソフトは本書の内容の正確性について責任を負いません。本書で見つかった誤りは書面にてピープルソフトまでお知らせください。

本書に記載されているソフトウェアは著作権によって保護されており、このソフトウェアの使用許諾契約書に基づいてのみ使用が許諾されます。この使用許諾契約書には、開示情報を含むソフトウェアと本書の使用条件が記載されていますのでよくお読みください。

PeopleSoft、PeopleTools、PS/nVision、PeopleCode、PeopleBooks、PeopleTalk、Vantiveはピープルソフトの登録商標です。Pure Internet Architecture、Intelligent Context Manager、The Real-Time Enterpriseはピープルソフトの商標です。その他すべての会社名および製品名は、それぞれの所有者の商標である場合があります。ここに含まれている内容は予告なく変更されることがあります。

オープンソースの開示

この製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) が開発したソフトウェアが含まれています。Copyright (c) 1999-2000 The Apache Software Foundation. All rights reserved. このソフトウェアは「現状のまま」提供されるものとし、特定の目的に対する商品性および適格性の黙示保証を含む、いかなる明示または黙示の保証も行いません。Apache Software Foundationおよびその供給業者は、損害の発生原因を問わず、責任の根拠が契約、厳格責任、不法行為(過失および故意を含む)のいずれであっても、また損害の可能性が事前に知らされていたとしても、このソフトウェアの使用によって生じたいかなる直接的損害、間接的損害、付随的損害、特別損害、懲罰的損害、結果的損害に関しても一切責任を負いません。これらの損害には、商品またはサービスの代用調達、使用機会の喪失、データまたは利益の損失、事業の中断が含まれますがこれらに限らないものとします。

ピープルソフトは、いかなるオープンソースまたはシェアウェアのソフトウェアおよび文書の使用または頒布に関しても一切責任を負わず、これらのソフトウェアや文書の使用によって生じたいかなる損害についても保証しません。

目次

概要	1
その他のインストール・オプション	1
最新のドキュメント	2
技術的な最小要件	2
PeopleSoftのサポート	3
サポート・レベル:ブロンズ、シルバー、ゴールド、プラチナ	3
表記規則	6
EnterpriseOneのリリース	6
タスク基本情報欄	6
考慮事項ボックス	7
ヒントおよびテクニック	7
トラブルシューティング・ボックス	8
アイコン	8
フォント	8
リリース8.9における新機能	11
リリース8.9の新機能と変更された機能	11
ソフトウェア全般の変更	11
〈Installation Planner(インストール・プランナ)〉	11
〈Initial Tasks Workbench(初期タスク・ワークベンチ)〉	12
データ・ソース	12
〈Environment Workbench(環境ワークベンチ)〉	13
コントロール・テーブル	13
テーブル変換	13
スペックのマージ	13
パッケージ	14
エンタープライズ・サーバーのインストール	14
アップグレードの完了	14
標準名の変更	14
アップグレードの概要	15
アップグレード・チェックリスト	15
アップグレード・プロセスの概要	16
アップグレード時に確保される要素と置換される要素	17
対話型アプリケーションのルール	18
レポートのルール	18
アプリケーション・テキストの変更	19
テーブル・スペックのルール	19
コントロール・テーブルのルール	20
ビジネス・ビューのルール	20
イベント・ルールのルール	20
データ構造体のルール	21
ビジネス関数のルール	21
アップグレードのタイプ	21
カスタム修正を伴う並行リリース	22
カスタム修正を伴わない並行リリース(データのみのアップグレード)	22

アップグレード・プロセス	22
デプロイメント・サーバーのインストール	22
Installation Planner	22
Installation Workbench	24
エンタープライズ・サーバーのインストール	24
ワークステーションへのインストール	25
プロセスの流れ	25
インストールの準備	25
デプロイメント・サーバーの アップグレード	25
プリスティン環境のアップグレード(必須)	26
アップグレード・プランの作成	26
環境のアップグレード	26
エンタープライズ・サーバーのインストール	26
Installation Workbenchの再開	26
アップグレード後の処理	26
ワークステーションへのインストール	27
カスタム修正	27
本稼働用環境のアップグレード	27
環境の概要	27
リリース8.9環境の共存	28
プランナ環境(JDEPLAN)	28
プランナ・パス・コード	28
プランナ・データベース	28
プリスティン環境(JD9)	29
デプロイメント環境(DEP9)	29
テスト環境(TS9)	29
開発環境(DV9)	30
プロトタイプ環境(PY9)	30
本稼働用環境(PD9)	30
言語プロセスの概要	30
言語アーキテクチャ	30
基本言語	31
代替言語のコンポーネント	31
使用言語コード	31
言語インストール・プロセスの流れ	32
データベースの文字セットとコード・ページに関する考慮事項	33
Unicode	34
コード・ページ設定	34
SQL Server	34
Oracle	34
DB2 UDB	34
DB2/400	35
ワークステーションとデプロイメント・サーバー	38
ナショナル・ランゲージ・サポート	38
シングルバイトとダブルバイトに関する考慮事項	38
フォントに関する考慮事項	40
ユーザー表示設定	40
アップグレード前の処理	41
B73.3.xからリリース8.9にアップグレードする準備	41
P98MOQUE設定の確認	43
メディア・オブジェクト待ち行列の確認	43

▶ メディア・オブジェクト待ち行列を確認するには	43
環境の準備	45
▶ プロトタイプ環境を準備するには	45
▶ 開発環境を準備するには	46
修正フラグとマージ・フラグのチェック	47
▶ 修正フラグとマージ・フラグをチェックするには	47
準備の最終処理	49
データのリフレッシュと検証	49
▶ ビジネス・データをリフレッシュするには	50
▶ コントロール・テーブルをリフレッシュするには	50
▶ マスター・コントロール・テーブルのカスタム変更を検証するには	51
サーバーとデータのバックアップ作成	52
▶ デプロイメント・サーバーのバックアップを作成するには	52
▶ エンタープライズ・サーバーのバックアップを作成するには	53
データベースのバックアップ作成	53
▶ Oracleデータベースのバックアップを作成するには	53
▶ SQL Serverデータベースのバックアップを作成するには	53
買掛金データの処理	53
ソフトウェア要件とハードウェア要件の確認	54
リリース8.9のディスク容量要件の確認	54
デプロイメント・サーバーのディスク容量要件	54
エンタープライズ・サーバーのディスク容量要件	55
Oracleデータベース	55
SQL Serverデータベース	56
IBM DB2 UDBデータベース	57
言語インストールのディスク容量要件	58
サーバーのディスク領域のクリーンアップ	59
デプロイメント・サーバーのディレクトリ構造	59
Intelのディレクトリ構造	64
アップグレード詳細ワークシートへの記入	66
Oracle	66
ビジネス・データ	66
セントラル・オブジェクト	67
コントロール・テーブル	67
データ辞書	68
オブジェクト・ライブラリアン	68
サーバー・マップ	69
システム	69
バージョン	69
SQL Server	70
ビジネス・データ	70
セントラル・オブジェクト	70
コントロール・テーブル	71
データ辞書	72
オブジェクト・ライブラリアン	72
サーバー・マップ	72
システム	73
バージョン	73
UDB	74
ビジネス・データ	74
セントラル・オブジェクト	75
コントロール・テーブル	75
データ辞書	76
オブジェクト・ライブラリアン	76

サーバー・マップ	77
システム	77
バージョン	78
MSDE	78
OneWorld言語	78
OneWorld言語更新	78
OneWorld Local	79
OneWorld Local更新	79
デプロイメント・サーバーのインストール	81
デプロイメント・サーバーへのリリース8.9のインストール	82
テーブル監査機能の無効化	82
MSDEのインストールに関する考慮事項	82
デプロイメント・サーバーの構成	83
▶ ユーザーJDEを作成するには	83
デプロイメント・サーバーのインストール	84
▶ オブジェクトをインストールするには	84
最新ソフトウェアのダウンロードとインストール	100
▶ サービス・パックおよびサービス・パックの最新のワンオフをインストールする には	100
▶ 最新のプランナ・アップデートをインストールするには	100
▶ テーブル変換のアップデートをインストールするには	100
デプロイメント・サーバーへの代替言語のインストール	101
▶ 代替言語をデプロイメント・サーバーにインストールするには	101
ERPデータベースのアップグレード	102
Oracle for Windowsの準備とインストール	103
Oracleデータベース用コード・ページ設定の検証	103
▶ Oracleデータベースのコード・ページ設定を検証するには	104
▶ Oracle用にNLS_LANGパラメータを設定するには	104
リリース8.9用Oracleデータベースの準備	106
▶ リリース8.9用Oracleデータベースを準備するには	106
▶ Oracleシステム表領域を検証するには	107
▶ 表領域を作成するには	108
Oracleデータベースのユーザーと所有者の作成	108
▶ Oracle用のデータベース・ユーザーを作成するには	109
▶ Oracle用のデータベース所有者を作成するには	109
Oracle用セントラル・オブジェクトのロード	110
▶ Oracle用のセントラル・オブジェクトをロードするには	110
SQL Server for Windowsの準備とインストール	112
SQL Server用のコード・ページ設定の検証	112
▶ SQL Server用のコード・ページ設定を検証するには	112
SQL Server用のデータベースの作成	113
▶ データベース作成スクリプトを編集するには	113
▶ データベース作成スクリプトを実行するには	114
SQL Server用のデータベース・ログオンとユーザーの作成	115
▶ ログオンおよびユーザー作成スクリプトを編集するには	115
▶ ログオンおよびユーザー作成スクリプトを実行するには	116
SQL Server用のセントラル・オブジェクトのロード	116
▶ SQL Server用のセントラル・オブジェクトをロードするには	116
DB2 UDBの準備とインストール	118
LOCKLISTのサイズ拡張	118

▶ LOCKLISTのサイズを拡張するには	118
表スペースのサイズ拡張	118
▶ 表スペースのサイズを拡張するには	118
DB2 UDB用のコード・ページ設定の検証	119
▶ DB2 UDB用のコード・ページ設定を検証するには	119
データベース・ユーザーと所有者の作成	119
▶ DB2 UDB用のユーザーを作成するには	120
リリース8.9用DB2 UDBデータベースの準備とインストール	121
▶ データベース作成スクリプトを編集するには	122
▶ エンタープライズ・サーバーにデータベース作成スクリプトを格納するに は	126
▶ エンタープライズ・サーバー上でデータベース作成スクリプトを実行する には	127
▶ エンタープライズ・サーバー上でCLIデータ・ソースを作成するには ..	128
▶ デプロイメント・サーバー上でデータベースをカタログ化するには ..	128
セントラル・オブジェクトのロード	129
▶ loadallスクリプトを編集するには	129
▶ loadallスクリプトを実行するには	129
▶ ログをチェックするには	130
DB2 UDBインストールのトラブルシューティング	130
データベース/表スペースの作成	130
セントラル・オブジェクトの作成	131
セントラル・オブジェクトのロード(Loadall)	131
クライアントからデータベースへの接続	131
パッケージのビルド/スペックのマージ	133
エンタープライズ・サーバー上のリリース8.9の起動	133
アップグレード後のリリース8.9の修正	135
Installation Plannerの概要	135
言語情報	135
ロケーション情報	135
デプロイメント・サーバー情報	136
エンタープライズ・サーバー情報	136
データ・ソース情報	137
Installation Plannerの実行	138
インストール・プロセスの理解	139
アップグレード前の必須プロセスに関する基本情報	140
アップグレード前の必須プロセス - プリステイン環境のアップグレード	140
カスタム・インストール・プランの定義に関する基本情報	143
Installation Plannerの開始	143
▶ 〈Installation Planner〉を開始するには	143
プラン記述の入力	144
▶ プラン記述を入力するには	144
ロケーション情報の入力	148
▶ ロケーション情報を入力するには	148
デプロイメント・サーバー情報の入力	150
▶ デプロイメント・サーバー情報を入力するには	150
エンタープライズ・サーバー情報の入力	152
エンタープライズ・サーバー情報の入力	152
▶ エンタープライズ・サーバー情報を入力するには	152
エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力	155
▶ カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには	155
▶ Oracle接続文字列を入力するには(Oracleのみ)	156

▶ カスタム・サーバー・マップ・データ・ソース情報を検証するには	156
▶ 別のエンタープライズ・サーバーを追加するには	157
マシン/サーバー・タイプの定義	158
マシン/サーバー・タイプの指定	158
▶ マシン/サーバー・タイプを指定するには	158
データ・サーバーの定義(任意)	159
▶ データ・サーバーを定義するには	159
Javaサーバーの定義(任意)	161
▶ Javaサーバーを定義するには	161
Windowsターミナル・サーバーの定義(任意)	163
▶ Windowsターミナル・サーバーを定義するには	163
共有データ・ソース情報の入力	165
▶ (カスタムまたはデフォルトの)共有データ・ソース・セットアップ情報を指定するには	165
▶ データ辞書のデータ・ソースを検証するには	166
▶ オブジェクト・ライブラリアン・データ・ソースを検証するには	166
▶ システム・データ・ソースを検証するには	167
環境のセットアップ	168
▶ カスタム環境を追加するには	170
▶ 環境を選択するには	170
▶ 環境のデータ・ロード・パラメータを指定するには	171
▶ 上級パラメータを検証するには	173
▶ 言語を選択するには	174
環境のデータ・ソースのセットアップ	175
▶ 環境のデータ・ソース・セットアップ・オプションを選択するには	176
▶ ビジネス・データ・データ・ソースをセットアップするには	176
▶ セントラル・オブジェクト・データ・ソースをセットアップするには	177
▶ コントロール・テーブル・データ・ソースをセットアップするには	178
▶ バージョン・データ・ソースを検証するには	180
▶ 別の環境を選択するには	180
リモート・ロケーションの追加	181
▶ リモート・ロケーションを追加するには	181
インストール・プランの確定	181
▶ インストール・プランを確定するには	181
▶ <Planner Validation Report>を実行するには	182
Installation Workbenchの実行	183
ワークベンチのコンポーネントの概要	183
Installation Workbenchを実行する準備	185
ジョブ待ち行列の作成	185
▶ ジョブ待ち行列を作成するには	185
在席時または無人ワークベンチ・モードの選択	187
▶ 在席時ワークベンチ・モードを選択するには	188
無人ワークベンチ・モードのタスク・ブレイクの設定	188
▶ 無人ワークベンチ・モードでタスク・ブレイクを設定するには	188
Installation Workbenchの実行	190
Installation Workbenchの開始	191
▶ <Installation Workbench>を開始するには	191
Initial Workbench Tasks	192
▶ <Initial Workbench Tasks>を実行するには	193
▶ <Initial Workbench Tasks>の状況を変更するには	195
ロケーションの構成	195

▶ ロケーションを構成するには	195
データ・ソースの構成	196
▶ データ・ソースを構成するには	196
環境の構成	197
▶ 環境を構成するには	198
マシンの構成	198
▶ マシンを構成するには	199
コントロール・テーブルのマージ	199
▶ コントロール・テーブルを構成するには	200
エンタープライズ・サーバーのインストール	201
テーブル変換の実行	201
▶ テーブル変換を実行するには	202
Table Conversion Workbenchのアーキテクチャ	203
エンタープライズ・サーバー上でのテーブル変換の処理	204
エンタープライズ・サーバー上で実行するためのテーブル変換の構成	205
待ち行列の構成	207
テーブル変換の開始	207
テーブル変換のモニタリング	208
ログ・ファイル	209
テーブル変換の停止	211
ワークベンチの再開	211
問題の再投入	212
F9843、F9843T	212
F98405	212
F984052	212
F986110	212
F986130	212
テーブル変換プロセスの検証	213
テーブル変換の依存関係	213
テーブル変換の検証	213
テーブル・フォーマットの検証	214
▶ テーブル・フォーマットを検証するには	216
テーブル変換プログラムの再実行	216
▶ テーブル変換プログラムを再実行するには	217
Oracleのテーブル・フォーマットの検証	218
Oracleデータベースのロールバック・セグメントの変更	218
SQL Serverのテーブル・フォーマットの検証	218
▶ SQL Serverでテーブル・フォーマットを検証するには(方法1)	218
▶ SQL Serverでテーブル・フォーマットを検証するには(方法2)	219
旧形式のテーブル	219
システム・コード88の旧形式のテーブル	219
システム・コード89の旧形式のテーブル	221
スペック・テーブルのマージ	221
▶ スペック・テーブルをマージするには	222
Specification Mergeの再起動	223
▶ <Specification Merge>を再起動するには	223
パッケージの構成	224
▶ パッケージを構成するには	224
リモート・ロケーションの構成	225
▶ リモート・ロケーションを構成するには	225

〈Installation Workbench〉の終了	226
▶ 〈Installation Workbench〉を終了するには	226
データベース統計の更新	227
エンタープライズ・サーバーのインストール	229
エンタープライズ・サーバーのインストール	229
エンタープライズ・サーバーの構成	230
▶ リリース8.9管理者ユーザーを作成するには	230
▶ hostsファイルを設定して検証するには	230
エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール	231
デプロイメント・サーバー上でのエンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイル修正	232
▶ デプロイメント・サーバー上でエンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイルを 修正するには	232
エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9ホスト・コードのインストール	235
▶ エンタープライズ・サーバーにリリース8.9ホスト・コードをインストールするには	235
エンタープライズ・サーバーの起動	240
▶ リリース8.9ネットワーク・サービスをインストールするには	241
▶ リリース8.9ネットワーク・サービスを開始するには	241
インストール内容の検証	242
▶ リリース8.9エンタープライズ・サーバーのインストール内容を検証するには (PORTTEST)	242
PORTTESTチェックリスト	243
エンタープライズ・サーバー上でのプリンタの設定	246
▶ 新規プリンタを追加するには	246
▶ デフォルト・プリンタを定義するには	259
エンタープライズ・サーバーへの言語スペックのコピー	261
多言語による数値書式の設定	261
▶ エンタープライズ・サーバーの書式設定文字に合わせてJDE.INIファイルを設定する には	262
カスタム修正およびパッケージ	263
カスタム修正の遡及適用	265
▶ 修正内容を遡及適用するには	265
パッケージのビルドとテスト	266
システム・パスの更新	267
▶ SYSTEMパスを更新するには	267
パッケージ・ビルド前の問題点の検討	268
▶ 次のUBEがローカルにマップされているかどうかの検証	268
▶ OCMマッピングの検証	268
▶ BUSOBJディレクトリの削除	268
▶ F9631テーブルの検証	268
▶ エンタープライズ・サーバー上でのjde.ini設定の検証	270
▶ エンタープライズ・サーバーの構成	270
トラブルシューティングのヒントの検討	270
ユーザーに関するヒント	270
アセンブリ・プロセスとビルド・プロセスの完了	270
パッケージ定義画面の完了	270
親パッケージの更新	271
サーバー・パッケージの更新	271
デプロイメントに関するヒント	271
CDを作成するマシンへのパッケージの配布	271
パッケージの承認	271

パッケージのINFファイルのコピー	271
クライアント・パッケージのinfファイルの構成	272
更新パッケージの配布	272
代替言語パッケージのビルド	272
パッケージのビルドに関する考慮事項	273
パッケージのデプロイメントに関する考慮事項	273
ワークステーションへのインストール	275
ワークステーションの構成とインストール	276
ワークステーションへのインストールの理解	277
リリース8.9のインストール方法	277
サードパーティ製品	278
MSDEのインストールに関する考慮事項	278
ユーザー・プロファイルと言語に関する考慮事項	279
デプロイメント・サーバー上のワークステーションJDE.INIファイルの修正	279
▶ デプロイメント・サーバー上でワークステーションのJDE.INIファイルを修正する には	280
DB2 UDBデータベースのカタログ化	281
オンライン・モードによるリリース8.9のインストール	281
▶ リリース8.9をオンライン・モードでインストールするには	281
自動モードによるリリース8.9のインストール	286
▶ リリース8.9を自動モードでインストールするには	286
アップグレード後の処理	289
ポスト・インストール	289
▶ ポスト・インストール・タスクの実行	289
本稼働用環境のアップグレード	303
全般的なチェックリストと考慮事項	304
PY9からPD9への全ディレクトリのコピー	305
▶ PY9からPD9に全ディレクトリをコピーするには	305
PY9からPD9へのセントラル・オブジェクトとバージョンのコピー	306
▶ PY9からPD9にセントラル・オブジェクトをコピーするには	306
エンタープライズ・サーバー上でのPY9からPD9へのコピー	308
▶ エンタープライズ・サーバー上でPY9パス・コードをPD9パス・コードにコピーするには	308
プロトタイプからの本稼働用オブジェクト・ライブラリアン・レコードの更新	309
▶ プロトタイプから本稼働用オブジェクト・ライブラリアン・レコードを更新するには	309
パッケージのコピー	310
本稼働用パッケージの配布	311
▶ リリース8.9本稼働用環境を使用できるように準備するには	311
本稼働用環境のアップグレード・プランのセットアップ	311
▶ 本稼働用環境のインストール・プランをセットアップするには	311
本稼働用環境のオフライン化	313
本稼働用環境のインストール・プランの実行	313
▶ 本稼働用環境のインストール・プランを実行するには	313
本稼働用パッケージのテスト	314
▶ リリース8.9本稼働用環境を使用できるように準備するには	314
本稼働用環境のオンライン化	314
アップグレードの完了	315

リリース8.9のディレクトリに対するWindowsセキュリティの設定	316
Clientディレクトリ	317
Pathcodeディレクトリ	317
Databaseディレクトリ	318
Data Dictionaryディレクトリ	318
Helpsディレクトリ	318
Hostsディレクトリ	319
Mediaobjディレクトリ	319
Plannerディレクトリ	319
Printqueueディレクトリ	319
Systemディレクトリ	320
アップグレード後のリリース8.9の修正	320
メディア・オブジェクト待ち行列の修正	320
▶ メディア・オブジェクト待ち行列を修正するには	321
SQL Serverオプションの再設定	323
▶ SQL Serverオプションを再設定するには	323
タスク検索テーブルの作成	324
▶ タスク検索テーブルを作成するには	324
Autopilot(スクリプト作成ツール)実行のためのリリース8.9の構成	325
▶ Autopilotを実行するリリース8.9を構成するには	325
Solution Explorerの設定	330
Solution ExplorerのHTMLドキュメンテーション・パスの設定	331
Word Search Generationプログラムの実行	331
▶ <Word Search Generation>プログラムをインストールするには	331
Solution Explorerのホームページの設定	332
Vertex Quantum Taxアプリケーションとの併用のためのリリース8.9の構成	332
Windows NTまたはWindows 2000サーバーのパスへのVertex Quantumディレクトリ情 報の追加	333
▶ NTサーバーのパスにVertex Quantumディレクトリ情報を追加するには ..	333
Vertex Quantum Taxアプリケーションのためのリリース8.9データベース接続の構成	334
▶ Vertex Quantum Taxアプリケーションのためのリリース8.9データベース接続を 構成するには	334
エンタープライズ・サーバーへのオブジェクトのマッピング	337
リリース8.9からのVertex Quantum接続のテスト	338
▶ リリース8.9からVertex Quantum接続をテストするには	338
Installation Plannerのユーティリティ	341
リモート・インストール・プランの作成	343
リモート・インストール・プランの作成	343
リモート・インストール・プランの定義に関する基本情報	344
Installation Plannerの開始	344
▶ <Installation Planner>を開始するには	344
Installation Plannerへの情報入力	345
▶ <Installation Planner>に情報を入力するには	345
プランのロケーション情報の入力	346
▶ プランのロケーション情報を入力するには	347
デプロイメント・サーバーの指定	348
▶ デプロイメント・サーバー情報を入力するには	348
▶ デプロイメント・サーバーのセットアップを完了するには	350
エンタープライズ・サーバーの指定	351
エンタープライズ・サーバー情報の入力	351
▶ エンタープライズ・サーバー情報を入力するには	351

エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力	354
▶ カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには	354
▶ Oracle接続文字列を入力するには (Oracleのみ)	355
▶ カスタム・サーバー・マップ・ソース情報を検証するには	355
▶ 別のエンタープライズ・サーバーを追加するには	356
マシン/サーバー・タイプの定義	357
マシン/サーバー・タイプの指定	357
▶ マシン/サーバー・タイプを指定するには	357
データ・サーバーの定義	358
▶ データ・サーバーを定義するには	358
Javaサーバーの定義	360
▶ Javaサーバーを定義するには	360
Windowsターミナル・サーバーの定義	362
▶ Windowsターミナル・サーバーを定義するには	362
共有データ・ソースのセットアップ情報の入力	363
▶ (カスタムまたはデフォルトの)共有データ・ソース・セットアップ情報を指定する には	364
▶ Oracle接続文字列を指定するには	364
▶ データ辞書のデータ・ソースを検証するには	364
▶ システム・データ・ソースを検証するには	365
環境のセットアップ	366
▶ (カスタムまたはデフォルトの)環境パラメータを指定するには	367
▶ 環境を選択するには	367
▶ リモート・ロケーションに情報をレプリケートするには	368
環境のデータ・ソースのセットアップ	371
▶ 環境のデータ・ソースのセットアップを開始するには	371
▶ ビジネス・データ・データ・ソースをセットアップするには	371
▶ コントロール・テーブル・データ・ソースを検証するには	372
▶ 別の環境を選択するには	373
リモート・インストール・プランのセットアップの完了	376
インストール・プランの確定	376
▶ インストール・プランを確定するには	376
▶ <Planner Validation Report>を実行するには	377
 既存構成へのサーバーの追加	 379
既存インストール・プランへのサーバーの追加に関する基本情報	379
Installation Plannerの開始	379
▶ <Installation Planner>を開始するには	379
プラン記述の入力	381
▶ プラン記述を入力するには	381
プランのロケーションの入力	382
▶ プランのロケーションを入力するには	382
追加サーバー・タイプの選択	383
▶ 追加サーバーのタイプを選ぶには	383
デプロイメント・サーバー情報の入力	384
▶ デプロイメント・サーバー情報を入力するには	384
エンタープライズ・サーバー情報の入力	386
エンタープライズ・サーバー情報の入力	386
▶ エンタープライズ・サーバー情報を入力するには	386
エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力	389
▶ カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには	389

▶ DB2 UDBデータベース・オブジェクトのサイズを設定するには	390
▶ Oracle接続文字列を入力するには(Oracleのみ)	391
▶ カスタム・サーバー・マップ・ソース情報を検証するには	391
▶ 別のエンタープライズ・サーバーを追加するには	392
データ・サーバーの追加	393
Javaサーバーの定義	395
▶ Javaサーバーを定義するには	395
Windowsターミナル・サーバーの定義	396
▶ Windowsターミナル・サーバーを定義するには	396
環境のセットアップ	398
環境の選択	398
環境のデータ・ソースのセットアップ	399
▶ 環境のデータ・ソースのセットアップを開始するには	400
▶ ビジネス・データ・データ・ソースをセットアップするには	400
▶ セントラル・オブジェクト・データ・ソースをセットアップするには	400
▶ コントロール・テーブル・データ・ソースを検証するには	401
▶ バージョン・データ・ソースを検証するには	402
▶ 別の環境を選択するには	403
インストール・プランの確定	404
▶ インストール・プランを確定するには	404
▶ <Planner Validation Report>を実行するには	405
追加サーバーの構成	405
▶ 追加サーバーを構成するには	405
Installation Planner処理オプションの検討	407
Installation Planner処理オプションの検討に関する基本情報	407
処理オプションへのアクセス	407
▶ 処理オプションにアクセスするには	407
処理オプション値の選択	408
▶ プロンプト・モードの指定	409
▶ 実行モードを指定するには	410
▶ デフォルト・モードを指定するには	411
▶ 状況変更を指定するには	412
▶ プラン完了処理を指定するには	413
▶ レプリケート・オプションを選択するには	415
▶ リモート・ロケーションのパッケージ・プッシュ・オプションを指定するには	416
インストール・プランの各部の削除	419
▶ インストール・プランからサーバーまたはマシンを削除するには	419
言語のみのインストール・プランの作成	421
言語のインストール要件の検討	421
▶ 言語インストールの要件を検討するには	421
デプロイメント・サーバーへの言語のインストール	421
▶ デプロイメント・サーバーに言語をインストールするには	421
Installation Plannerの実行	422
▶ <Installation Planner>にアクセスするには	422
▶ <Installation Planner>に情報を入力するには	422
▶ (カスタム/デフォルト)パラメータを選択するには	423

▶ 環境を選ぶには	423
Installation Workbenchの実行	424
▶ 〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉を実行するには	424
エンタープライズ・サーバー要件の確認	424
▶ エンタープライズ・サーバー要件を確認するには	425
ワークステーション要件の確認	425
▶ ワークステーション要件を確認するには	425
言語インストールの完了	425
代替言語パッケージのビルドと配布	425
アップグレード・ユーティリティ	427
サードパーティのODBCデータ・ソースの作成	429
SQLデータベースを搭載したWindowsエンタープライズ・サーバー用のODBCデータ・ソース	429
SQL Server用のサードパーティ・データ・ソースの作成	430
▶ 新規SQLデータ・ソースを作成するには	430
ソフトウェア保護コードの再検証	439
デプロイメント・サーバーの再検証	439
▶ デプロイメント・サーバーを再検証するには	439
ワークステーションの再検証	440
▶ ワークステーションを検証するには	440
ソフトウェアのアンインストール	443
デプロイメント・サーバーからのソフトウェアの削除	443
▶ デプロイメント・サーバーからOneWorld B73.3インストールを削除するには	443
▶ OneWorld B73.3.xインストールをデプロイメント・サーバーから削除するには	443
ワークステーションからのERPインストールの削除	444
▶ ワークステーションからB73.3.1以上のインストールを削除するには	444
▶ OneWorld Setup CDを使用してワークステーションからOneWorld B73.3インストールを削除するには	445
▶ Microsoft Windowsの[アプリケーションの追加と削除]を使用してワークステーションからOneWorld B73.3以上のインストールを削除するには	445
エンタープライズ・サーバーでのソフトウェアの停止	447
データのためのアップグレード	449
アップグレード前の処理	449
デプロイメント・サーバーのインストール	450
アップグレード・プランの作成	450
Installation Workbenchの実行	451
カスタム修正およびパッケージ	452
本稼働用環境のアップグレード	452

Windowsのディスクとレジストリへのアクセス権の許可	453
▶ Windowsディスクへの権限なしのアクセス権を許可するには	453
▶ Windowsレジストリへの権限なしのアクセス権を許可するには	454

概要

このガイドでは、EnterpriseOne 8.9へのアップグレード方法について説明します。最初の4つの各セクションではプロセスの準備方法、後半の各セクションではデプロイメント・サーバー、エンタープライズ・サーバー、およびワークステーション上でソフトウェアをアップグレードする方法について説明します。

このガイドは、管理情報システム(MIS)のマネージャとインストール担当者を対象としています。リリース B73.3.xからEnterpriseOne 8.9にアップグレードする手順が掲載されています。正しくアップグレードするには、次のトピックに関する作業上の知識が必要です。

- ・ ハードウェア要件とソフトウェア要件
- ・ データベースのセットアップと管理
- ・ 社内のプラットフォームとオペレーティング・システム

この情報を入手するには、関連する講習を受講することをお勧めします。講習の内容、日程、および開催場所に関する情報は、PeopleSoftのWebサイトから入手できます。作業を始める前に次のガイドに目を通してください。

- ・ 『基本操作』ガイド
- ・ 『CNCインプリメンテーション』ガイド
- ・ 『システム・アドミニストレーション』ガイド
- ・ 『パッケージ管理』ガイド
- ・ 『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイド

インストール・プロセスとアップグレード・プロセスに関する情報は、『インストール・リファレンス・ガイド』に記載されています。

Unicodeに移行する場合は、『Unicode Data Conversion Guide (Unicodeデータ・コンバージョン)』ガイドに記載されている手順を実行してください。

また、データベース・ベンダから提供されるデータベース製品の講習も完了しておくことをお勧めします。

その他のインストール・オプション

ここでは、EnterpriseOneソフトウェアのインストールに関する補足オプションについて説明します。これらのオプションのインストールについては、本書では詳しく説明しません。

- ・ プッシュ・インストール

プッシュ・インストールを使用すると、システム管理者はERPパッケージをワークステーションに自動的にインストールするようスケジュールを設定できます。パッケージ情報は、通常のようにワークステーションがデプロイメント・サーバーに要求(プル)するのではなく、デプロイメント・サーバーからワー

クステーションにプッシュされます。プッシュ・インストールの利点は、ユーザー操作を必要としないことです。つまり、管理者はネットワーク・トラフィックが減少した時点でワークステーションにパッケージを配布するように、スケジュールを設定することができます。

- ・ Windows Terminal Servicesのインストール

Windows Terminal Servicesを使用すると、複数のシンクライアントからリリース8.9の単一コピーにアクセスすることができます。

- ・ クラスタソフトウェアのオプション

クラスタソフトウェアを使用する場合は、リリース8.9をインストールする前に、さらに考慮すべき事項があります。

- ・ Webベースのオプション

Java Serverをインストールすると、リリース8.9のWeb対応機能を使用することができます。詳しくは「Installation Plannerの実行」と「Web/Javaサーバーのインストール」を参照してください。

参照

- ・ プッシュ・インストール・プロセスについては『パッケージ管理』ガイドの「配布」と本書の「ワークステーションの構成とインストール」
- ・ Windows Terminal Servicesについては、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「ERP 9.0 on Windows Terminal Services (Windows Terminal Services上のERP 9.0)」と「Snapshot - Multi-client Installer (スナップショット - マルチクライアント・インストーラ)」
- ・ Webベースのオプションについては、『Web-Based Solution Guide (Webベース・ソリューション)』ガイドの「Java Server」

最新のドキュメント

Knowledge Garden(KG)では、リリース8.9のインストールとアップグレードに関する最新のドキュメントとその他の情報が提供されています。

注意

インストール・プロセスまたはアップグレード・プロセスを開始する前に、このWebページにアクセスし、最新ドキュメントの更新内容をチェックしてください。

KGには、本書と他のリリース8.9ガイドのオンライン版へのリンクも用意されています。

技術的な最小要件

最新のMTRリストについては、KGにアクセスしてください。

PeopleSoftのサポート

Knowledge Gardenには、カスタマー・サポート機能および情報へのリンクが用意されています。[Support]リンクまたは[Support]アイコンをクリックすると、問題点やSARに関する情報が表示され、[Update Center(アップデート・センター)]にアクセスできます。[Update Center]を通じて、サービス・パックやESUを調べてダウンロードしたり、SARやオブジェクトを表示できます。

リリース8.9をインストールまたはアップグレードするときに問題を解決できない場合は、次の表に示すPeopleSoftワールドワイド・カスタマー・サポートに電話、FAX、または電子メールでお問い合わせください。質問はPeopleSoftソフトウェアに関する内容に限ります。オペレーティング・システム、データベース、および他のソフトウェア製品に関する不明な点は、それぞれの製造/販売元にお問い合わせください。

通常の受付時間中には、Web、電子メール、またはFAXを介して送信した問題に対して1時間以内に確認が送られてきます。問題を電話で報告すると、すぐに問題番号が割り当てられます。その問題に関する活動状況はすべてその番号で照会できるようになります。

サポート・レベル: ブロンズ、シルバー、ゴールド、プラチナ

ゴールドおよびプラチナ・レベル(年中無休24時間受付)のサービスに契約している場合は、サポート対象の問題を随時問い合わせることができます。その際、電話、電子メール、またはKnowledge Gardenの[Log an Issue]フォームを使用できます。[Log an Issue]を使用するとサポート依頼に関する情報が確実に記録されるので、これを使用することをお勧めします。

シルバーおよびブロンズ・レベル(営業日のみ)のサービスに契約している場合は、最寄りのサポート・センターの営業時間中(週5日、1日12時間)にのみサポートを利用できます。その際、電話、電子メール、またはKnowledge Gardenの[Log an Issue]フォームを使用できます。[Log an Issue]を使用するとサポート依頼に関する情報が確実に記録されるので、これを使用することをお勧めします。ただし、このレベルでの契約では、営業時間外に受け付けた問題は翌営業日の取扱いとなります。

ブロンズ・レベルのサービスに契約している場合は、サポートを利用するにはKnowledge Gardenを使用する必要があります。電話、電子メール、FAXによるサポートはご利用いただけません。

所在地	電話番号	FAX番号、電子メール・アドレス
北米	1-800-289-2999	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
南米(以下の各国を除く)	00-1-303-334-4000	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
メキシコ	001-800-784-4260	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
チリ	1-230-020-5124	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com

所在地	電話番号	FAX番号、電子メール・アドレス
コロンビア	980-153-560	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
ベネズエラ	800-1-2743	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
アルゼンチン	001-800-333-1111、 303-488-4639-9194、 1-800-784-4260	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
エクアドル	999-170、 303-488-4639-9194、 1-800-784-4260	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
ペルー	170(携帯電話の場合は 199)、 303-488-4639-9194、 1-800-784-4260	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
ブラジル	00081-4-550-2779	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
ヨーロッパEMEA (以下の各国を 除く)	0161-601-8901	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
フランス	01-70-70-8160	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
ドイツ	06-9222-220-261	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
オランダ	0-207-132743	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
イタリア	02-3600-3650	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
スペイン	91-4140-775	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
アイルランド	01-2477-771	44-1494-682-698;

所在地	電話番号	FAX番号、電子メール・アドレス
		london_customer_support@jdedwards.com
ベルギー(フランス語圏)	08-0040-006	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
ベルギー(英語圏)	08-0040-005	44-1494-682-698; london_customer_support@jdedwards.com
南アフリカ	080-09-90870	303-334-4141; denver_customer_support@jdedwards.com
アジア/太平洋諸国(以下の各国を除く)	65-895-9656	65-227-2698; singapore_customer_support@jdedwards.com
中国(北京、上海)	800-5331-5331	65-227-2698; singapore_customer_support@jdedwards.com
中国(上記以外の地域)	108-657または108-650、音声による指示に従ってシンガポール895-9656に接続	65-227-2698; singapore_customer_support@jdedwards.com
香港	800-5331-5331	
台湾	0080-13-7298	
シンガポール	800-5331-5331	
マレーシア	800-5331-5331	
日本	0034-800-400429 0120-174-074 03-5571-5713	03-5571-5704; japan_customer_support@jdedwards.com
韓国/朝鮮民主主義人民共和国	800-5331-5331	
オーストラリア	1-800-659-537	
ニュージーランド	0-800-100-599	
パプアニューギ	050-861-100	

所在地	電話番号	FAX番号、電子メール・アドレス
ニア		

表記規則

ここでは、本書で使用している表記規則について説明します。

一部の参照情報は、該当するインストール・ガイドまたはアップグレード・ガイドを指しているのに注意しています。「該当する」ガイドとは、それぞれIBM iSeries、Microsoft Windows、またはUNIXなど、それぞれのプラットフォーム用のガイドを指します。

EnterpriseOneのリリース

このリリースはPeopleSoft EnterpriseOne 8.9です。本書では「リリース8.9」としています。このEnterpriseOne 8.9は、2002年にリリースされたERP 8.0の後継版です。

次のリストは、ERPソフトウェアの旧リリースを示しています。

- ・ ERP 8.0*
- ・ OneWorld Xe*
- ・ OneWorld B73.3.2
- ・ OneWorld B73.3.1
- ・ OneWorld B73.3
- ・ OneWorld B73.2

* リリース8.9には、ERP 8.0またはOneWorld Xeからしかアップグレードできません。B73.3.2以前のリリースから正常にアップグレードするには、リリース8.9にアップグレードする前に少なくともOneWorld Xeにアップグレードする必要があります。OneWorldデータがWorldSoftwareとの共存環境にあった場合は、リリース8.9にアップグレードする前に、必ず『Ending Coexistence Guide (共存環境の終了)』ガイドのすべての指示に従って作業してください。

B73.3.1より前のリリースについてはサポート外となっています。旧リリースについては、PeopleSoftにお問い合わせください。

タスク基本情報欄

タスク基本情報欄は、各タスクの基本情報を示しています。タスク基本情報欄の情報を参考にして、各タスクの所要時間を見積もり、プランを作成して準備することができます。実際の所要時間と工数は、大幅に異なる場合があります。

次のタスク基本情報欄は、このガイドからの一例です。

スタッフ	インストール担当者またはデータベース管理者
------	-----------------------

ログオン状況	リリース8.9にユーザーJDEでサインオンします。
前提条件	このタスクでリストされているライブラリにアクセスしていることを確認します。
同時に行うタスク	なし。このタスクを完了しなければ、次のタスクには進めません。

- ・ スタッフ - タスクを正常に完了させるために必要なスキル・レベル。たとえばOracleデータベース管理者など、専門のスキルを持つスタッフを必要とする場合があります。特に明記されていない限り、各タスクはインストール担当者が完了できます。ここで指定されるスタッフのタイプは、次のとおりです。
 - ・ インストール担当者 - ほとんどのインストール・タスクを実行するスタッフを指します。
 - ・ データベース管理者 - SQL ServerやOracleなど、1つまたは複数のデータベース管理システムに関して特殊なスキルや知識を持ったスタッフを指します。タスクの内容によっては、必ずデータベース管理スキルを持つスタッフが実行またはサポートすることをお勧めします。
 - ・ システム管理者 - ログオン名の発行やセキュリティ管理などのタスクを実行するための権限を持ったスタッフを指します。
- ・ ログオン状況 - タスクを開始するためにログオンしなければならないマシン、ソフトウェア、および該当する場合はリリース8.9環境を示します。たとえばMicrosoft Windowsエクスペローラ、SQL Server、またはリリース8.9の使用を必要とする場合があります。該当する場合は、使用するユーザーIDもこの欄に記載されています。
- ・ 前提条件 - このタスクを開始する前に完了しておくタスクまたはステップ
- ・ 同時に行うタスク - このタスクの処理中に完了できるタスクが存在する場合は、その名称

考慮事項ボックス

考慮事項ボックスには、データベース、同時リリース、言語オプション、またはリリース8.9のセットアップ時に適用される項目に関する情報が記載されています。これはインストールを完了するために重要な情報です。このボックスの見出しが該当する場合は、内容に注意してください。次に例を示します。

データ・ソースに関する考慮事項
データ・ソースはあらかじめ定義されています。ただし<Installation Planner(インストール・プランナ)>の実行時には、使用中のシステム固有の構成が反映されるように、データ・ソース情報の一部修正を必要とする場合があります。

ヒントおよびテクニック

ヒントおよびテクニック欄には、リリース8.9のセットアップ・プロセスを簡単にするためのヒントとテクニックが記載されています。ヒントとテクニック(任意)は、知っておくと便利な情報です。次に例を示します。

ヒント

オブジェクトをPY9に転送した後で、プロトタイプ・パッケージの一部または全体(PY9FAまたはPY9PAなど)を作成し、インストールできます。その後、プロトタイプ環境またはテスト環境にログインして追加のテストを行うことができます。

トラブルシューティング・ボックス

このボックスには、タスクまたはプロセスのためのトラブルシューティング情報が記載されています。トラブルシューティング情報を参考にして、インストール中に発生する問題を回避することができます。次に例を示します。

トラブルシューティング
リポートすると、DLLの更新が終了しない場合があります。その場合は、デプロイメント・サーバーを手動でシャットダウンし、再起動して処理を終了してください。

アイコン

次のアイコンは、そのトピックの内容を視覚的に伝えます。

注意

「注」アイコンは、ヒントや提案などの補足情報を示します。また、予期しない結果や可能性も示しています。

注意

「注意」アイコンは、注意を必要とする結果を示します。また、特定の操作によって回復不能なデータの消失など、重大な事態を招く状況を警告している場合もあります。

「フラグ」記号は、リリース8.9構成処理の一部として英語以外の言語をインストールまたはアップグレードする場合に実施する必要がある手順、タスク、またはステップを示します。英語以外の言語が必要でない場合は、このアイコンが付いている情報を無視してください。

フォント

本書では、次の特殊フォントを使用しています。

注意

本書で使用するほとんどすべてのコマンドでは、大文字と小文字が区別されます。記載されているとおりに入力してください。また、記載されているすべてのコマンドは、推奨ディレクトリ構造に合わせて記されています。実際のマシンのディレクトリ構造が異なる場合は、それに合わせてコマンドを修正してください。

斜体は、変数を示します。たとえばコマンドに変数 `deploymentserver` が表示されている場合は、

deploymentserverという部分を実際のデプロイメント・サーバー名に置き換えてください。(なお、英語オリジナル・ガイドではガイド名についても斜体で表記してありますが、日本語ガイドでは他のガイド名は標準体で表記され、『』で囲まれています。たとえば『システム・アドミニストレーション』ガイドとしてあります)。

クーリエ・フォントは、実際に入力するコマンドや値などの情報を示します。次に例を示します。

- ・ DV9のように、インストールする環境の名称を入力してください。

リリース8.9における新機能

ここでは、EnterpriseOneリリース8.9における変更点について説明します。

注意

すべての命名規則はB73.3.xではなくB9となっています。

リリース8.9の新機能と変更された機能

リリース8.9では、次の機能が追加または変更されています。

ソフトウェア全般の変更

- ・ 追加: JD9はプランナ環境の拡張であり、〈Table Conversion Workbench(テーブル変換ワークベンチ)〉のパフォーマンスを改善するために使用されます。
- ・ 追加: スペック、システム、およびプリスティン(JDEオリジナル)環境は、Unicodeベースです。
- ・ 削除: 共存環境(Coexistence)はサポート外となりました。
- ・ 削除: レプリケーションはサポート外となりました。
- ・ 変更: SQL Serverでは、デフォルトでODBC DSではなくOLEDBが使用されるようになりました。
- ・ 変更: Access DBはMSDEに置き換えられています。
- ・ 変更: UDBテーブルの構成にはMVSテーブル/データ・ソース・サイジング・テーブル(F986116)が使用されます。

〈Installation Planner(インストール・プランナ)〉

- ・ 追加: OCMは、オブジェクト・ライブラリアン・マスター(F9860)に格納されている値に基づいて生成されるようになりました。
- ・ 変更: TCのロケーション。〈Table Conversions(テーブル変換)〉をサーバー上で、またはローカルに実行することができます。サーバー上で実行する場合は、JD9が必須となります。

注意

サーバー上でTCを実行する場合は、プリスティン環境のインストールが必須です。

- ・ 追加: カスタム環境。
- ・ 変更: アップグレード時には一時環境は不要です。

- ・ 廃止: データ・ソースには、データベース・ドライバのDLL名は不要になりました。

〈Initial Tasks Workbench (初期タスク・ワークベンチ)〉

- ・ 変更: 旧称は〈Additional Workbench Tasks (追加ワークベンチ・タスク)〉です。
- ・ 追加: メディア・オブジェクト待ち行列テーブル(F98MOQUE)と、OneWorldセキュリティ・テーブル(F98OWSEC)を、旧システムのDSからリリース8.9システムのDSにコピーします。
- ・ 変更: メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)により、Unicodeが正規化テーブルに変換されます。

データ・ソース

データベース間での一貫性を改善するために、データ・ソースのデフォルトが変更されています。

- ・ 変更: SQL ServerとOracleのシステム・データ・ソース所有者がSY9となりました。
- ・ 変更: iSeriesシステムのデータ・ソース・ライブラリはSY9となりました。
- ・ 変更: オブジェクト・ライブラリアン・データ・ソースの所有者はOL9となりました。
- ・ 変更: iSeriesライブラリは、セントラル・オブジェクト・データ・ソースとバージョン・データ・ソースに共通です。このライブラリは、CODV9、COPD9などです。ライブラリはパス・コードのサービス・プログラム(CINSTALLなど)の格納に使用されるため、ライブラリ所有者をパス・コードと同じにすることはできません。
- ・ 新規: LOB - OracleおよびiSeriesデータ・ソースは、LOBデータ・タイプをサポートするように強化されています。iSeriesの場合、これは独自のBLOB連鎖を使用せずにERPのBLOBを格納できることを意味します。そのため、Translate/Do Not Translateデータ・ソースのペアは不要になりました。ODBCデータ・ソースはTranslate/Do Not Translateとして構成されます。各データ・ソースでは、デフォルトでLOBが使用されます。
- ・ 新規: OLEDB - リリース8.9では、OLEDBに基づく新規SQL Serverデータベース・ドライバが使用できるようになりました。このドライバ用のデータ・ソース・タイプはLです。アップグレード時には、既存のSQL ServerのODBCデータ・ソースがOLEDBデータ・ソースに変換されます。OLEDBドライバを使用することをお勧めします。
- ・ 新規: Unicodeでは、データ・ソースに保管されているデータがUnicode形式であることが指定されます。インストール時には、すべてのデータ・ソースがデフォルトでUnicodeに設定されます。アップグレード時には、ビジネス・データとコントロール・テーブルを除くすべてのデータ・ソースがデフォルトでUnicodeに設定されますが、ビジネス・データとコントロール・テーブルはアップグレード後にUnicodeに変換することができます。セントラル・オブジェクト・データ・ソース、UDB、およびセントラル・オブジェクトと同じデータベースを使用する他のデータ・ソースには、Unicodeが必須です。
- ・ 廃止: ユーザーがDLL名を入力する必要はなくなりました。どのドライバを使用するかは、データ・ソースのタイプに基づいて自動的に確定されます。
- ・ 新規: SQL Serverデータベース - XeとERP 8.0では、SQL Serverデータベース名はODBCデータ・ソースにのみ格納されていました。ERPでは、データベース名をデータ・ソース・マスター(F98611)に格納することで、データ・ソースへの接続に必要な情報がすべて指定されます。リリース8.9では、これはSQL ServerのOLEDBおよびODBCデータ・ソースの両方に適用される要件です。OLEDBドライバ

の場合、ODBCデータ・ソースに相当するものがなく、接続はERPに格納されている情報に基づいて確立されます。ODBCドライバの場合は、SQL Serverインスタンスごとに1つずつODBCデータ・ソースが作成されます。このため、データベース名をERPに格納し、接続属性として指定する必要があります。

- ・ 新規: SQL Serverインスタンス - SQL Serverのインスタンス名は、〈Data Source Revisions (データ・ソースの改訂)〉アプリケーションへの入力となっています。デフォルト・インスタンスを使用するには、値として空白を指定します。
- ・ 新規: ポート番号 - JASサーバーでは、データ・ソースへの接続にポート番号が使用されます。
- ・ 新規: JDBNET - JDBNET通信を使用する場合は、データ・ソースに対してJDBNETフラグを設定します。

注意

データ・ソースには、LOBとUnicodeを使用することをお勧めします。

〈Environment Workbench (環境ワークベンチ)〉

- ・ 変更: 〈Table and Index Generation (テーブルおよびインデックス生成)〉プログラム(R98407)は、〈Table Conversion Workbench〉から〈Environment Workbench〉に移動し、テーブルとインデックスのフォーマット検証機能が組み込まれました。

コントロール・テーブル

- ・ 削除: 〈Menu Merge (メニューのマージ)〉
- ・ 追加: 〈Solution Explorer Merge (Solution Explorerのマージ)〉
- ・ 削除: OneWorldメニューはサポート外になりました。
- ・ 削除: 〈User Overrides Merge (ユーザー一時変更のマージ)〉

テーブル変換

- ・ 追加: 新しいテーブル変換。
変更とマージによる修正が、テーブル変換の65パーセントを占めます。このプロセスを高速化するために、テーブル変換をサーバー上でスレッド化して実行できるようになりました。
- ・ 変更: 非データ・メッセージの変換の実行前に、入出力テーブルのフォーマットが検証されます。

スペックのマージ

- ・ 変更: FDAやERはマージされなくなりました。

- ・ 変更: カスタム・コードが遡及修正されます。
カスタム・コードではUnicodeによる影響が考慮されます。より小型の新規ソースが使用されます。
- ・ 変更: FDAとERの〈Visual Compare〉を実行します。
- ・ 変更: サーバー・パッケージのER
- ・ 変更: ネット・チェンジにはオブジェクト変更テーブルが使用されなくなりました。

パッケージ

- ・ 変更: フル・クライアント・パッケージは提供されません。
- ・ 変更: クライアントに配布する前にパッケージをビルドする必要があります。

エンタープライズ・サーバーのインストール

- ・ 変更: フル・サーバー・パッケージをビルドして配布する必要があります。
- ・ 変更: 〈Control Table Workbench (コントロール・テーブル・ワークベンチ)〉の実行後に、HOST・コードがインストールされます。

〈Control Table Workbench〉は、〈Table Conversion Workbench〉の前に実行されます。〈Control Table Workbench〉の完了後にタスク・ブレイクが発生し、〈Installation Workbench (インストール・ワークベンチ)〉が中断されます。エンタープライズ・サーバーは、この時点でインストールされます。エンタープライズ・サーバーのインストール後に、〈Table Conversions〉が開始されます。

アップグレードの完了

- ・ 追加: OneWorld Xeからアップグレードする場合は、インストール後のテーブル変換を実行する必要があります。一部のテーブルのデータが使用できなくなるため、OneWorldの使用を開始する前に手作業でテーブル変換を実行してください。

標準名の変更

旧バージョンのソフトウェアで使用されていた標準名の多くは、733xから9.0に変更されました。

アップグレードの概要

リリース8.9のサポート構造は、データベース、オペレーティング・システム、ハードウェアなどのコンポーネントで構成されます。リリース8.9を正常にアップグレードするためにも、まずこれらの構造を確実に準備してください。

ここで説明するタスクは、カスタマーのシステムを準備することを目的として記されています。該当するハードウェアとソフトウェアがあるかどうかの確認など、時間がかかるタスクもありますが、短時間で簡単に完了できるものもあります。

注意

これらの準備作業は、アップグレード・チームが到着する前に完了しておく必要があります。

アップグレード・チェックリスト

アップグレード・プロセスを開始する前に、「アップグレード前の処理」に記載されているタスクを完了しておきます。このチェックリストを参考にして、アップグレード前に必要な準備作業を整理してください。

- ・ 「プロセスの概要」の検討
- ・ 「環境の概要」の検討
- ・ 「言語プロセスの概要」の検討(複数言語をインストールする場合)
- ・ ネットワークの検討
- ・ デプロイメント・サーバーのバックアップ作成
- ・ 既存の言語パッケージ・ディレクトリのバックアップ作成(言語クライアントのみ)
- ・ エンタープライズ・サーバーのバックアップ作成
- ・ データベースのバックアップ作成
- ・ プロトタイプ環境の準備
- ・ 開発環境の準備
- ・ メディア・オブジェクト待ち行列のチェック
- ・ 修正フラグとマージ・フラグのチェック
- ・ アップグレードする環境の準備
- ・ ビジネス・データのリフレッシュ(任意)
- ・ コントロール・テーブルのリフレッシュ
- ・ マスター・コントロール・テーブルのカスタム変更の検証

- ・ サードパーティのハードウェアとソフトウェアの検証
- ・ デプロイメント・サーバーのハードウェア/ソフトウェアが技術的な最小要件を満たしているか
- ・ エンタープライズ・サーバーのハードウェア/ソフトウェアが技術的な最小要件を満たしているか
- ・ ワークステーションのハードウェア/ソフトウェアが技術的な最小要件を満たしているか
- ・ Javaサーバーのハードウェア/ソフトウェアが技術的な最小要件を満たしているか (Javaサーバーを使用する場合は必須)
- ・ Windows Terminal Services(WTS)のハードウェア/ソフトウェアが技術的な最小要件を満たしているか (WTSを使用する場合は必須)
- ・ デプロイメント・サーバーのディスク容量が技術的な最小要件を満たしているか
- ・ エンタープライズ・サーバーのディスク容量が技術的な最小要件を満たしているか
- ・ 「インストール前の準備」に説明されている「インストール詳細ワークシート」への記入

アップグレード・プロセスの概要

ここでは、プリスティン(JDEオリジナル)、開発、およびプロトタイプ環境をアップグレードしてから、本稼働用環境をアップグレードする手順について説明します。この方法では、ソフトウェアの旧リリースに対して行ったカスタム修正を転送できます。これらの修正については、リリース8.9のプロトタイプ環境で本稼働用データのコピーを使用してテストします。本稼働用環境は、ソフトウェアのテスト終了後にアップグレードします。

この方法では、本稼働用環境のアップグレード時に追加の環境を組み込まない限りは、ダウンタイムを最小限度に抑えることができます。また、本稼働用環境では旧リリースで稼働させたまま、開発環境とプロトタイプ環境ではリリース8.9をインストールし、テストできます。

運用開始前でダウンタイムが問題にならない場合は、開発環境とプロトタイプ環境を経由せずに、本稼働用環境を直接アップグレードすることもできます。

注意

インストール・プランの条件を設定するときに、複数言語オプションを選択することができます。

リリース8.9構成をセットアップするには、さまざまな方法があります。特に変更を必要とする業務要件がない限り、できるだけ標準的なセットアップと命名規則に従うことをお勧めします。

参照

- ・ リリース8.9と共に出荷される標準カスタマー構成内容については、『GNCインプリメンテーション』ガイドの「標準的なカスタマー構成」

注意

EnterpriseOne 8.9では共存環境はサポートされません。

アップグレード・プロセスは、次の6つのステップに分かれています。

1. 現行のリリースを準備します。
2. CDからデプロイメント・サーバーにリリース8.9をインストールします。
3. 最新のサービス・パックとワンオフをデプロイメント・サーバーにインストールします。
4. 最新のプランナ・アップデートをデプロイメント・サーバーにインストールします。
5. 最新のテーブル変換アップデートをデプロイメント・サーバーにインストールします。
6. プリステイン環境をアップグレードします。
7. <Installation Planner(インストール・プランナ)>を実行して、開発環境とプロトタイプ環境のアップグレード・プランを設定します。
8. <Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)>を実行して開発環境をアップグレードします。
9. プロトタイプ環境に対して、<Installation Planner>と<Installation Workbench>のプロセスを繰り返します(このタスクは、開発環境のアップグレードと同時に実行できます)。
10. 本稼働用環境をアップグレードします。

アップグレード・プロセスの前提条件は、次のとおりです。

- ・ 現行のリリースの開発パス・コードに、進行中のすべての修正が含まれていること。
- ・ 現行のリリースの本稼働用パス・コードには、テストと承認が完了した修正のみが含まれていること。
- ・ 現行のリリースのプロトタイプ環境では、(運用中の本稼働用データではなく)本稼働用データのコピーを使用すること。
- ・ プロトタイプ・パス・コードには、本稼働用パス・コードと同じ修正内容が含まれていること。

アップグレード時に確保される要素と置換される要素

カスタム修正が必要な場合、アップグレードを円滑かつ計画通りに行うために次のルールに従ってください。このアップグレード・プロセスでは確保される修正内容と置換される修正内容があります。

- ・ 「確保」とは、カスタム修正がアップグレード用に出荷された新規リリース8.9アプリケーションと自動的にかつ視覚的にマージされるため、アップグレード時にも失われないことを意味します。現行のスペックとリリース8.9のスペックが直接競合している場合、アップグレード・プロセスでは現行のスペックを採用します。2つのスペックが直接競合しない部分は、そのままマージされます。
- ・ 「置換」とは、修正内容がアップグレード時に上書きされ、リリース8.9アップグレードではマージされないことを意味します。カスタム修正は、アップグレードの完了後にやり直す必要があります。

カスタマイズに関する考慮事項

できれば、すべての修正を1つのパス・コードに転送してください。ただし、これは、すべての修正のテストと承認が完了している場合、または開発環境上でのみの修正の場合に限ります。アップグレードする環境を1つに限定すれば、プロセスの所要時間が大幅に短縮されます。

参照

- ・ カスタム修正、およびアップグレード・プロセスによる影響については『パッケージ管理』ガイド

対話型アプリケーションのルール

既存のソフトウェア・アプリケーションのコントロール、グリッド・カラム、またはハイパー項目は、削除するのではなく、非表示または使用不可にしてください。リリース8.9では、これらの要素を計算や変数に使用している場合があるため、削除すると主要な機能を使用できなくなる場合があります。修正されたアプリケーションは、バッチ・マージでは無視されます。すべての変更は、ビジュアルFDA/ERマージを通じて遡及適用する必要があります。

アップグレード時に確保されるカスタム変更の対象は、次のとおりです。

- ・ 新規アプリケーション(バッチ・マージ)
- ・ 次のような、既存のリリース8.9フォームへの新規オブジェクト(ビジュアルFSAマージ)
 - ・ 新しいハイパー項目
 - ・ 新しいコントロール
 - ・ 新しいグリッド・カラム
 - ・ フォントや色などのスタイル変更
- ・ コード・ジェネレーター時変更
- ・ データ辞書一時変更
- ・ コントロールに対する位置やサイズの変更
- ・ タブまたはカラムの順序変更

既存のアプリケーション上のカスタム・フォームは確保されません。カスタム修正を遡及適用できるように、一連のビジュアル・マージ・ツールが用意されています。

参照

- ・ ビジュアル・マージ・ツールについては『開発ツール』ガイド

レポートのルール

このルールは、〈Report Design Aid(レポート設計ツール)〉を使用して作成されたレポートのスペックに適用されます(すべてバッチ・マージ)。

アップグレード時に確保される変更内容は、次のとおりです。

- ・ 新規レポート
- ・ 次のような、既存のレポートへの新規オブジェクト
 - ・ 固定情報
 - ・ 変数(英字)
 - ・ 変数(数字)
 - ・ データ変数
 - ・ ランタイム変数
 - ・ データベース変数
 - ・ 辞書変数
 - ・ フォントや色などのスタイル変更
- ・ オブジェクトのロケーション変更とサイズ変更
- ・ データ辞書一時変更

既存のレポートのカスタム・セクションは確保されません。

アプリケーション・テキストの変更

〈Forms Design Aid(フォーム設計ツール)〉、〈Report Design Aid〉、〈Interactive Vocabulary Overrides(対話型用語一時変更)〉または〈Batch Vocabulary Overrides(バッチ用語一時変更)〉で行った一時変更は、アップグレード時に確保されます。

テーブル・スペックのルール

アップグレード時に、前のリリース・レベルのテーブル・スペックが次のリリース・レベルのテーブル・スペックにマージされます。

アップグレード時に確保される変更内容は、次のとおりです。

- ・ 新規テーブル
- ・ JDEテーブルの新規索引

既存のテーブルに追加または削除したカラムは、アップグレード時に置換されます。これには、フィールド長、フィールド・タイプ、および小数点以下表示桁数が含まれます。

既存のテーブルに新しいカラムを追加する代わりに、システム・コード55～59を持つタグ・ファイルを使用してください。カスタム・タグ・ファイルについては、データ辞書のデータ項目の変更に注意してください。データ項目サイズなど、ある種のデータ項目属性はリリース間で変更されることがあり、データの整合性やデータベースへの格納方法に影響を及ぼす可能性があります。

このため、テーブル変換ツールを使用して、タグ・ファイルのデータを新リリース・レベルに変換します。基本ファイルの場合、アップグレード時には古いB7.3.3.xデータベースが新しいリリース8.9にアップグレードされ、データ辞書の変更が処理されます。カスタム・タグ・ファイルのカスタム索引は、アップグレード時に確保されます。

コントロール・テーブルのルール

アップグレード時には、〈Change Table(テーブル変更)〉プロセスを使用してコントロール・テーブルがリリース・レベル間でマージされます。このプロセスでは、データのマージ基準としてEnterpriseOneテーブルではなく現行のコントロール・テーブルが使用されます。

アップグレード時に確保される変更内容は、次のとおりです。

- ・ ロー、カラム、および用語解説テキストの変更など、データ辞書のカスタム変更。アップグレード・プロセスでは、基礎としてデータ辞書が使用されます。
- ・ ユーザー定義コード。アップグレード・プロセスでは、ハード・コード化された新しい値をすべてマージします(製造元所有の値は、システム90以上とH90以上です)。
- ・ Solution Explorerタスク。の基本タスクと競合する場合は、カスタム変更によって新しい変更内容が上書きされます。

参照

- ・ マージについては『インストール・リファレンス・ガイド』の「マージ」

ビジネス・ビューのルール

既存のビジネス・ビューにあるカラムは削除しないでください。アプリケーションで使用されるビジネス・ビューを変更すると、そのアプリケーションの実行時に予測不能な結果を生じる恐れがあります。カラムを非表示にする場合は、〈Forms Design Aid〉または〈Report Design Aid〉を使用してアプリケーション設計レベルで変更してください。ビジネス・ビューから数カラムを削除しても、パフォーマンス上の利点はあまり得られません。

アップグレード時に確保される変更内容は、次のとおりです。

- ・ 新規カスタム・ビジネス・ビュー
- ・ 既存のB7.3.3.xビジネス・ビューに新しく追加されたカラムまたは結合

ビジネス・ビューから削除されたカラムは、アップグレード時に置換されます。

イベント・ルールのルール

アップグレード時に確保される変更内容は、次のとおりです。

- ・ APPLの場合は、ビジュアルFDA/ERマージ・ツールを使用してすべての遡及適用を実行します。
- ・ 新しいカスタム・コントロール上のカスタム・イベント・ルール。
- ・ アプリケーション、レポート、テーブル、およびビジネス関数イベントのうち、イベント・ルールが同じイベントに添付されていないもの。
- ・ 既存のイベント・ルールを持つアプリケーション、レポート、テーブル、ビジネス関数イベントに対する修正内容は、アップグレード時に置換されます。カスタム・イベント・ルールを復元するには、Visual ER(ビジュアルER)ツールを使用してください。

データ構造体のルール

次のカスタム・データ構造体は、すべてアップグレード時に確保されます。

- ・ フォーム
- ・ 処理オプション
- ・ レポート
- ・ ビジネス関数
- ・ 汎用テキスト

データ構造体に対するカスタム修正は、すべてアップグレード時に置換されます。構造体に対する変更は確保されません。

ビジネス関数のルール

新しく作成するカスタム・ビジネス関数の場合は、新しい親DLLディレクトリを作成して格納してください。

新しいカスタム・ビジネス関数オブジェクトは、アップグレード時に確保されます。

アップグレード時には、既存のビジネス関数に対する修正と、既存のビジネス関数オブジェクトに追加されたビジネス関数が置換されます。

参照

- ・ 『開発ツール』ガイド

アップグレードのタイプ

アップグレードには、次の2つのタイプがあります。

- ・ [カスタム修正を伴う並行リリース - ページ \[22\]](#)
- ・ [カスタム修正を伴わない並行リリース\(データのみアップグレード\) - ページ \[22\]](#)

どちらのタイプのアップグレードにも、並行リリースが関与しています。並行リリースとは、現在実行中の

リリースとアップグレード後のリリースについて、デプロイメント・サーバー上で別々のディレクトリを保守し、各リリースを異なるワークステーション上で実行できることを意味します。どちらのリリースのディレクトリもデプロイメント・サーバー上に存在しますが、アップグレード・プロセスの開始後は、デプロイメント・サーバー上の新リリース環境にのみサインオンします。必要な機能（ワークステーションへのインストールやユーザー・プロファイルのセットアップなど）は、従来どおり旧リリースのワークステーションから実行する必要があります。

次の状況を参考にして該当する方法を選択してください。

カスタム修正を伴う並行リリース

アプリケーションやフィールドの追加、画面上のテキストの変更など、B733xソフトウェアにカスタム修正を加えている場合です。本稼働用環境での運用は開始されており、中断することはできません。また、リリース8.9の新リリースを既存のリリースと並行してインストールします。これにより、アップグレード・プロセスを完了してソフトウェアをテストするまでは、業務を通常どおり続行できます。

カスタム修正を伴わない並行リリース（データのみアップグレード）

B733xソフトウェアにカスタム修正を加えていない場合です。本稼働用環境での運用は開始されており、中断することはできません。また、リリース8.9の新リリースを既存のリリースと並行してインストールします。これにより、アップグレード・プロセスを完了してソフトウェアをテストするまでは、業務を通常どおり続行できます。

参照

- ・ 「データのみアップグレード」を参照して、本書で説明する手順を修正またはスキップしてください。

アップグレード・プロセス

デプロイメント・サーバーのインストール

リリース8.9のアップグレード・プロセスでは、デプロイメント・サーバーが中心的な役割を果たします。デプロイメント・サーバー用のアップグレード・プログラムでは、リリース8.9ソフトウェアがCDからデプロイメント・サーバーにコピーされます。そのデプロイメント・サーバーから、リリース8.9ソフトウェアを1台または複数のエンタープライズ・サーバーとワークステーションに配布することができます。

デプロイメント・サーバーのインストール・プログラムで表示される指示に従って、次の処理を実行します。

- ・ ソフトウェア使用認可。権限コードとライセンス・ユーザー数を入力する必要があります。
- ・ リリース8.9は、ユーザーが入力した情報に基づいてインストールされます。

このプログラムによって、Windowsのレジストリがリリース8.9のインストール情報（および該当する場合は言語情報）で更新されます。

Installation Planner

〈Installation Planner〉は、デプロイメント・サーバー上でスタンドアロン・プログラムとして実行されるリリース8.9アプリケーションであり、〈Installation Planner〉によって、社内のすべてのマシンのリリース8.9環境が構成されます。また、システム・アドミニストレーション・ツールを兼ねており、インストール・プランに

関するすべての情報がリリース8.9 Plannerデータ・ソース内の一連の事前ロード・テーブルに格納されます。表示される手順に従うと、選択したオプションに基づいてインストール・プランを段階的にセットアップできます。

〈Installation Planner〉では、次の処理が管理されます。

- ・ 言語のセットアップ
- ・ ロケーションのセットアップ
- ・ デプロイメント・サーバーのセットアップ
- ・ エンタープライズ・サーバーのセットアップ
- ・ その他のサーバーのセットアップ(データ・サーバー、Javaサーバー、およびWindowsターミナル・サーバー)
- ・ データ・ソースのセットアップ(エンタープライズ・サーバー固有および共有環境のデータ・ソース)

次のように、リリース間で変更がないデータ・ソースもあります。

- ・ ビジネス・データ
- ・ コントロール・テーブル

他のデータ・ソースは、リリース8.9で新規追加されたもの、またはリリース特有のものです。

- ・ システムおよびデータ辞書
- ・ 別の環境を保守する場合、サーバー・マップはマシンおよびリリース固有
- ・ 環境のセットアップ(標準カスタマー構成でのすべての環境)
リリース8.9用に新しい環境を作成します(PD9など)。このプロセスでは、オブジェクト構成マネージャ(OCM)マッピングが正しいかどうか、および新しい環境が正しいパス・コードを参照しているかどうかを確認されます。
- ・ コントロール・テーブル・マージ

〈Control Table Planner(コントロール・テーブル・プランナ)〉プログラムを使用すると、次のマージを行ってB73.3.xからリリース8.9にアップグレードすることができます。

- ・ 〈Data Dictionary merge(データ辞書マージ)〉(R989200P)
- ・ 〈User Defined Code merge(ユーザー定義コード・マージ)〉(R9600042)
- ・ 〈Solution Explorer Merge(Solution Explorerマージ)〉(R9690002)
- ・ 〈Favorites Merge(お気に入りのマージ)〉(R96911002)

- ・ 〈Report Director Templates Merge (レポート・ディレクタ・テンプレートのマージ)〉(R96914002)
- ・ 〈Tips of the Day Merge (ワンポイント・ヒントのマージ)〉(R96915002)
- ・ 〈Work Flow Merge (ワークフローのマージ)〉(R98800)
- ・ 〈User Overrides merge (ユーザー一時変更マージ)〉(R9898950)

- ・ テーブル変換
テクニカル・テーブル、スペック・テーブル、各バーティカル・テーブルを含め、データベース変更の対象となったすべてのテーブルを変換します。
- ・ スペック・テーブルのマージ (アップグレード・プロセスの場合)
カスタム修正を新しいアプリケーションとマージします。単一のバッチ・アプリケーションで、次のオブジェクトに対する変更がマージされます。
 - ・ テーブル
 - ・ ビジネス・ビュー
 - ・ データ構造体
 - ・ 対話型アプリケーション
 - ・ バッチ・アプリケーション
 - ・ ビジネス関数旧データをマージまたはオーバーレイする変更については、『パッケージ管理』ガイドの「修正規則」を参照してください。
- ・ 〈Package Workbench (パッケージ・ワークベンチ)〉

Installation Workbench

〈Installation Planner〉を使用して作成したプランは、〈Installation Workbench〉で実行されます。〈Installation Workbench〉は、環境のインストールに必要なすべてのプロセスの中心的な役割を果たします。環境をインストールする一部のプロセスは、手順を手作業で実行する必要があります。ただし、〈Installation Workbench〉を使用すると、プラットフォーム固有の環境セットアップに関係なく正しい順序で手順を実行できます。

エンタープライズ・サーバーのインストール

〈Installation Workbench〉で、リリース8.9をエンタープライズ・サーバーにロードします。リリース8.9エンタープライズ・ソフトウェアは、すべてのソフトウェアがデプロイメント・サーバーから転送されるのではなく、別のCDを使用してエンタープライズ・サーバーにロードされます。この直接的なインストール方法により、このプロセスのパフォーマンスが向上します。エンタープライズ・サーバーがWAN (広域ネットワーク) を使用してデプロイメント・サーバーに接続されている場合は特に有効です。

ワークステーションへのインストール

〈Client Workstation Installation(クライアント・ワークステーション用インストール)〉プログラムは、デプロイメント作業環境情報をシステム・テーブルから読み込んで、ワークステーション・インストール・プロセスを実行する、スタンドアロンのWindowsアプリケーションです。リリース8.9は、デプロイメント・サーバーからクライアント・ワークステーションにインストールされます。

必要な接続は次のとおりです。

- ・ 基本ロケーションの基本デプロイメント・サーバー上の¥oneworld client installディレクトリへのRead/Writeアクセス
- ・ システム・テーブルへのReadアクセス
- ・ ¥¥deploymentservername¥b9¥PD9¥packageなど、¥pathcode¥packageディレクトリ下のサブディレクトリへのReadアクセス

ワークステーションとデプロイメント・サーバー

個々の言語のコード・ページ設定は、Windowsシステム・ロケールでMicrosoftによって設定されています。インストールの前に、デプロイメント・サーバーのコード・ページが正しく設定されていることを確認してください。

プロセスの流れ

次のリストは、アップグレード・プロセスの流れを示しています。

インストールの準備

- ・ アップグレード・チェックリスト
- ・ プロセスの概要
- ・ 環境の概要
- ・ 言語プロセスの概要
- ・ サポート構造の準備
- ・ リリース8.9のハードウェア要件とソフトウェア要件
- ・ リリース8.9のディスク容量要件
- ・ 詳細ワークシート

デプロイメント・サーバーの アップグレード

- ・ デプロイメント・サーバーへのリリース8.9のインストール
- ・ デプロイメント・サーバーへの最新のリリース8.9サービス・パックとワンオフのインストール
- ・ デプロイメント・サーバーへの最新のプランナ・アップデートのインストール

- ・ デプロイメント・サーバーへの最新のテーブル変換アップデートのインストール
- ・ リリース8.9データベースのアップグレード

プリステイン環境のアップグレード(必須)

- ・ 〈Installation Planner〉の実行によるプリステイン専用アップグレード・プランの作成
- ・ プリステイン・アップグレード・プランに対する〈Installation Workbench〉の実行
- ・ エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール - プリステイン・パス・コードのみ
- ・ 〈Software Updates(ソフトウェアの更新)〉の実行による、プリステイン環境へのプランナおよびテーブル変換アップデートの適用
- ・ サーバー・パッケージのビルドと配布

アップグレード・プランの作成

- ・ 〈Installation Planner〉の実行

環境のアップグレード

- ・ 〈Installation Workbench〉の開始
- ・ 〈Control Table Workbench(コントロール・テーブル・ワークベンチ)〉実行後の〈Installation Workbench〉の一時停止

エンタープライズ・サーバーのインストール

- ・ エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール - 全パス・コードのインストール

Installation Workbenchの再開

- ・ 〈Table Conversion Workbench(テーブル変換ワークベンチ)〉および残りのワークベンチの実行

アップグレード後の処理

- ・ 手作業によるテーブル変換の実行
- ・ テーブル変換の検証
- ・ パッケージのビルドと配布

ワークステーションへのインストール

- ・ ワークステーションの構成

カスタム修正

- ・ カスタム修正の遡及適用

本稼働用環境のアップグレード

- ・ 本稼働用環境のアップグレード
- ・ アップグレード後のリリース8.9の修正
- ・ Solution Explorer用ホーム・ページの設定
- ・ データ・リポジトリのインストール
- ・ Vertexと併用するためのリリース8.9の構成

環境の概要

リリース8.9のソフトウェアには、『CNCインプリメンテーション』ガイドで定義されているように、標準カスタマー構成を示す複数の環境が用意されています。これらの環境は事前に設定されているので、そのインストール・プロセスは簡単に行うことができます。ここでは、これらの環境とインストールおよびアップグレード・プロセスにおけるそれぞれの役割について説明します。

セットアップ時の推奨事項と命名規則は、このガイドの説明に従ってください。導入チーム以外のスタッフとの間で情報を効果的にやりとりすることができます。また、標準の命名規則を使用すると、将来のアップグレード作業が簡素化されます。インストール・プロセス中に構成をカスタマイズする場合は、標準的なセットアップで示される記述のみを変更するようにしてください。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ リリース8.9環境の共存
- ・ プランナ環境(JDEPLAN)
- ・ デプロイメント環境(DEP9)
- ・ テスト環境
- ・ 開発環境
- ・ プロトタイプ環境
- ・ 本稼働用環境
- ・ プリステイン環境

次の環境が事前に設定されています。

- ・ デプロイメント(DEP9)
- ・ プランナ(JDEPLAN)
- ・ プロトタイプ(PY9)
- ・ プリステイン(JD9)
- ・ 開発(DV9)
- ・ テスト(TS9)
- ・ 本稼働用(PD9)
- ・ 対応するJAS(J)およびWTS(W)

リリース8.9環境の共存

リリース8.9と共に出荷される各環境には、特定の用途があります。この後の各セクションでは、各環境の詳細を説明します。

プランナ環境(JDEPLAN)

リリース8.9のインストール・プロセスとアップグレード・プロセスには、プランナ環境と呼ばれるプランニング段階が設けられています。このため、本稼働用環境に影響を与えないでリリース8.9構成の主なコンポーネントを定義できます。

どの環境にも、そのパス・コードと一連のオブジェクト構成マネージャ(OCM)マッピングが必要です。プランナ環境では、リリース8.9と共に出荷されるプランナ・パス・コードと、プランナ・データベースを指す一連のOCMマッピングが使用されます。

プランナ・パス・コード

リリース8.9には、インストール・プロセスで使用できるように、ランタイム・オブジェクトのフルセットが準備されています。これらのオブジェクトは、デプロイメント・サーバーのプランナ・ディレクトリに格納されます。プランナ・パス・コードには、デプロイメント・サーバー上にある、ランタイム用のセントラル・オブジェクトまたはレプリケート・オブジェクトのフルセットのみが含まれます。

プランナ・パス・コードは、アップグレード・スペックのマージ・プロセス中に使用される事前ビルド・パッケージでもあります。パッケージには、ワークステーション導入に必要なオブジェクトのリスト、デプロイメント・サーバー上のセントラル・オブジェクトの位置を指すポインタ、およびインストール・プログラムによる検索先が含まれます。このパス・コードは、アップグレード・プランの作成時と、アップグレード後の構成変更の実行時にのみ使用してください。

プランナ・データベース

プランニング段階で作成および更新した情報は、すべてデプロイメント・サーバー上のMSDEデータベースJDEPlanに保存されます。

プランナ環境を使用して構成を変更する場合は、次の点に注意してください。

- ・ プランナ・データベース・テーブルが変更結果に基づいて更新されます。
- ・ 変更内容を本稼働用環境に反映するプランを定義して実行します。

インストール・プロセスの完了後にデプロイメント環境または本稼働用環境を使用して構成を変更する場合は、次の点に注意してください。

- ・ 本稼働用環境のシステム・テーブルがリアルタイムで更新されます。
- ・ プランナ・データベース・テーブルは更新されません。

デプロイメント環境と本稼働用環境については、オブジェクト構成マネージャ(OCM)およびデータ・ソース情報がプランナ・データベースから取り込まれます。

環境、パス・コード、パッケージ、およびOCMの変更には、本稼働用環境のシステム(テクニカル)テーブルを使用することをお勧めします。アップグレード・プロセス中には、構成情報に本稼働用環境のシステム・テーブルを使用します。

プリステイン環境(JD9)

プリステイン環境(JD9)では、デモ・データを使用してプリステイン(JDEオリジナルの)オブジェクトをテストしたり、トレーニング・クラスで使用できます。アップグレード時には<Table Conversion(テーブル変換)>を実行してください。この環境は、修正したオブジェクトをプリステイン・オブジェクトと比較するために必要となります。ソフトウェアに問題が発生し、それをPeopleSoftワールドワイド・カスタマー・サポートが再現できない場合は、プリステイン環境にサインオンして再現するかどうかをお尋ねします。この環境で使用するデータは、ソフトウェアCDに含まれているデモ・データを使用して、月次または四半期ごとなど定期的にリフレッシュしてください。

プリステイン環境は、他の環境より先にアップグレードされます。この環境はJDEPLAN環境が拡張されたものであり、アップグレード時にはエンタープライズ・サーバー上でプロセスを実行するために使用されません。

デプロイメント環境(DEP9)

リリース8.9をデプロイメント・サーバーで実行するときは、デプロイメント環境を使用します。デプロイメント環境では、そのプランナ・パス・コードを使用し、本稼働用環境のシステム・テーブルとローカル・データへのOCMマッピングが含まれています。インストール・プロセスで作成されるすべての環境は共通のデータ・ソースを共有するので、デプロイメント環境は1つで十分です。

デプロイメント環境では、環境、パッケージ、およびユーザー・プロファイルなどのシステム情報が使用されます。OCMマッピングおよびデータ・ソース情報は、プランナ・データベースから提供されます。

テスト環境(TS9)

テスト環境では次のテストを行います。

- ・ プロトタイプ中のソフトウェア
- ・ 開発環境で修正され、プロトタイプ(PY9)環境に転送された内容。これらの修正はまだ本稼働用のパス・コードに転送されていないため、エンドユーザーにはリリースされていません。

- ・ テーブル変換処理のテスト(外部テーブルからEnterpriseOneテーブルへの変換)

テスト環境へのアクセス許可が与えられている場合は、データを安全に変更できます。また、この環境でトレーニングも実施できます。カスタマー・アプリケーションのテストと変換テストは、この環境で実行できます。

開発環境(DV9)

開発環境は、オブジェクトを開発するための環境です(DV9パス・コード)。この環境では、TS9で使用されるテスト・データを共有します。プロトタイプ環境(PY9)のパス・コードに転送する前に、この環境にログオンしてオブジェクトを修正してテストしてください。オブジェクトをPY9に転送した後で、プロトタイプ・パッケージの一部または全体(PY9FAまたはPY9PAなど)を作成し、インストールできます。その後、プロトタイプ環境またはテスト環境にログオンして追加のテストを行うことができます。

カスタム修正を考慮していない場合、開発環境をアップグレードする必要はありません。

プロトタイプ環境(PY9)

プロトタイプ環境は、本稼働への準備環境です。プロトタイプ・プロセス中に、会社固定情報、会計期間パターン、および品目マスターなど、固定情報テーブルとマスター・テーブルが本稼働データと共に導入されます。各テーブルは、運用開始前に本稼働用環境にコピーします。

〈Installation Workbench〉の実行後は、ビジネス・データ(JDEが納入する固定情報データ以外)は入力するまで存在しません。タイミングをみながら、この環境で使用するデータを本稼働用環境(PD733x)からリフレッシュしてください。アップグレードの場合、旧テスト・データもPD733xに残っているはずですが。

本稼働用環境(PD9)

本稼働ユーザーのシステムには、テストおよびリリースされたパッケージが提供されます。バッチ・アプリケーションは、エンタープライズ・サーバー上で実行できます。

言語プロセスの概要

言語インストール処理では、言語データベースから本稼働用のリリース8.9データベースにテキストが自動的にコピーされ、代替言語テキストがオリジナルの英語ベースとマージされます。これらの自動化された処理については、各セクションに説明されています。言語を初めてインストールするときには、初期プランの完了後に言語のみのプランを実施するように選ぶことができます。

参照

- ・ Installation Plannerの実行
- ・ 基本インストールの完了後に代替言語をインストールするように選んだ場合に実施する作業については、「言語のみのインストール・プランの作成」

言語アーキテクチャ

リリース8.9の言語アーキテクチャには、複数言語を使用するカスタマー向けに複数言語機能が組み込まれています。このソフトウェアによってフォームとレポートの使用言語を指定できます。たとえば同じ環境を共有するユーザーが、同じテキストをフランス語、スペイン語、および英語などのさまざまな言語で表示できます。すべての言語のテキストは、セントラル・ロケーションに格納され、個々のワークステーション

ンに配布されます。

現在すべてのソフトウェアは、基本言語が英語に設定されている状態で出荷されています。パッケージ・ビルド処理では複数言語用のパッケージをビルドできます。複数言語は、本書で説明する処理を使用してインストールすることができます。言語テキストへのアクセスには、インストールした代替言語に関連するユーザー・プロファイルの使用言語コードの設定が使用されます。

基本言語

リリース8.9の言語サポートは、基本言語である英語と連動しています。基本リリースは英語であり、翻訳済みのテキストへの変更や追加を組み込んだカスタム修正を作成する前にインストールしておく必要があります。また、すべてのコントロール・ファイルにも、代替言語テキスト・レコードを追加する前に英語のレコードが必要です。

代替言語のコンポーネント

B9リリースに代替言語コンポーネントが組み込まれていない場合は、言語パッケージをビルドする必要があります。

代替言語と共に、次の主要コンポーネントが組み込まれます。

- ・ 言語テキストは、セントラル・オブジェクト、システム、コントロール・テーブル、およびデータ辞書の各データ・ソースに格納されます。データは、インストール中にデプロイメント・サーバーにロードされ、言語インストール・プロセスを通じてセントラル・オブジェクトおよび他のデータ・ソースにコピーされます。

リリース8.9には、21の言語が用意されています。シングルバイト言語は、シングルバイトとダブルバイトのオペレーティング・システム上で実行できますが、ダブルバイト言語は、ダブルバイトのオペレーティング・システム上で実行する必要があります。

本書では、これらの機能をセットアップする方法について説明します。

参照

- ・ 言語パッケージをビルドする方法については『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ・ビルド」

使用言語コード

使用言語コードは、ソフトウェア全体で使用される標準言語コードです。どの言語をフォームやレポートに表示するかは、ユーザー・プロファイルの[Language(言語)]フィールドで指定します。すべてのユーザーには、ユーザー・プロファイルで使用言語コードが割り当てられます。

使用言語コードがブランクの場合は、基本言語である英語を示します。代替言語レコードの場合は、常に使用言語コードに値が設定されています。

代替言語テキスト・テーブルには、使用言語コードが含まれています。このテーブルには、ユーザー定義コード値など項目ごとに複数のレコードを格納できます。つまり、異なる言語コードによって、あるコード値に対して複数のレコードを保持することができます。

使用言語コードに対応する翻訳言語レコードが存在しない場合は、英語のレコード(デフォルト/基本)が使用されます。

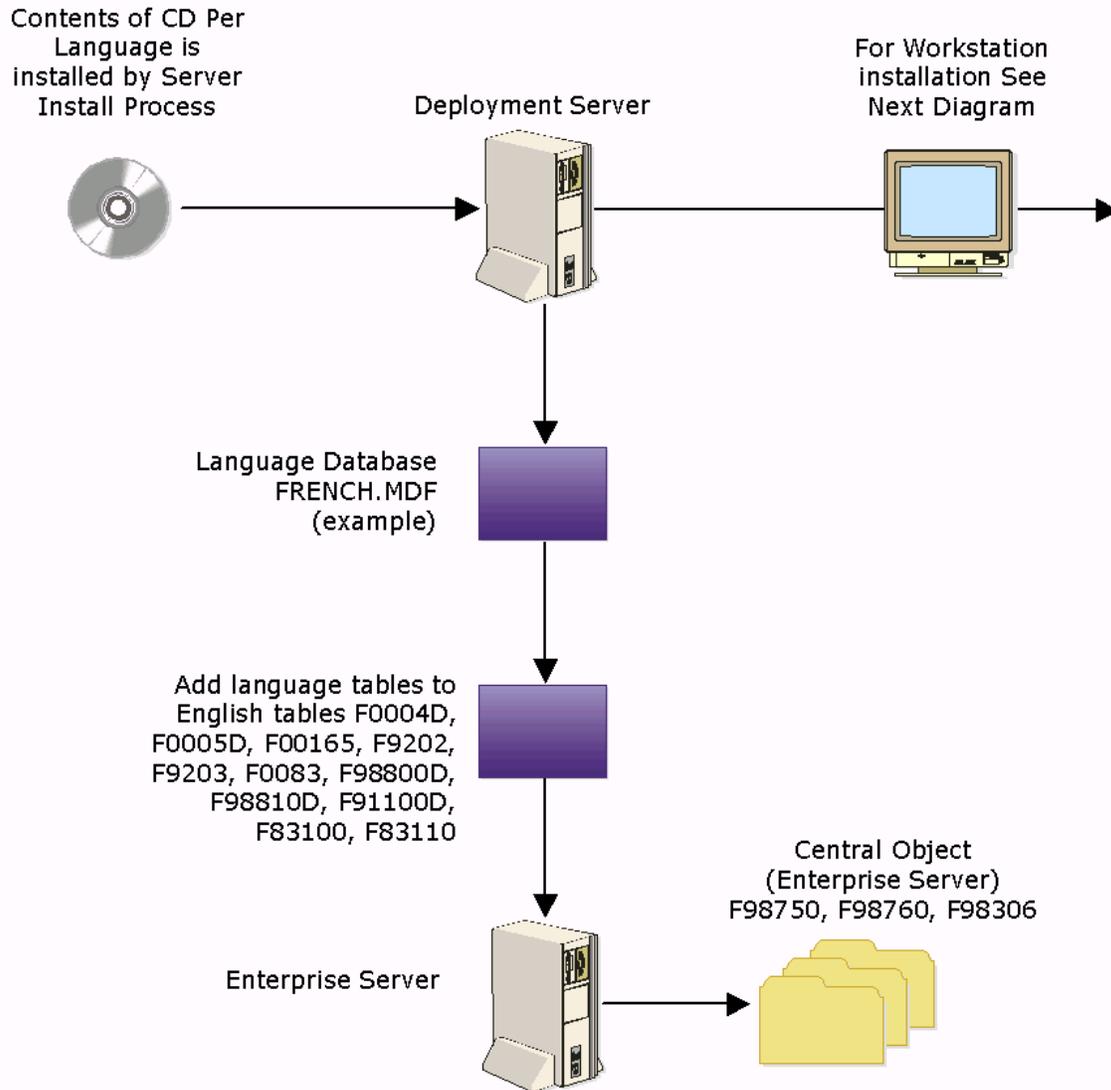
また、ビジネスユニット・マスター、自動仕訳(AAI)マスター、勘定科目マスター、および資産マスターなど、ある種のデータベース・テーブルの場合も、補足記述テーブルに使用言語コードが含まれています。この情報は、デモ・データでは翻訳されていません。

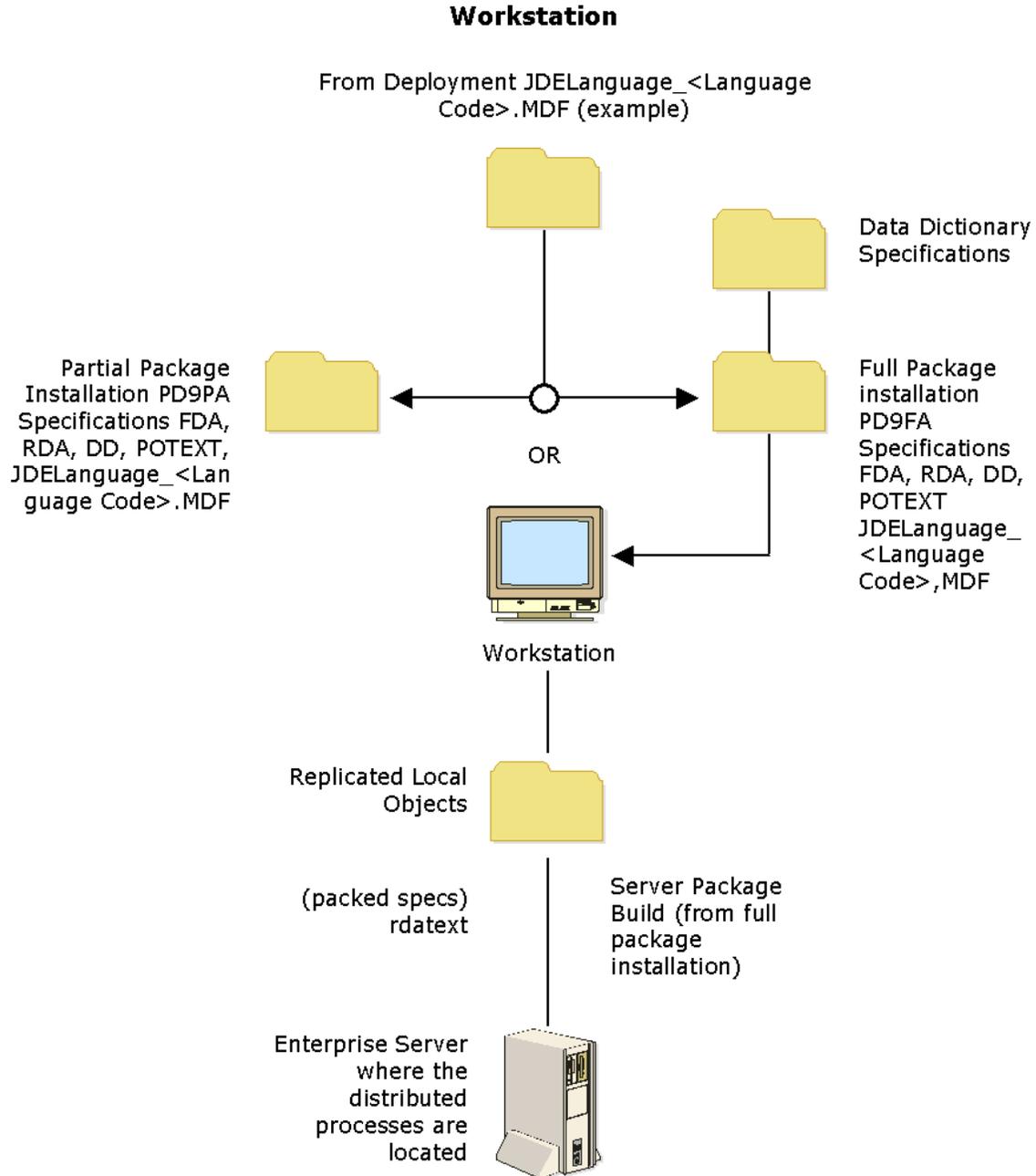
リリース8.9アプリケーションでは、複数言語の使用がサポートされます。複数言語のセットアップと使用については、個々のアプリケーションを参照してください。

言語インストール・プロセスの流れ

次の図は、デプロイメント・サーバー上とワークステーション上での言語インストール・プロセスの流れを示しています。

Deployment Server Installation





データベースの文字セットとコード・ページに関する考慮事項

データベースのデータは、一連のパラメータで定義されます。データベースの各文字は、特定の使用言語コード値で識別されます。定義済みデータベースの文字の集合を、文字セットまたはコード・ページと呼びます。文字セットまたはコード・ページ設定は、文字データを符号化するためのスキーマです。すべての文字は固有の16進値で定義されています。これらの値は、データベースや言語ごとに異なる場合があります。各言語は、少なくとも1つの文字セットで表されます。また、文字セットによっては複数の言語を含む場合があります。

たとえば、西欧語文字セットには、西欧言語に共通のすべての文字 (Aa~Zz) と、Á, á, Ü, およびüなど、特定言語に固有のすべての特殊文字が含まれています。アジア言語の文字セットは、その言語に固有

です。

リリース8.9では、コード・ページ変換を使用して必要なデータ表示が一貫して制御されます。コード・ページ変換により、デスクトップ上のテキストの体裁がコード・ページ間で同一になるように、さまざまな文字の16進値が調整されます。

データベースのインストールまたはアップグレード時には、リリース8.9用の言語をロードする前に、その言語のコード・ページをセットアップする必要があります。

参照

- ・ データベース・マシン環境のLocalCodeSet(ローカルコードセット)およびコード・ページ設定を検証する方法については、「ERP 8.0データベースのアップグレード」

Unicode

Unicodeでは、データ・ソースに保管されているデータがUnicode形式であることが指定されます。インストール時には、すべてのデータ・ソースがデフォルトでUnicodeに設定されます。アップグレード時には、ビジネス・データとコントロール・テーブルを除くすべてのデータ・ソースがデフォルトでUnicodeに設定されますが、ビジネス・データとコントロール・テーブルはアップグレード後にUnicodeに変換することができます。セントラル・オブジェクト・データ・ソース、UDB、およびセントラル・オブジェクトと同じデータベースを使用する他のデータ・ソースには、Unicodeが必須です。

参照

- ・ Unicodeへのデータ変換方法については、『Unicode Data Conversion Guide(Unicodeデータ・コンバージョン)』ガイド
- ・ Unicodeテキスト文字列をサポートするようにビジネス関数を変換する方法については、『開発スタンダード:ビジネス関数プログラミング』ガイド
- ・ フラット・ファイルをUnicodeに変換する方法については、『Flat File Conversion Guide(フラット・ファイル・コンバージョン)』ガイド

コード・ページ設定

コード・ページには次の設定をお勧めします。データベースの作成時には正しいコード・ページを設定する必要があります。

SQL Server

データベースのMicrosoftコード・ページ設定は、使用言語に応じて正しく設定する必要があります。Microsoft SQLコード・ページ設定については、次の表を参照してください。

Oracle

データベースのOracle文字セットは、使用言語に応じて正しく設定する必要があります。Oracle文字セット設定については、次の表を参照してください。

環境変数NLS_characterasetおよびNLS_LANGの両方を正しく設定する必要があります。

DB2 UDB

データベースのIBMコード・セットとOS Localeは、使用言語に応じて正しく設定する必要があります。DB2コード・セット設定については、次の表を参照してください。

DB2/400

コード化文字セット(CCSID)のIBMシステム値は、使用言語に応じて正しく設定する必要があります。CCSID値については、次の表を参照してください。

階層	言語	エンコード/文字セット/ロケール			
		SQL(コード・ページ)	Oracle (NLS_CHARACTERSET)	DB2 UDB(コード・セット)	DB2/400 (CCSID)
1	英語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	フランス語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	ドイツ語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	イタリア語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	スペイン語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	ポルトガル語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	日本語	932	JA16SJIS	IBM-943	939
2	デンマーク語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	オランダ語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	フィンランド語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	ノルウェー語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	スウェーデン語	1252	WE8MSWIN1252	1252	37
	韓国語	949	KO16MSWIN949	1363	933
	繁体字中国語	950	ZHT16MSWIN950	big5	937
	簡体字中国語	936	ZHS16GBK	GBK	935

階層	言語	エンコード/文字セット/ロケール			
		SQL(コード・ページ)	Oracle (NLS_CHARACTERSET)	DB2 UDB(コード・セット)	DB2/400 (CCSID)
3	アラビア語	1256	AR8MSWIN1256	1256	なし
	チェコ語	1250	EE8MSWIN1250	1250	870
	ハンガリー語	1250	EE8MSWIN1250	1250	870
	ポーランド語	1250	EE8MSWIN1250	1250	870
	ギリシャ語	1253	EL8MSWIN1253	1253	875
	ロシア語	1251	CL8MSWIN1251	1251	1025
	トルコ語	1254	TR8MSWIN1254	1254	1026

階層	言語	UDBエンコード/文字セット/ロケール						
		Territory*	AIX		HP		SUN	
			コード・セット	OS locale*	コード・セット	OS locale*	コード・セット	OS locale*
1	英語	US	ISO8859-1	en_US	iso88591	en_US.iso88591	ISO8859-1	en_US
	フランス語	FR	ISO8859-1	fr_FR	iso88591	fr_FR.iso88591	ISO8859-1	fr
	ドイツ語	DE	ISO8859-1	de_DE	iso88591	de_DE.iso88591	ISO8859-1	de
	イタリア語	IT	ISO8859-1	it_IT	iso88591	it_IT.iso88591	ISO8859-1	it
	スペイン語	ES	ISO8859-1	es_ES	iso88591	es_ES.iso88591	ISO8859-1	es
	ポルトガル語	PT	ISO8859-1	pt_PT	iso88591	pt_PT.iso88591	ISO8859-1	pt
	日本語	JP	IBM-932	ja_JP	SJIS	ja_JP.JSIS	eucJP	ja_JP.eucJP

階層	言語	UDBエンコード/文字セット/ロケール						
		Territory*	AIX		HP		SUN	
			コード・セット	OS locale*	コード・セット	OS locale*	コード・セット	OS locale*
2	デンマーク語	DK	ISO8859-1	da_DK	iso88591	da_DK.iso88591	ISO8859-1	da
	オランダ語	NL	ISO8859-1	nl_NL	iso88591	nl_NL.iso88591	ISO8859-1	nl
	フィンランド語	FI	ISO8859-1	fi_FI	iso88591	fi_FI.iso88591	ISO8859-1	なし
	ノルウェー語	NO	ISO8859-1	no_NO	iso88591	no_NO.iso88591	ISO8859-1	no
	スウェーデン語	SE	ISO8859-1	sv_SE	iso88591	sv_SE.iso88591	ISO8859-1	sv
	韓国語	KR	IBM-eucKR	ko_KR	eucKR	ko_KR.eucKR	5601	ko
	繁体字中国語	TW	big5	Zh_TW	big5	zh_TW.big5	big5	big5
	簡体字中国語	CN	GBK	Zh_CN.GBK	hp15CN	zh_CN.hp15CN	GB2312	zh
3	ハンガリー語	HU	ISO8859-2	hu_HU	iso88592	hu_HU.iso88592	なし	なし
	チェコ語	CZ	ISO8859-2	cs_CZ	iso88592	cs_CZ.iso88592	なし	なし
	ポーランド語	PL	ISO8859-2	pl_PL	iso88592	pl_PL.iso88592	なし	なし
	ギリシャ語	GR	ISO8859-7	el_GR	iso88597	el_GR.iso88597	なし	なし
	ロシア語	RU	ISO8859-5	ru_RU	iso88595	ru_RU.iso88595	なし	なし
	トルコ語	TR	ISO8859-9	tr_TR	iso88599	tr_TR.iso88599	なし	なし

* 一部の言語の場合、地域とOSロケールの設定は特定のUDBコード・セットのサブセットであり、データベース・システム階層で優先されるコード・セット・パラメータとなります。たとえばリリース8.9の場合、フランス語、ドイツ語、またはイタリア語のユーザーは、Territory = US、OS locale = en_USに設定します。ただしコード・セットがISO88591の場合は、すべての西ヨーロッパ言語文字が含まれます。コード・セット値は、リリース8.9のクライアントとデータベースにとって重要なパラメータです。

データベースの製造元と使用される文字セット規格によっては、ある種の言語の文字セットに含まれる文字数が少ない場合があります。たとえば西欧言語用のMicrosoftコード・ページ1252には、同じ文字セット

用のISO標準コード・ページISO88591より多くの文字が含まれています。簡体字中国語の場合、文字セット926(Microsoft)、ZHS16GBK (Oracle)、およびGBK (UDB MS WindowsとAIX)には約21,000文字が含まれていますが、GB2312 (UDB Sun)とhp15CN (UDB HP)には約7,000文字しか含まれていません。

通常、ISO定義の文字セットの方が、MicrosoftまたはOracle定義の対応する文字セットより文字数は少なくなっています。データベースの文字セットに定義されていない文字は、Windowsオペレーティング・システム上の他のWindowsアプリケーションで使用されている場合にも、リリース8.9では使用しないでください。

ワークステーションとデプロイメント・サーバー

個々の言語のコード・ページ設定は、Windowsシステム・ロケールでMicrosoftによって設定されています。インストールの前に、デプロイメント・サーバーのコード・ページが正しく設定されていることを確認してください。

ナショナル・ランゲージ・サポート

ナショナル・ランゲージ・サポート(NLS)は、さまざまなデータベースやさまざまなプラットフォーム上で、データを複数言語で入力、表示、保存、検索、および印刷できるようにするための、共通の標準セットです。

また、このNLS情報に合わせて、エンタープライズ・サーバー用とワークステーション用のコード・ページとJDE.INIファイルを設定する必要があります。NLS規格を使用することにより、すべてのデータベースおよびハードウェア・プラットフォームでデータの一貫性が保たれます。

たとえばMicrosoft Windowsベースのワークステーションにフランス語のデータを入力すると、IBM iSeriesシステム上ではEBCDICに変換されます。この例では、データはIBM iSeries Access (Client Access)によって自動的に変換されます。テキストは、データをフランス語として記述する特定の文字セットで格納されます。これと同じデータベースに、テキストの格納と検索を管理するNLS規格に従って、フランス語と共に代替言語のテキストを格納することができます。サポートしているすべてのプラットフォーム上でNLSを使用しているため、使用する環境のどのコンピュータ・システム(ハードウェアとソフトウェア)とも情報をやりとりできます。

デプロイメント・サーバー上にインストールされている言語をワークステーションに反映させるには、エンタープライズ・サーバーとワークステーションの両方について作業を行い、JDE.INI設定を検証して修正します。これらの手順については、本書の各セクションを参照してください。

シングルバイトとダブルバイトに関する考慮事項

多くのシングルバイト言語では、自国語のコード・ページまたは複数言語コード・ページがサポートされます。ダブルバイト言語では、個々の自国語コード・ページが言語別にサポートされます。

シングルバイト文字セットでは、1バイトで1文字を作成するために必要な発音記号の集合が使用されます。これに対してダブルバイト文字セットでは表意文字が使用され、1文字を作成するために2バイトを必要とします。

通常シングルバイト言語は、シングルバイトまたはダブルバイト・システム上で実行できます。日本語、中国語、韓国語などのダブルバイト言語は、ダブルバイト・システムをサポートするように構成されたマシン上で実行する必要があります。たとえば中国語や日本語には、ダブルバイトのSQLデータベースやOracleデータベースが必要です。

リリース8.9では、どの文字についてもQBEを実行することができます。ただしダブルバイト言語を使用する場合、ダブルバイトのカラムでもQBEを使用できますが、解読可能な照合順序が使用されない場合もあります。

ワークステーションからiSeriesへのセッション・ソフトウェアでダブルバイト言語を使用する場合は、32ビットのODBCドライバが必要です。シングルバイト言語とダブルバイト言語の両方がサポートされるため、32ビットODBCドライバにはIBM iSeries Accessをお勧めします。

次の表は、リリース8.9でサポートされる言語、および各プラットフォーム用のJDE.INIファイルで設定されているLocalCodeSet値を示しています。

階層	言語	言語コード	LocalCodeSet値	
			WindowsとUNIX	iSeries
1	英語	E	WE_ISO88591	US_EBCDIC
1	フランス語	F	WE_ISO88591	US_EBCDIC
1	ドイツ語	G	WE_ISO88591	US_EBCDIC
1	イタリア語	I	WE_ISO88591	US_EBCDIC
1	スペイン語	S	WE_ISO88591	US_EBCDIC
1	ポルトガル語	P	WE_ISO88591	US_EBCDIC
1	日本語	J	JA_SJIS	JA_EBCDIC
2	デンマーク語	DN	WE_ISO88591	US_EBCDIC
2	オランダ語	DU	WE_ISO88591	US_EBCDIC
2	フィンランド語	FN	WE_ISO88591	US_EBCDIC
2	ノルウェー語	NO	WE_ISO88591	US_EBCDIC
2	スウェーデン語	W	WE_ISO88591	US_EBCDIC
2	韓国語	KO	KO_KSC	KO_EBCDIC
2	繁体字中国語	CT	TC_BIG5	TC_EBCDIC
2	簡体字中国語	CS	SC_GB	SC_EBCDIC
3	アラビア語	AR	AR_CP1256	なし
3	チェコ語	C	EECP1250	EE_EBCDIC
3	ハンガリー語	HU	EECP1250	EE_EBCDIC
3	ポーランド語	PO	EECP1250	EE_EBCDIC
3	ギリシャ語	GR	GR_CP1253	GR_EBCDIC

階層	言語	言語コード	LocalCodeSet値	
			WindowsとUNIX	iSeries
3	ロシア語	RU	RS_CP1251	RS_EBCDIC
3	トルコ語	TR	TK_CP1254	TK_EBCDIC

フォントに関する考慮事項

標準言語フォントは、別のファイルに組み込まれています。言語(ダブルバイトなど)によっては、正常に表示/印刷させるために特殊フォントが必要となる場合があります。リリース8.9ソフトウェアでは、フォント設定が言語に従って各ファイルに保管されます。各リリース8.9ユーザーは、フォーム、グリッド、およびレポート用のフォントを言語別を選ぶことができます。

ユーザー表示設定

ユーザー表示設定は、個別に定義されユーザー・プロファイルに保管されているリリース8.9特性の集合です。リリース8.9ではこれらの優先設定を使用して、個々のユーザーに対するメニューやフォームの表示方法、およびそのユーザーがリリース8.9で使用する言語が判別されます。特定のユーザーのユーザー表示設定をセットアップすると、そのユーザーがアクセスするワークステーション上では設定値は変化しません。ユーザー・プロファイルの修正方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドを参照してください。

アップグレード前の処理

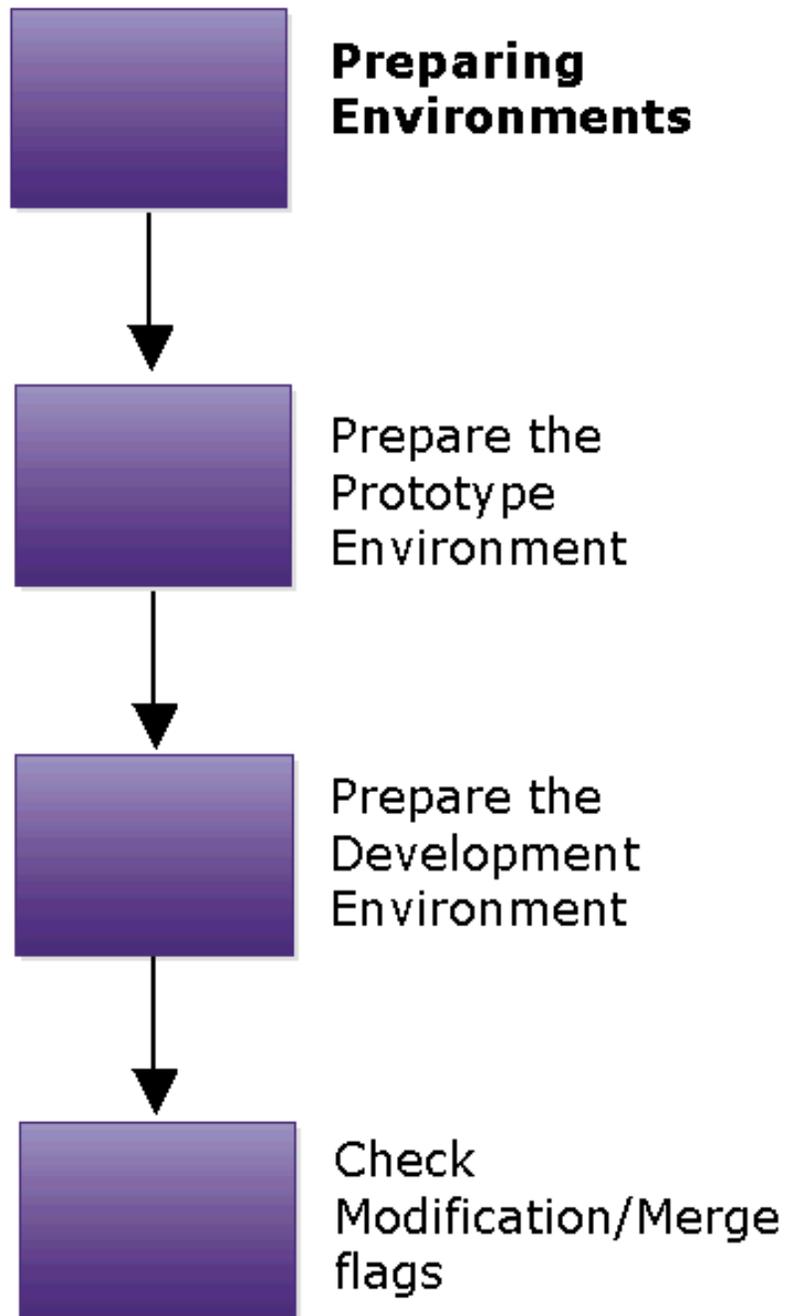
B73.3.xからリリース8.9にアップグレードする準備

アップグレード開始前に、現在の開発環境、本稼働用環境、およびプロトタイプ環境を準備し、デプロイメント・サーバー、エンタープライズ・サーバー、およびデータベースのバックアップを作成する必要があります。

これらの準備作業は、アップグレード・チームが到着する前に完了しておく必要があります。

次のフロー・チャートは、B73.3.xからのアップグレード・プロセスの概要を示しています。

Preparing To Upgrade (B73.3.x)



P98MOQUE設定の確認

アップグレード前に次のタスクを完了してください。

1. XeまたはERP 8.0のDEP733x環境にユーザーJDEでログインします。
2. [Fast Path(略式コマンド)]に“P98MOQUE”と入力します。
3. [Find(検索)]をクリックします。
4. グリッドで、SERVERNAMEがデプロイメント・サーバー名で置換されていることを確認します。
5. 置換されていない場合は、そのローをクリックし、SERVERNAMEをデプロイメント・サーバー名で置換します。
6. [OK]をクリックします。

メディア・オブジェクト待ち行列の確認

メディア・オブジェクト待ち行列により、アプリケーションに情報を添付します。特に、メディア・オブジェクトの格納場所を、物理的なネットワーク・ロケーションではなく参照によって追跡することができます。これにより、メディア・ロケーションの管理が簡単になります。

メディア・オブジェクト待ち行列を使用すると、システム管理者は構成内でメディア・オブジェクトの格納を管理しやすくなります。イメージング製品のドメイン外にあるイメージ(スキャンしたイメージなど)を使用するために、ソフトウェアの旧リリースにログオンし、メディア・オブジェクト待ち行列を確認する必要があります。

また、メディア・オブジェクト待ち行列は、実際のイメージ・ファイルやOLEオブジェクトが保存されている位置のポイントを識別するように定義してください。OLEオブジェクトの場合、待ち行列名はOLEQUEIにする必要があります。メディア・オブジェクト待ち行列は、必ずWindowsマシン上に格納してください。さらに、このマシンの有効なネットワーク・パスが存在する必要があります。使用するのは、デプロイメント・サーバーでも他のWindowsマシンでもかまいません。

デプロイメント・サーバーにメディア・オブジェクト待ち行列をおく場合は、そのマシンをアプリケーションによる日常作業で使用可能にしておく必要があります。

メディア・オブジェクト待ち行列のパスは、汎用サーバー名になっています。メディア・オブジェクト待ち行列をカスタマー・サイトで使用可能にするには、そのパスにデプロイメント・サーバー名を入力する必要があります。

参照

- ・ メディア・オブジェクトの使用方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「メディア・オブジェクトとイメージング」

▶ メディア・オブジェクト待ち行列を確認するには

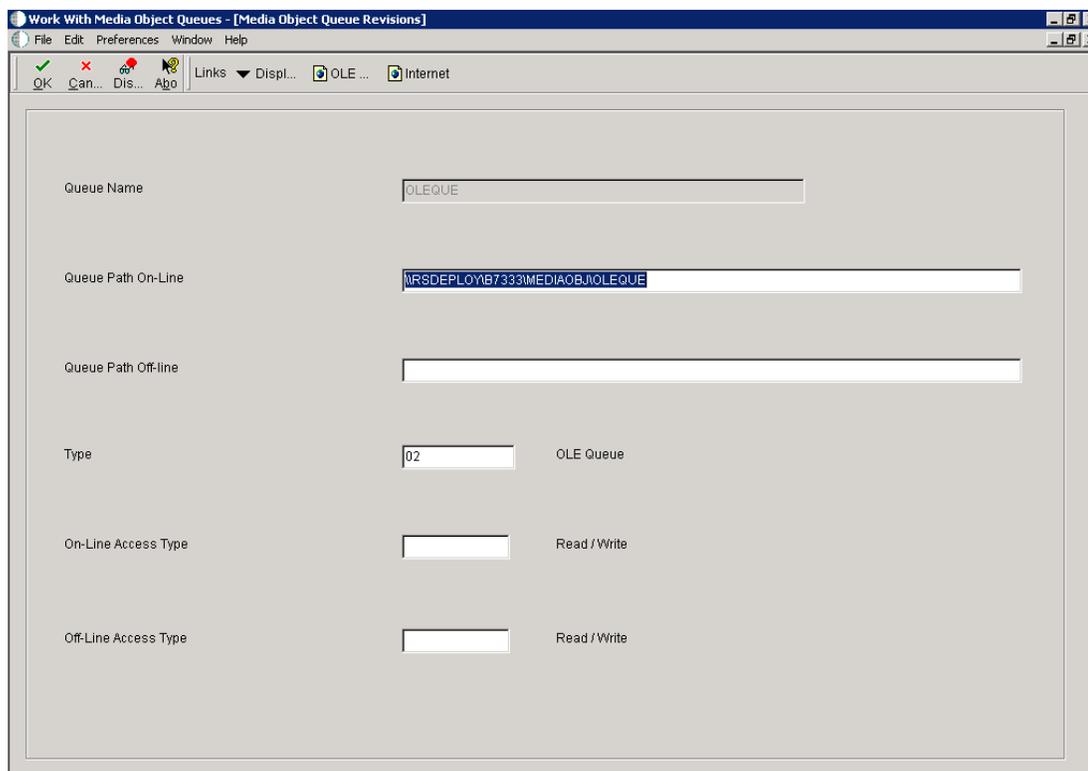
スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ワークステーションから、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・

	パスワードで、ソフトウェアの旧バージョンにログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

The screenshot shows a window titled "Work With Media Object Queues - [Work With Media Object Queues]". The window contains a table with the following columns: Queue Name, Queue path On-Line, Queue Path Off-line, Type, Description, On-Line Access Type, Description, and Off-Line Access Type. The table lists various queues such as ActivEraData, BusinessFunctionDoc, Composer, and Text.

Queue Name	Queue path On-Line	Queue Path Off-line	Type	Description	On-Line Access Type	Description	Off-Line Access Type
ActivEraData	\\RSDEPLOYB7333\activera\data		04	ActivEra Queue		Read / Write	
BusinessFunctionDoc	\\RSDEPLOYB7333\PrintQueue		01	Image/File Queue		Read / Write	
Composer	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\COMPOSER\HTML		01	Image/File Queue		Read / Write	
ComposerCBT	x:\b7\MEDIAOBJ\COMPOSER\CBT		01	Image/File Queue		Read / Write	
Customer SelfService	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\SELFSERVICE		01	Image/File Queue		Read / Write	
Distribution	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\DISTRIBUTION		01	Image/File Queue		Read / Write	
Expense Policy	http://www.jdedwards.com		01	Image/File Queue		Read / Write	
Financials	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\FINANCIALS		01	Image/File Queue		Read / Write	
HTMLUpload	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\HTMLUpload		05	HTML Queue		Read / Write	
Human Resources	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\HUMAN RESOURCES		01	Image/File Queue		Read / Write	
Manufacturing	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\MANUFACTURING		01	Image/File Queue		Read / Write	
Misc Images	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\MISC IMAGES		01	Image/File Queue		Read / Write	
Misc. Animations	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\MISC ANIMATIONS		01	Image/File Queue		Read / Write	
Miscellaneous	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\MISC		01	Image/File Queue		Read / Write	
OLEQUE	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\OLEQUE		02	OLE Queue		Read / Write	
ObjectManagement	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\OMW		03	Text Queue		Read / Write	
Text	\\RSDEPLOYB7333\MEDIAOBJ\TEXT		03	Text Queue		Read / Write	

1. <Work With Media Object Queues (メディア・オブジェクト待ち行列の処理)>で、修正する待ち行列名を選択して[Select (選択)]をクリックします。



2. 〈Media Object Queues〉で、新しいロケーションが反映されるように[Path]フィールドの情報を変更します。
3. リリース8.9を終了し、再度ログオンして変更結果を有効にします。

環境の準備

▶ プロトタイプ環境を準備するには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	WorldSoftware上のプロトタイプ環境に、ユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

プロトタイプ環境にすべての修正が保持されているかどうかを確認するために、次のタスクを完了してください。

1. エンタープライズ・サーバー上でJDEネットワーク・サービスが実行されているかどうかを確認します。
2. すべての待ち行列とパラメータ設定を確認します。
3. 〈System Administration Tools(システム・アドミニストレーション・ツール)〉メニュー(GH9011)から〈

Batch Versions(バッチ・バージョン))を選択します。

4. 2つの環境が同一になるように、PRODバージョンをプロトタイプに転送します。R9830512を実行します。
5. ZJDE0001を選択して[Copy(コピー)]をクリックします。
6. 新しいバージョン名とバージョン・タイトルを作成します。セキュリティ・セットは0のままにしておきます。
7. 新バージョンを選び、[Prompt For Data Selection(データ選択のプロンプト)]を選択して[Submit(投入)]をクリックします。
8. データ選択ロジックを次のように修正します。where BC Version History (F983051) is not equal to "XJDE0000-XJDE9999", and BC Version History (F983051) is not equal to "XJDEAAAA - XJDEZZZZ".
9. 処理オプションの入力を求めるプロンプトが表示されたら、それぞれ1、A、1、および1に設定されているかどうかを確認します。
10. <Printer Selection(プリンタの選択)>で[OK]をクリックします。
11. [OK]をクリックします。
12. プロトタイプ・パッケージをビルドします。
このパッケージを後で使用して、カスタム・バージョンが正しくアップグレードされたかどうかを確認できます。
13. プロトタイプ・パッケージをワークステーションに配布します。B7333など、バックアップ元リリースを実行します。

参照

- ・ パッケージのビルドと配布については、『パッケージ管理』ガイドの「オブジェクトの転送」および「パッケージ・ビルド」

▶ 開発環境を準備するには

開発環境がない場合は、この手順をスキップしてください。

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	ソフトウェア上の開発環境に、ユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

旧リリースの開発環境にすべての修正が保持されているかどうかを確認するために、次のタスクを完了してください。

1. 進行中のすべての作業が開発パス・コードにチェックインされているかどうかを確認します。

注意

開発ワークステーションからObject Management Workbench(オブジェクト管理ワークベンチ)または独自のクエリーやレポートを使用して、オブジェクトがチェックアウトされていないことを確認します。また、オブジェクトが個々のワークステーションにチェックアウトされていないことも確認してください。チェックアウトされている修正は、新リリースに反映されません。

2. 1つ以上のワークステーションへのデプロイメント準備中に、開発パッケージをビルドします。
3. 開発パッケージを1つ以上のワークステーションに配布します。

これらのワークステーションを後で使用して、すべてのカスタム修正が新リリース上でも実現されたかどうかを検証します。

注意

アップグレード中は、対象環境に対して次のリリースで実現するための修正(C言語で記述されたカスタム・ビジネス関数の変更を除く)を行うことはできません。

参照

- ・ パッケージのビルドと開発については、『パッケージ管理』ガイドの「オブジェクトの転送」および「パッケージ・ビルド」

修正フラグとマージ・フラグのチェック

このタスクによって、修正が新リリースに確実に受け継がれます。アップグレードする前に、修正があったすべてのオブジェクトに対し、オブジェクト・ライブラリアン・レコード内の修正フラグを確認または設定するために、次の手順を実行します。

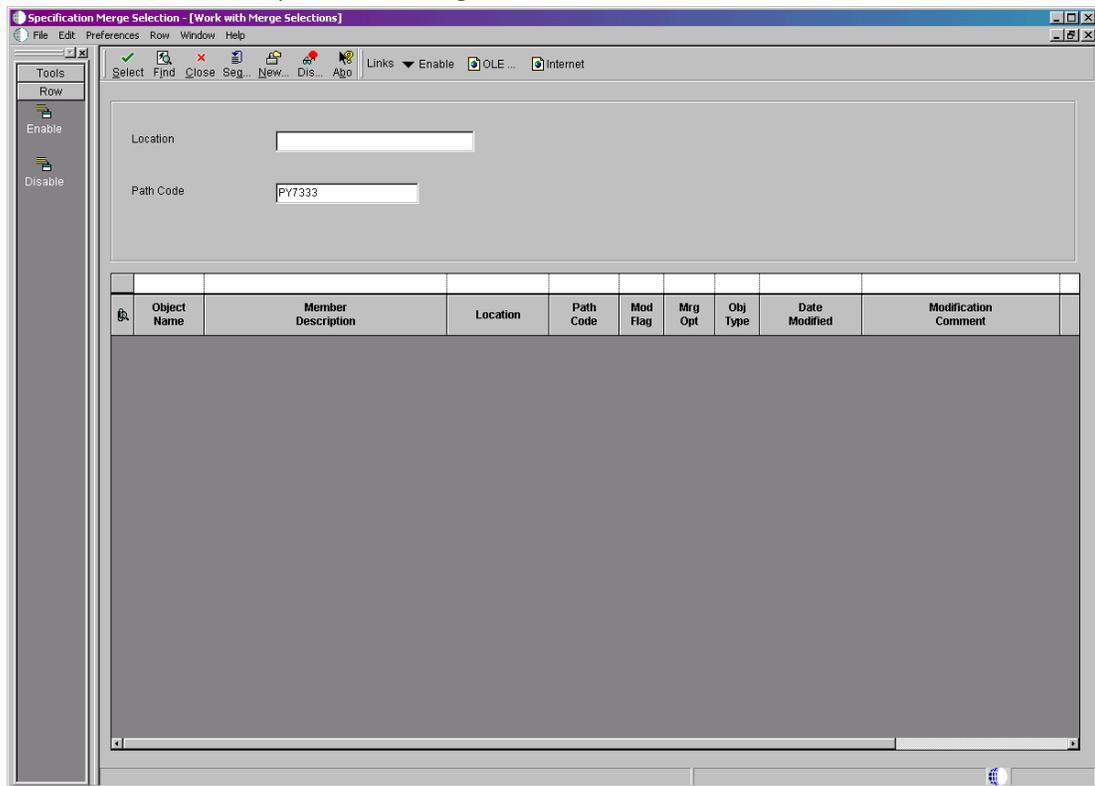
注意

スペック・マージは、修正があったオブジェクトを含むすべてのパス・コードのフラグをチェックし終わるまで実行しないでください。

▶ 修正フラグとマージ・フラグをチェックするには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	オブジェクト・ライブラリアン・テーブルにアクセスするEnterpriseOneのワークステーション、またはデプロイメント・サーバー上で、デプロイメント環境にログオンします。
前提条件	OneWorld環境をアップグレードする準備が完了しているかどうかを確認します。
同時に行うタスク	なし

1. EnterpriseOneのワークステーション、またはデプロイメント・サーバー上のデプロイメント環境にログオンします。
2. メニュー(GH9611)から〈Specification Merge Selection(スペック・マージ選択)〉を選択します。



3. 〈Specification Merge Selection〉フォームで次のフィールドに値を入力します。
 - ・ Location(ロケーション)
セントラル・オブジェクト・スペックが存在するデプロイメント・サーバーの名称を入力します。
 - ・ Path Code(パス・コード)
関連パス・コード名(プロトタイプまたは開発)を入力します。
4. [QBE]ローの[Mod Flag(修正フラグ)]フィールドに“C”を入力し、変更があったオブジェクトのリストを表示して[Find]をクリックします。
5. マージしないオブジェクトを除き、すべてのオブジェクトについて[MrgOpt(マージ・オプション)]フィールドを“1”に設定します。変更があったオブジェクトを移行する場合は[Enable(使用可能)]、移行しない場合は[Disable(使用不可)]を選択します。
6. レコードの確認または修正後に、[Close(閉じる)]をクリックします。

注意

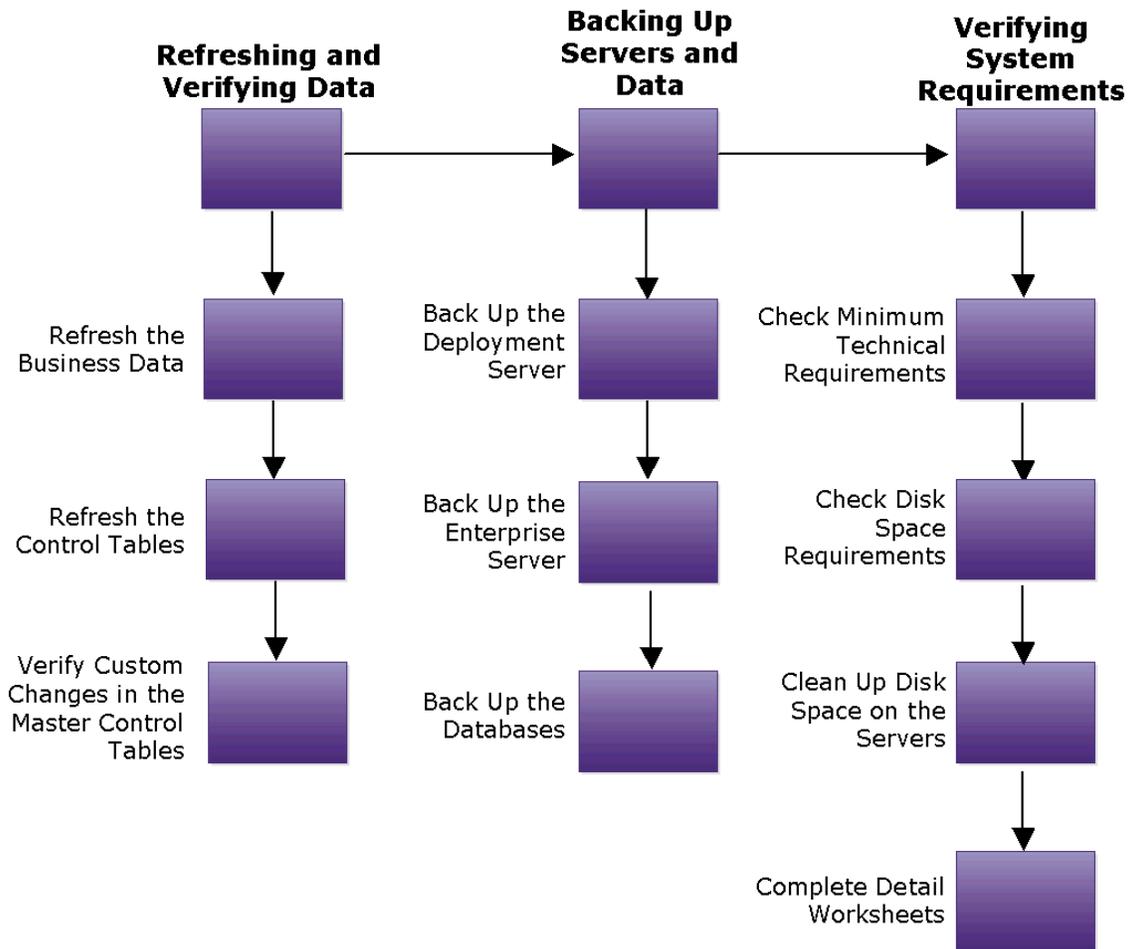
組み込まれた修正が正確かどうかを検証する場合は、修正があったオブジェクトの見落としを防ぐために、できるだけ他のクエリーも追加使用することをお勧めします。たとえば、オブジェクトのシステム・コードが55～59に設定されていることを確認してください。

準備の最終処理

次のタスクは、アップグレード元のリリースを問わず、アップグレード・プロセスを開始する前に完了してください。これらのタスクは、アップグレード・チームが到着するまでに完了しておくことをお勧めします。

次のフロー・チャートは、アップグレード準備を完了するために必要な各タスクを示しています。

Finalizing The Preparation



データのリフレッシュと検証

〈Installation Workbench (インストール・ワークベンチ)〉を実行する前に、アップグレードする環境のビジネス・データを現行の本稼働用データ・セットでリフレッシュできます。データの最新コピーを使用すると、テーブル変換と新リリースのテストを効率的に実行できます。たとえば、開発環境をアップグレードする

場合は、Business Data - TESTをリフレッシュしてください。PY環境をアップグレードする場合は、Business Data - CRPをリフレッシュします。

ソースにはデータ・セットを任意に選択して使用できますが、本稼働用データの最新コピーを使用することをお勧めします。〈Installation Workbench〉でテーブル変換を実行すると、このデータが必要に応じて新しいリリース8.9フォーマットに変換されます。本稼働用データのコピーを使用することで、後に行う本稼働用データのアップグレードを成功させることが確実にになります。

▶ ビジネス・データをリフレッシュするには

スタッフ	インストール担当者がこの手順を実行するか、データベース管理者がビジネス・データをリフレッシュできます。
ログオン状況	ワークステーション上に、ユーザーJDE、パスワードJDEでサインオンします。
前提条件	他のユーザーが現行のビジネス・データ・ライブラリ内のテーブルを使用していないことを確認します。
同時に行うタスク	なし

ビジネス・データをコピーするには、XJDE0021に類似したバージョンのR98403をB73.3.xワークステーションからコピーし、最初にテスト・モードで実行して、データ選択と処理オプションが正しく設定されているかどうかを確認する必要があります。

1. 〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)から〈Batch Versions〉を選択します。
2. [Batch Application(バッチ・アプリケーション)]フィールドに“R98403”と入力します。
3. [Find]をクリックします。
4. 指定したバージョン(XJDE0021に類似したバージョン)を実行します。
5. 〈Processing Options(処理オプション)〉の[Environment(環境)]タブで、処理オプションを確認します。
6. [OK]をクリックします。
7. バッチ・アプリケーションをテスト・モードで実行した後に、更新モードで実行して既存のテーブルを再作成します。

UDCおよびメニューのマージはカスタマー・ベースなので、本稼働用環境からPY環境にコピーします。開発環境をアップグレードする場合は、ソフトウェアをテストするために本稼働用環境からのコントロール・テーブルを開発環境にリフレッシュすることを検討してください。

〈Installation Workbench〉を実行してPYまたは開発環境をアップグレードする前に、アップグレードする環境に応じて、現行の本稼働用環境のコントロール・テーブル(Control Tables - Production)をControl Tables - TestまたはControl Tables - CRPデータ・ソースにコピーします。これにより、〈Installation Workbench〉でアップグレードのマージを実行するときに、マスターのコントロール・テーブルが確実に使用されます。

▶ コントロール・テーブルをリフレッシュするには

スタッフ	インストール担当者またはデータベース管理者
------	-----------------------

ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、プランナ環境にシステム管理者としてサインオンします。
前提条件	他のユーザーが現行のコントロール・テーブル・ライブラリ内のテーブルを使用していないことを確認します。
同時に行うタスク	なし

1. B73.3.xプランナ環境から、アップグレードする環境の次のテーブルをマップします。たとえば、DV733xの場合は、Control Tables - Testデータ・ソースにマップします。

F0004	F9000	F9010	F91011	F98800
F0004D	F9001	F9020	F91012	F98800D
F0005	F9002	F9021	F91013	F98800T
F0005D	F9005	F9022	F91014	F98810
F0082	F9005D	F9023	F98810D	
F00821	F9006	F9025	F98811	
F0083	F9006D	F9030	F98830	
F0084	F9050	F98840	F98845	

2. 〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)から〈Batch Versions〉を選択します。
3. [Batch Application]フィールドに“R98403”と入力します。
4. [Find]をクリックします。
5. バージョンXJDE0022を実行します。
6. 〈Processing Options〉の[Environment]タブで、処理オプションを確認します。
7. [OK]をクリックします。
8. ステップ**ステップ 1** [51]の各テーブルに対して定義したマッピングを非アクティブにします。
9. 元のマッピングを再びアクティブにします。

リリース・レベルB73.3.xのマスター・コントロール・テーブルに、リリース8.9に引き継ぐカスタム変更がすべて含まれているかどうかを検証する必要があります。アップグレードする環境ごとに検証してください。

► マスター・コントロール・テーブルのカスタム変更を検証するには

スタッフ	インストール担当者またはデータベース管理者
ログオン状況	ワークステーション上で、該当する環境ごとにユーザーJDEでサインオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. データ辞書用の次のB73.3.xマスター・コントロール・テーブルが、データ辞書データ・ソースのアクセス先となるリレーショナル・データベースに常駐しているかどうかを確認します。

- ・ F9200
- ・ F9202
- ・ F9203
- ・ F9207
- ・ F9210
- ・ F9211
- ・ F9212
- ・ F00165

2. メニュー用の次のB73.3.xマスター・コントロール・テーブルが、Control Tables - Production(本稼働用)、Control Tables - CRP(PY環境用)、またはControl Tables - Test(開発環境用)データ・ソースのアクセス先となるリレーショナル・データベースに常駐しているかどうかを確認します。

- ・ F0082
- ・ F00821
- ・ F0083
- ・ F0084

3. ユーザー定義コード用の次のB73.3.xマスター・コントロール・テーブルが、Control Tables - Production(本稼働用)、Control Tables - CRP(PY環境用)、またはControl Tables - Test(開発環境用)データ・ソースのアクセス先となるリレーショナル・データベースに常駐しているかどうかを確認します。

- ・ F0004
- ・ F0005

サーバーとデータのバックアップ作成

▶ デプロイメント・サーバーのバックアップを作成するには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、システム管理者としてサインオンします。
前提条件	アップグレード準備タスクを完了します。
同時に行うタスク	同時にエンタープライズ・サーバーのバックアップを作成できます。

- 一部のOneWorldオブジェクトは、通常のOneWorld以外のディレクトリにもあるため、デプロイメント・サーバー全体のバックアップを作成する必要があります。

▶ エンタープライズ・サーバーのバックアップを作成するには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバーにサインオンします。
前提条件	アップグレード準備タスクを完了します。
同時に行うタスク	同時にデプロイメント・サーバーのバックアップを作成できます。

- OneWorld基本インストールのディレクトリ構造全体のバックアップを作成してください。

データベースのバックアップ作成

次のどちらかのタスクを完了する必要があります。

▶ Oracleデータベースのバックアップを作成するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバーにサインオンします。
前提条件	Oracleを使用します。エンタープライズ・サーバーのバックアップが作成されているかどうかを確認します。
同時に行うタスク	なし

- すべてのインスタンスを(一度に1つずつ)完全にエクスポートします。
- Oracleデータベース全体のコールド・バックアップを実行します。

▶ SQL Serverデータベースのバックアップを作成するには

スタッフ	インストール担当者またはデータベース管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバーにサインオンします。
前提条件	SQL Serverを使用します。エンタープライズ・サーバーのバックアップが作成されているかどうかを確認します。
同時に行うタスク	なし

- SQL Serverを使用して、すべてのデータベースのバックアップを作成します。

買掛金データの処理

アップグレード時には、〈支払グループの処理〉アプリケーション(P04571)を使用して、すべての買掛金処

理をリセットまたは完了(書込みおよび更新)する必要があります。このタスクについては、会計部門または会計コンサルタントの支援を受けることができます。

注意

このタスクを正常に完了しないと、買掛金処理テーブルのデータが破損する原因になります。未完了の買掛金処理レコードがないかどうかを調べるには、自動支払処理 - 見出しテーブル(F04571)と自動支払処理 - 集計テーブル(F04572)が空であることを確認します。

ソフトウェア要件とハードウェア要件の確認

各種のオペレーティング・システムおよびサーバー上でリリース8.9を実行するには、ハードウェアとソフトウェアについて最小要件を満たす必要があります。デプロイメント・サーバー、エンタープライズ・サーバー、およびワークステーションがハードウェア要件とソフトウェア要件を満たしているかどうかを確認してください。

ハードウェア/ソフトウェアの製造元は製品を常にアップデートしており、ソフトウェア要件とハードウェア要件も急速に変化するため、このガイドでは要件を説明していません。リリース8.9を実行するための最新のソフトウェア要件とハードウェア要件については、Knowledge Gardenで、[KG] - [Product] - [J.D. Edwards 5] - [Minimum Technical Requirements]の順にクリックしてアクセスしてください。

注意

Knowledge Gardenの[Update Center(アップデート・センター)]から最新のプランナESUをダウンロードしてインストールしていることを確認してください。最新のプランナESUがインストールされていないと、ソフトウェアを正常にインストールできない場合があります。

リリース8.9のディスク容量要件の確認

次の表を参考にして、デプロイメント・サーバー上とエンタープライズ・サーバー上でリリース8.9ソフトウェアに必要なディスク容量を計算してください。必要なディスク容量はデータベースに応じて異なります。単位はギガバイト(GB)です。

容量要件は、単一ドライブに必要な使用可能容量です。正しい容量でも、単一ドライブ上で使用可能でなければ容量不足になります。

このセクションに示す数値はすべて概算です。

デプロイメント・サーバーのディスク容量要件

説明	サイズ(GB)	必要な空き容量
プランナおよびその他のオブジェクト	4.76 GB	
データベースのエクスポート	Oracle: 2.42 GB SQL Server: 2.14 GB DB2 UDB: 2.23 GB	
プロトタイプ・パス・コード	8.9 GB*	

説明	サイズ(GB)	必要な空き容量
開発パス・コード	8.9 GB*	
プリスティン(JDEオリジナル)パス・コード	8.9 GB*	
本稼働用パス・コード	8.9 GB*	
その他のパス・コード	8.9 GB*	
小計		

- * 各パス・コードのサイズには、フル・パッケージ2つ分のスペースが含まれています。フル・パッケージに必要な空き容量は、約4.1GBです。

エンタープライズ・サーバーのディスク容量要件

次の表を参考に使用して、エンタープライズ・サーバー・データベースに必要な空き容量の量を計算してください。データ・ソースとパス・コードの合計に基づく必要な空き容量は、次のとおりです。

説明	サイズ	必要な空き容量
システム・ディレクトリ	108 MB	
プリスティン・パス・コード・ディレクトリおよび対応するパッケージ	3.4 GB	
本稼働用パス・コード・ディレクトリおよび対応するパッケージ	3.4 GB	
プロトタイプ・パス・コード・ディレクトリおよび対応するパッケージ	3.4 GB	
開発パス・コード・ディレクトリおよび対応するパッケージ	3.4 GB	
その他のパス・コード・ディレクトリおよび対応するパッケージ	3.4 GB	
小計		

- * 各パス・コードのサイズには、フル・パッケージ2組分のスペースが含まれています。フル・パッケージに必要な空き容量は、約4.1GBです。

Oracleデータベース

説明(データ・ソース)	Oracle (MB)	必要な空き容量
システム・テーブル(System - B9)	70	
サーバー・マップ・テーブル (machinename - B9 Server Map)	30	
オブジェクト・ライブラリアン・テーブル(Object Librarian - B9)	135	
データ辞書テーブル(Data Dictionary - B9)	170	

説明(データ・ソース)	Oracle (MB)	必要な空き容量
本稼働用データ(Business Data - PROD)	850	
プリスティン・データ(Business Data - JDE)	850	
プロトタイプ・データ(Business Data - CRP)	850	
テスト・データ(Business Data - TEST)	850	
本稼働用コントロール・テーブル(Control Tables - Prod)	166	
プロトタイプ用コントロール・テーブル(Control Tables - CRP)	166	
テスト用コントロール・テーブル(Control Tables - Test)	166	
プリスティン・パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - JD9)	5.1GB	
本稼働パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - PD9)	5.1GB	
プロトタイプ・パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - PY9)	5.1GB	
開発パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - DV9)	5.1GB	
その他のパス・コード用セントラル・オブジェクト	5.1GB	
小計		

合計には、各パス・コード・ライブラリ、IFSスペック・ファイルのバージョン・ライブラリ用の容量が含まれません。このライブラリはすでに存在しているので、追加容量は不要です。

SQL Serverデータベース

データベース名	データ・ソース	SQL Server	必要な空き容量
JDE9	System - B9 Object Librarian - B9 Data Dictionary - B9 machinename - B9 Server Map (machinenameはエンタープライズ・サーバー)	440 MB	
JDE_PY9	Central Objects - PY9 Versions - PY9	3.6 GB	
JDE_CRP	Control Tables - CRP Business Data - CRP	800 MB	
JDE_JD9	Central Objects - JD9 Versions - JD9	3.6 GB	
JDE_PRISTINE	Business Data - JDE Control Tables - JDE	800 MB	
JDE_PD9	Central Objects - PD9 Versions - PD9	3.6 GB	
JDE_PRODUCTION	Business Data - PROD	800 MB	

データベース名	データ・ソース	SQL Server	必要な空き容量
	Control Tables - Prod		
JDE_DV9	Central Objects - DV9 Versions - DV9	3.6 GB	
JDE_DEVELOPMENT	Business Data - TEST Control Tables - Test	800 MB	

注意

別々のデータベースがある場合は、ODBCデータ・ソースをそれぞれに応じてセットアップする必要があります。OneWorldデータ・ソースの場合は、ODBCデータ・ソースが正しいSQL Serverデータベースを指すようにセットアップする必要があります。ODBCは、インスタンスごとに1つです。

IBM DB2 UDBデータベース

データベース	データ・ソース	表スペースのタイプとサイズ
OWSH9	System、DD、OL、SVM	索引 256
		ロング 1 GB
		テーブル 563
	Central Objects、Versions PROD	索引 1.5 GB
		ロング 7.7 GB
		データ 1.3 GB
	Central Objects、Versions PRIST	索引 1.5 GB
		ロング 7.7 GB
		データ 1.3 GB
	Central Objects、Versions CRP	索引 1.5 GB
		ロング 7.7 GB
		データ 1.3 GB
Central Objects、Versions DEV	索引 1.5 GB	
	ロング 7.7 GB	
	データ 1.3 GB	

データベース	データ・ソース	表スペースのタイプとサイズ
OW_PRST	Business Data、Control – PRIST	索引 2.1 GB ロング 768 MB データ 3.2 GB
OW_DEV	Business Data、Control – TEST	索引 2.1 GB ロング 768 MB データ 3.2 GB
OW_PROD	Business Data、Control – PROD	索引 2.1 GB* ロング 768 MB* データ 3.2 GB*
OW_CRP	Business Data、Control – CRP	索引 2.1 GB* ロング 768 MB* データ 3.2 GB*

* 本稼働用/プロトタイプ・データに対処するために、必要サイズの見積りに基づいてコンテナ数を増やしてください。DB2 UDBでは、表スペースが自動拡張されないので注意してください。必要に応じてコンテナを追加する必要があります。

参照

- ・ サードパーティのODBCデータ・ソースの作成

言語インストールのディスク容量要件

注意

言語をインストールする前に、マシンに十分なディスク容量があることを確認してください。シングルバイト言語もダブルバイト言語も、容量要件は同じです。次の表は、1代替言語をロードするための所要量を示しています。

OneWorldマシン	必要な空き容量
デプロイメント・サーバー	500 MB
クライアント・ワークステーション	200 MB
データベース	
プリスティン・パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects – JD9)	600 MB

OneWorldマシン	必要な空き容量
本稼働パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - PD9)	600 MB
プロトタイプ・パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - PY9)	600 MB
開発パス・コード用セントラル・オブジェクト(Central Objects - DV9)	600 MB
小計	

サーバーのディスク領域のクリーンアップ

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバーまたはエンタープライズ・サーバーに、システム管理者としてサインオンします。
前提条件	エンタープライズ・サーバーのバックアップが作成されているかどうかと、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を確認します。
同時に行うタスク	なし

アップグレード前に、十分なディスク容量があるかどうかを確認する必要があります。一部のB733.xディレクトリを削除して、システム上の領域を増やすことができます。次の各表は、デプロイメント・サーバーとエンタープライズ・サーバーのB733.xディレクトリ構造を示しています。表内に太字で表示されているディレクトリは、削除できます。

並行リリースに関する考慮事項
推奨されているように並行環境を保守する場合と、十分なディスク容量がある場合は、B733.xディレクトリ構造全体をそのまま維持する必要があります。並行して実行するには、少なくともCLIENT、PLANNER/DATA、PLANNER/SPEC、pathcode、およびSYSTEMディレクトリ構造を維持する必要があります。

パス・コードに関する考慮事項
JD733xのパス・コード、またはその関連パッケージを使用する場合は、JD733xディレクトリ構造を削除しないでください。ただし、そのディレクトリが旧リリース用のプリスティン(オリジナル)オブジェクトのコピーにすぎない場合は、削除することができます。

参照

- ・ 「リリース8.9のハードウェア要件とソフトウェア要件」
- ・ 「リリース8.9のディスク容量要件」

デプロイメント・サーバーのディレクトリ構造

次の表に太字で表示されているディレクトリは、削除してかまいません。ただし、OneWorldソフトウェアの旧リリースを引き続き実行する場合は、MEDIA OBJとそのサブディレクトリを維持する必要があります。

ディレクトリ名	定義
PeopleSoft	

ディレクトリ名	定義
B733x	OneWorldのリリース・レベル
CLIENT	クライアント・インストール用のsetup.exeを格納
FONT	Arialフォント・ファイル
MISC	ワークステーション・インストール、Adobe Acrobat Reader、Internet Explorerブラウザ、およびシステム.DLLファイル用のJDE.INIファイル
ODBC	ODBC、Access 7.0ドライバ
SPEC	グローバル・テーブルのスペック
DATABASE	データベース・セットアップ・スクリプト
EXPORTS	
ORACLE	Oracleインポート・ファイルとSQL Serverスクリプト
NT	オブジェクト・ライブラリアンとセントラル・オブジェクトのロード用のNTバッチ・ファイル
UNIX	オブジェクト・ライブラリアンとセントラル・オブジェクトのロード用のUNIXスクリプト
SQLSRVR	SQL Serverのインポート・ファイルとスクリプト
NT	オブジェクト・ライブラリアンとセントラル・オブジェクトのロード用のWindows NTバッチ・ファイル
DATADICTIONARY	
UPGRADES	
ACCESS	Accessデータベース・テーブルの変換用バッチ・ファイル
ORACLE	Oracle用のその他のアップグレード・スクリプト
CENTRAL_OBJJS	セントラル・オブジェクト・テーブルの変換用Oracleスクリプト
CONTROL_TABLES	コントロール・テーブルの変換用Oracleスクリプト
OBJECT_LIB	オブジェクト・ライブラリアン・テーブルの変換用Oracleスクリプト
SYSTEM	システム・テーブルの変換用Oracleスクリプト
SQLSRVR	SQL Server用のその他のアップグレード・スクリプト

ディレクトリ名	定義
CENTRAL_OBJJS	セントラル・オブジェクト・テーブルの変換用SQL Serverスクリプト
CONTROL_TABLES	コントロール・テーブルの変換用SQL Serverスクリプト
OBJECT_LIB	オブジェクト・ライブラリアン・テーブルの変換用SQL Serverスクリプト
SYSTEM	システム・テーブルの変換用SQL Serverスクリプト
HELPS	オンライン・ヘルプ・ファイル
HOSTS	ホスト・スクリプトおよびプログラム
AS400	プラットフォーム固有のオブジェクトをインストールするまではJDE.INIおよびDATADICTファイルのみを格納
DECALPHA	プラットフォーム固有のオブジェクトをインストールするまではJDE.INIファイルのみを格納
HP 9000	プラットフォーム固有のオブジェクトをインストールするまではJDE.INIファイルのみを格納
INTELNT	プラットフォーム固有のオブジェクトをインストールするまではJDE.INIファイルのみを格納
RS6000	プラットフォーム固有のオブジェクトをインストールするまではJDE.INIファイルのみを格納
SNI	プラットフォーム固有のオブジェクトをインストールするまではJDE.INIファイルのみを格納
MEDIA OBJ(上述の注を参照。このディレクトリは、使用しない場合にのみ削除)	ランタイム用メディア・オブジェクト
COMPOSER	
HTML	
IMAGE	
VISIO	
DISTRIBUTION	
FINANCIALS	
HUMAN RESOURCES	

ディレクトリ名	定義
MANUFACTURING	
MISC	
MISC ANIMATIONS	
MISC IMAGES	
OLEQUE	
PLANNER	プランナ・パス・コード
BIN32	〈Installation Planner(インストール・プランナ)〉の.DLLファイル
DATA	プランニング用のOneWorldローカルのAccessデータベース
RES	アプリケーションのビットマップ・オブジェクト
ICONS	メニュー項目のアイコン
TREEBMP	メニュー項目のツリー・アイコンのビットマップ
SPEC	レプリケートされたローカル・オブジェクト
PRINTQUEUE	バッチ・アプリケーションの出力ファイル
PRISTB732	プリスティン・オブジェクト・パス
BIN32	アプリケーションとビジネス関数の.DLLファイル
INCLUDE	本稼働用のビジネス関数ヘッダー(.H)ファイル
LIB32	ビジネス関数のインポート・ライブラリ
MAKE	ビジネス関数の標準Visual C++プロジェクト・ファイル
OBJ	ビジネス関数用のオブジェクト・コード
PACKAGE	
DATA	ワークステーション用のOneWorldローカルのAccessデータベース
STDDEVL_A	開発者用パッケージ
STDPD_A	本稼働用パッケージ

ディレクトリ名	定義
RES	アプリケーションのビットマップ・オブジェクト
ICONS	メニュー項目のアイコン
TREEBMP	メニュー項目のツリー・アイコンのビットマップ
SOURCE	本稼働用ビジネス関数のソース
SPEC	レプリケートされたローカル・オブジェクト
WORK	ビジネス関数生成用のテンプレート・ファイル
SYSTEM	ツール・セット、ランタイム・エンジン、およびバッチ・エンジン用のオブジェクト
BIN32	システムの実行可能ファイルとDLLファイル
PB	PowerBuilderファイル
VB	Visual Basicファイル
CG	コード・ジェネレーターのテンプレート
INCLUDE	システムのインクルード・ファイル
INCLUDEV	サードパーティのインクルード・ファイル
LIB32	システムDLLファイルのインポート・ライブラリ
LIBV32	サードパーティのインポート・ライブラリ
LOCALE	各国対応文字セット
ICONV	
UCONVTAB	
MODELS	アプリケーションのデータ・モデル
LANGUAGE	OneWorld言語インストール用の言語名
DATADICTIONARY	英語と代替言語を含むデータ辞書スペック
FONT	Arialフォント
HELPS	圧縮されたヘルプ・ファイル(HELPS.JZ)

ディレクトリ名	定義
MISC	クライアント・インストール用のEXEおよびDLLファイル
ODBC	ODBCおよびAccess 7.0ドライバ
DRIVER MANAGER	
DRIVERS	
TRANSLATOR	
PLANNER	プランナ・パス・コード
DATA	Access言語データベース (FRENCH.MDBなど)

Intelのディレクトリ構造

注意

次の表のうち、Systemディレクトリを除き、使用しないパス・コードは削除してかまいません。並行リリースを実行する場合は、使用しないパス・コードに関連するディレクトリのみを削除してください。

ディレクトリ名	定義
B732	
LOG	JDE.INIファイル内でデバッグ・オプションが設定されている場合に、デバッグ情報が記録されるディレクトリ
PRINTQUEUE	構成可能な処理エンジン (バッチ・ジョブ) の出力ファイル
PRODB732	
BIN32	アプリケーションとビジネス関数の.DLLファイル
INCLUDE	本稼働用ビジネス関数のインクルード(.H)ファイル
LIB32	ビジネス関数のインポート・ライブラリ
OBJ	ビジネス関数用のオブジェクト・コード
CAEC	CAEC.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CALLSBSFN	CALLSBSFN.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト

ディレクトリ名	定義
CCORE	CCORE.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CDESIGN	CDESIGN.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CDIST	CDIST.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CFIN	CFIN.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CHRM	CHRM.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CMFG	CMFG.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
COBLIBvvv	COBLIB.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
JDBTRIG	JDBTRIG.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
SOURCE	ビジネス関数のソース
CAEC	CAEC.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CALLSBSFN	CALLSBSFN.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CCORE	CCORE.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CDESIGN	CDESIGN.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CDIST	CDIST.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CFIN	CFIN.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CHRM	CHRM.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
CMFG	CMFG.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
COBLIB	COBLIB.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
JDBTRIG	JDBTRIG.DLL用オブジェクト・ファイルのリスト
SPEC	レプリケートされたローカル・オブジェクト
SYSTEM	ツール・セット、ランタイム・エンジン、およびバッチ・エンジン用のオブジェクト
BIN32	システムの実行可能ファイル
INCLUDE	システムのインクルード・ファイル

ディレクトリ名	定義
MEMDEBUG	
INCLUDEDEV	サードパーティのインクルード・ファイル
LIB32	システム共有ライブラリ
LIBV32	サードパーティの共有ライブラリ
LOCALE	各国対応文字セット
ICONV	
UCONVTAB	

アップグレード詳細ワークシートへの記入

次ページ以降に掲載したワークシートを使用して、名前やパスワード、パス・コード、アップグレード・プロセス中に参照する他の重要情報を記入します。システム情報を記入し、アップグレード・プロセスの準備をした該当項目にチェックマークを記入してください。

次の表に、標準データ・ソースとデフォルトのプロトタイプをデータ・ソース・タイプ別に記入してください。それぞれの値については後で説明します。

値	説明
M	MSDE
O	Oracle
I	iSeries Access
L	SQL Server (OLEDB)
W	DB2 UDB

Oracle

ビジネス・データ

データ・ソース名	Business Data - PROD Business Data - CRP Business Data - TEST Business Data - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	B

プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PRODDTA CRPDTA TESTDTA PRISTDTA
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列
OCMデータ・ソース	ブランク

セントラル・オブジェクト

データ・ソース名	Central Objects - PD9 Central Objects - PY9 Central Objects - DV9 Central Objects - JD9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	C
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PD9 PY9 DV9 JD9
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列
OCMデータ・ソース	ブランク

コントロール・テーブル

データ・ソース名	Control Tables - Prod Control Tables - CRP Control Tables - Test Control Tables - JDE
データ・ソースの用途	DB

データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	T
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PRODCTL CRPCTL TESTCTL PRISTCTL
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列
OCMデータ・ソース	ブランク

データ辞書

データ・ソース名	Data Dictionary - B9 Data Dictionary - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	D
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	DD9 PRISTCTL
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列
OCMデータ・ソース	ブランク

オブジェクト・ライブラリアン

データ・ソース名	Object Librarian - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	O
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	OL9
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列
OCMデータ・ソース	ブランク

サーバー・マップ

データ・ソース名	machinename - B9 Server Map
データ・ソース名	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	H
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database
オブジェクト所有者ID	SVM9
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列

システム

データ・ソース名	System - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	S
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	SY9
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列

バージョン

データ・ソース名	Versions - PD9 Versions - PY9 Versions - DV9 Versions - JD9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	O
データ・クラス	V
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PD9 PY9 DV9 JD9
データベース名(TNS)	データベース用の接続文字列

OCMデータ・ソース	ブランク
------------	------

SQL Server

ビジネス・データ

データ・ソース名	Business Data - PROD Business Data - CRP Business Data - TEST Business Data - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	B
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PRODDTA CRPDTA TESTDTA PRISTDTA
データベース名	JDE_PRODUCTION JDE_CRP JDE_DEVELOPMENT JDE_PRISTINE
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合はブランク)
OCMデータ・ソース	ブランク

セントラル・オブジェクト

データ・ソース名	Central Objects - PD9 Central Objects - PY9 Central Objects - DV9 Central Objects - JD9
データ・ソースの用途	DB

データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	C
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PD9 PY9 DV9 JD9
データベース名	JDE_PD9 JDE_PY9 JDE_DV9 JDE_JD9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合は 空白)
OCMデータ・ソース	空白

コントロール・テーブル

データ・ソース名	Control Tables - Prod Control Tables - CRP Control Tables - Test Control Tables - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	T
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PRODCTL CRPCTL TESTCTL PRISTCTL
データベース名	JDE_PD9 JDE_PY9

	JDE_DV9
	JDE_JD9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合は 空白)
OCMデータ・ソース	空白

データ辞書

データ・ソース名	Data Dictionary - B9
	Data Dictionary - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	D
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	DD9
	PRISTCTL
データベース名	JDE9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合は 空白)
OCMデータ・ソース	空白

オブジェクト・ライブラリアン

データ・ソース名	Object Librarian - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	O
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	OL9
データベース名	JDE9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス(デフォルト・インスタンスの場合は 空白)
OCMデータ・ソース	空白

サーバー・マップ

データ・ソース名	machinename - B9 Server Map
----------	-----------------------------

データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	H
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database
オブジェクト所有者ID	SVM9
データベース名	JDE9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合は ブランク)

システム

データ・ソース名	System - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	S
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	SY9
データベース名	JDE9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合は ブランク)

バージョン

データ・ソース名	Versions - PD9 Versions - PY9 Versions - DV9 Versions - JD9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	L
データ・クラス	V
プラットフォーム	NTSVR
データベース・サーバー名	database server
オブジェクト所有者ID	PD9 PY9 DV9

	JD9
データベース名	JDE_PD9 JDE_PY9 JDE_DV9 JDE_JD9
データベース・インスタンス	SQL Serverのインスタンス名(デフォルト・インスタンスの場合は ブランク)
OCMデータ・ソース	ブランク

UDB

ビジネス・データ

データ・ソース名	Business Data - PROD Business Data - CRP Business Data - TEST Business Data - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	B
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	PRODDTA CRPDTA TESTDTA PRISTDTA
データベース・エイリアス名	JDE_PROD JDE_CRP JDE_DEV JDE_PRST
ODBCデータ・ソース名	JDE_PROD JDE_CRP

	JDE_DEV
	JDE_PRST
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

セントラル・オブジェクト

データ・ソース名	Central Objects - PD9 Central Objects - PY9 Central Objects - DV9 Central Objects - JD9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	C
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	PD9 PY9 DV9 JD9
データベース・エイリアス名	JDE9
ODBCデータ・ソース名	JDE9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

コントロール・テーブル

データ・ソース名	Control Tables - Prod Control Tables - CRP Control Tables - Test Control Tables - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	T

プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	PRODCTL CRPCTL TESTCTL PRISTCTL
データベース・エイリアス名	JDE_PD9 JDE_PY9 JDE_DV9 JDE_JD9
ODBCデータ・ソース名	JDE_PD9 JDE_PY9 JDE_DV9 JDE_JD9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

データ辞書

データ・ソース名	Data Dictionary - B9 Data Dictionary - JDE
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	D
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	DD9 PRISTCTL
データベース・エイリアス名	JDE9
ODBCデータ・ソース名	JDE9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

オブジェクト・ライブラリアン

データ・ソース名	Object Librarian - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	O
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	OL9
データベース・エイリアス名	JDE9
ODBCデータ・ソース名	JDE9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

サーバー・マップ

データ・ソース名	machinename - B9 Server Map
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	H
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database
スキーマ	SVM9
データベース・エイリアス名	JDE9
ODBCデータ・ソース名	JDE9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

システム

データ・ソース名	System - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	S
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	SY9
データベース・エイリアス名	JDE9
ODBCデータ・ソース名	JDE9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

バージョン

データ・ソース名	Versions - PD9 Versions - PY9 Versions - DV9 Versions - JD9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	W
データ・クラス	V
プラットフォーム	platform type
データベース・サーバー名	database server
スキーマ	PD9 PY9 DV9 JD9
データベース・エイリアス名	JDE9
ODBCデータ・ソース名	JDE9
OCMデータ・ソース	ブランク
LOBデータ・タイプのサポート	Y

MSDE

OneWorld言語

データ・ソース名	OneWorld Language - B9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	M
データ・クラス	L
プラットフォーム	LOCAL
データベース・サーバー名	(ローカル)
オブジェクト所有者ID	DBO
データベース名	JDELanguage_LanguageCode
データベース・インスタンス	JDELocal
OCMデータ・ソース	ブランク

OneWorld言語更新

データ・ソース名	OneWorld SU - UpdateName_LanguageCode
----------	---------------------------------------

データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	M
データ・クラス	L
プラットフォーム	LOCAL
データベース・サーバー名	(ローカル)
オブジェクト所有者ID	DBO
データベース名	JDELanguage_LanguageCode
データベース・インスタンス	JDELocal
OCMデータ・ソース	ブランク

OneWorld Local

データ・ソース名	OneWorld Local - PD9 OneWorld Local - PY9 OneWorld Local - DV9 OneWorld Local - JD9
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	M
データ・クラス	L
プラットフォーム	LOCAL
データベース・サーバー名	(ローカル)
オブジェクト所有者ID	DBO
データベース名	JDELocal_PD9 JDELocal_PY9 JDELocal_DV9 JDELocal_JD9
データベース・インスタンス	JDELocal
OCMデータ・ソース	ブランク

OneWorld Local更新

データ・ソース名	OneWorld SU - UpdateName
データ・ソースの用途	DB
データ・ソースのタイプ	M
データ・クラス	L
プラットフォーム	LOCAL
データベース・サーバー名	(ローカル)

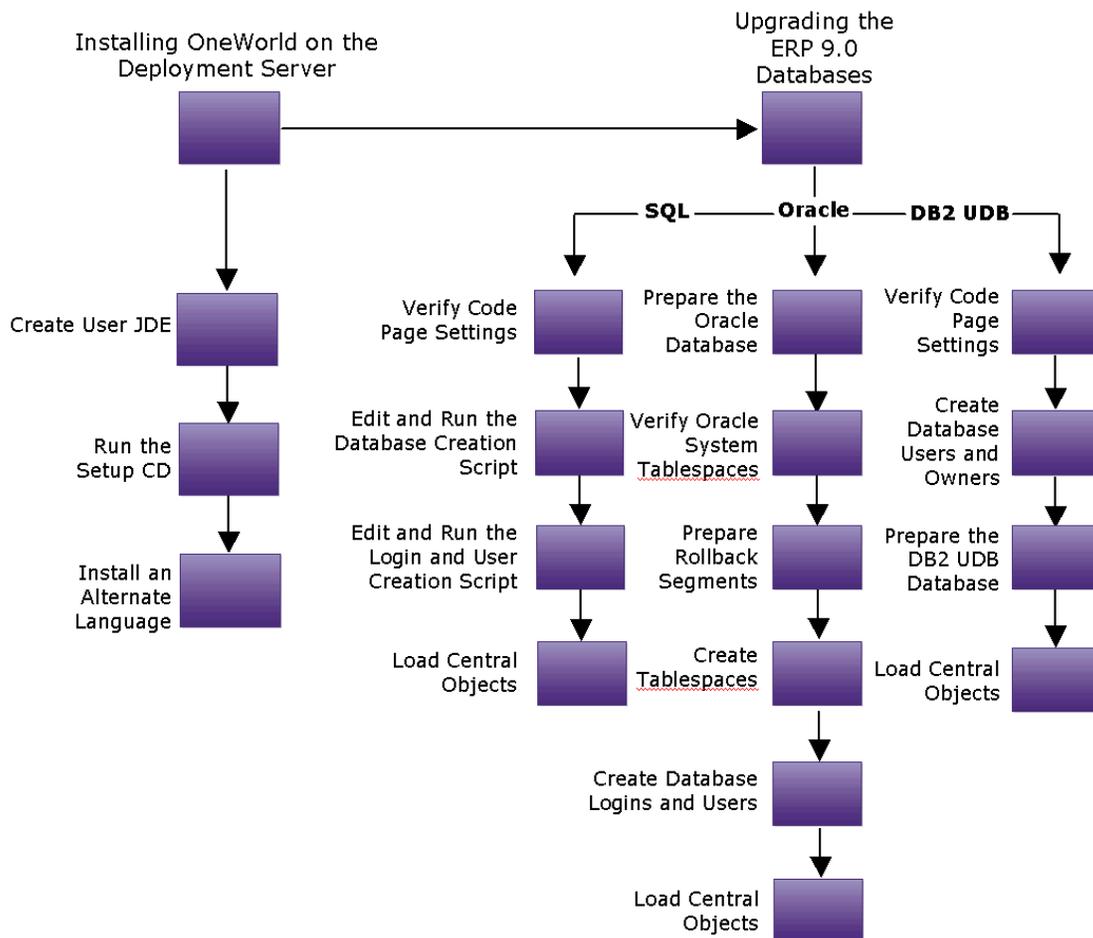
オブジェクト所有者ID	DBO
データベース名	UpdateName
データベース・インスタンス	JDELocal
OCMデータ・ソース	ブランク

デプロイメント・サーバーのインストール

リリース8.9は、Windowsを実行するIntel Pentiumベースのデプロイメント・サーバー上に常駐します。リリース8.9のインストールおよびアップグレード・プログラムを実行すると、インストール・プランを作成/保守してリリース8.9をエンタープライズ・サーバーとワークステーションに配布させることができます。インストール・プログラムを実行するとリリース8.9がデプロイメント・サーバーにロードされ、指示に従ってセントラル・オブジェクト(スペック)テーブルをOracle、SQL Server、UDB、またはiSeries DB2データベースにロードできます。

次のフロー・チャートは、デプロイメント・サーバーのインストールプロセスの概要を示しています。

Installing The Deployment Server



デプロイメント・サーバーのインストール・プロセスは、次のとおりです。

- ・ リリース8.9 CDからオブジェクトをインストールします。
- ・ 選択に基づいてパス・コードのディレクトリ構造(JD9やPD9など)を作成します。

- ・ エンタープライズ・サーバー用に次のようなディレクトリを作成します。
 - ・ iSeries
 - ・ Windows
 - ・ HP 9000
 - ・ RS/6000
 - ・ Sun Solaris
- ・ Windowsのレジストリを更新します。
- ・ ODBCデータ・ソースを作成します。

デプロイメント・サーバーへのリリース8.9のインストール

サポート構造の検証後に、リリース8.9をデプロイメント・サーバーにインストールします。

注意

デプロイメント・サーバーはローカルでインストールします。リモート・マシンからはインストールできません。

参照 〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉アプリケーションでの作業に必要な情報が記録される「アップグレード詳細ワークシート」

テーブル監査機能の無効化

テーブル監査機能を使用している場合は、アップグレード・プロセスの開始前に無効にする必要があります。この機能を無効にしないと監査対象のテーブルの一貫性が損なわれ、後でテーブルの回復が必要になることがあります。テーブル監査機能を無効にする操作については、『Auditing Administration Guide including 21 CFR Part 11 Administration for Release 8.9』を参照してください。アップグレードの完了後は、テーブル監査機能を有効に戻すことができます。

MSDEのインストールに関する考慮事項

MSDEはMicrosoft Accessに代わるデータベースであり、リリース8.9のデプロイメント・サーバーとクライアントに必須です。まだインストールしていない場合は、デプロイメント・サーバーのインストール・プロセス中にインストールされます。Microsoft AccessデータベースであるJDELocalとJDEPlanは、3つのMSDEデータベースJDELocal、JDEData、およびJDEPlanに置き換えられます。

SQL Server 2000 Client ToolsまたはEnterprise Managerがインストールされている場合は、Microsoftで既に判明している問題が原因でデプロイメント・サーバーをインストールできません。この障害は、MSDEコンポーネントがSQL Server 2000データベースと同じDLLを使用していることによるものです。この障害を回避するには、次の手順で操作します。

1. マシン上で次のファイルを検索します。
 - ・ Semnt.rll
 - ・ Sqlsvc.rll
 - ・ Semnt.dll
 - ・ Sqlsvc.dll
 - ・ Sqlresld.dll
2. これらのファイルの拡張子.rllおよび.dllを、それぞれ.rldおよび.dldに変更します。
3. デプロイメント・サーバーのインストールを続行します。
4. デプロイメント・サーバーのインストール完了後に、拡張子.rldおよび.dldをそれぞれ.rllおよび.dllに戻します。

デプロイメント・サーバーの構成

リリース8.9をアップグレードする前に、デプロイメント・サーバーを構成する必要があります。次のタスクを完了してください。

- ・ システム管理者としてユーザーJDEを作成します。

▶ ユーザーJDEを作成するには

スタッフ	システム管理者
ログオン状況	デプロイメントサーバー上で、システム管理者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. デプロイメント・サーバーからシステム管理者としてログオンします。
2. [コントロール パネル]の[管理ツール]で、[コンピュータの管理]を選択します。
3. [ローカル ユーザーとグループ]で、パスワードJDEを指定してユーザーJDEを作成します。パスワードは、大文字と小文字が区別されます。
4. ユーザーJDEをAdministratorsグループに追加して、システム管理者権限を許可します。
5. プリンタが設定されていない場合は、該当するWindowsマニュアルとプリンタ・マニュアルを参照しながら作成してください。

印刷に関する考慮事項
デプロイメント・サーバーまたはワークステーションでプリンタ名を設定する場合は、リリース8.9で正常に処理されるように、30文字以内で指定する必要があります。

デプロイメント・サーバーのインストール

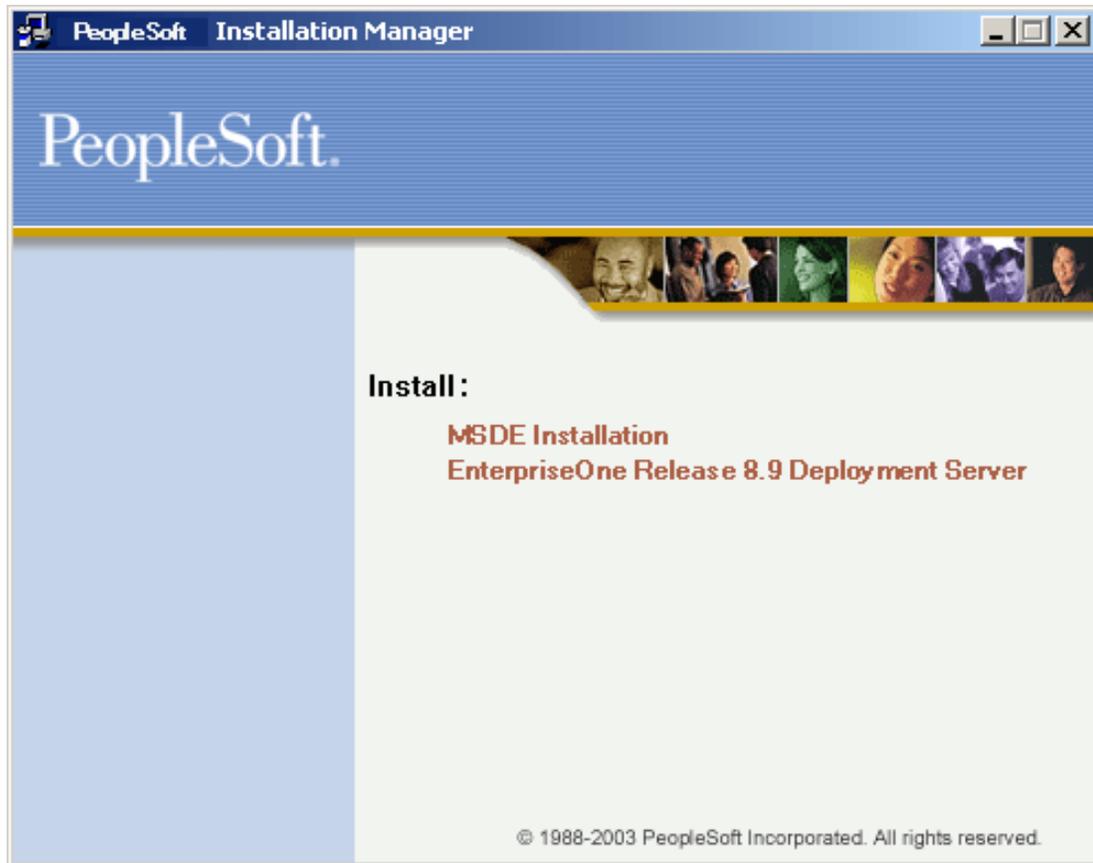
この処理では、4枚のCDからデプロイメント・サーバーにリリース8.9をインストールします。1枚目のCDではリリース8.9とパス・コード、2枚目のCDではDB2 UDB Serverのインポート・ファイル、3枚目のCDではOracleとSQL Serverのインポート・ファイルがインストールされます。4枚目のCDではヘルプ・ファイルがインストールされます。

はじめる前に インストール・プログラムを実行する前に、デプロイメント・サーバー上で実行されているプログラムのうち、DLLの競合を引き起こすと思われるもの (Microsoft SQL Services、Internet Explorer、またはAdobe Acrobat) はすべて終了しておいてください。これらのプログラムは、デプロイメント・サーバー上で2枚目のSetup (セットアップ) CDのインストールを完了した後で再起動できます。

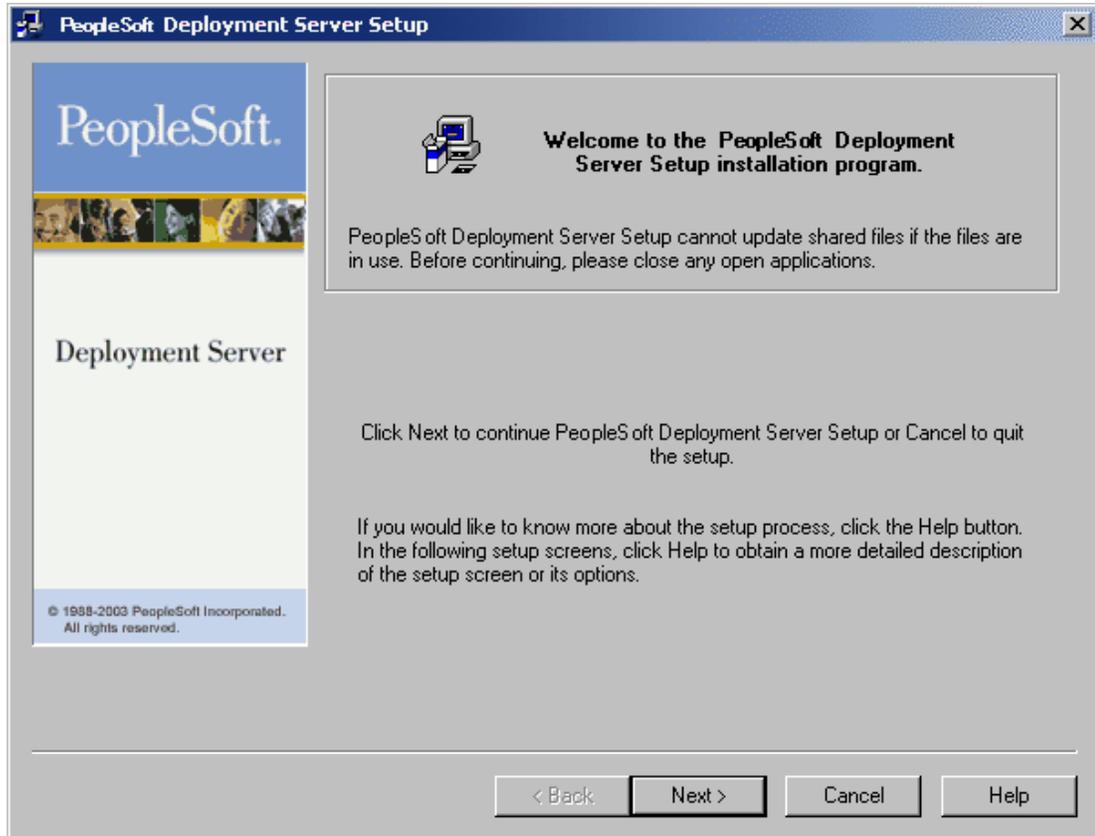
▶ オブジェクトをインストールするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメントサーバー上で、JDEとしてログオンします。
前提条件	ユーザーJDEを作成します。
同時に行うタスク	なし

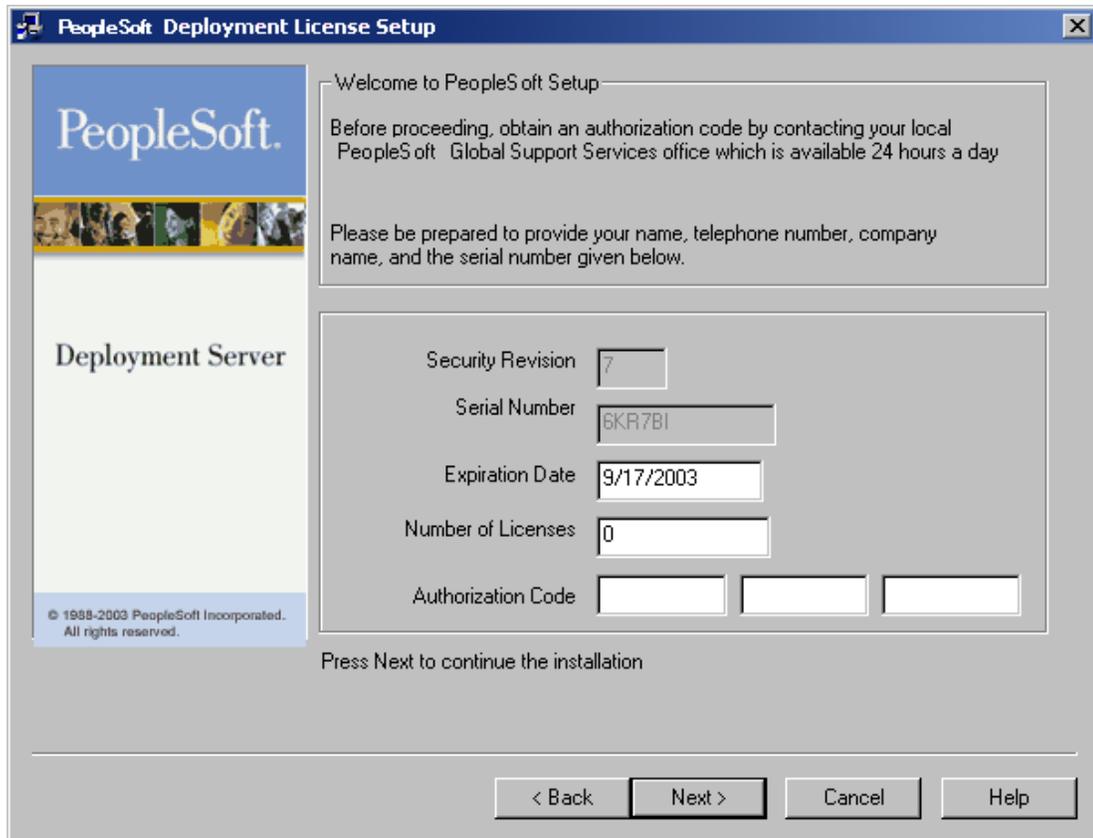
1. コンピュータにバージョン4.0より前のAdobe Acrobatがインストールされている場合は、デプロイメント・サーバーをインストールする前に、[コントロール パネル]で[アプリケーションの追加と削除]を使用して古いバージョンを削除します。
2. システム管理者権限でデプロイメント・サーバーにログオンします。
3. 1枚目のDeployment Server (デプロイメント・サーバー) CDをCDドライブに挿入します。セットアップが自動的に開始されます。



4. [MSDE]をクリックしてデータベースをインストールします。
5. <PeopleSoft Installation Manager>で、[EnterpriseOne Release 8.9 Deployment Server (EnterpriseOneリリース8.9デプロイメント・サーバー)]をクリックします。



6. 〈PeopleSoft Deployment Server Setup〉で、[Next(次へ)]をクリックします。



7. <PeopleSoft Deployment License Setup (PeopleSoftデプロイメント・ライセンスのセットアップ)>で、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Expiration Date (失効日付)

リリース8.9ソフトウェアの有効期限が切れる日付を入力します。この日付は、デプロイメント・サーバーだけでなくワークステーションにも適用されます。

- ・ Number of Licenses (ライセンス数)

権限コードに基づく許容インストール数を入力します。

- ・ Authorization Code (権限コード)

契約に基づいてリリース8.9ソフトウェアへのアクセスを許可するコードを入力します。

権限コードの取得の際は、PeopleSoftグローバル・サポート・サービス(800-289-2999)に連絡してください。お問い合わせの際は、次の情報を用意してください。

- ・ <Deployment License Setup>に表示されるシリアル番号

- ・ 契約書に記載されているライセンス数
- ・ その他、会社に関する情報

注意

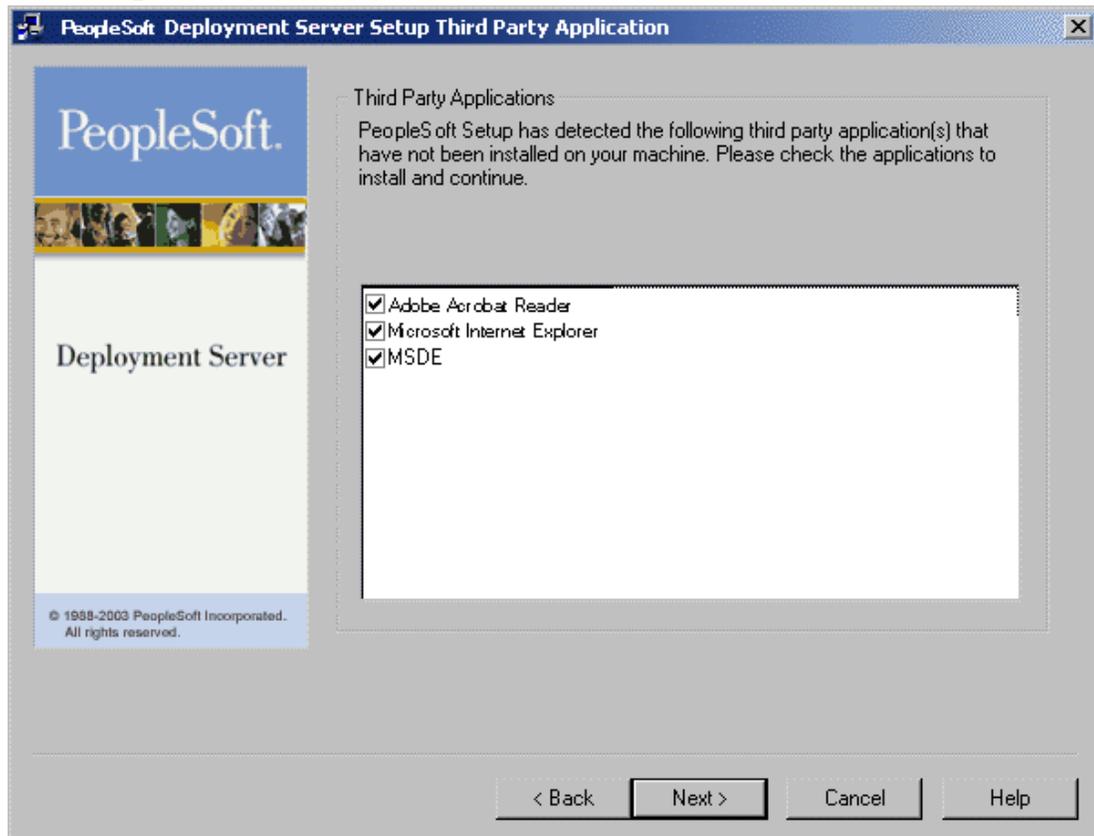
シリアル番号はセットアップ・プログラムを実行するたびに変わるため、新しい権限コードを取得する必要があります。権限コードを取得した後は、インストール・プログラムを停止してプログラムに戻らないでください。

デプロイメント・サーバーとワークステーションの権限コードを再検証するには、「ソフトウェア保護コードの再検証」を参照してください。

8. [Next]をクリックします。

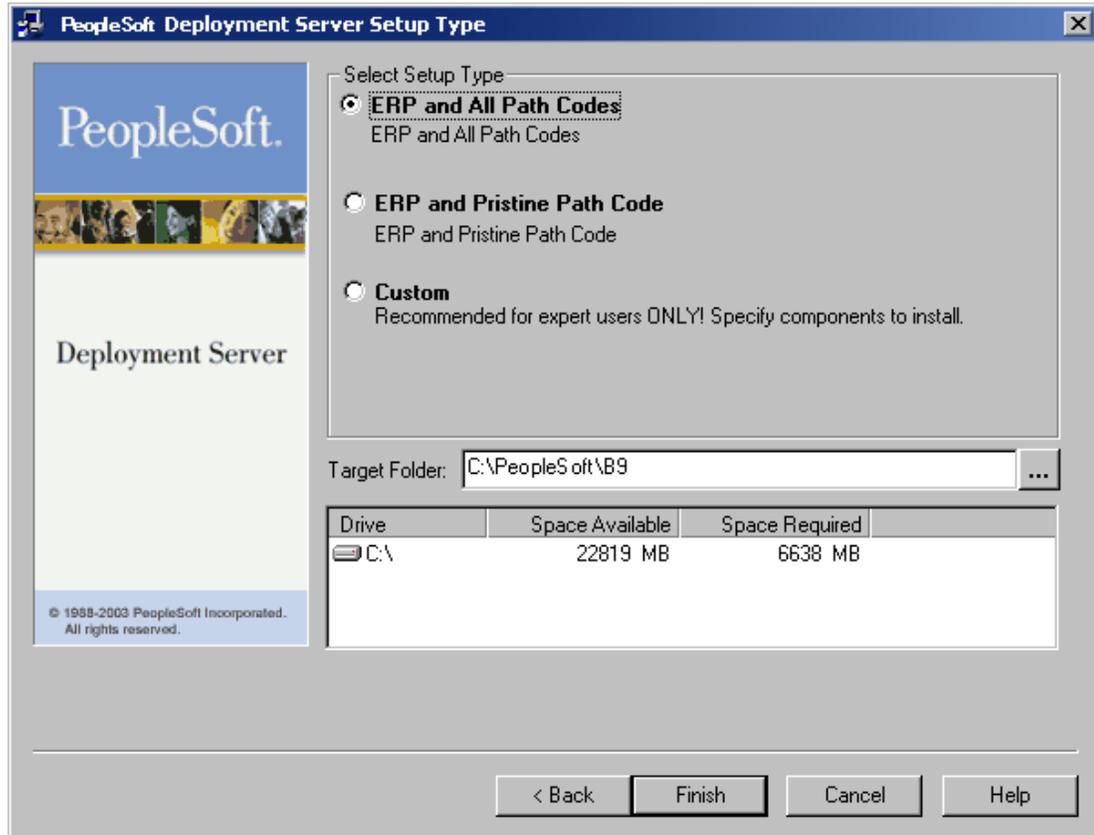
Microsoft Internet ExplorerまたはAdobe Acrobat Readerの最新バージョンがインストールされていない場合は、〈PeopleSoft Deployment Server Setup Third Party Application (PeopleSoftデプロイメント・サーバーのサードパーティ・アプリケーションのセットアップ)〉フォームが表示されます。これらのアプリケーションをインストールするオプションは有効になっています。

これらのアプリケーションがすべてインストールされていれば、次のフォームは表示されません。次のステップをスキップしてください。



9. [Next]をクリックします。

パッケージ・サイズが計算されます。この計算ステップには、数分かかります。



10. <PeopleSoft Deployment Server Setup Type (PeopleSoftデプロイメント・サーバーのセットアップ・タイプ)>で、次のセットアップ・タイプのオプションのうち1つを選択します。

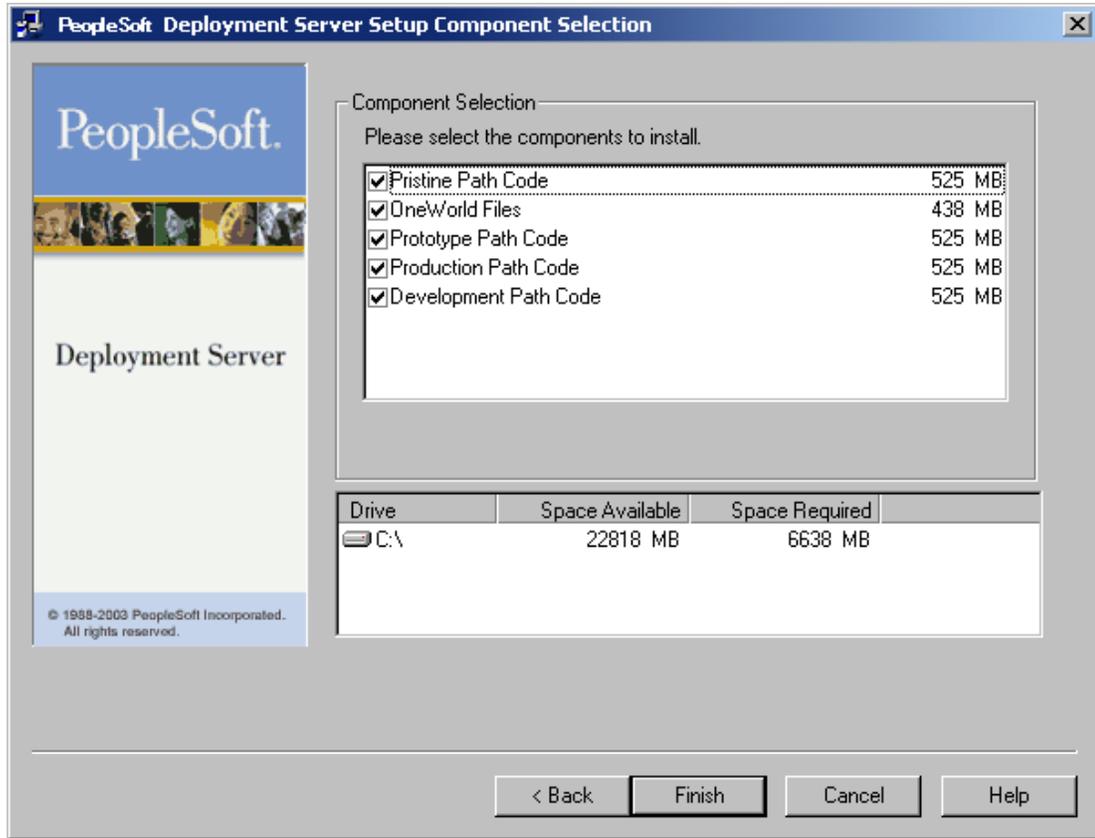
- ・ ERP and All Path Codes (ERPと全パス・コード)
- ・ ERP and Pristine Path Code (ERPとプリスティン・パス・コード)
- ・ Custom (カスタム)

11. [Target Folder (インストール先フォルダ)] フィールドに、デプロイメント・サーバー上でファイルのインストール先となるディレクトリを入力します。たとえば“c:\%PeopleSoft%”または“d:\%PeopleSoft%”と入力します。

指定したディレクトリが存在しない場合は、セットアップ・プログラムによって自動的に作成されます。

12. [Next] をクリックします。

セットアップ・タイプとして [Custom] 以外のオプションを選択した場合は、次のステップをスキップします。



13. <PeopleSoft Deployment Server Setup Component Selection (PeopleSoft デプロイメント・サーバーのセットアップ・コンポーネントの選択)> フォームで、正しいコンポーネントがインストールされるように確認して [Finish (終了)] をクリックします。

注意

リリース 8.9 ファイルにはシステム・ファイルが含まれており、インストールする必要があります。

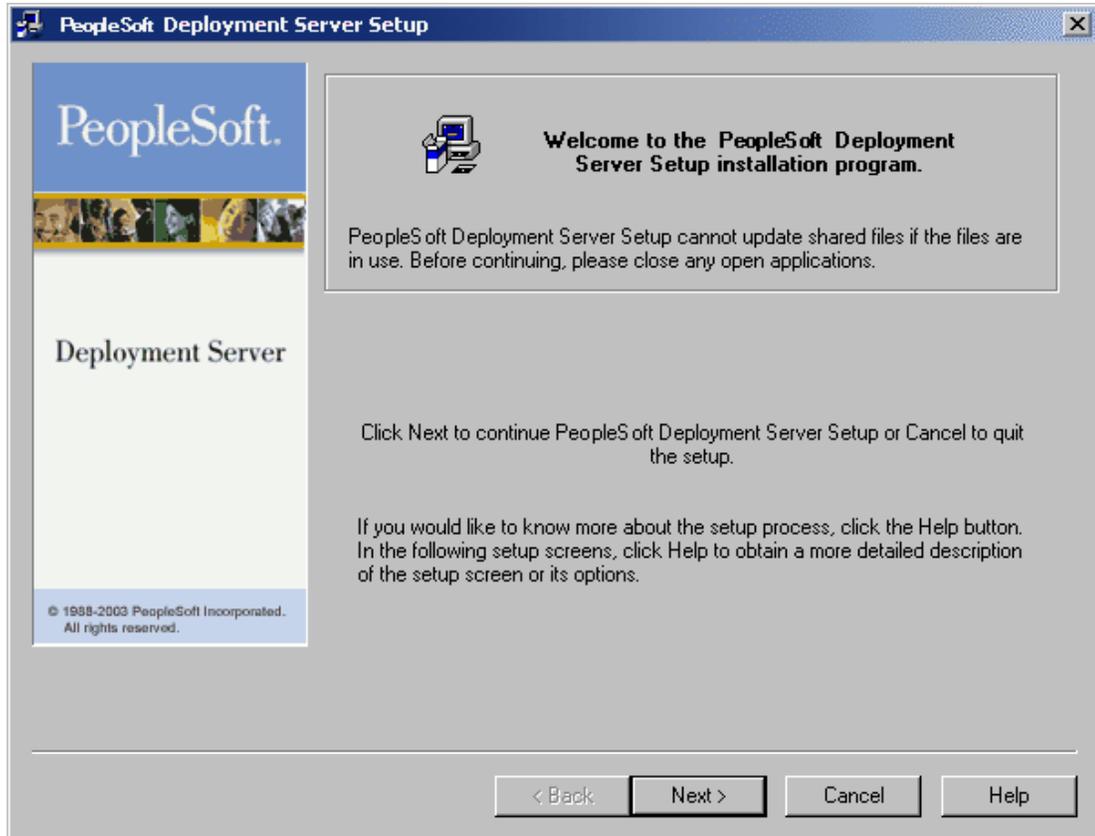
ファイルのロード状況を示す <Deployment Server Setup Progress (デプロイメント・サーバーのセットアップ進行状況)> フォームが表示されます。

14. プログラムの終了後に、インストールが正常に完了したかどうかを示すメッセージが表示されます。[OK] をクリックして <Installation Manager (インストール・マネージャ)> を終了します。
15. DB2 UDB の場合は、2 枚目の Deployment Server (デプロイメント・サーバー) CD を挿入します。Oracle と SQL Server の場合は、3 枚目の CD を挿入して [ステップ 23](#) [94] に進みます。

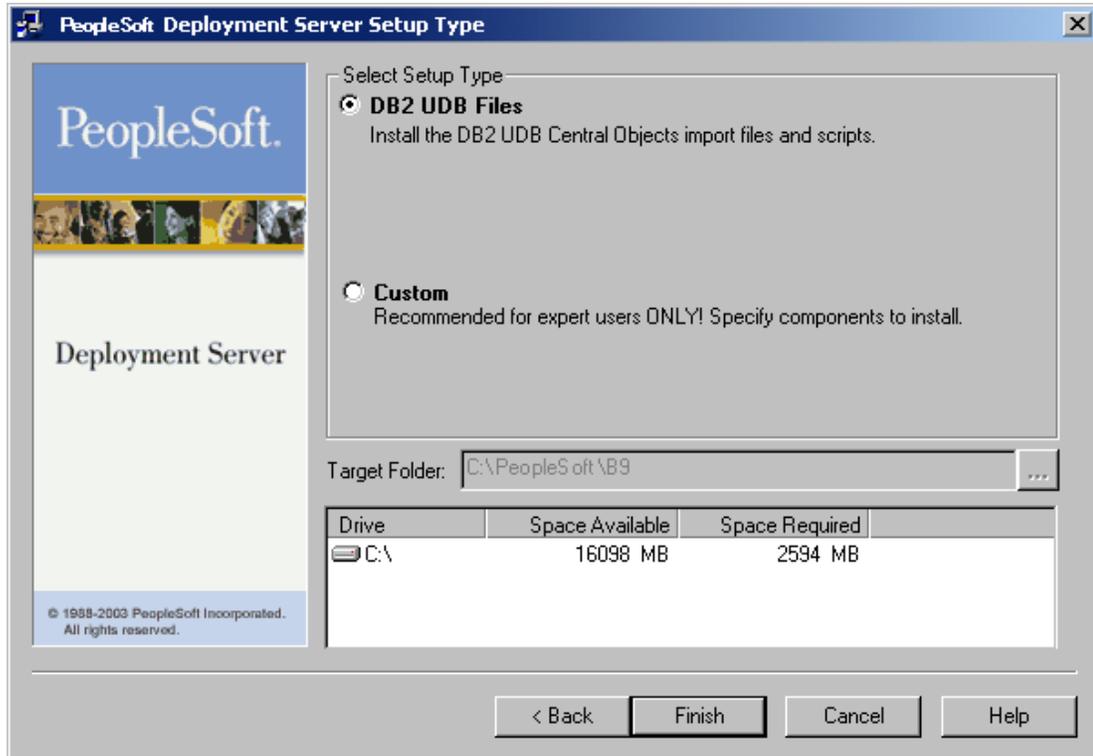
セットアップが自動的に開始されます。



16. <PeopleSoft Installation Manager>で、[EnterpriseOne Release 8.9 Deployment Server]をクリックします。



17. 〈PeopleSoft Deployment Server Setup〉で、[Next]をクリックします。
18. 〈PeopleSoft Deployment Server Setup Type〉フォームが表示されます。



19. 次のセットアップ・タイプ・オプションのうち1つを選択します。

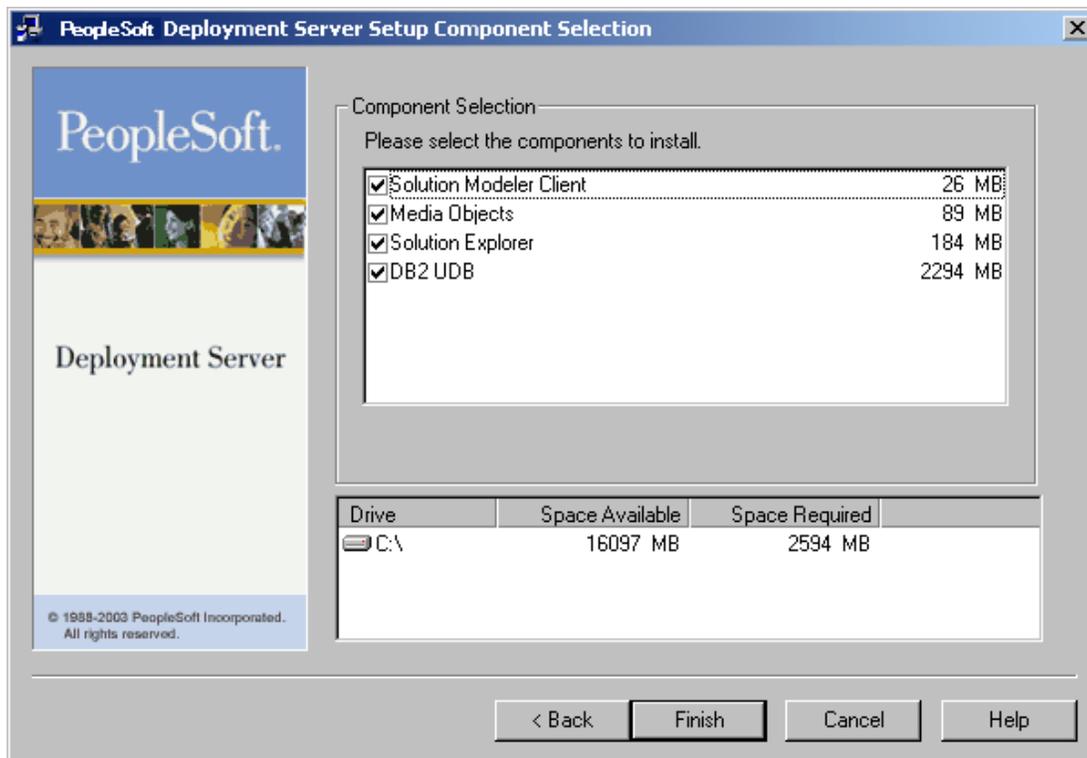
- ・ DB2 UDB Data Files (DB2 UDBデータ・ファイル)
- ・ Custom

20. [DB2 UDB Data Files]を選択した場合は、[Finish]をクリックします。

<PeopleSoft Deployment Server Setup>フォームにインストールが正常に完了したかどうかが表示されます。

21. [Custom]を選択した場合は[Next]をクリックします。

<PeopleSoft Deployment Server Setup Component Selection>フォームが表示されます。



22. インストールするコンポーネントを選択して[Finish]をクリックします。

〈PeopleSoft Deployment Server Setup〉フォームにインストールが正常に完了したかどうかが表示されます。

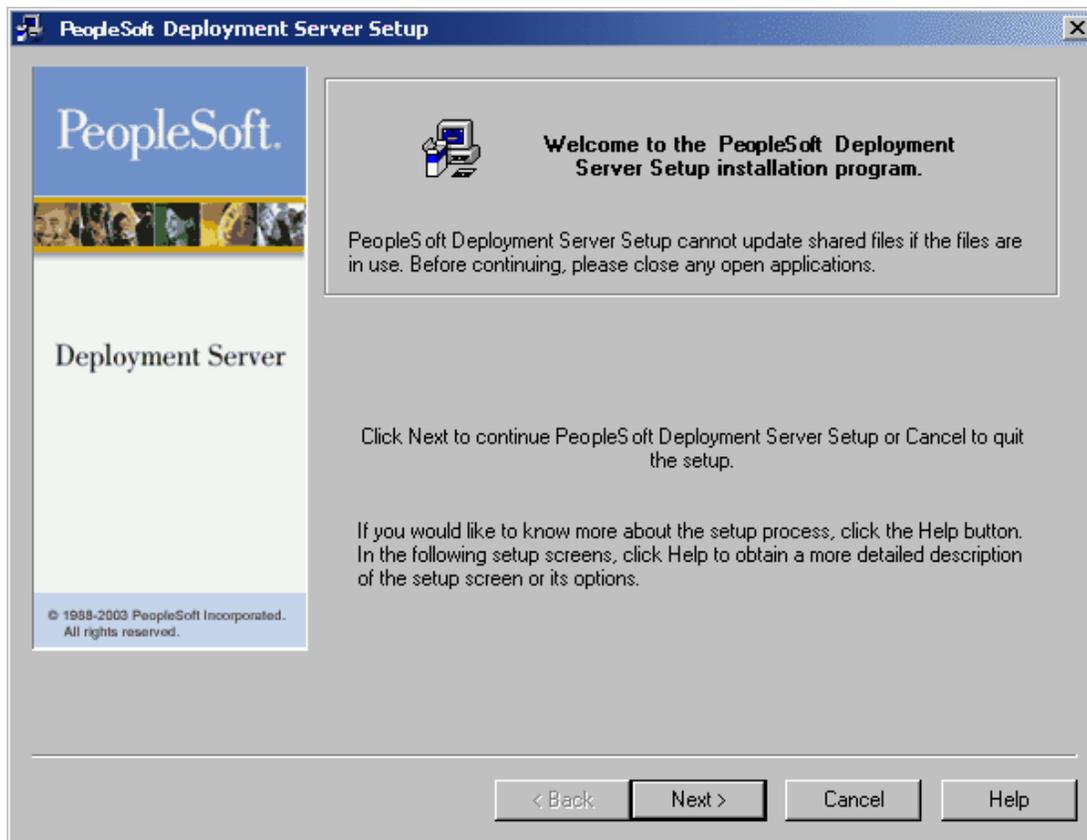
注意

セットアップを続行する前に、最新のサービス・パックとプランナ・アップデートをインストールしてください。

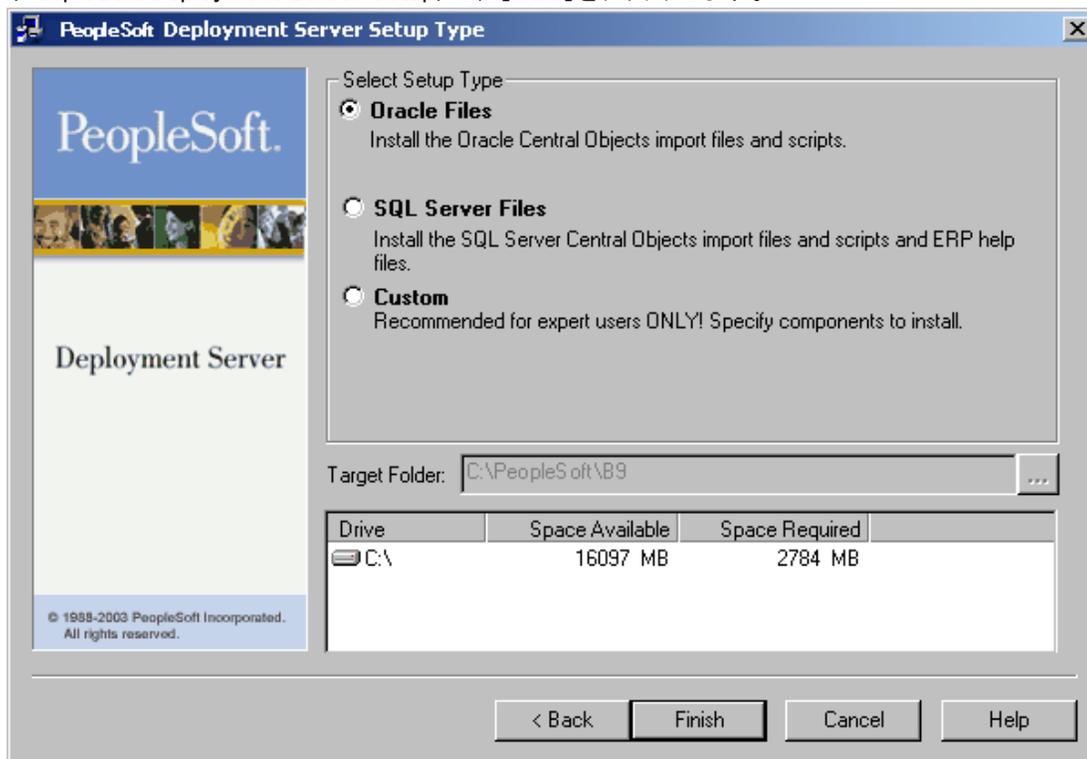
23. OracleまたはSQL Serverの場合は、3枚目のDeployment Server CD(デプロイメント・サーバーCD)を挿入します。セットアップが自動的に開始されます。



24. <PeopleSoft Installation Manager>で、[EnterpriseOne Release 8.9 Deployment Server]をクリックします。



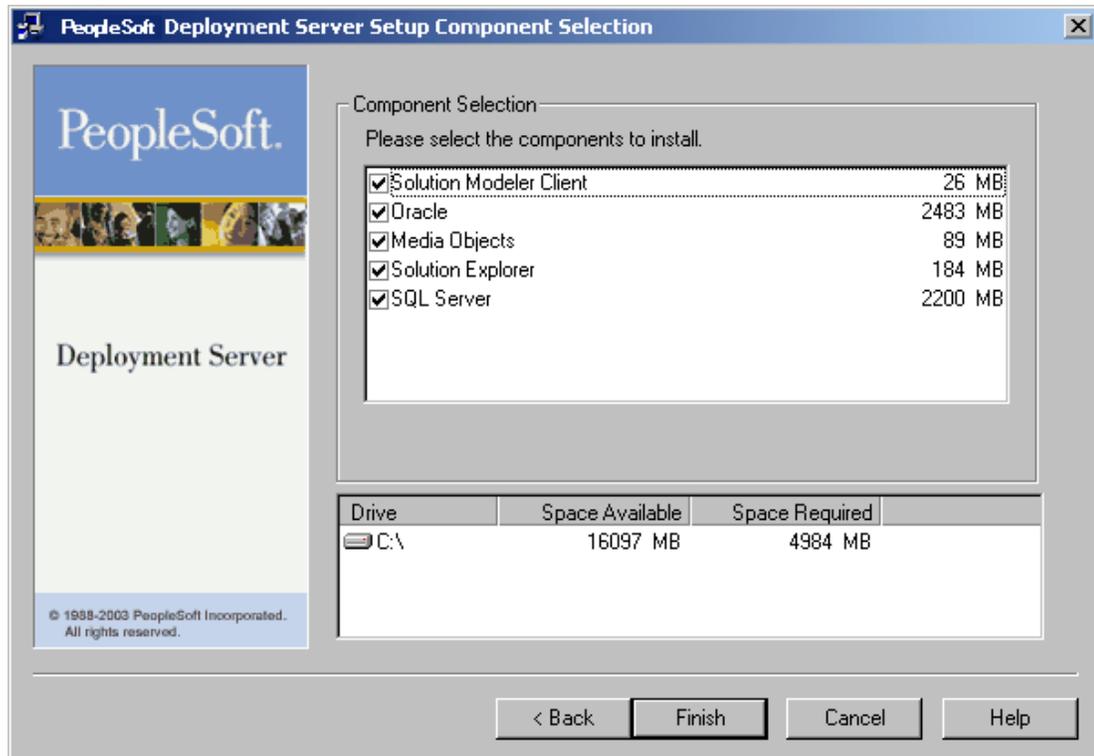
25. <PeopleSoft Deployment Server Setup>で、[Next]をクリックします。



26. 〈PeopleSoft Deployment Server Setup Type〉で、次のセットアップ・タイプのオプションのうち1つを選択します。

- ・ Oracle Data Files (Oracleデータ・ファイル)
- ・ SQL*Server Data Files (SQL*Serverデータ・ファイル)
- ・ Custom

27. [Next]をクリックします。



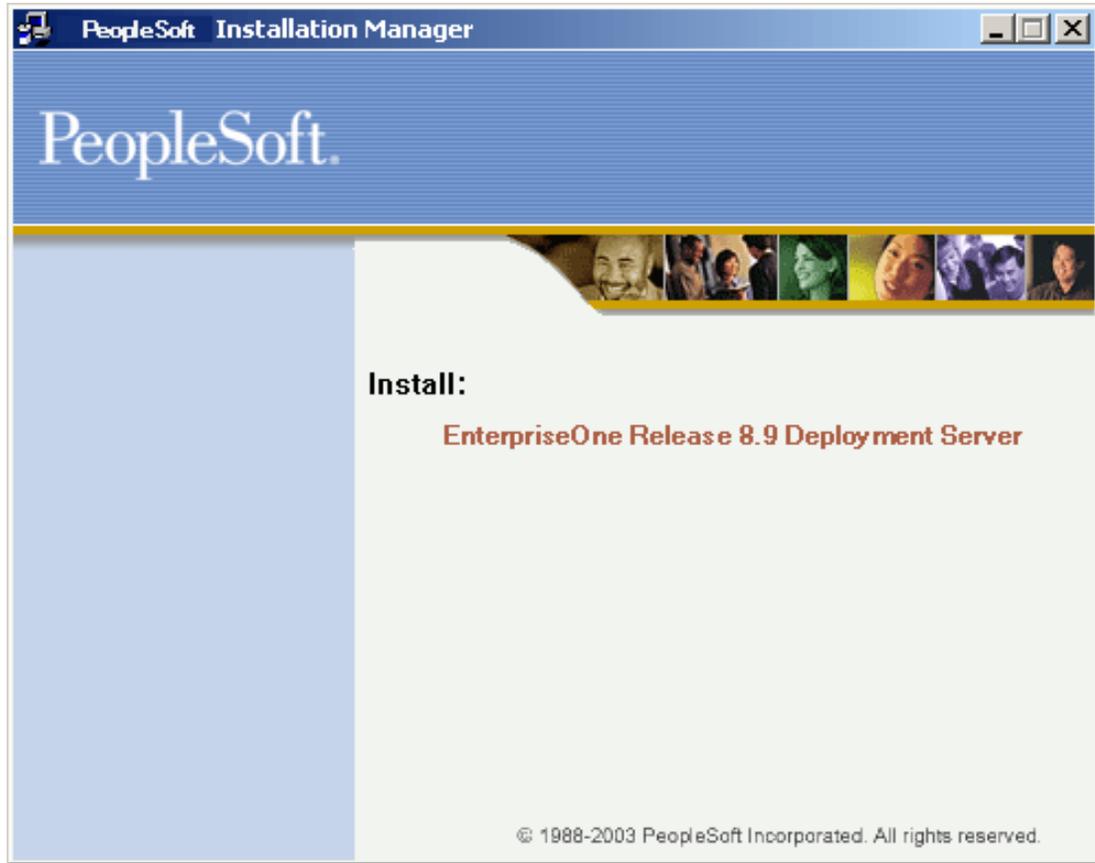
28. 〈PeopleSoft Deployment Server Setup Component Selection〉で、インストールするコンポーネントを選択して[Finish]をクリックします。

29. インストールの完了後に、〈PeopleSoft Deployment Server Setup〉フォームにインストールが正常に完了したかどうかが表示されます。

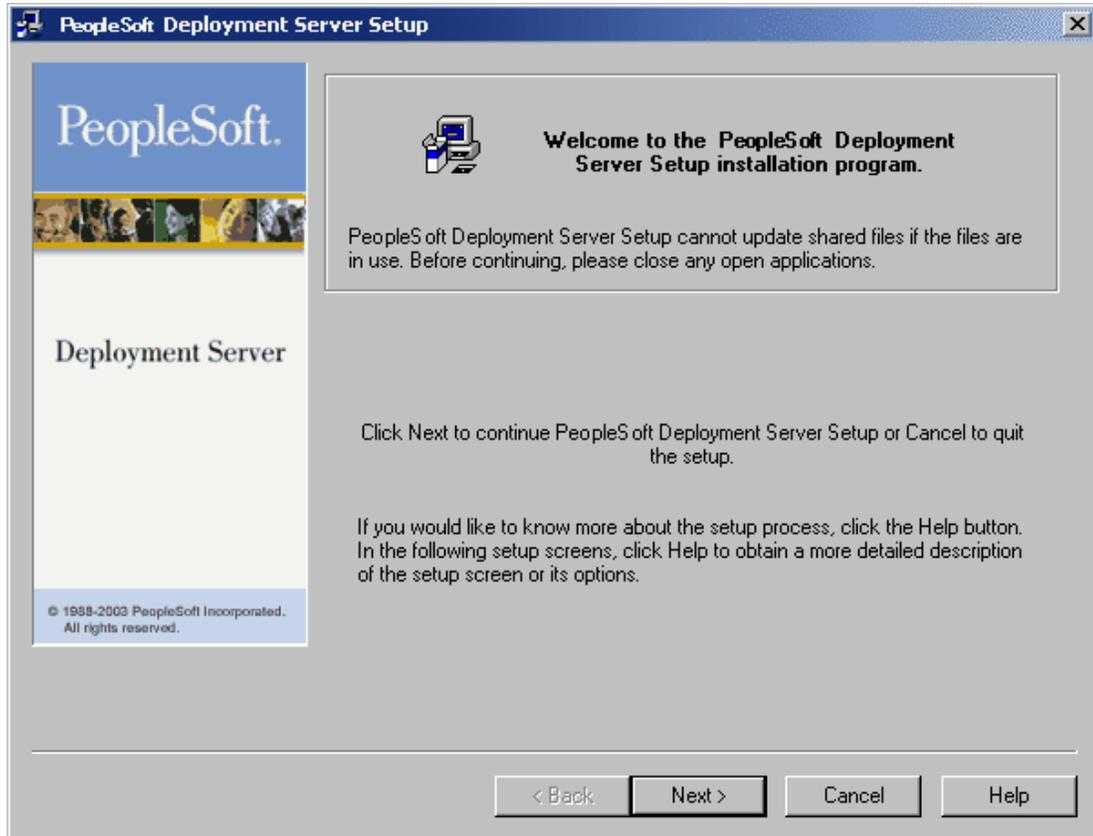
必要に応じて、コンピュータを再起動するようプロンプトが表示されます。

30. PATH環境変数を検証します。System環境変数にリリース8.9のPlanner¥bin32およびSystem¥bin32フォルダが追加されていることを確認します。System環境変数から、ERP 8.0とXeのPlanner¥bin32およびSystem¥bin32フォルダが削除されていることも確認します。

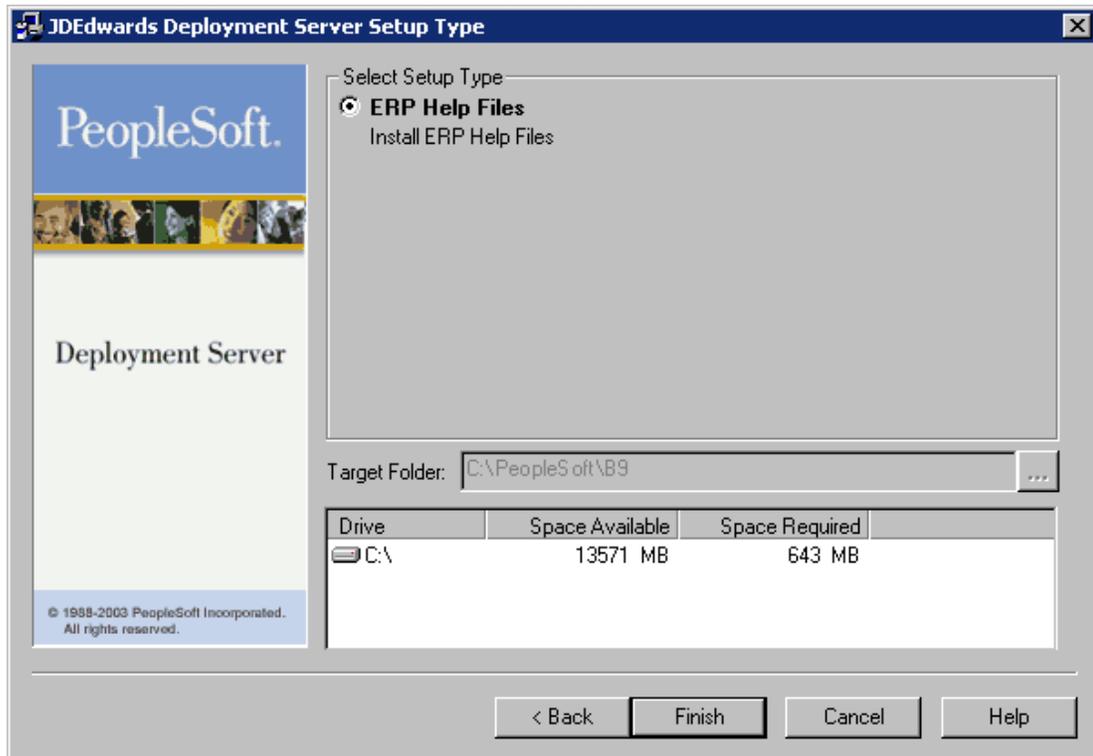
31. ヘルプ・ファイルの場合は、4枚目のDeployment Server (デプロイメント・サーバー) CDを挿入します。セットアップが自動的に開始されます。



32. <PeopleSoft Installation Manager>で、[EnterpriseOne Release 8.9 Deployment Server]をクリックします。



33. <PeopleSoft Deployment Server Setup>で、[Next]をクリックします。



34. [Finish]をクリックします。
35. インストールの完了後に、〈PeopleSoft Deployment Server Setup〉フォームにインストールが正常に完了したかどうかが表示されます。
必要に応じて、コンピュータを再起動するようプロンプトが表示されます。

最新ソフトウェアのダウンロードとインストール

アップグレードを続行する前に、Knowledge Gardenの[Update Center(アップデート・センター)]から最新のサービス・パック、サービス・パックのワンオフ、プランナ/テーブル変換のアップデートをダウンロードしてインストールする必要があります。

注意

次に示す順序で、サービス・パックとアップデートを適用してください。この順序は変更しないでください。

▶ サービス・パックおよびサービス・パックの最新のワンオフをインストールするには

1. Knowledge Gardenの[Update Center]のホームページからサービス・パック(SP1など)をダウンロードします。
2. インストール・プログラムを実行してサービス・パックをインストールします。
3. Knowledge Gardenの[Update Center]のホームページから、サービス・パックの最新のワンオフ(SP1_A1など)とドキュメンテーションをダウンロードします。
4. ドキュメンテーションを参照しながら、サービス・パックのワンオフをデプロイメント・サーバーにインストールします。

▶ 最新のプランナ・アップデートをインストールするには

1. Knowledge Gardenの[Update Center]のホームページから、最新のプランナ・アップデートをデプロイメント・サーバーにダウンロードします。
2. .EXEを実行し、画面に表示される指示に従ってプランナ・アップデートをデプロイメント・サーバーにインストールします。

▶ テーブル変換のアップデートをインストールするには

1. Knowledge Gardenの[Update Center]のホームページから、最新のテーブル変換のアップデートをデプロイメント・サーバーにダウンロードします。
2. .EXEを実行し、画面に表示される指示に従ってテーブル変換のアップデートをデプロイメント・サーバーにインストールします。

デプロイメント・サーバーへの代替言語のインストール

ここで説明する手順は、代替言語をインストールする場合にのみ実行してください。代替言語をインストールしない場合は、次のセクションに進んでください。

代替言語をデプロイメント・サーバーにインストールすると、次のタスクが実行されます。

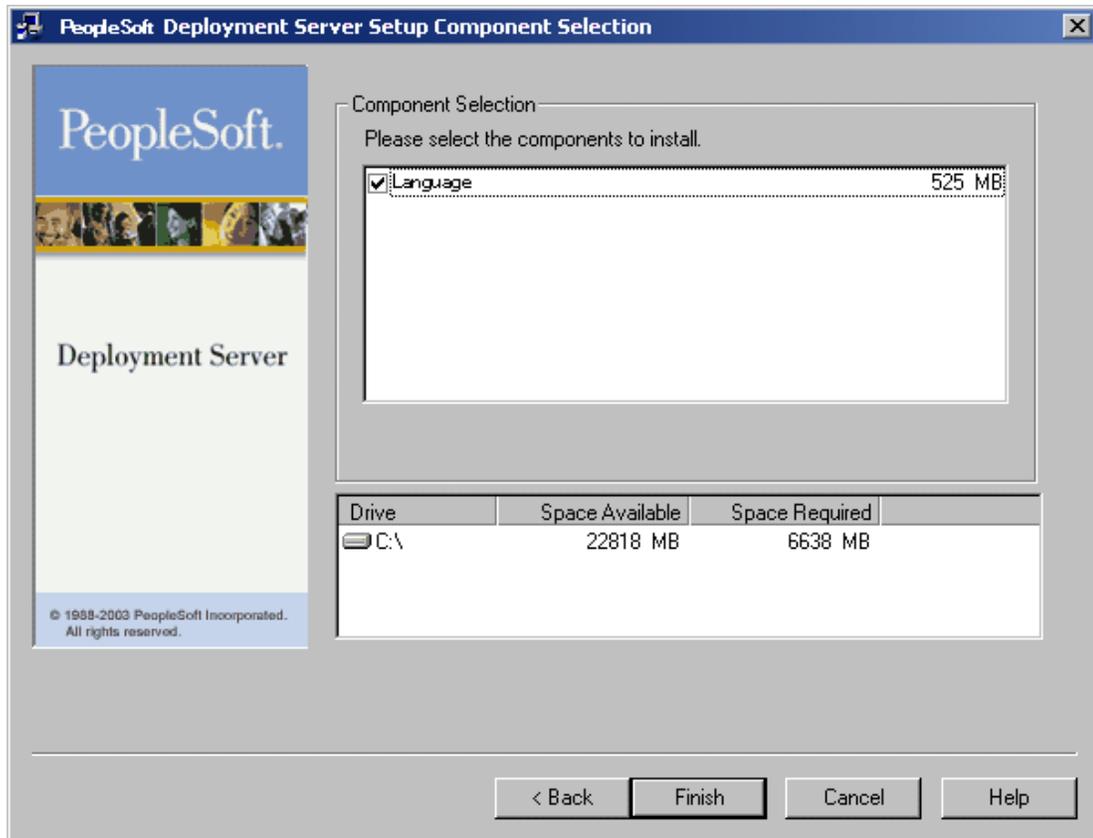
- ・ インストールする言語のlanguage.mdfファイルが/Planner/Dataディレクトリにコピーされます。MSDEデータベース名はJDELanguage_<Languagecode>です。
- ・ インストールする言語用のSolution Explorer Summaryファイルが、¥SolutionExplorer¥Data¥(Language Code)ディレクトリにコピーされます。
- ・ インストールする言語用のヘルプ・ファイルが、¥Helpsディレクトリにコピーされます。

▶ 代替言語をデプロイメント・サーバーにインストールするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ユーザーJDEでログオンし、Windows Explorerを実行します。
前提条件	リリース8.9をデプロイメント・サーバーにインストールします。
同時に行うタスク	なし

1. 言語CDをCDドライブに挿入します。
2. 言語用のsetup.exeファイルを実行します。

ファイルのロード状況を示す<PeopleSoft Deployment Server Setup Progress (PeopleSoftデプロイメント・サーバーのセットアップ進行状況)>フォームが表示されます。



インストールの完了後に、〈PeopleSoft Deployment Server Setup〉フォームにインストールが正常に完了したかどうかが表示されます。

同じパッケージで複数言語にアクセスできるようにするには、使用可能なすべての言語を含むカスタム・パッケージをビルドする必要があります。

ERPデータベースのアップグレード

ここでは、リリース8.9用のエンタープライズ・データベースとデプロイメント・データベースを管理する方法について説明します。システム管理者、データベース管理者、およびシステム導入担当者は、このセクションを参考にしてリリース8.9用にエンタープライズ・サーバーまたはデプロイメント・サーバーのリレーショナル・データベース管理システム(RDBMS)をインストールする準備を行います。

データベース管理者は、リリース8.9導入チームが到着する前に、RDBMSをアップグレードしておく必要があります。

注意

クラスタ・ソフトウェアをOracle Fail SafeやMicrosoft SQL ServerなどのDBMSと併用する場合は、付加的な考慮事項があります。エンタープライズ・サーバーのアップグレードを開始する前に、該当するDBMSのクラスタ・インストール・マニュアルを参照してください。

リリース8.9アップグレードのガイドラインでは、リリース8.9用データベースのインストール、ロード、構成、および保守作業には、資格を持ったデータベース管理者が立ち会うように推奨しています。データベース

管理者は、リリース8.9データベースの保守方法を理解しておく必要があります。本書はRDBMS用のインストール・マニュアルとは別のものです。

サーバー・データベースがクラスタRAIDに存在する場合は、そのクラスタの名称をリリース8.9テーブルのすべてのサーバー・エントリに含める必要があります。また、Oracle Fail SafeまたはMicrosoft SQL Serverを使用する場合は、付加的な考慮事項があります。

参照 詳しくは『サーバー & ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「クラスタ上のERP 9.0」

ここでは次の内容について説明します。セントラル・オブジェクトの格納ロケーションに応じて、次のタスクのどちらかを実行します。

- ・ [Oracle for Windowsの準備とインストール - ページ \[103\]](#)
- ・ [SQL Server for Windowsの準備とインストール - ページ \[112\]](#)
- ・ [DB2 UDBの準備とインストール - ページ \[118\]](#)

Oracle for Windowsの準備とインストール

ここでは、OneWorldデータベースと共にOracle for WindowsのRDBMSを準備し、ロードするために必要な手順について説明します。

- ・ [Oracleデータベース用コード・ページ設定の検証 - ページ \[103\]](#)
- ・ [リリース8.9用Oracleデータベースの準備 - ページ \[106\]](#)
- ・ [Oracleデータベースのユーザーと所有者の作成 - ページ \[108\]](#)
- ・ [Oracle用セントラル・オブジェクトのロード - ページ \[110\]](#)

OracleのOptimal Flexible Architecture(OFA)ルールに従ってOracleをインストールしてください。Windowsに関する実務上の知識が必要です。

使用可能なSQL環境 (SQL*Plusなど) を使用して、Oracle用に提供されているスクリプトを実行します。データベース管理者権限を持つユーザーでログオンします。たとえば、SQL*Plusのコマンド構文はSQLPLUS> e:¥path¥script です。e:¥pathはスクリプトのロケーションを示すWindowsのパスで、scriptは実行するスクリプトの名前です。

次の手順は、Windows上のリリース8.9用Oracle環境の最小要件です。これらの手順を完了しても、システムの調整、バックアップまたは回復手順およびジョブの作成、Oracleデータベース・システムの保守や拡張など、データベースの大幅修正を必要とする場合があります。言語をインストールする場合は、まずコード・ページ設定が正しいかどうかを確認する必要があります。

Oracleデータベース用コード・ページ設定の検証

ここでは、OracleのNLS_CHARACTERSETパラメータ、およびOracleデータベースで使用するオペレーティング・システムのNLS_LANGパラメータを検証して設定します。

注意

英語以外の言語をインストールする場合は、Oracleデータベース内とWindowsまたはUNIXオペレーティング・システム上で、正しいコード・ページ・パラメータを設定する必要があります。

OracleのNLS_CHARACTERSETパラメータの検証

Oracleデータベースにインストールする言語に該当するNLS_CHARACTERSET値を判断し、それに応じてOracleクライアントとOracleデータベース・サーバーの両方でNLS_LANG値を設定する必要があります。

注意

リリース8.9用のセントラル・オブジェクト・スペック・オブジェクトをロードする前に、該当する言語に合わせてNLS_CHARACTERSETパラメータを設定してください。

▶ Oracleデータベースのコード・ページ設定を検証するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	ユーザーjdedbaでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. SQL*Plusから次のSQLコマンドを実行することで、Oracleデータベースのコード・ページ設定を検証します。

```
select parameter, value from v$nls_parameters where parameter = 'NLS_CHARACTERSET'
```

注意

言語環境で使用する正しいコード・ページに従って、NLS_CHARACTERSET値を設定します。文字セットが正しく設定されていない場合は、マスター・データベースを再構成してください。このパラメータはインスタンス別に修正され、データベース作成時に決定されます。

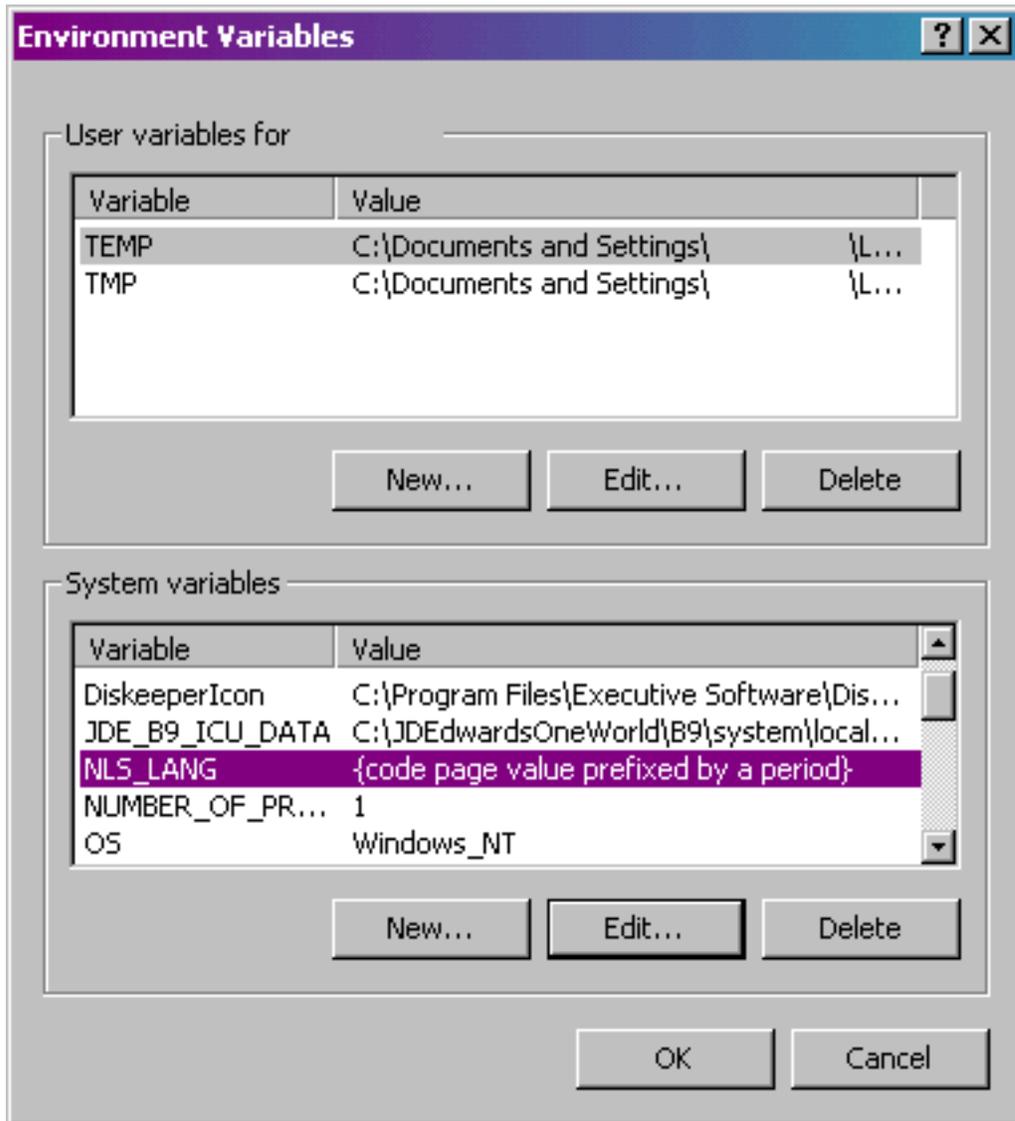
2. Oracle用のNLS_LANGパラメータの設定

リリース8.9環境で言語を正常に機能させるには、NLS_LANGパラメータをOracle用に正しく設定する必要があります。これらの設定は、Oracleクライアント・ワークステーションとOracleデータベース・サーバーの両方で行ってください。

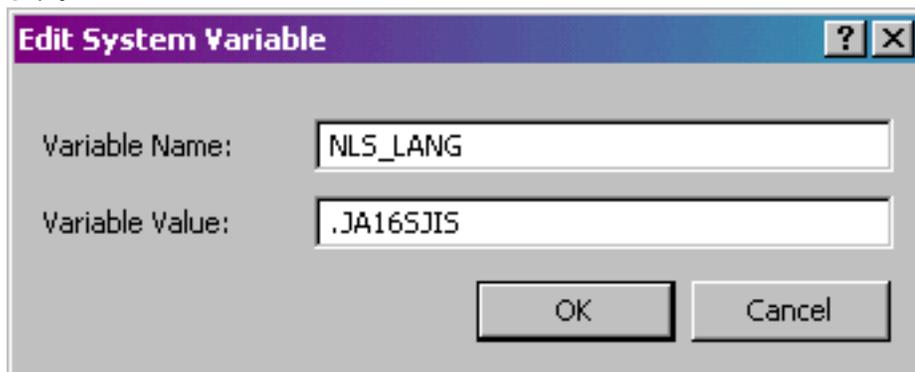
▶ Oracle用にNLS_LANGパラメータを設定するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	システム管理者としてログオンし、Windowsの[コントロール パネル]を開きます。
前提条件	なし

同時に行うタスク	なし
----------	----



- ・ NLS_LANGパラメータを追加または編集するには、[コントロール パネル]で[システム]をクリックします。



NLS_LANGパラメータが存在しない場合は、追加する必要があります。その場合、この設定はWindowsでは[環境]タブに表示されます。Windows 2000およびXPの場合は、[詳細]タブで[環境変数]をクリックします。

システム変数名はNLS_LANGで、変数値(先頭はピリオド)は、OracleデータベースでNLS_CHARACTERSETに設定したコード・ページ値と同じにする必要があります。前のステップに従ってコード・ページ値を確認してください。

たとえばデータベースでコード・ページJA16SJIS(日本語)が使用されている場合は、NLS_LANG変数パラメータを次のように設定します。

注意

コード・ページを表すNLS_LANG変数値の先頭には、必ずピリオドを追加してください。

参照 これらの値と「ナショナル・ランゲージ・サポート」の表に関する追加情報については、「言語プロセスの概要」

リリース8.9用Oracleデータベースの準備

リリース8.9用にRDBMSを準備する次の手順は、そのシステムでデータ・スペースとデータ使用が正しく構成されているかどうかを検証することです。Oracleの場合、これは表領域パラメータを設定することを意味します。

この手順では、次のタスクを実行します。

- ・ [手順 11](#) [106]
- ・ [手順 12](#) [107]
- ・ [手順 13](#) [108]

▶ リリース8.9用Oracleデータベースを準備するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	Windowsサーバー上で、ユーザーJDEでログオンします。
前提条件	データベースがインストール済みであること
同時に行うタスク	なし

1. リリース8.9のインストール・プロセスでの変動要素を減らすために、リリース8.9のインストール時にはWindows AdministrativeユーザーJDEでログオンします。

Oracle for Windowsのインストール時にJDEでログオンするか、またはデータベースのインストール担当者に、JDEがWindowsサーバー上のOracleオブジェクトおよびサービスに対する完全な権限と権利を持っているかどうかを検証してもらいます。

2. TCP/IPを使用します。

リリース8.9のコミュニケーション・ミドルウェア(JDENET)は、TCP/IP Berkeley Socketsにのみ基づいています。すべてのリリース8.9サーバーには、TCP/IPをインストールしてください。この通信プロトコルが反映されるように、LISTENER.ORAおよびTNSNAMES.ORAファイルを調整してください。

3. 制御ファイルを検証します。

SERVICESおよびHOSTSファイルが正しく定義されているかどうかを検証してください。

4. c:\%Orant%\Database\INITORCL.ORAでブロック・サイズを定義します。

デフォルト・データベースのブロック・サイズは、4~8 KBにする必要があります。

5. 次のコマンドを入力します。

```
alter tablespace TEMP default storage (maxextents unlimited);
```

▶ Oracleシステム表領域を検証するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	OracleユーザーIDでログオンします。
前提条件	リリース8.9用データベース環境の準備完了
同時に行うタスク	なし

Oracleシステム表領域を検証し、必要であれば、ロールバック・セグメントを保持する表領域を新規に作成します。

1. Oracleシステム表領域が少なくとも次のスペース構成になっており、最大限のパフォーマンスを発揮するように正しく区分されているかどうかを検証してください。

表領域名	最小サイズ(MB)
SYSTEM	80
TEMP	350(最大値は無制限に設定)
USERS	15

2. OracleのDB_FILESの最大許容オープン・ファイル数パラメータが、100以上になっているかどうかを確認します(デフォルトは25)。これは、init.oraファイルでチェックしてください。

上記と異なる名前で作成した場合は、後述する一部のスクリプトで、その名前が参照されるように修正する必要があります。

3. データベースを起動します。
4. Oracleインスタンスが起動するかどうかを確認します。
5. リスナーを起動します。
6. リスナー・プログラムが起動するかどうかを確認します。

▶ 表領域を作成するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	OracleユーザーIDでログオンします。
前提条件	リリース8.9のセットアップが完了し、ロールバック・セグメントを作成済みであること
同時に行うタスク	なし

表領域の作成用に、Oracle所有者ごとに表領域を2つずつ作成するスクリプトが用意されています。一方の表領域には表データが格納され、他方には索引が格納されます。この2つの表領域は、リリース8.9のインストール手順で定義するものと同じです。

表領域を作成する前に、prisdtaおよびpristctl表領域を削除してください。スクリプトでは、再作成時に表領域のサイズがリリース8.9に合わせて設定されます。

1. Windows Explorerを使用して、デプロイメント・サーバーの¥PeopleSoft¥B9¥Database¥crtabsp.ntディレクトリで表領域スクリプトを検索します。

スクリプトがディレクトリ構造と一致するように、システム管理者が正しいファイル・システムを作成しなければならない場合があります。

2. このスクリプトのコピーを作成します。
3. メモ帳などのエディタを使用して、スクリプトcrtabsp.ntを実行する前に編集します。実際のディレクトリ構造に合わせてディレクトリのパスを変更したり、命名規則に合わせるための他の変更が必要になる場合があります。
4. スクリプトを編集後に保存して閉じます。
5. スクリプトを実行するには、Windowsの[スタート]メニューから[プログラム]を選択します。
6. [Oracle for Windows]を選択して[SQL Plus]をクリックします。
7. 管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
8. SQLプロンプトから次のコマンドを入力して、編集したスクリプトを実行します。

```
SQL>@x:¥PeopleSoft¥B9¥Database¥yourscript
```

xはリリース8.9のインストール先ドライブで、yourscriptは編集したスクリプトの名前です。

Oracleデータベースのユーザーと所有者の作成

リリース8.9用のRDMSを準備するには、システムでデータベース・ユーザーと所有者が正しく設定されているかどうかを確認します。インストールでは複数のデータ・セットが自動的にロードされるため、データベース・ユーザーと所有者を作成して正しい権限を割り当てる必要があります。

基本インストール時にすべてのデータベース管理者と現行ユーザーを作成している場合は、この項をスキップしてください。

カスタマイズに関する考慮事項
異なる命名規則を使用する場合は、提供されたスクリプトを修正するか、その命名規則に合わせてプロセスをカスタマイズしてください。

次のタスクを完了してください。

- ・ [手順 14](#) [109]
- ・ [手順 15](#) [109]

▶ Oracle用のデータベース・ユーザーを作成するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	OracleユーザーIDでログオンします。
前提条件	表領域の作成完了
同時に行うタスク	なし

1. ユーザーDBAを作成します。必要なユーザーJDEDBAを作成して正しい権限を割り当てるためのスクリプトが用意されています。デプロイメント・サーバー上でディレクトリ
¥PeopleSoft¥B9¥Database¥crdbausr.ntにアクセスしてスクリプトを開きます。
2. スクリプトを検討し、環境に合わせて編集します。
3. スクリプトを保存して閉じます。
4. SQL*Plusで、管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
5. SQLプロンプトから次のように入力してスクリプトを実行します。

```
SQL> @x:¥PeopleSoft¥B9¥Database¥crdbausr.nt
```

xはリリース8.9のインストール先ドライブです。

▶ Oracle用のデータベース所有者を作成するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	OracleユーザーIDでログオンします。
前提条件	ユーザーの作成。
同時に行うタスク	なし

1. 所有者DBAを作成します。リリース8.9のインストールに必要な残りのロールとユーザーを作成するためのスクリプトが用意されています。デプロイメント・サーバー上でディレクトリ
¥PeopleSoft¥B9¥Database¥crusrs.ntにアクセスしてスクリプトを開きます。

2. スクリプトを検討し、アップグレードする環境に合わせて編集します。前のOneWorldインストール時に作成したユーザーへの参照を削除してください。
3. スクリプトを保存して閉じます。
4. SQL*Plusで、管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
5. SQLプロンプトから次のように入力してスクリプトを実行します。

```
SQL> @x:\%PeopleSoft%B9%Database%crusrs.nt
```

xはリリース8.9のインストール先ドライブです。

既存のデータベースに関する行はコメントにしてください。

Oracle用セントラル・オブジェクトのロード

リリース8.9にOracleをインストールする最後のステップとして、セントラル・オブジェクトをロードします。最初のステップでは、正しいユーザーID、パスワード、および他の変数を使用して、バッチ・ファイルを修正します。第2のステップでは、バッチ・ファイルを実行してテーブルをロードします。

注意

システムで2 GBを超えるファイルが受け入れられるかどうかを確認します。

▶ Oracle用のセントラル・オブジェクトをロードするには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	ユーザーJDEとして、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでログオンします。
前提条件	Windows用のデータベース環境を準備します。
同時に行うタスク	スクリプトloadall.batの実行中に、〈Installation Planner〉で処理を進めることができます。ただし、〈Installation Workbench〉はスクリプトが完了するまで実行しないでください。

1. 正しいユーザーID、パスワード、および他の変数を使用して、jdeset.batファイルを編集します。
 必要なバッチ・ファイルは、インストール・プロセス中にデプロイメント・サーバーのディレクトリ・パス %PeopleSoft%B9%Database%Exports%Oracle% にコピーされます。
2. Windowsのメモ帳や他のテキスト・エディタを使用して、このサブディレクトリのファイルjdeset.batにアクセスし、このバッチ・ファイルの変数が正しいかどうかを確認します。特に、次の変数を環境に合わせて修正してください。
 - ・ すべてのユーザー・パスワード(_PSSWDで識別)をチェックし、必要に応じて変更します。
 - ・ すべてのデータベース接続文字列をチェックして置換します(connectstringという語を検索します)。

- ・ セントラル・オブジェクトが格納されるエンタープライズ・サーバーの名前 (machinename で識別) をチェックして置換します。
3. jdesetファイルで、次の環境変数を検討して編集します。
- ・ JDE_DTA
- 論理ボリュームとディレクトリ構造に標準の命名規則を使用している場合に、Oracleインポート・ファイルが格納されるパスです。
- ・ JDE_LOG
- ログを記録するパスです。
- ・ JDE_ERR
- エラー情報を記録するパスです。
4. ファイルの最後にあるOracle_versionを確認します。該当するバージョン (80 = 8.0.6、81 = 8.1.5以上) をコメント解除してください。

注意

スクリプトloadall.batは、本稼働、プリスティン (JDEオリジナル)、およびプロトタイプのスペック・テーブル・セットをロードするように設定されています。開発スペック・セットもロードする場合や、他のスペックをロードしない場合は、それに応じてloadall.batを編集してください。たとえば開発用のスペックをロードするには、loadall.batに次の1行を追加します。

```
Call loaddv
```

アップグレードの場合は、本稼働用のスペック(loadpd)がロードされないように、スクリプトを編集してください。プロトタイプ環境のアップグレード後に、アップグレードされたプロトタイプ・スペックをコピーして本稼働用のスペックを作成します。また、このスクリプトは、すべてのスペック (プリスティン、プロトタイプ、および開発) がロードされるように編集したり、この時点でアップグレードするパス・コードに必要なスペックのみをロードするように編集することもできます。

ヒント

ダブルバイト・データベース (中国語や日本語など) に対してloadallを実行するには、NLS_LANG設定を一時的に設定します。loadallを実行するマシン上で、次のシステム変数を編集します ([コントロール パネル] > [システム] > [詳細] タブ > [環境変数] ボタン)。NLS_LANGシステム変数をNLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.US7ASCIIに設定してください。loadallの完了後に、このパラメータを実際のデータベースに合ったコード・ページにリセットしてください。

-
5. バッチ・ファイルを実行してデータをロードします。Windows Explorerから、¥Database¥Exports¥Oracle¥loadall.batファイルをダブルクリックします。

- セントラル・オブジェクト(スペック)テーブルが正常にロードされたかどうかを検証するには、loadall.batと同じディレクトリにある*.logファイルを検討します。

言語に関する考慮事項
<p>Oracleデータベースでダブルバイト言語を使用している場合は、各レコードに関して次のエラー・メッセージが表示されることがあります。IMP-00019:row rejected due to ORACLE error 1401 IMP-00003:ORACLE error 1401 encountered ORA-01401:inserted value too large for column</p> <p>このメッセージを無視してloadallプロセスを完了してください。</p>

注意

スクリプトloadall.batの実行中に、〈Installation Planner〉で処理を進めることができます。ただし、〈Installation Workbench〉はスクリプトが完了するまで実行しないでください。

SQL Server for Windowsの準備とインストール

次の手順では、リリース8.9を実行できるSQL Server環境の最小要件について説明します。これらの手順を完了しても、システムの調整、バックアップまたは回復手順およびジョブの作成、データベース・システムの保守や拡張など、データベースの大幅修正を必要とする場合があります。

ここでは、リリース8.9で変更された内容、およびデータベースとそのユーザーの作成方法について説明します。ここでは次の内容について説明します。

- ・ [SQL Server用のコード・ページ設定の検証 - ページ \[112\]](#)
- ・ [SQL Server用のデータベースの作成 - ページ \[113\]](#)
- ・ [SQL Server用のデータベース・ログオンとユーザーの作成 - ページ \[115\]](#)
- ・ [SQL Server用のセントラル・オブジェクトのロード - ページ \[116\]](#)

SQL Server用のコード・ページ設定の検証

▶ SQL Server用のコード・ページ設定を検証するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	SQL Server DBAユーザーでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

注意

代替言語をアップグレードする場合は、データベース内でコード・ページを正しく設定しておく必

要があります。データベースのアップグレード時には、リリース8.9用の言語スペック・オブジェクトをロードする前に、その言語のコード・ページを設定する必要があります。データベース・マシン環境のLocalCodeSetとコード・ページの設定を確認してください。

- ・ ISQLウィンドウから、次のコマンドを入力します。

```
sp_helpsort
```

注意

文字セットが正しく設定されていない場合は、正しい文字セットを指定してデータベースを再作成する必要があります。

参照 これらの値と「ナショナル・ランゲージ・サポート」の表に関する追加情報については、「言語プロセスの概要」

SQL Server用のデータベースの作成

リリース8.9用データベースを簡単に作成できるように、データベース作成スクリプトが用意されています。このスクリプトを使用するには、次のタスクを完了します。

- ・ [手順 18](#) [113]
- ・ [手順 19](#) [114]

データベースを作成する前に、JDE_PRISTINEデータベースを削除します。スクリプトでは、再作成時にデータベースのサイズがリリース8.9に合わせて設定されます。

▶ データベース作成スクリプトを編集するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上でメモ帳を開きます。
前提条件	SQL Serverがインストールされているかどうかを確認します。
同時に行うタスク	なし

注意

データベースを作成する前に、JDE_PRISTINEデータベースを削除します。スクリプトでは、再作成時にデータベースのサイズがリリース8.9に合わせて設定されます。

1. データベースへのTCP/IP接続が正常に機能しているかどうかを確認します。
リリース8.9では、この接続が使用されます。
2. %PeopleSoft%\b9\databaseフォルダで、データベース作成スクリプト(DB_SQLSRVR.sqlなど)を検索し

ます。

3. エラーが発生した場合に備えて、このスクリプトのバックアップ・コピーを作成します。
4. スクリプトを開きます。
5. スクリプトを検討し、エンタープライズ・サーバー上の正しいドライブ名(デフォルトはz:)を示すようにパスを編集して、ディレクトリ・パスの残りの部分が正しいかどうかを確認します。
6. 指定したディレクトリが存在しているかどうかを確認します。

スクリプトを実行する前に、そのディレクトリを作成する必要があります。

注意

すべてのアップグレードにはプリスティン・データベースが必要であり、必ずインストールする必要があります。

7. スクリプトから不要なセクションと既存のデータベースを削除します。

スクリプトには、不要なコマンドを完全に削除できるように、明確なコメントが付けられています。どのセクションを削除するかについては、次の表を参照してください。

データベース名	このデータベースを必要とする環境
JDE9	全環境
JDE_PY9	プロトタイプ(CRP)、テスト
JDE_CRP	プロトタイプ(CRP)
JDE_JD9	プリスティン(JDEオリジナル)
JDE_PRISTINE	プリスティン
JDE_PD9	本稼働用
JDE_PRODUCTION	本稼働用
JDE_DV9	開発
JDE_DEVELOPMENT	開発、テスト

開発、プリスティン、および本稼働用環境を使用する場合、これらに関するセクションは残し、スクリプトからはJDE_PY9、JDE_CRPに関するセクションを削除します。

使用する環境に合わせてデータベース作成スクリプトを編集した後に、それを次の手順で実行します。

▶ データベース作成スクリプトを実行するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、SQL Server Enterprise Managerにログオンします。
前提条件	データベース作成スクリプトを編集します。
同時に行うタスク	なし

1. Windowsの[スタート]メニューから[プログラム]を選択します。
2. [SQL Server]、[Query Analyzer]を順番に選択します。
3. <Query Analyzer>で、正しいパスワードと共にデータベース管理者として接続します。
4. [Open Folder]をクリックします。
5. 編集したスクリプトをダブルクリックして開きます。
必要な場合は[参照]ボタンを使って検索してください。
6. <Query>フォームで[execute]をクリックします。
スクリプトの実行中に実行結果がフォームの下半分にスクロール表示されます。
7. フォームの下半分で最終結果を調べて確認します。

SQL Server用のデータベース・ログオンとユーザーの作成

リリース8.9データベース用のログオンとユーザーを簡単に作成できるように、スクリプトが用意されています。このスクリプトを使用するには、次のタスクを完了します。

- ・ [手順 20](#) [115]
- ・ [手順 21](#) [116]

▶ ログオンおよびユーザー作成スクリプトを編集するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、SQL Server Enterprise Managerにログオンします。
前提条件	データベース作成スクリプトの実行結果を検証します。
同時に行うタスク	なし

1. ¥PeopleSoft¥b9¥databaseフォルダで、該当するデータベース作成スクリプトを検索します。
2. エラーが発生した場合に備えて、このスクリプトのバックアップ・コピーを作成します。
3. USERS_SQLSRVR.sqlスクリプトを開きます。

4. Default_DBという句を検索し、デフォルト・データベースであるJDE9に置き換えます。
5. データベース作成スクリプトの編集内容に基づいて、不要なログオンおよびユーザーを作成するセクションを削除します。

このスクリプトをデータベース作成スクリプトに合わせて編集しないと、スクリプトが存在しないデータベースのユーザーを作成しようとするため、エラー・メッセージが表示されます。

▶ ログオンおよびユーザー作成スクリプトを実行するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバーにログオンします。
前提条件	ログオンおよびユーザー作成スクリプトを編集します。
同時に行うタスク	なし

1. Windowsの[スタート]メニューから[プログラム]を選択します。
2. [SQL Server]、[Query Analyzer]を順番に選択します。
3. 正しいパスワードと共にデータベース管理者として接続します。
4. 編集したログオンおよびユーザー作成スクリプトを開きます。
5. スクリプトを実行します。
6. フォームの下半分で結果を調べて確認します。

SQL Server用のセントラル・オブジェクトのロード

リリース8.9用にRDBMSを準備する最終ステップとして、データをロードします。アーカイブから該当するデータベースにデータをインポートできるように、修正可能なスクリプトが用意されています。

▶ SQL Server用のセントラル・オブジェクトをロードするには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上のWindowsにユーザーJDEでログオンします。
前提条件	ログオンおよびユーザー作成スクリプトの実行結果を検証します。
同時に行うタスク	loadall.batスクリプトの実行中に、〈Installation Planner〉で処理を進めることができます。ただし、〈Installation Workbench〉はスクリプトが完了するまで実行しないでください。

1. jdeset.batファイルでバッチ変数を編集します。

必要なバッチ・ファイルは、インストール・プロセス中にデプロイメント・サーバーのディレクトリ・パス¥PeopleSoft¥B9¥Database¥Exports¥Sqlsrvr¥にコピーされます。Windowsのメモ帳や他のテキスト・エディタを使用して、このサブディレクトリのファイルjdesetにアクセスし、このバッチ・ファイルの変数

が正しいかどうかを確認します。特に、次の変数は使用環境に合わせて変更してください。

- ・ すべてのユーザー・パスワード(_PSSWDで識別)をチェックします。
- ・ すべてのデータベース名をチェックします。
- ・ machinename をセントラル・オブジェクトが格納されるサーバー名に置き換えます。

2. jdesetファイルで、次の環境変数を検討して編集します。

- ・ JDE_DTA

論理ボリュームとディレクトリ構造に標準の命名規則を使用している場合に、SQL Serverインポート・ファイル(.dta)が格納されるパスです。デフォルトでは、これは1つ上位のディレクトリ(..)です。

- ・ JDE_LOG

ログを記録するパスです。

- ・ JDE_ERR

エラー情報を記録するパスです。

注意

- ・ すべてのアップグレードにはプリステイン・セントラル・オブジェクトが必要であり、ロードする必要があります。
- ・ スクリプトloadall.batは、本稼働、プリステイン(JDEオリジナル)、およびプロトタイプのスペック・テーブル・セットをロードするように設定されています。特定のスペックをロードしない場合は、それに応じてloadall.batを編集してください。このスクリプトでは、開発スペックはロードされないようにコメントアウトされています。また、すべてのスペック(プリステイン、プロトタイプ)をロードするか、またはここでインストールするパス・コードに必要なスペックのみをロードするようにこのスクリプトを編集できます。

-
3. データをロードするには、Windows Explorerからスクリプト¥Database¥Exports¥Sqlsrvr¥loadall.batをダブルクリックします。
 4. セントラル・オブジェクト(スペック)テーブルが正常にロードされたかどうかを検証するには、loadall.batと同じディレクトリにある*.logファイルを検討します。

注意

スクリプトloadall.batの実行中に、〈Installation Planner〉で処理を進めることができます。〈

Installation Workbench)は、スクリプトが完了するまで実行しないでください。

DB2 UDBの準備とインストール

UNIXまたはWindows 2000プラットフォームにIBM DB2 Universal Database (UDB)を準備してインストールするには、次の手順に従って操作します。

- ・ [DB2 UDB用のコード・ページ設定の検証 - ページ \[119\]](#)
- ・ [データベース・ユーザーと所有者の作成 - ページ \[119\]](#)
- ・ [リリース8.9用DB2 UDBデータベースの準備とインストール - ページ \[121\]](#)
- ・ [セントラル・オブジェクトのロード - ページ \[129\]](#)

データベースを作成する前に、JDE_PRSTエイリアスのカタログ化を解除してOW_PRSTデータベースを削除します。スクリプトでは、再作成時にデータベースのサイズがリリース8.9に合わせて設定されます。Unicodeコード・ページ(UTF-8)を使用している場合は、ERPデータ・ソースにUnicode設定が必要です。

UDBデータベースをアップグレードする前に、xxxxGTLT4KおよびXXXXCTLL(xxxxは環境)にコンテナを追加します。

LOCKLISTのサイズ拡張

アップグレード予定の環境(OW_PRODなど)に合わせて、データベースのLOCKLISTのサイズを2倍以上にする必要があります。

▶ LOCKLISTのサイズを拡張するには

1. エンタープライズ・サーバーにインスタンス所有者としてサインオンします。
2. 次のコマンドを入力します(データベース名に置き換えてください)。
 - ・ DB2® get db cfg for ow_prod | more write down the size of the LOCKLIST
 - ・ DB2® update db cfg for ow_prod using LOCKLIST 4000
 - ・ Db2stop
 - ・ Db2start

アップグレードの完了後に、LOCKLISTを元のサイズに戻します。

表スペースのサイズ拡張

▶ 表スペースのサイズを拡張するには

1. アップグレードする環境について、32K表スペースのサイズを調べます。たとえば、PRODの場合はPRODDTAT32Kを調べます。
2. [Control Center(コントロール・センター)]で、その表スペースの使用ブロック数を調べ、その値を8倍します。
3. xxxxCTLI表スペースのサイズを、少なくとも使用ブロック数×8だけ大きくします(表スペースのコンテナは、すべて同じサイズにする必要があることに注意してください)。
4. xxxxDTAT4K表スペースのサイズも、上記と同じブロック数だけ大きくします。これにより、メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)の変換に対応できます。

DEV環境をアップグレードする場合は、OW_DEV表スペースにデモ・データが十分に収まる空き領域があることを確認してください。デモ・データは旧リリースよりも大きくなっています。スクリプトow_dev_tbsp.ntを調べ、表スペースを必要なだけ大きくします。

DB2 UDB用のコード・ページ設定の検証

DB2 UDB用の言語コード・ページ設定を検証するには、次の手順で操作します。

▶ DB2 UDB用のコード・ページ設定を検証するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	データベース・サーバーにUDBインスタンス所有者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

- ・ DB2コマンド・ウィンドウから、次のDB2プロファイル・レジストリ・コマンドを入力します。

```
db2set -all
```

[Enter]キーを押します。

レジストリ変数のリストが表示されます。DB2CODEPAGE変数を検索します。この変数がリストに表示されない場合、DB2ではデフォルトのコード・ページ設定(Windowsの場合はANSIコード・ページ、UNIXの場合はローカル設定)が使用されています。

参照 これらの値と「ナショナル・ランゲージ・サポート」の表に関する追加情報については、「言語プロセスの概要」

データベース・ユーザーと所有者の作成

データベースをインストールする前に、データベース・ユーザーと所有者を作成する必要があります。

注意

DB2 UDBで独自のパスワード・チェックが行われることはなく、オペレーティング・システムによるパスワード・チェックに依存しています。したがって、エンタープライズ・サーバー上で、次のユー

ザーをアカウントとして設定する必要があります。

注意

パスワードは英大文字で指定してください。

▶ DB2 UDB用のユーザーを作成するには

スタッフ	ルート
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、administrator/userとしてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. グループOWSHAREを設定します。
2. 次の必須ユーザーを設定します。

次のアカウントを含め、すべてのデータ所有者(スキーマ)アカウントは、OWSHAREグループのメンバーにする必要があります。

注意

さらに細かい権限を設定するには、表スペース作成スクリプトを編集し、各スクリプトの最後にある権限コマンドを必要に応じて変更します。

注意

パスワードは英大文字で指定してください。

JDE

SY9

SVM9

OL9

DD9

システム上の環境に従って次のユーザーを設定します。使用しない環境のユーザーを設定する必要はありません。

アップグレードの実行時に、ビジネス・データおよびコントロール・テーブルの所有者がすでに作成されている場合、それを変更する必要はありません。

jdedba(任意:SYSADMで設定)

本稼働用環境:

PRODCTL

PRODDTA

PD9

プロトタイプ環境:

CRPCTL

CRPDTA

PY9

プリステイン環境:

PRISTCTL

PRISTDTA

JD9

開発環境:

TESTCTL

TESTDTA

DV9

各アカウントにログインしてテストしてください。

リリース8.9用DB2 UDBデータベースの準備とインストール

リリース8.9用データベースを簡単に作成できるように、一連のデータベース作成スクリプトが用意されています。

DB2 UDBのインスタンスをリリース8.9用に追加作成し、リリース8.9にはデフォルトのインスタンスを使用しないことをお勧めします。

注意

OneWorld Xeからアップグレードする場合は、エンタープライズ・サーバー上でdb2cli.iniを編集し、各データ・ソースのLobCacheSizeエントリを削除します。

各スクリプトを使用するには、次のタスクを完了します。

- ・ [手順 27](#) [122]
- ・ [手順 28](#) [126]

- ・ 手順 29 [127]
- ・ 手順 31 [128]

▶ データベース作成スクリプトを編集するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、プランナ環境にJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. エンタープライズ・サーバーにUDBインスタンス所有者としてログインし、セントラル・オブジェクトのロード用に次のディレクトリを作成します。

d:¥instancename¥export¥logs

instancenameは、DB2 UDBのインストール時にリリース8.9用に作成したDB2 UDBインスタンスです。また、次のように、logsディレクトリと同じレベルにtempfileディレクトリを追加します。

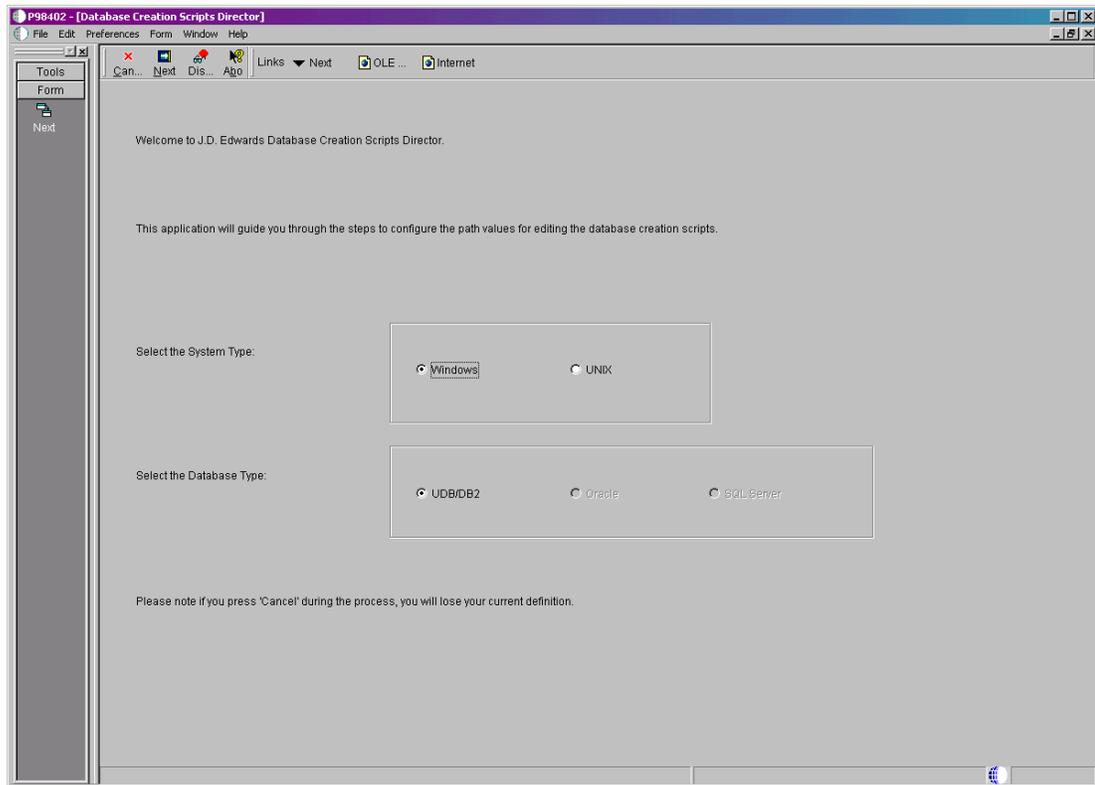
d:¥instancename¥export¥tempfile

注意

このtempfileディレクトリは、セントラル・オブジェクトのロード中にLOADユーティリティでのみ使用されます。

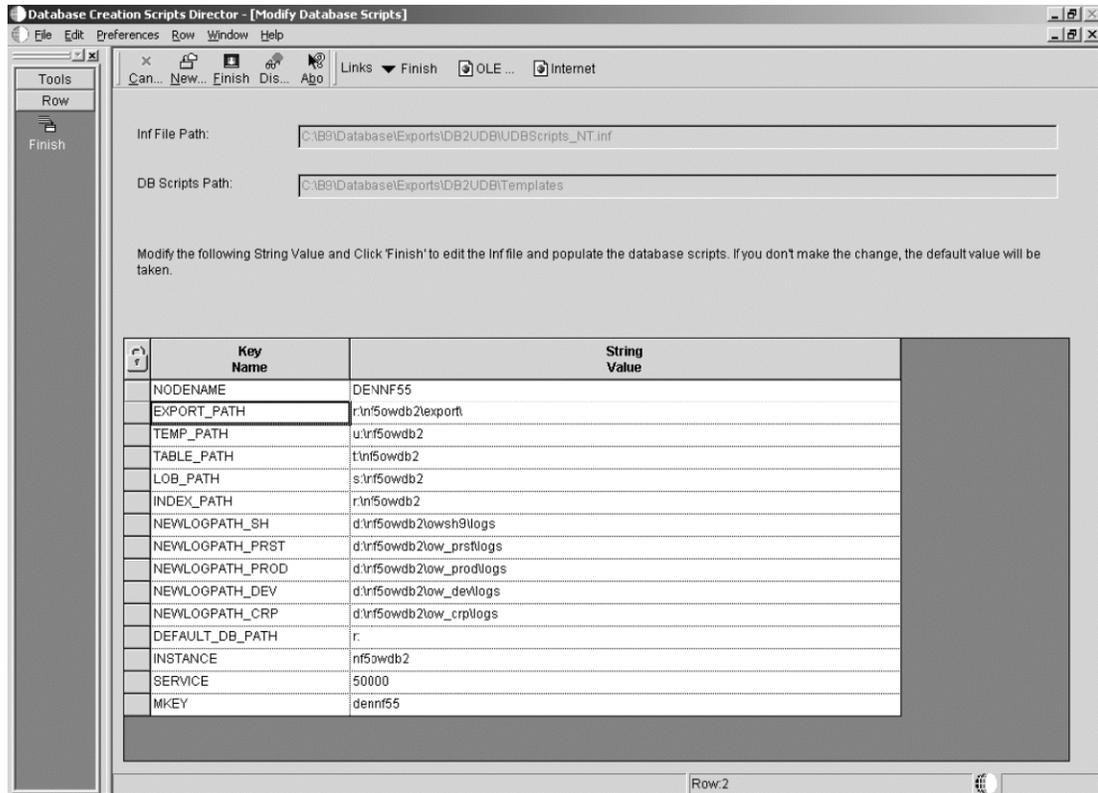
2. [Fast Path(略式コマンド)]に“P98402”と入力して[Enter]キーを押します。

次のフォームが表示されます。



3. UDBデータベースが稼働中のオペレーティング・システムをクリックします。
4. [Next]をクリックします。

次のフォームが表示されます。



注意

スクリプトを実行するアカウントに、ここで指定されているディレクトリへのアクセスが許可されているかどうかを確認してください。

キーの文字列値を変更するには、そのグリッド・セルをクリックします。ブランクには設定できません。

RAIDを使用していない場合は、表スペース、一時表スペース、およびログを別のドライブに移動します。RAIDを使用している場合は、分散させるかどうかを判断するために、論理ドライブにどの程度収まるかを調べる必要があります。

次のドライブ名を使用中のドライブ名に変更します。

次のマウント名を使用中のマウント名に変更します。

NODENAMEは、DB2UDBノード用に選択した名前です（大文字のみで8文字以内のマシン名を指定できます。特殊文字やスペースは使用できません）。

デフォルトはDENNF55です。

次の5つの項目（EXPORT PATH～INDEX PATH）には、パスの一部としてインスタンス名を使用します。owdb2以外のインスタンス名を使用している場合は、これらの項目のowdb2をインスタンス名に変更してください。

EXPORT PATHは、エンタープライズ・サーバー上のスクリプトとエクスポート・ファイル用です。これは、ステップ1で作成したディレクトリです。

デフォルトはr:\owdb2\exportです。

TEMP_PATHは一時表スペース用です (LOADユーティリティ用に作成したtempfileディレクトリとは異なります)。

デフォルトはs:\owdb2です。

TABLE_PATHは、4Kおよび32Kの表スペース用です。

デフォルトはt:\owdb2です。

LOB_PATHは、LOB(BLOB)表スペースの作成場所です。

デフォルトはs:\owdb2です。

INDEX_PATHは、索引表スペース用です。

デフォルトはr:\owdb2です。

NEWLOGPATH_SHIは、OWSH9のログ用です。各データベースでは、ログを個別のディレクトリに保存する必要があります。これらは、すべて同じドライブ上の別のディレクトリでもかまいません。RAIDを使用していない場合は、表スペース、一時表スペース、およびログを別のドライブに移動します。

デフォルトはr:\owdb2\owsh9\logsです。

各データベースでは、ログを個別のディレクトリに保存する必要があります。これらは、すべて同じドライブ上の別のディレクトリでもかまいません。

DEFAULT DB PATHは、DB2でデータベース (表スペースではなく、データベース用の内部DB2制御情報) に使用するマウント・ポイントまたはドライブです。

デフォルトはr:です。

INSTANCEは、DB2インスタンス名です。

デフォルトはowdb2です。

SERVICEは、エンタープライズ・サーバー上のDB2インスタンスのポート番号です。

デフォルトは50000です。

MKEYは、エンタープライズ・サーバー名です。

デフォルトはdennf55です。

TERRITORYは、国を表す地域コード (USなど) です。

CODSETは、UTF8など、データベース用のコード・セットです。

5. 〈Modify Database Scripts (データベース・スクリプトの変更)〉フォームで[Finish]をクリックします。
6. 編集するグリッドのセルをクリックします。
7. [Finish]をクリックして、スクリプトの編集済みバージョンを生成します。
8. デプロイメント・サーバー上で

テキスト・エディタを使用して、PeopleSoft¥B9¥Database¥Exports¥DB2UDBディレクトリにある create_db.batおよびcatalog_db.batファイルを開きます。開発 (DEVとDV)、本稼働用 (PRODとPD)、プリスティン (JDEとJD)、プロトタイプ (CRPとPY) など、インストールする環境を参照している行をコメント化します。

- c:\winnt¥system32¥drivers¥etc¥servicesファイル調べます。

DB2インスタンスを検索し、接続ポート (通常は50000または5002) をメモします。

デプロイメント・サーバー上でテキスト・エディタを使用し、同じディレクトリにある次のファイルを開き、使用しない環境に関する行をコメント化します。

Catalog_db.sql

Create_db.bat

ow_crp_tbsp.nt、ow_dev_tbsp.ntおよびow_prod_tbsp.ntファイルを開き、データに合わせて表スペース・コンテナ数を増やします。xxCTL4KとxxCTLL用に、さらに表スペース・コンテナを追加します。

注意

DB2 UDBでは、表スペースが自動的に拡張されることはありません。表スペースのデータ量を監視し、必要に応じてコンテナを追加する必要があります。

注意

catalog_db.batの実行時にUPDATE CLI CFGコマンドがエラーになる場合は、これらのコマンドを実行する権限が許可されていないことを意味します。CLI構成ファイルdb2cli.iniに項目を手作業で追加する必要があります (「サードパーティのODBCデータ・ソースの作成」を参照)。

▶ エンタープライズ・サーバーにデータベース作成スクリプトを格納するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバーにログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

- PeopleSoft¥B9¥DATABASE¥Exports¥DB2UDB (デプロイメント・サーバー上) の内容を、エンタープライズ上に作成したディレクトリd:\instancename¥exportにコピーします (前述の手順のステップ1を参照)。

注意

DB2 UDBディレクトリ自体ではなく、その内容のみをコピーしてください。

▶ エンタープライズ・サーバー上でデータベース作成スクリプトを実行するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバーにインスタンス所有者としてサインオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

注意

インスタンス所有者に、表スペースに対する許可を与えます。

DB2コマンド・ウィンドウを起動するには、[スタート]-[ファイル名を指定して実行]をクリックし、[名前]に“db2cmd”と入力します。すべてのスクリプトは、エンタープライズ・サーバー上のDB2コマンド・ウィンドウから実行する必要があります。これらのスクリプトをデプロイメント・サーバーから実行すると、構成に応じてさまざまな問題が発生します。DB2 UDBでは、エクスポートされたLOBファイルがエンタープライズ・サーバー上にない限り、LOBファイル(セントラル・オブジェクト)のロードがサポートされないことに注意してください。

1. エンタープライズ・サーバー上で、インスタンス所有者またはJDEDDBA(JDEDDBAにSYSADM権限がある場合)としてサインオンし、d:\instancename¥exportディレクトリに移動します。
スクリプトでは、前述のディレクトリ構造に応じた相対パスが使用されます。
または、スクリプトを編集し、logs¥の参照をすべてフル・パス名に置き換えます。
2. crt_bus_ctl_tbsp.batを開き、プリスティン(OW_PRST)の参照箇所を除き、すべての既存環境をコメント化します。
3. スクリプトを次の順序で実行します(各環境用のセントラル・オブジェクトをロードするloadall.batスクリプトの実行手順については、「セントラル・オブジェクトのロード」を参照)。

スクリプト名	処理
DB2_mkdir.bat Rootでサインオン	エンタープライズ・サーバー上で表スペース用のディレクトリを作成します。インスタンス所有者が権限を持っていることを確認します。
create_db.bat インスタンス所有者としてサインオン	DB2設定、dbm設定を変更します。データベースを作成します。データベースのconfig設定を変更します。バッファ・プールを作成します。スキーマを作成します。スキーマに権限を付与します。DB2を起動します。
crt_owsh_tbsp.bat インスタンス所有者としてサインオン	システム、データ辞書、オブジェクト・ライブラリアン、サーバー・マップ(OWSH9xx)用の表スペースを作成します。環境(PD9xx、JD9xx、DV9xx、PY9xx)ごとにセントラル・オブジェクト用の表スペースを作成します。一時表スペースを作成します。一時表スペースを作成します。

xxは、索引の場合はI、LOBSの場合はL、4K表スペースの場合はT4K、32K表スペースの場合は

T32Kです。

各スクリプトでは、¥logsディレクトリにログが生成されます。各スクリプトのログを調べ、問題があれば訂正してから次のスクリプトを実行してください。

4. create_db.batを開き、OW_PRODなど、インストールしない環境データベースの参照をすべてコメント化します。

▶ エンタープライズ・サーバー上でCLIデータ・ソースを作成するには

- ・ CLIデータ・ソースは、create_db.batの実行時に作成されています。「DB2 UDB用のサードパーティ CLIデータ・ソースの作成」も参照し、このステップを確認してください。

▶ デプロイメント・サーバー上でデータベースをカタログ化するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバーにログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

データベースの作成後に、それをデプロイメント・サーバー上でカタログ化します。catalog_db.batを実行するか、[DB2 Client Configuration Assistant]を使用することをお勧めします。[DB2 Client Configuration Assistant]を使用する場合の手順は、次のとおりです。

1. デプロイメント・サーバー上で、[スタート]->[プログラム]->[IBM DB2]->[Client Configuration Assistant]をクリックします。
2. [Add Database(データベースの追加)]をクリックし、[Search the network(ネットワークの検索)]をクリックします。
3. [Database Name(データベース名)]タブをクリックします。
4. [Other systems (search the network)(その他システム(ネットワークの検索))]をクリックし、エンタープライズ・サーバーを検索します。
5. データベースの1つをクリックします。リモート・データベースではなくローカル・データベースから選択してください。
6. [Alias(エイリアス)]タブを開き、次のリストからエイリアスを入力します。

データベース	エイリアス
OWSH9	JDE9
OW_PROD	JDE_PROD
OW_PRST	JDE_PRST
OW_DEV	JDE_DEV
OW_GRP	JDE_GRP

7. [Finish]をクリックします。
8. [Add(追加)]をクリックします。
9. 残りのデータベースごとにステップ3～7を繰り返します。
10. DB2をインストールしたディレクトリ(通常はc:\MSQLLIB)にあるdb2cli.iniファイルを開き、各データソースのLobCacheSize項目を削除します。
 - ・ クライアントのインストール中に使用する構成をエクスポートします。その構成をPeopleSoft¥b9¥clientディレクトリにOneWorld.spfとして保存します。

セントラル・オブジェクトのロード

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [手順 32](#) [129]
- ・ [手順 33](#) [129]
- ・ [手順 34](#) [130]

▶ loadallスクリプトを編集するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、インスタンス所有者としてログインします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

セントラル・オブジェクトのロード用のスクリプト・ファイルをまだ編集していない場合は、次の手順で編集します。

1. テキスト・エディタでloadall.batファイルを開きます。
2. インストールしない環境に関連する行をコメント化します。
3. 開発環境をインストールする場合は、そのコメント化を解除します。

▶ loadallスクリプトを実行するには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、インスタンス所有者としてログオンします。
前提条件	なし

同時に行うタスク	なし
----------	----

データベースの作成直後にスクリプトを実行する場合は、すでにエンタープライズ・サーバー上の正しいディレクトリにサインオンしています。それ以外の場合は、エンタープライズ・サーバーにインスタンス所有者またはJDEDDBAとしてサインオンします。

1. 次のように入力し、loadall.batが格納されているディレクトリに変更します。

D:

CD instancename¥export (instancenameはディレクトリ名)

2. "loadall.bat"と入力して[Enter]キーを押します。

注意

サーバー上の別のセッションでloadxx.batスクリプト(loadjd.batなど)を実行すると、異なる環境に対するロードを実行できます。

▶ ログをチェックするには

スタッフ	データベース管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、インスタンス所有者としてログオンします。
前提条件	セントラル・オブジェクトのロードを完了しておきます。
同時に行うタスク	なし

- ・ ..¥export¥logsディレクトリで、loadco_xx.logおよびloadco_xx.msg ファイルを検索します。xxは、インストールする環境に応じてpd、py、jd、dvのいずれかです。

DB2 UDBインストールのトラブルシューティング

ここでは、DB2 UDBデータベースの正常動作の妨げとなる可能性のある問題のトラブルシューティングについて説明します。問題が発生した場合は、次のことをチェックしてください。

データベース/表スペースの作成

システム管理者権限をもつユーザーでサインオンしていることを確認します。

[コントロール パネル]で、環境変数DB2INSTANCEにリリース8.9インスタンス(owdb2を含む)が設定されているかどうかをチェックします(この環境変数を変更した場合は、マシンをリポートする必要があります)。インスタンスの作成時には、その所有者として特定のWindowsアカウントを指定できます。そのインスタンス内で表を作成するには、その所有者としてサインオンする必要があります。

表スペース用のディレクトリを作成したかどうかをチェックします。

スクリプトを再実行する場合は、事前にエイリアスのカタログ化を解除してデータベースを削除します(ス

クリプトdrop_db.sqlを参照してください。このスクリプトを実行するには、“DB2 -tvf drop_db.sql”と入力します。再実行する場合は、logsディレクトリを空にしておくことをお勧めします。

インスタンスを削除しても、データベースは削除されません。かわりに、インスタンスからはアクセスできなくなります。データベースはすでに存在しているのでCREATE DBは失敗し、インスタンスではデータベースの有無が認識されないのでCONNECT TO xxxは失敗します。データベースを削除せずにインスタンスを削除して再作成した場合は、

CATALOG DB OW_PROD ON d:(dはデータベースを作成したドライブ)と入力してデータベースをカタログ化します。その後、データベースを削除してスクリプトを再起動します。

正しいコード・セットと地域を指定しているかどうかをチェックします。スクリプトでの指定に従って“CREATE DB APPLES CODESET xxx TERRITORY XX”と入力します。USローカルのマシン上でUSデータベースを作成する場合は、create_db.batファイル内でCREATE DBコマンドからcodeset %CODESET% territory %TERRITORY%を使用する句を削除します。

データベースが作成されない場合は、その後のスクリプトがすべて失敗します。

セントラル・オブジェクトの作成

通常、crt_co_tbl.batファイルを実行するとログにエラーが表示されます。このスクリプトは、最初にスキーマ用の表をすべて削除してから作成しようとします。通常、表は存在しないので、DROP TABLEコマンドは失敗します。ALTER TABLE ADD PRIMARY KEY CONSTRAINTでは、表ごとに主キーにより表の既存の索引が使用されることを示す警告メッセージが表示されます。これは正常です。

セントラル・オブジェクトのロード(Loadall)

エンタープライズ・サーバー上に、エクスポート・ファイルが実際に存在していることを確認します。エクスポート・ファイル(f98741e1.ixfとf98741.001など)をエンタープライズ・サーバーにコピーしなければ、LOADユーティリティは機能しません。ログにエクスポート・ファイルの欠落が記録されていないかどうかをチェックします。

表スペースが作成されているかどうかをチェックします。DB2 Control CenterにアクセスしてOWSH9データベースを開き、xx9I、xx9L、xx9T4K、andxx9T32Kの各表スペースを検索します(xxは、本稼働用はPD、開発はDV、プロトタイプはPY、プリスティンはJDなど、ロードする環境です)。

loadco_xx.ntファイル内で正しいパスに置き換えているかどうかを確認します。

クライアントからデータベースへの接続

デプロイメント・サーバーまたはクライアントからデータベースに接続できない場合があります。この問題は、以前はそのマシンからデータベースに正常に接続できた場合にも発生することがあります。

クライアントからサーバーに接続できない場合は、最初にサーバーをpingします。次に、エンタープライズ・サーバー上で、次の手順に従ってDB2が正しく設定されているかどうかを確認します。

サーバー上のWinnt\system32\drivers\etcディレクトリで、servicesファイルを調べます。servicesファイルに、DB2インスタンスに関する有効なエントリがあることを確認します。Fix Packを適用するか、DB2の新リリースに移行すると、このファイルが変更される場合があります。

エンタープライズ・サーバーからデータベースに接続できるかどうかをチェックします。DBAとしてサインオンし、“DB2 CONNECT TO JDE9 USER jde USING JDE”と入力します(データベース名ではなくエイリアスを使用してください)。

エンタープライズ・サーバーに接続できない場合は、次のことをチェックします。

- ・ 管理サーバーが起動しているかどうか。
- ・ ユーザーjdeが、サーバー上で英大文字のパスワードをもつアカウントとして作成されているかどうか。
- ・ すべてのデータ・ソース所有者が、英大文字のパスワードをもつアカウントとして作成されているかどうか。
- ・ データベースがこのインスタンス内でカタログ化されているかどうか。“DB2 LIST DB DIRECTORY”と入力して、次のデータベースを実際の名称とエイリアスで検索します。
 - ・ ノード・ループバック上のOWSH9 JDE9
 - ・ OW_PROD JDE_PROD
 - ・ OW_CRP JDE_CRP
 - ・ OW_PRST JDE_PRST
 - ・ OW_DEV JDE_DEV
- ・ ループバック・ノードがカタログ化されているかどうか。“DB2 LIST NODE DIRECTORY”と入力します。
- ・ カタログ化されていないデータベースをカタログ化します。
- ・ 次のエイリアスをカタログ化します (create_dbシェルを参照)。

```
db2 "catalog tcpip node loopback remote 127.0.0.1 server %SERVICE% remote_instance %INSTANCE%" db2 catalog ow_pro
```

- ・ エンタープライズ・サーバー上で、データベースごとにODBCデータ・ソースを作成する必要があります。create_db.batファイルを参照してください。または、[コントロール パネル]を介してODBCデータ・ソースを構成します。
- ・ db2cli.iniファイルを編集した場合は、DB2で行末のキャリッジ・リターン(改行)文字の欠落が認識されることに注意してください。各行末で必ず[Enter]キーを押してください。create_dbシェルによりdb2cli.iniが更新されます。
- ・ db2cli.iniファイルを編集した場合は、DB2で行末のキャリッジ・リターン(改行)文字の欠落が認識されることに注意してください。各行末で必ず[Enter]キーを押してください。create_db.batによりdb2cli.iniが更新されます。

クライアントからデータベースにアクセスするステップは、基本的には同じです。クライアントからこれらのコマンドを実行できるように、スクリプトcatalog_db.sqlが用意されています。catalog_db.sqlスクリプトを正常に実行するには、ローカル・ドメイン内のadministratorsグループのメンバーであるアカウントを使用してサインオンします。クライアント上で、実際のデータベース名とエイリアスを1つのコマンドで指定して、各データベースをカタログ化します。

また、デバッグ時には、クライアント上のノード・ディレクトリとデータベース・ディレクトリをリストします。ノードがNAMED PIPESノードではなくTCPIPノードとして指定されていることを確認します。

クライアント上でODBCデータ・ソースを作成する必要があります。クライアント上のSQLLIBディレクトリ内

で、db2cli.iniファイルにエントリがあることを確認します。

パッケージのビルド/スペックのマージ

セントラル・オブジェクトの多数のローを読み取るプロセスの場合は、クライアントとサーバーの両方にV7 FixPack 4以上が必要です。

どちらが欠落していても、セントラル・オブジェクト・テーブルを読み取るプロセスは失敗し、APP_CTL_HEAPのメモリ不足を示すDB2 UDBエラーがjde.logに書き込まれます。DB2で行末のキャリッジ・リターン(改行)文字の欠落が認識されることに注意してください。各行末で必ず[Enter]キーを押してください。

エンタープライズ・サーバー上のリリース8.9の起動

リリース8.9サービスに対して定義したユーザーに、補助グループとしてOWSHAREが指定されているかどうかをチェックします。

アップグレード後のリリース8.9の修正

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [Installation Plannerの概要 - ページ](#) [135]
- ・ [Installation Plannerの実行 - ページ](#) [138]

Installation Plannerの概要

〈Installation Planner (インストール・プランナ)〉は、デプロイメント・サーバー上でシステム管理ツールとして実行されるリリース8.9アプリケーションであり、表示される指示に従ってリリース8.9を実行するマシンを構成できます。

〈Installation Planner〉フォームで次の要素のセットアップを行います。

- ・ [言語情報 - ページ](#) [135]
- ・ [ロケーション情報 - ページ](#) [135]
- ・ [デプロイメント・サーバー情報 - ページ](#) [136]
- ・ [エンタープライズ・サーバー情報 - ページ](#) [136]
- ・ [データ・ソース情報 - ページ](#) [137]

注意

ビジネス・データのみをアップグレードする場合は、修正済みのプロセスを実行します。詳しくは、「アップグレード・ユーティリティ」の「データのみをアップグレード」を参照してください。

言語情報

〈Installation Planner〉では、マスター・プランの作成時に代替言語または複数言語のインストール・プランを作成することができます。

- ・ システム・プロンプトに従って、各環境にインストールする言語を選択します。

アップグレードの場合は、コントロール・テーブルのマスター・セットにマージされるように、言語を初期プランに組み込んで言語テーブルをリリース8.9 Localデータベースにロードする必要があります。言語のアップグレードを実行する場合は、プラン作成段階に入る前に言語を適用してください。

ロケーション情報

ロケーションは、マシン、データベース、および環境からなるユーザー定義のグループです。広域ネットワーク(WAN)上で分散される構成には、複数ロケーションを使用することをお勧めします。

ロケーションには、基本ロケーションおよびリモート・ロケーションという2つのタイプがあります。基本ロケーションは、各インストール・プランに1つしか存在しません。これは、デプロイメント処理のプランを作成して実行する作業の中心となるロケーションです。基本ロケーションは親ロケーションを持たず、ロケーション・コードを使用しません。それぞれが親ロケーションとロケーション・コードを持つように階層化されたロケーションは、いくつでもセットアップすることができます。

インストール・プラン用のロケーションをセットアップするには、リリース8.9インストール・プログラムで、ロケーション、ロケーション記述、ロケーション・コード(2次ロケーションが存在する場合)、および親ロケーション(2次ロケーションが存在する場合)を指定する必要があります。

ロケーション・コードは、英数字3文字で指定するコードです。このロケーション・コードは、プランに含まれる2次ロケーション用のデータ・ソース名の一部として使用されます。ロケーションは、デプロイメント・ロケーション定義テーブル(F9654)に格納されます。

参照

- ・ リモート・ロケーションのセットアップについては「リモート・インストール・プランの作成」

デプロイメント・サーバー情報

デプロイメント・サーバーのプラン情報を設定するには、リリース8.9インストール・プログラムに対して、マシン名とディレクトリ共有名を指定する必要があります。この情報は、リリース・マスター(F00945)とオブジェクト・パス・マスター(F00942)に自動入力され、追加のデプロイメント・サーバー情報はマシン・マスター(F9650)とマシン明細テーブル(F9651)に格納されます。

エンタープライズ・サーバー情報

エンタープライズ・サーバーのプランを作成するには、〈Installation Planner〉でエンタープライズ・サーバー名、そのプラットフォームのタイプ、および使用するデータベースを指定する必要があります。〈Installation Planner〉によってマシン・テーブル(F9650およびF9651)が自動入力され、エンタープライズ・サーバーに対するデータ・ソースが定義されます。データ・ソース情報は、データ・ソース・マスター(F98611)に格納されます。

クラスタ・ソフトウェアを使用する場合は、リリース8.9をインストールする前にいくつか考慮すべき事項があります。

参照

- ・ インストール前の準備については『サーバー & ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「クラスタ上のERP 9.0」

エンタープライズ・サーバーごとに、次のデータ・ソースをセットアップします。

- ・ サーバー・マップ

エンタープライズ・サーバー上での分散処理用にレプリケートされるシステム・テーブルのデータ・ソースです(machinename - B9 Server Mapなど)。このデータ・ソースは各エンタープライズ・サーバー

に固有なため、エンタープライズ・サーバーごとに1つずつ作成する必要があります。

データ・ソース情報

ここでは、このリリースで使用されるデータ・ソース設定について説明します。XeとERP 8.0のデータ・ソースはどちらも、旧リリースのSystemデータ・ソースからOneWorld Planner - B9にコピーするときに、リリース8.9データ・ソースに自動的に変換されます。

〈Installation Planner〉を実行する際、次のデータ・ソースはすべての環境で共有するため一度に設定します。

- ・ システム

システム・テーブルのデータ・ソース。このデータ・ソースは、リリース8.9によって識別されます (System - B9など)。

- ・ オブジェクト・ライブラリアン

オブジェクト・ライブラリアン・テーブルのデータ・ソース。このデータ・ソースは、リリース8.9によって識別されます (Object Librarian - B9など)。

- ・ データ辞書

データ辞書テーブルのデータ・ソース。このデータ・ソースは、リリース8.9によって識別されます (Data Dictionary - B9など)。

環境ごとに次のデータ・ソースをセットアップします。

- ・ コントロール・テーブル

コントロール・テーブルのデータ・ソース。複数をセットアップできます (Control Tables - Prod、Control Tables - Test、Control Tables - CRPなど)。

- ・ セントラル・オブジェクト

セントラル・オブジェクト・スペック・テーブルのデータ・ソース。このデータ・ソースは、ERPのタイプとバージョン番号によって識別されます。また、複数組のセントラル・オブジェクト・スペックをセットアップできます (Central Objects - PD9、Central Objects - JD9、Central Objects - DV9、Central Objects - PY9など)。ただし、このデータ・ソースは、パス・コードごとに1つしかセットアップできません。

- ・ ビジネス・データ

ビジネス・データ・テーブルのデータ・ソース。複数組のビジネス・データ・データ・ソースをセットアップできます (Business Data - CRP、Business Data - PROD、Business Data - TEST、Business Data - JDEなど)。

- ・ バージョン

バージョン・リスト・テーブル(F983051)に対するデータ・ソース。複数組のバージョン・テーブルをセットアップできます (Versions - PD9、Versions - JD9、Versions - DV9、Versions - PY9など)。ただし、こ

のデータ・ソースは、パス・コードごとに1つしかセットアップできません。

参照

- ・ 個々のテーブルとその用途については、『インストール・リファレンス・ガイド』の「主要なテクニカル・テーブル」

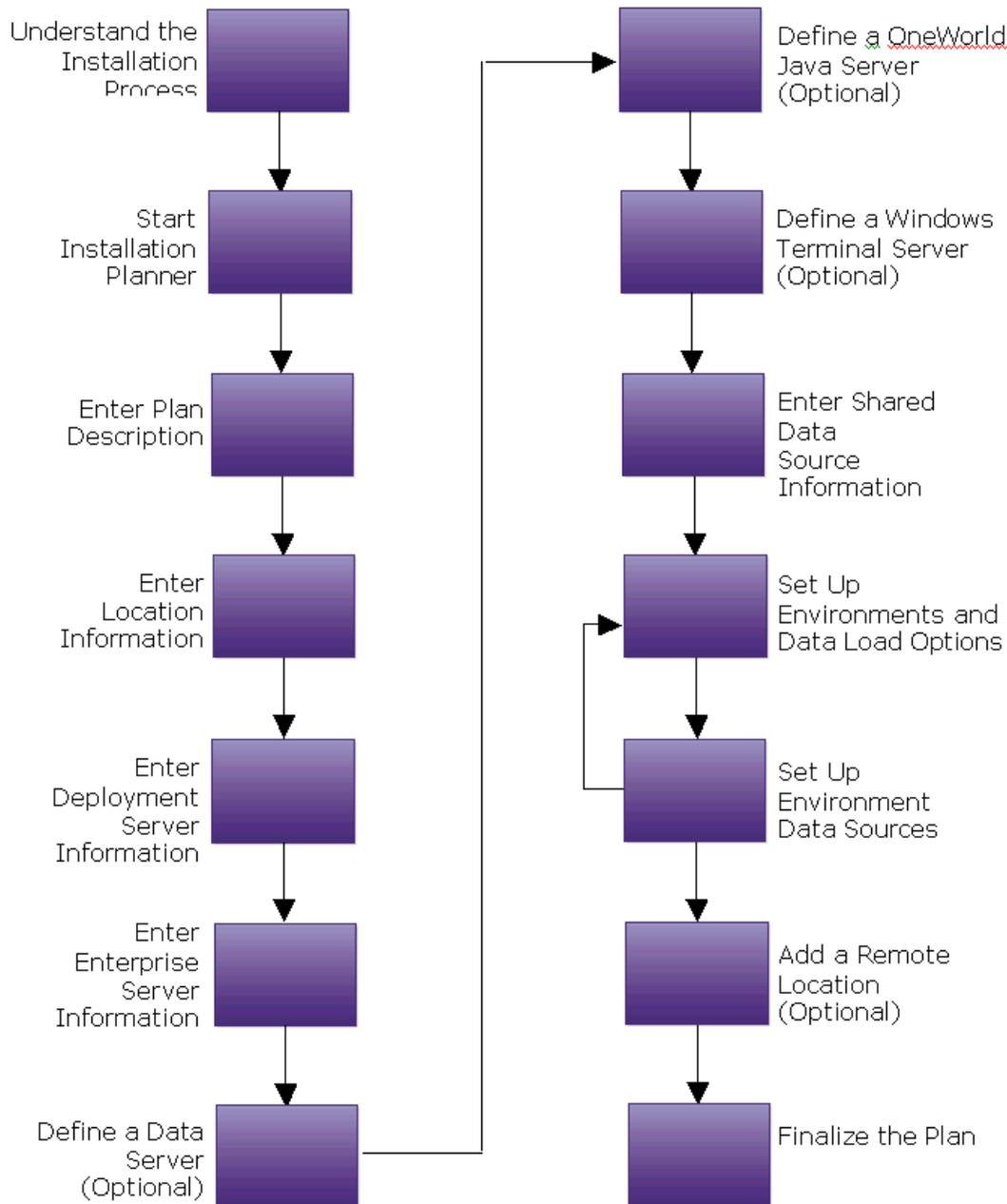
Installation Plannerの実行

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [インストール・プロセスの理解 - ページ \[139\]](#)
- ・ [Installation Plannerの開始 - ページ \[143\]](#)
- ・ [プラン記述の入力 - ページ \[144\]](#)
- ・ [ロケーション情報の入力 - ページ \[148\]](#)
- ・ [デプロイメント・サーバー情報の入力 - ページ \[150\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ \[152\]](#)
- ・ [マシン/サーバー・タイプの定義 - ページ \[158\]](#)
- ・ [共有データ・ソース情報の入力 - ページ \[165\]](#)
- ・ [環境のセットアップ - ページ \[168\]](#)
- ・ [環境のデータ・ソースのセットアップ - ページ \[175\]](#)
- ・ [リモート・ロケーションの追加 - ページ \[181\]](#)
- ・ [インストール・プランの確定 - ページ \[181\]](#)

次のフロー・チャートは、カスタム・インストール・プラン作成プロセスの概要を示しています。

Planning The Installation/Upgrade (Custom Plan)



インストール・プロセスの理解

〈Installation Planner〉は、デプロイメント・サーバー上でシステム管理ツールとして実行されるリリース8.9アプリケーションであり、表示される指示に従ってリリース8.9を実行するマシンを構成できます。

ここでは、カスタム・インストール・プランを定義する手順について説明します。データベース・タイプやエンタープライズ・サーバー・タイプなど、〈Installation Planner〉フォームで指定する情報によって、残りのフ

フォームに表示される情報が決まります。また、〈Installation Planner〉の処理オプションも、プランのセットアップ時に表示される選択肢に影響します。処理オプションについては、「Installation Plannerの処理オプションの検討」を参照してください。

注意

既存のインストール・プランの各部を削除するには、「Installation Plannerのユーティリティ」の「インストール・プランの各部の削除」を参照してください。

ここで掲載されているフォームは、Intel搭載のWindows 2000エンタープライズ・サーバー上でデータベースとしてSQL Serverを使用することを前提としています。OracleまたはDB2 UDBを使用する場合、実際に各フォームに表示される情報は異なります。

アップグレード前の必須プロセスに関する基本情報

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、リリース8.9のJDEPLANまたはDEP9環境にユーザーJDEでログオンします(どちらの環境を使用するかは、各ステップで説明します)。
前提条件	デプロイメント・サーバーがインストールされていることと、最新のサービス・パック、サービス・パック(1回のみ有効)、プランナ・アップデート、およびテーブル変換アップデートが、この順番でインストールされていることを確認します。プリスティン(JDEオリジナル)データベースがインストールされていることと、プリスティン・セントラル・オブジェクトがロードされていることを確認します。
同時に行うタスク	なし

アップグレード前の必須プロセス - プリスティン環境のアップグレード

アップグレード時には数百のテーブル変換が実行されるため、このプロセスはテーブル変換をサーバー上で実行するように変更されています。ソフトウェア・アップデートをサーバーに配信するために、次のプロセスを実行する必要があります。

注意

次のステップは、他の環境をアップグレードする前に完了してください。各ステップは記載されているとおりの順序で実行し、その完了を確認する必要があります。

- ・ プリスティン(JD9)環境のアップグレード・プランを作成します。
- ・ 「[Installation Plannerの開始 - ページ \[143\]](#)」の手順に従ってプリスティン専用のプランを作成します。
- ・ プリスティン(JD9)環境用に作成したアップグレード・プランを実行します。「Installation Workbenchの開始」の手順に従ってプリスティン(JD9)アップグレード・プランを選択します。

注意

-
- ・ プリステイン(JD9)環境のアップグレード時には、テーブル変換は実行されません。
 - ・ 〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉でプリステイン(JD9)アップグレード・プランを実行する間に、次の手順を実行できます。
-

- ・ エンタープライズ・サーバーにJD9とターゲットのパス・コードをインストールします。「エンタープライズ・サーバーのインストール」の手順に従って、すべてのプリンタ設定ステップを実行します。
-

注意

〈Installation Workbench〉でプリステイン(JD9)環境のアップグレード・プランを実行する間に、このステップを実行できます。

- ・ エンタープライズ・サーバーに、最新のサービス・パックとサービス・パック(1回のみ有効)をインストールします(デプロイメント・サーバーにインストールしたのと同じレベルのサービス・パックをインストールする必要があります)。
-

注意

このステップも〈Installation Workbench〉プロセス中に実行できます。

- ・ エンタープライズ・サーバー上でリリース8.9サービスが開始され、実行されているかどうかを確認します。
-

注意

次の各ステップに進む前に、〈Installation Workbench〉を完了する必要があります。

- ・ 〈Software Updates(ソフトウェアの更新)〉アプリケーションを使用して、デプロイメント・サーバーにインストールしたプランナ・アップデートをプリステイン(JD9)環境に適用します。手順については、『ソフトウェア・アップデート・インストール・ガイド』を参照してください。
 - ・ 〈Software Updates〉アプリケーションを使用して、デプロイメント・サーバーにインストールしたテーブル変換アップデートをプリステイン(JD9)環境に適用します。手順については、『ソフトウェア・アップデート・インストール・ガイド』を参照してください。
 - ・ リリース8.9 Update 0 CDの内容をデプロイメント・サーバーにインストールします。手順については、『ソフトウェア・アップデート・インストール・ガイド』を参照してください。
 - ・ 〈Software Updates〉アプリケーションを使用して、デプロイメント・サーバーにインストールしたアップデート0をプリステイン(JD9)環境に適用します。手順については、『ソフトウェア・アップデート・インストール・ガイド』を参照してください。
-

注意

次の手順は、すべてのソフトウェア・アップデートを適用し終わるまで実行できません。

- ・ データ辞書のDEP9 OCMマッピングを変更します。
 - ・ JDEPLAN環境にログオンします。
 - ・ [FastPath(略式コマンド)]に“OCM”と入力し、〈Machine Search and Select(マシンの検索/選択)〉フォームでOneWorld Planner - B9データ・ソースを選択します。
 - ・ DEP9環境とData Dictionary - B9データ・ソースのマッピングを検索し、選択してコピーします。
 - ・ 新規マッピングがData Dictionary - JDEを指しているかどうかを確認します。
 - ・ DEP9環境とData Dictionary - JDEデータ・ソースの新規マッピングをアクティブ化します。
 - ・ リリース8.9を終了します。
- ・ プリステイン(JD9)環境用のクライアント/サーバーのフル・パッケージをビルドして配布します。
 - ・ DEP9環境にログオンします。
 - ・ JD9用のクライアント・サーバーのフル・パッケージをビルドします。手順については、『パッケージ管理』ガイドを参照してください。
 - ・ サーバー・パッケージをプリステイン(JD9)環境に配布します。手順については、『パッケージ管理』ガイドを参照してください。
 - ・ エンタープライズ・サーバー上で、JD9パス・コードからアップグレード先パス・コード(DV9、PY9、PD9)に、specsディレクトリとbin32ディレクトリをコピーします。
 - ・ ディレクトリPeopleSoft¥B9|Planner¥specsを参照します。次のファイルをデプロイメント・サーバー上のすべての環境のパス・コード(PeopleSoft¥B9¥PD9¥specsなど)にコピーします。各ファイルは、すでにターゲット・ディレクトリに存在します。ターゲット・ディレクトリにあるファイルを上書きしてください。
 - ・ ddclmn.ddb
 - ・ ddclmn.xdb
 - ・ dddict.ddb
 - ・ dddict.xdb
 - ・ ddpkeyd.ddb
 - ・ ddpkeyd.xdb
 - ・ ddpkeyh.ddb
 - ・ ddpkeyh.xdb
 - ・ ddtabl.ddb
 - ・ ddtabl.xdb

- ・ glbtbl.ddb
 - ・ glbtbl.xdb
- ・ データ辞書のオリジナルのDEP9 OCMマッピングを復元します。
 - ・ JDEPLAN環境にログオンします。
 - ・ [FastPath]に“OCM”と入力し、〈Machine Search and Select〉フォームでOneWorld Planner – B9 データ・ソースを選択します。
 - ・ DEP9環境とData Dictionary – B9データ・ソースのマッピングを検索して選択します。
 - ・ DEP9環境とData Dictionary – B9データ・ソースのオリジナルのマッピングをアクティブ化します。
 - ・ 上記のステップをすべて完了した後、「Installation Plannerの開始」に進み、指示に従ってターゲット環境 (DV9、PD9、PY9) をアップグレードします。

カスタム・インストール・プランの定義に関する基本情報

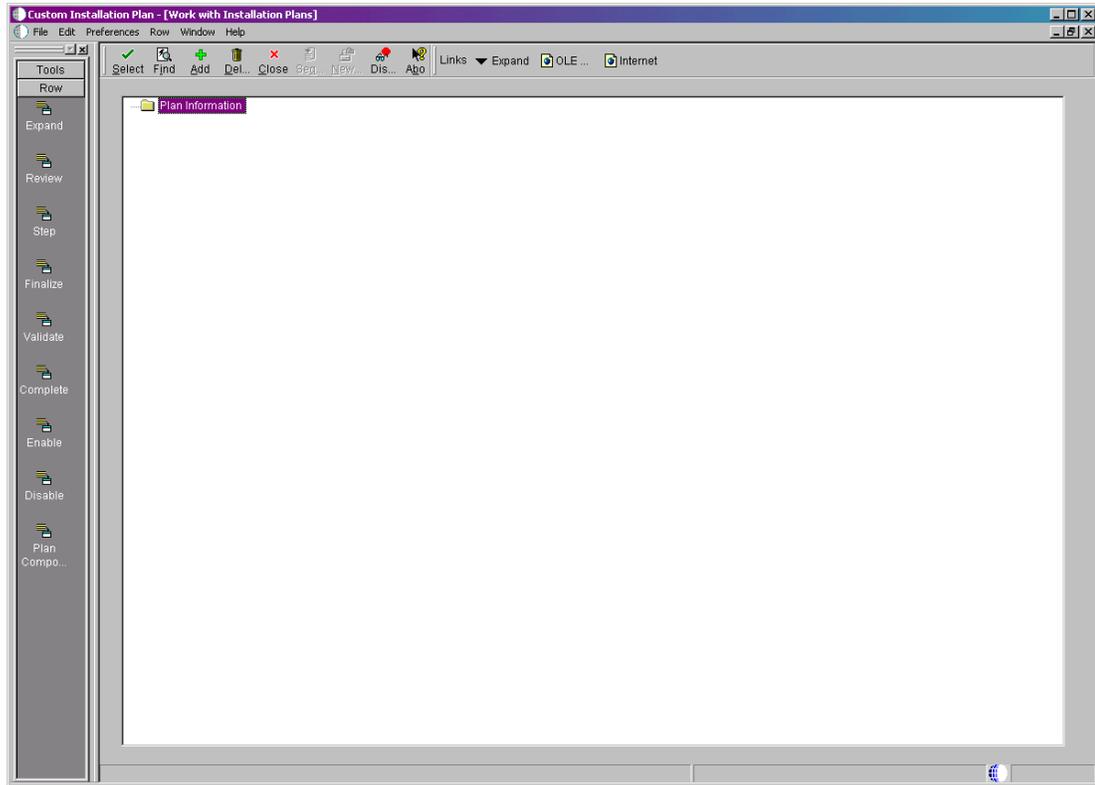
次の表は、〈Installation Planner〉フェーズ全体の基本情報を示しています。

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDEでリリース8.9のプランナ環境にログオンします。
前提条件	デプロイメント・サーバーがインストールされているかどうかを検証します。
同時に行うタスク	データベース自動入力スクリプトloadallを実行できます。

Installation Plannerの開始

▶ 〈Installation Planner〉を開始するには

1. ユーザーJDEでリリース8.9にログオンします。
2. プランナ環境(JDEPLAN)を選択します。
3. 〈System Installation Tools (システム・インストール・ツール)〉メニュー (GH961) にアクセスします。
4. 〈System Installation Tools〉メニューで〈Custom Installation Plan (カスタム・インストール・プラン)〉をダブルクリックします。

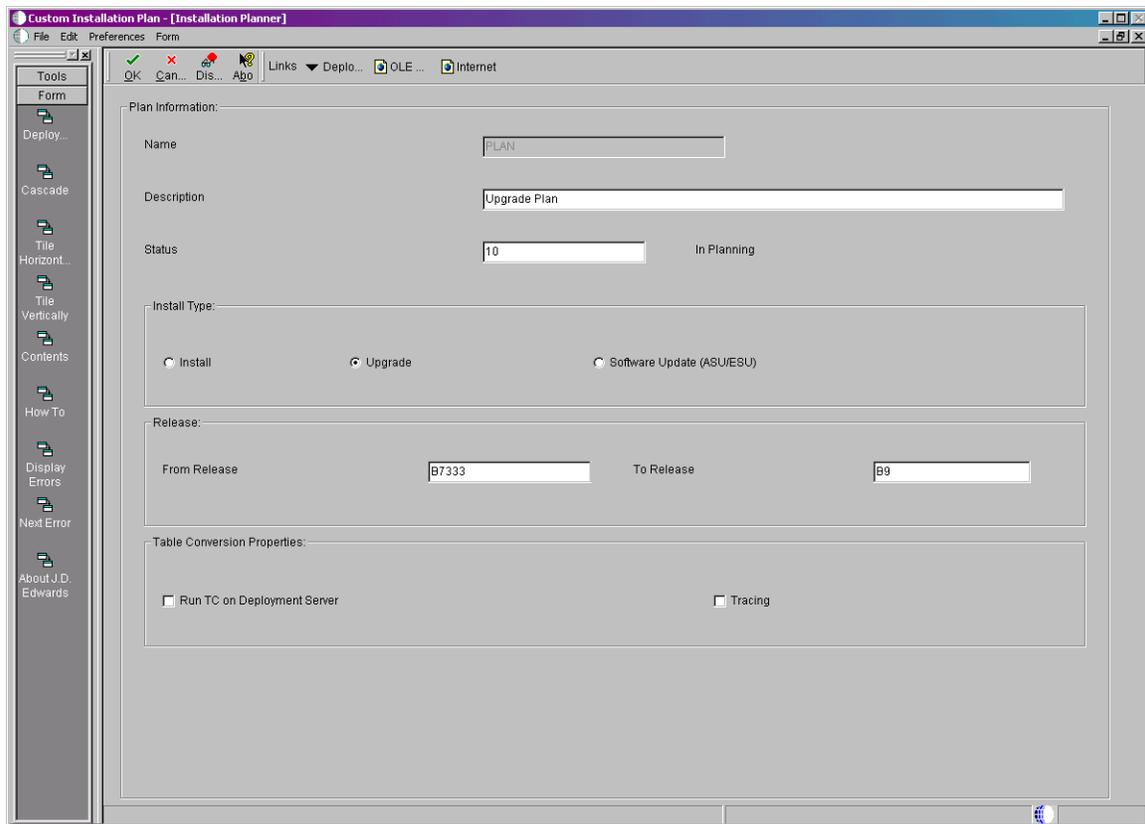


5. 〈Work with Installation Plans(インストール計画の処理)〉で[Add(追加)]をクリックします。

プラン記述の入力

〈Installation Planner〉で、プラン名と記述、インストール・タイプ(アップグレード)、旧リリース(PTF/Cum アップデート・レベルまで)、および組み込む言語(存在する場合)など、基本プラン情報を入力します。

▶ プラン記述を入力するには



1. 〈Installation Planner〉で、次のフィールドに情報を入力します。

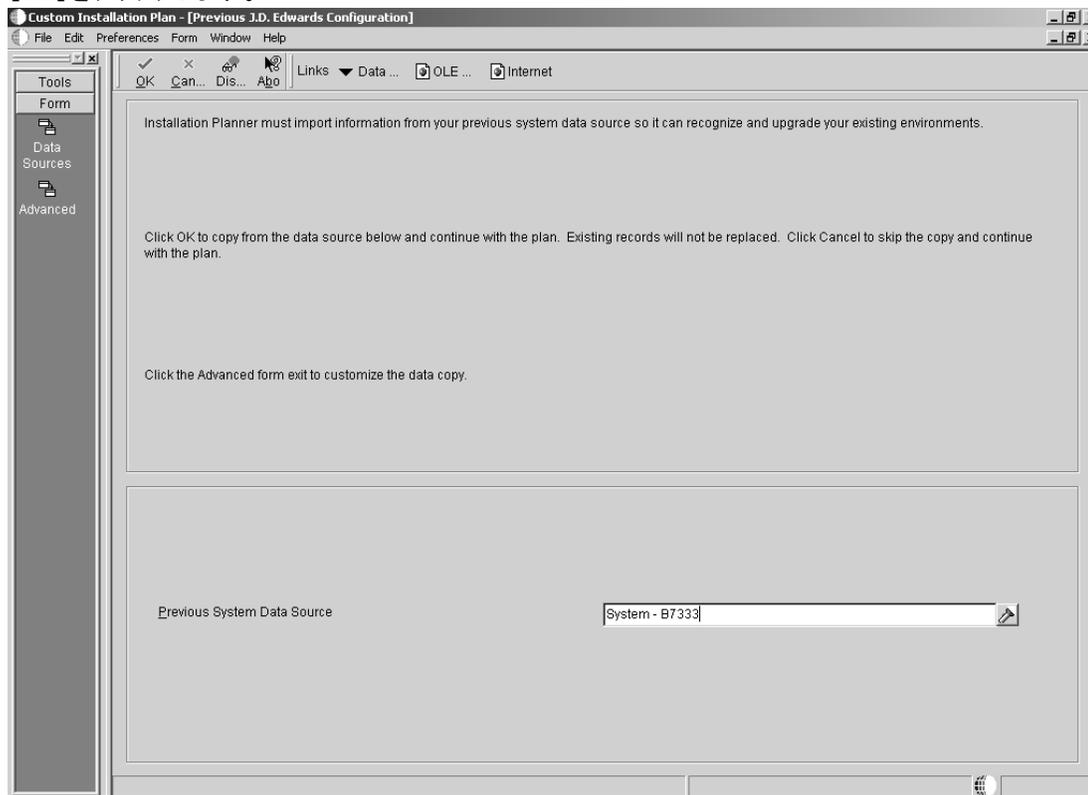
- ・ Name (名前)
プラン名を入力します。
- ・ Description (記述)
プランの記述を入力します。
- ・ Status (状況)
10 (デフォルト値) を選択します。
- ・ Install Type (インストール・タイプ)
[Upgrade (アップグレード)] をクリックします。
- ・ From Release (リリース (From))
アップグレードする ERP 8.0 のリリース番号を入力します (たとえば "b733x" と入力します。x は既存リリースの PTF/Cum 番号です)。
- ・ To Release (リリース (To))
リリース番号が B9 (デフォルト値) に設定されていることを確認します。

- ・ Table Conversion Properties (テーブル変換プロパティ)
 [Run TC on Deployment Server (デプロイメント・サーバーでテーブル変換)] ボックスを有効にします。デフォルトでは、エンタープライズ・サーバー上で実行されます。
- ・ Tracing (トレース)
 デバッグ・ログ機能を有効化します。
- ・ Include Languages (言語を含む)
 代替言語をインストールする場合は [Yes] を選択します。

注意

SQL Server の場合は、インポートされたデータ・ソースの [Database Name (データベース名)] フィールドが自動入力されていることを確認します。自動入力されていない場合は、続行する前に各データ・ソース用のデータベース名を入力します。

2. [OK] をクリックします。



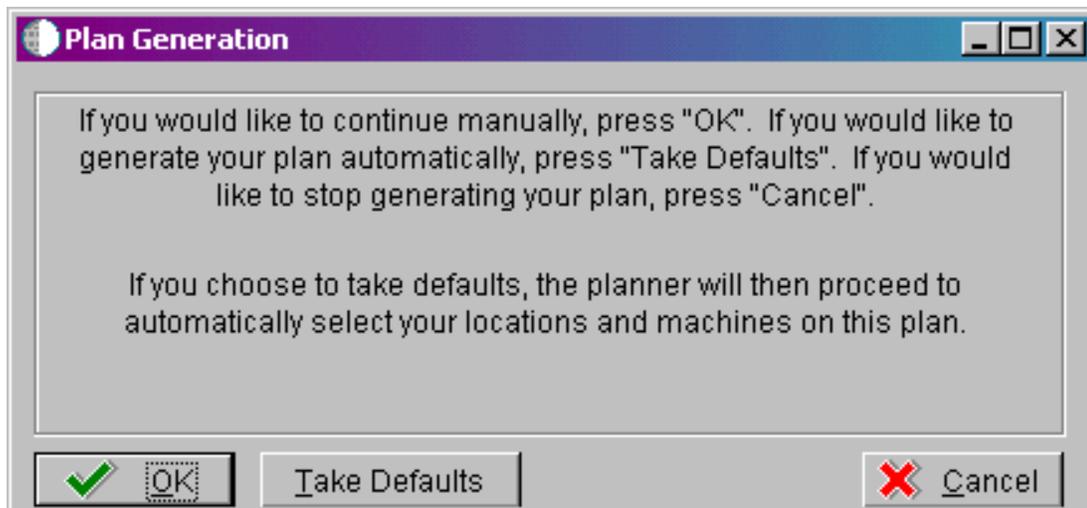
3. このフォームでは、旧システム・データ・ソースから情報がインポートされます。アップグレード元となる旧システム・データ・ソースを事前に自動入力しておく必要があります。〈Data Sources (データ・ソース)〉フォームを使用して、データ・ソースが正しく設定されているかどうかを確認します。
4. 設定が正しい場合は、[OK] をクリックしてステップ [ステップ 7](#) [147] に進みます。プロセスの詳細を制

御する場合は、[Advanced(上級)]フォーム・エグジットをクリックして次のステップに進みます。

注意

[Release Master(リリース・マスター)]ボックスが無効になっている場合がありますが、この時点で既にコピーされています。

5. 旧リリースからコピーするオブジェクトを選択し、各オブジェクトが常駐するデータ・ソースを指定します。
6. [OK]をクリックします。
7. 次のオプションのうち1つを選択します。



- ・ このフォームから、ソフトウェアの旧バージョンで定義したプランにロケーションとマシンを自動的に入力するオプションを選択できます。

8. プランの生成方法として次のどちらかを選択します。

- ・ プランを手作業で作成するには、[OK]をクリックして「[ロケーション情報の入力 - ページ \[148\]](#)」に進みます。
- ・ 旧バージョンからロケーションとマシンを自動入力させるには、[Take Defaults (デフォルトを使用)]をクリックします。

旧システム・データ・ソースから取り込まれたマシン情報が、現行のプランに入力されます。ロケーション、デプロイメント・サーバー、エンタープライズ・サーバー、およびマシン/サーバーの入力に関するセクションをスキップし、「[共有データ・ソース情報の入力 - ページ \[165\]](#)」に進んでください。

- ・ プランを終了するには、[Cancel (キャンセル)]をクリックします。

ロケーション情報の入力

基本的なプラン・インストール情報の入力後に、新規プランのロケーションの入力または既存プランのロケーションの選択を求めるプロンプトが表示されます。ロケーションにより、複数階層環境で使用する関連デプロイメント・サーバーがグループ化されます。

一度定義したロケーションは、プランを削除しても削除されません。ロケーションを削除するには、「Installation Plannerのユーティリティ」の「インストール・プランの各部の削除」を参照してください。

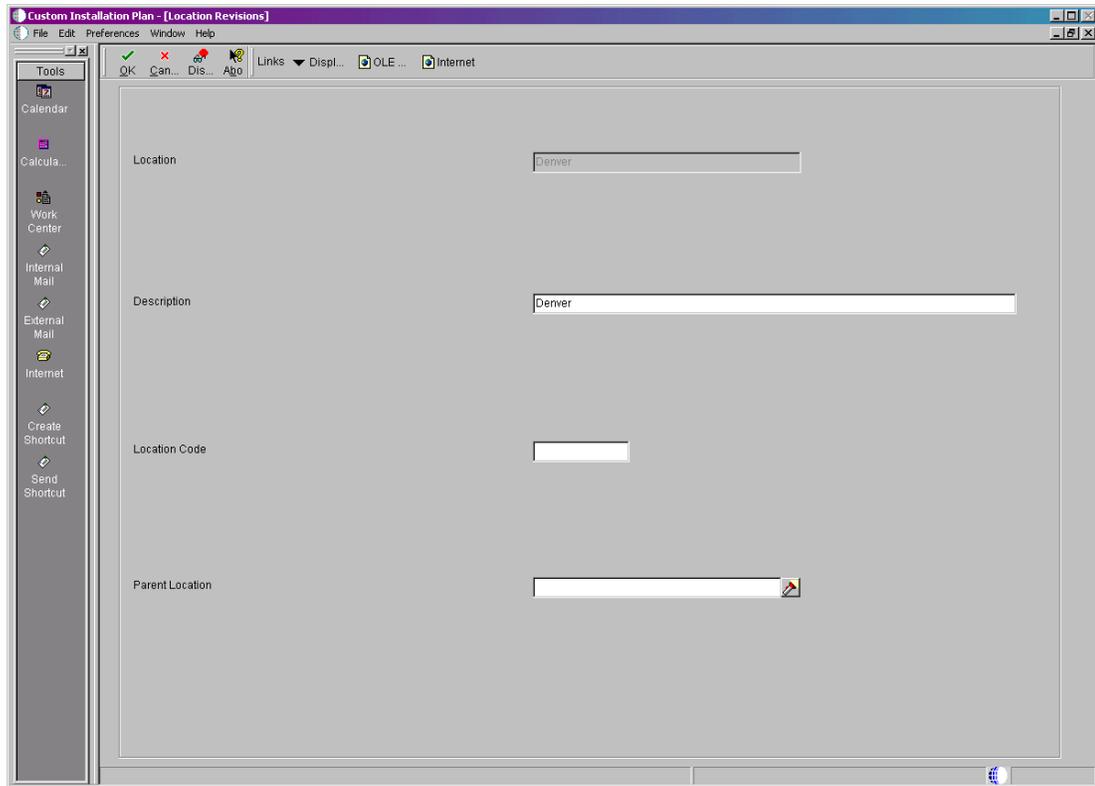
▶ ロケーション情報を入力するには

新規ロケーション情報を入力するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [Select (選択)]をクリックし、〈Location Search (ロケーションの検索)〉フォームから既存のロケーシ

ョンを選択します。

新規ロケーションを追加するには[Yes]をクリックします。



2. <Location Revisions(ロケーションの改訂)>フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- Location(ロケーション)

このプランを適用するロケーションを入力します。ロケーションには、市、本社、または部門を指定できます。

- Description

このロケーションの記述を入力します。

- Location Code(ロケーション・コード)

基本ロケーションの場合は、このフィールドを空白にします(セカンダリ・ロケーションの場合にのみ必須です)。

- Parent Location(親ロケーション)

基本ロケーションの場合は、このフィールドを空白にします(セカンダリ・ロケーションの場合

にのみ必須です)。

3. [OK]をクリックします。

デプロイメント・サーバー情報の入力

プランのロケーションを指定した後に、このプランに使用するプライマリ・デプロイメント・サーバーに関する情報を指定します。リリース8.9では複数のデプロイメント・サーバーを定義できますが、この時点ではプライマリ・デプロイメント・サーバーを1つだけ定義します。プライマリ・デプロイメント・サーバーを定義するには、既存サーバーのリストから選択する方法と、新規サーバー情報を入力する方法があります。

▶ デプロイメント・サーバー情報を入力するには

新規デプロイメント・サーバーの情報を入力するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [Select]をクリックして旧リリースのデプロイメント・サーバーを選択するか、[OK]をクリックして新規デプロイメント・サーバー情報を入力します。

2. <Deployment Server Revisions (デプロイメント・サーバーの改訂)>フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Machine Name(マシン名)

デプロイメント・サーバー名がデフォルト値として表示されます。デプロイメント・サーバー名は10文字以内で指定する必要があります。

- ・ Description

記述を入力します。この記述には、このデプロイメント・サーバーが関連するロケーションと、これがプライマリ・サーバーかどうかという情報を含める必要があります。

- ・ Release(リリース)

“B9”(デフォルト値)を入力します。

- ・ Location

このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。リモート・ロケーションを追加していない場合、このフィールドはグレー表示されます。

- ・ Primary User(プライマリ・ユーザー)

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [Deployment(デプロイメント)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Primary Deployment Server(プライマリ・デプロイメント・サーバー)

サーバーの階層を指定します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
1	プライマリ・デプロイメント・サーバー(デフォルト値)
0	セカンダリ・デプロイメント・サーバー

- ・ Server Share Path(サーバー共有パス)

デプロイメント・サーバー上でリリース8.9をインストールしたサーバー共有パスが、デフォルトで表示されます。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。たとえばリリース8.9の場合は、パスの最後が¥b9となります。

4. [OK]をクリックします。

トラブルシューティング
タブのフィールドに無効な情報を入力すると、そのフィールド名の横に停止記号が表示されます。エラーの詳細を確認するには、フォーム右下隅の停止アイコンをクリックしてください。

5. 別のデプロイメント・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ [Yes]をクリックして新規デプロイメント・サーバーを追加します。

上記のステップを繰り返します。

- ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。

エンタープライズ・サーバー情報の入力

プランにエンタープライズ・サーバーを追加するには、次のタスクを完了してください。

- ・ [エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ \[152\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力 - ページ \[155\]](#)

エンタープライズ・サーバー情報の入力

デプロイメント・サーバー情報を指定した後に、このプランで使用するエンタープライズ・サーバーの情報をに入力します。

注意

エンタープライズ・サーバーの定義中に、ポート番号を定義する必要があります。同じリリースを実行するエンタープライズ・サーバーでは同じポート番号を使用できますが、2つの異なるバージョンのソフトウェアを実行するサーバーでは、2つの異なるポート番号を使用する必要があります。

▶ エンタープライズ・サーバー情報を入力するには

新規エンタープライズ・サーバーの情報を入力するか、既存情報を選択するかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [Select]をクリックして旧リリースのエンタープライズ・サーバーを選択するか、[OK]をクリックしてエンタープライズ・サーバーを追加します。

2. <Enterprise Server Revisions (エンタープライズ・サーバーの改訂)>フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- Machine Name

プライマリ・エンタープライズ・サーバー名を入力します。この名前は10文字以内で指定する必要があります。また、大文字と小文字が区別されます。

注意

クラスタ・ソフトウェアを使用する場合は、リリース8.9のインストール時に、サーバーのマシン名の1つではなく、そのクラスタ名をマシン名として入力してください。付加的な考慮事項については、『サーバー & ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「クラスタ上のERP 9.0」、およびクラスタ・ソフトウェアのマニュアルを参照してください。

- Description

マシンの記述を入力します。

- Release

“B9” (デフォルト値)を入力します。

- Host Type (ホスト・タイプ)

ビジュアル・アシストをクリックし、プランに追加するエンタープライズ・サーバーのタイプを選択します。

たとえば、Intel NTを選択します。

- ・ Location

このフィールドには、このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

- ・ Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [Enterprise(エンタープライズ)]タブで、次のフィールドに情報を入力するか、検証します。

- ・ Port Number(ポート番号)

注意

ポート番号を6011以外の値に変更する場合は、この設定をエンタープライズ・サーバーとクライアント・サーバーのjde.iniファイルでも変更する必要があります。

- ・ Logical Machine Name(論理マシン名)

このフィールドのデフォルト値の情報は、ホスト・タイプの入力時に設定されます。

- ・ Database Type(データベース・タイプ)

次の値のうち1つを入力します。

値	説明
O	Oracle
L	SQL Server OLEDB
W	DB2 UDB

SQL Serverの場合は、OLEDBを使用することをお勧めします。

注意

リリース8.9のAutoPilotは、SQL Server OLEDBとMSDE OLEDBの両方をサポートしています。

- ・ Server Map Data Source(サーバー・マップ・データ・ソース)

このフィールドのデフォルト値は、ホスト・タイプの入力時にmachinename - B9 Server Mapに設定されます。machinenameはマシン名です。

- ・ Deployment Server Name(デプロイメント・サーバー名)

ビジュアル・アシストを使用して、このエンタープライズ・サーバーの接続先となるデプロイメント・サーバーの名前を指定します。このフィールドにはデフォルトのデプロイメント・サーバー名が設

定されますが、必要に応じて変更できます。

- ・ Installation Path(インストール・パス)

エンタープライズ・サーバー上でリリース8.9をインストールするインストール・ディレクトリ・パスを入力します。これがリリース8.9固有のパスであることを確認してください。次に例を示します。

Windowsの場合は、c:\PeopleSoft\ddp\9となります。

注意

パスには、ドライブ名(x:など)を追加する必要があります。

4. [OK]をクリックします。

データ・ソースを定義するか、またはデフォルトのデータ・ソースを使用するかを確認するメッセージ・ボックスが表示されます。

後述の「カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには」に進みます。

エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力

エンタープライズ・サーバー情報を指定した後に、このプランで使用するエンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報を入力します。サーバー・データ・ソースには、サーバーでUBEを実行できるようにシステム構成ファイルが保持されます。

次のタスクを完了してください。

- ・ [手順 6 \[155\]](#)
- ・ [手順 7 \[156\]](#)
- ・ [手順 8 \[156\]](#)
- ・ [手順 9 \[157\]](#)

▶ カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには

追加したエンタープライズ・サーバーについて、カスタム・データ・ソースを入力するか、デフォルトのデータ・ソースを使用するかを確認するプロンプトが表示されます。

1. 次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ [OK]をクリックしてカスタム・データ・ソースを入力します。

「[手順 8 \[156\]](#)」に進んでください。

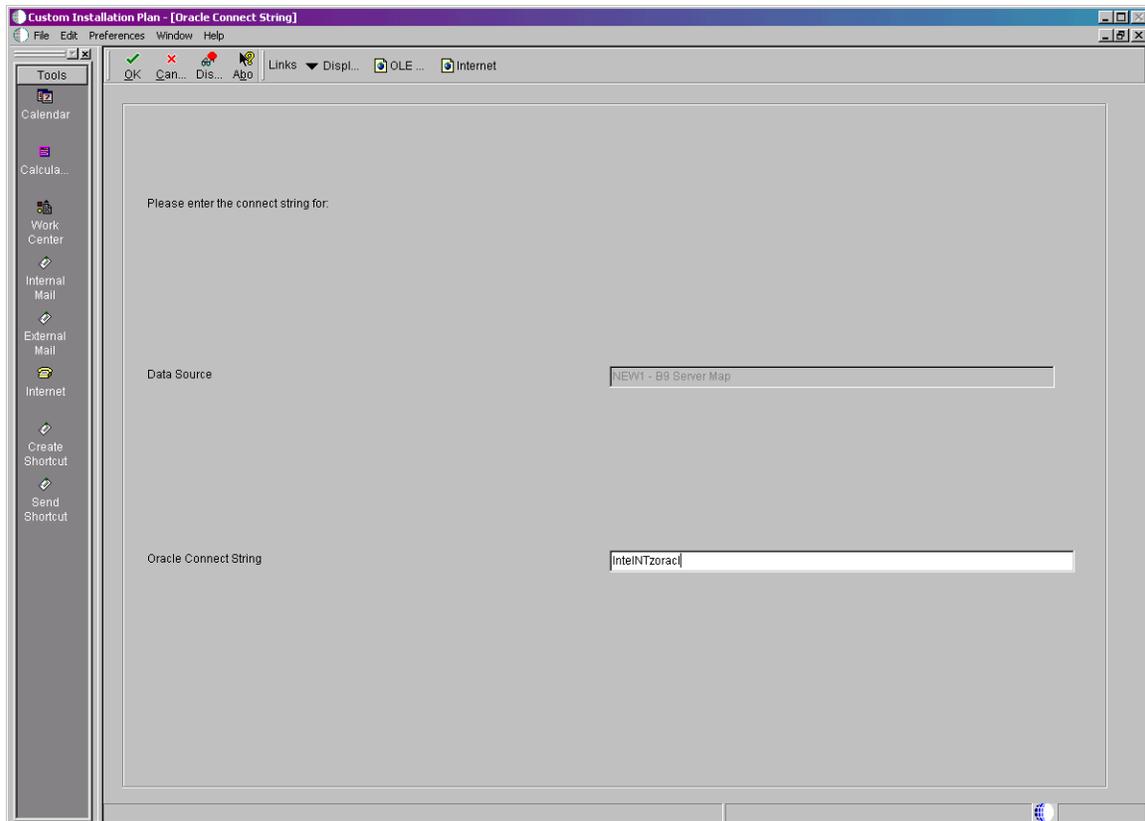
- ・ [Take Defaults]をクリックしてデフォルトのデータ・ソースを受け入れます。このオプションを選択

すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。

2. Oracleを使用している場合は、「手順 7 [156]」に進みます。

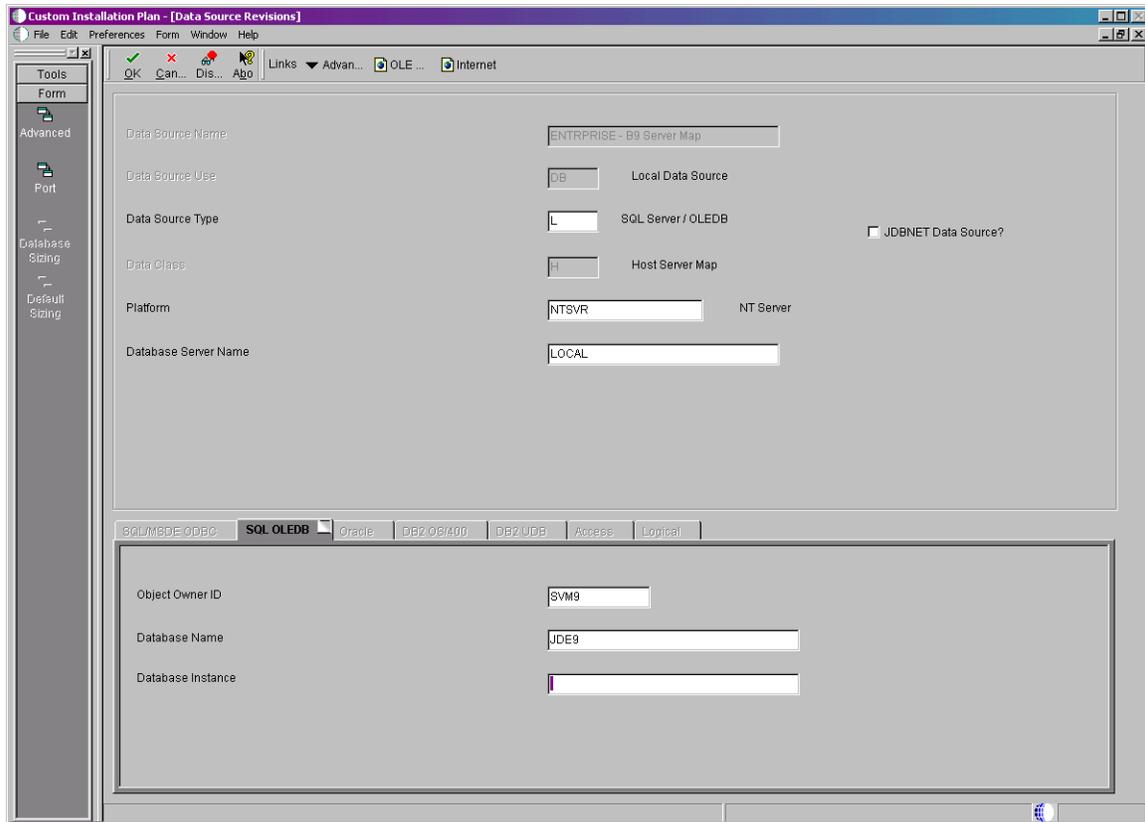
SQL ServerまたはDB2 UDBを使用している場合は、「手順 9 [157]」に進みます。

▶ Oracle接続文字列を入力するには(Oracleのみ)



1. <Oracle Connect String(Oracle接続文字列)>で、エンタープライズ・サーバーの接続文字列を入力し、[OK]をクリックします。
2. 「手順 9 [157]」に進んでください。

▶ カスタム・サーバー・マップ・データ・ソース情報を検証するには



1. 〈Data Source Setup(データ・ソースの設定)〉で、サーバー・マップ・ソース情報を検証します。

データ・ソースに関する考慮事項

データ・ソースはあらかじめ定義されています。ただし〈Installation Planner〉の実行時には、使用中のシステム固有の構成が反映されるように、データ・ソース情報の一部修正を必要とする場合があります。

2. [OK]をクリックします。

▶ 別のエンタープライズ・サーバーを追加するには

別のエンタープライズ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ 別のエンタープライズ・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ [152]」のステップを繰り返します。
 - ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No] をクリックします。
〈Machine/Server Types(マシン/サーバー・タイプ)〉フォームが表示されます。

マシン/サーバー・タイプの定義

エンタープライズ・サーバーのセットアップを完了後に、マシン/サーバー・タイプを定義します。次のタスクを完了してください。

- ・ [マシン/サーバー・タイプの指定 - ページ \[158\]](#)

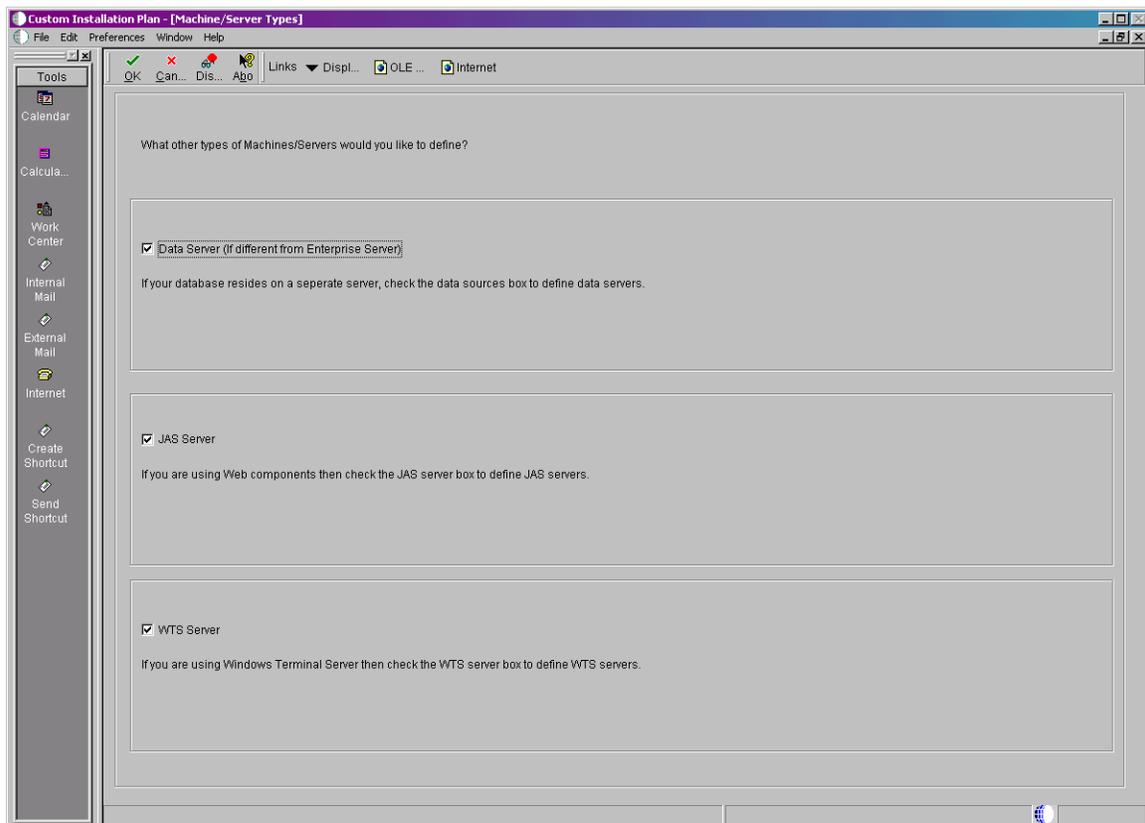
注意

〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、このタスクは必須です。

- ・ 「[データ・サーバーの定義\(任意\) - ページ \[159\]](#)」(エンタープライズ・サーバーと異なる場合)
- ・ [Javaサーバーの定義\(任意\) - ページ \[161\]](#)
- ・ [Windowsターミナル・サーバーの定義\(任意\) - ページ \[163\]](#)

マシン/サーバー・タイプの指定

▶ **マシン/サーバー・タイプを指定するには**



- ・ 〈Machine/Server Types〉で、定義するマシン/サーバーのタイプを次のように指定します。

- ・ サーバーを追加するには、必要なサーバー・オプションを有効にして[OK]をクリックします。「データ・サーバーの定義(任意) - ページ [159]」、「Javaサーバーの定義(任意) - ページ [161]」、「Windowsターミナル・サーバーの定義(任意) - ページ [163]」に進んでください。
- ・ これらのサーバーをまったく追加しない場合は、各オプションを無効にして[OK]をクリックし、「共有データ・ソース情報の入力 - ページ [165]」に進みます。

データ・サーバーの定義(任意)

▶ データ・サーバーを定義するには

〈Machine/Server Types〉フォームで[Data Server(データ・サーバー)]を有効にすると、データ・サーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [OK]をクリックして次のタスクに進みます。

The screenshot shows a dialog box titled "Custom Installation Plan - [Data Server Revisions]". It has a menu bar (File, Edit, Preferences, Form, Window, Help) and a toolbar with buttons for OK, Cancel, Dismiss, and Abort. The main area contains several input fields: "Machine Usage" (value: 25), "Machine Name" (value: DATA1), "Description" (value: Data server machine), "Release" (value: B9), "Host Type" (value: 50 Intel NT), "Location" (value: Denver), and "Primary User" (value: JDE). Below these fields are tabs for "Workstation", "Deployment", "Enterprise", "Data", "JAS", and "WFE". The "Data" tab is selected, showing a "Data Source Type" field with value "L" and "SQL Server / OLEDB". A vertical toolbar on the left side of the dialog lists various actions like "Form", "Environ...", "Generate Scripts", "Generate Set Map", "OCM", "Path Code", "Data", "Foundat...", and "Help".

2. 〈Data Server Revisions(データ・サーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Machine Usage(マシン用途)

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の25は、これがデータ・サーバーであることを示します。

- ・ Machine Name

データ・サーバー名を入力します。デプロイメント・サーバー名は10文字以内で指定する必要があります。

- ・ Description

マシンの記述を入力します。

- ・ Release

インストールするソフトウェアのリリース番号(B9など)を入力します。

- ・ Host Type

プランに追加するデータ・サーバーのタイプを選択します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
10	iSeries
20	HP 9000
25	Sun Solaris
30	RS/6000
50	Windows 2000 (Intel)
80	Client - NT
90	Client - Win NT

- ・ Location

このフィールドには、このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

- ・ Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [Data(データ)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Data Source Type(データ・ソース・タイプ)

データ・ソースのタイプを選択します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
O	Oracle
L	SQL Server OLEDB
W	DB2 UDB

SQL Serverの場合は、OLEDBを使用することをお勧めします。

注意

リリース8.9のAutoPilotは、SQL Server OLEDBとMSDE OLEDBの両方をサポートしています。

4. [OK]をクリックします。
5. 別のデータ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
 - ・ 別のデータ・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「データ・サーバーの定義(任意) - ページ [159]」のステップを繰り返します。
 - ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No] をクリックします。

Javaサーバーの定義(任意)

▶ Javaサーバーを定義するには

〈Machine/Server Types〉フォームで[JAS Server(JASサーバー)]を有効にすると、JASサーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [OK]をクリックして次のタスクに進みます。

The screenshot shows a software configuration window titled "Custom Installation Plan - [JAS Server Revisions]". The window has a menu bar (File, Edit, Preferences, Form, Window, Help) and a toolbar with icons for OK, Cancel, Dismiss, and Abort. A sidebar on the left contains various tool options like "Form", "Environment...", "Generate Scripts", etc. The main area is divided into two sections. The top section, under the "JAS" tab, contains fields for: Machine Usage (30), Machine Name (JAVA), Description (Java server machine), Release (99), Host Type (50 Intel NT), Location (Denver), and Primary User (JDE). The bottom section contains fields for: Primary JAS Server (1), Protocol, Server URL, Port Number (80), Default Login (jide/serve!html.login), and Installation Path.

2. 〈JAS Server Revisions (JASサーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに情報を入力します。

・ Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の30は、これがJavaサーバーであることを示します。

・ Machine Name

Javaサーバー名を入力します。この名前は、大文字と小文字が区別されます。また、10文字以内で指定する必要があります。

・ Description

マシンの記述を入力します。

・ Release

インストールするソフトウェアのリリース番号 (B9など) を入力します。

・ Host Type

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の50は、サーバー・タイプがIntel NTであることを示します。正しいサーバー・タイプを選択してください。

・ Location

このフィールドには、このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

・ Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [JAS] タブで次のフィールドに情報を入力します。

・ Primary JAS Server (プライマリJASサーバー)

システム・コードにより、フォームを指すWebショートカットが添付されたメール・メッセージが生成される場合、そのWebショートカットはプライマリJASサーバーを指します。〈Installation Planner〉で定義するJASサーバーのうち、1つだけをプライマリ(“1”)として定義できます。

・ Protocol (プロトコル)

Webサーバーで使用されるプロトコル。有効な値は、“http”または“https”です。

・ Server URL (サーバーURL)

“www.jdedwards.com”など、WebサーバーのDNSホスト名です。

・ Port Number

Webサーバーがリスニングするポート番号。標準的なポート番号は、httpの場合は80、httpsの場合は443ですが、異なるポート番号を使用してJASサーバーを導入するように選ぶこともでき

ます。

- Default Login(デフォルト・ログイン)

[Default Login]パラメータでは、システム・コードによるWebフォームへのショートカットの生成方法を定義します。有効な値には、予約済みの値と明示的なサーブレット名があります。予約済みの値は、次のとおりです。

Standard(標準):生成されたURLは、プライマリJASサーバー上のサーブレットを指します。

Redirector(リダイレクタ):生成されたURLは、プライマリJASサーバーのリダイレクタを指します。このリダイレクタは、ロード・バランシングのために別のWebサーバー上のサーブレットを指します。使用するサーブレット名は、システムにより生成されます。

明示的なサーブレット名:このフィールドで明示的なサーブレット名を指定することができます。この場合は、リダイレクタ機能を使用できません。生成されたURLは、プライマリJASサーバー上の指定のサーブレットを指します。

次に例を示します。ポータル・サーブレットは
/jde/servlet/com.jdedwards.portal.PortalBuilderServletです。

HTMLサーブレットは/jde/servlet/com.jdedwards.runtime.virtual.VCServletです。明示的なサーブレット名の使用は下位互換性を確保するためにのみ許容されており、使用しないことをお勧めします。

- Installation Path

Javaサーバー上でリリース8.9をインストールするディレクトリ・パスを入力します。このパスがリリースのバージョン固有であることを確認してください。たとえばリリース8.9の場合、パスの最後は¥b9 (c:¥PeopleSoft¥b9)となります。

4. [OK]をクリックします。

5. 別のJavaサーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- 別のJavaサーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。

「[Javaサーバーの定義\(任意\) - ページ \[161\]](#)」のステップを繰り返します。

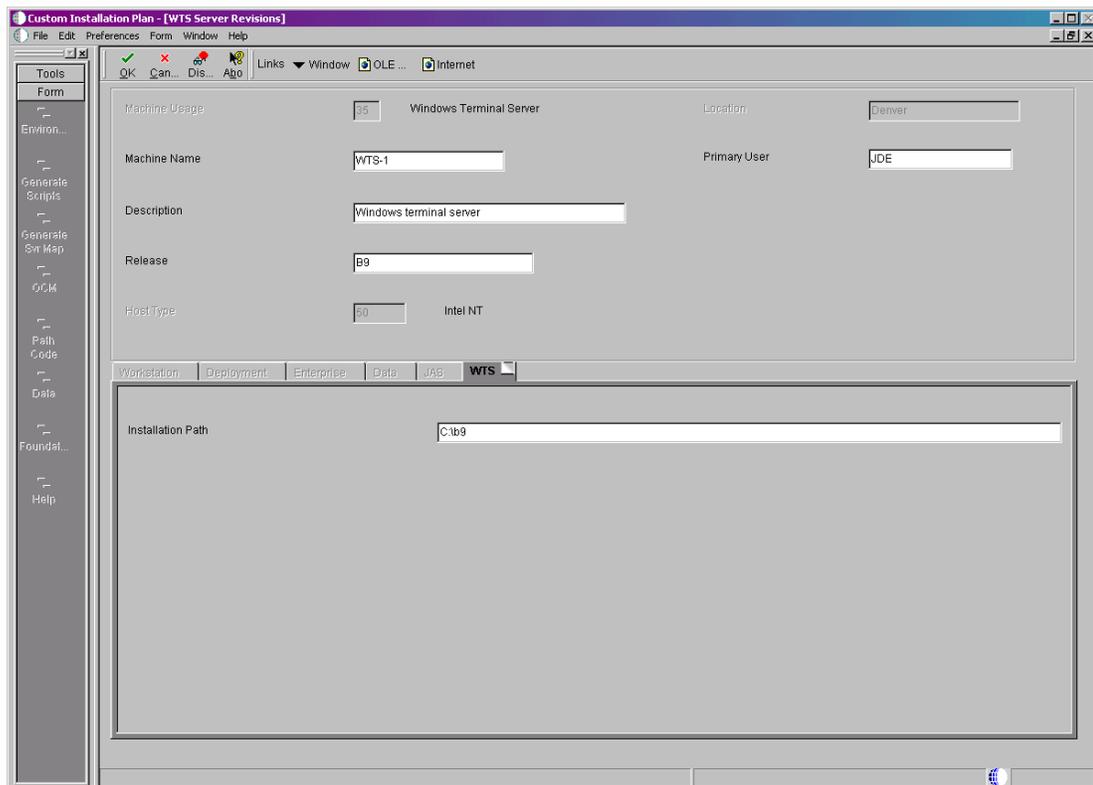
- 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No] をクリックします。

Windowsターミナル・サーバーの定義(任意)

▶ Windowsターミナル・サーバーを定義するには

〈Machine/Server Types〉フォームで[WTS Server(WTSサーバー)]を有効にすると、WTSサーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [OK]をクリックして次のタスクに進みます。



2. 〈WTS Server Revisions (WTSサーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに情報を入力します。

- Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の35は、これがWindowsターミナル・サーバーであることを示します。

- Machine Name

Windowsターミナル・サーバー名を入力します。この名前は大文字と小文字が区別されます。また、10文字以内で指定する必要があります。

- Description

マシンの記述を入力します。

- Release

インストールするソフトウェアのリリース番号(B9など)を入力します。

- Host Type

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の50は、サーバー・タイプがIntelプラットフォーム上のWindows NTであることを示します。

- Location

このフィールドには、このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

- ・ Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [WTS]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Installation Path

サーバー上でリリース8.9をインストールするディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのバージョン固有であることを確認してください。たとえばパスの最後は、ワークステーションへのインストール・パスと同様に¥b9となります。

4. [OK]をクリックします。
5. 別のWindowsターミナル・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
 - ・ 別のWindowsターミナル・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[Windowsターミナル・サーバーの定義\(任意\) - ページ \[163\]](#)」のステップを繰り返します。
 - ・ <Installation Planner>でのセットアップを続行するには、[No] をクリックします。

共有データ・ソース情報の入力

すべての環境間で共有されるデータ・ソースの情報を入力または確認するには、次のタスクを完了します。

- ・ [手順 14 \[165\]](#)
- ・ [手順 15 \[166\]](#)
- ・ [手順 16 \[166\]](#)
- ・ [手順 17 \[167\]](#)

▶ (カスタムまたはデフォルトの)共有データ・ソース・セットアップ情報を指定するには

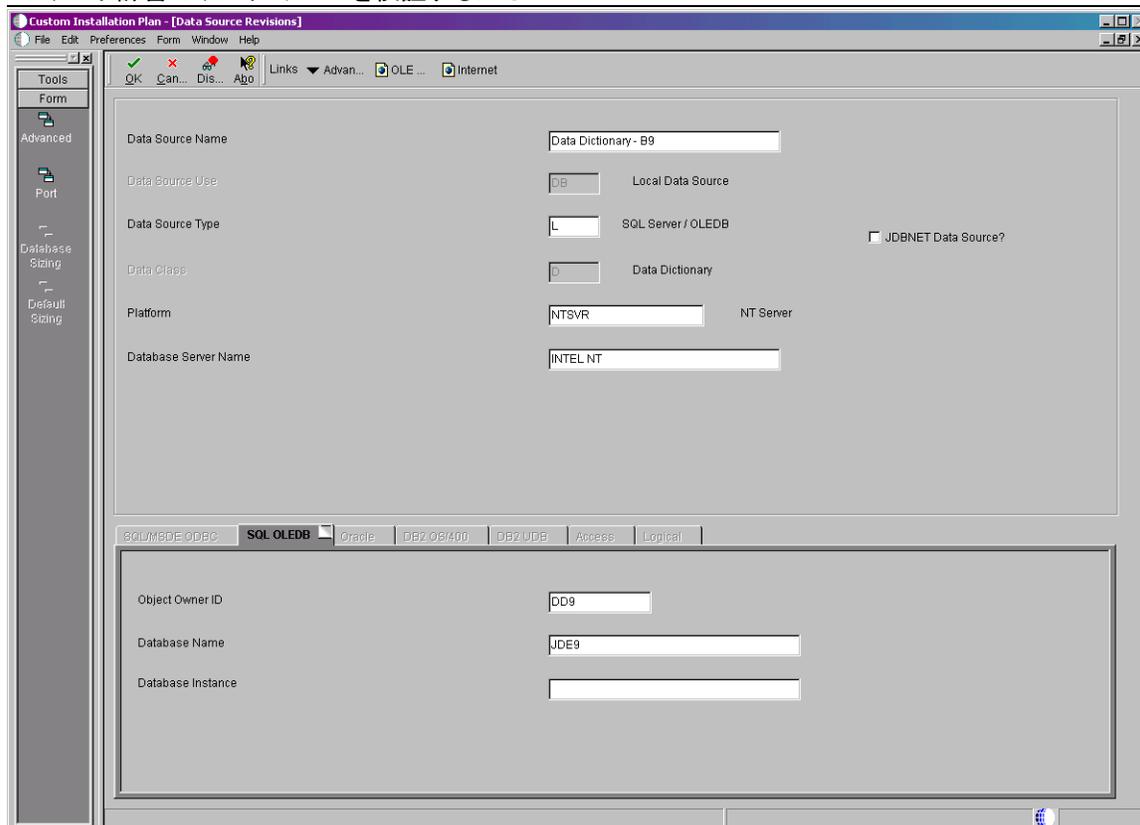
- ・ 共有データ・ソースの情報を求めるプロンプトが表示されます。
次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ リリース8.9のデータ・ソースを使用する場合は、[Take Defaults]をクリックして「[環境のセットア](#)

[トップ - ページ \[168\]](#)に進んでください。

このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。

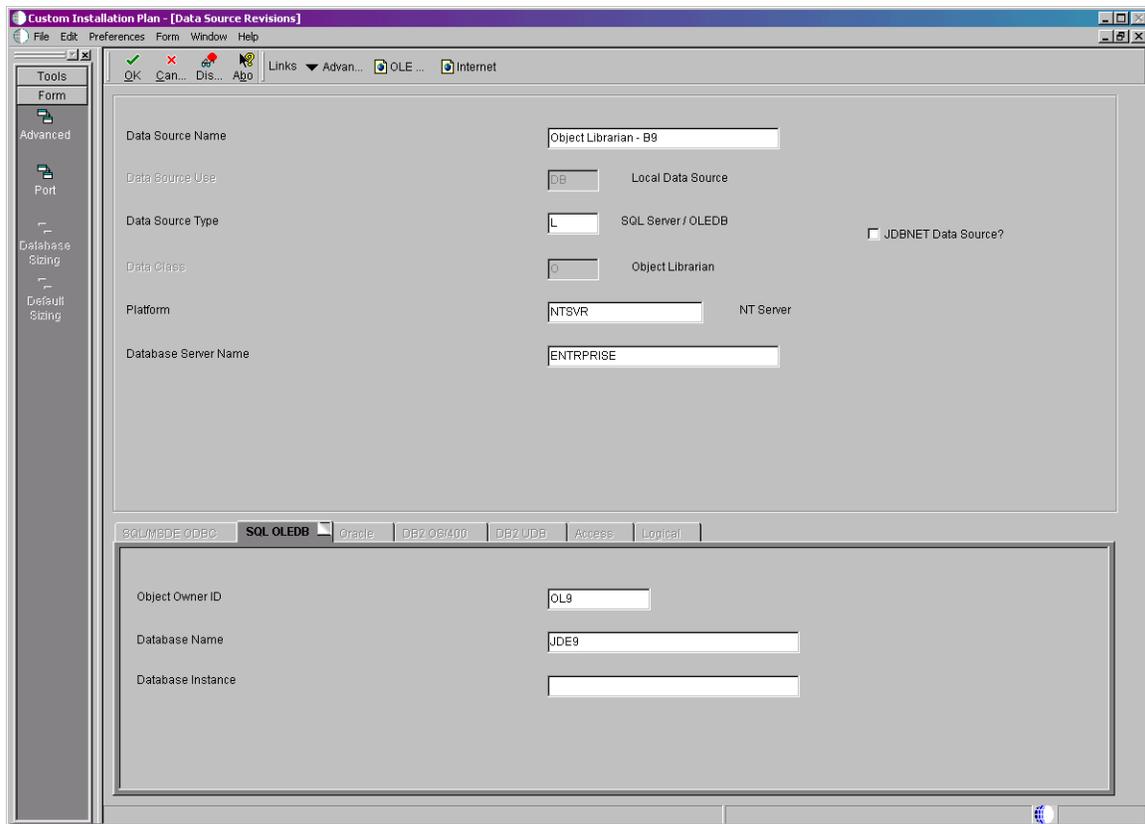
- ・ [OK]をクリックしてデータ・ソースを入力します。データ・ソース情報を検証します。

▶ データ辞書のデータ・ソースを検証するには



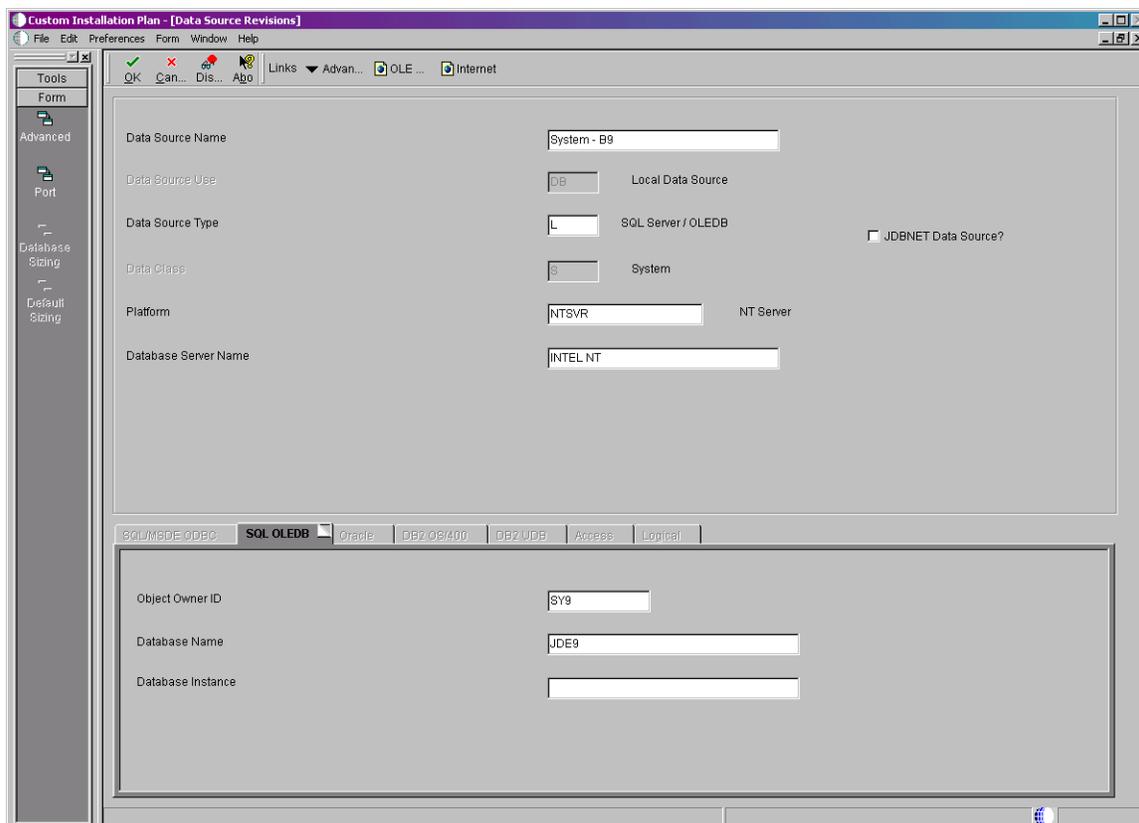
1. 〈Data Source Setup〉で、データ辞書データ・ソースが正しいかどうかを検証します。
2. [OK]をクリックします。

▶ オブジェクト・ライブラリアン・データ・ソースを検証するには



1. 〈Data Source Setup〉で、オブジェクト・ライブラリアン・データ・ソースが正しいかどうかを検証します。
。
2. [OK]をクリックします。

▶ システム・データ・ソースを検証するには



1. 〈Data Source Setup〉で、システム・データ・ソースの設定が正しいかどうかを検証します。
2. [OK]をクリックします。

参照

- ・ システム・データ・ソースのフィールドや、この手順で言及している他のデータ・ソースのフィールドについては、『インストール・リファレンス・ガイド』の「データ・ソース一覧」

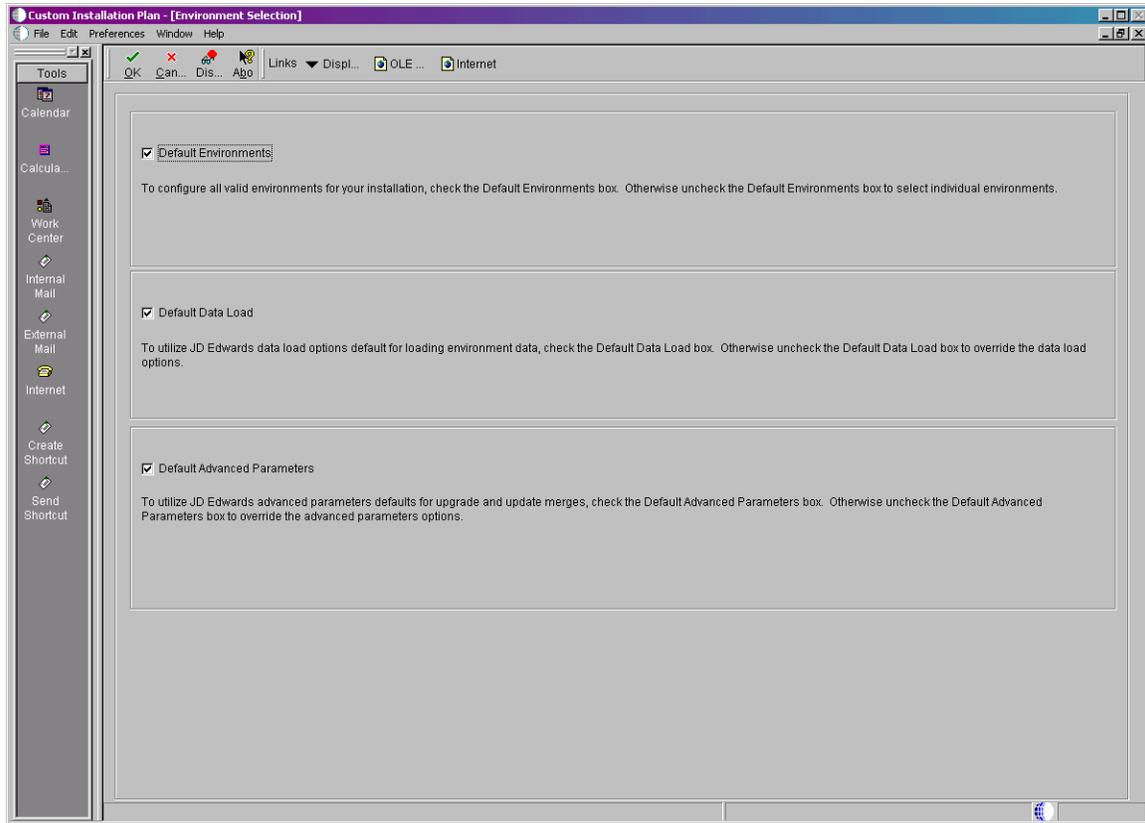
〈Environment Selection (環境の選択)〉画面が表示されます。

環境のセットアップ

デフォルトでは、標準環境の値を使用してシステムが構成されます。プランのセットアップ時に選択したオプションに応じて、次の1つまたは複数のパラメータが表示され、次のタスクでカスタマイズすることができます。

- ・ Environments (環境)
- ・ Data Load Options (データのロード・オプション)
- ・ Advanced Parameters (上級パラメータ)
- ・ Languages (言語)

これらのパラメータは、〈Environment Selection〉フォームでデフォルト・オプションを無効にしてカスタマイズすることができます。プランの実行中には、無効にしたパラメータごとにカスタマイズ・フォームが表示されます。



1. 〈Environment Selection〉で、カスタマイズするパラメータのオプションを無効にします。

注意

表示されるパラメータは、プラン作成プロセスの最初に選択したオプションに応じて異なる場合があります。

2. [OK]をクリックします。

注意

すべてのパラメータについてデフォルト・オプションを有効にした場合は、「[環境のデータ・ソースのセットアップ - ページ \[175\]](#)」に進んでください。

次のタスクを実行して、上記の各パラメータをカスタマイズします。デフォルト・オプションを無効にしたパラメータ専用のカスタマイズ・フォームが表示されます。有効にしたパラメータに関するタスクはスキップしてください。

3. 次の関連タスクに進みます。

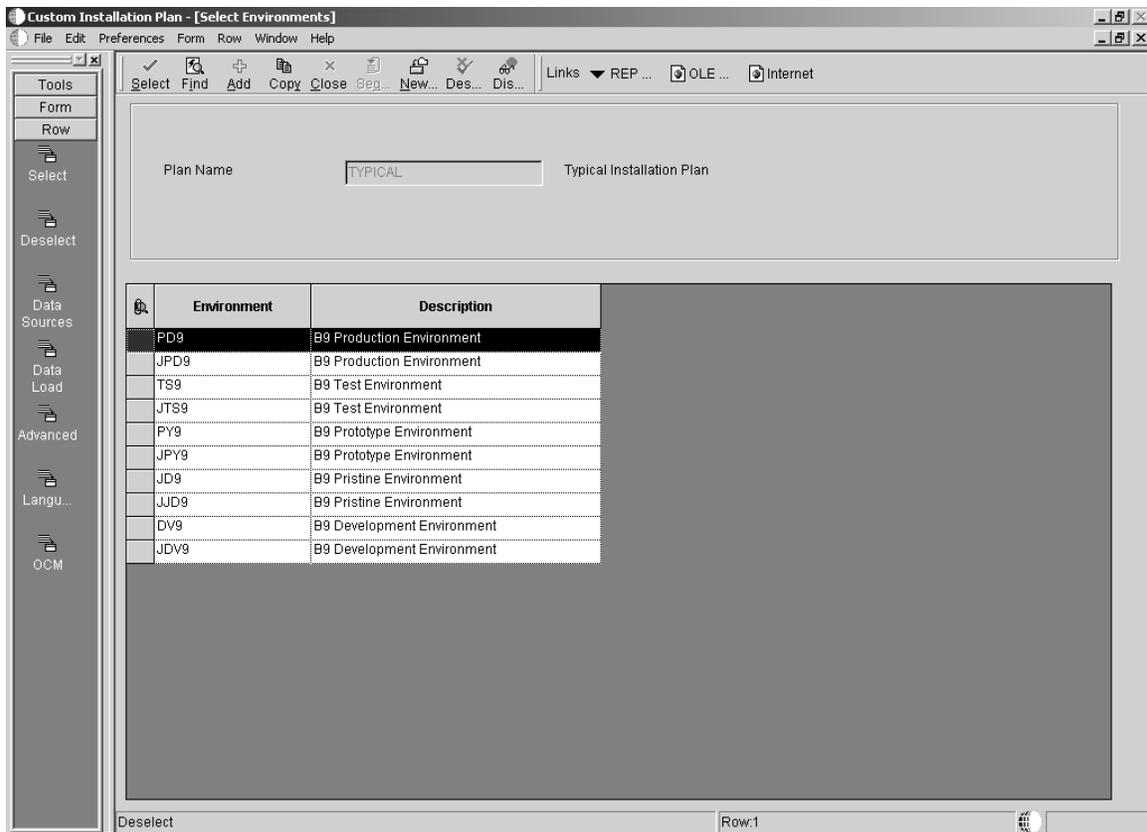
- ・ [手順 20](#) [170]
- ・ [手順 21](#) [171]
- ・ [手順 22](#) [173]
- ・ [手順 23](#) [174]

▶ **カスタム環境を追加するには**

1. 新規環境を追加する場合は[Add]、既存の環境の設定をコピーする場合は[Copy(コピー)]をクリックします。
2. 画面に環境情報を入力します。
3. [Next(次へ)]をクリックします。
4. 共有を選択するか、またはパス・コードを作成します。
5. [Next]をクリックします。
6. 画面にパス・コード情報を入力します。
7. [Next]をクリックします。

▶ **環境を選択するには**

〈Select Environment(環境の選択)〉フォームが表示されます。プランにJavaサーバーまたはWTSサーバーが含まれている場合は、J xxxxxx環境が表示されます。

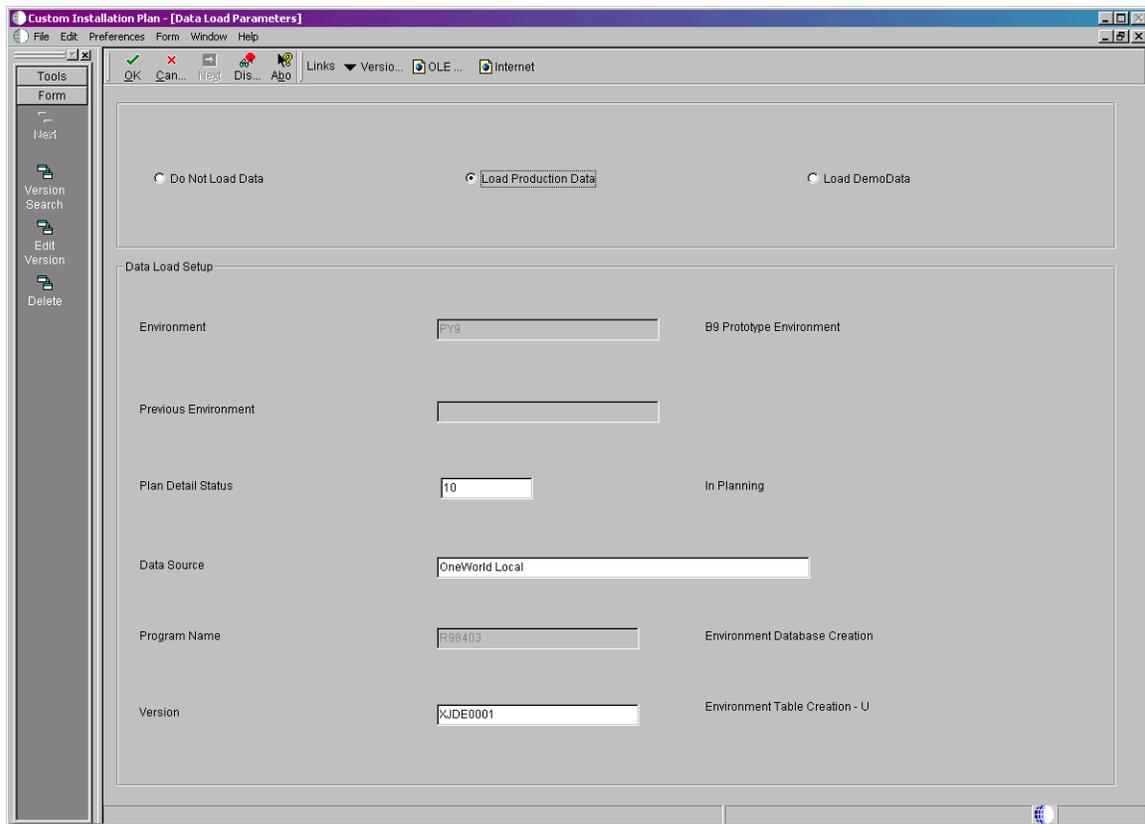


- ・ 〈Select Environments〉で、定義する環境をダブルクリックします。

複数の環境をセットアップする場合は、1つずつ選んで定義する必要があります。次のタスクを完了すると、この画面に戻ります。

▶ 環境のデータ・ロード・パラメータを指定するには

〈Environment Selection〉フォームで[Default Data Load(デフォルト・データ・ロード)]を無効にした場合は、〈Data Load Parameters(データ・ロード・パラメータ)〉フォームが表示されます。



1. 〈Data Load Parameters〉で、次のオプションのうち1つを選択します。

- Do Not Load Data (データをロードしない)

このオプションを選択すると、テーブルは作成されず、アップグレードする環境のデータはロードされません。このオプションは、標準環境のアップグレードには使用しません。

- Load Production Data (本稼働データのロード)

このオプションを選択すると、標準の構成および制御データがロードされます。ただし、買掛管理システムのテーブルなど、作成されるアプリケーションのテーブルは空のままです。これは、プリステインおよび開発/テスト以外の全環境に対するデフォルト・オプションです。

- Load Demo Data (デモ・データのロード)

このオプションを選択すると、コントロール・テーブルとアプリケーション・テーブルが作成され、両方にデモ・データがロードされます。このオプションを使用するのは、アップグレードする環境にサンプル・データ(ダミー在庫など)を追加する場合です。これは、プリステインおよび開発/テスト環境に対するデフォルト・オプションです。

- Previous Environment (前の環境)

このフィールドは、〈Advanced Parameters〉フォームが表示されるまでは空白になっています。

すべての環境に対して、まだ存在していないテーブルが〈Environment Workbench (環境ワークベン

チ)の中に作成されます。

注意

プリステイン環境の場合、[Version(バージョン)]フィールドにはバージョンXJDE0024と表示されます。他のすべての環境については、このフィールドにはXJDE0005と表示されます。

2. [OK]をクリックします。

プリステイン環境の場合は、データ・ソース情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。「[環境のデータ・ソースのセットアップ - ページ \[175\]](#)」に進んでください。

他のすべての環境の場合は、「[手順 22 \[173\]](#)」に進んでください。

▶ 上級パラメータを検証するには

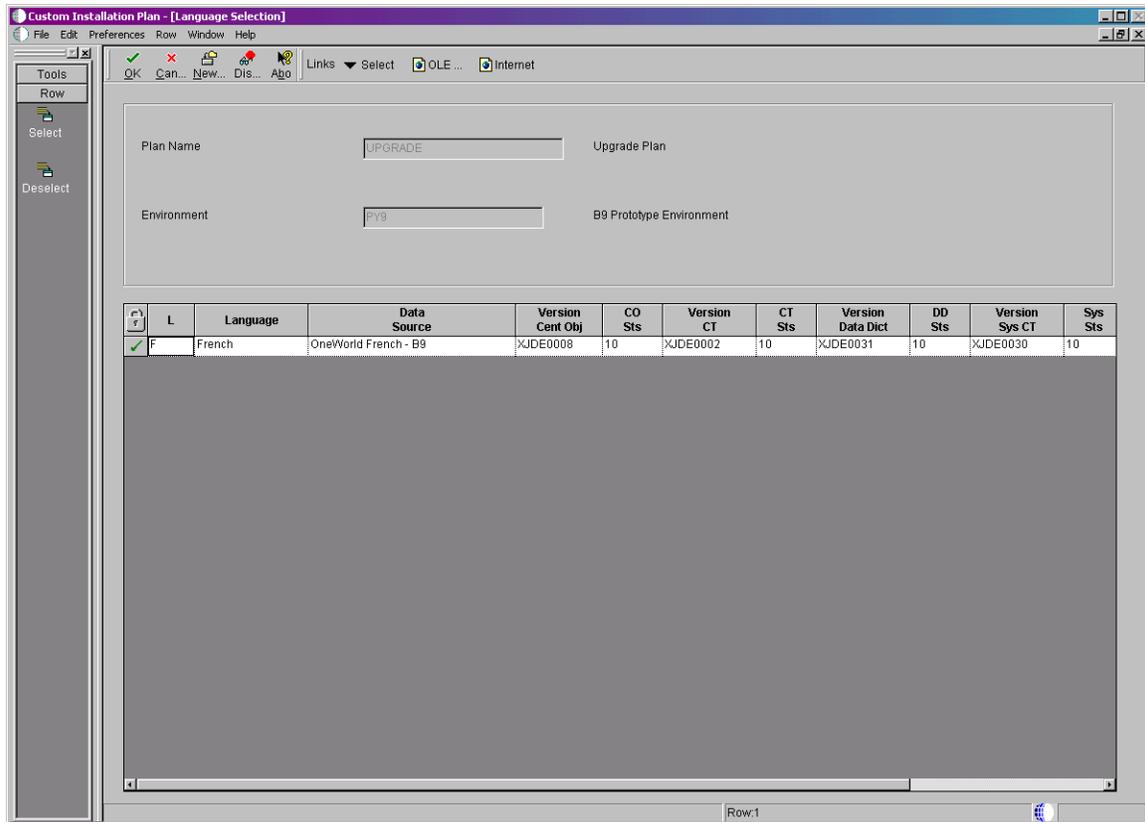
〈Environment Selection〉フォームで[Default Advanced Parameters(デフォルト上級パラメータ)]を無効にした場合は、〈Advanced Parameters〉フォームが表示されます。

1. 〈Advanced Parameters〉で、次のフィールドに値を入力し、該当するオプションを有効にします。
 - ・ Upgrade Environment (アップグレード環境)
アップグレード・プロセス関連の項目を表示するには、このオプションを有効にします。
 - ・ Plan Name (プラン名)
 - ・ Library List Name (ライブラリ・リスト名)
 - ・ Previous Environment
 - ・ Recreate Object Mappings (オブジェクト・マッピングの再作成)
この環境が既に存在する場合にマッピングが再作成されるように、このオプションを有効にします。
 - ・ Table Conversions (テーブル変換)
テーブル変換プログラムが実行されるように、このオプションを有効にします。
 - ・ Specification Merges (スペック・マージ)
スペック・マージ・プログラムが実行されるように、このオプションを有効にします。
 - ・ Upgrade Merges (アップグレード・マージ)
リリース8.9の新バージョンにアップグレードするため、この[Control Table Merges (コントロール・テーブルのマージ)]オプションを有効にします。
 - ・ TC Properties (テーブル変換プロパティ)

2. [OK]をクリックします。

〈Environment Selection〉フォームで[Default Languages (デフォルト言語)]を有効にした場合は、「[手順 23 \[174\]](#)」に進んでください。

▶ 言語を選択するには



1. 〈Language Selection(言語の選択)〉で、選択した環境用の言語をセットアップするには、該当する言語を選びます。
2. [Row(ロー)]メニューから[Select]をクリックします。
3. 必要な言語をすべて選択するまで上記のステップを繰り返します。
4. [OK]をクリックします。

カスタマイズに関する考慮事項

カスタマイズした内容をマージしない場合は、〈Installation Workbench〉を実行する前に、状況を変更するか、該当するレコードをプランから削除して、個々の変換とマージが実行されないように設定できます。

環境のデータ・ソースのセットアップ

環境のセットアップ後に、その環境のデータ・ソースをセットアップする必要があります。カスタム環境を作成した場合、データ・ソース情報はPeopleSoft提供のデータ・ソース・テンプレートから生成されます。

参照

- ・ このテンプレートの修正方法については『CNCインプリメンテーション』ガイド

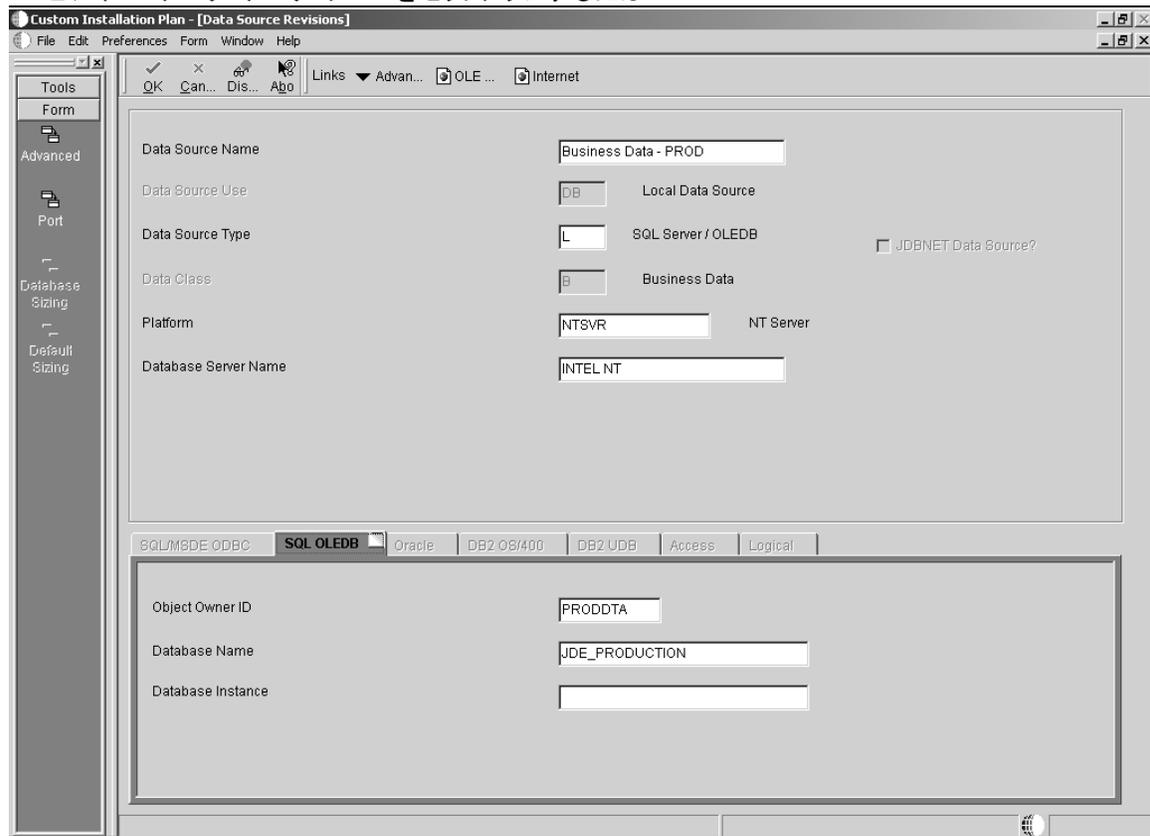
▶ 環境のデータ・ソース・セットアップ・オプションを選択するには

構成した環境のデータ・ソースをセットアップするかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

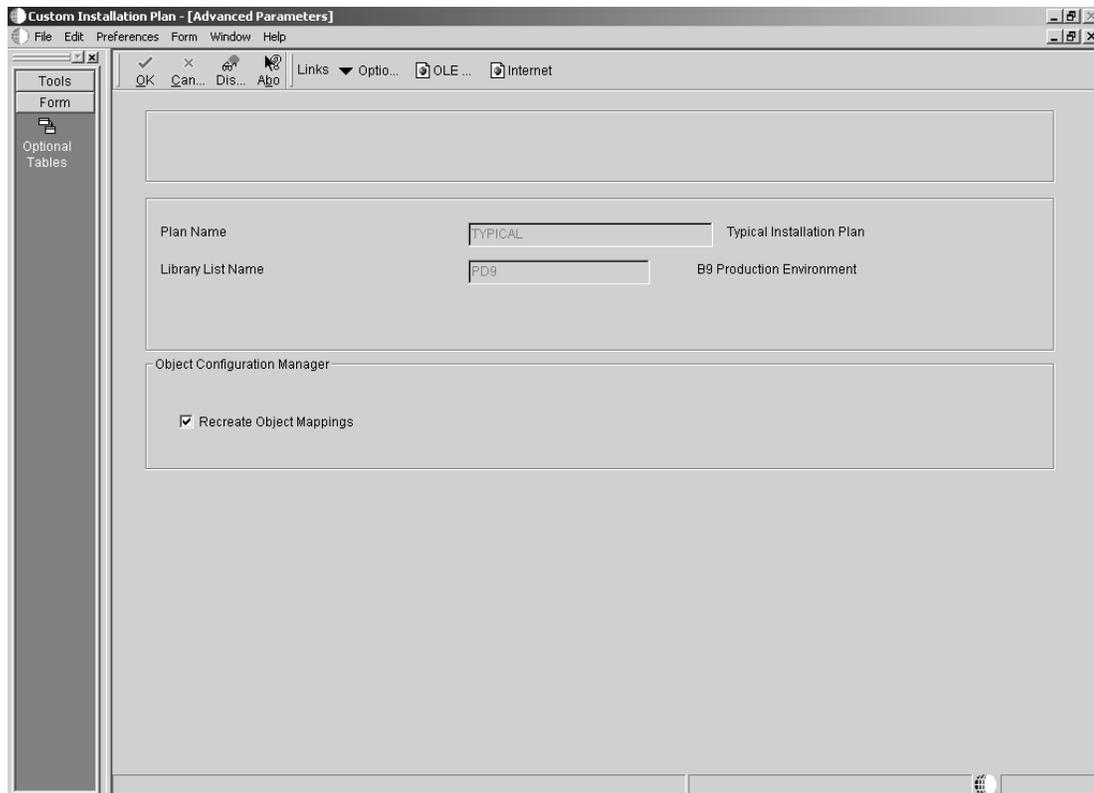
- データ・ソースを手作業で入力するには、[OK]をクリックして次のタスクに進みます。リリース8.9のデフォルト・データ・ソースを受け入れるには、[Take Defaults]をクリックします。

「手順 29 [180]」のタスクに進んでください。このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。プランに追加するすべての環境について、このタスクを繰り返します。

▶ ビジネス・データ・データ・ソースをセットアップするには



- [Form(フォーム)]メニューから[Advanced]を選択します。UNICODEフラグが無効になっているかどうかを確認してください。



2. [OK]をクリックします。
3. <Data Source Revisions(データ・ソースの改訂)>で、ビジネス・データのデータ・ソースを確認します。

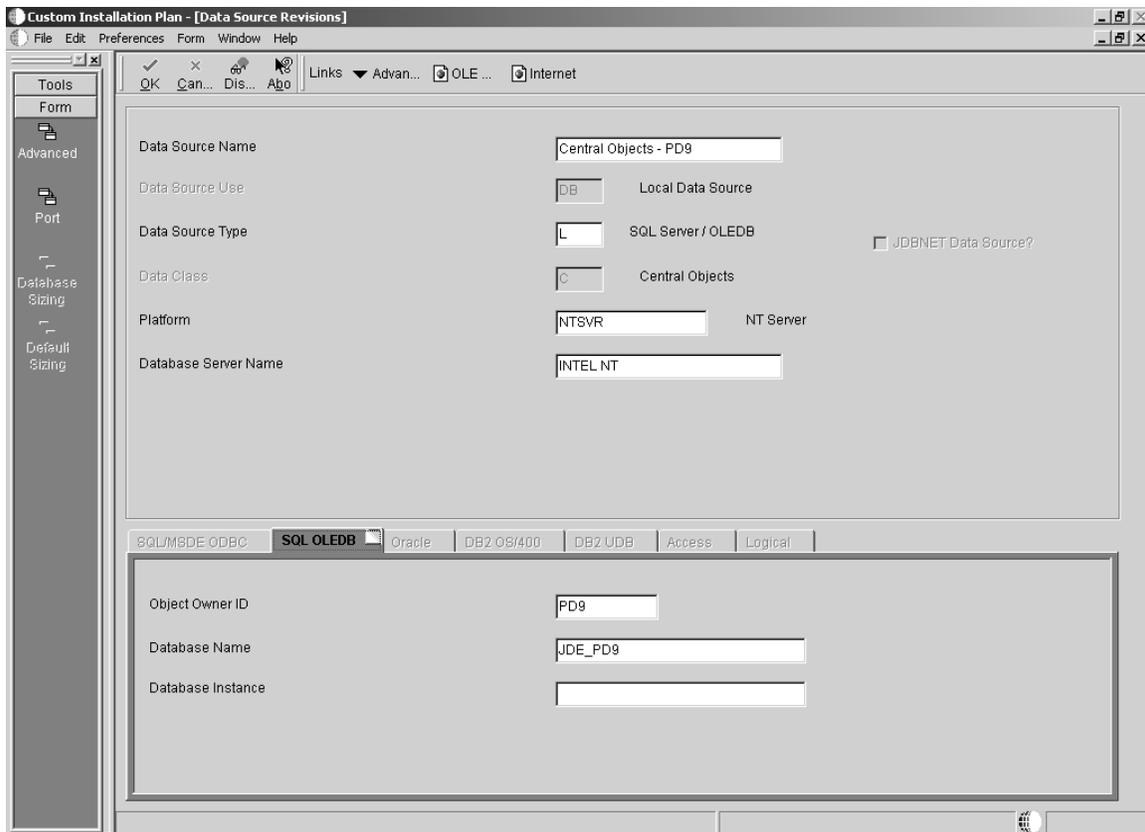
このデータ・ソースが、アップグレードまたはコピーする既存の本稼働データ・ソースを指しているかどうかを確認してください。

注意

ビジネス・データ・データ・ソースは、環境とパス・コードに固有のものです。

4. [OK]をクリックします。

▶ セントラル・オブジェクト・データ・ソースをセットアップするには



1. <Data Source Setup>で、セントラル・オブジェクトのデータ・ソース情報を確認します。
2. [OK]をクリックします。

セントラル・オブジェクト・データ・ソースがCentral Objects - <Path Code>であるかどうかを確認します。

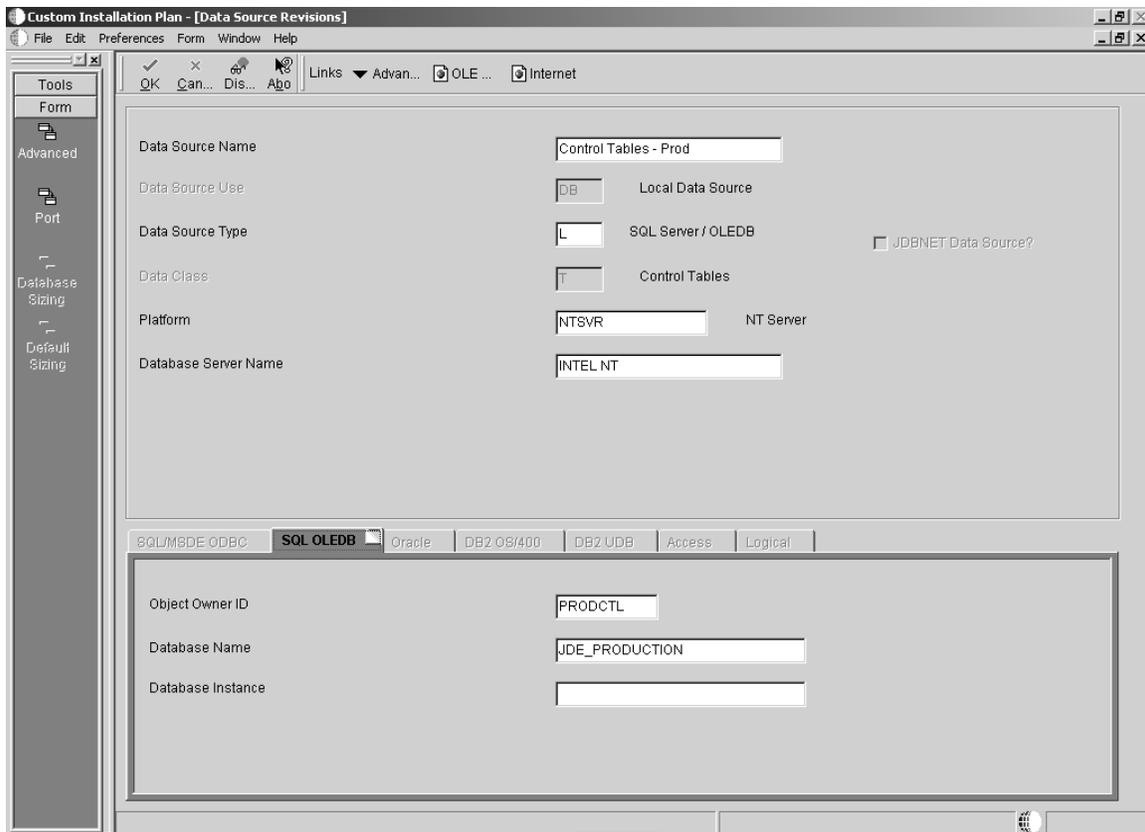
注意

このデータ・ソースはUnicode形式にする必要があります。[Form]エグジットから[Advanced]を選択し、[Unicode]が有効になっていることを確認してください (OracleとiSeriesの場合は、[LOB]も有効にする必要があります)。

注意

セントラル・オブジェクト・データ・ソースは、パス・コードに固有です。

▶ コントロール・テーブル・データ・ソースをセットアップするには



1. 〈Data Source Revisions〉で、コントロール・テーブル・データ・ソースが正しいかどうかを検証します。

- ・ Data Source Name(データ・ソース名)

データ・ソース名を確認します。

- ・ Server Name(サーバー名)

エンタープライズ・サーバー名を確認します。

- ・ Object Owner ID(オブジェクト所有者ID)

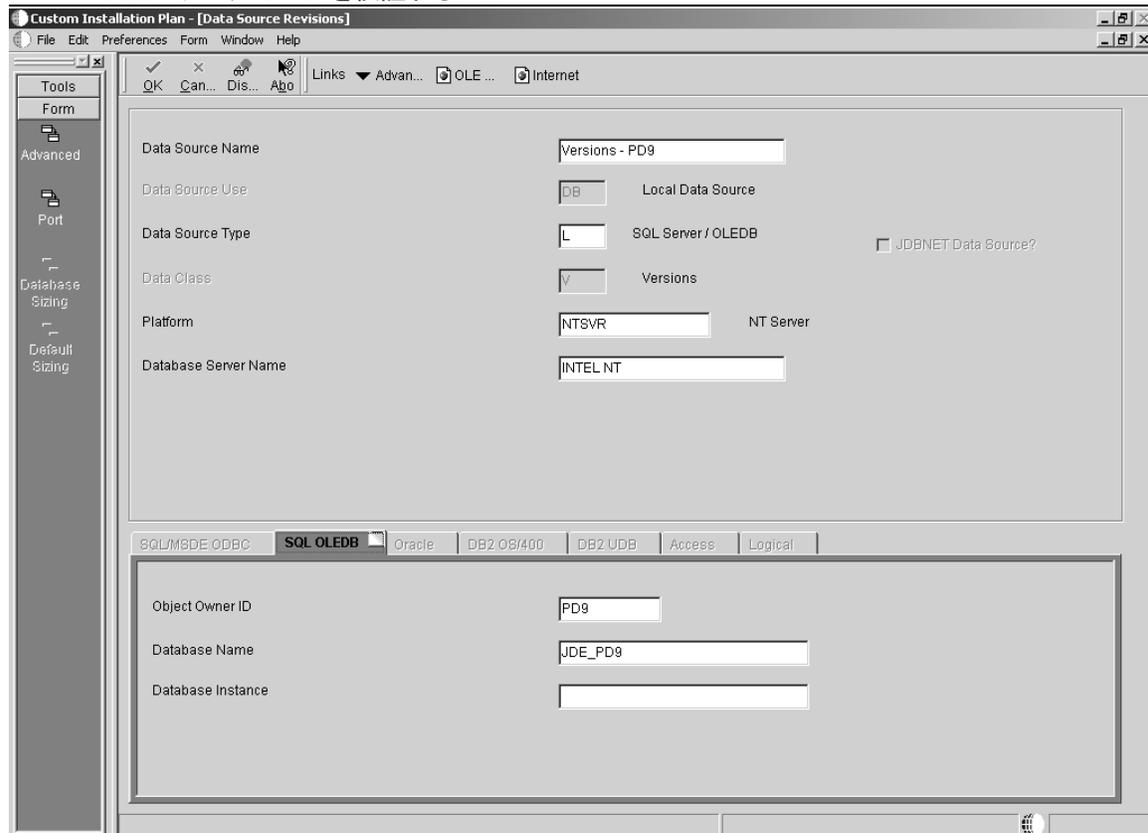
このオブジェクトの所有者名。

注意

コントロール・テーブル・データ・ソースは、環境とパス・コードに固有です。

2. [Advanced]をクリックし、UNICODEが無効になっているかどうかを確認します。
3. [OK]をクリックします。

▶ バージョン・データ・ソースを検証するには



1. 〈Data Source Setup〉で、バージョン・データ・ソースが正しいかどうかを検証します。
2. [OK]をクリックします。

注意

バージョン・データ・ソースは、パス・コードに固有です。

▶ 別の環境を選択するには

〈Select Environment〉フォームで構成した環境の横にチェックマークが表示されます。

- ・ 次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ 別の環境を選択するには、次に定義する環境をダブルクリックして選んで「[手順 20 \[170\]](#)」と「[環境のデータ・ソースのセットアップ - ページ \[175\]](#)」のステップを繰り返します。
 - ・ 環境のセットアップを完了するには、[Close (閉じる)]をクリックし、「[リモート・ロケーションの追加 - ページ \[181\]](#)」に進みます。

チェックマークが付いているすべての環境に対して、〈Installation Workbench〉が実行されます。

ヒント

環境を削除するには、チェックマークが付いている環境から対象を選んで[Deselect(選択解除)]をクリックします。

リモート・ロケーションの追加

別の環境を選んだ後に、リモート・ロケーションを入力するかインストール・プランを確定することができます。

▶ リモート・ロケーションを追加するには

別の(リモート)ロケーションを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. 次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ リモート・ロケーションを追加するには[Yes]をクリックします。

「[ロケーション情報の入力 - ページ \[148\]](#)」以降のロケーション追加プロセス全体を繰り返します。プランにリモート・ロケーションを追加する方法については、「Installation Plannerのユーティリティ」の「[リモート・インストール・プランの作成](#)」を参照してください。

- ・ <Installation Planner>でのセットアップを完了するには、[No] をクリックします。

2. 「[インストール・プランの確定 - ページ \[181\]](#)」のタスクに進んでください。

インストール・プランの確定

次のステップを実行してインストール・プランを確定します。

▶ インストール・プランを確定するには

1. メッセージが表示され、インストール・プランが確定されたことを確認できます。

プランが確定されるときには、次の処理が実行されます。

- ・ デプロイメント・サーバー上で¥PeopleSoft¥B9¥hosts¥hosttype¥hostnameディレクトリが作成されます。このディレクトリには、jde.iniファイルと、ホスト・コードのインストールに使用される構成ファイルが格納されます。

注意

<Host Code Install(ホスト・コードのインストール)>は、インストール・プランを確定するまでは実

行できません。

- ・ 状況が20に設定されます。これは、プランに従ってテーブルに複数の調整が加えられたことを示します。
 - ・ OCMが作成されます。
 - ・ iniファイルが修正されます。
 - ・ 次のテーブルがアップグレードされます。
 - ・ リリース・マスター(F00945)
 - ・ パス・コード・マスター(F00942)
 - ・ パッケージ・プラン・テーブル(F98404)
 - ・ マシン詳細テーブル(F9651)
 - ・ 言語テーブル(F984031) – 代替言語のインストール時
2. 完了メッセージ・ボックスを終了して〈Planner Validation Report (プランナ検証レポート)〉を実行するには、[OK]をクリックします。
- ・ 処理オプションのデフォルトが選択されている場合は、〈Planner Validation Report〉からこのレポート作成を実行するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
 - ・ 処理オプションのデフォルトが選択されていない場合は、プランのツリー・ビューで[Validate (検証)]をクリックして〈Planner Validation Report〉を実行します。

▶ 〈Planner Validation Report〉を実行するには

1. 〈Report Output Destination (レポート出力先)〉で、[On Screen (画面)]または[To Printer (プリンタ)]を選択して[OK]をクリックします。
2. レポートを検討し、すべてのレコードが検証されたことを確認します。
3. レポートを確認した後に、〈Batch Versions (バッチ・バージョン)〉フォームで[Close]をクリックします。

〈Planner Validation Report〉については、『インストール・リファレンス・ガイド』の「Planner Validation Report (プランナ検証レポート)」を参照してください。
4. 〈Work with Installation Plans〉で[Expand (展開)]をクリックし、作成したプランを確認します。

Installation Workbenchの実行

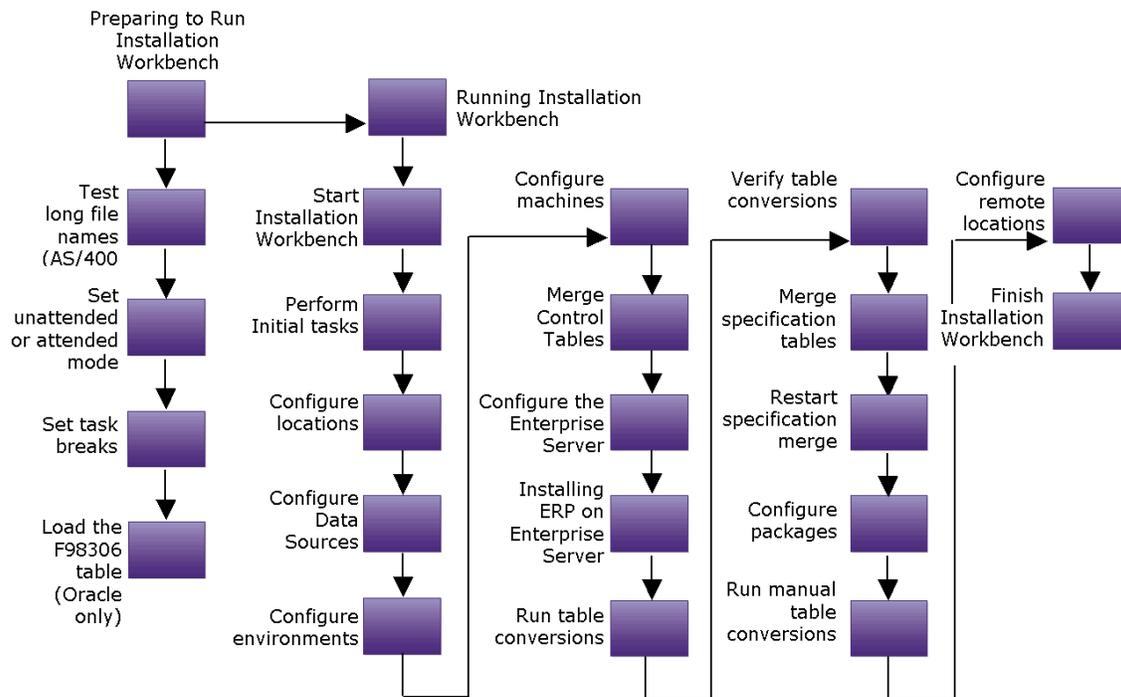
〈Installation Planner (インストール・プランナ)〉を使用してリリース8.9の アップグレード・プランを作成した後に、〈Installation Workbench (インストール・ワークベンチ)〉を使用してそのプランを実行します。

〈Installation Workbench〉では、作成したプランに従ってワークベンチ・プログラムが実行されます。たとえばデータのみをアップグレードを実行する場合は、プランにスペック・マージが組み込まれていないため、〈Specification Table Merge Workbench (スペック・テーブル・マージ・ワークベンチ)〉は表示されません。

〈Installation Workbench〉は、在席時モードまたは無人モードで実行できます。在席時モードでは、各ワークベンチが完了してから次のワークベンチを開始します。無人モード(デフォルト値)では、各ワークベンチはユーザーの介入なしに実行されます。プロセスを何らかの時点で停止させる場合は、特定のワークベンチの前または後にタスク・ブレイクを設定できます。無人モードを使用する場合は、各タスクが正常に実行されたかどうかをチェックする必要があります。

次ページのフロー・チャートは、〈Installation Workbench〉の実行プロセスの概要を示しています。

Running Installation Workbench



ワークベンチのコンポーネントの概要

〈Installation Workbench〉は、次のコンポーネントに分かれています。インストール・プランに応じて、インストールまたはアップグレードには次の一部またはすべてのコンポーネントを使用できます。

- ・ 〈Initial Workbench Tasks (通常ワークベンチ・タスク)〉は、〈Location Workbench (ロケーション・ワーク

ベンチ))を開始する前に実行する予備的なワークベンチ・タスクです。無人ワークベンチ・モードを使用すると、これらのタスクはワークベンチの開始後に実行されます。実行されるタスクは、メディア・オブジェクトの変換、リリース・マスター、データ辞書のコピー、システム・テーブルのコピーおよびセキュリティのコピー(OneWorldバージョンB73.3.xからのアップグレードに適用)です。

- ・ <Location Workbench>では、プランで定義したすべてのロケーションが、プランナ・データ・ソースのデプロイメント・ロケーション定義テーブル(F9654)からSystem - B9データ・ソースにコピーされます。また、ロケーション・プラン詳細テーブル(F984021)が更新されます。
- ・ <Data Source Workbench(データ・ソース・ワークベンチ)>では、プランで定義したすべてのデータ・ソースが、プランナ・データ・ソースのデータ・ソース・マスター(F98611)とテーブル/データ・ソース・サイジング・テーブル(F986115)から、System - B9データ・ソースにコピーされます。また、データ・ソース・プラン詳細テーブル(F98401)が更新され、処理結果が反映されます。
- ・ <Environment Workbench(環境ワークベンチ)>では、各環境のオブジェクト構成マスター(F986101)のみでなく、環境情報テーブル(F0094、F00941、およびF00942)が、プランナ・データ・ソースからSystem - B9データ・ソースにコピーされます。次に、処理結果を反映するために環境プラン詳細テーブル(F98403)が更新されます。プランの設定によっては、新規の汎用テキストをコピーして、オブジェクト管理ワークベンチ・テーブルとバージョン・テーブルを作成して自動入力するために、バッチ・アプリケーションも実行されます。
- ・ <Machine Workbench(マシン・ワークベンチ)>では、サーバー構成ファイル(F9650とF9651)が、プランナ・データ・ソースからSystem - B9データ・ソースにコピーされます。次に、処理結果を反映するためにホスト・プラン詳細テーブル(F98402)が更新され、環境情報を使用してサーバー・マップ・データ・ソースにオブジェクト構成マスター(F986101)とデータ・ソース・マスター(F98611)が自動入力されます(有効な環境、データ・ソース、およびサーバー・マップのテーブルのみが作成されます)。
- ・ <Control Table Workbench(コントロール・テーブル・ワークベンチ)>では、プランで指定したマージ用のバッチ・アプリケーションが実行され、データ辞書、ユーザー定義コード(UDC)、Solution Explorer、およびその他のコントロール・テーブルが更新されます。次に、処理結果を反映するためにテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)が更新され、完了メッセージが表示され、変換ログ・レコードがテーブル変換 - 履歴ログ・テーブル(F984052)に書き込まれます。
- ・ <Table Conversion Workbench(テーブル変換ワークベンチ)>では、テーブル変換によってテクニカル・テーブルとアプリケーション・テーブルがリリース8.9用の新しいフォーマットに変換されます。次に、処理結果を反映するためにテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)が更新され、完了メッセージが表示され、変換ログ・レコードがテーブル変換 - 履歴ログ・テーブル(F984052)に書き込まれます。
- ・ <Specification Table Merge Workbench>では、カスタム修正を新規スペック・テーブルにマージするバッチ・アプリケーションが実行されます。次に、処理結果を反映するためにテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)が更新され、完了メッセージが表示されて変換ログ・レコードが書き込まれます。オブジェクト・ライブラリアンとバージョン・リストのマージは、スペック・マージに組み込まれています。
- ・ <Package Workbench(パッケージ・ワークベンチ)>では、パッケージ情報テーブル(F9603、F9631)が、プランナ・データ・ソースからSystem - B9データ・ソースに転送されます。また、パッケージ・プラン詳細テーブル(F98404)が更新され、処理結果が反映されます。
- ・ <Remote Location Workbench(リモート・ロケーション・ワークベンチ)>では、R98403の各種バージョン(XJDE0043、XJDE0044、XJDE0045、XJDE0046、XJDE0047)が起動され、ビジネス・データ(マスターと固定情報)のコントロール・テーブル、データ辞書テーブル、およびシステム・テーブルが、基本ロケーションからロケーション・サーバーにロードされます。また、複数階層UBE(R98825C)が起動され、配信されたパッケージがリモート・ロケーションにあるプライマリ・デプロイメント・サーバーにプッシュされます。このワークベンチが処理されるのは、リモート・ロケーションをインストールするように選び、

レプリケートされたデータのロードとパッケージのプッシュを選択している場合のみです。

参照

- ・ 個々のテーブルとその用途については、『インストール・リファレンス・ガイド』の「主要なテクニカル・テーブル」
- ・ データのみのアップグレードについては「データのみのアップグレード」

Installation Workbenchを実行する準備

インストール・プランの作成後に、〈Installation Workbench〉を実行します。〈Installation Workbench〉は、各種のテーブルを更新する一連のワークベンチで構成されています。インストール・プランで設定した情報によって、このプロセスで実行されるワークベンチが決まります。

ここでは、〈Installation Workbench〉の前に実行する次の準備タスクについて説明します。

- ・ [在席時または無人ワークベンチ・モードの選択 - ページ \[187\]](#)
- ・ [無人ワークベンチ・モードのタスク・ブレイクの設定 - ページ \[188\]](#)

〈Installation Workbench〉を無人モードで実行する場合は、事前にこのセクションの説明を熟読し、個々のタスクの詳細を理解しておいてください。

ジョブ待ち行列の作成

〈Installation Workbench〉を実行する前に、ジョブ待ち行列を設定できます。ジョブ待ち行列を設定しない場合、〈Initial Tables Workbench (初期テーブル・ワークベンチ)〉によってmaximum=4でQBATCHのデフォルト・レコードが作成されます。

▶ ジョブ待ち行列を作成するには

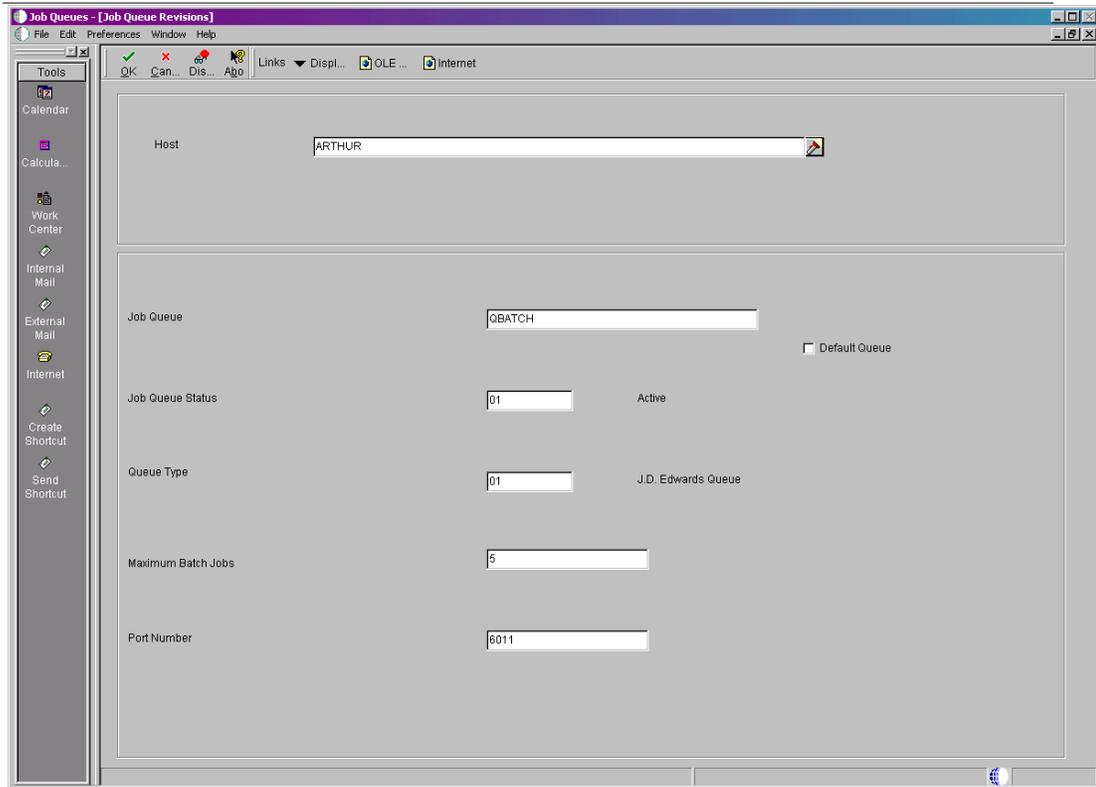
スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	JDEPLAN環境にサインオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	リリース8.9をエンタープライズ・サーバーにインストールします。

1. 〈Batch Processing Setup (プリンタ処理の設定)〉メニュー(GH9013)にアクセスし、〈Job Queues (ジョブ待ち行列)〉アプリケーション(P986130)を起動します。

注意

このアプリケーションでは、[Network Failed (ネットワーク障害)]エラーが表示されることがあります。エンタープライズ・サーバー上でERPを実行する前に待ち行列を設定する場合、このエラー・メッセージは正常であり、無視してかまいません。エンタープライズ・サーバーでERPを実行

中に待ち行列を設定する場合、このエラー・メッセージはエラーを示します。エンタープライズ・サーバー上でjde.logを調べ、Queue Kernelが実行されていない原因を確認してください。



2. <Job Queue Revisions(ジョブ待ち行列の改訂)>で、次のフィールドに値を入力し、該当するオプションを有効にします。

- ・ Host(ホスト)
エンタープライズ・サーバー名を入力します。
- ・ Job Queue(ジョブ待ち行列)
ジョブ待ち行列名を入力します。
- ・ Default Queue(デフォルト・ジョブ待ち行列)
このオプションを有効にします。
- ・ Job Queue Status(ジョブ待ち行列状況)
"01"と入力します。
- ・ Queue Type(待ち行列タイプ)
"01"と入力します。
- ・ Maximum Batch Jobs(最大バッチ・ジョブ数)

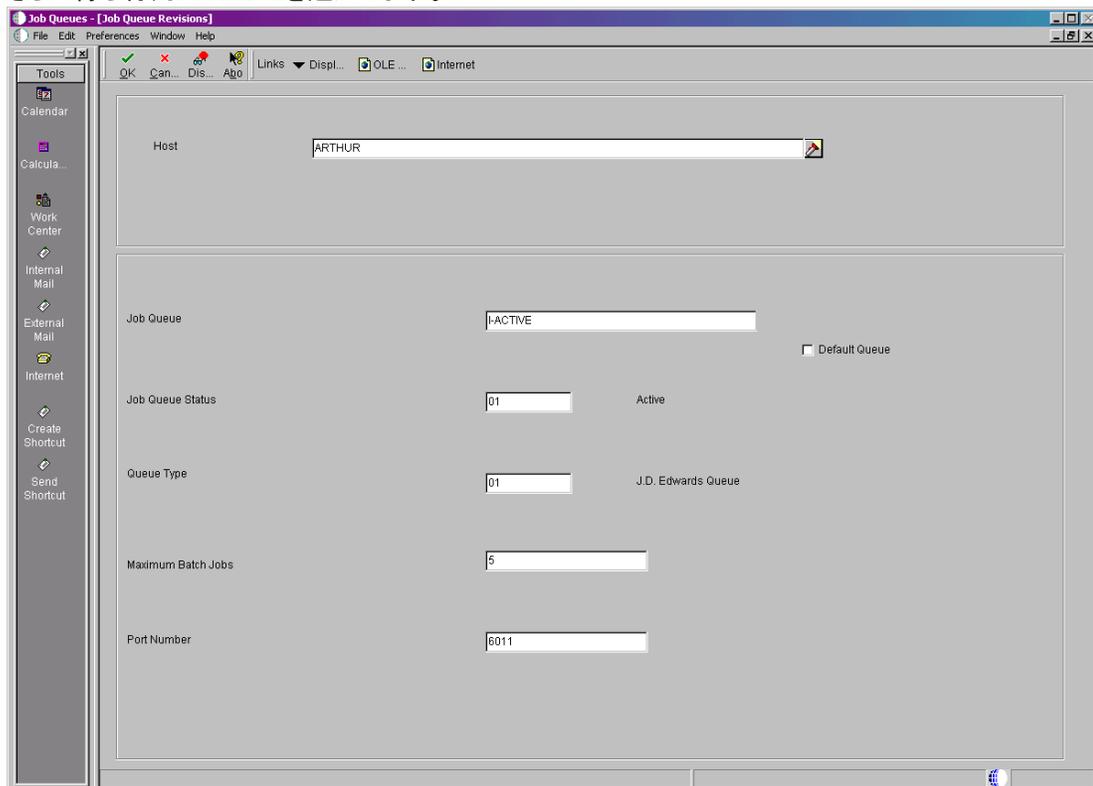
”01”と入力します。サーバー上のプロセス数に設定してください。

- ・ Port Number(ポート番号)

”6011”と入力します。

[Network Failed]エラーが発生した場合は無視してください。

3. さらに待ち行列I-ACTIVEを追加します。



最大ジョブ数として、待ち行列で実行される最大ジョブ数を設定します (UNIXとWindowsの場合はERP待ち行列を設定します)。この待ち行列は、バッチ処理で他のバッチ処理の作成に使用されるため、どのプラットフォームの場合もタイプERPとして定義してください。

在席時または無人ワークベンチ・モードの選択

ワークベンチは、手作業で実行する方法 (在席時ワークベンチ・モード) と自動的に実行する方法 (無人ワークベンチ・モード) があります。ワークベンチを無人モードで実行する場合も、下記のとおり Installation Workbench) を開始します。これにより、各ワークベンチの状況が開始時に表示されます。無人ワークベンチはデフォルト・モードです。

無人ワークベンチでは、ワークベンチのいずれかでエラーが発生するとプロセスが停止します。エラーを修正すると、無人ワークベンチが停止した時点から再開されます。

〈Control Table Workbench〉と〈Table Conversion Workbench〉の間に、自動タスク・ブレイクが発生します

。

注意

無人モードでは、あるタスクが異常終了しても次のタスクに進むことができます。〈Installation Workbench〉に無人モードを選択した場合は、完了時に各のタスクが正常に実行されたかどうかをチェックする必要があります。完了していないタスクがあった場合は、エラーを修正してから再実行してください。

処理オプションを使用すると、在席時ワークベンチ・モードを選択できます。

▶ 在席時ワークベンチ・モードを選択するには

1. 〈System Installation Tools (システム・インストール・ツール)〉メニュー(GH961)を開きます。
2. 〈Installation Workbench〉を右クリックします。
3. [Prompt For (プロンプト)]を選んで[Values (値)]を選択します。
〈Processing Options (処理オプション)〉フォームが表示されます。
4. 該当するフィールドに、無人ワークベンチ・モードの場合は“1”、在席時ワークベンチ・モードの場合は“0”を入力します。デフォルト値は1(無人)です。
5. [OK]をクリックします。
〈Work with Installation Plan (インストール・プランの処理)〉が表示されます。

無人ワークベンチ・モードのタスク・ブレイクの設定

無人ワークベンチでは、個々のワークベンチの前または後にタスク・ブレイクを設定できます。タスク・ブレイクを使用すると、ワークベンチや他のタスクが正常に完了したかどうかを検証できます。たとえば〈Table Conversion Workbench〉の後にタスク・ブレイクを設定し、すべてのテーブル変換が正常に完了したかどうかを検証します。〈Control Table Workbench〉と〈Table Conversion Workbench〉の間に、自動タスク・ブレイクが発生します。

注意

複数スレッドを使用して無人ワークベンチで〈Specification Merge (スペック・マージ)〉を実行する場合は、〈Specification Merge〉の後にタスク・ブレイクを設定してください。これにより、すべてのスレッドを完了させることができます。その後で〈Package Workbench〉を開始します。

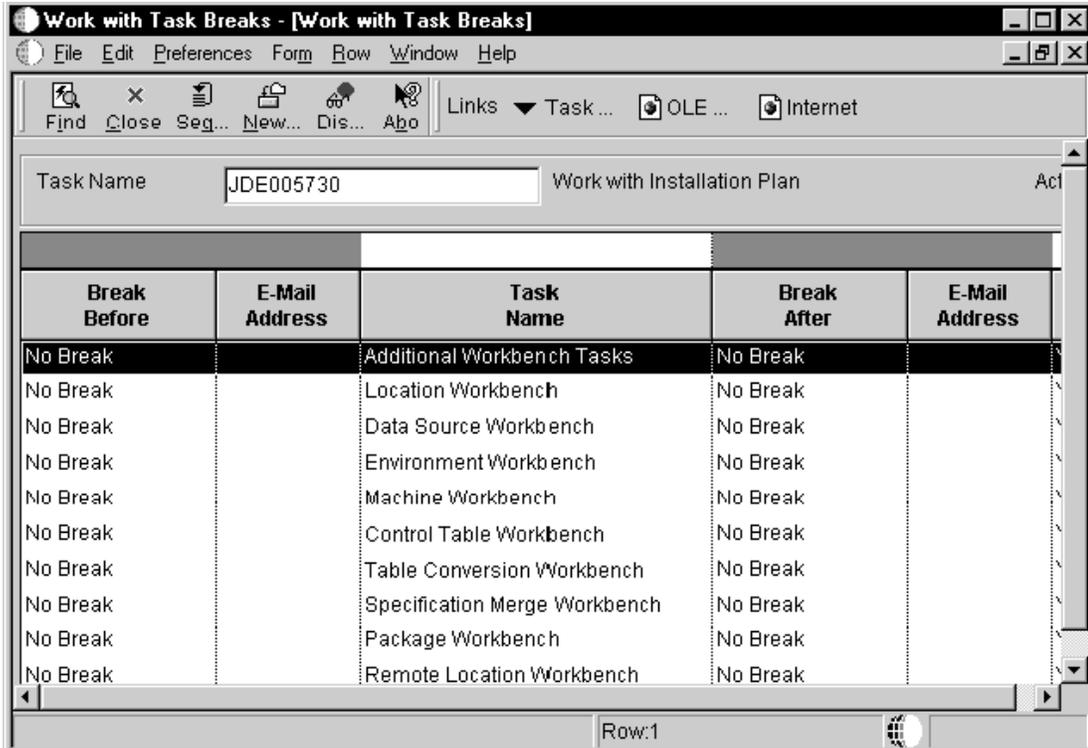
▶ 無人ワークベンチ・モードでタスク・ブレイクを設定するには

1. 〈System Installation Tools〉メニュー(GH961)を開きます。
2. 〈Advanced Operations (上級操作)〉を選択します。
3. 〈Work with Task Breaks (タスク・ブレイクの処理)〉をダブルクリックします。

〈Work with Task Breaks〉フォームが表示されます。

4. [Find(検索)]をクリックします。

ワークベンチのリストが表示されます。



5. ワークベンチの前または後に区切りを設定するには、ワークベンチ名を選び、[Row(ロー)]メニューから[Break Befor(前で区切り)]または[Break After(後で区切り)]を選択します([Row]メニューでタスク・ブレイクをクリアすることもできます)。
6. 〈Task Break Revisions(タスク・ブレイクの改訂)〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - ・ E-mail Address(電子メール・アドレス)(任意)

タスク・ブレイクの発生時に通知を受け取るユーザーのアドレス番号を指定します(またはリストから選択します)。
 - ・ Task Break(タスク・ブレイク)

タスク・ブレイクがない場合は空白、タスク・ブレイクがある場合は"2"を指定します。このフィールドを空白にすると、タスク・ブレイクは構成されません。
 - ・ Task Break Short Text(タスク・ブレイク・ショート・テキスト)(必須)

タスク・ブレイクの略式記述を入力します。
 - ・ Optional Detail(任意詳細)(任意)

タスク・ブレイクの詳細情報を入力します。

7. [OK]をクリックします。

〈Task Break Revisions〉がクローズし、〈Work with Task Breaks〉が再表示されます。他にもタスク・ブレイクが必要であれば指定します。

8. [Close(閉じる)]をクリックします。

Installation Workbenchの実行

〈Installation Workbench〉では、インストール・プランを組み込む個々のワークベンチがすべて実行されます。在席時ワークベンチを指定した場合は、個々のワークベンチが完了してから次のワークベンチを開始します。無人ワークベンチを指定した場合は、個々のワークベンチが自動的に開始され、すべてが完了(または、タスク・ブレイクやエラーが発生)するまで続行されます。

注意

〈Installation Workbench〉に無人モードを選択した場合は、完了時に各のタスクが正常に実行されたかどうかをチェックする必要があります。完了していないタスクは、必ず再実行してください。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [Installation Workbenchの開始 - ページ \[191\]](#)
- ・ [Initial Workbench Tasks - ページ \[192\]](#)
- ・ [ロケーションの構成 - ページ \[195\]](#)
- ・ [データ・ソースの構成 - ページ \[196\]](#)
- ・ [環境の構成 - ページ \[197\]](#)
- ・ [マシンの構成 - ページ \[198\]](#)
- ・ [コントロール・テーブルのマージ - ページ \[199\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーのインストール - ページ \[201\]](#)
- ・ [テーブル変換の実行 - ページ \[201\]](#)
- ・ [テーブル変換プロセスの検証 - ページ \[213\]](#)
- ・ [スペック・テーブルのマージ - ページ \[221\]](#)
- ・ [Specification Mergeの再起動 - ページ \[223\]](#)
- ・ [パッケージの構成 - ページ \[224\]](#)
- ・ [リモート・ロケーションの構成 - ページ \[225\]](#)
- ・ [〈Installation Workbench〉の終了 - ページ \[226\]](#)
- ・ [データベース統計の更新 - ページ \[227\]](#)

はじめる前に: SQL Serverに関する考慮事項

SQL Serverに関する考慮事項
SQL Serverを使用する場合は、〈Installation Workbench〉を実行する前に、次のデータベース・オプションが有効になっているかどうかを確認してください。[Select Into/Bulk Copy(選択/一括コピー)][Truncate Log on Checkpoint(チェックポイントでのログの切捨て)]

Installation Workbenchの開始

注意

一部の処理が停止してしまうため、〈Installation Workbench〉プロセスの実行中は(スクリーン・セーバー・パスワードなどを使用して)デプロイメント・サーバーをロックしないでください。

注意

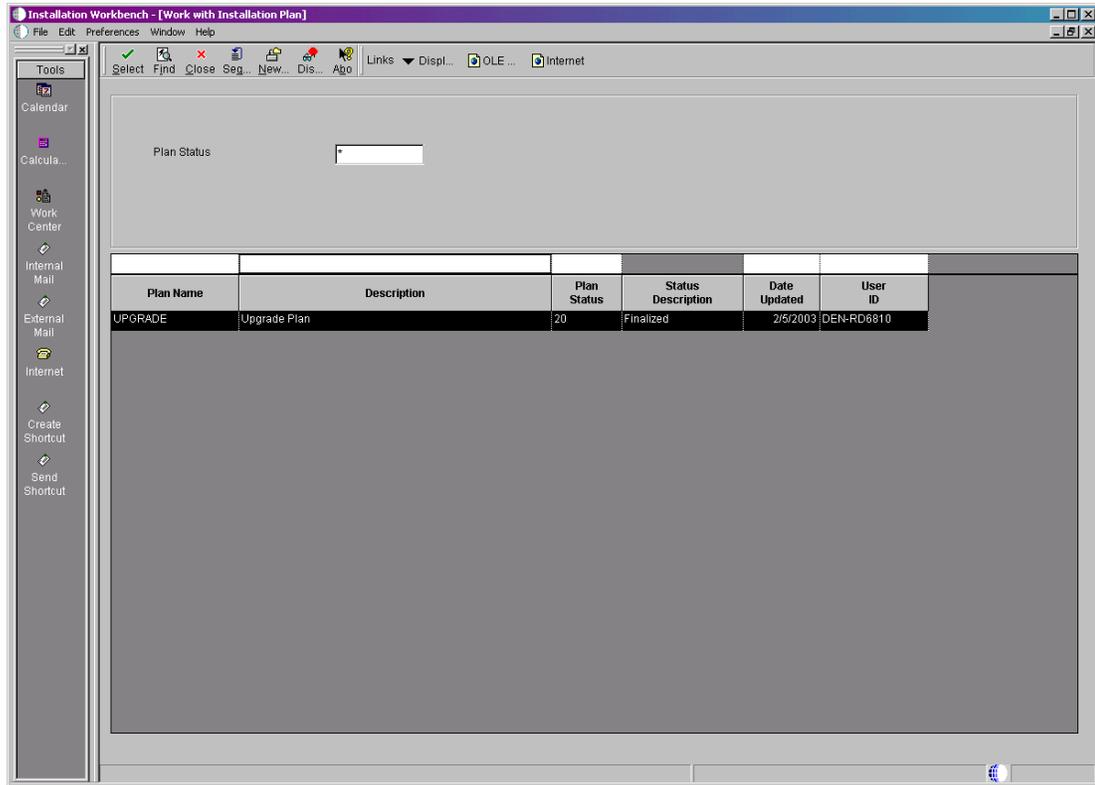
〈Installation Workbench〉は、VNCやPC Anywhereなどのリモート・アクセスから実行しないでください。

▶ 〈Installation Workbench〉を開始するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	プリンタがデプロイメント・サーバー用に設定されているかどうかを確認します。設定されていない場合は、該当するMicrosoft Windowsマニュアルとプリンタ・マニュアルを参照してください。また、セントラル・オブジェクトのロード完了、つまり、loadallスクリプトが正常終了したかどうかも確認します。〈Installation Workbench〉実行中はOracleの[ArchiveLog]が無効になっていることを確認します。
同時に行うタスク	なし

1. 〈System Installation Tools〉メニュー(GH961)から〈Installation Workbench〉を選択します。

このアプリケーションを初めて実行する場合は、システムにより必要なオブジェクトがJITIによりインストールされます。



- ・ 在席時ワークベンチ・モードを指定した場合は、次の手順に従って、〈Initial Workbench Tasks〉を含め各ワークベンチを完了します。
 - ・ 無人ワークベンチ・モードを指定した場合はプロセスが開始され、タスク・ブレイクを設定しなければすべてのワークベンチが自動的に完了します。タスク・ブレイクを設定していない場合は、「エンタープライズ・サーバーのインストール」に進んでください。
2. 〈Work with Installation Plans(インストール計画の処理)〉で、作成したプランをダブルクリックします。

Initial Workbench Tasks

〈Initial Workbench Tasks〉フォームでは、個々のワークベンチを開始する前に、次の予備タスクを完了できます。

- ・ セキュリティのコピー(バージョンB73.3以上からのアップグレードにのみ該当)
- ・ メディア・オブジェクト(インプレース)Unicode変換
- ・ データ辞書メディア・オブジェクトUnicode変換
- ・ データ辞書のコピー
- ・ システム・テーブルのコピー

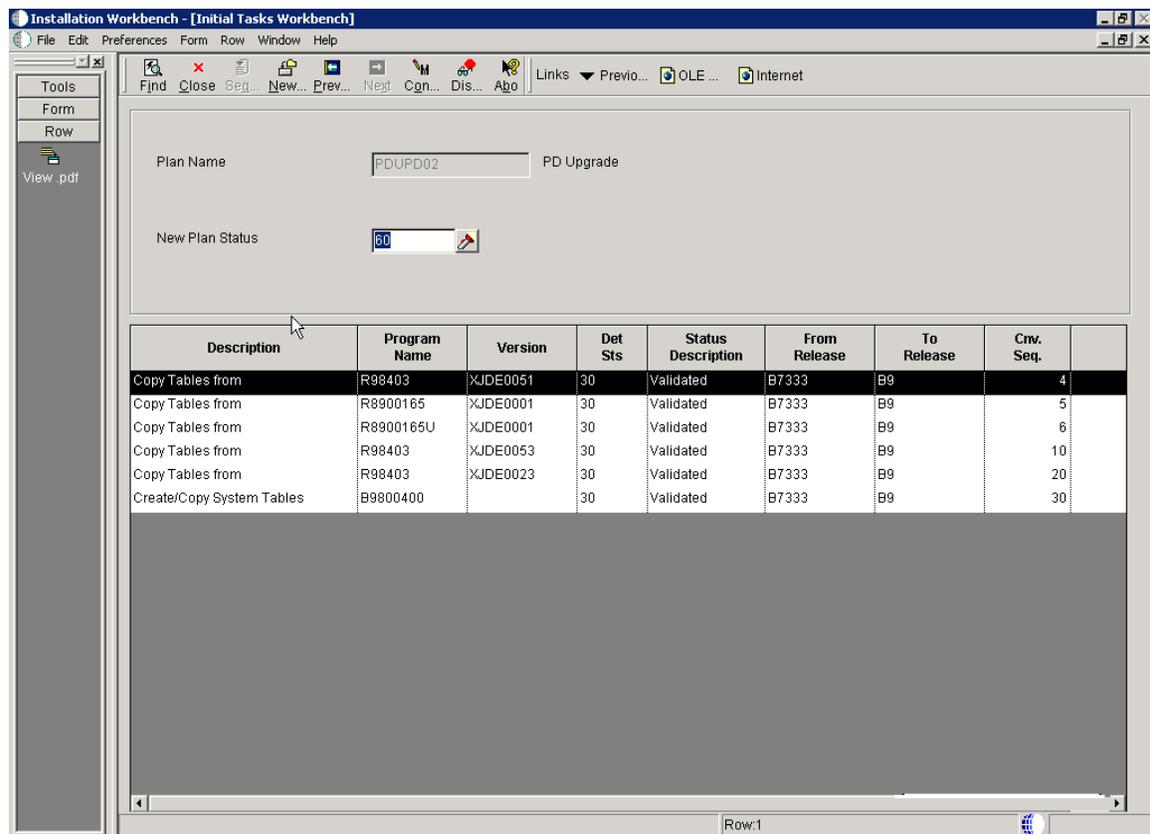
- ・ 〈Release Master(リリース・マスター)〉

また、タスクを再実行する必要がある場合などは、任意の通常タスクの状況を変更できます。

この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行する場合、または〈Initial Workbench Tasks〉の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ 〈Initial Workbench Tasks〉を実行するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし



- ・ 〈Initial Workbench Tasks〉の[Form(フォーム)]メニューで[Configure(構成)]をクリックします。

タスクが実行され、〈Location Workbench〉フォームが表示されます。

〈Initial Workbench Tasks〉の実行中に、メディアオ・オブジェクトUnicode Conversion用に次の2つのUBEがスケジュールされています。

- ・ 〈Convert Media Objects Table F00165(メディア・オブジェクト・テーブルF0015の変換)〉プログラ

ム(R8900165)(順次)では、ビジネス・データに保管されているメディア・オブジェクトが変換されます。

- ・ 〈Copy Media Object Data - Unicode Conversion(メディア・オブジェクト・データのコピー - Unicode変換)〉プログラム(R8900165U)では、データ辞書メディア・オブジェクトが変換されます。

次のエラー・メッセージおよび対応する解決策のリストを参照してください(詳しくは、jde.logを参照してください)。

エラー・メッセージ	解決策
SelectKeyed to F00165T failed	F00165のスペックをチェックして再実行します。
Read Failed:Media Object data not available in F00165T blob	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
Read Failed:Cannot allocate memory for Media Object Blob	仮想メモリをチェックして再実行します。
Read Failed:Missing records for BLOB concat - Total(###) - Read(###)	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
Cannot allocate memory for Generic Text Blob	仮想メモリをチェックして再実行します。
Fail to open OLE storage file (<Queue Path> - <.stg file name>)	System - B9のF98MOQUEに定義されているパスにファイルが存在することを(<Queue Path>に基づいて)確認し、再実行します。
OLE storage file might be corrupted - <.stg file name>	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
OLE substorage file might be corrupted - <.stg file name>	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
OLE Fail:Insufficient memory to create new file (<Queue Path>) - <filename>	仮想メモリをチェックして再実行します。
OLE Fail:Access Denied - cannot create new file (<Queue Path>) - <filename>	OLE待ち行列パス・フォルダのセキュリティ設定をチェックし、再実行します。
OLE Fail:Program error - cannot create new file (<Queue Path>) - <filename>	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
OLE Fail:Cannot create new file (<Queue Path>) - <filename>	OLE待ち行列パスのディスク容量が適切かどうかをチェックし、再実行します。
JDB CommitUser Fails	データベース(ブロック)設定をチェックして再実行します。
Invalid Shortcut Data - <file name>	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
Invalid Shortcut Data - cannot allocate memory	仮想メモリをチェックして再実行します。
Invalid Document ID - <vendor name>	オブジェクトが欠落または破損しているため、手作業で追加する必要があります。
Secondary RTF File fails to open (<Queue Path>) - <filename>	System - B9のF98MOQUEに定義されているパスにファイルが存在するかどうかを(<Queue Path>に基づいて)確認し、再実行します。
Cannot allocate memory for RTF Blob	仮想メモリをチェックして再実行します。

▶ 〈Initial Workbench Tasks〉の状況を変更するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1つまたは複数の追加ワークベンチ・タスクの状況を変更する場合があります。タスクの状況を変更するには、次の手順で操作します。

1. [Fast Path(略式コマンド)]に“GH961”と入力し、〈System Installation Tools〉メニューを開きます。
2. 〈Custom Installation Plan(カスタム・インストール・プラン)〉をダブルクリックします。
3. 〈Work with Installation Plans〉で、インストール・プランを選びます。
4. [Row]メニューから[Expand(展開)]をクリックします。
通常タスクを含め、プランのコンポーネントが表示されます。
5. 状況を変更するタスクを選びます。
6. [Row]メニューから[Disable(使用不可)]、[Enable(使用可能)]、または[Complete(完了)]をクリックします(下記の表を参照してください)。

タスクの状況が変更されます。

[Row]メニューのオプション	意味
Disable	状況70。タスクは未完了であり、再実行されません。
Enable	状況10。タスクは再実行されます。
Complete	状況60。タスクは完了しており、再実行されません。

ロケーションの構成

〈Location Workbench〉では、プランで定義したすべてのロケーションが、プランナ・データ・ソースのデプロイメント・ロケーション定義テーブル(F9654)からSystem - B9データ・ソースにコピーされます。また、ロケーション・プラン詳細テーブル(F984021)が更新されます。

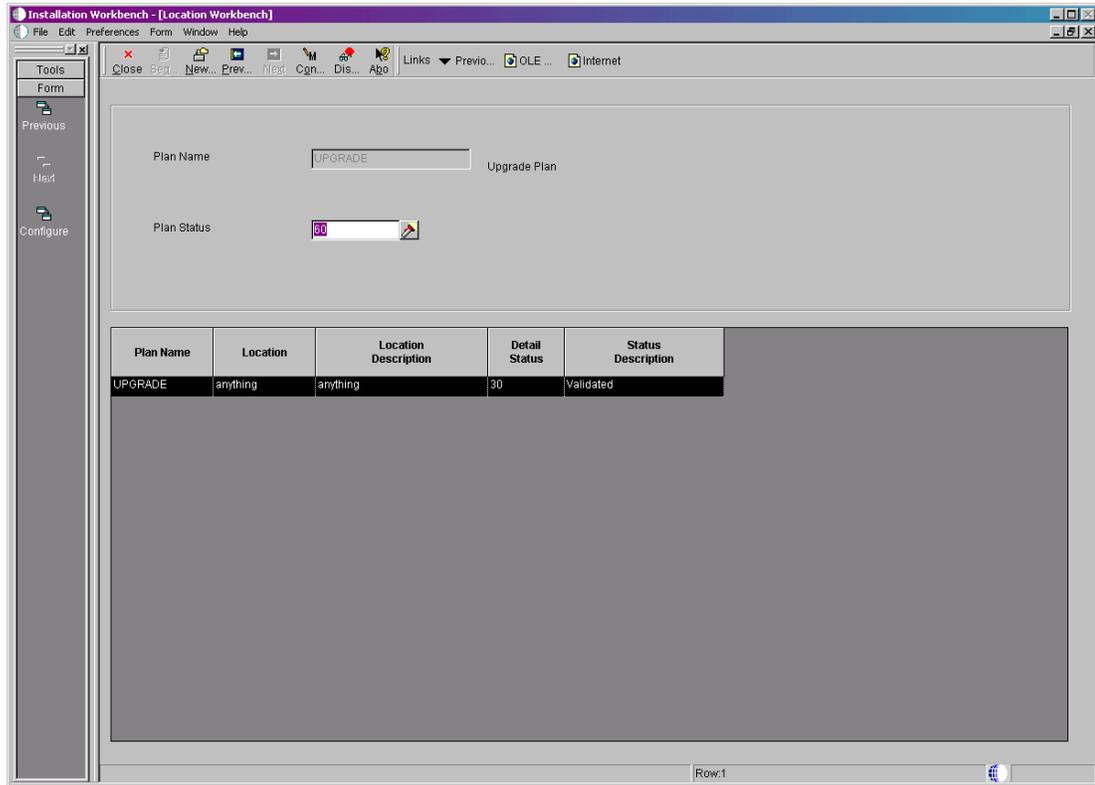
この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または〈Location Workbench〉の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ ロケーションを構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。

前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. 〈Location Workbench〉で、すべてのロケーションが表示されているかどうかを検証します。



2. [Form]メニューから[Configure]を選択します。

ロケーションが構成され、〈Data Source Workbench〉フォームが表示されます。

[Detail Status (詳細状況)]が60に更新され、[Status Description (状況記述)]が[Validated (検証済み)]から[Installed (インストール済み)]に変わります。

データ・ソースの構成

〈Data Source Workbench〉では、プランで定義したすべてのデータ・ソースが、プランナ・データ・ソースのデータ・ソース・マスター(F98611)とテーブル/データ・ソース・サイジング・テーブル(F986115)から、System - B9データ・ソースにコピーされます。また、データ・ソース・プラン詳細テーブル(F98401)が更新され、処理結果が反映されます。

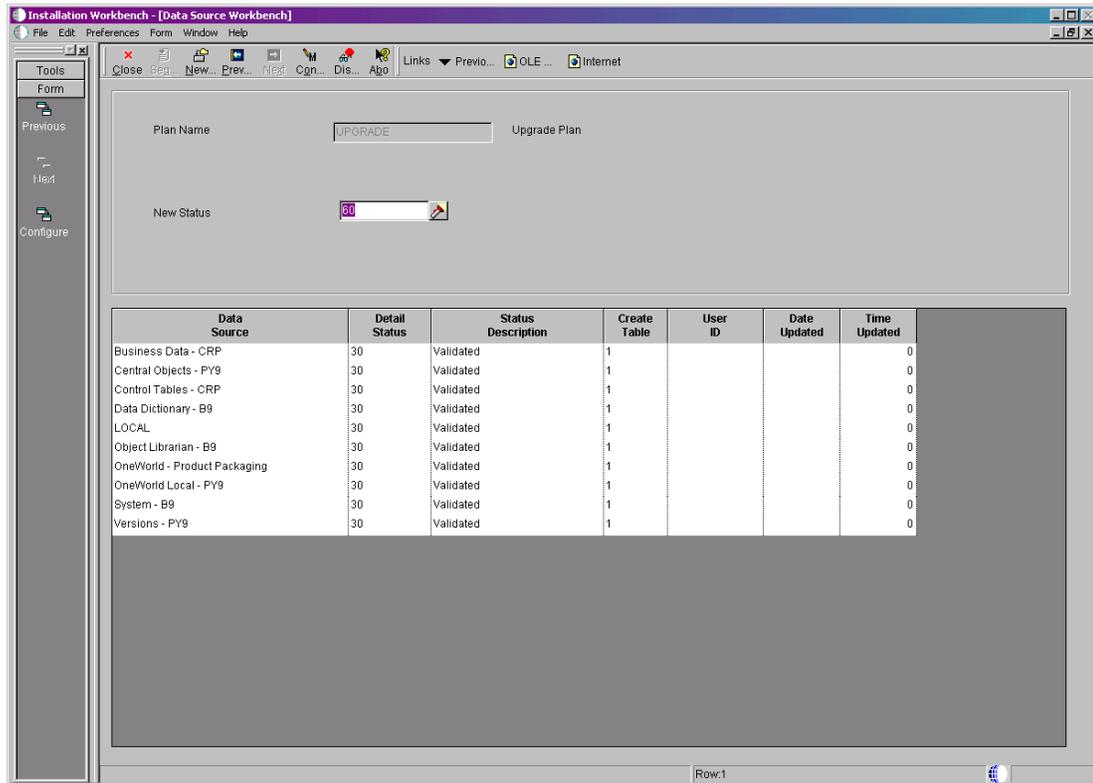
この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または〈Data Source Workbench〉の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ データ・ソースを構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオ

	ンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. 〈Data Source Workbench〉で、すべてのデータ・ソースが表示されているかどうかを検証します。



2. [Form]メニューから[Configure]を選択します。

データ・ソースが構成され、〈Environment Workbench〉フォームが表示されます。

データ・ソースの構成が完了すると、[Detail Status]が60に更新され、[Status Description]が[Validated]から[Installed]に変わります。

環境の構成

〈Environment Workbench〉では、各環境のオブジェクト構成マスター(F986101)のみでなく、環境情報テーブル(F0094、F00941、およびF00942)が、プランナ・データ・ソースからSystem - B9データ・ソースにコピーされます。次に、処理結果を反映するために環境プラン詳細テーブル(F98403)が更新されます。プランの設定によっては、新規の汎用テキストをコピーして、オブジェクト管理ワークベンチ・テーブルとバージョン・テーブルを作成して自動入力するために、バッチ・アプリケーションも実行されます。

〈Environment Workbench〉では、同時に複数のバッチ・アプリケーションを実行し、リリース8.9で同時に複数の環境をロードすることができます。これにより、環境ロード処理の所要時間が短縮されます。

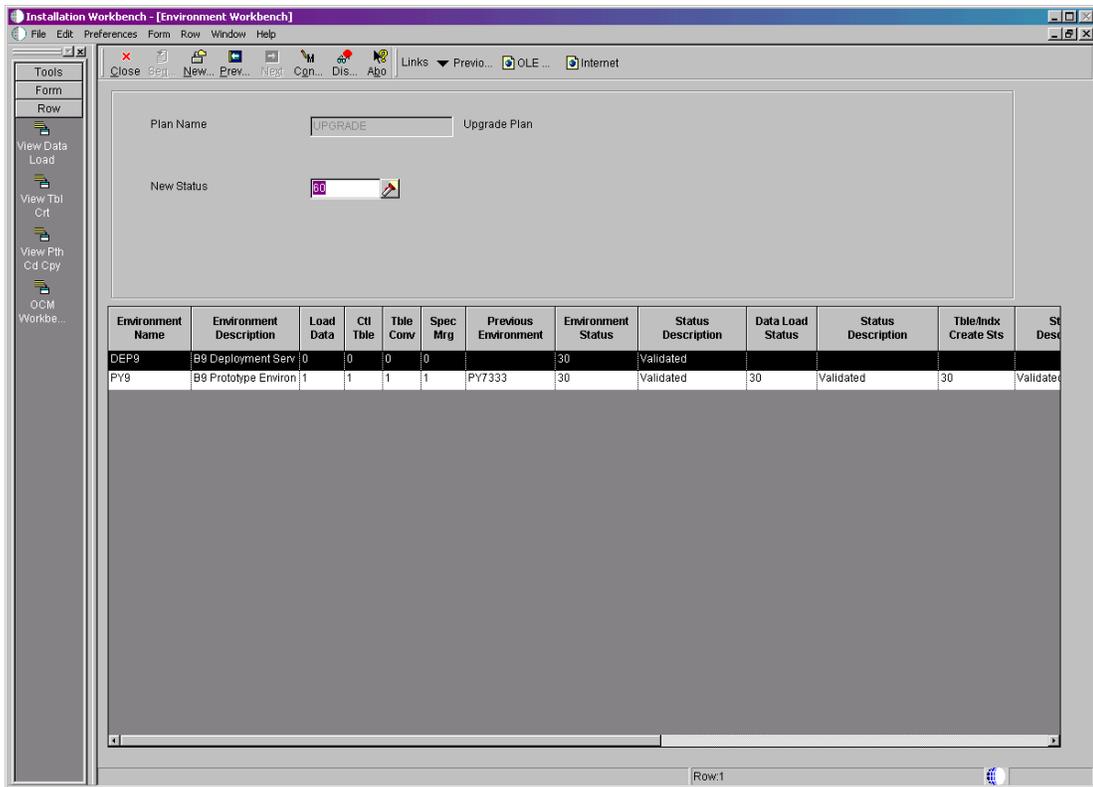
この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または〈Environment Workbench〉の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

旧リリースに存在しない新規テーブルも、テーブル/索引変更UBE R98407で作成されます。

▶ 環境を構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	〈Environment Workbench〉は、エンタープライズ・サーバーのインストール・プロセスと同時に実行できますが、パフォーマンスが低下します。

1. 〈Environment Workbench〉で、各環境とその関連パラメータが正しい値に設定されていることを確認します。



2. 環境を検討した後に、[Configure]を選択します。
3. 〈Environment Workbench〉の完了後に、各環境の[Detail Status]が60に更新され、[Status Description]が[Validated]から[Installed]に変わったことを確認します。
4. Adobe Acrobat Readerを使用してすべてのXJDEレポートを検査し、すべての構成状況が[Success (完了)]となっていることを確認します。

マシンの構成

〈Machine Workbench〉では、サーバー構成ファイル(F9650とF9651)が、プランナ・データ・ソースから

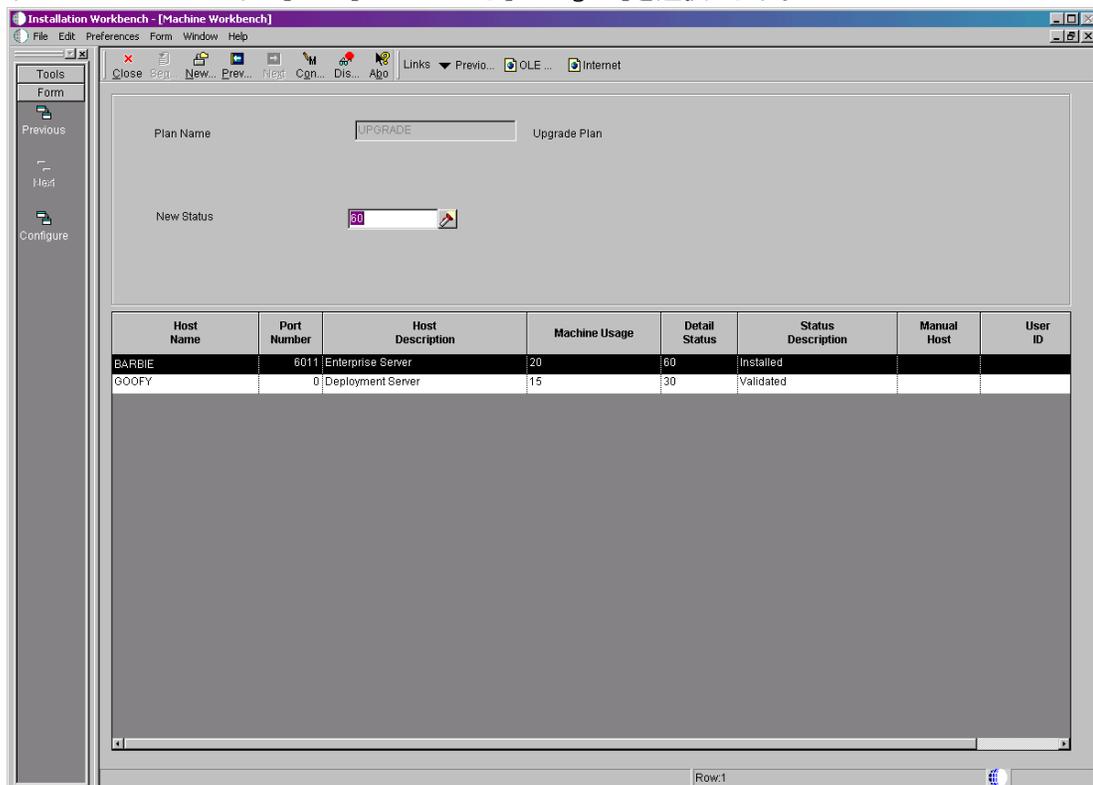
System - B9データ・ソースにコピーされます。次に、処理結果を反映するためにホスト・プラン詳細テーブル(F98402)が更新され、環境情報を使用してサーバー・マップ・データ・ソースにオブジェクト構成マスター(F986101)とデータ・ソース・マスター(F98611)が自動入力されます(有効な環境、データ・ソース、およびサーバー・マップのテーブルのみが作成されます)。

この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または<Machine Workbench>の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ マシンを構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. <Machine Workbench>の[Form]メニューから[Configure]を選択します。



2. <Machine Workbench>の完了後に、各マシンの[Detail Status]が60に更新され、[Status Description]が[Validated]から[Installed]に変わったことを確認します。

コントロール・テーブルのマージ

<Control Table Workbench>では、プランで指定したマージ用のバッチ・アプリケーションが実行され、デ

一タ辞書、ユーザー定義コード(UDC)、Solution Explorer、およびその他のコントロール・テーブルが更新されます。次に、処理結果を反映するためにテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)が更新され、完了メッセージが表示され、変換ログ・レコードがテーブル変換 - 履歴ログ・テーブル(F984052)に書き込まれます。

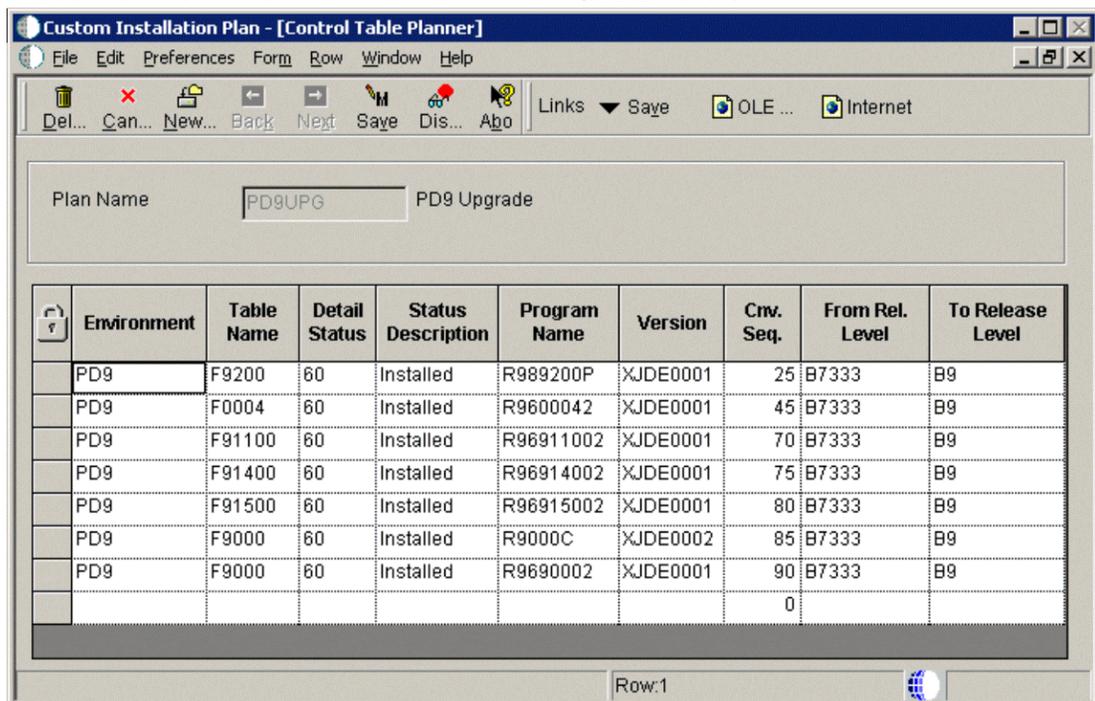
この情報は、代替言語をインストールしている場合に適用されます。配布された言語テーブルは、コントロール・テーブル、システム・テーブル、およびデータ辞書テーブルで構成されます。UDCテーブルには必要な言語のテキストのみが含まれていますが、メニュー・テキスト・ファイルとデータ辞書ファイルにより、既にインストールされている英語版レコードの先頭に必要な言語が追加されます。

この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または<Control Table Workbench>の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ コントロール・テーブルを構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	<Control Table Workbench>中にテーブル変換が実行されたことを確認します。

1. グリッドにすべてのコントロール・テーブル・マージが表示されます。



注意

マージされるコントロール・テーブルの数は、実行するアップグレードのタイプに応じて異なります。実際の〈Control Table Workbench〉フォームに表示されるテーブル数は、上記の図とは異なる場合があります。

2. [Form]メニューから[Merge All(すべてをマージ)]を選択します。
3. 各マージの完了後に、生成されたレポートの出力を検証します。

〈Installation Workbench〉を無人モードで実行している場合は、〈Control Table Workbench〉と〈Table Conversions (テーブル変換)〉の間にタスク・ブレイクが自動的に発生します。

参照

- ・ マージ機能については『インストール・リファレンス・ガイド』の「マージ」
- ・ レポートについては『インストール・リファレンス・ガイド』の「レポート」

エンタープライズ・サーバーのインストール

この時点で、「エンタープライズ・サーバーのインストール」の章で説明するステップに従ってエンタープライズ・サーバーをインストールします。サービスが実行されている時点まで進み、PORTTESTまでのステップを実行します。JDESQUE Serviceをインストールする必要はありません。エンタープライズ・サーバーのインストール完了後に、テーブル変換を実行してください。

注意

エンタープライズ・サーバーのインストール後にPORTTESTを実行すると、エラー・メッセージが戻されます。これは、この時点では勘定残高テーブル(F0902)にアクセスできないためです。このフィールドのフォーマットは、〈Table Conversion Workbench〉中に変更されます。勘定残高テーブル(F0902)へのアクセスに関連するエラー(Select all on table F0902 failed - rcode=0など)は無視してください。ワークベンチ・タスクがすべて完了し、エンタープライズ・サーバーの構成が完了してから、PORTTESTを再実行します。

テーブル変換の実行

〈Table Conversion Workbench〉では、テーブル変換によってテクニカル・テーブルとアプリケーション・テーブルがリリース8.9用の新しいフォーマットに変換されます。変換ごとにテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)が更新され、完了メッセージが表示され、変換ログ・レコードがテーブル変換 - 履歴ログ・テーブル(F984052)に書き込まれます。

次の手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または〈Table Conversion Workbench〉の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

すべてのユーザーは、リリース8.9の〈Table Conversion Workbench〉に表示されるテーブル変換を実行する必要があります。

注意

テーブル変換をエンタープライズ・サーバー上で実行するように選択した場合は(デフォルト)、デプロイメント・サーバー上で次のテーブル変換が実行されます。

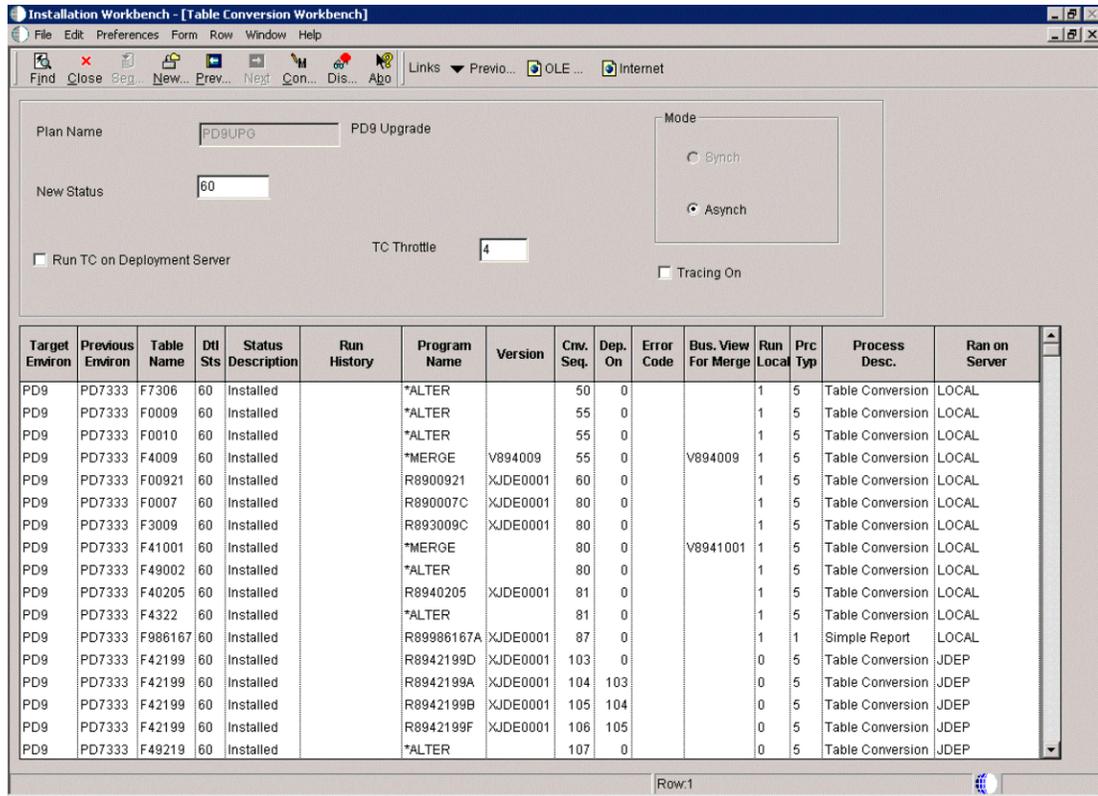
- ・ 順序99以下のテーブル変換
- ・ [Run On Deployment Server]フラグが有効になっているテーブル変換

[Data Message(データ・メッセージ)]カラムは、テーブルが既にターゲットのフォーマットになっているかどうかをチェックしないように指示します。その他のTXの場合、テーブルが変換済みであればテーブル変換は実行されません。

▶ テーブル変換を実行するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	エンタープライズ・サーバー上でテーブル変換を実行する場合は、エンタープライズ・サーバーをインストールしてサービスを開始する必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. 〈Table Conversion Workbench〉をまだ開いていない場合は、〈Installation Workbench〉を開き、〈Work with Installation Plan〉でプランをダブルクリックし、〈Table Conversion Workbench〉が表示されるまで[Next(次へ)]をクリックします。



2. テーブル変換の実行場所を一時変更するには、[Run TC on Deployment Server(デプロイメント・サーバーでのテーブル変換)]をクリックします。
3. エンタープライズ・サーバーに同時に投入するテーブル変換の数を変更するには、[TC Throttle(テーブル変換スロットル)]の値を変更します。エンタープライズ・サーバー上でQBATCH待ち行列に対して設定されている最大ジョブ数と同じ値を入力する必要があります。WRKJOBQEを使用して、設定した待ち行列により特定の時点で実際に実行されるテーブル変換の数を制御します。
4. [Form]メニューから[Convert All(すべてを変換)]を選択します。

カスタマイズに関する考慮事項

一度に1つずつ変換処理を実行するには、該当する詳細レコードを選んで[Form]メニューから[Convert Selected(選択した変換の実行)]を選択します。

トラブルシューティング

変換中は、〈Table Conversion/Merge Log(テーブル変換/マージ・ログ)〉(P984052)を選択して、進捗状況をトラッキングできます。このプログラムにアクセスするには、〈System Installation Tools〉メニュー(GH961)で、〈Advanced Operation〉と〈Table Conversion/Merge Log〉を順番にダブルクリックします。このプログラムでは、完了した変換処理のスクロール・リストが表示されます。

Table Conversion Workbenchのアーキテクチャ

〈Table Conversion Workbench〉プログラム(P98413)には、[Convert All]を使用して自動的に実行する方

法と、[Convert Selected]を使用して実行する方法があります。無人モードで実行中は、前者の方法が自動的に使用されます。

[Convert All]を選択すると、2つのループが実行されます。外側のループは、他に実行するテーブル変換がなくなり、実行中状況のテーブル変換がなくなるまで実行されます。内側のループはテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)を使用して実行され、状況が60未満のテーブル変換がすべて検索されます。新規レコードを読み取るたびに、状況35で依存関係のあるテーブル変換を待機しているテーブル変換の有無がチェックされます。最初に依存テーブルが実行されてから(依存関係が満たされているかどうか)が再チェックされ、読み取った新規テーブル変換が実行されます。

テクニカル・テーブルの各テーブル変換(変換順序 < 100)は一度に1つずつ実行されます。順序が100以上のテーブル変換の場合は、[Convert All]を選択するとプランで指定した最大バッチ・ジョブ数(デフォルトでは4)が使用されます。つまり、一度に最大4つのテーブル変換が投入されます。P986130を使用して、設定した待ち行列により特定の時点で実際に実行されるテーブル変換の数を制御します。Windows/UNIXのデフォルト設定は、一度に4つのバッチ・ジョブです。[Convert All]を選択すると、4つのテーブル変換が実行され、ジョブの終了を待ってから次のジョブが実行されます。待ち行列数を5以上に設定した場合も、一度に投入されるのは4つだけです。

投入するテーブル変換ごとに、最初に依存関係の有無がチェックされてから、それぞれの依存状況がチェックされます。依存関係のあるテーブル変換がまだ実行中(状況45)の場合、このテーブル変換は状況35(依存関係を待機中)に変更されます。

[Convert Selected]を使用すると、一度に複数のテーブル変換を投入し、すべてが完了するまでループ処理を続行できます。完了すると、ループを終了します。完了したかどうかを確認するには[Find]をクリックします。

P98413は、テーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)をモニタリングして更新します(JDEPlanでローカルに保管)。テーブル変換により、テーブル変換 - 履歴ログ・テーブル(F984052)が更新されます(System - B9に保管)。テーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)には常に、実際には完了しているテーブル変換に関する状況45のレコードがあります。〈Table Conversion Workbench〉は、ループ中のさまざまな時点でビジネス関数をコールします。このビジネス関数は、テーブル変換 - 履歴ログ・テーブル(F984052)とテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)を比較し、後者のレコードの状況を完了(60)または失敗(50)に更新します。〈Table Conversion Workbench〉が失敗した場合(取り消した場合など)は、〈Custom Plan(カスタム・プラン)〉アプリケーションにアクセスし、テーブル変換にドリルダウンして[Find]をクリックします。これにより、F98405がF984052と同期化されます。また、〈Table Conversion Workbench〉で[Find]をクリックした場合も、F98405とF984052が同期化されます。

〈Table Conversion Workbench〉の実行中にエンタープライズ・サーバーが異常終了する場合は、失敗しているにもかかわらず状況が45(実行中)になっているジョブが最大4つ存在する可能性があります。〈Table Conversion Workbench〉の再開に関する指示に従って、すべてを同期状態に戻してください。〈Custom Plans [Table Conversions](カスタム・プラン[テーブル変換])〉で[Find]をクリックすると、F98405がF984052と同期化されることに注意してください。実際にサーバー上でテーブル変換に失敗すると(ジョブを取り消した場合など)、F984052は更新されず、プロセスではF98405を正しく更新できません。[Convert Selected]または[Convert All]をクリックすると、状況45のジョブは再投入されません。〈Table Conversion Workbench〉の再開時に、状況45のジョブがまだ実行されているかどうかを手作業で確認し、〈Table Conversion Workbench〉で再投入させる場合は状況を30または50に設定する必要があります。

すべてのテーブル変換のジョブ名はR98405Aです。このジョブをjde.logで調べると、どのテーブル変換が実行中であるかを示すメッセージが書き込まれています。

エンタープライズ・サーバー上でのテーブル変換の処理

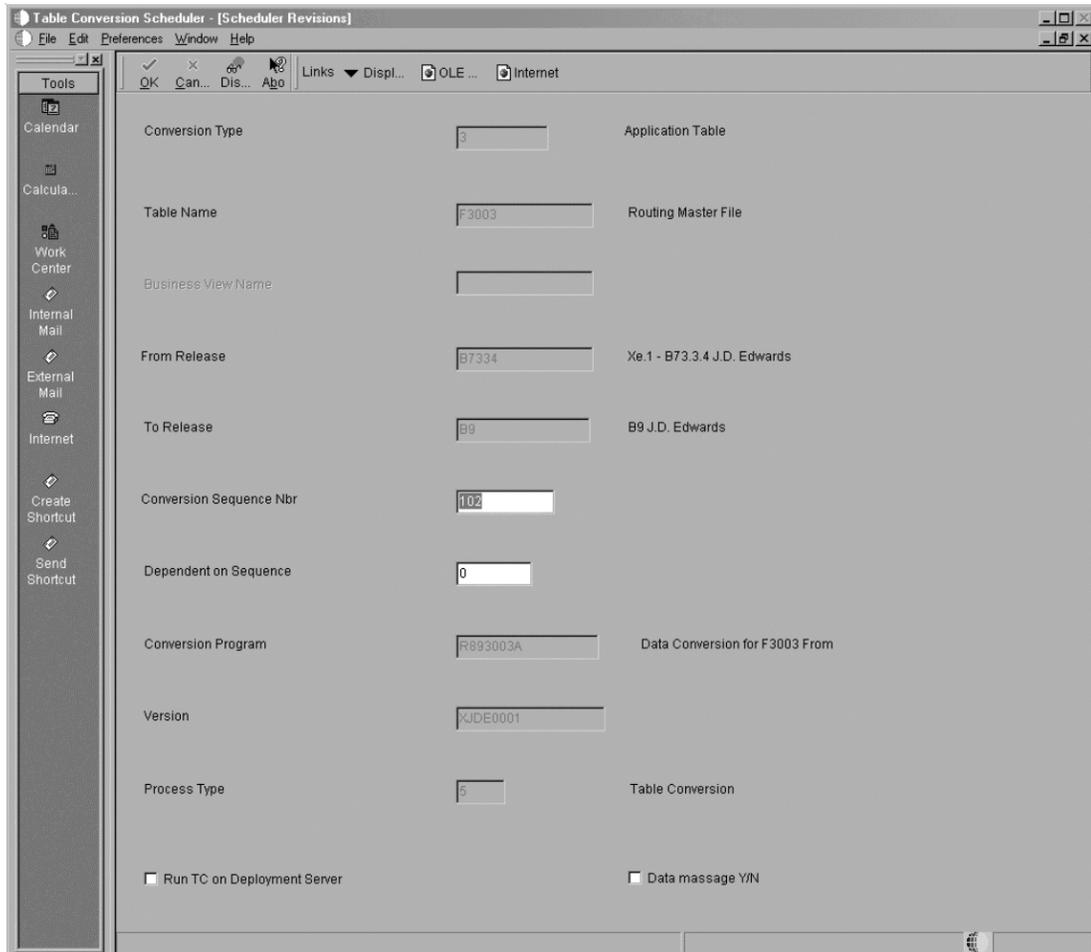
リリース8.9の新機能として、エンタープライズ・サーバー上でテーブル変換を実行できます。変換の実行に使用できるように、構成、起動、モニタリング、および回復用の新しいプロセスとツールが用意されています。これらはXeとERP 8.0の場合に類似していますが、それぞれの操作方法の詳細は異なります。

エンタープライズ・サーバー上で実行するためのテーブル変換の構成

テーブル変換の実行場所を制御できるように、次の3つの設定が用意されています。

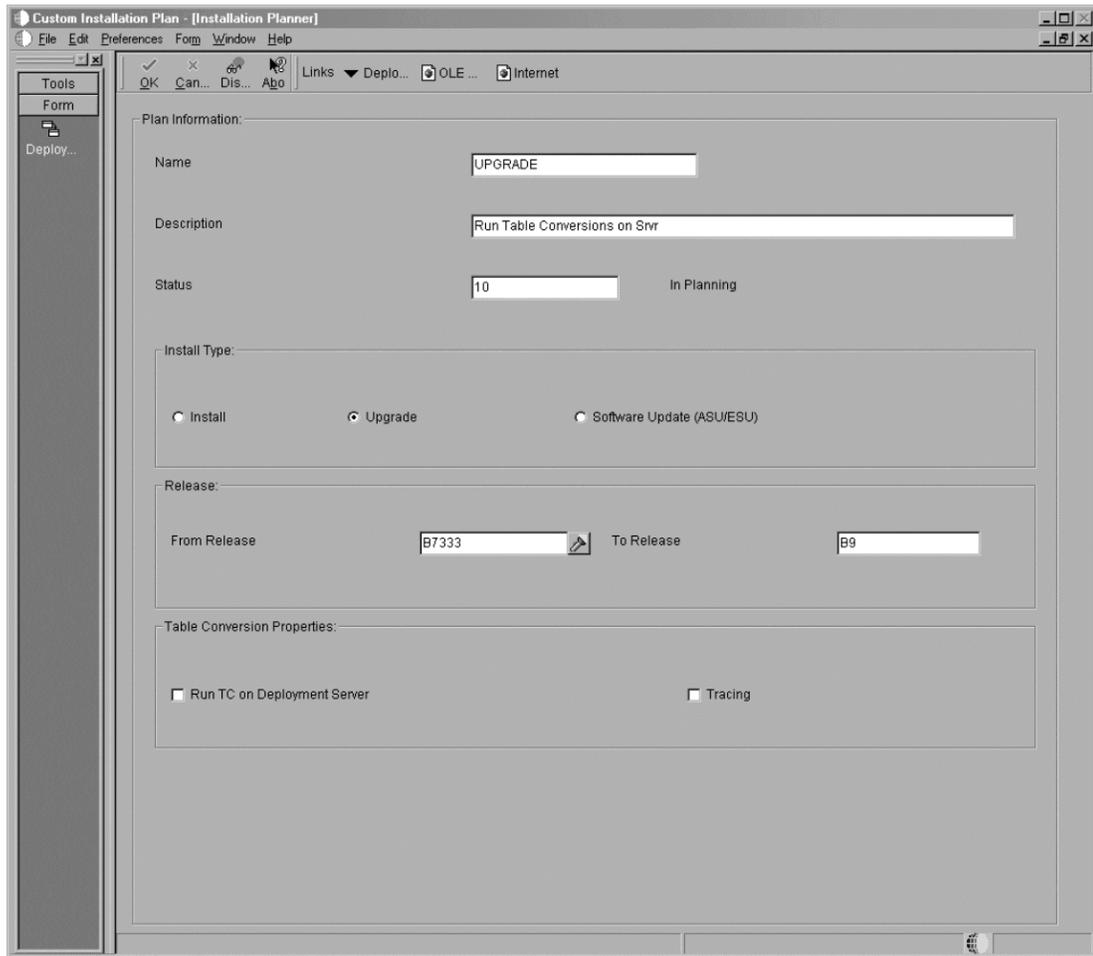
1. Table Conversion Scheduler(テーブル変換スケジューラ)

テーブル変換のスケジュール時に、変換をエンタープライズ・サーバー上で実行できるかどうかをスケジュール所有者が決定します。エンタープライズ・サーバー上で実行できない場合、スケジュール所有者は[Run TC on Deployment Server]を選択します。ほとんどの変換は、エンタープライズ・サーバー上で実行できます。組み込めないのは、テクニカル・テーブルの変換(順序 < 100)、UBE、およびデータ・ソース間の変換(プリンタ、ユーザー設定)です。〈Table Conversion Scheduler〉には、〈Advanced Operations〉メニュー(GH9611)からアクセスできます。



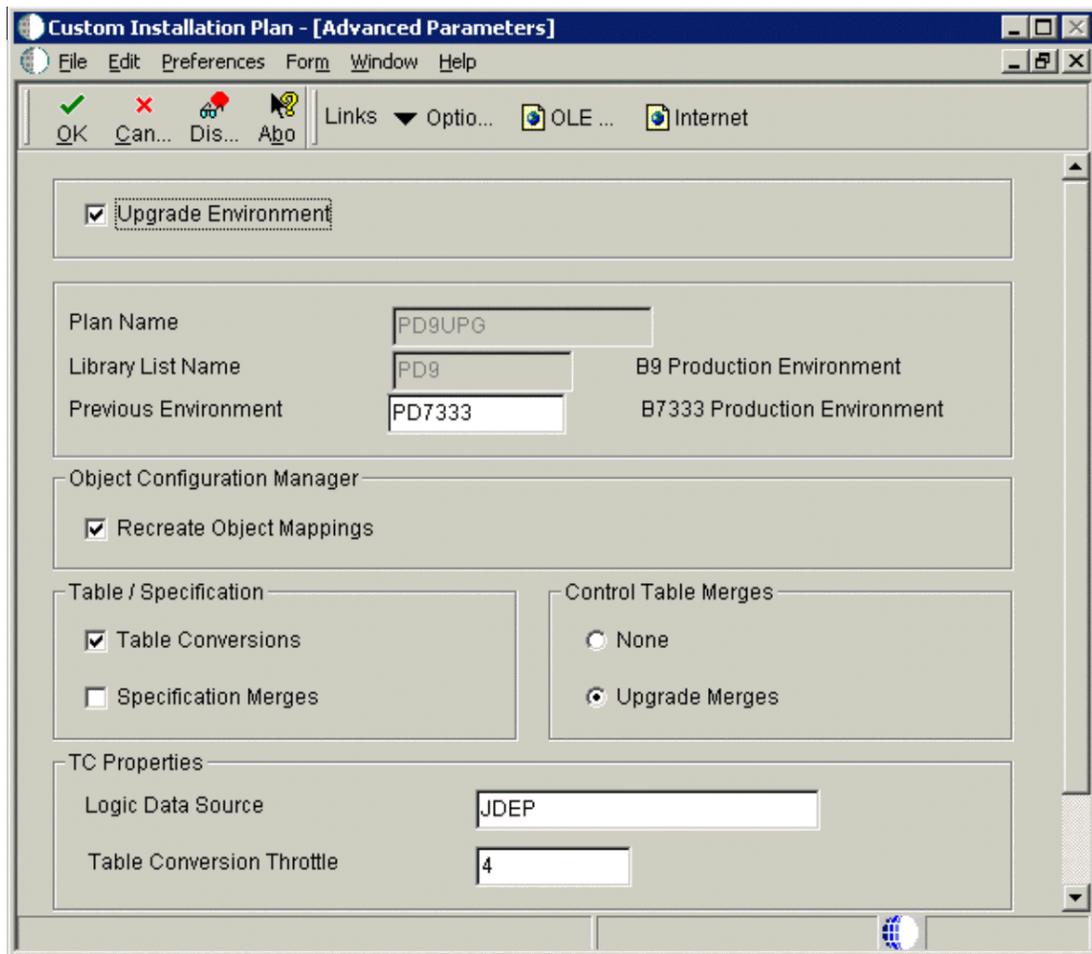
2. アップグレード・プランの定義

テーブル変換をエンタープライズ・サーバーに実行する操作は、必須ではありません。この操作の主なメリットはパフォーマンスに関するものです。小規模なデータベースを使用している場合は、デプロイメント・サーバー上で実行するように決定できます。そのためには、プランを定義するときに[Run TC on Deployment Server]を選択します。デフォルトでは、変換処理はエンタープライズ・サーバー上で実行されません。



3. 〈Select Environments (環境の選択)〉の[Advanced (上級)]エグジットを使用して、エンタープライズ・サーバーと最大ジョブ数を選択します。

〈Select Environments〉で環境を選択した後、[Advanced]エグジットを選択して〈Advanced Parameters (上級/パラメータ)〉にアクセスします。環境に対してテーブル変換を実行するエンタープライズ・サーバー用の論理データ・ソースを選択します。上記の手順を実行しなければ、〈Installation Planner〉でエンタープライズ・サーバーが選択されます。ポート番号は、デプロイメント・サーバーのjde.iniで指定します。同じ画面で、エンタープライズ・サーバー上のデフォルト・ジョブ待ち行列の最大ジョブ数を一時変更できます。



待ち行列の構成

リリース8.9では、〈Batch Processing Setup〉メニュー (GH9013)の〈Job Queues〉はQueue Kernelに実装されています。初期タスクの実行中に、〈Release Master〉によりプランで設定したデフォルト待ち行列がエンタープライズ・サーバーのジョブ待ち行列テーブルにコピーされます。

テーブル変換の開始

テーブル変換を開始するには、〈Installation Workbench〉を実行します。無人モードの場合は、〈Table Conversion Workbench〉の前にエンタープライズ・サーバーの設定を求めるタスク・ブレークが表示されます。タスク・ブレークで[Stop]をクリックした場合、変換を開始するには[Convert All]をクリックする必要があります。

デプロイメント・サーバー上で変換を実行すると、R98405が起動され、すべての変換処理が実行されて、完了時にレポートが生成されます。

エンタープライズ・サーバー上で変換を実行すると、〈Table Conversion Workbench〉では、ローカルに実行される変換処理を含め、変換ごとにR98405Aが起動されます。これは〈System Administration Tools (システム・アドミニストレーション・ツール)〉メニュー (GH9011)に表示されるUBEです。すべての変換が完了すると、R984052によりレポートが生成されます。

テーブル変換のモニタリング

〈Table Conversion Workbench〉には、変換を制御するためのスロットル・メカニズムが導入されています。デプロイメント・サーバー上で変換を実行する場合は、変換処理が一度に1つずつ起動されます。エンタープライズ・サーバー上で実行する場合は、待ち行列テーブルで最大バッチ・ジョブ数が検索され、その数の変換処理が一度に投入されます。どちらの場合も、テクニカル変換は常に1にスロットルされます。投入済みの変換のリストは、〈Table Conversion Planner(テーブル変換プランナ)〉で確認できます。

1. 〈System Installation Tools〉メニュー(GH961)にアクセスします。
2. 〈Typical Installation Plan(標準インストール・プラン)〉または〈Custom Installation Plan〉を開きます。
3. [Find]をクリックします。
4. プランを展開します。[Environments(環境)]、[Environment Name]、[Table Conversions]へとドリル・ダウンします。
5. [Table Conversions]ノードをハイライトして[Select(選択)]をクリックします。
6. [Detail Status]UBEに“45”と入力します。
7. [Find]をクリックします。

Prev Env	Table Name	Dtl Sts	Status Description	Program Name	Version	Cnv. Seq.	Dep. Seq.	Error Code	Run Local	Dta Msg	Hst Sts	Ran on Machine	From Rls
PD7333	F7306	60	Installed	*ALTER		50	0		1	0	4	LOCAL	B7333
PD7333	F0009	60	Installed	*ALTER		55	0		1		4	LOCAL	B7333
PD7333	F0010	60	Installed	*ALTER		55	0		1		4	LOCAL	B7333
PD7333	F4009	60	Installed	*MERGE	V894009	55	0		1	0	2	LOCAL	B7333
PD7333	F00921	60	Installed	R8900921	XJDE0001	60	0		1	1	2	LOCAL	B7333
PD7333	F0007	60	Installed	R890007C	XJDE0001	80	0		1		2	LOCAL	B7333
PD7333	F3009	60	Installed	R893009C	XJDE0001	80	0		1		2	LOCAL	B7333
PD7333	F41001	60	Installed	*MERGE		80	0		1		2	LOCAL	B7333
PD7333	F49002	60	Installed	*ALTER		80	0		1		4	LOCAL	B7333
PD7333	F40205	60	Installed	R8940205	XJDE0001	81	0		1		2	LOCAL	B7333
PD7333	F4322	60	Installed	*ALTER		81	0		1		4	LOCAL	B7333
PD7333	F986167	60	Installed	R89986167A	XJDE0001	87	0		1		2	LOCAL	B7333
PD7333	F42199	60	Installed	R8942199D	XJDE0001	103	0				2	JDEP	B7333
PD7333	F42199	60	Installed	R8942199A	XJDE0001	104	103				2	JDEP	B7333
PD7333	F42199	60	Installed	R8942199B	XJDE0001	105	104				2	JDEP	B7333

〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)で〈Submitted Reports(投入済みレポート)〉を選択し、

投入済み変換処理の状況を確認します。すべてのジョブがR98405Aを示していることがわかります。ジョブを変換処理にリンクするには、リリース8.9のジョブ番号をメモします。jde.log、jdedebug.log、および変換ログでは、いずれも名前にジョブ番号が使用されます。jde.logには、変換名を示すメッセージが含まれています。ログ・ファイルについては、次のセクションを参照してください。

The screenshot shows the 'Submitted Reports - [Submitted Job Search]' window. It features a menu bar (File, Edit, Preferences, Row, Window, Help), a toolbar with icons for Select, Find, Del..., Close, Seg..., New..., Dis..., and Abo, and a sidebar with tools like Row, Print, View PDF, View CSV, View OSA, View Logs, Termin..., Release, Hold, and View Web Job. The main area contains a form with fields for Host (DEVNTA), User ID (JDE), and Job Queue. Below the form is a table with the following data:

Queue	Status	Description	Priority	Type	User	Job Details	Host	Job #
QBATCH	P	Processing	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_2_PD	DEVNTA	
QBATCH	P	Processing	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_4_PD	DEVNTA	
QBATCH	P	Processing	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_6_PD	DEVNTA	
QBATCH	P	Processing	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_8_PD	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_14_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_16_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_18_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_20_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_22_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_28_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_30_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_34_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_36_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_40_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_10_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_12_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_24_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_38_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_42_P	DEVNTA	
QBATCH	W	Waiting	5	UBE	JDE	R98405A_XJDE0001_44_P	DEVNTA	

〈Server Administration Workbench(サーバー管理ワークベンチ)〉(SAW)を使用すると、プロセスと待ち行列をモニタリングし、jde.log、jdedebug.log、およびjde.iniを表示できます。

プラットフォーム固有のユーティリティ(タスク・マネージャ、wrkactjob、ps)を使用して変換処理をモニタリングすることも可能です。

変換のモニタリング時には、未変換のテーブル、一時テーブル、変換済みテーブル、およびデータベース・システム・テーブルをクエリーするデータベース固有のクエリーが役立ちます。

ログ・ファイル

ログ・ファイルは、次のように特定の場所に格納されます。

- ・ jde_<ProcessId>.logおよびjdedebug_<ProcessId>.logは、変換の実行中にPeopleSoft¥B9¥Logsに格納されます。変換が完了すると、この2つのログはPeopleSoft¥B9¥PrintQueueに移動し、ファイル名が次のように変更されます。

- ・ R98405A_XJDE0001_<OneWorld Job Number>_PDFjde.log
- ・ R98405A_XJDE0001_<OneWorld Job Number>_PDFjdedebug.log.
- ・ どのプラットフォームでも、変換ログはPrint Queueディレクトリに格納されます。ログ・ファイル名は次のいずれかです。
 - ・ <Report>_<Version>_D<Date>_T<Time>_J<JobNumber>.log
 - ・ <Table>_ALERTABLE_D<Date>_T<Time>_J<JobNumber>.log
 - ・ <Table>_MERGETABLE_D<Date>_T<Time>_J<JobNumber>.log
- ・ 印刷待ち行列フォルダは次のとおりです。PeopleSoft¥B9¥PrintQueue

INI設定

- ・ [DEBUG]
;Turn off jdedebug.log, set to FILE to turn on jdedebug.log
Output=NONE
;Turn on jde.log, set to 0 to turn off jde.log
LogErrors=1
;Do not send logging info to client, set to 1 to send logging info to client (not recommended)
ClientLog=0
- ・ [JDENET]
;Turn off JDENET tracing.Set to 1 to turn on JDENET tracing.
netTrace=0
- ・ [TCENGINE]
;Turn on minimal table conversion tracing.Set to 0 to turn off tracing (not recommended).Set to 10 for maximum tracing (useful for troubleshooting).
TraceLevel=1

注意

JDE.Logには無効なエラーが書き込まれている可能性があります。エラーと次の行は無視してください。

No rounding record found in tabletablename – datasource

tablenameはテーブル名、datasourceはデータ・ソース名です。

テーブル変換の停止

テーブル変換を停止するには、次の手順を実行する必要があります。

- ・ ワークベンチを閉じます。デプロイメント・サーバー上で、[タスク マネージャ]を開きます（[Ctl]+[Alt]+[Del]キーを押して[タスク マネージャ]を選択します）。[アプリケーション]タブをクリックします。〈Installation Workbench〉を選択します。[タスクの終了]をクリックします。
- ・ 〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)で〈Submitted Reports〉を選択し、待機中のジョブを削除します。[Status(状況)]のQBEに“W”を入力して[Find]をクリックします。すべてのローをハイライトし、[Delete(削除)]をクリックします（通常、ローはありません）。

これですべての変換が停止します。データベースをクリーンアップして〈Table Conversion Workbench〉をリセットするために、さらに複数のステップを実行する必要があります。下記の「ワークベンチの再開」を参照してください。

1つまたは複数のテーブル変換を実行したまま、〈Installation Workbench〉を閉じて、残りの変換を再開するように選択できます。再開手順については、「ワークベンチの再開」を参照してください。

テーブル変換が正常に実行されている場合は、〈Installation Workbench〉を閉じないでください。〈Installation Workbench〉を閉じるのは、問題が発生して変換を再開する必要がある場合のみです。

ワークベンチの再開

1. STRPDM
2. オプション2
 - ・ Library(ライブラリ):〈data library〉(CRPDTAなど)
 - ・ Name(名前):“*ALL”
 - ・ Type(タイプ):“*SQLPKG”
3. オプション4
4. [Enter]キーを押します。

一時テーブル - インプレース・テーブル変換、変換の変更、および変換のマージにより、一時テーブルが新規フォーマットで作成されます。一時テーブル名は〈TableName〉TCTEMPです。変換を再開する場合は、最初に元のテーブルが削除されていないことを確認してから、一時テーブルを削除してください。テーブル変換では、基本テーブルが旧フォーマットであることが必要です。変換の変更およびマージでは、旧フォーマットでなくてもかまいません。

パフォーマンス上の理由から、複数の変換でスペックに定義されている専用一時テーブルが使用されます。それぞれの回復方法は異なる場合があります。

特殊な再実行指示を伴う個々のテーブル変換については、『Programmers Guide (プログラマ・ガイド)』を参照してください。

変換処理を再実行するには、〈Table Conversion Planner〉で変換状況を35、45、または50から30にリセットします。ワークステーションの再開時に変換処理がまだ実行中の場合は、その状況を45のままにしておきます。

問題の再投入

〈Table Conversion Workbench〉では、サーバーに対する変換の投入に失敗すると(サービスが実行されていないなど)、変換状況が50に設定され、他の変換は投入されません。

F9843、F9843T

〈Table Conversion Scheduler〉(GH9611) - 実行予定の変換がすべて表示されます。変換タイプは3、31、および32です。デプロイメント・サーバー上で実行する必要があるテーブル変換には、フラグが設定されます。

これはOneWorld LocalおよびSystem - B9にあります。

F98405

〈Workbench Status (ワークベンチ状況)〉(GH961) - プランの確定中に、〈Table Conversion Scheduler〉のレコード(など)が、テーブル変換 - JDEスケジューラ・テーブル(F9843)からテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)にコピーされます。ワークベンチでは、このテーブルからレコードが削除されます。

これはOneWorld Planner - B9データ・ソースにあります。

F984052

〈History (履歴)〉(GH9611) - テーブル変換の履歴が格納されます。変換プログラムが起動されるたびに、このテーブルに新規レコードが作成されます。R98405Aは、このテーブルに完了した変換の状況を書き込みます。〈Table Conversion Workbench〉では、このテーブルで完了状況がポーリングされ、F98405内で状況が更新されます。

これはSystem - B9データ・ソースにあります。このテーブルは、最初はOneWorld Planner - B9にマップされています。〈Release Master〉中に、System - B9にコピーされて再マップされます。エンタープライズ・サーバー上の変換プログラムが完了状況を〈Table Conversion Workbench〉に戻せるように、テーブルはSystemデータ・ソースに置く必要があります。

F986110

〈Submitted Reports〉(GH9011) - このテーブルには、サーバー上で起動された変換プログラムに関するレコードが作成されます。各レコードは〈Submitted Reports〉を使用して表示できます。

このテーブルはServer Mapデータ・ソースにあります。

F986130

〈Job Queues〉(GH9013) - インストール担当者はJDEPLAN環境でジョブ待ち行列を定義できます。待ち行列が定義されている場合は、それが〈Release Master〉中にSystemデータ・ソースにコピーされます。待ち行列が定義されていない場合は、〈Release Master〉によりSystemデータ・ソースにデフォルト待ち行

列が作成されます。エンタープライズ・サーバーは、Systemデータ・ソースのテーブルにマップされます。この情報は、DEP9環境にログインして〈Job Queues〉アプリケーションを開くと確認できます。

このテーブルはOneWorld LocalおよびSystemデータ・ソースにあります。

テーブル変換プロセスの検証

テーブル変換プロセスが正常に完了したかどうかを検証するには、次のタスクを完了します。

- ・ [テーブル変換の検証 - ページ \[213\]](#)
- ・ [テーブル・フォーマットの検証 - ページ \[214\]](#)
- ・ [テーブル変換プログラムの再実行 - ページ \[216\]](#)
- ・ [Oracleのテーブル・フォーマットの検証 - ページ \[218\]](#)
- ・ [SQL Serverのテーブル・フォーマットの検証 - ページ \[218\]](#)

参照 アップグレード・プロセス中に実行されるテーブル変換については『Programmers Guide』

注意

ローカルに実行したテーブル変換ごとに、jde.logに次のようなエラー・メッセージが書き込まれます。

- ・ TAMInitX (d:\PeopleSoft\9\dev7333\spec\jdeblc.xdb):Error opening index file "d:\PeopleSoft\9\dev7333\spec\jdeblc.xdb" :The system cannot find the path specified.WinErrNum=3. (path name will vary by environment and release)
- ・ 2248/2420 Thu Dec 26 11:18:36.326 ODBC_U1.C823 ODB0000154 - SQLPrepare failed.Table F00926, ODBC DSN JDE_DEV.
- ・ 2248/2420 Thu Dec 26 11:18:36.326 JDBODBC.C2695 ODB0000027 - JDBODBC_DescribeTable failed.Table F00926.(exact syntax varies by database type and environment)

これらのエラー・メッセージは正常であり、テーブル変換には影響しません。

テーブル変換の依存関係

変換順序番号が99以下のテーブル変換はテクニカル・テーブルの変換で、100以上の変換はアプリケーション(ビジネス・データ)の変換です。順序番号は、[Conv Seq(変換順序)]カラムの下に表示されます。アプリケーション変換はテクニカル・テーブルの変換に依存しているので注意してください。つまり、アプリケーションの変換を完了するには、すべてのテクニカル・テーブルの変換を正常に完了する必要があります。

テーブル変換の検証

アップグレード・プロセスを続行する前に、テーブル変換が正常に実行されたかどうかを検証します。デ

プロイメント・サーバーからR9698711を実行します。また、ログ・ファイル内と変換済みテーブル内でデータ量が同じかどうかを確認します。

レポートR984052には、実行された変換がすべて表示されます。個々のテーブル変換の検証方法については、『Programmers Guide』を参照してください。

テーブル変換では、次の情報に注意してください。

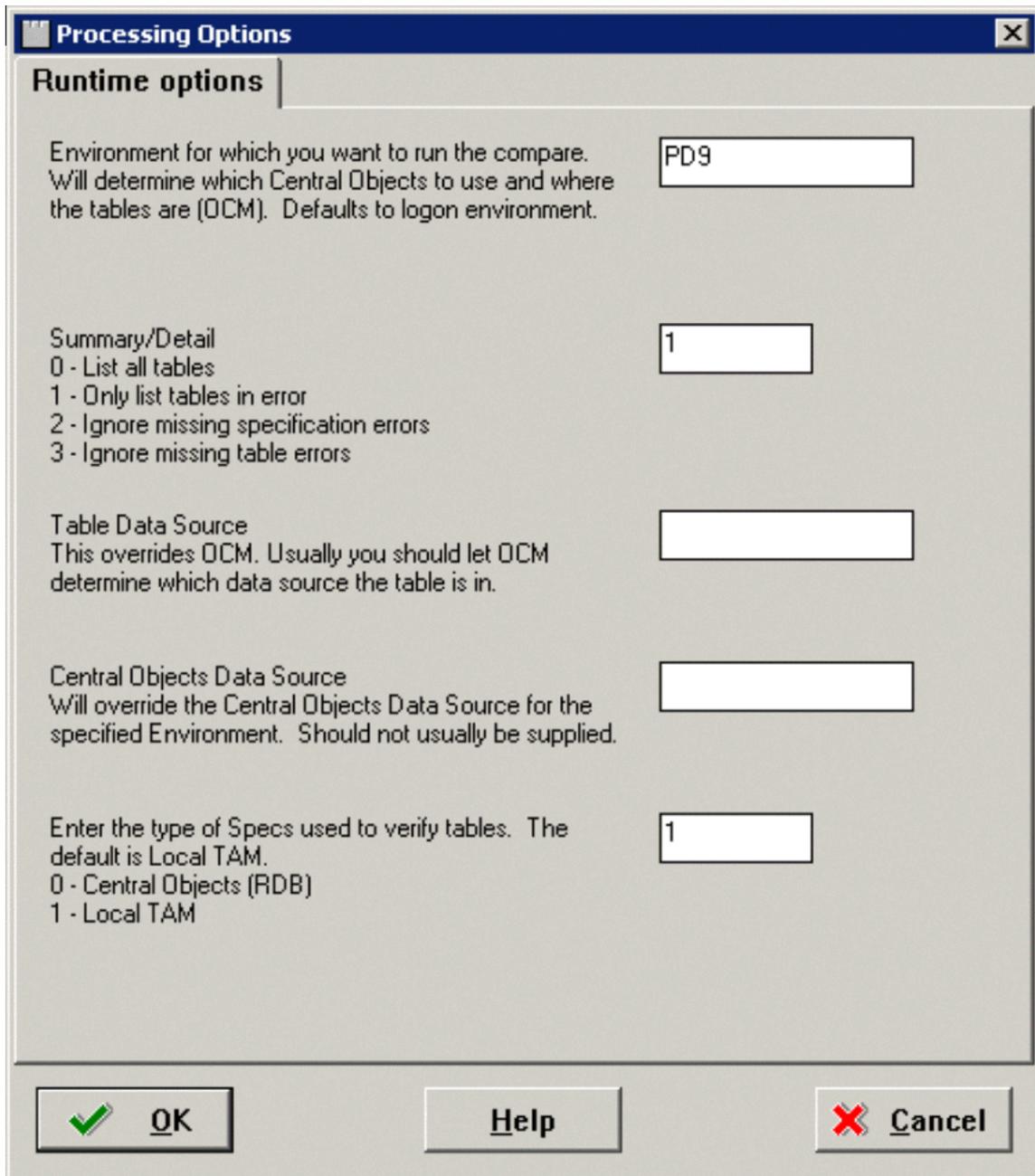
- ・ 「処理タイプ」欄が1の変換プログラムでは、printqueueディレクトリに.pdfおよび.logファイルが生成されます。
- ・ 「処理タイプ」欄が5の変換プログラムでは、printqueueディレクトリに.logファイルが生成されます。
- ・ 次のテーブル変換は累積的です。アップグレード元のOneWorldのバージョンを問わず、次の表に示す変換のみでなく、後続のすべての表に示す変換が実行されます。たとえば、OneWorldバージョンB73.3からアップグレードする場合は、最初の表に示す変換と、後続のすべての表に示す変換が実行されます。

注意

テーブルF76B0411は、Xeベースでは出荷されません。このテーブルを含むローライゼーションASUを適用していない場合、このテーブル変換の横には状況として「TC Inp Spec/Tbl Mismatch」が表示されます。これは正常です。

テーブル・フォーマットの検証

テーブル・フォーマットを検証する最善の方法は、R9698711(バージョンXJDE0001)を実行することです。〈Table Conversion Workbench〉の結果を調べ、すべてのテーブルが正しいフォーマットになっているかどうかを確認します。環境名をアップグレード後の環境に変更してください。このUBEを実行すると、スペックと異なるテーブルがすべてリスト表示されます。



Processing Options [X]

Runtime options

Environment for which you want to run the compare. Will determine which Central Objects to use and where the tables are (OCM). Defaults to logon environment.

Summary/Detail
0 - List all tables
1 - Only list tables in error
2 - Ignore missing specification errors
3 - Ignore missing table errors

Table Data Source
This overrides OCM. Usually you should let OCM determine which data source the table is in.

Central Objects Data Source
Will override the Central Objects Data Source for the specified Environment. Should not usually be supplied.

Enter the type of Specs used to verify tables. The default is Local TAM.
0 - Central Objects (RDB)
1 - Local TAM

または、pathcode printqueueディレクトリに作成されるテーブル変換ログを調べる方法もあります。テーブル変換ログ、JDE.LOGとJDEDEBUG.LOGを検討し、変換プログラムが正常終了したかどうかを確認してください。テーブル変換ログには、[Completed Successful]または[Completed with Errors]と表示されます。

テーブル変換がエラーと共に異常終了した場合は、テーブル変換ログ全体でそれらのエラー・メッセージを確認してから、JDE.LOGとJDEDEBUG.LOG内で特定の障害メッセージを調べます。

テーブル変換ログがテーブル変換の正常終了を示している場合は、新リリースにマップするデータ・ソース内で変換対象となるテーブルを検討してください。次のタスクは、変換するテーブルごとに検証する内容を示しています。

▶ テーブル・フォーマットを検証するには

スタッフ	インストール担当者およびデータベース管理者
ログオン状況	ビジネス・データおよびシステム・データ・ソースに使用するデータベースにログインします。
前提条件	〈Table Conversion Workbench〉を終了する必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. printqueueディレクトリに生成された.pdfファイルと.logファイルを検討し、98以下の変換順序番号を持つテーブル変換を検証します。

これらの変換を検証するには、R8998504のログを検討する方法もあります。

2. printqueueディレクトリに生成された.logファイルを検討し、変換順序番号が99以上で処理タイプが5の変換を検証します。次の例は、R8903B20のサンプル.logファイルの最後の数行を示しています。

```
TCEngine Level 1 D:¥B7¥system¥TCEngine¥tcinit.c(1581):Format F03B20 contains 55 column(s) TCEngine Level 1 D:¥B
```

3. 上記の情報を使用し、次の手順で変換プログラムを検証します。
 - a. .logファイルの最後に変換失敗を示す行が含まれている場合は、.logファイルの残りの部分を検討して特定のエラーの始まりから確認します。また、jde.logファイルとjdedebug.logファイルで特定のエラー情報を検討します。
 - b. .logファイルの最後に変換成功を示す行が含まれている場合は、物理ファイルのフォーマットを確認し、カラム数が変更されているかどうかを調べます。
上記のサンプル.logファイルでは、F03B20のカラム数は、ターゲット・データ・ソース内では55ではなく61カラムになっているはずです。
 - c. ログ情報に基づいて物理ファイルのレコード数を確認します。
上記のサンプル.logファイルでは、F03B20のロー数がターゲット・データ・ソースでは11になっているはずです。
 - d. .logファイルに挿入失敗を示す行が含まれている場合は、jde.logとjdedebug.log内で詳細情報を確認します。
 - e. 上記の手順で変換結果を検証できない場合は、「テーブル変換の検証」に掲載されている表で特定の検証情報をチェックしてください。

トラブルシューティング

新リリースで変更または追加があったテーブルについては、そのリリースの『データベース・チェンジ』ガイドを参照してください。
--

テーブル変換プログラムの再実行

▶ テーブル変換プログラムを再実行するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードで、JDEPLAN環境にログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. テクニカル変換処理は、復元せずに実行し直すことができます。処理タイプが5の場合に限り、〈Table Conversion Workbench〉からテーブル変換プログラムを実行すると次の処理が発生します。

- すべてのテーブル変換は、〈Table Conversion Workbench〉を通じて実行し直す必要があります。変換状況が60の場合は、30に戻す必要があります。
- テーブル変換エンジンでは、オブジェクト・マップを使用して、変換元環境と変換先環境の両方で変換対象のテーブルが検索されます。

リリース8.9へのアップグレード時には、変換対象のほとんどのアプリケーション・テーブルは、変換元環境でも変換先環境でも同じデータ・ソースに格納されます。このため、正しい順序で変換が作成されます。

データ・ソース上の物理テーブルは、旧リリースのスペックに従ってフォーマットする必要があります。

テーブル変換エンジンによって、このデータ・ソースに一時テーブルが作成されます。テーブル変換の再実行手順を開始する前に、すべての一時テーブルを削除してください。この一時ファイル名の表記は、〈Table〉TCTemp(F03B20CTEMPなど)です。

これらのテーブルを削除する手順は、次のとおりです。

- まだ実行中の変換に使用される一時テーブルは削除しないでください。

データが一時テーブルにコピーされ、元のテーブルが削除されて、一時テーブルの名前が元のテーブルの名前に変更されます。

システム・コード89を持つすべてのテーブルと、F40941、F40942、F40943、F0618TA、F42140A、F42150A、F42160A、F3201、F3211、F3215、F3216、F3290を消去します。

2. テーブル変換プログラムが実行されても、テーブルがアップグレード元データ・ソース内で元のフォーマットになっている場合は、ファイルを復元せずに変換プログラムを実行します。テーブル変換プログラムの実行後に、アップグレード元データ・ソース内のテーブル・フォーマットが変更されている場合は、変換プログラムを再度実行する前に、テーブルを元のフォーマットに復元してください。

テーブル変換エンジンによってテーブル変換が正しい順序で実行されると、正しい順序による変換に必要な一時テーブルが作成され、削除できなくなる場合があります。この場合は、テーブルが既に存在しているため、一時テーブルの作成時に変換プログラムを再度実行すると異常終了します。この問題を解決するには、テーブル変換を再度実行する前に、一時テーブルを削除するか、またはテーブル名を変更します。一時テーブルには、変換対象となるテーブル名の後のtcに続き、実行さ

れる変換プログラムのレポート名を付けた名称が使用されます。この一時ファイル名の表記は、TabletObjectname(F03B20tcR8903B20など)です。

- アップグレードが完了し、結果に問題がなければ、データ・ソースからSY=89のテーブルをすべて削除します。

Oracleのテーブル・フォーマットの検証

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、問題のデータベースの所有者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

- 問題のテーブルが格納されている表領域の所有者としてデータベースにログオンします。
- 次のSQLクエリーを実行します。

Describe tableowner.tablename

tableowner.tablenameは該当する表所有者名と表名です。

このクエリーでは、指定した表領域にあるファイルのすべてのフィールドのリストが戻されます。
- 上記の情報を使用して、ログ・ファイル内と実際の表内で列数とレコード数が一致しているかどうかを検証してください。

ログ・ファイル内の情報は正しいはずです。

Oracleデータベースのロールバック・セグメントの変更

Oracleデータベースを使用する場合は、大きいロールバック・セグメント(「ERPデータベースのアップグレード」で作成)を、テーブル変換プロセスの最後にオフラインに切り替えます。他のロールバック・セグメントはオンラインに切り替えます。

SQL Serverのテーブル・フォーマットの検証

次のどちらかのタスクを完了してください。

- 手順 19 [218]
- 手順 20 [219]

▶ SQL Serverでテーブル・フォーマットを検証するには(方法1)

スタッフ	インストール担当者
------	-----------

ログオン状況	デプロイメント・サーバー上でQuery Analyzerを使用します。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. 次のSQL Serverクエリーを実行します。

```
Select * from owner.filename
```

ownerは検証するテーブルの所有者です。

このクエリーでは、テーブル内のレコードとそのカラムが戻されます。上記の情報を使用して、ログ・ファイル内と実際の表内でカラム数とレコード数が一致しているかどうかを検証してください。ログ・ファイル内の情報は正しいはずですが、

2. カラムのレイアウトのみを確認する場合は、[Cancel]をクリックしてクエリーを中止します。

▶ SQL Serverでテーブル・フォーマットを検証するには(方法2)

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、検証するテーブルの所有者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. SQL Server Enterprise Manager Graphical Applicationを実行します。

このアプリケーションでは、サーバー、データベース、表、所有者、および他の関連情報がツリー形式で表示されます。

2. 該当するサーバーまたはデータベース上の表を検索します。
3. 表をダブルクリックします。

表を構成するカラムがグラフィック表示されます。上記の情報を使用して、ログ・ファイル内と実際の表内でカラム数とレコード数が一致しているかどうかを検証してください。ログ・ファイル内の情報は正しいはずですが、

旧形式のテーブル

次のテーブルは、システム・コード88または89では利用できなくなっています。

システム・コード88の旧形式のテーブル

これらは旧形式のテーブルであり、テーブル変換の正常終了後に削除できます。

F00001	F0004HI	F0004LI	F0004LS	F0004S
F00053	F000531	F000532	F0005HI	F0005LI

F0005S	F0005SL	F00165X	F00165XJ	F0016D
F00171	F00172	F00173	F0018VI	F0031
F00530	F00530E	F00530P	F00825	F0090
F0101D1	F0101QA	F0101QAA	F0114W	F01800
F03B01	F03B15P	F03BUI06	F03C02	F03C03
F03C05	F03C11	F03C12	F03C13	F03C14
F03C16	F03CUI01	F04516	F04550	F04552SB
F06403	F06406	F06410	F06445	F07401
F07403	F07404	F07405	F07406	F07408
F07410	F07411	F07412	F07413	F07414
F07417	F07418	F07419	F07420	F07421
F07423	F07424	F07425	F07426	F07429
F07432	F07434	F07435	F07437	F07438
F07442	F07443	F07444	F07445	F07447
F07449	F07451	F075506	F078332	F078332A
F085542	F087710	F08901WF	F0911Z3	F09E111
F09UI002	F09UI003	F09UI012	F105503	F12UI001
F14110	F14111	F16UI002	F3003J	F3016J
F30UI007	F3104	F3112J	F31950	F31UI001
F31UI004	F31UI005	F31UI410	F31UI418	F3211Z
F3411Z1	F34A00	F34A01	F34A02	F34A03
F34A05	F34A06	F34A07	F34A08	F34A09
F34W012	F34W02	F34W03	F34W031	F34W032
F34W05	F34W06	F34W07	F34W08	F34W09
F34W11	F34W12	F34W121	F34W13	F34W141
F34W15	F34W16	F34W17	F34W17B	F34W18
F34W20	F34W21	F34W22	F34W23	F34W24
F34W26	F34W27	F34W28	F34W29	F34W30
F4021W	F40336	F40343	F4213	F4311KAY
F48099	F4810	F4811	F48126	F489111
F53001	F53015	F5302	F53021	F53024
F55MOIN	F7302	F74100	F74800	F74M0411
F74P03BW	F74P04W	F74S0101	F74S347	F74S349
F75C01Z1	F75K0101	F75K0201	F75K0211	F75KUI01
F760090A	F76012	F76031	F7611BA	F7618B
F7691CSA	F7691SSA	F76A01	F76A02	F76A03
F76A0403	F76A05	F76A06	F76A07	F76A31
F76A8120	F76A8121	F76A8122	F76A8123	F76A8124
F76A9002	F76A9003	F76A9004	F76A91	F76A92
F76AUI15	F76AUI25	F76AUI87	F76AUI94	F76AUI95

F76C4001	F76CI1	F76CI2	F76CI3	F46CT1
F76CUI01	F76CUI02	F76CUI03	F76H0301	F76H0401
F76H0903	F76H0904	F76H0905	F76H0906	F8011
F801630	F904220	F8800	F8916	F8916L
F8916S	F8916V	F8916V2	F8916X	F8916Y
F8926	F8926RS	F8926Y	F8926Z	F89500
F9002HI	F9002LI	F9002LS	F9002S	F9002SL
F91013	F95000	F95020	F950900	F95100
F98612	F986120	F98614	F98701	F98744
F98768	F98790	F98FLATM	FD3N010	FD3N015
FD3N018	FD3N020	FD3N031	FD3N025	FD3N025A
FD3N030	FD3N040	FD3N050	FD3N055	FD3N056
FD3N120P	FD3N120T	FD3N120W	FD3N120X	FD3N901
FD3N903	FD3N904	FD3N910	FD3N911	FD3N913
JDECODE				

システム・コード89の旧形式のテーブル

システム・コード89の場合は、旧形式のテーブルに2つのタイプがあります。

- OneWorldでは使用されなくなったが、アップグレードではデータへのアクセスに必要なビジネス・データ・テーブル。このタイプのテーブルについては、すべての実行結果に問題がないと確認するまで、バックアップを作成して別の場所に保管しておくことをお勧めします。
- テーブル変換で使用される新規の一時テーブル。このタイプのテーブルは、テーブル変換が正常終了した後に削除できます。これは完全なテーブルではなく、パフォーマンス上の理由で使用される一連のカラムです(数百万のローを含みます)。このタイプのテーブルは、次のとおりです。

F0618TA	F4101TT	F4102TT	F31172TE	F4072TEM
F41021A	F40344A	F42005A	F42140A	F42150A
F42160A	F31172TE	F42199A	F4311TA	F43199A
F43121TA	F4211A	F4211B	F4074TEM	F4094TEM
F42119A	F42119B			

スペック・テーブルのマージ

〈Specification Table Merge Workbench〉では、カスタム修正を新規スペック・テーブルにマージするバッチ・アプリケーションが実行されます。次に、処理結果を反映するためにテーブル変換スケジューラ・テーブル(F98405)が更新され、完了メッセージが表示されて変換ログ・レコードが書き込まれます。オブジェクト・ライブラリアンとバージョン・リストのマージは、スペック・マージに組み込まれています。

環境を問わず、〈Specification Merge〉ではデータが次の順序でマージされます。

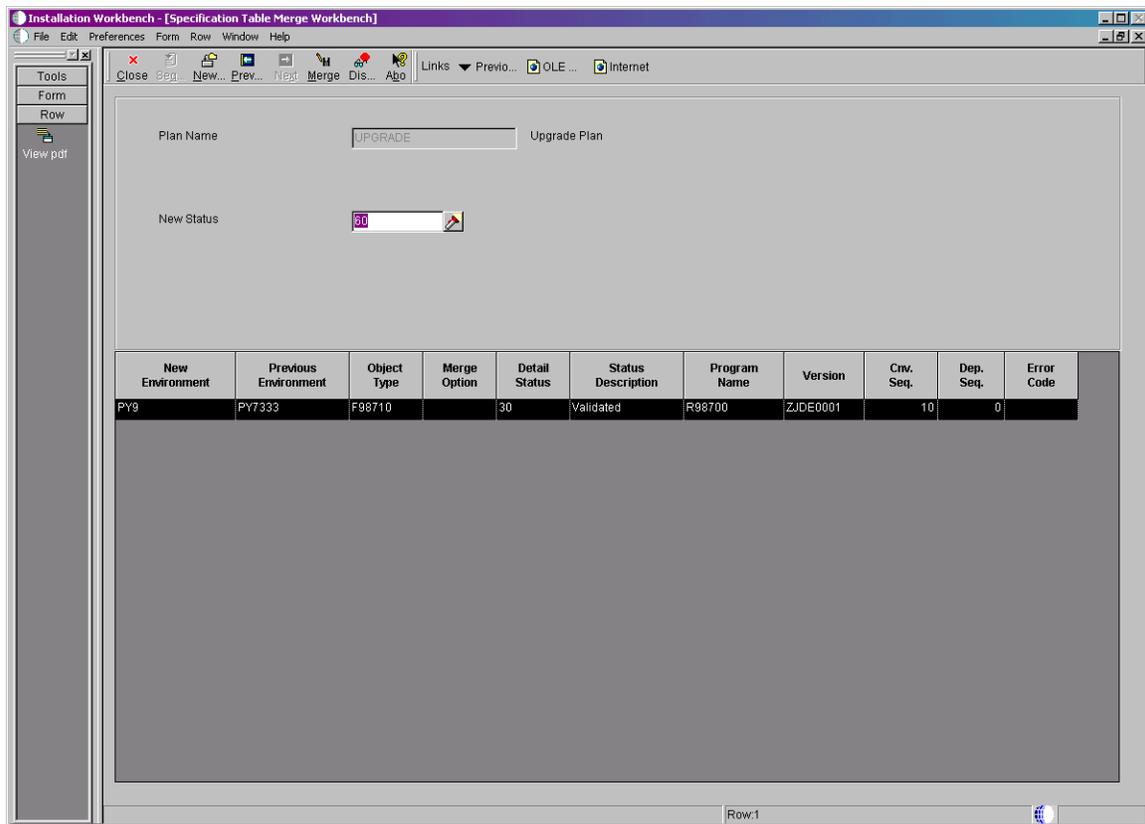
- ・ オブジェクト・ライブラリアン
- ・ バージョン
- ・ スペック

代替言語をインストールする場合、〈Specification Table Merge Workbench〉では、セントラル・オブジェクトと言語のテキストが旧リリースから新しいセントラル・オブジェクト・データベースにマージされます。

セントラル・オブジェクト・テーブルには、選択した言語によるテキスト表示に必要な代替言語レコードが含まれています。言語対応テーブルには、処理オプション・テキスト(F98306)、レポート設計ツール(RDA)テキスト情報(F98760)、およびフォーム設計ツール(FDA)テキスト情報(F98750)があります。英語版インストール時に選んだ環境に応じて、ロードされる環境ごとに1組ずつなど、複数組のセントラル・オブジェクトを使用できます。

▶ スペック・テーブルをマージするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし



1. 〈Specification Table Merge Workbench〉フォームの [Form] メニューから [Merge All] を選択します。

代替言語をインストールする場合は、〈Specification Table Merge Workbench〉フォームの [Plan Name (プラン名)] フィールドに言語プラン名が表示されます。

2. マージの完了後に、生成されたレポートの出力を検証します。

Specification Mergeの再起動

〈Specification Merge〉が正常終了する前に状況50で停止した場合は、停止した箇所から再起動できます。マージが正常に完了した場合は、このタスクをスキップして次のタスクに進んでください。

▶ 〈Specification Merge〉を再起動するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	〈Specification Merge〉を停止する必要があります。
同時に行うタスク	なし

- ・ 〈Specification Merge Workbench(スペック・マージ・ワークベンチ)〉に表示される〈Specification Merge〉の状況を確認します。

状況が50になっている場合は、[Merge(マージ)]または[Merge All]をクリックして〈Specification Merge〉を再起動できます。〈Specification Merge〉が再起動し、未処理のオブジェクトがすべて処理されます。再起動する前に、マージ状況が[error]になっているすべてのオブジェクトを検討し、『インストール・リファレンス・ガイド』の「オブジェクトのマージ状況の修正」の手順に従ってマージ状況をリセットしてください。

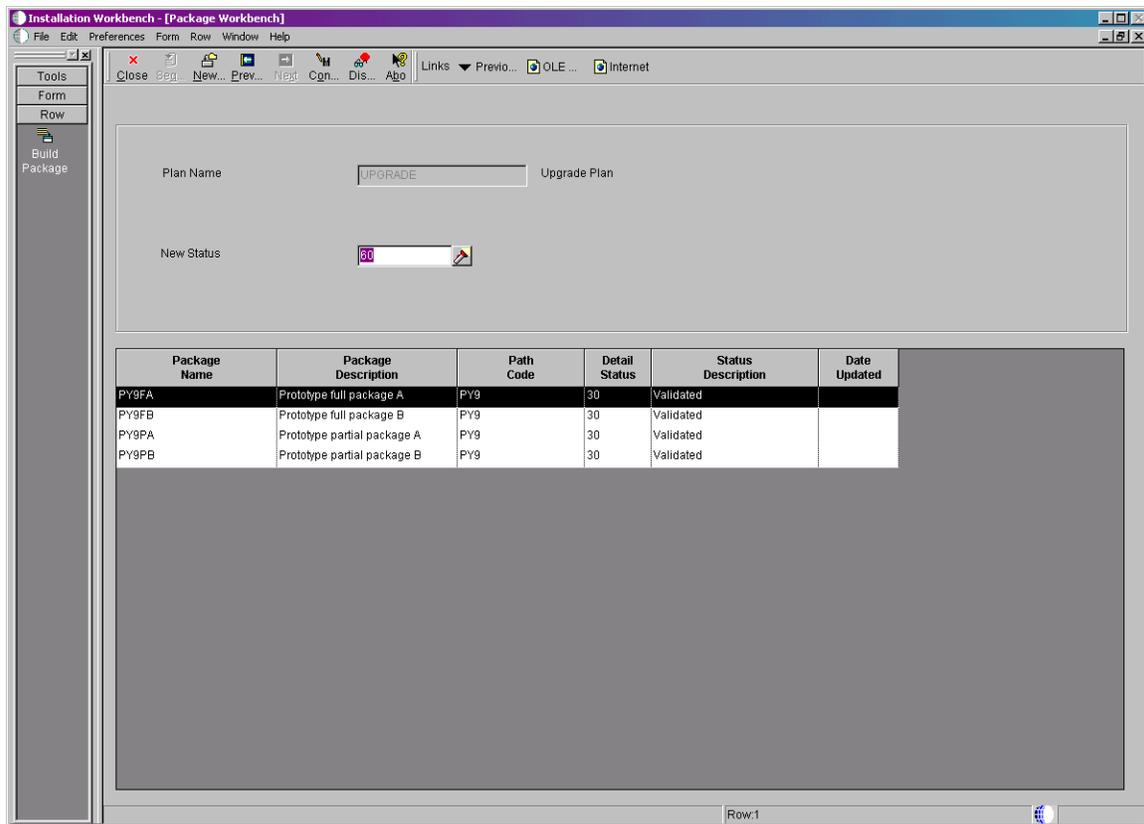
パッケージの構成

〈Package Workbench〉では、パッケージ情報テーブル(F9603、F9631)が、プランナ・データ・ソースから System - B9データ・ソースに転送されます。また、パッケージ・プラン詳細テーブル(F98404)が更新され、処理結果が反映されます。

この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または〈Package Workbench〉の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ パッケージを構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし



1. <Package Workbench>で、パッケージを確認します。
2. [Form]メニューから[Configure]を選択します。

参照 パッケージのビルドと構成については『パッケージ管理』ガイド

リモート・ロケーションの構成

注意

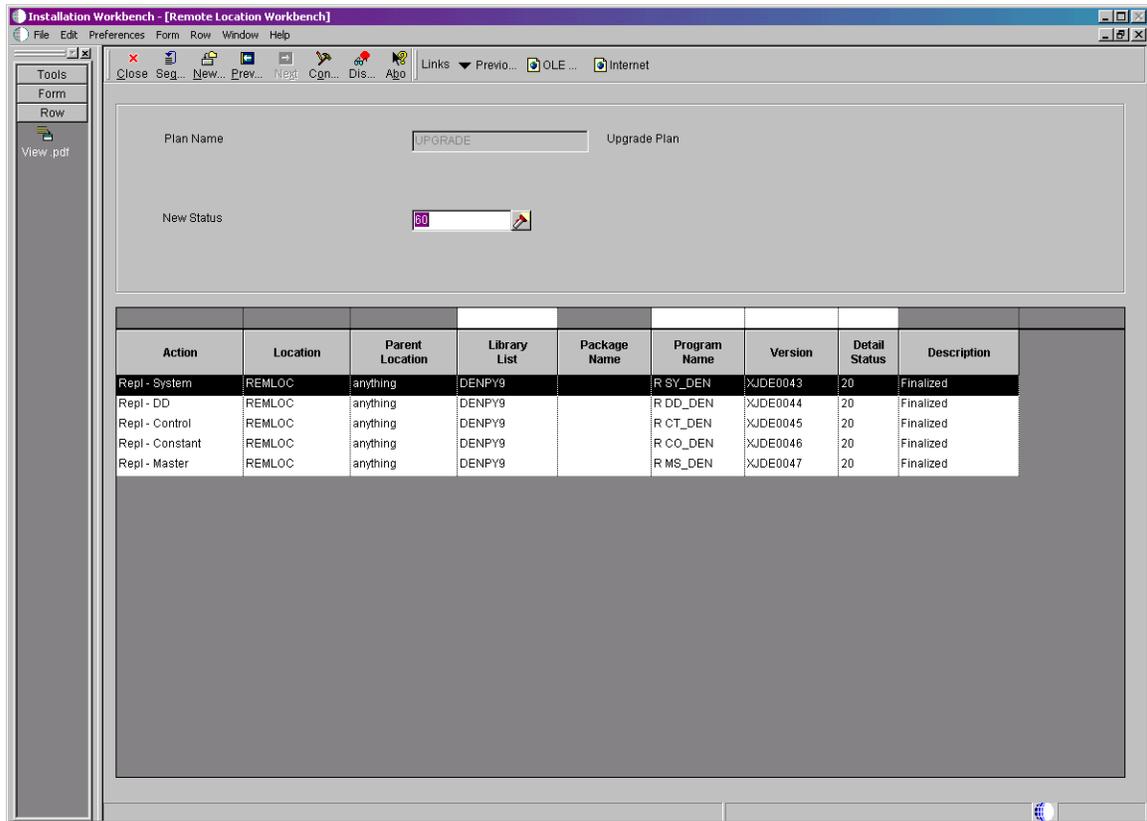
このワークベンチが表示されるのは、リモート・ロケーションを設定している場合のみです。

<Remote Location Workbench>では、R98403の各種バージョン(XJDE0043、XJDE0044、XJDE0045、XJDE0046、XJDE0047)が起動され、ビジネス・データ(マスターと固定情報)のコントロール・テーブル、データ辞書テーブル、およびシステム・テーブルが、基本ロケーションからロケーション・サーバーにロードされます。また、複数階層UBE(R98825C)が起動され、配信されたパッケージがリモート・ロケーションにあるプライマリ・デプロイメント・サーバーにプッシュされます。このワークベンチが処理されるのは、リモート・ロケーションをインストールするように選択し、レプリケートされたデータのロードとパッケージのプッシュを選んでいる場合のみです。

この手順を使用するのは、ワークベンチを在席時モードで実行している場合、または<Remote Location Workbench>の前にタスク・ブレイクを設定している場合です。

▶ リモート・ロケーションを構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	すべての基本ロケーション環境が(Environment Workbench)を通じて)実行されている必要があります。
同時に行うタスク	なし



1. <Remote Location Workbench>で、グリッドにすべてのリモート・ロケーション・アクティビティが表示されます。
2. [Form]メニューから[Configure]をクリックしてワークベンチを起動します。
3. すべてのリモート・ロケーション・アクティビティの完了後に、[Next]をクリックします。

<Installation Workbench>の終了

▶ <Installation Workbench>を終了するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、JDEPLAN環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	なし

同時に行うタスク	なし
----------	----

1. 〈Congratulations(完了)〉の[Form]メニューから[Finish]をクリックします。
2. 〈Work with Installation Plans〉で[Close]をクリックします。

注意

クライアントからも「アップグレード後の処理」を実行する必要があります。「アップグレード後の処理」を参照してください。

データベース統計の更新

OracleとDB2 UDBの場合は、データベースのロード後にデータベース統計を更新することをお勧めします。このステップを実行しないと、データベースではデータへのアクセス時に索引が使用されません。

大量のデータをデータベースにロードした後は、データベース統計を更新してください。表のサイズによっては、この処理に時間がかかる場合があります。

Oracleの場合：

- ・ SQL*Plusを起動し、SYSまたはSYSTEMとしてインスタンスに接続します。
- ・ データ所有者ごとに次のコマンドを入力します。

```
Execute dbms_utility.analyze_schema (' owner','compute');
```

ownerはデータ所有者名 (PRODDTA、DD9など) です。

DB2 UDBの場合：

- ・ テキスト・エディタでrunstats_all.batファイルを開きます。インストールしていない環境に関するコマンドをコメント化します。
- ・ runstats_all.batファイルを実行します。
- ・ DB2 UDBコマンド・ウィンドウを起動します。
- ・ コピーしたDB2 UDBスクリプトがあるディレクトリに変更します。

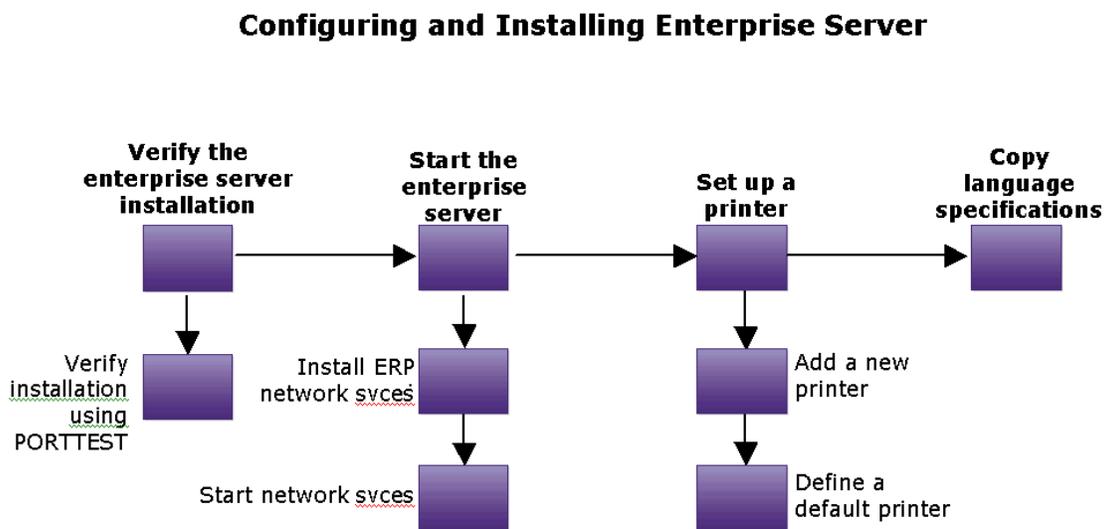
エンタープライズ・サーバーのインストール

インストール・プランを定義して実行した後に、リリース8.9を構成してエンタープライズ・サーバーにインストールします。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ エンタープライズ・サーバー上でのリリース8.9の構成とインストール

次のフロー・チャートは、エンタープライズ・サーバーにリリース8.9をインストールして構成するプロセスの概要を示しています。



ここでは次の内容について説明します。

- ・ [エンタープライズ・サーバー上でのプリンタの設定 - ページ \[246\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーへの言語スペックのコピー - ページ \[261\]](#)
- ・ [多言語による数値書式の設定 - ページ \[261\]](#)

エンタープライズ・サーバーのインストール

次のタスクを実行してエンタープライズ・サーバーのインストールを完了します。

注意

〈Table Conversions(テーブル変換)〉を実行する前に、エンタープライズ・サーバーをインストールする必要があります。

- ・ [エンタープライズ・サーバーの構成 - ページ \[230\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール - ページ \[231\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーの起動 - ページ \[240\]](#)

エンタープライズ・サーバーの構成

システム・フェイルオーバー回避のために、Microsoftのクラスタ化機能がサポートされています。

リリース8.9のサポートに必要なWindowsサーバーのアップグレードがあればインストールしてください。

エンタープライズ・サーバーを構成するには、次のタスクを完了してください。

- ・ [手順 1 \[230\]](#)
- ・ [手順 2 \[230\]](#)

参照

- ・ ソフトウェア要件については「ソフトウェア要件とハードウェア要件の確認」
- ・ クラスタ・ソフトウェアの使用方法については、『Microsoft Cluster Administrator Guide』または『Windows Server 4 Second Edition』
- ・ クラスタ化については『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「クラスタ上のERP 9.0」

▶ リリース8.9管理者ユーザーを作成するには

スタッフ	システム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、システム管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

Windowsエンタープライズ・サーバーにリリース8.9ソフトウェアをインストールする前に、リリース8.9管理者ユーザーを作成し、ディスク容量を検証し、hostsファイルの設定と検証を行う必要があります。

1. エンタープライズ・サーバー上で、システム管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
2. [Administrative Tools(管理ツール)]グループにある[User Manager(ユーザーマネージャ)]を実行し、パスワードJDEを使用して新規ユーザーJDEを作成します。

▶ hostsファイルを設定して検証するには

注意

Domain Naming Service(DNS)またはWindows Internet Naming Service(WINS)を使用する場合、hostsファイルのセットアップと検証は不要です。

スタッフ	システム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、システム管理者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

- Windows Explorerを使用して、¥Winnt¥System32¥Drivers¥Etc¥Hostsにアクセスします。
- ネットワーク上のエンタープライズ・サーバーごとに次の情報を入力します。
 - Machine IP address(マシンのIPアドレス)
 - Machine name(マシン名)
- アドレスと名称がそれぞれ1行ずつ入力されていることと、行末に改行記号があることを確認します。シャープ記号(#)はコメントの始まりを表し、改行記号はコメントの終わりを表します。
- クラスタ化機能を使用する場合は、マシン名として、サーバー名ではなくクラスタ名が使用されていることを確認します。

エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール

次の手順では、リリース8.9エンタープライズ・サーバーにインストールし、PORTTESTを使用してインストール内容を検証する方法について説明します。

並行リリースに関する考慮事項
リリース8.9をOneWorld/ERPの旧リリースと並行して実行するには、一部のJDE.INIキーに対して異なる値を指定する必要があります。JDE.INIの修正方法については、後述します。

このタスクを実行すると、標準(未修正の)テーブル、ビジネス関数、およびスペックがエンタープライズ・サーバーにインストールされます。〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉の後処理では、カスタマイズされたビジネス関数とスペックをエンタープライズ・サーバーに転送します。

参照 カスタマイズされたオブジェクトをエンタープライズ・サーバーに転送する方法については、『パッケージ管理』ガイドの「オブジェクトの転送」

オブジェクトは、リリース8.9の全オブジェクトを格納できる十分なディスク容量がある一時ディレクトリにコピーしてください。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [デプロイメント・サーバー上でのエンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイル修正 - ページ \[232\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9ホスト・コードのインストール - ページ \[235\]](#)
- ・ [インストール内容の検証 - ページ \[242\]](#)

デプロイメント・サーバー上でのエンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイル修正

複数のエンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイルの管理と保守が簡単になるように、すべてのJDE.INIファイルはデプロイメント・サーバーに格納されています。エンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイルの変更が必要になった場合は、デプロイメント・サーバー上でオリジナルのファイルを変更します。次に、そのファイルをデプロイメント・サーバーからそれぞれのエンタープライズ・サーバーにコピーします。

ここでは、エンタープライズ・サーバーにリリース8.9をインストールする前に、エンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイルに対して行う修正について説明します。ファイルの修正には、テキスト・エディタを使用してください。

新リリースをインストールするには、JDE.INIファイル内で複数のキー・フィールドを修正します。これらの各キーは、リリース8.9のそのリリースに固有のものでなければなりません。ここでは、変更が必要なキーとその値の例を示します。

▶ デプロイメント・サーバー上でエンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイルを修正するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、管理者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	同時に〈Environment Workbench(環境ワークベンチ)〉を実行できます。

1. Windows Explorerで、エンタープライズ・サーバーにコピーされるホストJDE.INIファイルを検索します。

デフォルトの格納場所は、次のとおりです。

¥PeopleSoft¥b9¥hosts¥INTELNT¥ enterpriseserver

enterpriseserverはエンタープライズ・サーバー名です。

2. JDE.INIファイルの[DEBUG]セクションで、エンタープライズ・サーバー上のリリース8.9のディレクトリ・パスが反映されるように、次のキー・フィールドを修正します。次に例を示します。

[DEBUG]

DebugFile= z:¥PeopleSoft¥ddp¥b9¥log¥jdedebug.log

このログにはデバッグ情報が含まれています。〈Installation Planner(インストール・プランナ)〉のセットアップ中にエンタープライズ・サーバーのパスを変更した場合は、使用したパス名を指定します。

[DEBUG]

JobFile=z:¥PeopleSoft¥ddp¥b9¥log¥jde.log

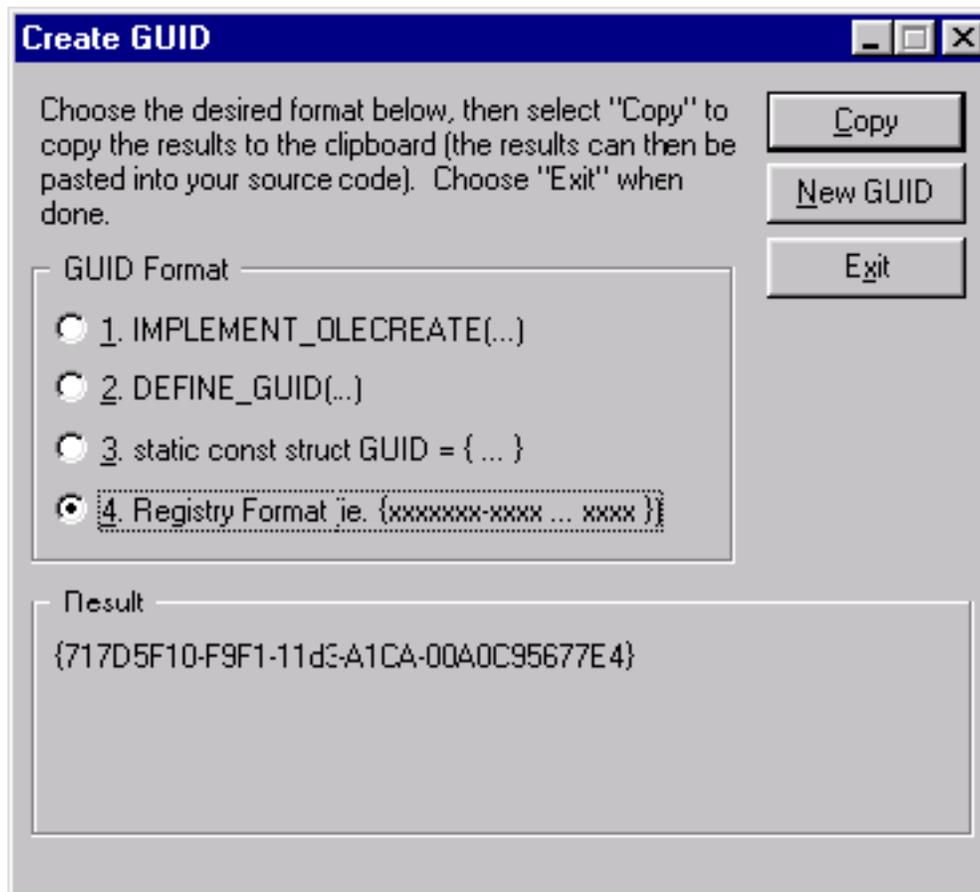
このログにはその他のデバッグ情報が含まれています。〈Installation Planner〉のセットアップ中にエンタープライズ・サーバーのパスを変更した場合は、使用したパス名を指定します。

3. テキスト・エディタを使用して、JDE.INIファイルを次のように修正します。
 - ・ 同時ビルド数は、コンパイラのライセンス数以下にする必要があります。[BSFN BUILD]セクションで、SimultaneousBuildsを5以下の値に変更します。
 - ・ エンタープライズ・サーバーがデプロイメント・サーバーとは異なる場合は、[JDE_CG]セクション内でINCLUDES、LIBS、MAKEDIR、およびSTDLIBDIRのパスが該当する値に設定されているかどうかを確認します。
 - ・ JDE.INIファイルの[JDENET]セクション(のServiceNameListenおよびServiceNameConnectの値)で指定されているポート番号が、〈Installation Planner〉で指定したポート番号と一致しているかどうかを確認します。「Installation Planner」の「エンタープライズ・サーバー情報の入力」を参照してください。
 - ・ [SECURITY]セクションのDefaultEnvironmentパラメータは、プランのプリステイン(JDEオリジナル)環境(JD9)と一致する必要があります。
 - ・ Serverパラメータでは、サーバー名としてクラスタ名を設定する必要があります。
4. リリース8.9を同一サーバー上で他のOneWorldリリースと並行して実行する場合にのみ、JDE.INIファイルを次のように変更します。

[JDEIPC]

次のタスクを完了し、リリースごとにJDE.INIファイル内で一意の識別子を生成します。

- a. JDE.INIファイルを開き、[JDEIPC]セクションのCLSID値からコメント・マーカー(;)を削除します。
- b. Windowsの実行可能プログラムguidgenを実行します。



- c. <Create GUID>で[4. Registry Format]を選択します。
- d. [New GUID]をクリックします。
- e. [Copy]をクリックします。
- f. 開いているJDE.INIファイル内で、CLSID値の等号の後にGUID値を貼り付けます。
- g. GUID値から左右のカッコを削除します。

[JDEIPC]

```
startIPCKeyValue=6001
```

この設定は、.iniファイルではコメントになっている場合があります。その場合は、コメント解除し、必要に応じて新しい値を指定します。startIPCKeyValueのデフォルト値は5001です。ただし、startIPCKeyValueには、アップグレード元リリースで設定されている値より1000以上大きいか、または小さい値を指定する必要があります。

[JDENET]

```
serviceNameListen= portnumber
```

```
serviceNameConnect= portnumber
```

リリース8.9のポート番号が、アップグレード前のOneWorldリリースのポート番号とは異なっていることを確認します。

5. JDE.INIファイルを保存して閉じます。

エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9ホスト・コードのインストール

エンタープライズ・サーバーのインストール・プロセスでは、リリース8.9のシステム・ファイルとパス・コード・ファイルがコピーされます。

▶ エンタープライズ・サーバーにリリース8.9ホスト・コードをインストールするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、administratorとしてログインします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. システム管理者権限を持つIDでエンタープライズ・サーバーにログオンします。
2. エンタープライズ・サーバーをリリース8.9基本ディレクトリ(z:\%PeopleSoft%b9など)が存在するデプロイメント・サーバーにマップします。

注意

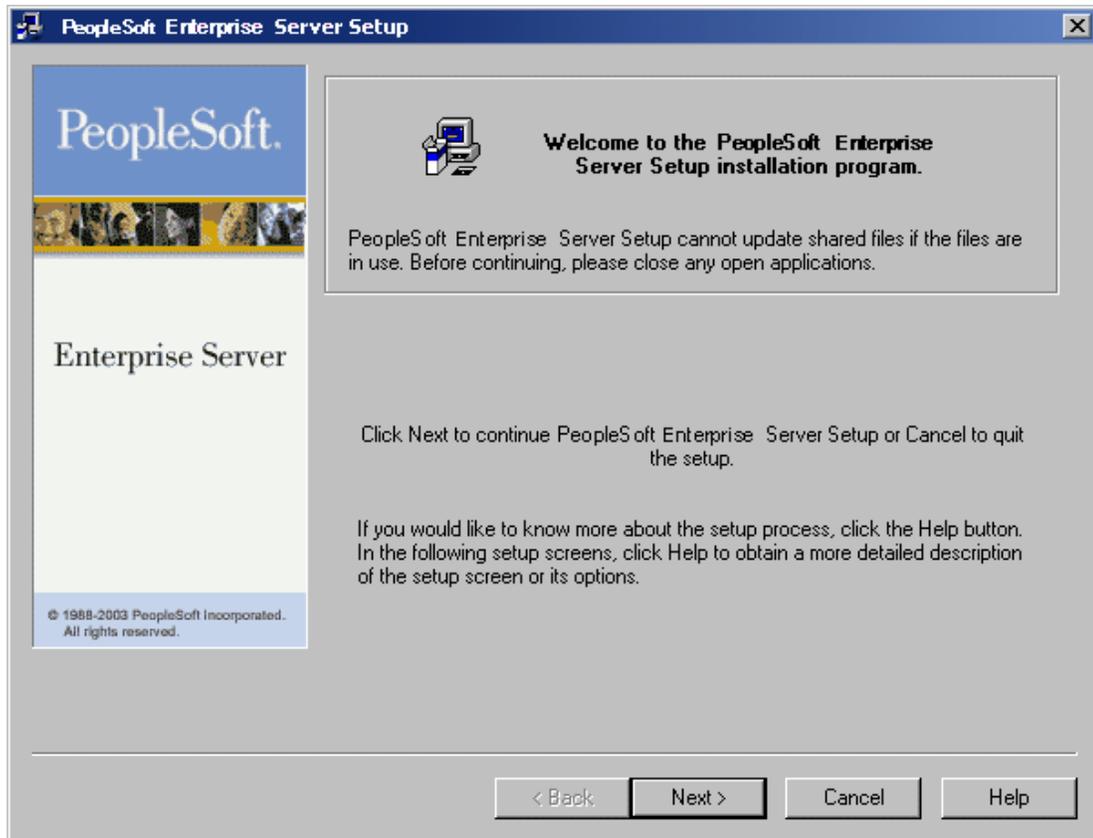
ODBCを使用するようにデータ・ソースを手作業で変更した場合は、エンタープライズ・サーバー上でODBCデータ・ソースを手作業でセットアップする必要があります。

ODBCの作成方法については、「サードパーティのODBCデータ・ソースの作成」を参照してください。

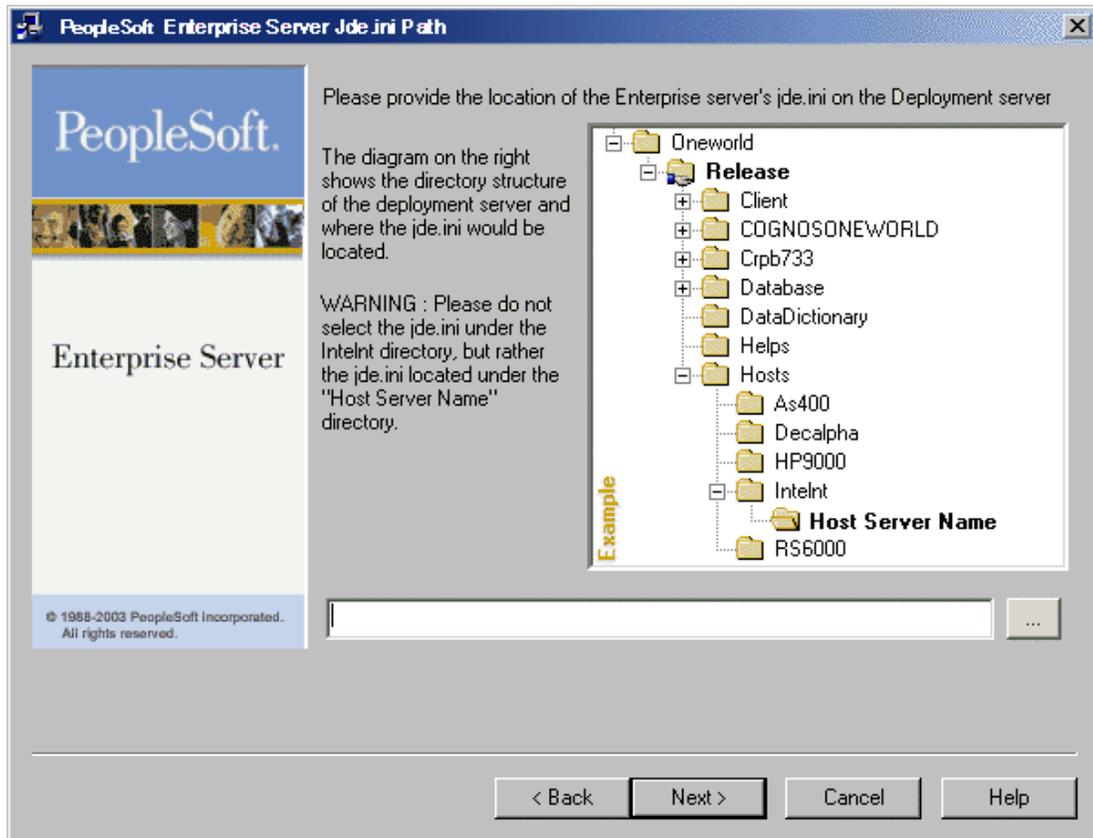
3. エンタープライズ・サーバーのタイプを示すラベルが貼付されたCDをCDドライブに挿入します。〈Installation Manager (インストール・マネージャ)〉が自動的に起動し、〈PeopleSoft Installation Manager〉フォームが表示されます。



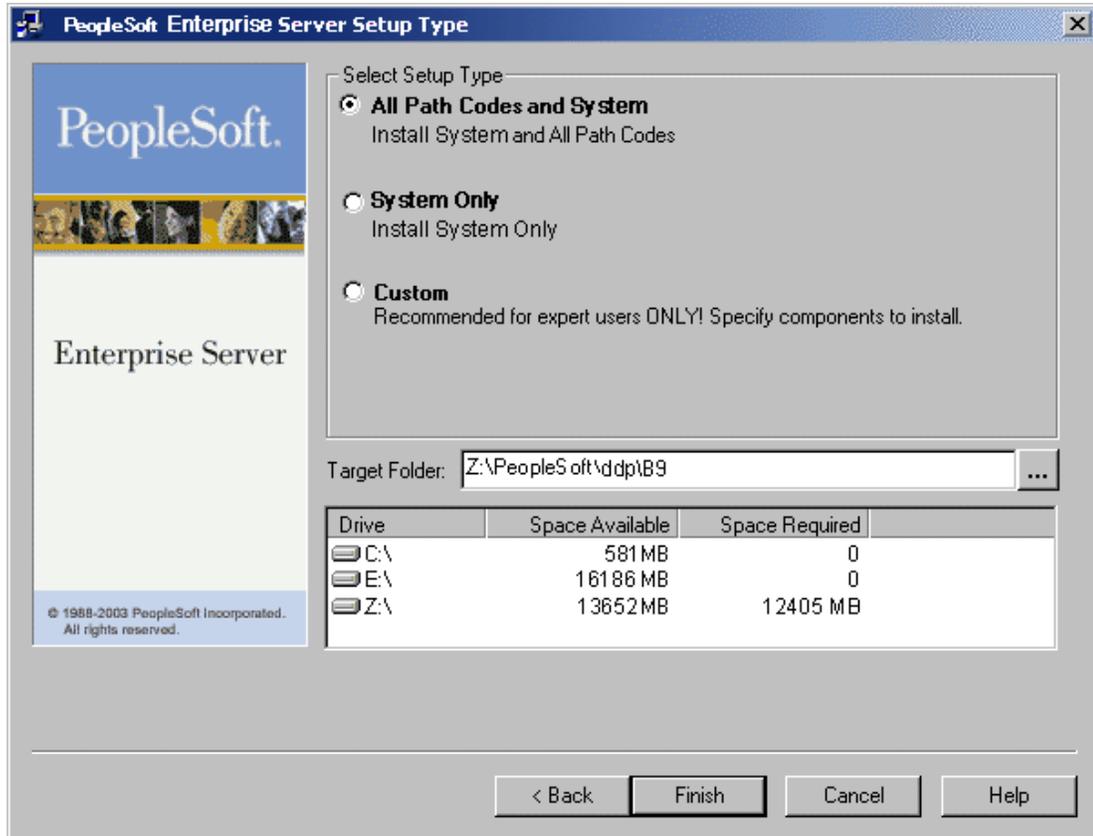
4. [Enterprise Server Installation(エンタープライズ・サーバーのインストール)]リンクをクリックしてインストールを開始します。



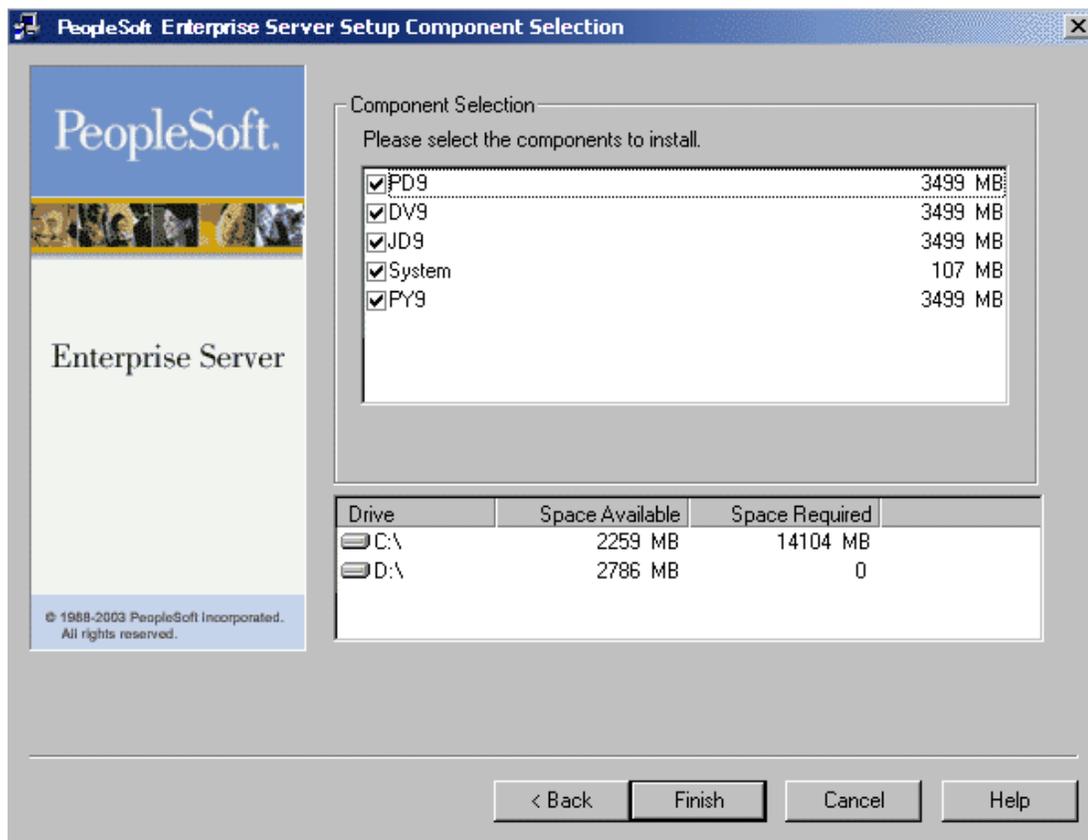
5. 〈PeopleSoft Enterprise Server Setup (PeopleSoftエンタープライズ・サーバーのセットアップ)〉で [Next (次へ)] をクリックします。



6. <PeopleSoft Enterprise Server Jde.ini Path (PeopleSoftエンタープライズ・サーバーのJde.iniのパス)>で、エンタープライズ・サーバーのJDE.INIファイルが存在するデプロイメント・サーバーのパスを指定します。たとえば、"d:\%PeopleSoft%\platform%\machinename%\JDE.INI"と入力します。
7. [Next]をクリックします。



8. 〈PeopleSoft Enterprise Server Setup Type (PeopleSoftエンタープライズ・サーバーのセットアップ・タイプ)〉で、次のセットアップ・タイプのオプションのうち1つを選択します。
 - ・ All Pathcodes and System (全パス・コードおよびシステム)
 - ・ System Only (システムのみ)
 - ・ Custom (カスタム)
9. [Install Path (インストール・パス)] フィールドで、インストール・パスを指定するか、検索ボタンを使ってエンタープライズ・サーバーのファイルのインストール先ディレクトリを選択します。
指定したディレクトリが存在しない場合、セットアップ・プログラムによって自動的に作成されます。
10. [Next] をクリックします。前の画面で [Custom] を選択した場合は、次のフォームが表示されます。



11. <PeopleSoft Deployment Server Setup Component Selection (PeopleSoftエンタープライズ・サーバーのセットアップ・コンポーネントの選択)>で、インストールするコンポーネントを選択して[Finish(終了)]をクリックします。

インストールが開始されます。

ファイルのロード状況を示す<Enterprise Server Setup Progress (エンタープライズ・サーバーのセットアップ進行状況)>ダイアログ・ボックスが表示されます。

12. インストールが完了すると、<Enterprise Server Setup (エンタープライズ・サーバーのセットアップ)>ダイアログ・ボックスに正常にインストールされたかどうかが表示されます。

エンタープライズ・サーバーの起動

リリース8.9をWindowsエンタープライズ・サーバーにインストールした後は、そのサーバーを起動できます。

該当するタスクを完了してください。

- ・ [手順 5 \[241\]](#)
- ・ [手順 6 \[241\]](#)

参照 これらのプロセスの停止方法については、「エンタープライズ・サーバー上のリリース8.9の停止」

▶ リリース8.9ネットワーク・サービスをインストールするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ログオンして[コマンド プロンプト]ウィンドウを開きます。
前提条件	リリース8.9をエンタープライズ・サーバーにインストールする必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. DOSコマンド・ウィンドウを開きます。
2. 次のコマンドを入力します。
d:[または該当するドライブ名]

cd %PeopleSoft%ddp%b9%System%bin32

jdesnet -l

exit
3. Windowsの[コントロール パネル]で[サービス]をクリックします。
4. リリース8.9ネットワーク・サービスの最新アップデートを選択します。
5. [Startup(開始)]をクリックします。
6. [Manual(手動)]を選択します。
7. [This Account(このアカウント)]をクリックします。
8. デフォルト・プリンタがローカル・プリンタの場合は、ローカル・アカウント名とパスワードを入力します。ネットワーク・プリンタの場合は、ネットワーク・アカウント名とパスワードを入力します。
9. [OK]をクリックします。

▶ リリース8.9ネットワーク・サービスを開始するには

スタッフ	システム管理者またはインストール担当者
ログオン状況	Windowsエンタープライズ・サーバー上で、ユーザーJDEでログオンします。
前提条件	リリース8.9をエンタープライズ・サーバーにインストールする必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. Windowsの[コントロール パネル]で[サービス]をクリックします。
2. リリース8.9ネットワーク・サービスの最新アップデートを選択します。

3. [Startup]をクリックします。

参照 これらのプロセスの停止方法については、「エンタープライズ・サーバー上のリリース8.9の停止」

インストール内容の検証

注意

DB2 UDBの場合は、PORTTESTを実行する前に、エンタープライズ・サーバー上でCLIデータ・ソースを設定してください(「DB2 UDB用のサードパーティCLIデータ・ソースの作成」を参照してください)。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [手順 7 \[242\]](#)

▶ リリース8.9エンタープライズ・サーバーのインストール内容を検証するには(PORTTEST)

スタッフ	システム管理者またはインストール担当者
ログオン状況	Windowsエンタープライズ・サーバー上で、ユーザーJDEでログオンします。
前提条件	リリース8.9をエンタープライズ・サーバーにインストールする必要があります。
同時に行うタスク	なし

クラスタ・ソフトウェアに関する考慮事項
クラスタ・ソフトウェアを使用する場合は、このステップをスキップしてください。リリース8.9を起動する前に、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「クラスタ上のERP 9.0」を参照し、「Windowsクラスタ」で説明している手順を完了してください。

このプログラムでは、ユーザーと環境が初期化されます(リリース8.9が正常にインストールされ、構成されている場合)。リリース8.9が正常にインストールされたかどうかを検証するには、環境ごとにPORTTESTプログラムを実行する必要があります。

1. Windowsエンタープライズ・サーバーにJDEでログオンします。

SQL Serverを使用している場合は、ステップ2(次)を実行する前に、エンタープライズ・サーバー用のODBCデータ・ソースをセットアップします。ODBCデータ・ソースについては、「サードパーティのODBCデータ・ソースの作成」を参照してください。

注意

旧リリースと違って、リリース8.9は複数のSQL Serverデータベースに分かれて導入されます。リリース8.9データ・ソースの場合は、ODBCデータ・ソースが正しいSQL Serverデータベースを指

すようにセットアップする必要があります。この情報を示す表については、「サードパーティの ODBC データ・ソースの作成」を参照してください。

2. DOS コマンド・ウィンドウを開きます。
3. リリース 8.9 がエンタープライズ・サーバーに正常にインストールされたかどうかを検証するには、次のコマンドを入力します。

d:[または該当するドライブ名]

```
cd %PeopleSoft%ddp%b9%System%Bin32
```

```
PORTTEST userid password environment
```

userid は有効なユーザー ID、password はそのユーザー・パスワード、environment は検証する環境です。これらのパラメータでは、大文字と小文字が区別されます。PORTTEST コマンドは環境ごとに入力してください。

トラブルシューティング
リリース 8.9 テーブルからレコードが選択されることを示すメッセージが表示されます。表示されない場合は、エンタープライズ・サーバー上の JDE.INI ファイル内で指定した jde_###.log ファイルを確認してください。PORTTEST を実行できない場合は、「PORTTEST チェックリスト」を参考にして原因を診断してください。

PORTTEST チェックリスト

PORTTEST を実行できない場合は、PeopleSoft のカスタマー・サポートに問い合わせる前に、このチェックリストを使用して問題を診断してください。エラー・メッセージ、JDE.INI、および、JDE.log や JDE_#####.log などのエラー・ログのコピーと共に、次の質問に回答を記入しておいてください。

PORTTEST を実行できないのは、レプリケーション、セキュリティ・サーバー、またはトランザクション処理が正常にインストールされていない場合です。これらの 1 つまたは複数のサービスをインストールした後も問題が発生する場合は、各サービスの設定をチェックして、パラメータが正しい値に設定されているかどうかを確認してください。

一般的な問題	Yes/No
ログオンしたユーザーは管理者権限を持っているか？ iSeries 上で実行する操作によっては、ONEWORLD でログオンする必要があります。	
インストール時に printqueue ディレクトリが連結されているか？	
OneWorld ディレクトリに対する共有許可は FULL に設定されているか？	
すべての環境変数が設定されているか？	
Unicode モジュールと共に C コンパイラがインストールされているか？	
C コンパイラのバージョンは合っているか？	

一般的な問題	Yes/No
各データ・ソースに対するODBCはセットアップされているか？	
Oracleの場合：データベース・クライアント・ユーティリティはインストールされ、構成されているか？	
Oracleの場合：TNS Namesファイルは正しく設定されているか？	
エンタープライズ・サーバー上でデータベースをクエリーできるか？	
このマシンにPostScriptまたはPCLプリンタが接続されているか？	
このプリンタ用のプリンタ・ドライバがインストールされているか？	
このプリンタはデフォルト・プリンタとして構成されているか？	
すべてのディレクトリとファイルに対する読み込み専用属性はオフに設定されているか？	

JDE.INIの問題	Yes/No
JDE.INIファイルは正しいディレクトリ/ライブラリ内にあるか？	
JDE.INIには許可が正しく設定されているか？	
次のJDE.INIパラメータが正しく設定されているか？	
[Network Queue Settings]	
Default Printer=使用するプリンタ	
[UBE](PostScriptを使用する場合、正しいフィルタが設定されているか？)	
[DB System Settings](すべての、特に次のパラメータをチェックしてください)	
Default Env= 使用するデフォルト環境	
Default Pathcode = 使用するデフォルト・パス・コード	
Server = データベース・サーバー名	
[JDENET]	
serviceNameListen = ポート番号	
serviceNameConnect = ポート番号	

JDE.INIの問題	Yes/No
[INSTALL]	
B9=使用するパス	

通信の問題	Yes/No
DHCPを使用しているか？	
使用していない場合、hostsファイルにはホストのエントリがあるか？	
ホストを名前でpingできるか？	
ホストからワークステーションへ名前でpingできるか？	
Netmonを実行する場合は、ホストとワークステーションを認識できるか？	
ワークステーションとサーバーは、サーバーのIPアドレスが一致しているか？	

その他の問題	Yes/No
サーバー・マップ・テーブル(F98611とF986101)は正しく編集されているか？	
〈Verify OCM(OCMの検証)〉アプリケーションを実行して確認してください。	
ホスト・データベースのみがあるか？	
バッチ・アプリケーションに項目がないか？	
OneWorldのテーブルはホストにアクセスできるか？	
F0902テーブルをクエリーできるか？	
PORTTESTは有効なパス・コードごとに実行でき、エラーは発生しないか？	
ユーザー名は有効なアカウントのユーザー名と一致しているか？ユーザー名は大文字と小文字が区別されるので注意してください。	
パスワードは特定のアカウントに有効か？	
環境名は有効なリリース8.9環境と一致しているか？環境名は大文字と小文字が区別されるので注意してください。	
JDEnetは正常に起動および停止するか？	

その他の問題	Yes/No
リポート後にサービスは正常に起動および停止するか？	
暴走しているサービスをVisual C++デバッグ機能で停止できるか？	
ネットワーク・プリンタを使用している場合は、サービスがネットワーク・アカウント(システム・アカウントではなく)を使用して実行されているか？	
サービスは管理者グループ内で実行されているか？	

上記のすべての質問にYesと答えられなければ、バッチ・アプリケーションは実行されません。答えがすべてYesになる場合は、ここでバッチ・アプリケーションを実行してください。

バッチ・アプリケーションが正常に実行されない場合は、エラー・ログを有効にして、バッチを再投入してください。このログは、ワールドワイド・カスタマー・サポートが問題を正確に診断する際に役立ちます。

エンタープライズ・サーバー上でのプリンタの設定

スタッフ	システム管理者またはインストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、デプロイメント環境にユーザーJDEでログオンします。
前提条件	リリース8.9をエンタープライズ・サーバーにインストールする必要があります。
同時に行うタスク	なし

ここでは次の内容について説明します。各タスクをデプロイメント環境で実行してください。

- ・ [手順 8 \[246\]](#)
- ・ [手順 9 \[259\]](#)

また、レポートの印刷、既存プリンタの修正、およびプリンタの削除を行うことができます。これらのタスクについては『システム・アドミニストレーション』ガイドを参照してください。このガイドでは、エンタープライズ・サーバーから実行するプリンタの設定方法についても説明されています。

プリンタがリリース8.9の旧リリースにインストールされていれば、再インストールする必要はありません。すべてのプリンタ設定は、このリリースへのアップグレード中に反映されます。

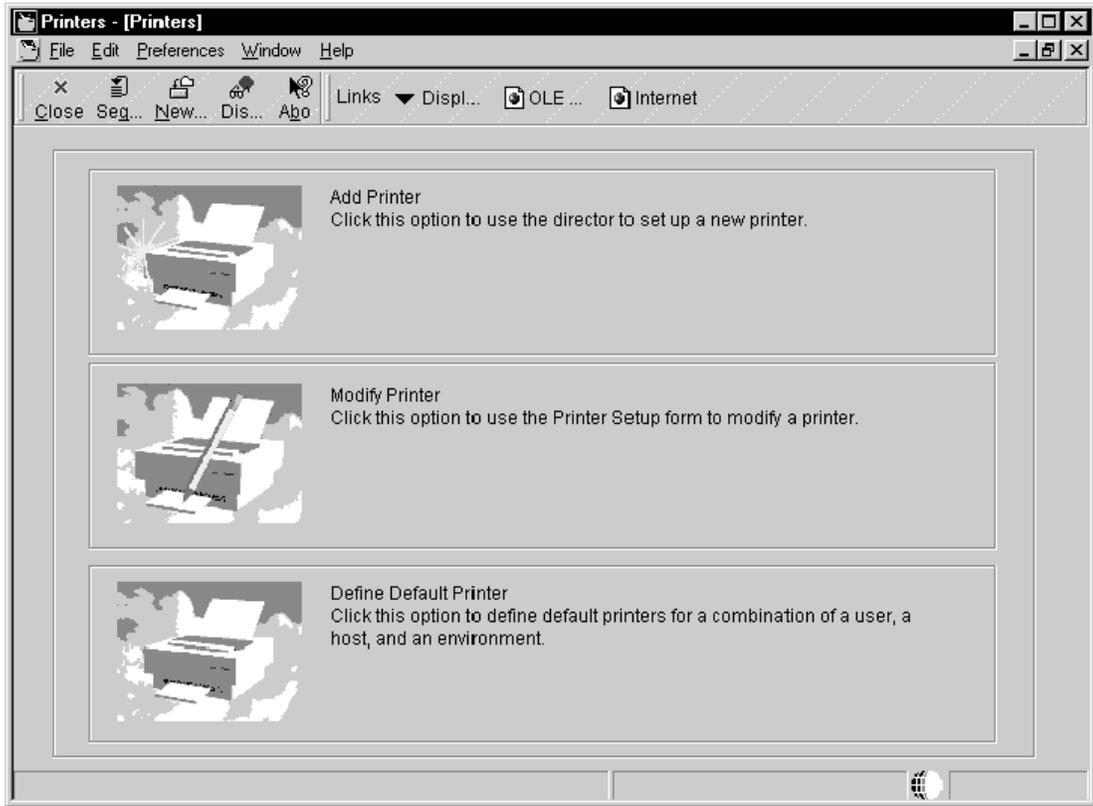
▶ 新規プリンタを追加するには

リリース8.9には、プリンタを追加できるように<Printer Setup Director(プリンタ設定ディレクタ)>が用意されています。ディレクタの各フォームに表示される指示に従って、プリンタ追加プロセスを実行します。次の手順は、<Printer Setup Director>の各フォームに表示されるステップと併用します。

プリンタを初めてインストールする場合は、このタスクを完了してから「[手順 9 \[259\]](#)」を完了してください。

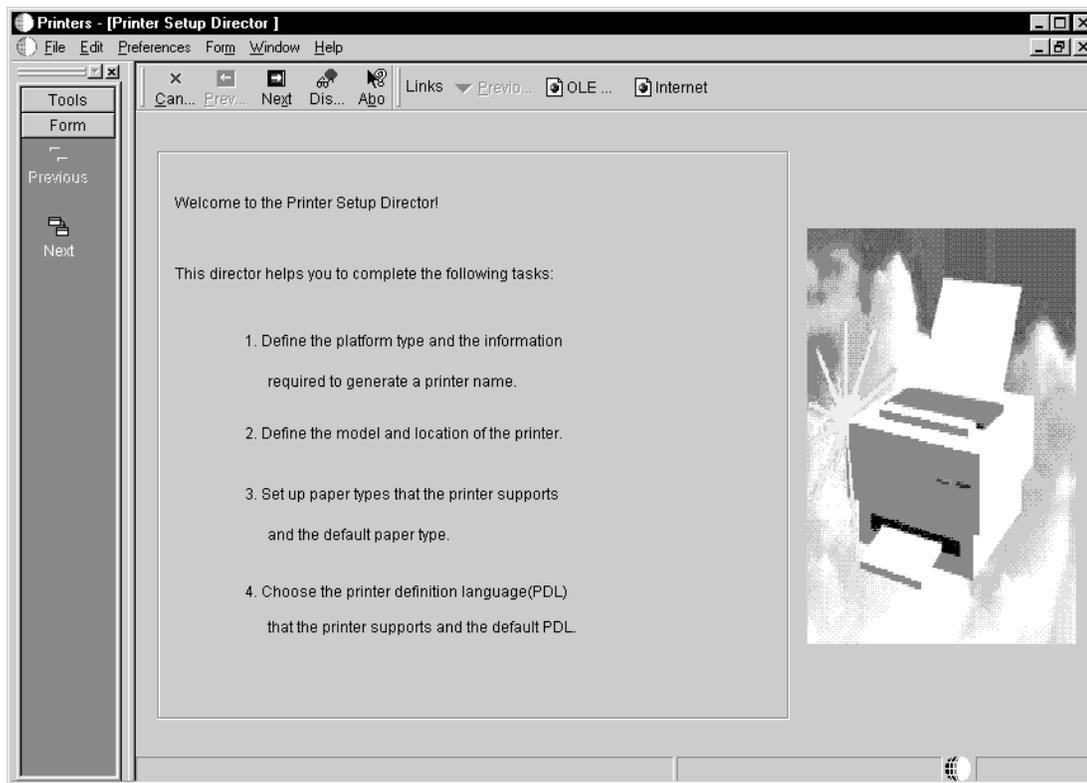
1. <Printers(プリンタ)>メニュー(GH9013)から<Printers>(P98616)を選択します。

〈Printers〉フォームが表示されます。



2. 〈Printers〉フォームで[Add Printer(プリンタの追加)]をクリックします。

〈Printer Setup Director〉の初期ページが表示されます。このページには、ディレクタで実行できるタスクの説明が表示されます。



3. 初期ページを検討して[Next]をクリックします。

〈Platform Information (プラットフォーム情報)〉フォームが表示されます。リリース8.9を実行中のオペレーティング・システムによっては、[Platform Type (プラットフォーム・タイプ)]にデフォルト値が設定されている場合があります。

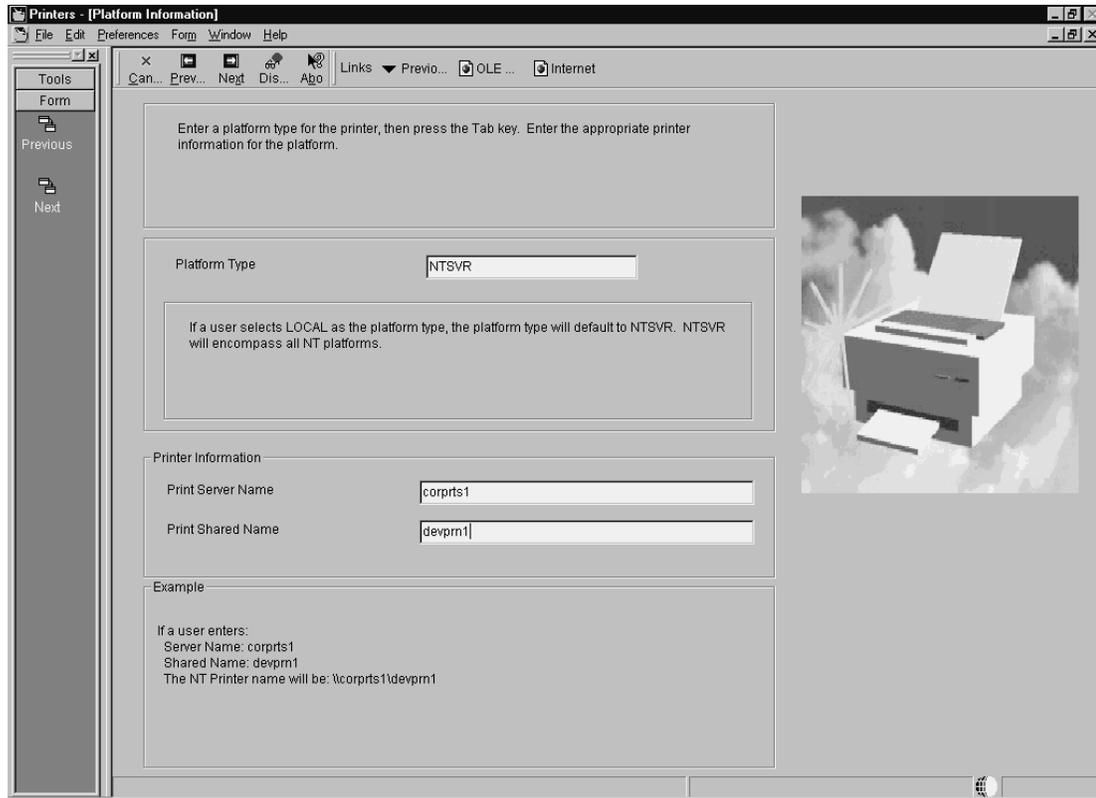
4. 〈Platform Information〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Platform Type

インストールしているプラットフォームのタイプを入力するか、ビジュアル・アシスト・ボタンを使用して選びます。

5. [Next]をクリックします。

同じフォームに他のフィールドが表示されます。



6. 次のフィールドに値を入力して[Next]をクリックします。

- Print Server Name (プリント・サーバー名)

セットアップするプリンタのプリント・サーバー名を入力します。有効な文字は、英字(A~Z)、数字(0~9)、ピリオド(.)、ハイフン(-)です。この名称とプリント共有名を使用してプリンタ名が作成され、次のフォームにグレー表示されます。

レポートを非ネットワーク・プリンタに出力する場合は、このフィールドをブランクにしてください。

- Print Shared Name (共有名)

セットアップするプリンタの共有名を入力します。スラッシュ(/)と円記号(¥)を除き、すべての文字が有効です。この名称とプリント・サーバー名を使用してプリンタ名が作成され、次のフォームにグレー表示されます。

- Library Name (ライブラリ名)

iSeriesの場合は、物理プリンタ名を出力待ち行列名と同じにする必要があります。デフォルトのQGPLライブラリを使用して出力待ち行列を格納する場合は、このフィールドに出力待ち行列名を入力するだけで済みます。有効な文字は、英字(A~Z)、数字(0~9)、特殊文字(@、_)です。

- Outputqueue Name (出力待ち行列名)

出力待ち行列がデフォルトのQGPLライブラリ以外のライブラリにある場合は、このフィールドにライブラリ名と出力待ち行列名を入力する必要があります。たとえば"QUSERSYS/DEVDES3A"

と入力します。有効な文字は、英字(A～Z)、数字(0～9)、特殊文字(@、_など)です。

注意

出力待ち行列名と共にライブラリ名を入力する場合は、名前が競合しないように注意する必要があります。競合すると、予期しない出力待ち行列でレポートが投入されることがあります。

〈Printer Setup (プリンタの設定)〉フォームが表示されます。このフォームを使用して、プリンタのモデル、実際のロケーション、プリンタ定義言語、用紙タイプ、およびエンコード選択 (iSeriesのみ) などのプリンタ情報を設定します。

Enter the location and the model of the printer.

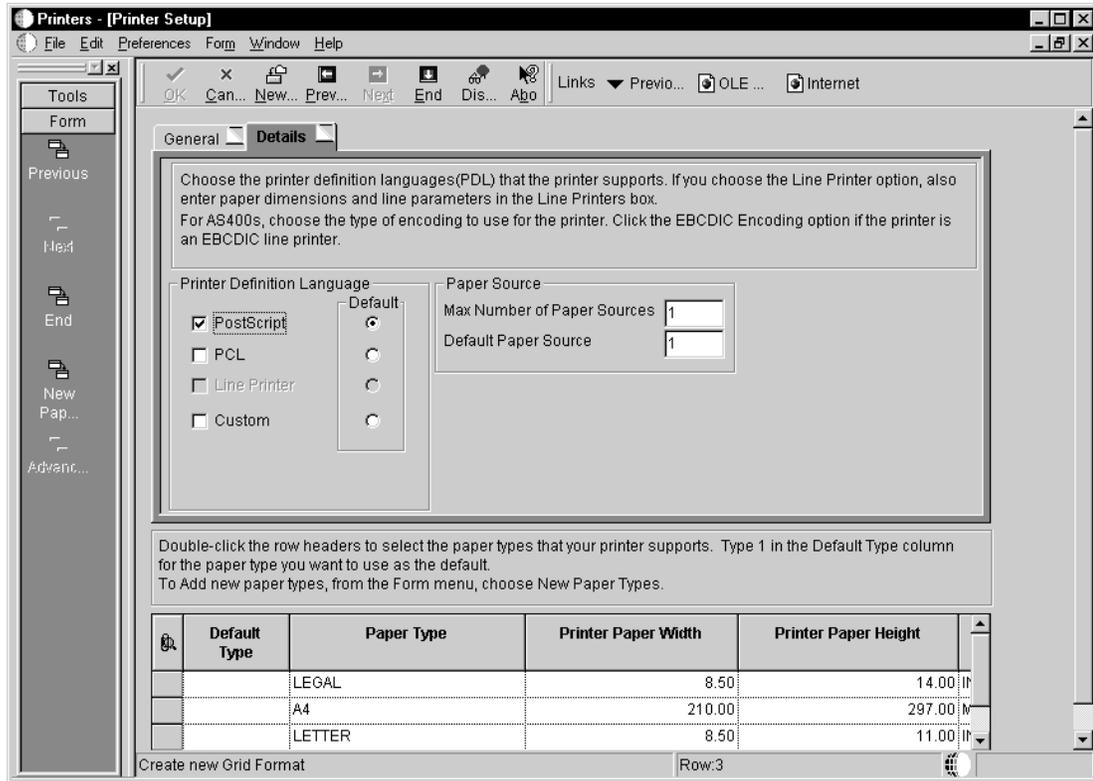
Printer Name: \scorpts1devpm1
 Platform Type: NTSVR
 Printer Model: [dropdown]
 Printer Location: [text box]

Double-click the row headers to select the paper types that your printer supports. Type 1 in the Default Type column for the paper type you want to use as the default.
 To Add new paper types, from the Form menu, choose New Paper Types.

Default Type	Paper Type	Printer Paper Width	Printer Paper Height	UM
	LETTER	8.50	11.00	IN
	LEGAL	8.50	14.00	IN
	A4	210.00	297.00	MM
		0.00	0.00	

7. [General (一般)] タブで次のフィールドに情報を入力し、[Details (詳細)] タブをクリックします。

- ・ Printer Model (プリンタ・モデル)
- ・ Printer Location (プリンタ・ロケーション)



8. [Detail]タブの[Printer Definition Language(プリンタ定義言語)]で次のオプションを選択します。
- ・ PostScript
 - ・ PCL
 - ・ Line Printer(ライン・プリンタ)
 - ・ Custom
9. [Default(デフォルト)]ボックスで、[Printer Definition Language]オプションのいずれか1つをデフォルト値として指定します。

複数のプリンタ定義言語(PDL)を選択できますが、デフォルトPDLは1つだけです。ユーザーは、バッチ処理の投入時にこのデフォルトPDLを一時変更できます。

[PostScript]または[PCL]を選択すると、[Line Printer]オプションは無効になります。[Line Printer]を選択すると、[PostScript]および[PCL]オプションは無効になります。

[Line Printer]オプションを選択すると、次の処理が実行されます。

- ・ フォーム最下部のグリッドが使用不可になり、選択した用紙タイプがクリアされます。プリンタのプリンタ・タイプは*JDE LINE PAPERに自動的に設定されます。
- ・ [Line Printers]ボックスにフィールドが表示され、用紙サイズと行数のパラメータを設定できます

。この手順については、以降のステップを参照してください。

- ・ iSeriesプラットフォーム・タイプを指定して[Line Printer]オプションを選択すると、[AS400 Only (AS400のみ)]ボックスにフィールドが表示され、プリンタでサポートされるiSeriesエンコードを設定できます。この手順については、以降のステップを参照してください。

[Custom]オプションを選択すると、〈Printers〉アプリケーションの上級機能が使用されます。この操作については、以降のステップを参照してください。

10. [Details]タブで[PostScript]オプションを選択した場合は、[Paper Source (用紙トレイ)]ボックスが表示され、次のオプションを変更できます。

- ・ Max Number of Paper Sources (最大用紙トレイ数)

このプリンタで使用可能な用紙トレイの数を入力します。

- ・ Default Paper Source (デフォルト用紙トレイ)

リリース8.9でデフォルト用紙トレイとして使用するトレイの番号を入力します。

11. [Details]タブで[Line Printer]オプションを選択した場合は、[Line Printers]ボックスにフィールドが表示され、用紙サイズと行数のパラメータを設定できます。次のフィールドに値を入力します。

- ・ Characters Per Inch (1インチあたりの文字数)

このフィールドに入力した値によって、指定したプリンタで1インチに印刷できる文字数が確定されます。

- ・ Columns Per Page (1ページあたりのカラム数)

このフィールドに入力した値によって、特定のレポートの1テキスト行に表示される文字数が確定されます。

- ・ Lines Per Inch (1インチあたりの行数)

このフィールドに入力した値によって、指定したプリンタで1インチに印刷できるテキスト行数が確定されます。

- ・ Lines Per Page (1ページあたりの行)

このフィールドに入力した値によって、指定したプリンタで1ページに印刷できるテキスト行数が確定されます。

- ・ Printer Paper Width (プリンタ用紙の幅)

このフィールドの値は、[Line Printers]ボックスに入力した値に基づいて自動的に計算されます。

- ・ Printer Paper Height (プリンタ用紙の高さ)

このフィールドの値は、[Line Printers]ボックスに入力した値に基づいて自動的に計算されます。

12. [Details]タブでiSeriesサーバーを指定して[Line Printer]オプションを選択すると、[AS400 Only]ボックスにフィールドが表示され、プリンタでサポートされるiSeriesエンコーディングを設定できます。次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ ASCII Encoding (ASCIIエンコーディング)
 - ・ EBCDIC Encoding (EBCDICエンコーディング)

注意

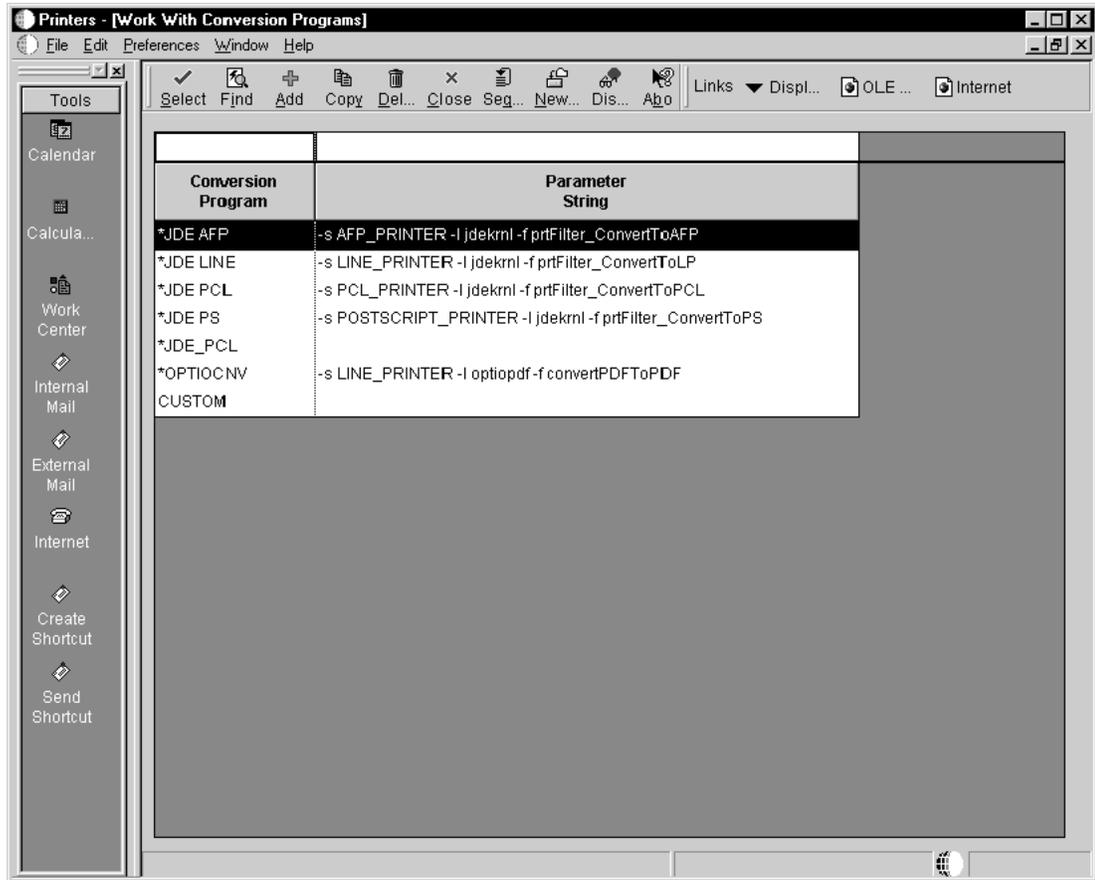
iSeriesサーバーを指定してPostScriptまたはPCLプリンタを選択した場合は、[ASCII Encoding]オプションが有効になり、[AS400 Only]ボックスが使用不可になります。

13. [Details]タブで[Custom]オプションを選択すると、使用する変換フィルタを指定できます。

[Custom]オプションを選択すると、[Custom]チェックボックスの下にフィールドが表示されます。使用する変換フィルタの名前を入力するか、ビジュアル・アシストを使用して〈Conversion Program Search and Select (変換プログラムの検索/選択)〉フォームからフィルタを選択します。
14. (変換フィルタを変更または追加しない場合は、「[ステップ 15 \[255\]](#)」に進んでください)。

変換フィルタを変更または追加するには、[Form (フォーム)]メニューから[Advanced (上級)]を選択して次のステップを実行します。[Advanced]オプションが使用可能になるのは、[Custom]を選択した場合のみです。

〈Work With Conversion Programs (変換プログラムの処理)〉フォームが表示されます。



- a. [Add(追加)]をクリックするか、フィルタを1つハイライトして、[Copy]または[Select(選択)]をクリックします。

〈Advanced Conversion Program(上級変換プログラム)〉フォームが表示されます。

- b. 次のフィールドの一方または両方を変更します。

- Conversion Program(変換プログラム)

直前のフォームで[Add]または[Copy]をクリックすると、[Conversion Program]フィールドが使用可能になります。追加またはコピーにより作成する変換プログラムの名前を入力します。コピーする場合は、[Parameter String(パラメータ文字列)]フィールドに前のフォームでハイライトした文字列が自動入力されます。

- Parameter String

このパラメータ文字列は、自動的に入力されます。この値は、印刷に使用するホスト(iSeries、HP9000など)とプリンタのタイプ(PostScript、PCL、またはラインプリンタ)に基づいています。次に使用例を示します。

```
-s string_name -l library_name -f convertPDFtoPS
```

-sでは文字列名、-l(数字の"1"ではなく英小文字の"l")ではライブラリ名、-fでは関数名を定義します。

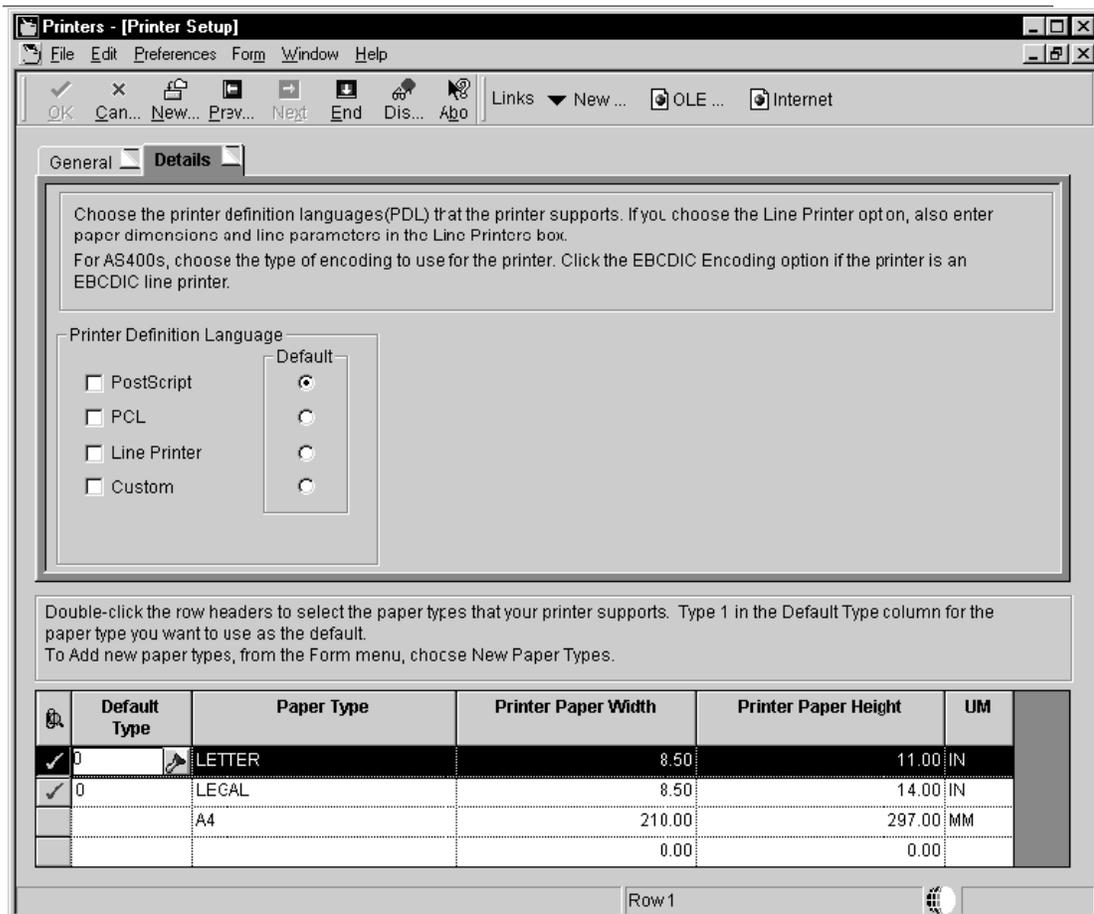
- c. [OK]をクリックすると、〈Work With Conversion Programs〉フォームが表示されます。[Close(閉じる)]をクリックします。

〈Printer Setup〉フォームが表示されます。

15. 〈Printer Setup〉フォームの最下部にあるグリッドで、プリンタでサポートされる各用紙タイプのロー見出しをダブルクリックします。ダブルクリックした用紙タイプ行のロー見出しには、チェック・マークが表示されます。

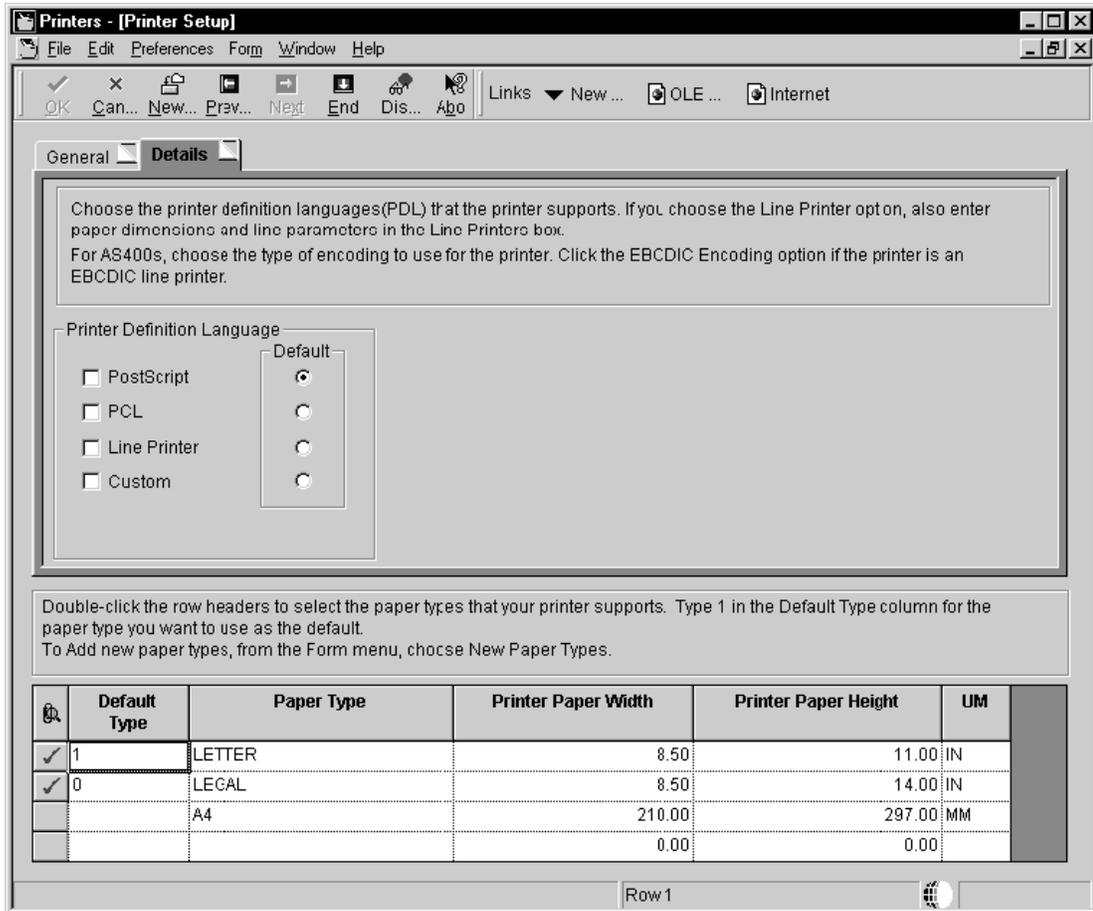
注意

必要に応じて新しい用紙タイプを追加できます。手順については後で説明します。

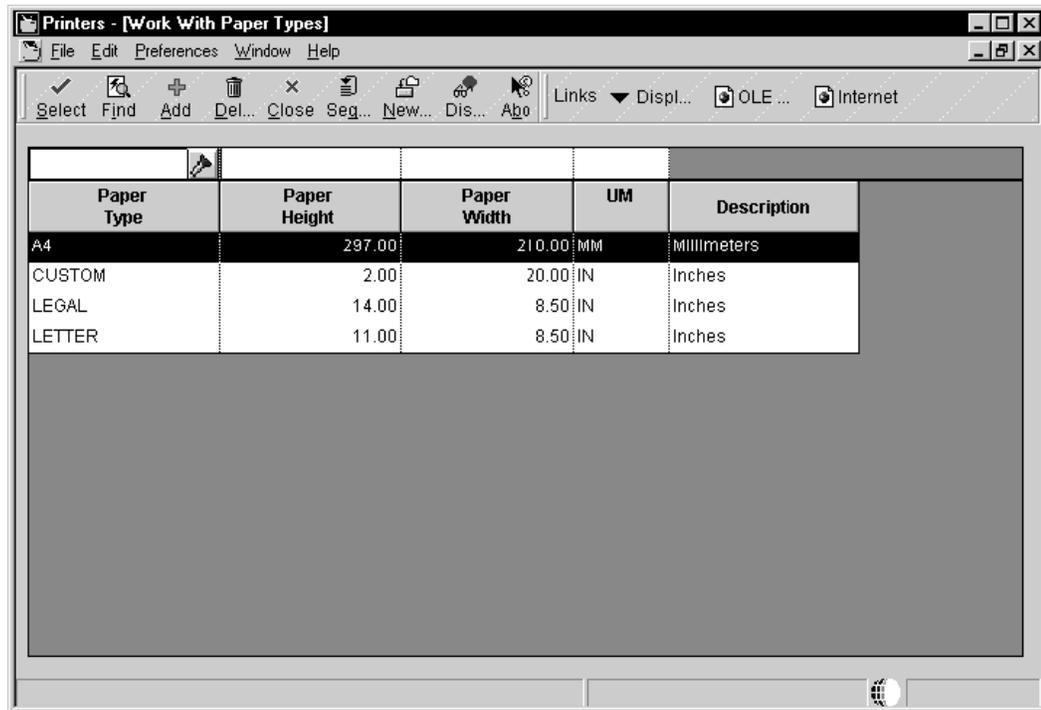


16. [Default Type(デフォルト・タイプ)]カラムで、デフォルトとして使用する用紙タイプのローに数値"1"を入力します。

デフォルトとして選択できる用紙タイプは1つだけです。ユーザーは、バッチ処理の投入時にこのデフォルト用紙タイプを一時変更できます。

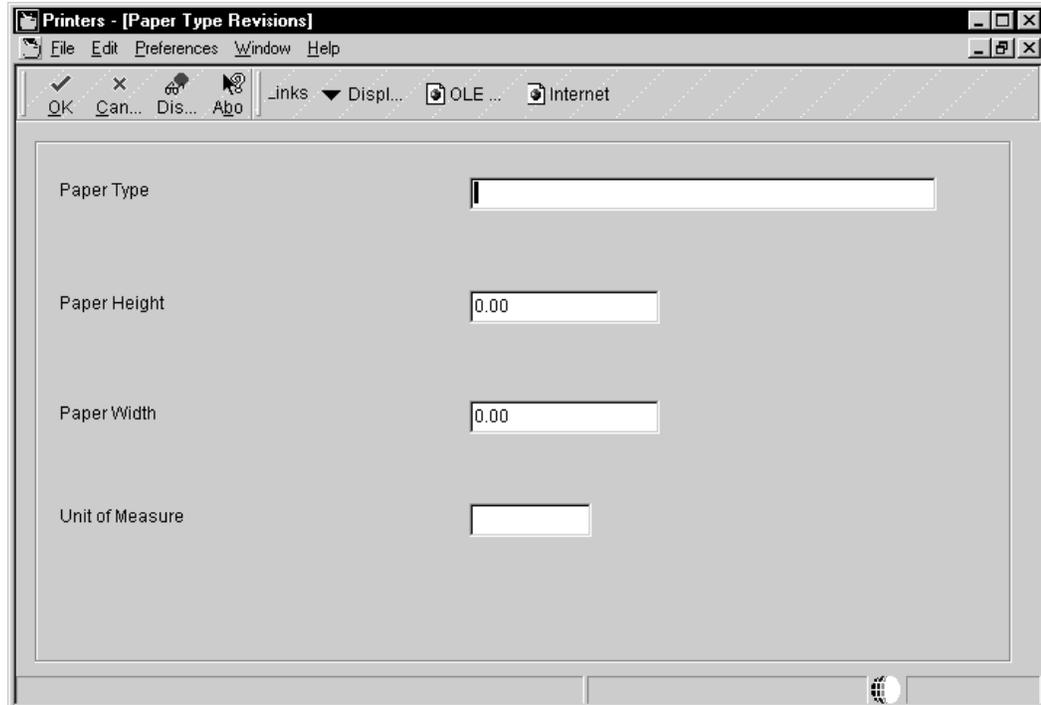


17. 新しい用紙タイプを追加するには、次のステップを完了します。
 - a. [Form]メニューから[New Paper Type(新しい用紙タイプ)]を選択します。
 〈Work With Paper Types(用紙タイプの処理)〉フォームが表示されます。



- b. [Add]をクリックします。

〈Paper Type Revisions (用紙タイプの改訂)〉フォームが表示されます。



- c. 次のフィールドに値を入力します。

- ・ Paper Type (用紙タイプ)
- ・ Paper Height (用紙の高さ)
- ・ Paper Width (用紙の幅)
- ・ Unit of Measure (計量単位)

新しい用紙タイプが保存されます。

- d. [OK]をクリックして〈Work With Paper Types〉フォームに戻り、[Close]をクリックして〈Printer Setup〉に戻ります。

新しい用紙タイプが〈Printer Setup〉フォームのグリッドで使用可能になります。以前に選択していた用紙タイプはすべて消去されるため、再び使用する場合は再選択する必要があります。

18. 〈Printer Setup〉フォームでプリンタ情報の入力を完了したら[End(終了)]をクリックします。

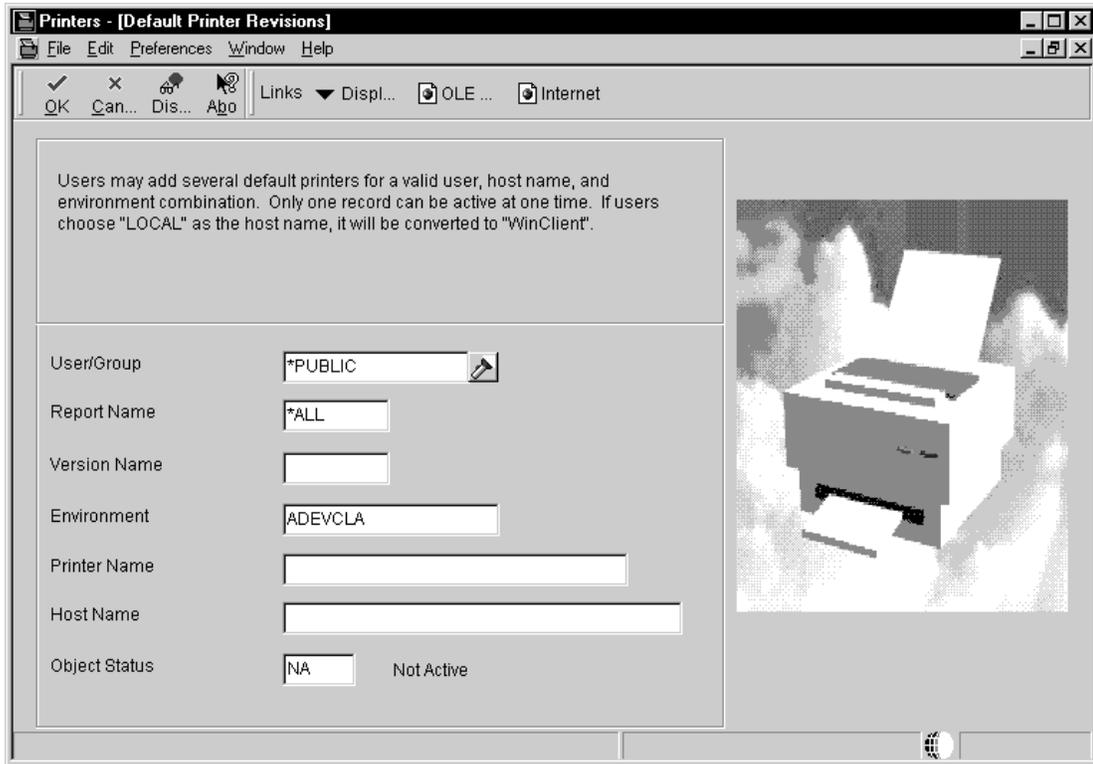
新規プリンタ設定が保存され、〈Printers〉アプリケーションの初期フォームに戻ります。

フィールド	説明
Platform Type	データベースが常駐する物理ハードウェアのタイプ。
AS/ 400 Library Name (iSeriesライブラリ名)	プリンタの設定対象となるiSeriesライブラリ名。
iSeries Outputqueue Name (iSeries出力待ち行列名)	プリンタの設定対象となるiSeries出力待ち行列名。
Server Name (サーバー名)	クライアントからのドキュメントを受信するコンピュータ。
Printer Name (プリンタ名)	サーバー上の共有リソースを参照する名前。サーバー上の各共有ディレクトリには、PCユーザーがそのディレクトリを参照するときに使用する共有名が付いています。
Printer Model	プリンタ機能は、次のとおりです。[Printer Model]はプリンタのモデル指定、[Printer Location]はプリンタの実際のロケーション、[Encoding]はiSeriesユーザーのみの機能です。
Paper Type	レター、リーガル、A4のようなプリンタの用紙タイプを示すユーザー定義コード(H98/PT)。
Paper Width	この用紙タイプの用紙の幅を指定する値。この値には、[Unit of Measure]フィールドで指定する単位を使用します。
Paper Height	この用紙タイプの用紙の高さを指定する値です。この値には、[Unit of Measure]フィールドで指定する単位を使用します。
Unit of Measure	CS(ケース)やBX(ボックス)など、在庫品目の数量を示すユーザー定義コード(00/UM)です。フォーム固有の情報は、用紙の高さと幅を入力する単位を示します。たとえば、IN = インチ、MM = ミリメートルです。
EBCDIC Encoding	プリンタ機能は、次のとおりです。[Printer Model]はプリンタのモデル、[Printer Location]はプリンタの実際のロケーション、[Encoding]はiSeriesユーザーのみの機能です。
Columns Per Page	1ページ当たりのカラム数を指定するライン・プリンタ・パラメータ。

フィールド	説明
	たとえば、80または132などです。
Characters Per Inch (CPI)	水平方向の印刷密度。プリンタでサポートされる1インチあたりの文字数を入力します。
Line Per Page (1ページの行)	1ページ当たりの行数を指定するライン・プリンタ・パラメータ。たとえば、60または66などです。
Line Per Inch (LPI)(1インチあたり行数)	行間隔は、プリンタでサポートされる1インチ当たりの行数として入力する必要があります。有効な値は次のとおりです。 4 - IBM 5219、5224、5225、3287プリンタのみ 6 - IBM 5224プリンタのみ 8 - IBM 5224プリンタのみ 9 - IBM 5225プリンタのみ 標準的なコンピュータ出力は、6 LPIおよび10 CPIです。8 1/2 x 11 インチの用紙に印刷する場合は、8 LPIおよび15 CPIを指定します。
Maximum Number of Output Tray (最大出カトレイ数)	設定するプリンタ上で使用可能な用紙トレイの最大数
Output Tray Name (出カトレイ名)	特定のバッチ印刷ジョブに使用する出カトレイ

▶ デフォルト・プリンタを定義するには

1. 〈Printers〉メニュー(GH9013)から〈Printers〉(P98616)を選択します。
2. 〈Printers〉フォームで[Define Default Printer(デフォルトプリンタの定義)]をクリックします。
〈Work With Default Printers(デフォルト・プリンタの処理)〉フォームが表示されます。
3. [Add]をクリックします。



4. <Default Printer Revisions (デフォルト・プリンタの改訂)>で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
- ・ User/Role(ユーザー/ロール)

ビジュアル・アシストをクリックし、このプリンタ用の特定ユーザーを選択するか、グループ全体を選びます。
 - ・ Report Name(レポート名)

ビジュアル・アシストをクリックし、印刷する特定のレポートを選びます。すべてのレポートを印刷する場合は、“*ALL”と入力します。
 - ・ Version Name(バージョン名)

ビジュアル・アシストをクリックし、印刷する特定のレポートを選びます。[Report Name]フィールドが*ALLの場合、[Version Name]はデフォルト値の*ALLに設定され、グレー表示になります。
 - ・ Environment(環境)

このフィールドには、現在ログオンしている環境が自動的に入力されます。すべての環境を対象とする場合は、“*ALL”と入力します。この情報は変更できます。
 - ・ Printer Name
 - ・ Host Name(ホスト名)

レポートを処理するホスト・サーバーを指定します。ビジュアル・アシストには、選択したプリンタ名に基づいて該当するホスト名が表示されます。このプリンタを環境内のすべてのホストに使用

する場合は、“*ALL”と入力します。

- Object Status (オブジェクト状況)

この新規プリンタの状況をアクティブに変更すると、デフォルト・プリンタになります。エラーが発生した場合は、現在は別のプリンタがアクティブなデフォルト・プリンタに設定されていることを意味します。元のデフォルト・プリンタを非アクティブに変更しなければ、新規プリンタをアクティブにすることはできません。このタスクの最後の説明に従って、〈Work With Default Printers〉フォームから複数の状況を変更してください。

- [OK]をクリックしてから[Cancel(キャンセル)]をクリックし、〈Work With Default Printers〉フォームにアクセスします。
- デフォルト・プリンタの状況を変更するには、デフォルト・レコードを選んで[Row(ロー)]メニューから[Change Status(変更状況)]を選択します。

別のプリンタが既にアクティブなデフォルト・プリンタとして設定されている場合は、エラーが発生します。元のデフォルト・プリンタを非アクティブに変更するには、プリンタを選んで[Row]メニューから[Change Status]を選択し、新規プリンタをデフォルトに設定します。

エンタープライズ・サーバーへの言語スペックのコピー

このセクションは、代替言語をインストールするユーザーのみを対象としています。他のすべてのユーザーは、次のセクションに進んでください。

必要な言語でレポートを作成して印刷するには、エンタープライズ・サーバーに言語スペック・ファイルをロードします。エンタープライズ・サーバーに格納され、レプリケートされるローカル・スペック・ファイルには英語が含まれています。言語を含み、レプリケートされるローカル・スペック・ファイルは、RDATEXTです。

エンタープライズ・サーバーで代替言語を併用するように準備するための最終ステップとして、パッケージ管理プロセスを使用して言語スペック・ファイルをコピーします。手順については、『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ・アセンブリ・ディレクタの理解」と「パッケージ・ビルド定義ディレクタの理解」を参照してください。

パッケージに言語スペックを組み込むには、組み込む言語を指定します。パッケージ・ビルド・プロセスでは、パッケージのビルド時にパラメータとして指定した使用言語コードが使用されます。また、リレーショナル・データベース・テーブルを使用して〈Report Design Aid(レポート設計ツール)〉のスペックが作成されます。言語パッケージには、フル・パッケージまたはアップデート・パッケージを選択できます。

参照 サーバー・パッケージのビルドとデプロイメントの手順については、『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ・ビルド」

多言語による数値書式の設定

このセクションは、複数の言語をインストールするユーザーのみを対象としています。他のすべてのユーザーは、次のセクションに進んでください。

数値に使用される書式は、言語や文化に応じて異なります。リリース8.9には、優先情報に合わせて特定の数値書式を設定する機能が用意されています。これらの優先情報は、リリース8.9クライアントのユーザー設定セクションで設定します。

ユーザーが小数点にドット(.)またはカンマ(,)を選択すると、処理がローカル・クライアントで実行されるかエンタープライズ・サーバーで実行されるかに関係なく、そのユーザーによる処理では指定の優先情報に従って数値書式が使用されます。

ただし、特定のユーザーがデフォルトの区切り文字を選ぶと、小数点と3桁の区切り文字はクライアントOS側のデフォルト設定に従って選択されるか、HTMLクライアントの場合はWebサーバー側で選択されます。このデフォルト値が小数点と3桁の区切り文字に関してエンタープライズ・サーバー側の値と一致しないと、データが破損する場合があります。

エンタープライズOS側のロケールがクライアント側と同じ値に設定されている場合は、エンタープライズ・サーバーの書式設定値が一致します。通常、これはすべてのクライアントとサーバーがアメリカのロケールに設定されている場合です。

ロケールが一致するかどうか明確でない場合は、エンタープライズ・サーバーのロケールがクライアントのロケールと一致するように、JDE.INIファイルを修正することができます。アメリカ以外のWindowsロケールはJDE.INIファイルを手作業で変更しなければUNIXやiSeriesのロケールと一致しない場合があるため、UNIXまたはiSeriesエンタープライズ・サーバーを実行する場合は通常、この方法をお勧めします。

▶ エンタープライズ・サーバーの書式設定文字に合わせてJDE.INIファイルを設定するには

- ・ JDE.INIファイルに次の設定を組み込みます。

```
[DB SYSTEM SETTINGS] ; Set the thousands separator to a comma (,)character.ThousandsSeparator=, ;Set the decimal
```

注意

小数点と3桁の区切り文字には、異なる文字を指定してください。両方の文字を同じ値に設定するとどちらも無視され、システムのデフォルトが使用されます。書式設定文字にアクセスするカーネルごとに、jde.logファイルにエラー・メッセージが書き込まれます。

3桁の区切り文字にスペースを使用する場合、実際のスペース・キーを押して設定することはできません。次のように、SPACEという語を使用する必要があります。

```
; Set the thousands separator to a space character.ThousandsSeparator=SPACE
```

Microsoft Windowsでは、3桁の区切り文字にスペースを使用できないロケール(フィンランドなど)があります。代わりに、異なるASCII値を持つ改行なしのスペースが使用されます。エンタープライズ・サーバーをこの値と一致させるには、次の設定を使用します。

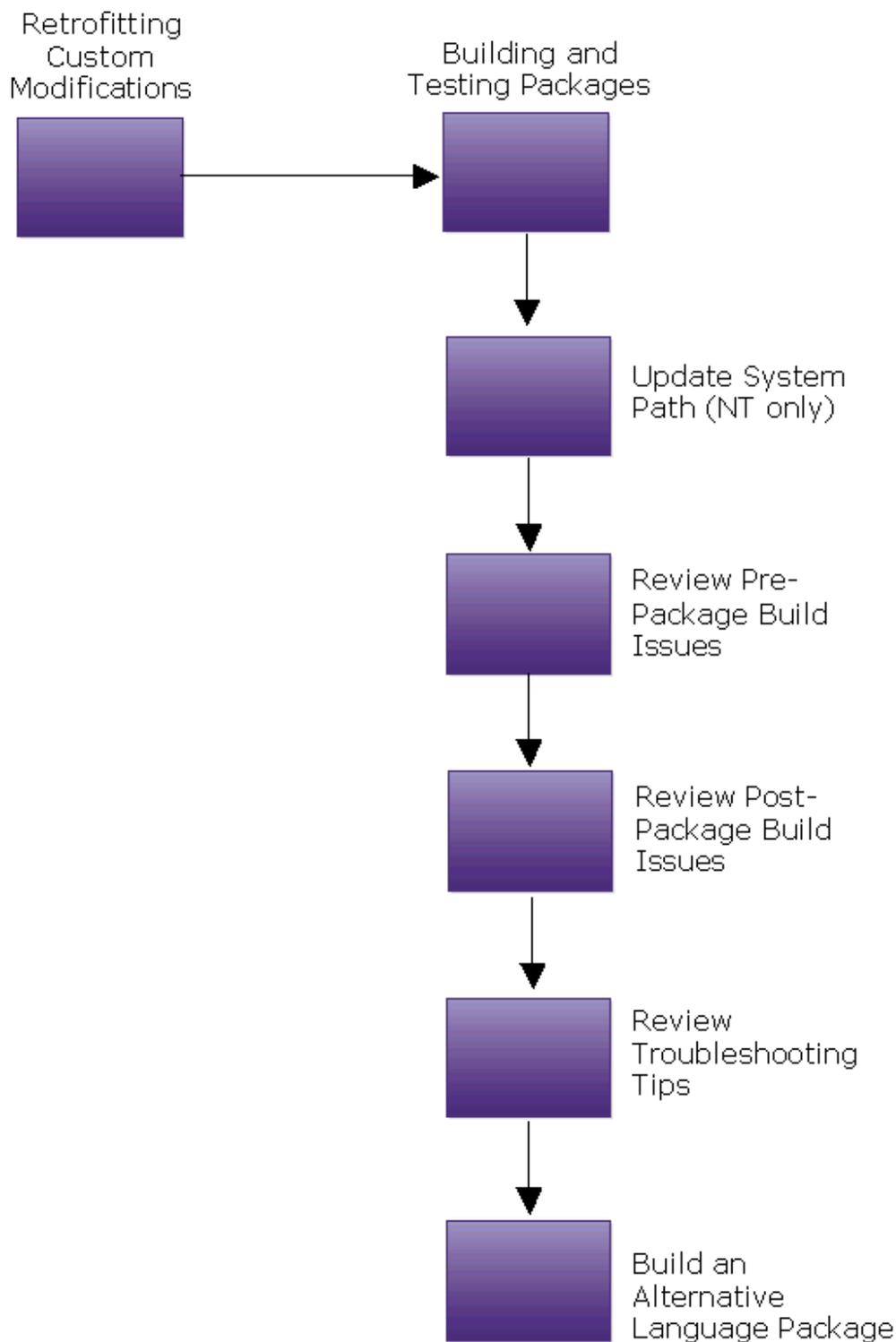
```
; Set the thousands separator to a non-breaking space character.ThousandsSeparator=NB_SPACE
```

カスタム修正およびパッケージ

この時点では、前リリースまでのカスタム修正をリリース8.9ソフトウェアの新リリースに適用する準備が完了しています。また、この章では、ワークステーションに配布するパッケージをビルドし、テストする方法についても説明します。

次のフロー・チャートは、リリース8.9の新リリースでカスタム修正を作成するプロセスの概要を示しています。

Preparing Custom Modifications And Packages



カスタム修正の遡及適用

カスタマーの多くは、導入したソフトウェアを業務要件に応じてカスタマイズします。新リリースにアップグレードする場合、それらのカスタマイズ内容の遡及適用(追加導入)が必要になることがあります。

ソフトウェアをアップグレードするたびにカスタム修正を再作成するのは手間がかかるため、アップグレード・プロセスではカスタム修正のほとんどが確保されます。ここでは、アップグレード・プロセスで確保されないカスタム修正をリリース8.9ソフトウェアに統合する方法について説明します。この統合処理は遡及適用と呼ばれ、ソフトウェアの新バージョンにマージできないカスタマイズ内容を再適用できます。

修正内容の遡及適用に必要なのは、アップグレード済みソフトウェアがインストールされているワークステーションと、リリース8.9と共に提供される開発ツールのみです。これらのツールでは、新ソフトウェアにマージされたカスタマイズ内容がシステム内のパス・コードと比較されます。このため、アップグレード後の修正内容をアップグレード前の修正内容や新リリースのプリスティン(JDEオリジナル)環境と簡単に比較できます。

注意

JDEテキスト一時変更の削除は、カスタム修正としてはサポートされません。現状では、テキスト一時変更を削除すると、次回のESU/アップグレードと共に再配布されます。オリジナルのスタティック・テキスト・コントロールを非表示にしておく必要があります。必要なテキストを使用した新規コントロールをオリジナルがあった場所に追加してください。

▶ 修正内容を遡及適用するには

スタッフ	プログラマ。できれば、カスタム修正を行った担当者。
ログオン状況	オブジェクト修正を遡及適用するワークステーション、通常は、開発環境またはプロトタイプ環境にログオンします。
前提条件	環境をアップグレードし、パッケージをビルドして、使用するワークステーションに配布しておく必要があります。
同時に行うタスク	同時に他のほとんどのタスクを実行できます。

1. オブジェクト修正を遡及適用するワークステーションから、修正対象のオブジェクトをチェックアウトします。

オブジェクトをチェックアウトする方法については、『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」を参照してください。

2. ビジュアルER比較ユーティリティを使用して、クライアント・マシン上のオブジェクトのアップグレード済みバージョンをアップグレード前のバージョンと比較します。

このツールを使用すると、イベント・ルールを元のスペックからアップグレード後のスペックに直接コピーできます。この手順については、『開発ツール』ガイドの「Visual ER Compareの使用」を参照してください。

3. 『開発ツール』ガイドに記載されている他の設計ツールを使用して、オブジェクトの他の修正済みコンポーネントを遡及適用します。たとえば、FDAを使用して、アプリケーションのコントロールの修正を遡及適用します。
4. ビジュアルER比較ユーティリティを使用して、ビジネス関数のソース・コードの違いを確認します。

5. Do Initializeイベントに対するカスタムイベント・ルールはUBEイベント・リストから削除されているので、やり直します。
6. 修正内容のテストと遡及適用を完了後に、チェックインしてパッケージをリビルドします。
7. 修正内容をテストし、手直してから、訂正後のパッケージをリビルドし、再配布します。このステップを、すべての修正内容が正常に機能するまで繰り返します。

パッケージのビルドとテスト

パッケージのビルドおよびテスト・プロセスでは、パッケージ作成、パッケージの定義とビルド、サーバーとワークステーションへのパッケージのデプロイメント、およびパッケージのトラブルシューティングを行うための方法が提供されます。この機能には、ディレクトリに表示される情報を使用する〈Package Assembly (パッケージ・アセンブリ)〉、〈Package Build (パッケージ・ビルド)〉、〈Package Deployment (パッケージ・デプロイメント)〉があります。

さまざまな場合に、リリース8.9ソフトウェアがインストールされているワークステーションやサーバーのアップグレードまたはセットアップが必要になります。たとえば、新規ワークステーションのセットアップ、すべてまたは選択したユーザーへのカスタム・ソリューションの配布、開発用の新規パス・コードの作成、修正の配布、一部のワークステーション上でのフル・パッケージから部分パッケージへの変更などが必要になることが考えられます。

このような場合には、3つのパッケージ・タイプの定義、カスタム・ソリューションを伴うパッケージのビルドと定義、および2つの異なるデプロイメント・オプションによる配布というオプションがあります。これらのオプションは、単一のサーバー、ワークステーション、ユーザーを対象とするか、選択したマシン、グループまたは個々のユーザーを対象として使用できます。また、ジャスト・イン・タイム・インストールやスケジューラされたインストール方法を使用して配布するかを選択することができます。

ワークステーションに配布するパッケージ(DV9FAまたはDV9PAなど)に修正(変更や追加があったビジネス関数またはアプリケーションなど)を組み込むには、独自のパッケージを定義してビルドします。

システム管理者は、パッケージをサーバー・レベルでビルドしてテストする必要があります。インストーラは、ワークステーション用のプロセスを完了します。これらのプロセスには、ビジネスの対象範囲に応じて数時間かかります。各手順は、デプロイメント・サーバー上のデプロイメント環境でユーザーJDEを使用して実行します。パッケージのビルドとテストを行う前に、エンタープライズ・サーバー上でリリース8.9のインストールを完了しておく必要があります。パッケージをワークステーションに配布する所要時間は、使用するデータベースに応じて大幅に異なります。

パッケージのビルドおよびアセンブリ・プロセスには、多数の重要なタスクが含まれており、パッケージを正常にインストールするには、これらのタスクを正常に完了する必要があります。ここでは、パッケージのビルド、アセンブリ、およびデプロイメント・プロセスに関連して判明している問題点と、その回避手順について説明します。パッケージをビルドする前に、このプロセスを正常に完了できるように、これらの手順を検討してください。

参照

- ・ パッケージのビルドとデプロイメントについては『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ・ビルド」
- ・ Unicodeテキスト文字列をサポートするようにビジネス関数を変換する方法については、『開発スタンダード:ビジネス関数プログラミング』ガイド

システム・パスの更新

サーバー・パッケージをWindows NTマシン上でビルドする前に、エンタープライズ・サーバー上でMicrosoft Visual C++が格納されているSYSTEMパスを更新する必要があります。

▶ SYSTEMパスを更新するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	パッケージ・ビルド・マシン上で、Windowsの[コントロール パネル]を開きます。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. Windowsの[スタート]メニューから[コントロール パネル]を開きます。
2. [システム]を開き、[Environment(環境)]タブをクリックします。
3. ユーザー設定からシステム設定にパスをコピーします。
4. システム設定で、LIBおよびINCLUDE設定を作成します。
5. LIBおよびINCLUDE設定をユーザーからシステムにコピーします。
6. ドライブ名を、エンタープライズ・サーバー上のVisual C++を指すように変更します。
7. 次のパス設定を確認します(システム上のパスが異なる場合は、その値に合わせて変更してください)。

INCLUDE:

c:\Program Files\Microsoft Visual Studio\vc98\atl\include;

c:\Program Files\Microsoft Visual Studio\vc98\mf\include;

c:\Program Files\Microsoft Visual Studio\vc98\include;

c:\Program Files\mts\include;

LIB:

c:\Program Files\Microsoft Visual Studio\vc98\mf\lib;

c:\Program Files\Microsoft Visual Studio\vc98\lib;

c:\Program Files\mts\lib;

PATH:

C:\Program Files\Microsoft Visual Studio\Common\Tools\WinNT;

C:\Program Files\Microsoft Visual Studio\Common\MSDev98\Bin;

C:\Program Files\Microsoft Visual Studio\Common\Tools;

C:\Program Files\Microsoft Visual Studio\vc98\bin

8. コンピュータを再起動します。

パッケージ・ビルド前の問題点の検討

ビルド中のエラーを最小限に抑えるために、パッケージをビルドする前に次の項目をチェックしてください。パッケージをビルドするマシン上で、それぞれの関連タスクを実行します。

▶ 次のUBEがローカルにマップされているかどうかの検証

1. OCMを開きます。
2. UBEのうちR9621、R9622、R98825C、およびR98825Dを検索し、それぞれがローカルにマップされていてアクティブになっているかどうかを確認します。

▶ OCMマッピングの検証

1. 〈Universal Table Browser (ユニバーサル・テーブル・ブラウザ)〉を使用して、F98826テーブルが生成されているかどうかを確認します。
2. すべての環境に対してすべてのOCMマッピングが作成されていることを確認します。

▶ BUSOBJディレクトリの削除

- ・ パッケージを実行するクライアント・サーバーとデプロイメント・サーバーから、すべてのBUSOBJディレクトリを削除します。このディレクトリは、リリース8.9のパス・コード・ディレクトリの下にあります。デプロイメント・サーバー上で、プランナ・パス・コードからBUSOBJおよびオブジェクト・ディレクトリを削除します。クライアント上では、ユーザーがパッケージをビルドするためにログインするパス・コードからこれらのディレクトリを削除します。

▶ F9631テーブルの検証

1. UTBを使用してF9631テーブルを開きます。
2. PDPKNAME="LITE"の16のレコードがあることを確認します。
3. テーブルにこれらのレコードが欠落している場合は、プランナ・パス・コード・ディレクトリのAccessデータベースからコピーして、そのテーブルをリフレッシュします。次のステップを実行します。
 - a. デプロイメント・サーバー上のプランナ環境にログオンします。
 - b. [Fast Path (略式コマンド)]に"OMW"と入力して〈Object Management Workbench (オブジェクト管理ワークベンチ)〉を開きます。
 - c. 〈Object Management Workbench〉で、[User (ユーザー)]フィールドにユーザーIDを入力し、[

Find(検索)]をクリックします。

OMWについては『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」を参照してください。

〈Project(プロジェクト)〉ウィンドウに[Default Project(デフォルト・プロジェクト)]が表示されま
ず。

- d. [Default Project]の左にある[+]をクリックし、プロジェクト・コンポーネントを表示します。
- e. [Objects(オブジェクト)]を選択します。
- f. 〈Object Management Workbench〉の右ペインで[Search(検索)]タブをクリックします。
- g. 次のフィールドに値を入力します。
 - ・ Category(カテゴリ)
 - [Object Librarian(オブジェクト・ライブラリアン)]を選択します。
 - ・ Search Type(検索タイプ)
 - [Object Name(オブジェクト名)]を選択します。
 - ・ Search
 - “F9631”と入力します。
- h. [Search]フィールドの右にある[Search]をクリックします。
検索ウィンドウにF9631テーブルが表示されます。
- i. F9631テーブルを選び、[Search]ペインの左にある左矢印をクリックします。
テーブル・アイコンが[Object]フォルダにコピーされます。
- j. [Object]フォルダでF9631テーブルを選び、[Project]ペインの右に表示される[Design(設計)]
をクリックします。

注意

[Design]機能にアクセスできるように、自分自身をDeveloperロールのプロジェクトに追加する必
要があります。

- 〈Object Librarian Table Design(オブジェクト・ライブラリアン・テーブルの設計)〉画面が表示さ
れます。
- k. [Table Operations(テーブル操作)]タブをクリックし、[Copy Table(テーブルのコピー)]アイコ
ンをクリックします。
〈Copy Table〉フォームが表示されます。
- l. [Source data source(コピー元データ・ソース)]フィールドに“OneWorld Planner - B9”と入力し
ます。

- m. [Destination data source (コピー先データ・ソース)]フィールドに“System - B9”と入力します。
- n. [OK]をクリックしてテーブルをコピーします。

▶ エンタープライズ・サーバー上でのjde.ini設定の検証

1. エンタープライズ・サーバー上でjde.iniファイルを開きます。
2. [BSFN BUILD]セクションで、BuildArea設定がエンタープライズ・サーバー上のPACKAGESディレクトリを指しているかどうかを検証します。

次に例を示します。¥PeopleSoft¥ddp¥b9¥packages

▶ エンタープライズ・サーバーの構成

サーバー・パッケージのビルド時には、NTエンタープライズ・サーバーでは多数の同時ビルドが実行されるため、サーバーがクラッシュする場合があります。クラッシュを防ぐには、次のステップを実行します。

1. エンタープライズ・サーバー上でjde.iniファイルを開きます。
2. INIファイルの[BSFN BUILD]セクションで、SimultaneousBuildsを5以下に変更します(デフォルトは0で、無制限にビルドできます)。

トラブルシューティングのヒントの検討

次のトラブルシューティングのヒントは、パッケージのビルド、アセンブリ、およびデプロイメント・プロセスに関して認識されている問題を回避する上で参考になります。プロセスの処理中に、これらのヒントを検討してください。ヒントは次のカテゴリにグループ化されています。

- ・ ユーザーに関するヒント
- ・ デプロイメントに関するヒント

ユーザーに関するヒント

パッケージのビルドおよびアセンブリ中に、次の項目をチェックしてください。

アセンブリ・プロセスとビルド・プロセスの完了

〈Assembly (アセンブリ)〉フォームと〈Build (ビルド)〉フォームの両方にパッケージ情報を入力した後に、[End (終了)]をクリックして情報を保存します。

パッケージ定義画面の完了

〈Build Definition (ビルド定義)〉フォームでサーバーを選択するときに、選択した各サーバーの横にチェック・マークが付いているかどうかを確認します。チェック・マークが付いていない場合は、そのサーバーを

グリッドでハイライトして[Select(選択)]をクリックします。

親パッケージの更新

親パッケージを更新するアップデート・パッケージをビルドした後に、親パッケージを再圧縮する必要があります。このステップが自動的に実行されることはありません。

サーバー・パッケージの更新

サーバー・アップデート・パッケージをビルドした後に、指定した親パッケージをサーバー上のパッケージ・ディレクトリに格納する必要があります。親パッケージがパッケージ・ディレクトリになれば、アップデート・パッケージはビルドされません。

デプロイメントに関するヒント

パッケージのデプロイメント中に、次の項目をチェックしてください。

CDを作成するマシンへのパッケージの配布

CDを作成するマシンにパッケージを配布する場合、ターゲット・マシンを作成して、CDを作成するマシンをこの新規ロケーションに添付する必要があります。詳しくは『インストール・ガイド』を参照してください。

パッケージの承認

パッケージのビルドを完了した後に、package.infファイルの[ATTRIBUTES]でDeployment Status(デプロイメント状況)をNo Status DefinedからApprovedに変更してください。このように設定しないと、クライアント・ワークステーションからリリース8.9をインストールするときに、そのパッケージがパッケージ・リストに表示されません。

▶ パッケージを承認するには

1. 〈Package Deployment〉アプリケーションを開きます。
2. [Package(パッケージ)]オプションを選択します。
3. パッケージ名を入力して[Find]をクリックします。
4. パッケージを選択します。
5. [Row(ロー)]の下の[Activate/Deactivate(アクティブ化/非アクティブ化)]をクリックします。

パッケージがアクティブに設定されます。

パッケージのINFファイルのコピー

複数のpackage.infファイルの[Attributes]セクションに同じパッケージ名が指定されていると、そのパッケージはインストール画面に表示されません(package.infファイルをバックアップのためにコピーした場合は、重複するパッケージが作成されている可能性があります)。次のステップを完了し、この問題を解決してください。

▶ パッケージのINFファイルのコピー

1. インストール画面に表示されないパッケージのINFファイルを開きます。
2. 他方のパッケージのinfファイルでAttributesセクションを調べてPackageName=に指定されているパッケージ名が他のパッケージのinfファイルと重複していないかどうかを確認します。
3. パッケージ名が他のパッケージのinfファイルに指定されている名前と同一の場合は、変更します。

クライアント・パッケージのinfファイルの構成

パッケージをクライアント・マシンに配布する予定の場合、クライアントへのログイン時にパッケージのインストールを確認するプロンプトが表示されなければ、レジストリ設定に競合が発生している可能性があります。次のステップを完了し、この問題を解決してください。

1. クライアント・パッケージのinfファイルを開きます。
2. FoundationBuildDateがBuildDateより数時間前の値に設定されているかどうかを確認します。そうでない場合は、一方のエントリの時刻を変更します。
3. パッケージのinfファイルで、DeploymentStatusがApprovedに設定されているかどうかを確認します。
4. 状況がApprovedでなければ、Approvedに設定してファイルを保存します。
5. パッケージを再インストールします。

更新パッケージの配布

クライアント・マシンに配布するパッケージのスケジュールを設定している場合は、クライアントへのログイン時にパッケージのインストールを確認するプロンプトが表示されます。このインストール・プロセスは、エラーが発生して失敗する場合や、数秒だけ実行されてから停止する場合があります。このような障害が発生するのは、レジストリ設定に競合がある場合です。次のタスクを完了し、この問題を解決してください。

- ・ このマシン用に2番目のデプロイメント・レコードを追加して、パッケージを再インストールします。
- ・ デプロイメント・サーバー上のuclient.exe(¥PeopleSoft¥B9¥system¥bin32¥uclient.exe)を使用して、リリース8.9をインストール削除します。次に、regedit.exeを使用して、EnterpriseOne 8.9に関する残りのレジストリ設定を削除します。最後に、このマシンにリリース8.9を再インストールします。

参照

- ・ パッケージのビルドとデプロイの手順については、『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ・ビルド」

代替言語パッケージのビルド

パッケージは、特定時点のセントラル・オブジェクトのコピーを表しており、リリース8.9によって実行時に読み込まれるレプリケート・オブジェクトが含まれています。ソフトウェアのアップグレード時にカスタム修正やテキスト一時変更が加えられている場合や、特定言語を含む開発上の変更をローカル・ワークステ

ーションに配布する場合は、パッケージをビルドし、そのパッケージに組み込む言語を指定する必要があります。この操作を行う場合は、次の点を考慮してください。

- ・ [パッケージのビルドに関する考慮事項 - ページ \[273\]](#)
- ・ [パッケージのデプロイメントに関する考慮事項 - ページ \[273\]](#)

パッケージのビルドに関する考慮事項

言語パッケージをビルドする前に、言語のインストールが完了しているかどうかを確認してください。言語パッケージをビルドするには、まずそのパッケージを定義します。パッケージのビルドには、そのパッケージのサイズと使用する言語数に応じて数時間かかります。このタスクは、デプロイメント・サーバー上の DEP9に、ユーザーJDEでログオンして実行します。

パッケージに言語スペックを組み込むには、その言語をパッケージ定義で指定します。パッケージ・ビルド・プロセスでは、使用言語コードが使用されます。このコードは、パッケージのビルド時にパラメータとして指定します。また、リレーショナル・データベース・テーブルを使用して、〈Form Design Aid(フォーム設計ツール)〉のテキストと〈Report Design Aid(レポート設計ツール)〉のテキストのスペックがビルドされます。言語パッケージとして、フル・パッケージ、アップデート・パッケージ、または部分パッケージを選択できます。パッケージをビルドするときに、そのパッケージに最新のデータ辞書が組み込まれます。

注意

翻訳済みの処理オプション・テキストを使用してクライアント・パッケージをビルドする場合は、Windows NTの言語版またはWindows 2000を使用し、システム・ロケールを該当する言語に設定してビルドを実行する必要があります。オペレーティング・システム上のシステム・ロケールがインストール済み言語と一致しないと、処理オプションの翻訳済みテキスト(POTEXT)が破損します。

英語以外の言語を含むサーバー・パッケージをビルドするには、リリース8.9クライアントのLocalCodeSet値を、エンタープライズ・サーバー上のjde.iniファイルのLocalCodeSet値と一致させる必要があります。ローカル・クライアント側のLocalCodeSet値がエンタープライズ・サーバー上での指定と異なっていると、サーバー・パッケージのビルドは失敗し、エンタープライズ・サーバー上のjde.logにエラー・ログが記録されます。

パッケージのデプロイメントに関する考慮事項

ワークステーションに正しい文字セットがインストールされていないと、そのワークステーションには翻訳済みのパッケージを配布できません。たとえば日本語テキストを含むパッケージを作成した場合、日本語データを正しく表示するには、日本語版のWindowsをワークステーションにロードする必要があります。

注意

翻訳済みのオブジェクトをサーバーに転送するには、サーバー・パッケージのインストール手順を実行してください。言語に合わせて修正した各オブジェクトを定義します。したがって、変更があったオブジェクトは、パッケージに組み込めるようにトラッキングする必要があります。

注意

すべてのオブジェクトを移動するには、PeopleSoftワールドワイド・カスタマー・サポートにお問い合わせください。

参照

- ・ オブジェクトをサーバーに転送する方法については『パッケージ管理』ガイド

ワークステーションへのインストール

リリース8.9ソフトウェアは、最初にデプロイメント・サーバーにインストールされてからワークステーションに配布されます。ワークステーションへのインストールには、対話型モード、自動モード、プッシュ・モードのいずれかの方法を使用します。プッシュ・モードについては『パッケージ管理』ガイドを参照してください。

Microsoft Windows 2000、Windows NT Workstation、またはWindows XPを実行するワークステーションにインストールします。

注意

デプロイメント・サーバー上にインストールされている言語をワークステーションに反映させるには、JDE.INI設定を検証して修正する手順だけでなく、エンタープライズ・サーバーとワークステーションの両方について作業を行う必要があります。

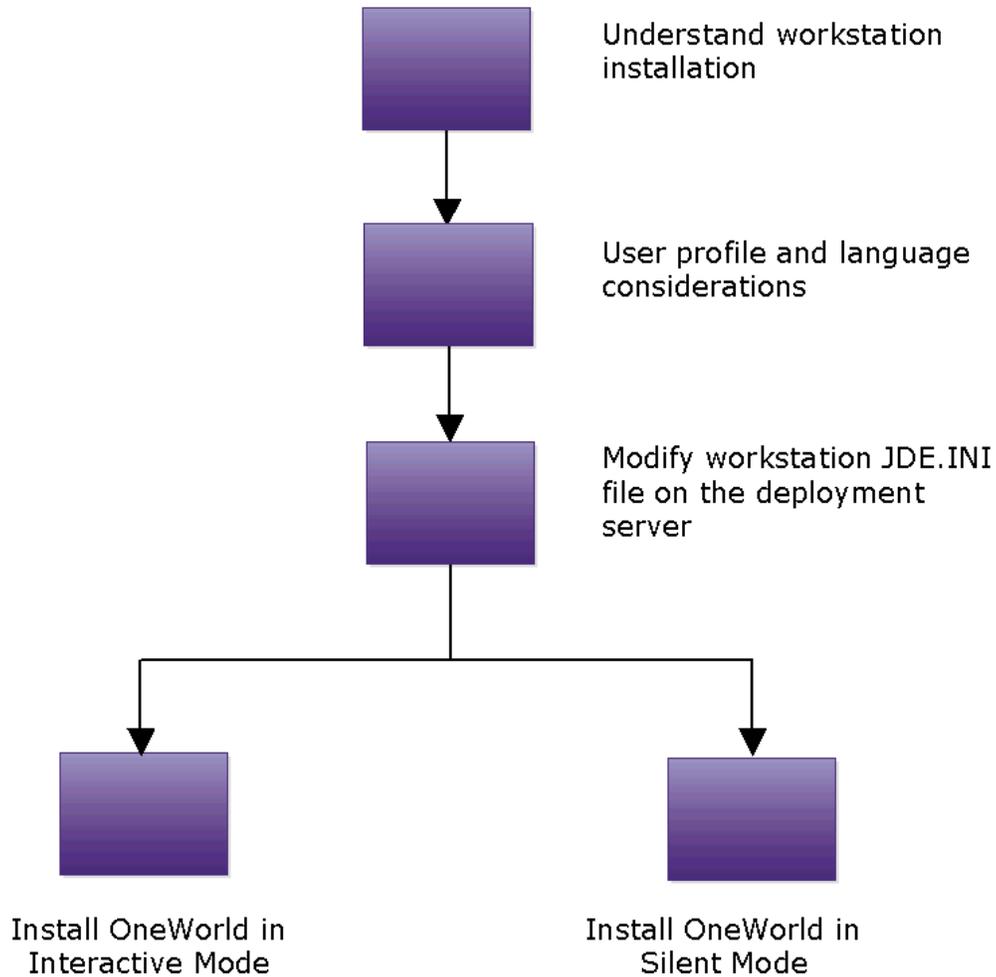
ここでは次の内容について説明します。

- ・ [ワークステーションの構成とインストール - ページ \[276\]](#)

次のフロー・チャートは、ワークステーションにリリース8.9をインストールするプロセスの概要を示しています。

参照 ワークステーション上で複数言語インストールを有効にする方法については、「インストールの概要」の「言語プロセスの概要」

Configuring and Installing OneWorld on the Workstations



ワークステーションの構成とインストール

個々のワークステーションへのリリース8.9のインストール準備を完了するために、簡単な構成/変更を行います。デプロイメント・サーバー上でワークステーションのJDE.INIファイルを変更します。またシステム管理者は、ユーザーがリリース8.9にログオンできるように、ユーザーごとにユーザー・プロファイルを作成する必要があります。

ここでは次の内容について説明します。

- ・ [ワークステーションへのインストールの理解 - ページ \[277\]](#)
- ・ [ユーザー・プロファイルと言語に関する考慮事項 - ページ \[279\]](#)
- ・ [デプロイメント・サーバー上のワークステーションJDE.INIファイルの修正 - ページ \[279\]](#)

- ・ [DB2 UDBデータベースのカatalog化 - ページ \[281\]](#)
- ・ [オンライン・モードによるリリース8.9のインストール - ページ \[281\]](#)
- ・ [自動モードによるリリース8.9のインストール - ページ \[286\]](#)

はじめる前に

- ・ 新バージョンをインストールする前に、各ワークステーション上でOneWorldの旧バージョンのインストールを削除します。OneWorldインストールを削除する方法については、「ソフトウェアのインストール削除」を参照してください。
- ・ 開発に使用するワークステーションにリリース8.9をインストールする前に、Microsoft Visual C++ Compilerバージョン6.0をインストールします。詳しくは、該当するMicrosoftのマニュアルを参照してください。
- ・ デプロイメント、エンタープライズおよびクライアント・ワークステーション名は、15文字以内で指定する必要があります。

注意

リリース8.9は、完全な管理者権限がなくてもワークステーションにインストールできます。ただし、ディスクとレジストリに書き込むためには該当する権限が必要です。これらの権限がない場合は、インストール中に警告メッセージが表示されます。その場合は管理者に連絡して、代わりにインストールを実行するかディスクおよびレジストリへの正しいアクセス権を与えるように依頼します。ディスクとレジストリへのアクセス権の許可については、「Windows NTのディスクとレジストリへのアクセス権の許可」を参照してください。

ワークステーションへのインストールの理解

ワークステーション用のインストール・プログラムにより、必要なリリース8.9コンポーネントがすべてワークステーションにコピーされます。インストール時にはインストール・プログラムによって十分なディスク容量の有無が検証され、不足している場合は、進行する前に容量を確保するよう求めるプロンプトが表示されます。

リリース8.9のインストール方法

リリース8.9を配布してワークステーション用のインストール・プログラムを起動するには各種の方法がありますが、次の方法から1つ選んでください。

- ・ オンライン・モード
- ・ 自動モード
- ・ プッシュ・インストール

このセクションでは、ワークステーションへのインストール・モードのうち、オンライン・モードと自動モードについて説明します。特に自動モードを使用する必要がない場合は、オンライン・モードを使用してください。自動モードを使用すると、Microsoft Internet ExplorerやAdobe Acrobat Readerは検出または更新さ

れません。オンライン・モードでは、最新バージョンがインストールされているかどうかを検出されます。

自動インストール・モードでは、〈Workstation Installation (ワークステーション・インストール)〉フォームに入力しなくても、コマンド行引数としてインストール・パスを指定できます。この結果、自動インストールは、コマンド行からまたはインストール済みの任意のスケジューラ・サービス (Windows NT または Windows 2000 のスケジューラ など) を通じて実行します。

プッシュ・インストール・プロセスでは、管理者は指定した日時に基づいて〈Workstation Installation〉プログラムの自動起動スケジュールを設定できます。このプログラムは対話型ではありません。

参照 プッシュ・インストール・オプションとワークステーションのListenerプログラムについては、『パッケージ管理』ガイドの「プッシュ・インストールの使用」

サードパーティ製品

ワークステーション用のインストール・プログラムでは、ワークステーション上でMicrosoft Internet ExplorerとAdobe Acrobat Readerの最新バージョンが検出され、バージョンに応じてリリース8.9のインストール・プロセス中にこれらのアプリケーションの更新を求めるプロンプトが表示されます。Microsoft Internet Explorerの使用は、任意です。レポートをオンラインで表示できるように、Adobe Acrobat Readerを使用することをお勧めします。

Microsoft Internet Explorerでは、次の機能を提供しています。

- ・ リリース8.9 Explorer上でWebに似たメニューを表示するための機能
- ・ リリース8.9 Explorerインターフェイスからインターネット接続を直接行うための機能

MSDEのインストールに関する考慮事項

MSDEはMicrosoft Accessに代わるものであり、リリース8.9ワークステーションには必須です。まだインストールしていない場合は、インストール・プロセス中にインストールされます。Microsoft AccessデータベースであるJDELocalは、MSDEデータベースJDE_Localに置き換えられます。

SQL Server 2000 Client ToolsまたはEnterprise Managerがインストールされている場合は、Microsoftで既に判明している問題が原因でMSDEをインストールできません。この障害は、MSDEコンポーネントがSQL Server 2000データベースと同じDLLを使用していることによるものです。この障害を回避するには、次の手順で操作します。

1. マシン上で次のファイルを検索します。

- ・ Semnt.rll
- ・ Sqlsvc.rll
- ・ Semnt.dll
- ・ Sqlsvc.dll
- ・ Sqlresld.dll

2. これらのファイルの拡張子.rllおよび.dllを、それぞれ.rldおよび.dldに変更します。
3. ワークステーションのインストールを続行します。
4. ワークステーションのインストール完了後に、拡張子.rldおよび.dldをそれぞれ.rllおよび.dllに戻します。

ユーザー・プロファイルと言語に関する考慮事項

注意

リリース8.9では、ユーザー・プロファイルによるワークステーション構成と環境割当てのためのグループ優先情報機能をサポートしています。

ユーザー・プロファイルとグループ・プロファイルには、事前ロード済みのユーザーを使用してインストール・プロセスを実行することをお勧めします。システム管理者は、ユーザーがリリース8.9にログオンできるように、ユーザー・プロファイルを作成する必要があります。

すべてのユーザーには、ユーザー・プロファイルで使用言語コードが割り当てられます。該当するフォームやレポートをどの言語で表示するかは、[language preference code(使用言語コード)]フィールドで指定します。ユーザーとグループは、各グループの編成方法や各グループに割り当ての優先情報を確定するときに設定できます。

言語に合わせてJDE.INIファイルが自動的に更新されます。複数言語を使用する場合は、インストールする使用言語に合わせて、サーバーとワークステーションの両方のJDE.INIファイルを修正する必要があります。

既存のユーザー・プロファイル構成は、アップグレード・プロセスの完了後にセットアップします。これらのユーザーに必要なに応じて新環境を追加してください。

参照 グループ・プロファイルの設定と使用、およびユーザー表示設定の定義については、『システム・アドミニストレーション』ガイド

デプロイメント・サーバー上のワークステーションJDE.INIファイルの修正

複数のクライアント・ワークステーションのJDE.INIファイルの管理と保守が簡単になるように、すべてのJDE.INIファイルはデプロイメント・サーバーに保管されています。ワークステーションのJDE.INIファイルの変更が必要になった場合は、デプロイメント・サーバー上でオリジナルのファイルを変更します。次に、そのファイルをデプロイメント・サーバーからそれぞれのワークステーションにコピーします。

ここでは、ワークステーションにリリース8.9をインストールする前に、そのJDE.INIファイルに対して行う変更について説明します。

ダブルバイト言語を使用している場合は、デプロイメント・サーバー上のODBCDataSource.infで、すべてのODBCデータ・ソースに対して次の値を追加してください。

```
DBCSNoTruncErr=1
```

ワークステーション上のODBCデータ・ソースにこのレジストリ値が設定されていないと、一部のレコード

がテーブルに挿入されず、「Insert Record Failed(レコードを挿入できません)」というエラーが表示されま
す。

▶ デプロイメント・サーバー上でワークステーションのJDE.INIファイルを修正するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDEとしてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

並行リリースに関する考慮事項
リリース8.9を他のバージョンのOneWorldと並行して実行する場合は、JDE.INIファイル内のポート番号が、そのバージョンから参照されるものと異なるポート番号を参照しているかどうかを確認してください。

次の手順に従って、デプロイメント・サーバー上で、¥PeopleSoft¥b9¥OneWorld Client Install¥Miscディレ
クトリのJDE.INIファイルの設定を次のように修正します。

1. ワークステーションのJDE.INIファイルを開いて、次の設定を修正します。

注意

言語をインストールする場合は、使用言語がフォームの表示と印刷に使用されるように、ワーク
ステーションが正しく設定されていることを確認してください。複数言語をインストールする場
合は、該当するJDE.INI値が使用言語に設定されているかどうかを確認します。値については「言
語プロセスの概要」を参照してください。

- ・ [INTERACTIVE RUNTIME]

インストールする言語について、次のように入力します。

Initial_Language_Code = x

x はインストールする言語を表す値、または、複数の言語をインストールする場合は使用言語を表
す値です。

- ・ [INSTALL]

LocalCodeSet値とコード・ページが該当する値に設定されているかどうかを確認します。読み込ま
れるJDE.INI設定が、インストール言語となります。

- ・ [JDENET]

ServiceNameListenとServiceNameConnectに指定されているポート番号が、エンタープライズ・サー
バーのJDE.INIファイルのポート番号と一致するかどうかを確認します。

レプリケートされるデータに関する考慮事項
[REPLICATION]セクションでForcedSyncの値を0から1に変更すると、レプリケートされるデータの同期を取り直すことができます。ワークステーションへのインストール時には、データの同期を取り直す必要はありません。

2. ファイルを保存して終了します。

DB2 UDBデータベースのカタログ化

ワークステーション上で、catalog_db.batを実行するか、DB2 Client Configuration Assistantを使用します。

1. Windowsで、[スタート]メニューから[プログラム] - [IBM DB2] - [Client Configuration Assistant]の順にクリックします。
2. [Add Database(データベースの追加)]画面が表示される場合は、それを閉じます。
3. 画面最下部の[Import(インポート)]をクリックします。
4. デプロイメント・サーバー上の¥PeopleSoft¥b9ディレクトリを参照します。
5. ¥Client ディレクトリにあるoneworld.spfファイルを開きます。
6. [Import Profile(プロファイルのインポート)]ウィンドウで [All(すべて)]を選択します。
7. [OK]をクリックします。
8. [Client Configuration Assistant]で[Close]をクリックします。

オンライン・モードによるリリース8.9のインストール

リリース8.9のインストール・プロセスでは、Adobe Acrobat Readerの最新バージョンがまだインストールされていない場合は、インストールされます。このプロセスでは、最初にAcrobatをインストールするかどうかを確認するプロンプトが表示されます。インストールする場合は、先に進む前にAcrobat Readerの旧バージョンのインストールを削除します。時間を短縮するために、このインストール削除はインストール・プロセスを開始する前に行ってください。

参照 InstallManagerツールと編集および構成オプションについては『システム・アドミニストレーション』ガイド

▶ リリース8.9をオンライン・モードでインストールするには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	ワークステーション上で、管理権限を持つユーザーとしてログオンします。
前提条件	他のプログラムがアクティブになっていないことを確認します。該当するハードウェア要件とソフトウェア要件を満たしていることを確認します。

同時に行うタスク	なし
----------	----

他のすべてのアプリケーションを終了します。他のアプリケーションが実行されていると、インストール・プロセスが正常に実行されないことがあります。

リリース8.9をワークステーションにインストールするには、デスクトップのショートカットと共有ドライブという2つの方法があります。ステップ1または2を選択してください。

1. デスクトップのショートカットを使用する場合：

システム管理者は、デプロイメント・サーバー上の¥PeopleSoft¥b9¥OneWorld Client InstallディレクトリからInstallManager.exeのショートカットを作成し、そのショートカットをワークステーションに配布できます。ショートカットが正常に機能するかどうかを確認するために、[Start in:(リンク先)]フィールドにinstallmanager.iniファイルのロケーションが設定されているかどうかを確認します。

- a. [Start in:]フィールドを編集するには、Windows Explorerまたはデスクトップ上でショートカットを選択して右クリックします。
- b. [プロパティ]を選択して[ショートカット]タブをクリックします。
- c. InstallManagerのショートカットをダブルクリックし、〈PeopleSoft Installation Manager (PeopleSoftインストール・マネージャ)〉を起動します。
- d. 次の「[ステップ 3 \[283\]](#)」に進みます。

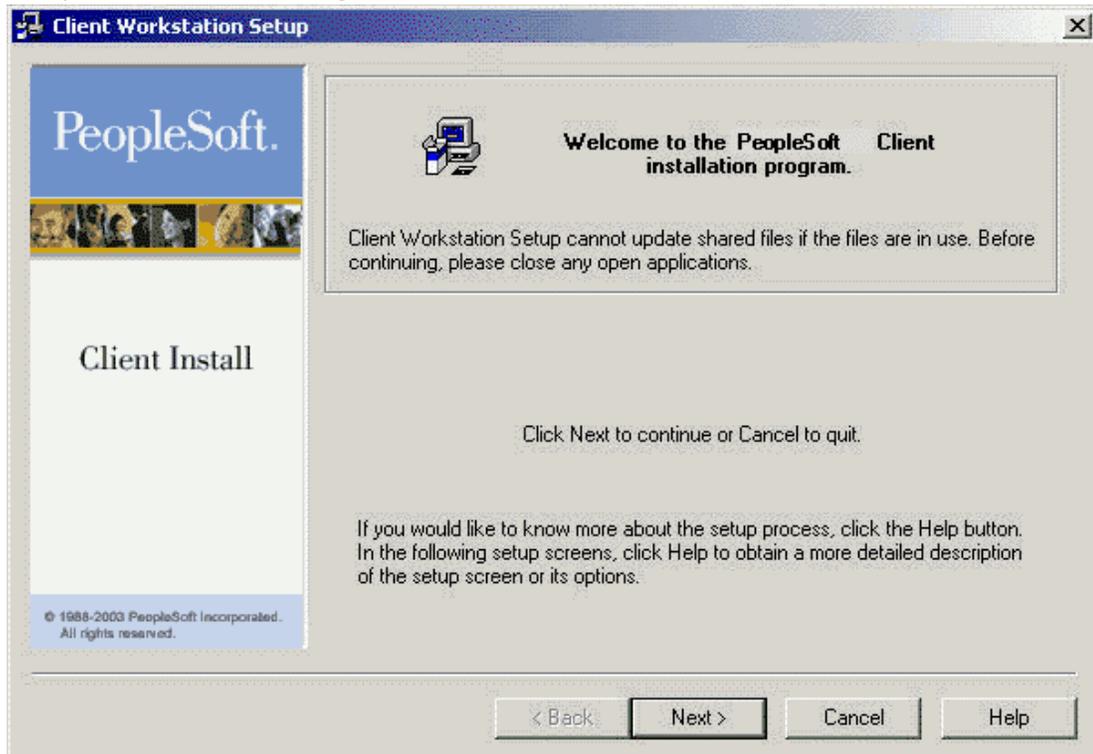
2. 共有ドライブを使用する場合：

インストール担当者は、デプロイメント・サーバー上の¥PeopleSoft¥b9共有ドライブにWindows Explorerから接続できます。

- ・ InstallManager.exeをダブルクリックし、〈PeopleSoft Installation Manager〉を起動します。
InstallManager.exeファイルは、Solution Modeler Client Installフォルダにあります。



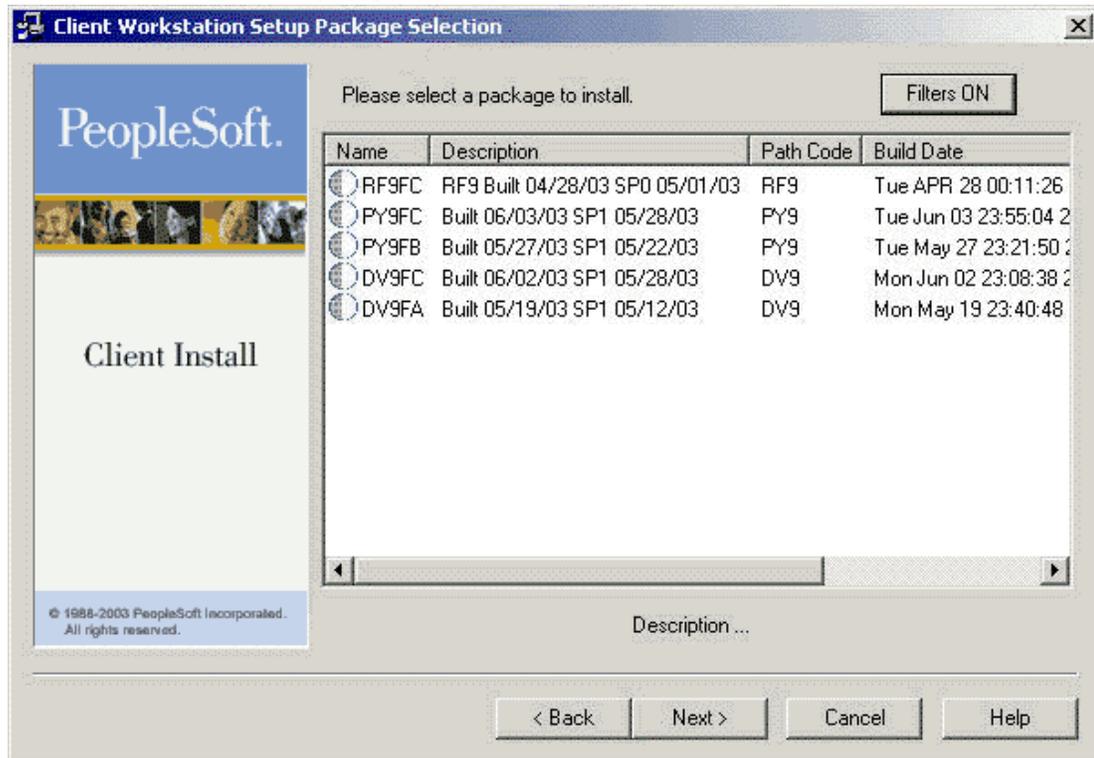
3. 〈PeopleSoft Installation Manager〉で、[Workstation Install]をクリックします。



4. 〈Client Workstation Setup (クライアント・ワークステーションのセットアップ)〉で[Next (次へ)]をクリックします。

Microsoft Internet Explorer、MSDE、またはAdobe Acrobat Readerの最新バージョンがインストールされていない場合は、〈Release 8.9 Client Workstation Setup Third Party Application (リリース8.9クライアント・ワークステーションのサードパーティ・アプリケーションのセットアップ)〉フォームが表示されます。Internet ExplorerとAcrobat Readerをインストールするオプションが有効になっています。これらのアプリケーションをインストールするには、[Next]をクリックします。この時点でインストールしない場合は、該当する一方または両方のオプションを無効にして[Next]をクリックします。

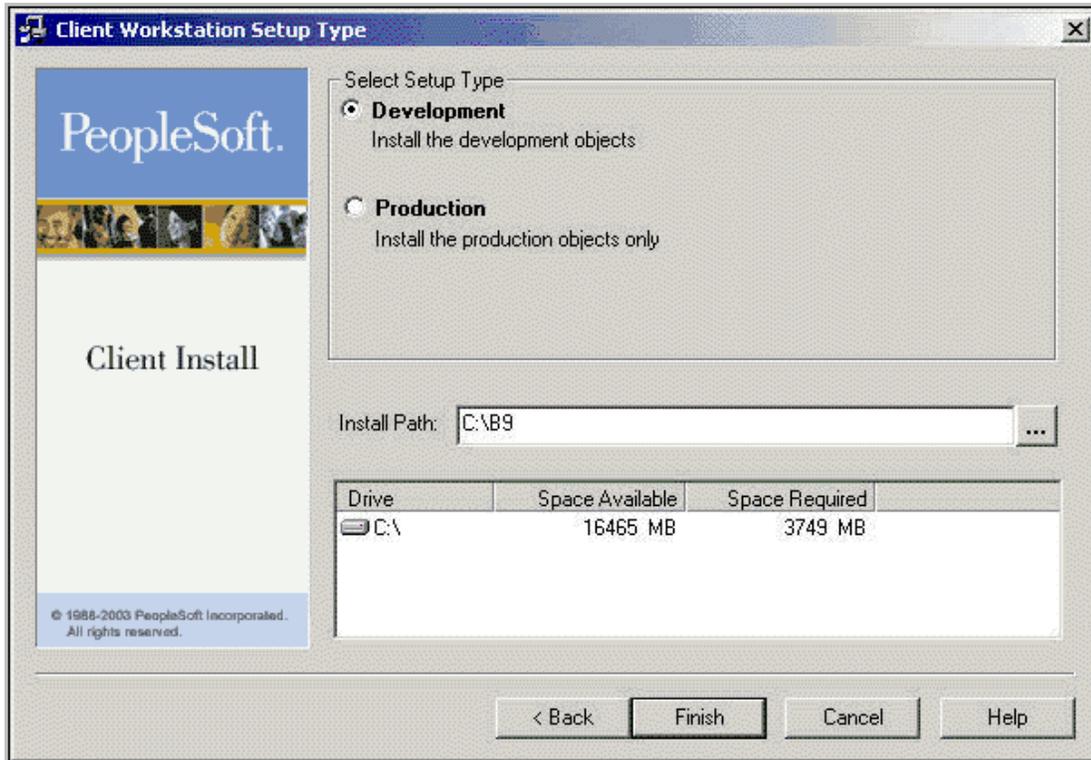
最新バージョンが既にインストールされている場合は、〈Third Party Application (サードパーティ・アプリケーション)〉フォームは表示されません。



5. 〈Client Workstation Setup Package Selection (クライアント・ワークステーションのセットアップ・パッケージの選択)〉で、インストールするパッケージを選んで[Next]をクリックします。

ヒント

[Filters ON (フィルタON)] ボタンをクリックすると、表示されるパッケージのリストを限定できます。これにより、必要なパッケージを見つけやすくなります。パッケージ・リストの下には、簡単な記述が表示されます。



6. <Client Workstation Setup Type(クライアント・ワークステーションのセットアップ・タイプ)>で、[Select Setup Type(セットアップ・タイプの選択)]オプションから[Development(開発)]または[Production(本稼働用)]オブジェクトを選択します。

[Development]オプションは、リリース8.9アプリケーションを開発しようとしている場合にのみ選択してください。
7. パッケージのインストール先ドライブを選択するには、[Install Path(インストール・パス)]フィールドの横のボタンをクリックします。

リリース8.9のインストール先ドライブは変更できますが、ディレクトリ・パスは常に¥b9です。
8. パッケージをインストールするには、[Finish]をクリックします。

一連のフォームを通じてインストール・プロセスの状況が表示されます。

次に、インストールの正常終了を示す<Congratulations(完了)>フォームが表示されます。[スタート]メニューの[プログラム]フォルダとデスクトップ上に、リリース8.9のショートカットが作成されます。
9. 再起動するようプロンプトが表示された場合は再起動します。

注意

リリース8.9のインストール・プロセスでは、複数のシステムDLLファイルが最新かどうかを検証されます。最新でない場合は、システムを再起動するようメッセージが表示されます。再起動すると、WindowsディレクトリでDLLファイルが更新されます。

注意

ファット・クライアントのインストール後またはリリース8.9へのアップグレード後は、初めてリリース8.9にアクセスするときにセキュリティ違反画面が表示される場合があります。[Get Authorization(権限の取得)]を選択してローカル・ライセンスを取得し、[OK]をクリックしてください。

自動モードによるリリース8.9のインストール

リリース8.9は、自動モードでワークステーションにインストールすることもできますが、これは任意です。デプロイメント・サーバー上の¥PeopleSoft¥b9共有ドライブに接続されているかどうかを確認してください。

注意

自動インストールでは、Microsoft Internet ExplorerまたはAdobe Acrobat Readerの最新バージョンのインストールを確認するプロンプトは表示されません。インストールするには、デプロイメント・サーバーの¥PeopleSoft¥b9¥OneWorld Client Install¥THIRDPARTYディレクトリに接続し、ie4setup.exe (Microsoft Internet Explorerの場合)またはar40eng.exe (Adobe Acrobat Readerの場合)を実行する必要があります。

▶ リリース8.9を自動モードでインストールするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ワークステーションから、Windows Explorerを開いて、デプロイメント・サーバー上の¥PeopleSoft¥b9¥OneWorld Client Install共有ドライブに接続します。
前提条件	Microsoft Internet ExplorerとAdobe Acrobat Readerの正しい日本語バージョンがインストールされていることを確認します。他に実行中のプログラムがないことを確認します。
同時に行うタスク	なし

1. [スタート]メニューから[ファイル名を指定して実行]を選択します。
2. [参照]をクリックします。
3. デプロイメント・サーバーの¥PeopleSoft¥b9¥OneWorld Client Installディレクトリを検索し、SETUP.EXEを選んで[開く]をクリックします。
4. [ファイル名を指定して実行]ボックスで、次の構文に従ってコマンド行でsetup.exeに必要なパラメータを追加します。

```
setup.exe -S -P packagename -D installpath
```

packagenameは有効なパッケージ名で、installpathはリリース8.9のインストール先となるワークステーション上のインストール・パス(c:¥b9など)です。

また、次のオプション・パラメータを指定することもできます。

- ・ `-t Typical`

開発オブジェクトをインストールします。

- ・ `-t Compact`

開発オブジェクトをインストールしません。

- ・ `-r`

インストール処理を続行する前に前回のインストールを削除します。インストール削除の結果は、`c:\%jdeinst.log`に表示されます。

注意

指定したインストール・パスが存在する場合は、ディレクトリ構造の内容が上書きされます。

5. コマンド行を実行するには、[OK]をクリックします。
自動インストール時には、Windowsのタスクバーに[EnterpriseOne 8.9 Client Installation]と表示されます。
6. `c:\%jdeinst.log`ファイルを参照して、正常にインストールされたかどうかを確認します。

注意

ファット・クライアントのインストール後またはリリース8.9へのアップグレード後は、初めてリリース8.9にアクセスするときにセキュリティ違反画面が表示される場合があります。[Get Authorization]を選択してローカル・ライセンスを取得し、[OK]をクリックしてください。

アップグレード後の処理

ここでは、旧リリースからのアップグレード時に、アップグレード・プロセスを完了するために必要な手作業によるテーブル変換について説明します。

ポスト・インストール

次の表は、旧リリースのデータを正常に使用するために実行する必要があるポスト・インストールUBEを示しています。これらの変換は、アップグレードする環境のクライアント・ワークステーションから実行してください。SQL Server、Oracle、またはUDBに対して実行する場合に、ポスト・インストール・ジョブとして一時テーブルを作成するテーブル変換が含まれているときには、データ・ソース所有者としてサインオンします。

▶ ポスト・インストール・タスクの実行

自動テーブル変換が正常終了した後に、次のポスト・インストールUBEを実行します。

参照 次のUBEの追加情報、注意、および検証手順については『Programmer's Guide(プログラマ・ガイド)』および『データベース・チェンジ』ガイド『Programmer's Guide』は、Knowledge Gardenの[Product] - [Documentation] - [J.D. Edwards 5] - [ERP Reference Guide]に用意されています。『データベース・チェンジ』ガイドは、Knowledge Gardenの[Product] - [Documentation] - [J.D. Edwards 5] - [Guides] - [ERP/SCE 9.0]に用意されています。

・ 上記の〈Post Install Menu(ポスト・インストール・メニュー)〉(GH9619)から、次のUBEを実行します。

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
R080101	既存の応募者、加入者、または従業員レコードを含む旧リリースからのアップグレード時。	なし。	F0101とF060116、F08401およびF08901の間でALPHフィールドとSSNフィールドを確実に同期化するために、このジョブを実行する必要があります。	人事管理スイートで使用される多数のテーブルに、ALPHおよびSSNフィールドがあります。住所録テーブルにもこの2つのフィールドがあります。データベース全体で重複データの一貫性を保つために、F0101のフラグ(AT3)がYに設定されます。Yは、変更内容をこれらのテーブルに反映させる必要があることを示します。旧リリースでの同期化は検索タイプのみに基づいており、ユーザーが自由に定義できる検索タイプはハード・コード化には適さないため、この方法で同期化を行うことができます。このUBEは

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
				F0101の既存レコードを使用し、対応するレコードが3つのテーブル(F060116、F08491およびF08901)のいずれかにある場合はAT3フラグをYに更新します。ALPHまたはSSNが同期していない場合は、F0101の値が対応するテーブルに対して更新されます。
R8903B11P1	旧リリースからリリース8.9リリースへのアップグレード時には、このジョブを実行する必要があります。	このジョブは、リリース8.9用の自動アップグレード・プランで売掛金明細が正常にアップグレードされた後に実行します。このポスト・インストール・ジョブの実行前に、基本の売掛金元帳テーブル(F03B11)の変換が正常終了している必要があります。アップグレード開始時からこのジョブが正常終了するまでは、請求処理と売上更新処理を行わないでください。	このジョブを実行しないと、請求処理で売掛管理システムの重要な機能が正しく動作しません。	リリース8.9では、売掛金元帳テーブル(F03B11)に12の新規フィールドが導入されています。〈Table Conversion Scheduler(テーブル変換スケジューラ)〉アプリケーション(P98430)で実行する標準的なテーブル変換では、この新規フィールドがすべてデフォルト値またはブランクに初期化されます。テーブル変換ツールでは、制限事項によりF03B11の一部の新規フィールドの値を計算できません。このポスト・インストール変換により、R8903B11が補足されます。
R9500165	アプリケーションで参照するときにカスタマイズした辞書用語解説を表示できない場合に実行します。	テーブル変換プロセスの後に実行します。ほとんどの場合、このUBEを実行する必要はありません。カスタマイズしたデータ辞書用語解説をチェックしてください。表示されないように見える場合は、このUBEを適宜実行するようにスケジュールします。データが消失しているわけではありません。UBEを実行すると、用語解説が表示されるようになります。この処理には数時間かかります。	用語解説項目が欠落している場合は、再実行してください(ほとんどは韓国語や日本語の用語解説項目で発生します)。	

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
R890411P1	買掛管理モジュール(システム04)を実行している場合にのみ、旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	このジョブは、リリース8.9用の自動アップグレード・プランで買掛金明細が正常にアップグレードされた後に実行します。アップグレード開始時からこのジョブが正常終了するまでは、伝票処理と伝票突合せ処理を行わないでください。	このジョブを実行しないと、請求処理で買掛管理システムの重要な機能が正しく動作しません。	リリース8.9では、買掛金元帳テーブル(F0411)に新規フィールドが追加されています。このジョブでは、国内通貨配賦金額(ATAD)、外貨配賦金額(CTAD)、国内通貨回収不能税額(NRTA)、外貨還付不可税額(FNRT)および会社基本通貨コード(BCRC)が更新されます。購買オーダー番号(RPPO)は、左にゼロがパディングされます。
R8908601C	B73.3.2またはXeからリリース8.9へのアップグレード時。	このジョブの処理オプションは、ソース環境からの健康/安全管理情報の入力にWorldSoftwareのみを使用したかどうかに基づいて設定する必要があります。処理オプション値“1”はWorldSoftwareが使用されことを示します。“0”またはブランクは、WorldSoftwareが情報入力専用で使用されておらず、健康/安全管理情報の入力にOneWorld/ERPアプリケーションが使用された可能性があることを示します。	このテーブル変換では、次のシナリオがチェックされて処理されます。 1. 処理オプションが“1”に設定されている場合(Yes - 健康/安全管理情報の入力にWorldSoftwareのみを使用) 2. 処理オプションが“0”またはブランクに設定されている場合(No - 健康/安全管理情報の入力にWorldSoftware以外も使用)	リリース8.9では、労働災害マスター(F08601)に[Country(国)](CTR)カラムと[Incident Occurred on Employer's Premises(社内で発生した事故)](ONPRM)カラムが追加されています。
R890015B	間接為替レートが設定されていた旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	このプログラムを実行する前に、<F0015/F00151 Exchange Rate(F0015/F00151為替レート)>テーブル変換プログラム(R890015A)を正常終了し、リリース8.9の自動アップグレード・プランで為替レート・テーブル(F0015)を正常にアップグレードする必要があります。アップグレード	このジョブを実行しないと、間接為替レートの値が0(ゼロ)になります。	<F0015/F00151 Exchange Rate>テーブル変換プログラム(R890015A)の実行後は、間接為替レート・レコードでレートがブランクまたは0(ゼロ)に設定されます。これにより、計算方法に間接為替レート(CLMETH=3)が設定されている変換後のF0015からレコードが選択されます。乗数レート(CRR)と除数レート(CRRD)の両方について、間接為替レ

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
		<p>開始時からこのジョブを正常終了するまでは、為替レートが必要な処理を行わないでください。次のオブジェクトが必要です。</p> <p>F0015</p> <p>R890015B</p> <p>R890015B/XJDE0001</p>		ト・レコードのレートがF0015テーブル内の対応するレートから取り込まれ、間接為替レート・レコードに対して更新されません。
R894801P	カスタマー・サービス/保証または設備保全管理を介して構成品の処理、シリアル管理構成品の処理、またはオーダーの生成を行う場合。	<p>このレポートには2つの処理オプションがあります。</p> <p>Convert URCD (URCDの変換)</p> <p>Convert PARS (PARSの変換)</p> <p>カスタマーがシリアル管理構成品を使用していない場合や構成品を処理していない場合は、この2つの処理オプションを空白に設定する必要があります。</p>	このレポートを実行して、F4817テーブルのレコードをF4801Tテーブルに連結し、SRCNフィールドを設定し、構成済み作業オーダーの親番号を構成品の組立てに含まれる1つ上位の関連作業オーダーにリセットする必要があります。	このレポートでは、F4810TおよびF4817テーブルが連結され、F4801Tに新規のシリアル管理構成品フィールドが正しく設定され、構成品作業オーダー用の親作業オーダー番号が再割当てされます。
R8948164A	古いKnowledge Baseメディア・オブジェクト・レコードがあり、旧リリースからリリース8.9にアップグレードする場合。	メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)とF48164テーブルのテーブル変換を正常終了する必要があります。	古いKnowledge Baseメディア・オブジェクトを正しく変換するために実行します。このジョブを実行しないと、その情報は新しい<Failure Analysis (問題分析)>アプリケーションで使用できなくなります。	リリース8.9では、<Failure Analysis>のメディア・オブジェクト構造が変更されています。リリース8.9より前のリリースでは、メディア・オブジェクトは1つの構造体に格納されていました。リリース8.9では、メディア・オブジェクト構造が3つに分割されています。
R8930006D	作業場マスター(F30006)を使用していてXeからリリース8.9にアップグレードする場合。	R8930006Cを正常終了する必要があります。	アプリケーションP3003とP3112では、使用中の作業場と事業所が検証されるため、リリース8.9では作業場の事業所フィールドに空白値を設定できません。	リリース8.9では、作業場事業所の概念をサポートするために、作業場マスター(F30006)のプライマリ・キーがWork Center (MCU)からBranch/Plant (MMCU)とWork Centerに変更されています。R8930006Cは、作業工程

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
				<p>マスター(F3003)で見つかったレコードに基づいて、各作業場それぞれの事業所に配置する処理を受け持ちます。ただし、F3003で作業場が使用されていない場合、F30006テーブルでは事業所フィールドがブランクのままになります。</p> <p>R8930006Dは、これらの作業場にデフォルトの事業所値を割り当て、事業所がブランクになっているレコードをすべて選択し、このフィールドに処理オプションで指定されているデフォルトの事業所を設定します。</p>
R3365	能力所要量計画での作業中に旧リリースからリリース8.9にアップグレードする場合。	<p>バッチ・アプリケーションR3365を実行して能力資源プロファイル・テーブル(F3303)を自動入力します。</p> <p>F4101、F4102、F3002、F3003、F30006、F3007、F0007の各テーブルが変換されているか、既存データであるかを確認してください。リリース8.9では、予測テーブル(F3460)に変更はないため、このテーブルのデータを使用できます。</p>	能力資源プロファイル・テーブル(F3303)を自動入力します。	<p>リリース8.9では、能力資源プロファイル・テーブル(F3303)に新規フィールドが導入されています。変換ロジックが複雑であり、バッチ・アプリケーションを実行する既存のソリューションで資源プロファイルが作成されるため、このテーブル用のテーブル変換は作成されていません。</p>
R3380	資源所要量計画での作業中に旧リリースからリリース8.9にアップグレードする場合。	<p>バッチ・アプリケーションR3380を実行してF3311、F3312、F3313を自動入力します。F4101、F4102、F3002、F3003、F30006、F3007、F0007、F3411、F33133の各テーブルが変換されているか、既存データであるかを確認してください。リリース8.9では、予測テーブル</p>	能力メッセージ・テーブル(F3311)、能力ペギング・テーブル(F3312)、能力負荷テーブル(F3313)を自動入力します。	<p>リリース8.9では、この3つのテーブルに新規フィールドが導入されています。変換ロジックが複雑であり、バッチ・アプリケーションを実行する既存のソリューションでこの3つのテーブルが作成されるため、これらのテーブルに対するテーブル変換は作成されていません。既存のバッチ・アプリケーションはR3380またはR3382です。資源所要量</p>

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
		(F3460)に変更はないため、このテーブルのデータを使用できます。		計画(RRP)とラフカット能力計画/能力所要量計画(RCCP/CRP)のどちらを使用しているかに応じて、〈Resource Requirements Planning〉(R3380)または〈Rough Cut Capacity Planning/Capacity Requirements Planning〉(R3382)を選択する必要があります。
R3382	ラフカット能力計画/能力所要量計画での作業中に旧リリースからリリース8.9にアップグレードする場合。	バッチ・アプリケーションR3382を実行してF3311、F3312、F3313を自動入力します。F4101、F4102、F3002、F3003、F3006、F3007、F0007、F3411、F33133の各テーブルが変換されているか、既存データであるかを確認してください。リリース8.9では、予測テーブル(F3460)に変更はないため、このテーブルのデータを使用できます。	能力メッセージ・テーブル(F3311)、能力ペギング・テーブル(F3312)、能力負荷テーブル(F3313)を自動入力します。	リリース8.9では、この3つのテーブルに新規フィールドが導入されています。変換ロジックが複雑であり、バッチ・アプリケーションを実行する既存のソリューションでこの3つのテーブルが作成されるため、これらのテーブルに対するテーブル変換は作成されていません。既存のバッチ・アプリケーションはR3380またはR3382です。資源所要量計画(RRP)とラフカット能力計画/能力所要量計画(RCCP/CRP)のどちらを使用しているかに応じて、〈Resource Requirements Planning〉(R3380)または〈Rough Cut Capacity Planning/Capacity Requirements Planning〉(R3382)を選択する必要があります。
R890018TC	ユーザー予約番号を使用して出荷先住所情報を格納している場合。	[User Reserve(ユーザー予約)]フィールドには、空白または0(ゼロ)以外の値を自動入力する必要があります。	この変換プログラムでは、[User Reserve]フィールドに格納されているデータが[Ship To Address(出荷先住所)]フィールドに自動入力されます。	リリース8.9では、Intrastat改訂テーブル(F0018T)に[Ship To Address Number(出荷先住所番号)]フィールドが追加されています。この変換プログラムでは、[User Reserved Number(ユーザー予約番号)]フィールドに格納されている値が[Ship To Address Number]フィールドに自動入力されます。

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
R8903B571A	旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	リリース8.9用のテーブル・アップグレード・プランを正常終了する必要があります。このUBEが正常終了するまで、自動引落し処理を行わないでください。	自動引落し処理を正常に機能させるには、このジョブを実行する必要があります。	このレポートでは、固有キー・テーブル - 自動採番テーブル(F00022)のエントリが自動引落しバッチ制御テーブル(F03B571)用に追加または更新され、次の固有キーIDが次の自動引落しバッチ制御番号と等しくなるように設定されます。
R89060117A	このテーブル変換を含むUBEの使用後にこのジョブを実行していない場合は、旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	なし	ALRNフィールド(F060117)に格納されていた値をF060117Aの置換フィールドALRN15に転送します。	元のF060117テーブルには、外国人登録番号(ALRN)を格納するためのフィールドが含まれています。ただし、このフィールドは桁数が少ないため、このフィールドの許容値である承認番号を格納できません。元のテーブルのフィールドを置換するために、適切な長さのフィールド(ALRN15)を含むタグ・テーブル(F060117A)が作成されています。
R890912	旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	F0912、R890912およびR890912 XJDE0001は必須です。旧リリースのF0912に格納されていたデータが必須です。変換中は処理を行わないでください。	RJFROMおよびRJTHRUへのアクセスを必要とするプログラムとアプリケーションは、このデータが連結されていないと正常に実行されません。	WorldSoftwareの〈Recurring Journal Entry(定期仕訳入力)〉アプリケーション(P0912)では、主科目と補助科目のデータが別々のフィールドに格納されていました。リリース8.9では、主科目と補助科目の組合せがRJFROMとRJTHRUを使用して格納されます。テーブル変換により、RJFROMからのOBJFとFSBUおよびRJTHRUからのOBJTとSUBTが連結されます。これにより、フィールドを読み取って表示するたびに主科目と補助科目を結合することによるトラブルが防止されます。テーブル変換では、2つのフィールドの結合時に使用できるように、〈General Accounting Constants(一般会計固

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
				定情報))から勘定科目区切りが取り込まれます。
R891201A	設備レコードに対して作業オーダーを作成する必要がある場合は、旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	テーブル変換の完了後に実行します。	このフラグが有効になっていない設備レコードに対しては、作業オーダーを作成できません。	固定資産マスター(F1201)の作業オーダー許可フラグ(WOYN)を参照するためのロジックが追加されています。このフラグは、設備の各部に対する作業オーダーの入力を許可するかどうかを示します。リリース8.9まではWOYNはF1201にありましたが、作業オーダー作成ロジックでは参照されませんでした。
R7611B	ESU #4937298を使用していないXeからリリース8.9へのアップグレード時。	F7611Bテーブルを正しく自動入力する方法について、ブラジルのプロセスを明確に理解する必要があります。	このジョブを実行しないと、ICMS税状況コード(BSTT)に正しい値が設定されません。	これはデータ変換UBEであり、ICMS税状況コード(BSTT)フィールドがアルゴリズムに基づいて変換されます。
R897611B	前提条件であるR7611Bを実行したことがある場合の、Xeからリリース8.9へのアップグレード時。	F7611Bテーブルを正しく自動入力する方法について、ブラジルのプロセスを明確に理解する必要があります。	このジョブを実行しないと、ICMS税状況コード(BST1)に正しい値が設定されません。	テーブルF7611Bの新規のICMS税状況コード・フィールド(BST1)に、品目原産国(BORI)と古いICMS税状況コード(BSTT)の連結値を自動入力します。旧リリースではサイズ2でしたが、この新規BST1フィールドはサイズ3です。
F7611B	旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	なし	F7612Bに新規FCOフィールドを自動入力します。	[Company From(開始会社)]フィールド(F7601BのFCO)に基づいて、F7612Bに新規の[Company Form]フィールド(FCO)を自動入力します。
R8908350	F08350ファイルにデータがある状態での、Xe以前のリリースまたはWorldSoftwareからリリース8.9へのアップグレード時。	F08350ファイルにデータが格納されている必要があります。	〈Enrollment With Eligibility〉アプリケーション(P08334)を使用するには、このテーブルを自動入力する必要があります。	F08350Bタグ・テーブルにデータを自動入力します。F08350Bには、計画の優先順位を表す計画順序が含まれています。
R8908351	F08351ファイルにデータがある状態での、Xe以前のリリースまたは	F08351ファイル内のデータ。	〈Enrollment With Eligibility〉アプリケーション(P08334)を使	F083501タグ・テーブルにデータを自動入力します。F08351Bにはカテゴリ・

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
	WorldSoftwareからリリース8.9へのアップグレード時。		用するには、このテーブルを自動入力する必要があります。	タイプが含まれています。カテゴリ・タイプは、一括従業員フレックス・ポイントや従業員フレックス損金など、特別なフレックス計算プランを使用するDBAのカテゴリ識別コードです。
R98403A XJDE0001	全カスタマー。	すべてのテーブル変換の完了後に実行します。	このジョブを実行しないと、重要なデータが欠落しているためにエラーが発生します。たとえば、特定の勘定科目への書き込み時にエラーが生成される可能性があります。	CD上のデモ・データに含まれているデータを、カスタマーのデータベースにコピーします。
R8900165K	まだSAR 5848035を使用していないXe、またはB7332以前のリリースからアップグレードしたリリース8.9からのアップグレード時。このUBEが必須となるのは、伝票にメディア・オブジェクト添付機能を使用する場合のみです。	このジョブは、リリース8.9用の自動アップグレード・プランでメディア・オブジェクト・テーブル(F00165)が正常にアップグレードされた後に実行します。オブジェクトが必須です。GT0411Sキーを、COではなくKCOを使用するように変更します。	このジョブの実行後は、既存の伝票用メディア・オブジェクト添付機能に〈Voucher Entry (伝票入力)〉プログラム(P0411)と〈Speed Status Change (スピード状況変更)〉プログラム(P0411S)からアクセスできるようになります。	この変換プログラムでは、オブジェクト名(OBNM)がGT0411SのレコードがF00165から取り込まれ、汎用テキスト・キー(TXKY)がKCO DCT DOC SFXフォーマットで記述されていることが確認されます。レコードがTXKYフォーマットCO DCT DOC SFXで記述されている場合は、汎用テキスト・キー・フィールドがCOではなくKCOで置換され、キーの残りの部分が保持されます。
R8900165JA	メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)にJEDTLGTレコードがある場合の、旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。	このジョブは、リリース8.9用の自動アップグレード・プランでメディア・オブジェクト・テーブル(F00165)が正常にアップグレードされた後に実行します。オブジェクトが必須です。F00165によりJEDTLGTがGT0911Aに変換されます。	このジョブの実行後は、伝票勘定科目情報用のメディア・オブジェクト添付機能に、〈Voucher G/L Distribution (勘定科目情報)〉フォーム(P0411 W0411K)からアクセスできるようになります。	このプロセスでは、メディア・オブジェクト・テーブル(F00165)内のすべての伝票勘定科目情報添付レコードが、WorldSoftwareおよびOneWorldの売掛管理および総勘定元帳システムと共存できるように変換されます。伝票勘定科目情報レコードに入力された添付は、オブジェクト名(OBNM)にJEDTLGTを使用してF00165に書き込まれていました。これらのレコードの書き込み時には、代わりにオブジェ

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
				<p>クト名とGT0911Aを使用する必要があります。この変換では、F00165内でオブジェクト名(OBNM)がJEDTLGTのレコードごとに、オブジェクト名がGT0911Aに変更され、汎用テキスト・キー(TXKY)がGT0911Aの構造に合わせて修正されます。</p>
R9698711	<p>データベース・スキーマが現行のスペックと一致しているかどうかを検証します。</p>	<p>〈Batch Versions(バッチ・バージョン)〉からローカルに実行します。</p>	<p>実行対象のテーブルが1つだけでない限り、データ選択はそのままにしておきます。処理オプションは次のように設定してください。</p> <p>Environment(環境): PD9など、アップグレードする環境を入力します。</p> <p>Summary/Detail(集計/明細): 1(エラーがあるテーブルのみをリスト表示)</p> <p>Table Data Source(テーブル・データ・ソース): ブランクにします。</p> <p>Central Objects Data Source(セントラル・オブジェクト・データ・ソース): ブランクにします。</p>	
R8991300	<p>Xeより前のリリースからリリース8.9へのアップグレード時。</p>	<p>ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)を変換する前に、F91300を変換する必要があります。</p>		<p>この変換では、F91300が1行ずつ読み取られます。*Schedulerレコードを除き、F91300のSCHUSERに格納されているユーザーIDに基づいて、F0092からユーザー・グループがフェッチされます。これらのユーザー・グループは、SCHROLEに格納されます。</p>

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
R8991320	Xeより前のリリースからリリース8.9へのアップグレード時。	ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)を変換する前に、F91320を変換する必要があります。		この変換では、F91320が1行ずつ読み取られます。F91320のSCHUSERに格納されているユーザーIDに基づいて、F0092からユーザー・グループがフェッチされます。これらのユーザー・グループは、SCHROLEIに格納されます。
R89959212	このUBEは、ライブラリ・リスト・ユーザー・テーブル(F0092)とF00926(ロール記述)に、ユーザー定義コード(H95/RL)に設定されていたロールと記述を自動入力します。このUDCはフェーズIで使用されており、ここでは削除されます。	このテーブル変換は、R89959211の前に実行してください。	このUBEは、各ロールをユーザー定義コード(H95/RL)から取得します(ロールは、F0005テーブルのデータ項目カラムKYに格納されます)。このロールはF0092のUGRPフィールドに自動入力されます。また、F00926テーブルには、以前はF0005テーブルのDL01およびDL02カラムにあったロール記述も自動入力されます。この2つのカラムの値が連結されて、F00926テーブルのカラムROLEDESCに挿入されます。F0092フィールドへの挿入に成功すると、F0005Dテーブルがフェッチされ、ロール記述に考えられる言語記述がすべて取り込まれます。これらの記述もF00926テーブルに自動入力されます。F00926テーブル内の各国内言語レコードには、順序番号が含まれます。このUBEを実行すると、開始順序番号は500、増分は5となります。	
R89959211	このテーブル変換では、F0092テーブルのUGRPフィールドにある	このテーブル変換は、R89959211の前に実行してください。	このUBEは、F0092テーブルから各グループを取り込みます	

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
	<p>現行グループがすべて使用され、その記述レコードがF00926テーブルに追加されます。ロールはグループ名(OWTOOLなど)となり、記述が必要なので記述もグループ名となります。F00926レコードには順序番号が追加されます。この順序番号の場合、開始番号は1000で、書き込まれるレコードごとに増分5となります。</p>		<p>このロールはF00926テーブルのUSERフィールドに自動入力されます。また、F00926テーブルには、F0092テーブルからのグループ値でもあるロール記述が自動入力されます。この値は、F00926テーブルのカラムROLEDESCに挿入されます。F00926テーブル内の各国内言語レコードには、順序番号が含まれます。このUBEを実行すると、開始順序番号は1500、増分は5となります。</p>	
R8995921	<p>このテーブル変換では、F0092テーブルの現行のユーザー・プロファイル・レコードがすべて使用され、ユーザーID(F0092.USER)とグループ(F0092.UGRP)に基づいてユーザー/ロール・リレーションシップ・レコードが挿入されます。古いリレーションシップ・テーブル(F95921)に追加されるレコードには、ユーザー、ロール(F0092ではこのユーザーのグループ)、発効日と失効日が含まれます。これらの値の一部は、処理オプションでの値に基づきます。</p>	<p>F95921テーブルに挿入されるレコードの値は、投入時に処理オプションに挿入される値に基づきます。</p>	<p>このUBEは、F0092テーブルから各ユーザー・レコードを取り込みます。出力フィールド</p> <p>F95921.RLFRROLE - F0092.USERF95921.RLTOROLE - F0092.UGRPF95921.RLEFFDATE - PO EffectiveDateF95921.RLEXPDATE - PO ExpirationDateF95921.RLFUROLE1 - PO cIncludedInAllF95921.RLROLETYP</p> <p>“0”と監査情報が自動入力されます。F95921テーブルに、上記の情報が挿入されます。F0092テーブルには、レコードがユーザーごとに1つずつとなります。バージョンが最終モードの場合、F0092テーブルでは全ユーザーのF0092.UGRPフィールドが空白になります。</p>	
R98OWPU	このUBEでは、	なし	このUBEはBSFN	

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
	OneWorldセキュリティ・テーブル(F98OWSEC)でSELECT DISTINCTが実行され、プロキシ(システム)・ユーザーおよびデータ・ソースの固有の組合せがすべて検索されます。これらのレコードが見つかる、UBEはそれをOneWorldプロキシ・ユーザー・テーブル(F98OWPU)に挿入します。レコードには、監査情報と共にプロキシ・ユーザー、データ・ソースおよびパスワードが含まれます。		B98OWPUを呼び出します。BSFNは、F98OWSECでSELECT DISTINCTを実行して、プロキシ・ユーザーとデータ・ソースの固有の組合せを取り込みます。次に、プロキシ・ユーザー、データ・ソース、パスワードおよび監査情報をF98OWPUテーブルに挿入します。	
R8909E109	経費管理システムを使用している場合。	このジョブには次のオブジェクトが必須です。 F09E109 R8909E109 R8909E109 XJDE001	このジョブを実行しないと、経費管理システムが正しく動作しません。	リリース8.9では、F09E109テーブルにカラム(EV01)が追加されています。このフラグは、P09E109で補足の経費カテゴリを設定するときに、必須かどうかを指定するために使用されます。アプリケーションP20120では、このフラグが経費カテゴリに対して有効化されていない場合に、[Expense Detail Data Item(経費明細データ項目)]フィールドを必須フィールドにするために使用されます。
R891216	Xeからリリース8.9へのアップグレード時には、OneWorld XeにSAR 5685791を適用済みかどうか特に注意する必要があります。リリース8.9へのアップグレード前にXeにこのSARが適用されていれば、データはすでにSARの適用時に修正されているため、仕様データ・テーブル(F1216)のデータ変換は不要です。それ以外の場合は、F1216の	なし	この変換プログラムでは、OneWorld Xeを使用してF1216テーブルに入力された既存データが修正されます。修正されるのは、テーブルに正しく格納されていないデータのみです。F1216テーブルのデータは再フォーマットされ、マッピングが修正されます。	OneWorldの旧リリースからB9へのアップグレード時には、OneWorldから入力されたデータを修正するために、F1216テーブルのデータ変換が必要になる場合があります。これらの問題とOneWorld Xeのデータ変換については、Breaking Newsに公開されているメッセージも参照してください。

変換プログラム	ジョブを実行する場合	要件	目的	注意
	<p>データを訂正し、OneWorldから入力されたデータを修正する必要があります。</p> <p>WorldSoftwareからB9に移行する場合、WorldSoftwareから入力されたデータは正しいフォーマットになっているため、F1216テーブルのデータを変換する必要はありません。</p>			
R31P40039	<p>旧リリースからリリース8.9へのアップグレード時。</p>	<p>F4801/F4801Tを使用するすべてのプログラムでデータベース出力の前にオーダー・タイプを検証できるように、リリース8.9へのアップグレード直後にこのプログラムを実行する必要があります。</p> <p>R31P40039を実行して作業オーダーを変換する前に、ユーザー定義コード(00DT)のすべてのオーダー・タイプが<Document Type Revisions(伝票タイプの改訂)>プログラム(P40040)で設定されているかどうかを確認してください。</p>	<p>1つのオーダー・タイプ値にさまざまなタイプの作業オーダーが混在している場合は、F4801の作業オーダーを変換してレコードをオーダー・タイプ別に分離する必要があります。このジョブを実行しないと、F4801/F4801Tにデータを入力するプログラムはいずれも動作しません。たとえば、<Manufacturing Work Order Entry(製造作業オーダー入力)>、<Equipment Order Entry(設備オーダー入力)>、<Service Order Entry(サービスオーダー入力)>などです。</p>	<p>伝票タイプ・マスター・テーブルで、すべての作業オーダー・タイプを固有のものとして設定する必要があります。たとえば、オーダー・タイプWOは"02"(製造作業オーダー)として設定します。この設定は、<Document Type Revisions>プログラム(P40040)を使用して手作業で行う方法と、<F40039 Conversion from Xe to リリース8.9(Xeからリリース8.9へのF40039の変換)>プログラム(R31P40039)を実行する方法があります。多数のオーダー・タイプを設定する場合は、UBEを使用する方が効率的です。この情報は、次のステップに進む前に一度設定します。</p>

本稼働用環境のアップグレード

本稼働用環境のアップグレードは、他のすべての環境のアップグレードが完了した後に行います。ここでは、本稼働用環境を最短のダウンタイムでアップグレードする方法について説明します。

はじめる前に:

- ・ JD9とPY9に対するプランナ・アップデートとテーブル変換ESUの適用
- ・ サーバー用フル・パッケージのビルドとJD9およびPY9への配布
- ・ PY9でのすべてのカスタム修正のテスト

アップグレードの最初のフェーズでは、すべての修正内容とカスタマイズ内容がアップグレード環境に転送されます。次に、テーブル変換、スペック・テーブルのマージ、ビジネス・データ・テーブル変換およびコントロール・テーブル・マージを使用して、セントラル・オブジェクトを変換します。このアップグレードのテストを正常に完了すると、本稼働用環境の運用開始準備が完了したことになります。新規の本稼働用環境では、正常にマージされたセントラル・オブジェクト(すべての修正内容とカスタマイズ内容を含む)のみでなく、正常にマージされたコントロール・テーブルも利用できます。

本稼働用環境のアップグレードで変換されるのは、ビジネス・データのみです。共有データ、システム・データ、コントロール・テーブルなどは、すべて変換する必要があります。オブジェクトとバージョンは、PY9環境からコピーされます。後は、ビジネス・データ・テーブル変換をマージまたは変換処理として実行するだけで、本稼働用環境を正常に準備できます。ただし、PYからPDIにコントロール・テーブルをコピーしないように選択した場合は、〈Control Table Merge(コントロール・テーブル・マージ)〉を再実行する必要があります。

他にオブジェクト・スペック変更を必要とする場合には、「本稼働用環境の更新」の手順は実行できません。これが、アップグレードと本稼働用環境アップグレードの更新内容の違いです。

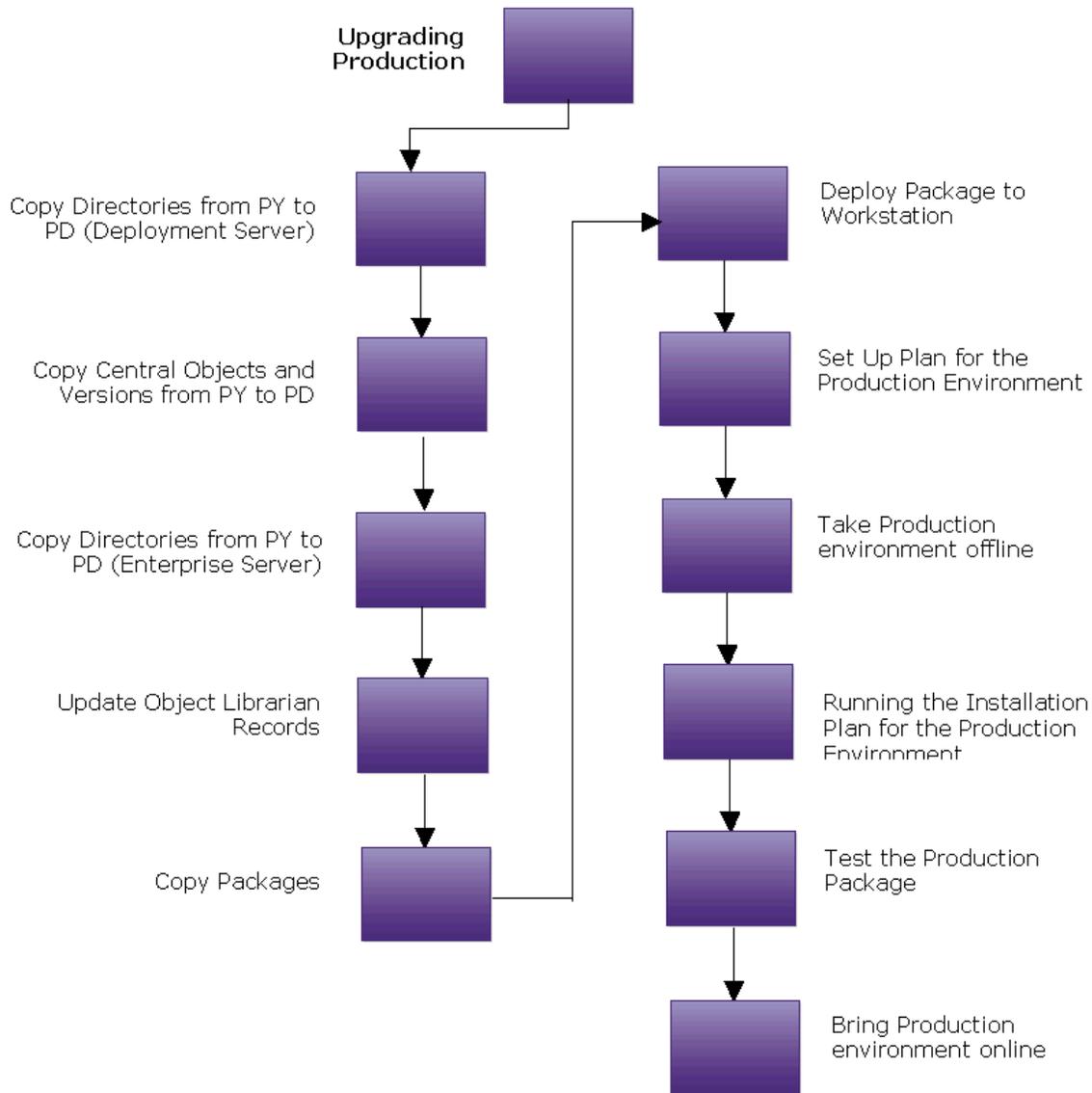
ここでは次の内容について説明します。

- ・ [全般的なチェックリストと考慮事項 - ページ \[304\]](#)
- ・ [PY9からPD9への全ディレクトリのコピー - ページ \[305\]](#)
- ・ [PY9からPD9へのセントラル・オブジェクトとバージョンのコピー - ページ \[306\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバー上でのPY9からPD9へのコピー - ページ \[308\]](#)
- ・ [プロトタイプからの本稼働用オブジェクト・ライブラリアン・レコードの更新 - ページ \[309\]](#)
- ・ [パッケージのコピー - ページ \[310\]](#)
- ・ [本稼働用パッケージの配布 - ページ \[311\]](#)
- ・ [本稼働用環境のアップグレード・プランのセットアップ - ページ \[311\]](#)
- ・ [本稼働用環境のオフライン化 - ページ \[313\]](#)

- ・ [本稼働用環境のインストール・プランの実行 - ページ \[313\]](#)
- ・ [本稼働用パッケージのテスト - ページ \[314\]](#)
- ・ [本稼働用環境のオンライン化 - ページ \[314\]](#)

次のフロー・チャートは、本稼働用環境のアップグレード・プロセスの概要を示しています。

Upgrading The Production Environment



全般的なチェックリストと考慮事項

- ・ サインオン・セキュリティ デプロイメント・サーバー上のリリース8.9の場合、ワークベンチの実行中はセキュリティ・サーバーを無効化する必要があります。ワークベンチの実行中にサインオン・セキュリ

ティを使用すると、セキュリティ上の問題を生じる場合があります。ユーザーJDE、パスワードJDEを使用してログオンするデータベースがないと、パスワードの問題を生じる場合があります。

- ・ プランに関する通常タスク 本稼働用環境のアップグレードの場合も更新の場合も、ワークベンチは通常タスクから始まります。追加タスクでは、次の6つのレポートが実行されます。ただし、これらのレポートは前回のアップグレード時に実行済みです。〈Media Object (Inplace) Unicode conversion(メディア・オブジェクト(インプレース)Unicode変換)〉は実行されます。デフォルトでは、データは上書きコピーされません。
 - ・ R98403|XJDE0051 - 〈Copy Security(セキュリティのコピー)〉
 - ・ R8900165 - 〈Media Object (Inplace) Unicode Conversion〉
 - ・ R8900165U - 〈Data Dictionary Media Object Unicode Conversion(データ辞書メディア・オブジェクトUnicode変換)〉
 - ・ R98403 - 〈Copy Data Dictionary Tables(データ辞書テーブルのコピー)〉
 - ・ R98403|XJDE00023 - 〈Copy System Tables(システム・テーブルのコピー)〉
 - ・ 〈Release Master(リリース・マスター)〉
- ・ 全ユーザーのログオフ 本稼働用環境をアップグレードするためのワークベンチ実行中は、ユーザー全員をログオフさせてください。本稼働用環境の稼働を停止します。

参照 本稼働用環境の更新については各ERPリファレンス・ガイド

PY9からPD9への全ディレクトリのコピー

パッケージ・ファイルやDLLファイルなどの各ファイルは、既にプロトタイプ環境でテストが完了しているため、プロトタイプ環境からコピーできます。コピーしておく、本稼働用環境のテスト・プロセス中に時間を節約できます。

▶ PY9からPD9に全ディレクトリをコピーするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上のプランナ環境にログオンします。
前提条件	ディスク容量を検証します。
同時に行うタスク	なし

デプロイメント・サーバー上のプランナ環境で、PY9パス・コードからPD9にすべてのディレクトリをコピーします。

1. 〈System Administration Tools(システム・アドミニストレーション・ツール)〉メニュー(GH9011)から〈Batch Versions(バッチ・バージョン)〉を選択します。
2. [Batch Application(バッチ・アプリケーション)]に“R9800942”と入力します。
3. [Find(検索)]をクリックします。

4. バージョンXJDE0001をダブルクリックして実行します。
5. 次の処理オプションを確認します。
 - ・ Source Pathcode(ソース・パス・コード)
コピーするパス・コードの名称を入力します。ソース・パス・コードとして“PY9”と入力します。
 - ・ Destination Pathcode(コピー先パス・コード)
ソース・パス・コードのコピー先となるパス・コードの名称を入力します。コピー先パス・コードとして“PD9”と入力します。
 - ・ Copy Packages?(パッケージをコピーしますか?)
パス・コードと共にパッケージをコピーする場合は“Y”、コピーしない場合は“N”を入力します。
(“Y”を入力すると、プロトタイプ・パス・コードの全パッケージがコピーされます。デプロイメント・サーバーの容量が限られている場合は、“N”を入力して必要なプロトタイプ・パッケージのみを手作業でコピーします)。
 - ・ Update F9861?(F9861を更新しますか?)
F9861テーブルを新規パス・コードで更新する場合は“Y”を入力します。
F9861を更新しないように“N”と入力します。このテーブルは、後で本稼働用にコピーされます。
6. [OK]をクリックします。
7. このプロセスの終了後に、デプロイメント・サーバーの¥PD9¥PACKAGEディレクトリにあるPY xxxxパッケージの名称をPD xxxxに変更します。xxxxはリリース番号(9など)です(最初に、既存のPD9パッケージの名称を変更するか、削除する必要があります)。
8. すべてのパッケージ情報(.inf)ファイルを編集し、PYという文字をすべてPDに置き換えます。

PY9からPD9へのセントラル・オブジェクトとバージョンのコピー

セントラル・オブジェクト・データ・ソースに対するすべてのカスタム修正については、既にプロトタイプ環境でテストや遡及適用が完了しているため、プランを通じて本稼働用環境用の〈Specification Merge (スペック・マージ)〉を実行しないでください。つまり、マージを実行してこれらの変更を重複作業するのではなく、PY9パス・コードからPD9パス・コードにセントラル・オブジェクトをコピーしてください。

注意

PD9スペック用のユーザー用の表領域を作成してください。

▶ PY9からPD9にセントラル・オブジェクトをコピーするには

スタッフ	インストール担当者およびデータベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上のプランナ環境にログオンします。

前提条件	ディスク容量を検証します。
同時に行うタスク	なし

プランナ環境のデータベース内で、PY9パス・コードからPD9にセントラル・オブジェクトをコピーします。

1. 〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)から〈Batch Versions〉を選択し、次の情報を入力します。
 - ・ Batch Application
 “R98403”と入力します。
2. [Find]をクリックします。
3. バージョンXJDE0019をダブルクリックして実行します。
4. 〈Version Prompting(バージョン・プロンプト)〉で、[Override Location(ロケーション一時変更)]を選択して[OK]をクリックします。
5. 〈Advanced Version Prompting(上級バージョン・プロンプト)〉で、[Override Location]を選択して[OK]をクリックします。
6. 〈Version Prompting〉フォームで[Submit(投入)]をクリックします。
7. データ・ソースとしてLocalを選択します。
8. 〈Processing Options(処理オプション)〉の[Environment(環境)]タブで、次の処理オプションが選択されていることを確認します。
 - ・ Enter the Environment for the database to be created for.(データベースを作成する環境を入力します。)
 データベースを作成する環境名を入力します。
 - ・ or Enter the Data Source for the database to be created for.(または、作成するデータベースのデータ・ソースを入力します。)
 ブランクにします。
 - ・ Enter a 1 to load Production Data or a 2 to load Demonstration Data. The default is to load production data.(本稼働用データをロードする場合は1、デモ・データをロードする場合は2を入力します。デフォルトでは本稼働用データがロードされます。)
 “2”を入力してデモ・データをロードします。
 - ・ Enter the source Data Source for Loading of Data.(データのロード元となるデータ・ソースを入力します。)
 ブランクにします。
 - ・ or Enter the source Data Source for the database to be copied from.(または、データベースのコピー元データ・ソースを入力します。)

ソース環境 (PY9など) を入力します。

[Update (更新)] タブで、

- Enter a 0 for Proof Mode or a 1 to create the Environment Database. (テスト・モードの場合は0を、環境データベースを作成する場合は1を入力します。)

環境データベースを作成するには“1”を入力します。必要であれば、確認用レポートをテスト・モード(0)で実行し、検討してから更新モード(1)で実行できます。

- Enter an A to recreate the existing table in data sources that allow automatic table creation. Only copy tables that exist in the target data source. (テーブルを自動作成できるようにデータ・ソース内で既存のテーブルを歳作成するにはAを入力します。コピー先データ・ソースに存在するテーブルのみがコピーされます。)

“A”と入力します。

- Enter a 1 to copy only those tables that exist in the Source data source. (ソース・データ・ソースに存在するテーブルのみをコピーするには、1と入力します。)

“1”と入力します。

- Enter a Y to add records without clearing the target table. This is used for language tables. (コピー先テーブルを消去せずにレコードを追加するにはYを入力します。これは言語テーブルに使用されます。)

ブランクにします。

[Print and Licensing (印刷とライセンス)] タブ:

デフォルト値のままにします。

- [OK] をクリックします。

エンタープライズ・サーバー上でのPY9からPD9へのコピー

前のタスクと同様に、このプロセスでは、エンタープライズ・サーバーについて、テスト済みのパス・コードをプロトタイプ環境から本稼働用環境にコピーします。これにより本稼働用環境のテスト時間が短縮されます。

▶ エンタープライズ・サーバー上でPY9パス・コードをPD9パス・コードにコピーするには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、システム管理者権限でログオンします。
前提条件	サーバー上でプロトタイプ環境のテスト、カスタム修正の移動とテストを完了しておきます。
同時に行うタスク	なし

1. OneWorldエンタープライズ・サーバー・プロセスを停止します。
詳しくは、「エンタープライズ・サーバー上でのリリース8.9の停止」を参照してください。
2. Windows Explorerから、ERPがインストールされているb9ディレクトリにアクセスします。
3. b9ディレクトリにPD9というフォルダを新規作成します。
4. PY9ディレクトリから新規のPD9ディレクトリに、すべてのサブディレクトリをコピーします。
5. リリース8.9エンタープライズ・サーバープロセスを開始します。

エンタープライズ・サーバーの起動方法については、「エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール」を参照してください。

プロトタイプからの本稼働用オブジェクト・ライブラリアン・レコードの更新

セントラル・オブジェクト、デプロイメント・サーバー上のディレクトリがエンタープライズ・サーバー上のディレクトリにコピーされたため、本稼働用環境のオブジェクト・ライブラリアン詳細レコードを更新して新しい内容を反映させます。

▶ プロトタイプから本稼働用オブジェクト・ライブラリアン・レコードを更新するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上のデプロイメント環境にログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

インストール・プランの定義後に、プロトタイプから本稼働用にオブジェクト・ライブラリアン・レコード (F9861)を更新する必要があります。

1. デプロイメント環境(DEP9)にユーザーJDEでログオンします。
2. 〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)から〈Batch Versions〉を選択し、次のフィールドに値を入力します。
 - ・ Batch Application

“R989861”と入力します。
3. [Find]をクリックします。
4. バージョンZJDE0001をダブルクリックして実行します。このバージョンはローカルで実行してください。
5. 〈Version Prompting〉フォームで[Submit]を選択します。
6. 〈Processing Options〉の[Environment]タブで、アップグレードする環境について次の情報を確認します。

- ・ Source Pathcode

ソース・パス・コードは、更新する環境のパス・コードです。ソース・パス・コードとして“PY9”と入力します。

- ・ Target Pathcode (ターゲット・パス・コード)

ターゲット・パス・コード。ターゲット・パス・コードは、ソース・パス・コードの更新先となるパス・コードです。ターゲット・パス・コードとして“PD9”と入力します。

7. [OK]をクリックします。
8. フォームの[Report Output Destination (レポート出力先)]で出力先を選択して[OK]をクリックします。

パッケージのコピー

前述のステップに従って、デプロイメント・サーバー上でパス・コードをコピーします。コピー元ディレクトリからコピー先にパッケージをコピーする必要があります。パッケージをコピー先のpathcode/packageディレクトリにコピーした後に、次の手順を実行してください。

1. PD9/Packagesディレクトリで、PY*パッケージ名をPD*に変更します。
2. デプロイメント・サーバー上のPackage_INFディレクトリに移動し、コピーするオリジナル・パッケージの.infファイルをコピーします。
3. ステップ [ステップ 1](#) [310]に従ってファイル名package.infを変更します。
4. テキスト・エディタでpackage.infファイルを開き、PYという文字をすべてPDに置換します。
5. ファイル/b9/PD9/Package/ Packagename/ platform/serverpackage.infを開き、PackageName=PY9FAをPackageName=PD9FAに変更します。
6. デプロイメント・サーバー上のデプロイメント環境、またはワークステーションにログオンし、〈Package Assembly (パッケージ・アセンブリ)〉メニュー(GH9083)にアクセスします。
7. コピー元パッケージを検索し、[Copy (コピー)]ボタンをクリックします。
新規のパッケージ名を指定し(ステップ [ステップ 1](#) [310])、本稼働用のパス・コード名を入力します。
8. エグジツト・バーの [Define Build (ビルドの定義)]をクリックします。
9. クライアントとサーバーを選択します。
10. エンタープライズ・サーバー名を入力します。
11. [Build Specification Options (スペック・ビルド・オプション)]、[Business Function Options (ビジネス関数ビルド・オプション)]、または[Compression Options (圧縮オプション)]では、何も選択しないでください。

12. [End(終了)]をクリックします。
13. [Submit Build(ビルドの投入)]をクリックします。
14. [Directories exist for this package, do you want to overwrite(このパッケージ用のディレクトリが存在します。上書きしますか)]という警告が表示される場合は、[No]をクリックします。
15. エンタープライズ・サーバー用とワークステーション用のデプロイメント・レコードをセットアップします。

本稼働用パッケージの配布

本稼働用環境をアップグレードするための最終ステップは、環境をワークステーションに設定し、そこで修正内容をテストすることです。

▶ リリース8.9本稼働用環境を使用できるように準備するには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでログオンします。
前提条件	本稼働用環境のインストール・プランを実行します。
同時に行うタスク	なし

- ・ 新しい本稼働用パッケージを新たなワークステーションに配布します。
環境のテストが完了した後、他のワークステーションに配布できます。

本稼働用環境のアップグレード・プランのセットアップ

他の環境のアップグレードに使用したプランと同様のものをセットアップします。ただし、次のタスクに示すようにいくつか例外があるので注意してください。この時点でアップグレードする環境は、本稼働用環境のみです。本稼働用環境と共に他の環境をアップグレードすると、ダウンタイムが長くなります。

▶ 本稼働用環境のインストール・プランをセットアップするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上のプランナ環境にログオンします。
前提条件	プロトタイプ環境またはそれと同等の環境のインストールが正常終了している必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. 次の相違点に従って「Installation Plannerの実行」に掲載されているタスクを実行し、本稼働用環境のインストール・プランをセットアップします。

- ・ プラン記述の入力: [OK]をクリックし、プラン情報を手作業で入力します。
- ・ ロケーション情報の入力: [Select(選択)]を選んで既存のロケーションを選択します。[Location(ロケーション)]を選択して[OK]をクリックします。
- ・ デプロイメント・サーバー情報の入力: [Select]を選択して既存のデプロイメント・サーバーを選択します。
- ・ エンタープライズ・サーバー情報の入力: サーバーを変更しない場合は、[Select]を選択して既存のエンタープライズ・サーバーを選択します。サーバーを変更する場合は、[Add(追加)]をクリックして新規サーバーを追加します。
- ・ エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力: デフォルト値を選択し、新規エンタープライズ・サーバーをプランに追加する場合は、データ・ソースを検証します。
- ・ マシン/サーバー・タイプの定義: 該当するオプションをすべて無効にします。これらのマシンは、初期インストール・プランで定義されています。
- ・ 共有データ・ソース情報の入力: 標準を使用している場合はデフォルト値を選択します。それ以外の場合は、デフォルト値を選択しないことをお勧めします。
- ・ 環境のセットアップ: [Default Environments(デフォルト環境)], [Default Data Load(デフォルト・データ・ロード)], [Default Advanced Parameters(デフォルト上級パラメータ)]の各オプションを無効にします。
- ・ 環境を選択するには: デプロイメント・サーバー・ディスクからデプロイメント・サーバーにインストールするパス・コードのボックスを有効にします(このフォームに環境が表示されない場合)。
- ・ 環境のデータ・ロード・パラメータを指定するには: [Load Production Data(本稼働用データのロード)]オプションを有効にして[OK]をクリックします。
- ・ 上級パラメータを検証するには: 次のように選択します。
 - ・ Upgrade Environment(アップグレード環境)
 - ・ [Previous Environment(前の環境)]: PD7333またはPD7334
 - ・ [Table Conversions(テーブル変換)]: 有効
 - ・ [Specification Merge]: 無効
 - ・ [Control Table Merge]: 特定のコントロール・テーブルを取り込む必要がある場合は有効
- ・ 「環境のデータ・ソースのセットアップ」: Control Tables – Prod、Versions – PD9、Central Objects – PD9、Business Data – PRODの他にデータ・ソースをセットアップする場合は、[manual set up(手動セットアップ)]を選択して[OK]をクリックします。
- ・ リモート・ロケーションの追加: スキップします。

2. 構成画面で[OK]をクリックしてレポートを取得します。

〈Planner Validation report(プランナ検証レポート)〉の各セクションで次のエラーの有無を調べます。

- ・ [Duplicate Entry(重複項目)]は、データ辞書とシステム・テーブルに対して前回実行した変換によるものです。これらは無視してください。
- ・ [Source(ソース)]と[Target(ターゲット)]のデータ・ソース項目は同一で、すべてBusiness Data - PRODとなっている必要があります。セントラル・オブジェクトまたはシステムのデータ・ソース変換が存在する場合は、それを削除する必要があります。
- ・ [Control Table Merge]には、実行対象として選択したコントロール・テーブルが表示されます。残りの制御テーブル・マージは、Solution Explorer、UDC、および他のコントロール・テーブルに関するものです。

本稼働用環境のオフライン化

続行する前に本稼働用環境をオフライン化してください。

本稼働用環境のインストール・プランの実行

注意

このタスクの実行中は、本稼働用環境を使用禁止にする必要があります。ユーザー全員を本稼働用環境からログオフさせる必要があります。このタスクの実行中は本稼働プロセスを実行できません。

この時点で、本稼働用環境のプランを作成してすべての必要なコンポーネントがプロトタイプ環境からコピーされたため、〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉を使用してプランを実行することができます。〈Installation Workbench〉では、〈Table Conversion Workbench(テーブル変換ワークベンチ)〉と〈Control Table Workbench(コントロール・テーブル・ワークベンチ)〉を実行します。これらの処理では、ビジネス・データとコントロール・テーブルが保存され、本稼働用環境からマージされます。

▶ 本稼働用環境のインストール・プランを実行するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上のプランナ環境にログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし。このタスクの実行中は、ユーザー全員を本稼働用環境からログオフさせ、環境を稼働中止にする必要があります。本稼働プロセスは実行できません。

1. プランナ環境にユーザーJDEでログオンします。
2. 〈Installation Workbench〉フォームで、本稼働用環境のために作成したインストール・プランをダブルクリックします。
3. 「Installation Workbenchの実行」のタスクを実行します。

本稼働用パッケージのテスト

本稼働用環境をアップグレードするための次のステップは、ワークステーション上で修正内容をテストすることです。

▶ リリース8.9本稼働用環境を使用できるように準備するには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでログオンします。
前提条件	本稼働用環境のインストール・プランを実行します。
同時に行うタスク	なし

- ・ リリース8.9本稼働用環境を全般的にテストします。
環境のテストが完了した後、他のワークステーションに配布できます。

本稼働用環境のオンライン化

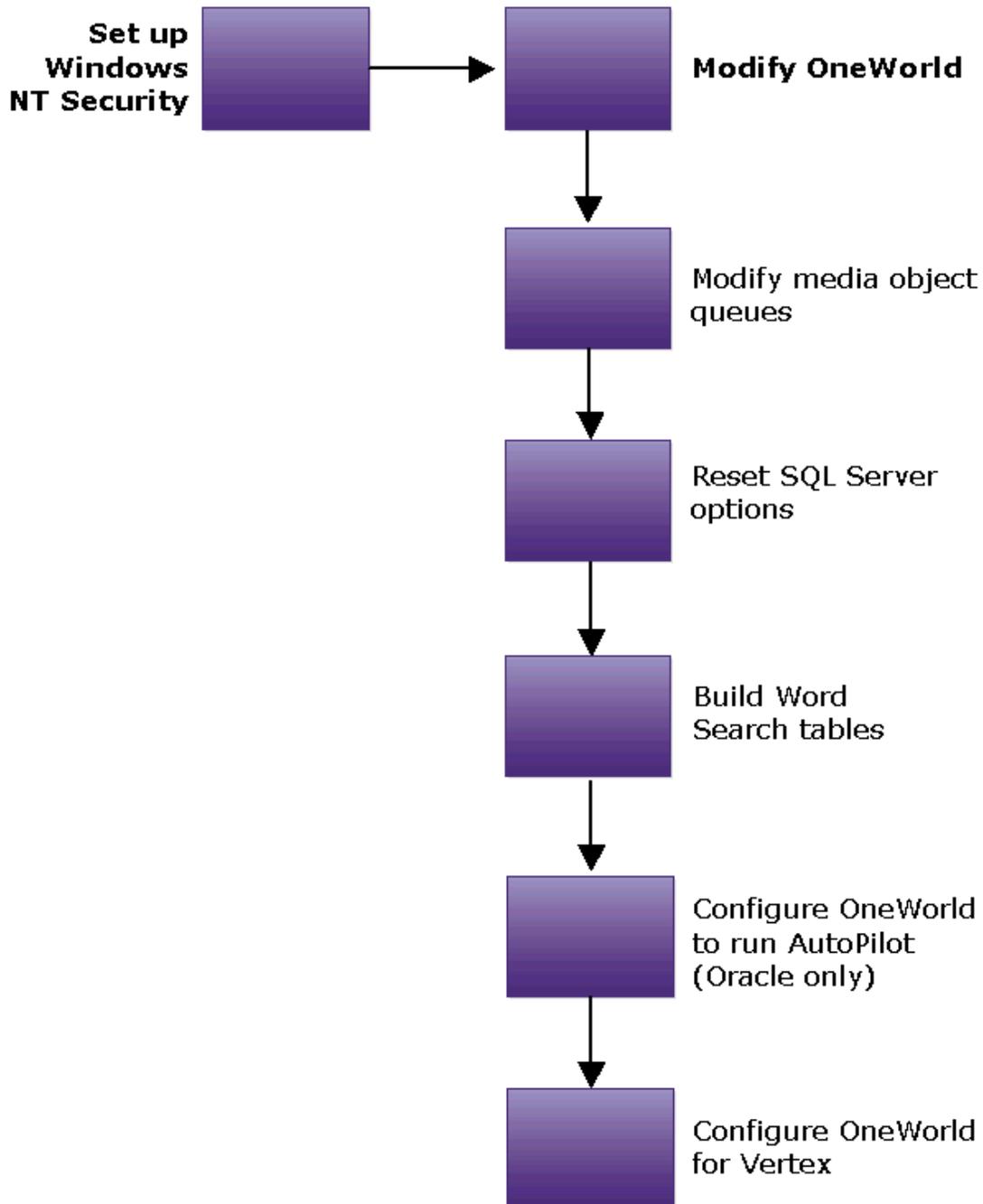
本稼働用環境をオンライン化してください。

アップグレードの完了

アップグレード・プロセスの完了後に、特定のアプリケーションを修正する必要があります。

次のフローチャートは、インストールまたはアップグレードを完了するプロセスの概要を示しています。

Completing the Upgrade



リリース8.9のディレクトリに対するWindowsセキュリティの設定

デプロイメント・サーバー上でリリース8.9のディレクトリとファイルに対するWindowsセキュリティを設定す

るには、次の表を使用して、各タイプのリリース8.9ユーザーに必要な権限を決定してください。これらの権限は、[Security(セキュリティ)]タブで設定します。

注意

使用できないディレクトリもあります。

次の表のディレクトリ名は、¥PeopleSoft¥b9ディレクトリ構造のサブディレクトリを示しています。特に明記されていない限り、表中の権限はすべてのサブディレクトリとファイルに適用できます。

Clientディレクトリ

注意

Windows NTデプロイメント・サーバーへのログオンには、セキュリティの設定に関する完全な制御が必要です。

ユーザーのタイプ	許可
JDE (jdeclnt.ddcとjdeclnt.xdcを除くすべてのファイル)	Change Change
本稼働ユーザー (jdeclnt.ddcとjdeclnt.xdcを除くすべてのファイル)	Read Only Change
開発ユーザー (jdeclnt.ddcとjdeclnt.xdcを除くすべてのファイル)	Read Only Change
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー (jdeclnt.ddcとjdeclnt.xdcを除くすべてのファイル)	Read Only Change

Pathcodeディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE (¥pathcodeと¥packageを除くすべてのサブディレクトリ)	Change Change
本稼働ユーザー (¥pathcodeと¥packageを除くすべてのサブディレクトリ)	Read Only Change

ユーザーのタイプ	許可
開発ユーザー (¥pathcodeと¥packageを除くすべてのサブディレクトリ)	Change Change
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー (¥pathcodeと¥packageを除くすべてのサブディレクトリ)	Change Change

Databaseディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	No Access
開発ユーザー	No Access
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	No Access

Data Dictionaryディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	No Access
開発ユーザー	No Access
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	Change

Helpsディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	Read Only
開発ユーザー	Read Only
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	Read Only

Hostsディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	No Access
開発ユーザー	No Access
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	No Access

Mediaobjディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	Read Only
開発ユーザー	Read Only
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	Change

Plannerディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	No Access
開発ユーザー	No Access
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	No Access

Printqueueディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	No Access
開発ユーザー	No Access

ユーザーのタイプ	許可
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	No Access

Systemディレクトリ

ユーザーのタイプ	許可
JDE	Change
本稼働ユーザー	Read Only
開発ユーザー	Read Only
CNC管理者およびアプリケーション・リーダー	Change

アップグレード後のリリース8.9の修正

ここでは、リリース8.9の使用を開始する前に実行する必要がある最終修正について説明します。

メディア・オブジェクト待ち行列の修正

メディア・オブジェクト待ち行列により、リリース8.9アプリケーションに情報を添付できます。また、メディア・オブジェクト待ち行列により、メディア・オブジェクトの格納場所を指定して、物理ネットワーク・ロケーションと違う参照方法でトラッキングできます。これにより、メディア・ロケーションの管理が簡単になります。

メディア・オブジェクト待ち行列を使用すると、システム管理者はリリース8.9構成でメディア・オブジェクトの格納を管理しやすくなります。リリース8.9では、イメージング製品のドメインに含まれないイメージ（スキャンしたイメージなど）を使用するために、メディア・オブジェクト待ち行列を設定します。

メディア・オブジェクト待ち行列は、実際のイメージ・ファイルやOLEオブジェクトが保存されている位置のポインタを識別するように定義してください。OLEオブジェクトの場合、待ち行列名はOLEQUEにする必要があります。メディア・オブジェクト待ち行列は、必ずWindowsマシン上に格納してください。さらに、このマシンの有効なネットワーク・パスが存在する必要があります。デプロイメント・サーバーでも他のWindowsマシンでも使用できます。

OLEQUEパスを修正する場合は、イメージ・ファイルとOLEオブジェクトを新規のロケーションにコピーしてください。

デプロイメント・サーバーにメディア・オブジェクト待ち行列を置く場合は、そのマシンをリリース8.9アプリケーションによる日常作業で使用可能にしておく必要があります。

メディア・オブジェクト待ち行列のパスは、汎用サーバー名になっています。メディア・オブジェクト待ち行列をカスタマー・サイトで使用可能にするには、そのパスにデプロイメント・サーバー名を入力します。

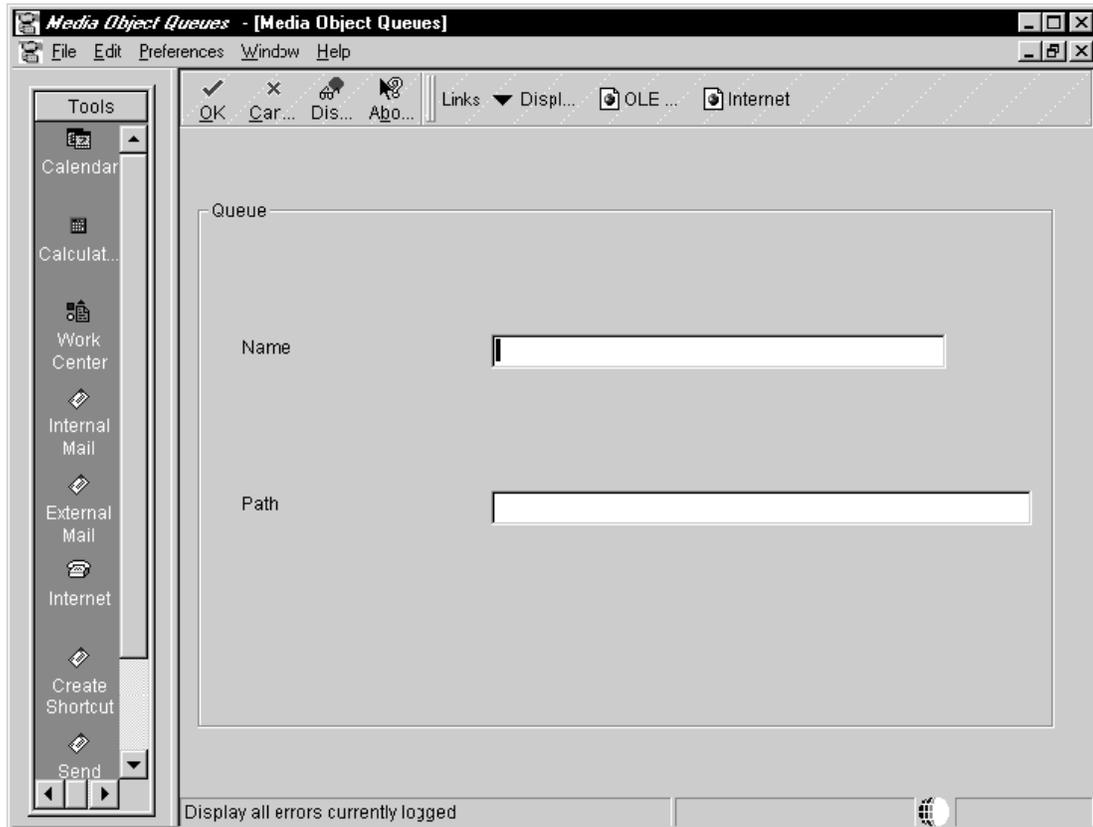
参照

- メディア・オブジェクトの使用方法については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「メディア・オブジェクトとイメージング」

▶ メディア・オブジェクト待ち行列を修正するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ワークステーションから、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. <System Administration Tools(システム・アドミニストレーション・ツール)>メニュー(GH9011)から<Media Object Queues(メディア・オブジェクト待ち行列)>(P98MOQUE)を選択します。



2. 新しいOLE待ち行列のロケーションを定義するには、[Add(追加)]をクリックします。
3. 次のフィールドに値を入力します。
 - ・ Name(名前)
 - ・ Path(パス)

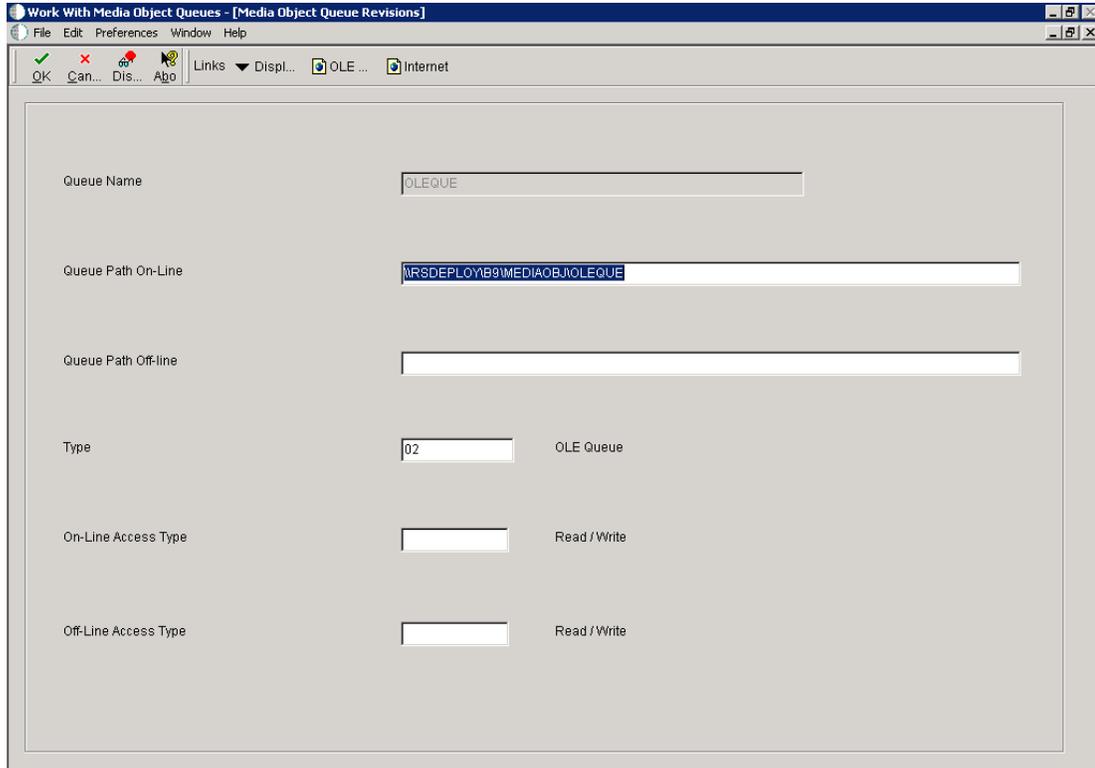
待ち行列のパスには、SERVER NAMEとQueue nameが含まれます。SERVER NAMEを、デプロイメント・サーバー名またはメディア・オブジェクト待ち行列のロケーションに置き換えてください。ネットワーク・ロケーションの有効な待ち行列パスは¥¥ servername¥b9¥ queuenameとなります。servernameはデプロイメント・サーバーで、queuenameはメディア・オブジェクト待ち行列名です。

〈ComposerCBT (コンポーザCBT)〉を使用している場合、メディア・オブジェクト待ち行列のパスには ¥やservernameは不要です。〈ComposerCBT〉は、ドライブ名がXに設定されている状態で出荷されます。コンポーザCBTの待ち行列を使用可能にするには、Xを、ワークステーションからメディア・オブジェクト待ち行列が格納されているサーバーを指すドライブ名に置き換えてください。たとえば、N:¥Mediaobj¥ComposerCBTとなります。

4. 既存のメディア・オブジェクト待ち行列を変更するには、[Find(検索)]をクリックして待ち行列名とそのパスのリストを表示します。

Queue Name	Queue path On-Line	Queue Path Off-line	Type	Description	On-Line Access Type	Description	Off-Line Access Type
ActivEraData	\\RSDEPLOYB9\activera\data		04	ActivEra Queue		Read / Write	
BusinessFunctionDoc	\\RSDEPLOYB9\PrintQueue		01	Image/File Queue		Read / Write	
Composer	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\COMPOSER\HTML		01	Image/File Queue		Read / Write	
ComposerCBT	x:\b9\MEDIAOBJ\COMPOSER\CBT		01	Image/File Queue		Read / Write	
Customer SelfService	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\SELF SERVICE		01	Image/File Queue		Read / Write	
Distribution	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\DISTRIBUTION		01	Image/File Queue		Read / Write	
Expense Policy	http://www.jdedwards.com		01	Image/File Queue		Read / Write	
Financials	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\FINANCIALS		01	Image/File Queue		Read / Write	
HTMLUpload	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\HTMLUpload		05	HTML Queue		Read / Write	
Human Resources	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\HUMAN RESOURCES		01	Image/File Queue		Read / Write	
Manufacturing	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\MANUFACTURING		01	Image/File Queue		Read / Write	
Misc Images	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\MISC IMAGES		01	Image/File Queue		Read / Write	
Misc. Animations	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\MISC ANIMATIONS		01	Image/File Queue		Read / Write	
Miscellaneous	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\MISC		01	Image/File Queue		Read / Write	
OLEQUE	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\OLEQUE		02	OLE Queue		Read / Write	
ObjectManagement	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\IOMW		03	Text Queue		Read / Write	
Text	\\RSDEPLOYB9\MEDIAOBJ\TEXT		03	Text Queue		Read / Write	

5. 〈Work With Media Object Queues (メディア・オブジェクト待ち行列の処理)〉で、修正する待ち行列名を選択して[Select(選択)]をクリックします。



6. <Media Object Queues>で、新しいロケーションが反映されるように[Path]フィールドの情報を変更します。
7. イメージ・ファイルとOLEオブジェクトを新規ロケーションにコピーします。
8. リリース8.9を終了し、再度ログオンして変更結果を有効にします。

SQL Serverオプションの再設定

Microsoft SQL Serverを使用する場合は、データベース・オプションを再設定する必要があります。

▶ SQL Serverオプションを再設定するには

スタッフ	インストール担当者またはデータベース管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、SQL Enterprise Managerにログオンします。
前提条件	インストールを正常に完了している必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. Enterprise Managerで、各JDEデータベースをダブルクリックします。
2. [Options (オプション)]タブをクリックします。
3. 次のSQL Serverオプションを無効にします。

- ・ Select Into/Bulk Copy (選択/一括コピー)
- ・ Truncate Log on Checkpoint (チェックポイントでのログの切捨て)

このプロセスを各JDE関連データベースに対して繰り返します。

タスク検索テーブルの作成

〈Task Word Search Build (タスク検索テーブルの作成)〉プログラムでは、タスク・マスター(F9000)の情報からタスク検索テーブル(F91014)と用語検索停止テーブル(F91012)が生成されます。

〈Word Search (タスク検索)〉を使用することにより、リリース8.9のメニュー名やタスク名がわからない場合に検索することができます。これらのテーブルのインストールは任意です。

〈Word Search Build (用語検索の作成)〉プログラムを実行すると、ログオンした環境のメニューまたはタスクと用語検索テーブルが検索されます。

インストール時に推奨の環境設定を行った場合は、PD9、PY9、DV9、およびJD9環境の1つまたはその組み合わせを使用して用語検索テーブルを作成します。

〈Word Search Build〉では約7.5 MBを使用します。このバッチ処理は完了するまでに数時間かかることがあります。

▶ タスク検索テーブルを作成するには

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	プリスティン(JDEオリジナル)またはタスクのパブリッシャ・コピーを指しているリリース8.9環境にログオンします。
前提条件	アップグレードを正常に完了している必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. プリスティンまたはタスクのパブリッシャ・コピーを指しているリリース8.9環境にログオンします。この環境は通常、タスク検索マスターが存在するデータ・ソースControl Tables - Prodにタスクをマップします。リリース8.9をインストールしてまもない場合に限り、ローカル・ワークステーションを指している環境を使用してください。そうでない場合は、用語検索テーブルが古いタスクから生成されてしまう可能性があります。
2. 〈System Administration Tools〉メニュー(GH9011)から〈Batch Versions (バッチ・バージョン)〉(P98305)を選択します。
 〈Work with Batch Versions (バッチ・バージョンの処理)〉フォームが表示されます。
3. [Batch Application (バッチ・アプリケーション)]フィールドに"R91014"と入力します。
 これは、タスク検索テーブルを更新するバッチ処理の名称です。
4. [Find]をクリックし、ワークステーション上で有効なバージョンを検索します。
5. Build Task Word Search Table (タスク検索テーブルの作成)を指すバージョンXJDE0001を選択して

[Select]をクリックします。

〈Version Prompting(バージョン・プロンプト)〉フォームが表示されます。〈Version Prompting〉では、オプションを選択せずにジョブを投入できます。ただし〈Version Prompting〉では、[Data Selection(データ選択)]や[Data Sequencing(データ順序設定)]を指定して〈Advanced Version Prompting(上級バージョン・プロンプト)〉フォームにアクセスできます。

6. [Submit]をクリックし、レポートを処理するロケーションにジョブを送信します。

タスク情報は、ログオンしている環境のオブジェクト構成管理マッピングから取り込まれ、タスク検索テーブル(F91014)に自動入力されます。

Autopilot(スクリプト作成ツール)実行のためのリリース8.9の構成

Autopilotと呼ばれるスクリプト作成ツールは、リリース8.9アプリケーションの実行テスト用のスクリプトを作成するための自動化されたテスト・ツールです。Autopilotはリリース8.9のインストールCDに含まれていますが、このツールを使用するには別途購入する必要があります。Autopilotの購入方法については、PeopleSoftの担当者にお問い合わせください。Autopilotの購入を完了していない場合は、この手順をスキップしてください。

Autopilotの構成方法については、『Autopilot』ガイドを参照してください。

インストール後にAutopilotを実行するには、クライアント・ワークステーションにインストールされているODBCDataSource.infファイルにODBCデータ・ソースが存在する必要があります。リリース8.9でデータ・ソースを作成してから、対応するODBCデータ・ソースを作成します。

注意

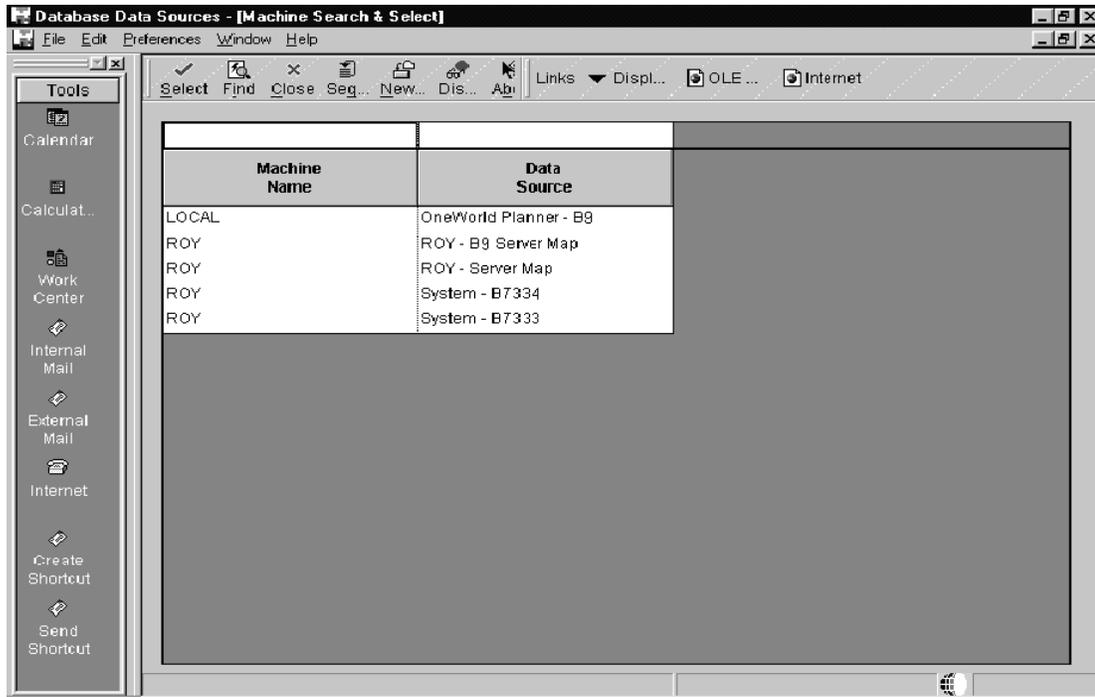
この手順はOracleデータベースにのみ該当します。SQL、iSeries、およびDB2 UDBプラットフォームの場合は、ODBCデータ・ソースとODBCDataSource.infファイルの対応するエントリが存在します。

▶ Autopilotを実行するリリース8.9を構成するには

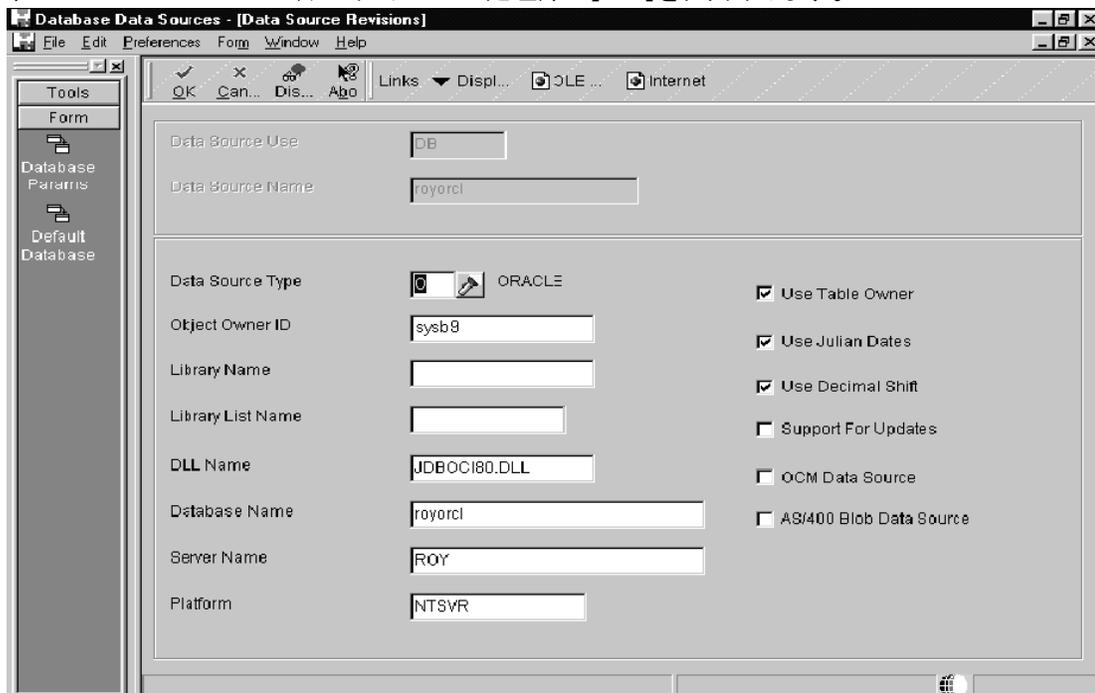
スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードで、リリース8.9にログオンします。
前提条件	このワークステーションにAutopilotをインストールする必要があります。
同時に行うタスク	なし

Autopilotを実行するためのリリース8.9構成においてODBCデータ・ソースを作成するには、次のステップを完了します。

1. ユーザーJDEとして、ユーザーJDEのデータベース・パスワードJDEで、デプロイメント・サーバー上のJDEPLAN環境にログオンします。
2. [Fast Path(略式コマンド)]に"GH9611"と入力します。
3. 〈Database Data Sources(データベースのデータ・ソース)〉を選択します。



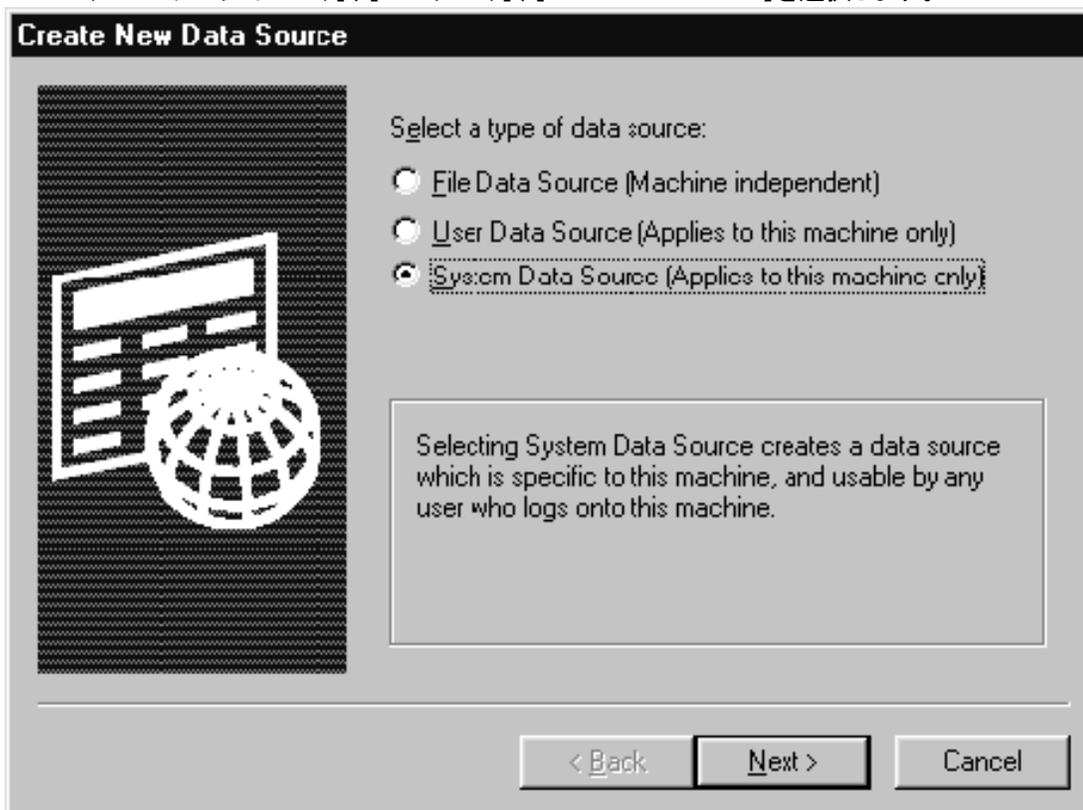
4. <Machine Search & Select(マシンの検索/選択)>で、データ・ソースOneWorld Planner - B9を選びます。
5. <Work With Data Sources(データ・ソースの処理)>で[Add]をクリックします。



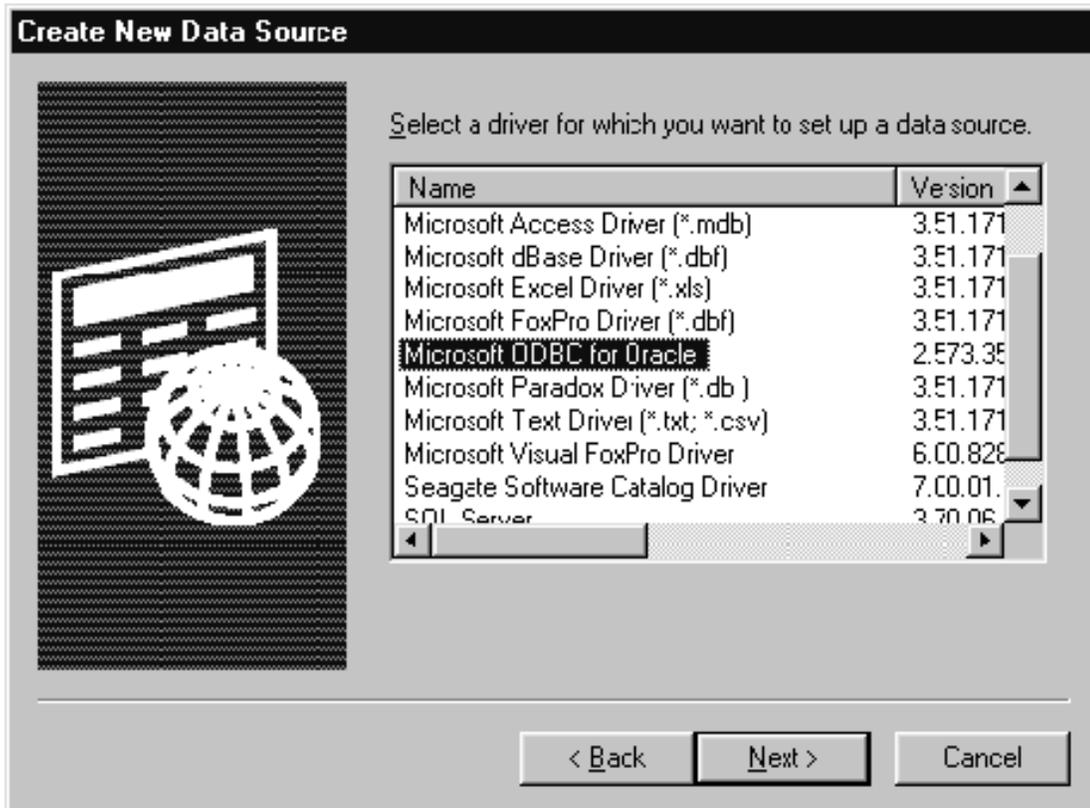
6. <Data Source Revisions(データ・ソースの改訂)>で、次の情報を指定してデータ・ソースを追加します。

Data Source Use(データ・ソース使用)	DB
Data Source Name(データ・ソース名)	Oracle_database_connectstring
Data Source Type(データ・ソース・タイプ)	O [Oracleの場合]
Object Owner ID(オブジェクト所有者ID)	SYS9
Library Name(ライブラリ名)	
Library List Name(ライブラリ・リスト名)	
DLL Name(DLL名)	JDBOCI80.DLL
Database Name(データベース名)	Oracle_database_connectstring[上記の [Data Source Name]と同じ]
Server Name(サーバー名)	enterprise_server_name
Platform(プラットフォーム)	server_platform

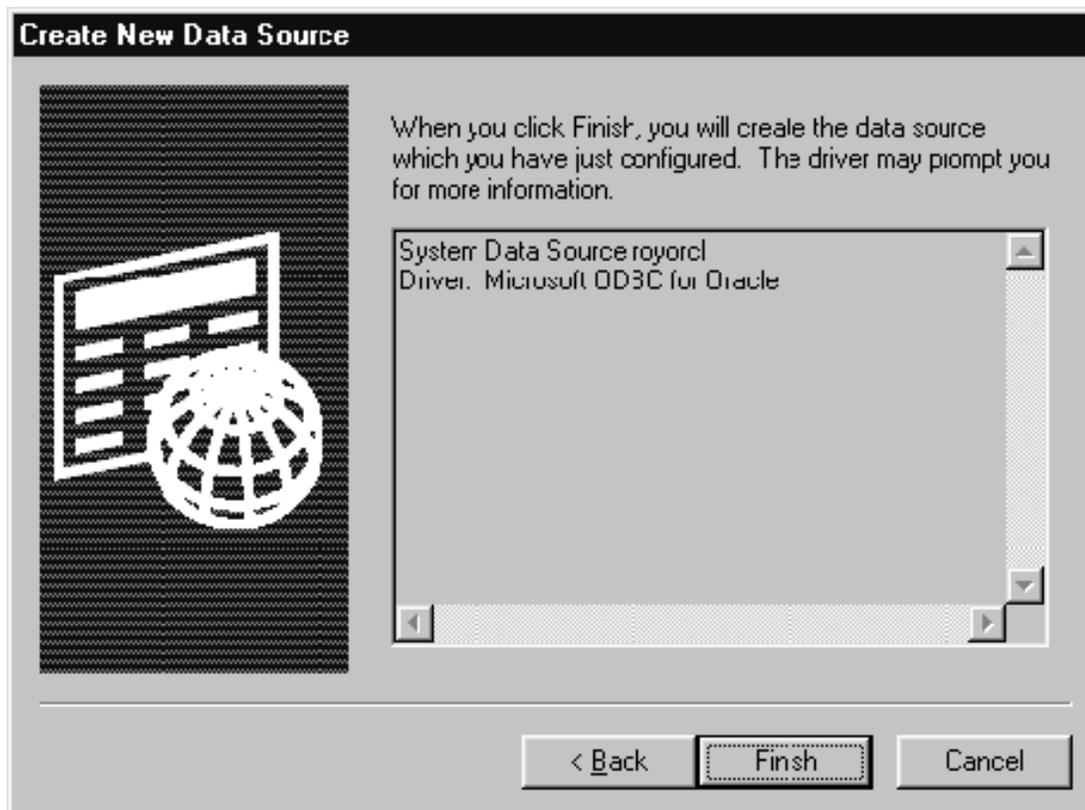
7. [OK]をクリックします。
8. <Work With Data Sources>で、新規のデータ・ソースをハイライトしてメニュー・バーで[ODBC Data Source(ODBCデータ・ソース)]、[Row(ロー)]、[ODBC Data Source]を選択します。



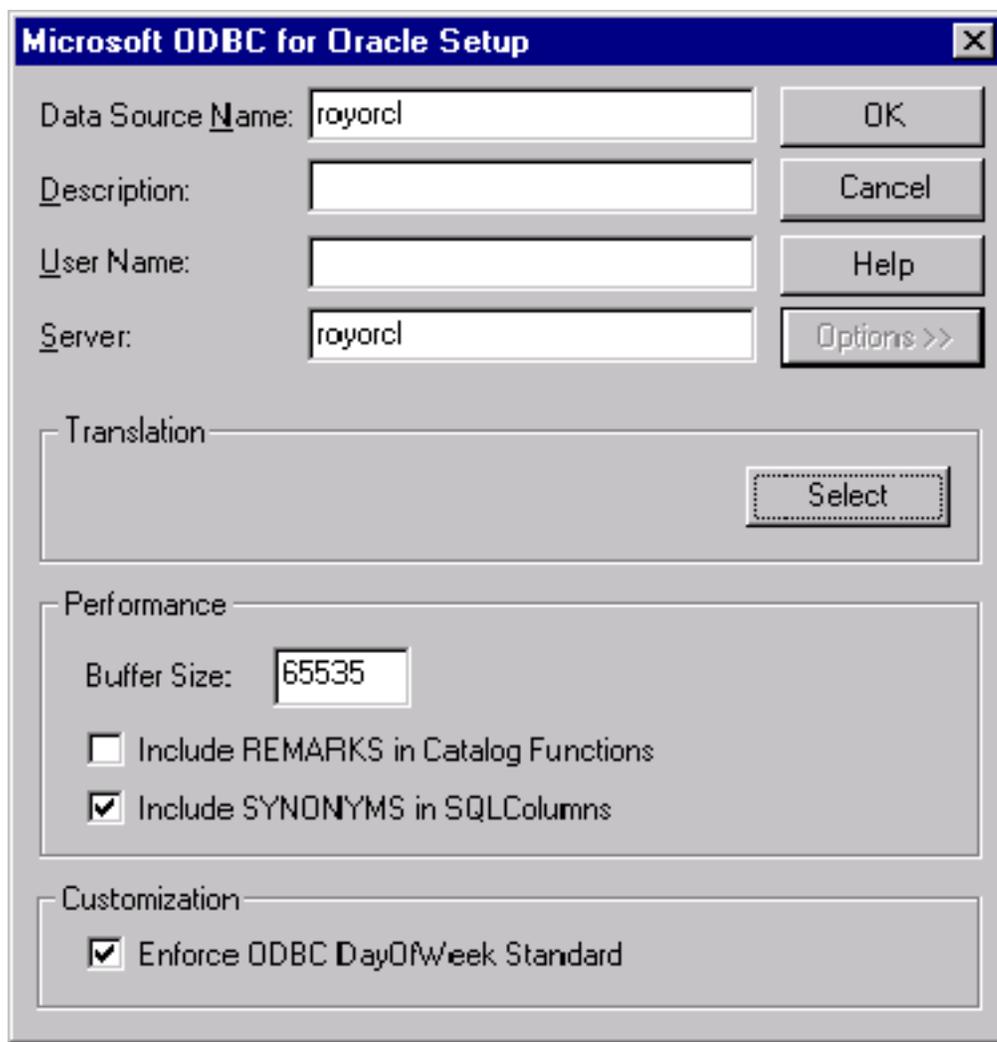
9. [Create New Data Source (新規データ・ソースの作成)]で、[System Data Source (システム・データ・ソース)]を選択して[Next (次へ)]をクリックします。



10. [Create New Data Source]で、ドライバを選択して[Next]をクリックします(推奨設定は[Microsoft ODBC for Oracle]です。ドライバがない場合はデータベース管理者に問い合わせてください)。



11. [Finish(終了)]をクリックします。



12. [Microsoft ODBC for Oracle Setup (Microsoft ODBC for Oracle の設定)] で、選択したデータ・ソースが [Data Source Name] にデフォルト値として設定されます。[Server (サーバー)] フィールドにエンタープライズ・サーバー名を入力します。
13. [OK] をクリックします。データ・ソースが、¥PeopleSoft¥b9¥client ディレクトリにある ODBCDataSource.inf ファイルに追加されます。

Solution Explorer の設定

Solution Explorer (旧名称 ActivEra) は、リリース 8.9 アプリケーション、ロール・ベースのメニュー、導入オプションと構成オプション、ドキュメント、およびトレーニング・ガイドへのアクセスを提供する Windows ベースのインターフェイスです。OneWorld エクスプローラと同様に、Solution Explorer からリリース 8.9 に簡単にアクセスできます。

Solution Explorer にアクセスすると、リリース 8.9 アプリケーション全体を検索してすばやく移動できます。また、Solution Explorer を使用すると、独自のタスクを作成したり他の Web ベース情報にタスクをリンクすることも可能です。

Solution Explorer については『Solution Accelerator Suite Implementation (Solution Accelerator 스위트・

インプリメンテーション)』ガイドを参照してください。

Solution ExplorerのHTMLドキュメンテーション・パスの設定

リリース8.9のインストール時には、HTMLドキュメントが共通のドキュメンテーション・ディレクトリにあるフォルダに階層形式で自動的に格納されます。ユーザーがタスクを選ぶと、Solution Explorerではメディア・オブジェクト待ち行列を使用してこれらのファイルが検索され、関連ドキュメンテーションが専用ウィンドウに表示されます。

Solution ExplorerからHTMLドキュメント・ファイルへのファイル・パスは、メディア・オブジェクト待ち行列テーブル(F98MOQUE)で定義されており、対応する〈Work With Media Object Queues〉プログラム(P98MOQUE)にアクセスして構成する必要があります。リリース8.9でドキュメンテーション・ファイルがインストールされる際には、待ち行列名ActivEraDataをドキュメンテーションへの汎用パスに関連付けるメディア・オブジェクト待ち行列テーブルにエントリが作成されます。Solution Explorerで各HTMLファイルを正しいタスクにリンクするには、このプログラムを開いて、待ち行列名ActivEraDataに関連したディレクトリ・パスのサーバー名を変更する必要があります。このディレクトリ・パスは`servername¥b9¥ActivEra¥Data`で、servernameはデプロイメント・サーバー名です。

待ち行列名ActivEraDataがメインのHTMLドキュメンテーション・ディレクトリに正しくマップされていれば、ユーザーがタスクのロケーションまたはタスク・ビューのロケーションにアクセスすると、Solution Explorerにより関連ドキュメンテーションが検索され表示されます。たとえばタスクJDE001234が存在する場合、このタスクの要約ドキュメンテーションのHTMLファイルへのパスは`¥DEPSVR1¥PY9¥ActivEra¥Data¥JDE001234¥summary.html`となります。DEPSVR1はデプロイメント・サーバー名です。

ドキュメンテーション・パスの設定方法については「[メディア・オブジェクト待ち行列の修正 - ページ \[320\]](#)」を参照してください。

Word Search Generationプログラムの実行

〈Find It!(検索)〉プログラムは、タスク名またはその一部を入力してSolution Explorerタスクを検索するためのSolution Explorer検索機能の一部です。〈Find It!〉プログラムを機能させるには、〈Word Search Generation〉プログラム(R91014のバージョンXJDE0001)を実行します。このUBEにより、〈Find It!〉プログラムで使用されるタスク名またはその一部のリストが自動入力されます。〈Find It!〉の用語検索メカニズムは、メニュー検索に使用されるものと同じです。

▶ 〈Word Search Generation〉プログラムをインストールするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ユーザーJDEとして、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでリリース8.9にログオンします。
前提条件	インストールを完了してリリース8.9のメニューをSolution Explorerデータに変換しておく必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. リリース8.9 Explorerで[Fast Path]に“BV”と入力して[Enter]キーを押します。
2. 〈Batch Versions List(バッチ・バージョン・リスト)〉アプリケーションにアクセスします。
3. “R91014”を指定して[Find]をクリックします。

4. バージョンXJDE0001をダブルクリックして実行します。
5. 〈Processing Options (処理オプション)〉で、現在のリストをクリアして、変更または削除されたタスク名を除外するために“1”を入力します。ブランクにすると、既存のリストに名前が追加されます。

Solution Explorerのホームページの設定

ホームページは通常、Solution Explorerへのログオン時に最初に表示される画面です。この画面を使用すると、社内のエンドユーザーに関連する情報を表示できます。また、社外のWebサイト、イントラネット・サイト、またはネットワーク上の他のサーバー上に保管されているHTMLファイルも表示できます。

インストール・プロセス中には、デプロイメント・サーバーのインストール時にPortalLiteというディレクトリが作成されます。このディレクトリは<baseinstall>%SolutionExplorer%PortalLiteディレクトリにあり、デフォルトのホームページを構成する一連のHTMLファイルが含まれています。このディレクトリはデプロイメント・サーバー上にありますが、Webサーバー上やローカル・ワークステーション上など、ネットワーク上のどこにでも置くことができます。

リリース8.9クライアントのインストール時には、クライアントのjde.iniがPortaLiteディレクトリのロケーションを指すように更新されます。たとえばデプロイメント・サーバー名がDepServer1で、共有名がb9であれば、jde.iniの[Explorer]セクションは次のように更新されます。

```
[Explorer] ExplorerHomeURL="¥¥DepServer1¥b9¥SolutionExplorer¥portallite¥index.html" ExplorerStart=INTERNET
```

上記のパラメータをjde.iniファイルで変更すると、任意のHTMLファイルやURLをデフォルトのホームページとして表示できます。次の表は各パラメータを示しています。

[Explorer]のパラメータ	説明
ExplorerHomeURL=	ユーザーのログオン時に表示されるホームページのURLまたはファイル名。デフォルトでは、初期ページは¥¥Depserver1¥b9¥SolutionExplorer¥portalite¥index.htmlです。
ExplorerStart=	有効な値は次のとおりです。 INTERNET: これはデフォルト値です。Solution Explorerの起動時には、最初にインターネット・ビューが表示されます。 TASK: Solution Explorerの起動時には、ユーザーが最後に表示していたタスク・ビューが表示されます。特定のタスク・ビューを表示するには、ExplorerStart=TASK: xxに設定します。xxはタスク・ビューのタスクIDです。

Vertex Quantum Taxアプリケーションとの併用のためのリリース8.9の構成

ここでは、Vertex Quantum Taxアプリケーションと併用するようにリリース8.9を構成する方法について説明します。これらのアプリケーションをリリース8.9と併用しない場合は、このセクションをスキップしてください。

リリース8.9は、次のVertex Quantum Taxアプリケーションと併用できます。

- ・ Vertex Quantum for Payroll Tax

- ・ Vertex Quantum for Sales and Use Tax

構成タスクを開始する前に、Vertex Quantumアプリケーションをシステムにインストールしておく必要があります。

注意

Vertex Quantumアプリケーションは、ISAMデータベースやOracleデータベース(どちらかのVertex Quantumに該当)、またはSQL Serverデータベース(Vertex Quantum for Sales and Use Taxに該当)と併用できます。ISAMデータベースは、Vertex Quantumアプリケーションと共にインストールされます。

参照

- ・ 『Vertex Quantum for Payroll Tax – Administrator’s Guide』
- ・ 『Vertex Quantum for Sales and Use Tax – Administrator’s Guide』

リリース8.9をVertex Quantumアプリケーションと併用するよう構成する前に、エンタープライズ・サーバーにVertex Quantum for Payroll TaxまたはVertex Quantum for Sales and Use Tax、あるいはその両方をインストールします。Vertex Quantumアプリケーションのインストール方法については、下記のVertex Quantumアプリケーション管理ガイドを参照してください。Vertex Quantumアプリケーションをインストールする場合は、次の点に注意してください。

- ・ Vertex Quantumアプリケーションが格納されるディレクトリについて、エンタープライズ・サーバー上でのディレクトリ・パスをメモしてください。この情報は、Vertexライブラリをリリース8.9ディレクトリ構造にコピーするときに必要になります。
- ・ Oracleデータベースを使用している場合は、Vertexテーブルを所有するOracleユーザーとデータベース接続文字列をメモしてください。
- ・ Vertex Quantum for Sales and Use Taxの場合は、Vertex QuantumアプリケーションのISAMデータベース・バージョンをインストールするか、SQL ServerまたはOracleデータベースを使用できます。
- ・ Vertex Quantum for Payroll Taxの場合は、Vertex QuantumアプリケーションのISAMデータベース・バージョンをインストールするか、Oracleデータベースを使用できます。SQL Serverは、Vertex Quantum for Payroll Taxとは併用できません。
- ・ Vertex ISAMデータベースを使用している場合は、Vertex Quantumアプリケーション・データベースが作成される1つ以上のディレクトリについて、エンタープライズ・サーバー上でのディレクトリ・パスをメモしてください。この情報は、リリース8.9データベース接続を確立するときに必要です。

Windows NTまたはWindows 2000サーバーのパスへのVertex Quantumディレクトリ情報の追加

次の手順に従って、サーバーのパスにVertex Quantumアプリケーションのディレクトリ情報を追加します。

- ▶ NTサーバーのパスにVertex Quantumディレクトリ情報を追加するには
-

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ERPIにログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

- Windows NTエンタープライズ・サーバーのデスクトップから、[スタート]、[設定]、[コントロール パネル]を順番にクリックします。[コントロール パネル]で[システム]アイコンをクリックします。[システムのプロパティ]ダイアログ・ボックスが開きます。[Environment]タブをクリックします。

Windows 2000エンタープライズ・サーバーのデスクトップから、[スタート]、[設定]、[コントロール パネル]を順番にクリックします。[コントロール パネル]で[システム]アイコンをクリックし、[詳細]タブをクリックします。[環境変数]ボタンをクリックします。
- 〈システム環境変数〉ウィンドウで、[変数]カラムにキーワード[Path]が表示されるまでスクロール・ダウンします。[Path]キーワードをクリックして選択します。[値]フィールドに現行のパスが表示されます (Windows 2000の場合は、[編集]をクリックして[変数値]フィールドを表示します)。
- 現在のパス ([値]フィールドに表示) 内でVertex Quantumアプリケーションのディレクトリを探します。このディレクトリが表示されない場合は、次のステップでパスに追加する必要があります。このディレクトリがパスに表示される場合は、ステップ [ステップ 5](#) [334]に進みます。
- [値]にカーソルを合わせ、右矢印を使用してフィールドの最後までスクロールします。
"x:¥vertexDirectoryPath¥vertex¥utils"と入力します。vertexDirectoryPathはVertex Quantumアプリケーションが格納されているディレクトリのパスで、xはそのディレクトリがあるドライブのドライブ名です。このエントリを直前のエントリと区切るために、セミコロン(;)の挿入が必要となる場合がありますので注意してください。
- [Set(設定)]をクリックします。

新しい値が保存されます。
- 〈ユーザーの環境変数〉ウィンドウで、このタスクのステップ [ステップ 2](#) [334]以降を繰り返します。
- [OK]をクリックし、サーバーをリブートします。

新しいパスが有効になります。

Vertex Quantum Taxアプリケーションのためのリリース8.9データベース接続の構成

次の手順に従って、Vertex Quantumアプリケーションを使用するためのリリース8.9データベース接続を構成します。

▶ Vertex Quantum Taxアプリケーションのためのリリース8.9データベース接続を構成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	リリース8.9にログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. リリース8.9で、〈Vertex Quantum Tax Processing (Vertex Quantum売上税/使用税)〉メニュー (G731)にアクセスします ([Fast Path]に"G731"と入力します)。
 〈Vertex Quantum Tax Processing〉パネルが表示されます。
2. 〈Database Connections (データベース接続)〉(P7308)をハイライトして右クリックします。
 コンテキスト・メニューが表示されます。
3. コンテキスト・メニューから [Prompt for Values (処理オプションの表示)] を選択します。
 〈Processing Options〉ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 〈Processing Options〉の [Quantum] タブをクリックして次の情報を入力します。
 - ・ [Option #1 (オプション#1)] : [Enter which Vertex Quantum applications are installed: (インストールするVertex Quantumアプリケーションを入力してください。)]
 [ブランク]
 両方のVertex Quantum Taxアプリケーションがインストールされます。
 1
 Vertex Quantum for Sales and Use Taxアプリケーションがインストールされます。
 2
 Vertex Quantum for Payroll Taxアプリケーションがインストールされます。
 - ・ [Option #2 (オプション#2)] : [Enter location information for the databases (データベースのロケーション情報を入力してください。)]:
 [ブランク]
 両方のVertex Quantum Taxアプリケーションのデータベースが同じロケーションに格納されます。
 。
 1
 Vertex Quantum for Payroll TaxおよびVertex Quantum for Sales and Use Taxアプリケーションのデータベースは、別々のロケーションに格納されます。
 2
 Vertex Quantum for Payroll TaxおよびVertex Quantum for Sales and Use Taxアプリケーションのデータベースは、別々のロケーションに格納され、Vertex Quantum for Sales and Use Taxアプリケーションの4つのデータベースが別々のロケーションに格納されます。
 - ・ [Option #3 (オプション#3)] : [If Processing Option #2 is set to 1 or 2 (i.e., if the Vertex databases are in separate locations), specify the GeoCode database location information: (処理オプション#2を1または2に設定した場合 = Vertexデータベースがすべて同じロケーションにない場合は、GeoCodeデータベースのロケーション情報を指定します。)]
 [ブランク]

Vertex Quantum Payroll TaxおよびVertex Quantum Sales and Use Taxアプリケーションでは、同じGeoCodeデータベースが使用されます。

1

各Vertexアプリケーションでは、GeoCodeデータベースの個別コピーが使用され、2つのコピーは別のロケーションに格納されます。

5. [OK]をクリックします。

〈Vertex Quantum Database Connection (Vertex Quantumのデータベース接続)〉パネルが表示されます。このパネルの1つまたは複数のタブで、データベース接続を定義する必要があります。表示されるタブは、上記の[ステップ 4](#) [335]の処理オプションに入力した値によって決まります。

注意

Vertex Quantum Payroll TaxおよびVertex Quantum Sales and Use Taxアプリケーションで共有できるVertex QuantumデータベースはGeoCodeのみです。ただし、すべてのVertex Quantumデータベースは、同じロケーションまたは異なるロケーションにインストールできます。

〈Database Connection〉パネルには、次の1つまたは複数のタブが表示されます。

- ・ [All(すべて)] - 両方のVertex Quantumアプリケーションのすべてのデータベースが同一サーバー上の同一ロケーションに格納されます。
- ・ [GeoCode] - 両方のアプリケーションに同じGeoCodeデータベースが使用されます。
- ・ [GeoCode-Sales and Use (GeoCode売上税/使用税)] - Sales and Use Taxアプリケーションで使用されるGeoCodeデータベースは、このサーバーのロケーションに格納されます。Payroll Taxアプリケーションでは、別のロケーションにあるGeoCodeデータベースの別コピーが使用されます。
- ・ [GeoCode-Payroll (GeoCode給与計算)] - Payroll Taxアプリケーションで使用されるGeoCodeデータベースは、このサーバーのロケーションに格納されます。Sales and Use Taxアプリケーションでは、別のロケーションにあるGeoCodeデータベースの個別コピーが使用されます。
- ・ [Sales and Use (売上税/使用税)] - Sales and Use Taxアプリケーションで使用される4つのデータベースは、すべてこのサーバーのロケーションに格納されます。
- ・ [TDM] - Sales and Use Taxアプリケーションで使用されるTDMデータベースは、このサーバーのロケーションに格納されます。
- ・ [Register] - Sales and Use Taxアプリケーションで使用されるRegisterデータベースは、このサーバーのロケーションに格納されます。
- ・ [Rate] - Sales and Use Taxアプリケーションで使用されるRateデータベースは、このサーバーのロケーションに格納されます。
- ・ [Payroll (給与計算)] - Payroll Taxアプリケーションで使用されるデータベースは、このサーバーのロケーションに格納されます。

6. 〈Database Connection〉パネルで、表示される各タブをクリックして次の情報を入力します。

- Data Source (データ・ソース)

ISAMの場合は、指定したデータベースへのディレクトリ・パスを入力します。Vertexアプリケーションのインストール時にデータベースに使用するサーバー上のロケーションを入力する必要があります(前述の「Vertex Quantum Taxアプリケーションとの併用のためのリリース8.9の構成」を参照)。

Oracleの場合は、Vertexテーブルを所有するOracleユーザー(VERTEXなど)を入力します。

Oracleの場合は、エンタープライズ・サーバー名を入力します。

SQL Serverの場合は、サーバー用のODBCデータ・ソース名(SQLSERVER-OWNTS3など)を入力します。

- Server

ISAMの場合は、このフィールドを空白にします。

Oracleの場合は、Vertexテーブルが常駐するOracleの接続文字列(tnsnamesエントリ)を入力します。

SQL Serverの場合は、エンタープライズ・サーバー名を入力します。

- User ID (ユーザーID)

ISAMの場合は、このフィールドを空白にします。

Oracleの場合は、Vertexテーブルを所有するOracleユーザー(上記の[Data Source]と同じ値)を入力します。

Oracleの場合は、Vertexテーブルを所有するOracleユーザーを入力します。

SQL Serverの場合は、テーブル所有者を入力します。

- Password (パスワード)

ISAMの場合は、このフィールドを空白にします。

Oracleの場合は、Oracleユーザーのパスワードを入力します。

SQL Serverの場合は、テーブル所有者のパスワードを入力します。

7. [OK]をクリックします。

変更結果を有効にするには、システムからログオフしてログオンし直してください。

エンタープライズ・サーバーへのオブジェクトのマッピング

Vertex QuantumのAPIをコールするオブジェクトは、そのAPIが常駐するサーバー上で実行する必要があります。システムOCMで、次のリリース8.9オブジェクトがサーバー上で実行するように構成されているかどうかをチェックしてください。マッピングは変更しないでください。

Vertex Quantum for Payroll Taxの場合：

- ・ R07200(事前給与計算ドライバ)
- ・ B0700058

Vertex Quantum for Sales and Use Taxの場合：

- ・ X00TAX.c (Tax Calculator)
- ・ B7300002(Quantum GeoCodeの検証)
- ・ B7300004(Quantum GeoCodeの検索)
- ・ B7300012(Quantumソフトウェア情報の検証)
- ・ B000182
- ・ B000183

リリース8.9からのVertex Quantum接続のテスト

次の手順に従ってリリース8.9からのVertex Quantum接続をテストします。

▶ リリース8.9からVertex Quantum接続をテストするには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	リリース8.9にログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

Vertex Quantum for Payroll Taxインターフェイスをテストする場合：

1. 〈Payroll Workbench(給与計算ワークベンチ)〉メニュー(G07BUSP11)にアクセスし、〈Pay Cycle Workbench(支払サイクル・ワークベンチ)〉を選択します。〈Work with Payroll Cycle Workbench(支払サイクル・ワークベンチの処理)〉パネルが表示されます。
2. 事前給与計算情報を指定して、事前給与計算を実行します。
 〈Payroll Workbench〉と事前給与計算の投入については、『Payroll(給与計算)』ガイドの「Processing Pre-Payroll(事前給与計算の処理)」を参照してください。
3. 税額が計算されない場合、設定または構成に問題がある可能性があります。次の事項を検証し、正しく設定されているかどうかを確認してください。
 - ・ UBE R07200が、Vertex Quantum for Payroll TaxのAPIが常駐するサーバー上で実行されるかどうか。

- ・ 「 [Vertex Quantum Taxアプリケーションのためのリリース8.9データベース接続の構成 - ページ \[334\]](#)」で指定したとおり、〈Database Connection〉パネルの [Data Source]、 [Server]、 [User ID]、および [Password] フィールドに正しい値が割り当てられているかどうか。
4. Vertex Quantum for Sales and Use Taxインターフェイスの場合：
[Fast Path] に “P73GEO” と入力して [Enter] キーを押します。〈Retrieve GeoCode (GeoCodeの検索)〉パネルが表示されます。
 5. 〈Retrieve GeoCode〉パネルで、 [State (州)] フィールドに “CO”、 [City (市)] フィールドに “DENVER” と入力して [Find] をクリックします。

グリッドにコード060310140が表示されるはずですが、
 6. グリッドに何も表示されない場合は、設定または構成に問題があると思われます。次の事項を検証し、正しく設定されているかどうかを確認してください。
 - ・ 〈Work with Quantum Constants Revision (QUANTUM固定情報改訂の処理)〉のテーブルで次の値が設定されているかどうか。このフォームにアクセスするには、〈Vertex Quantum Sales and Use Tax (Vertex Quantum売上税/使用税)〉メニュー (G731) で〈Constants (固定情報)〉アプリケーション (P7306) を選択します。

[Quantum Active (Quantumアクティブ)] : Y

[Canada Country Code (カナダ国コード)] : CA

〈Work with Quantum Constants Revision〉のテーブルに対する変更結果を有効にするには、システムからログオフしてログオンし直す必要があります。
 - ・ 「 [エンタープライズ・サーバーへのオブジェクトのマッピング - ページ \[337\]](#)」で指定したとおり、必須のリリース8.9オブジェクトがVertex Quantum for Sales and Use TaxのAPIがあるサーバーにマップされているかどうか。
 - ・ 「 [Vertex Quantum Taxアプリケーションのためのリリース8.9データベース接続の構成 - ページ \[334\]](#)」で指定したとおり、〈Database Connection〉パネルの [Data Source]、 [Server]、 [User ID]、および [Password] フィールドに正しい値が割り当てられているかどうか。

Installation Plannerのユーティリティ

インストール・プランナ・ユーティリティについては次の5つのセクションがあります。

- ・ リモート・インストール・プランの作成
- ・ 既存構成へのサーバーの追加
- ・ Installation Planner処理オプションの検討
- ・ インストール・プランの各部の削除
- ・ 言語のみのインストール・プランの作成

これらのプランナ・ユーティリティについては次のそれぞれのセクションで詳しく説明します。

リモート・インストール・プランの作成

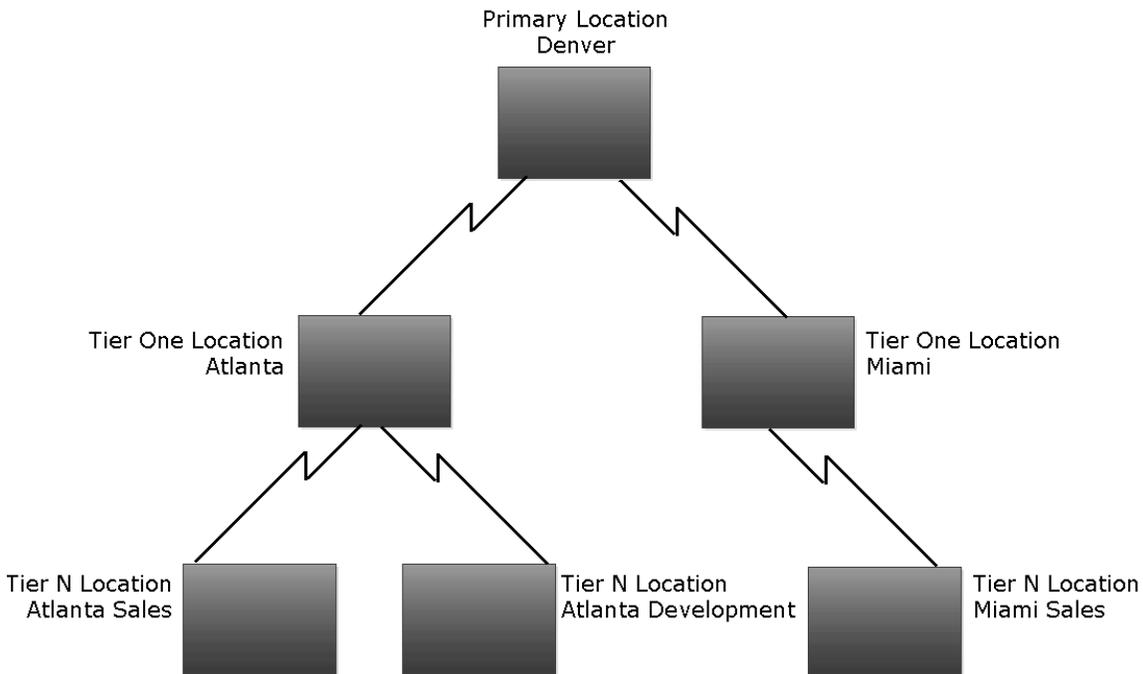
リモート・インストール・プランの作成

〈Installation Planner(インストール・プランナ)〉は、デプロイメント・サーバー上でシステム管理ツールとして実行されるリリース8.9アプリケーションであり、表示される指示に従ってリリース8.9を実行するマシンを構成できます。

リリース8.9をリモート・ロケーション用にセットアップするには、リモート・ロケーションを含むプランを作成します。ここで説明するタスクは、基本的なインストール・プランを既に作成して完了おり、その構成にリモート・ロケーションを追加する場合を想定しています。また、代替言語をインストールするように選択していることも前提としています。

次の図は、リモート・ロケーションのセットアップ方法の一例を示しています。階層1および階層Nは、2次ロケーションまたは複数階層のロケーションを示しています。

Setting Up Remote Locations



タスクを開始する前に、リリース8.9でレプリケーション機能を使用するかどうかを決定します。レプリケーション機能を使用すると、〈Install Workbench(インストール・ワークベンチ)〉では、システム・テーブル、データ辞書テーブル、コントロール・テーブル、固定情報テーブル、およびマスター・テーブルが、リモート・ロケーションにコピーされます。リリース8.9では組込みのレプリケーション・エンジンがなくなったため、これらのソースにあるデータを今後レプリケートしていく場合は、サードパーティ・ソフトウェアを使用する必要があります。リリース8.9のレプリケーションを使用する場合は、〈Installation Planner〉の処理オプションを検討し、レプリケーション用に正しく設定されているかどうかを確認してください。

データベース・タイプやエンタープライズ・サーバー・タイプなど、〈Installation Planner〉フォームで指定す

る情報によって、残りのフォームに表示される情報が決まります。

参照

- ・ インストール・プランとその関連処理オプションについては、「Installation Plannerの実行」
- ・ 〈Installation Planner〉の処理オプションがプラン設定時に表示される選択内容及び影響については、「Installation Plannerの処理オプションの検討」

〈Installation Planner〉に関する考慮事項
レプリケートするテーブルに応じて、異なるデータ・ソース情報を求めるプロンプトが表示されます。たとえば、コントロール・テーブルをレプリケートするように選択すると、コントロール・テーブル・データ・ソースの定義を求めるプロンプトが表示されます。

データ・ソースに関する考慮事項
データ・ソースはあらかじめ定義されています。ただし〈Installation Planner〉の実行時には、使用中のシステム固有の構成が反映されるように、データ・ソース情報の一部修正を必要とする場合があります。リモート・プランの作成時には、レプリケーション・フォームで参照されているデータ・ソースのみが表示されます。

ここで掲載されているフォームは、デプロイメント・サーバー上でデータベースとしてSQL Serverを使用することを前提としています。Oracle、DB2 UDBまたはDB2/400を使用する場合、実際に各フォームに表示される情報は異なります。

リモート・インストール・プランの定義に関する基本情報

次の表は、リモートの〈Installation Planner〉フェーズ全体の基本情報を示しています。個々のタスクによって、条件が異なる場合があります。

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでリリース8.9のプランナ環境にログオンします。
前提条件	リリース8.9のレプリケーション機能を使用するかどうかを確定します。デプロイメント・サーバーをインストール済みで、リリース8.9ディレクトリが共有されているかどうかを検証します。
同時に行うタスク	なし

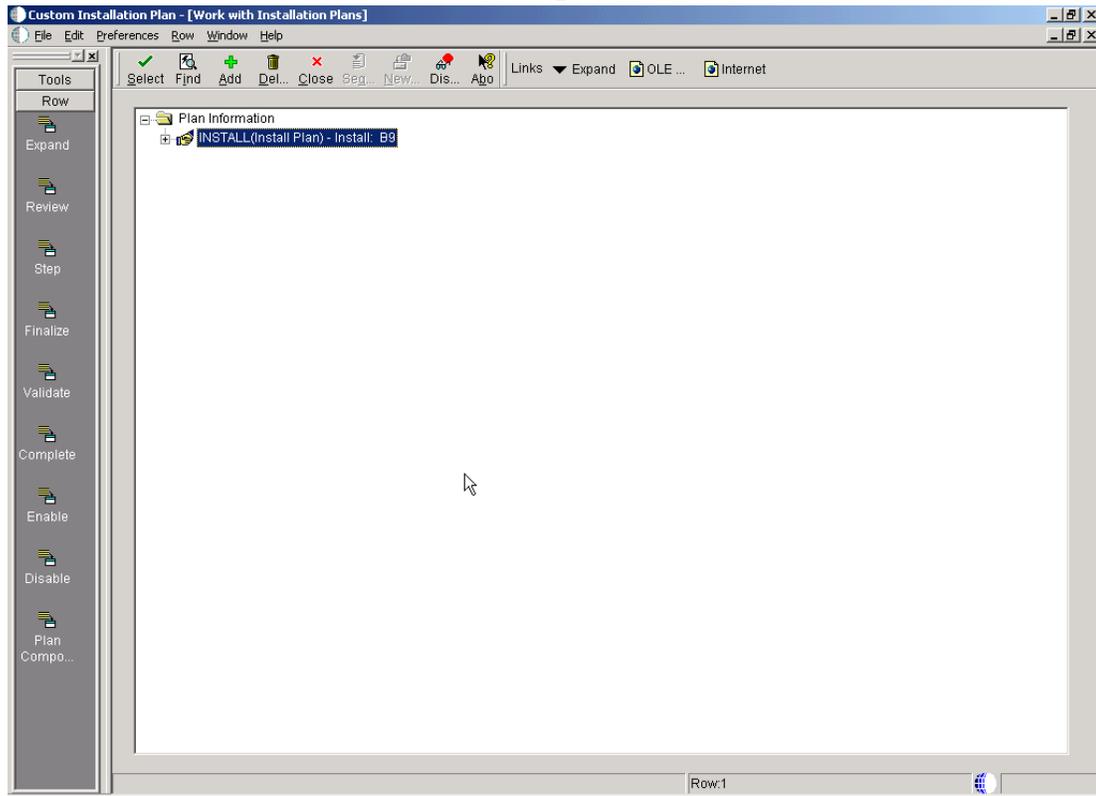
Installation Plannerの開始

リリース8.9にログオンし、〈Installation Planner〉を開始してリモート・インストール・プランを開始します。

▶ 〈Installation Planner〉を開始するには

1. ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードで、リリース8.9にログオンします。
2. プランナ環境(JDEPLAN)にアクセスします。

3. 〈System Installation Tools(システム・インストール・ツール)〉メニュー(GH961)で〈Custom Installation Plan(カスタム・インストール・プラン)〉をクリックします。

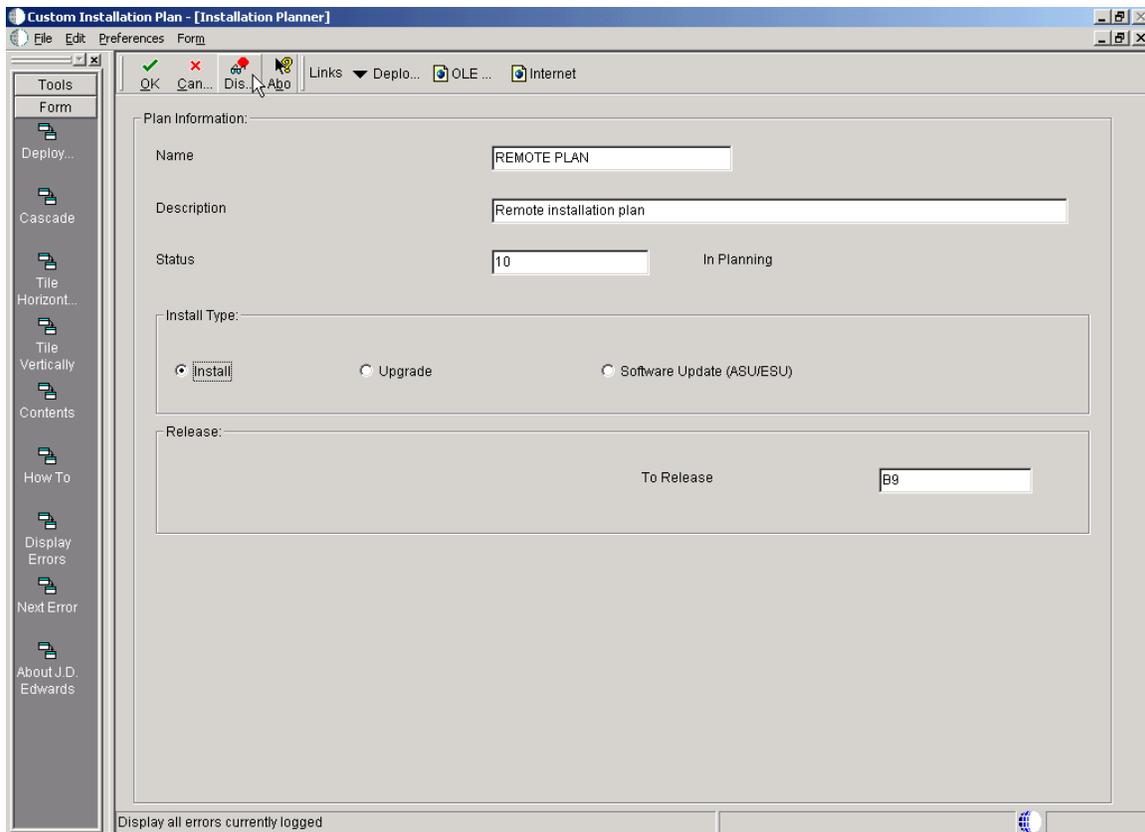


4. 〈Work with Installation Plans(インストール計画の処理)〉で[Add(追加)]をクリックします。
〈Installation Planner〉フォームが表示されます。

Installation Plannerへの情報入力

〈Installation Planner〉の開始後に、プラン名と記述、インストール・タイプ、および組み込む言語(存在する場合)など、基本プラン情報を入力します。

- ▶ 〈Installation Planner〉に情報を入力するには
-



1. 〈Installation Planner〉で、次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Name (名前)
リモート・プラン名。
- ・ Description (記述)
リモート・プランの記述。
- ・ Status (状況)
リモート・プランの状況として10を選択します。
- ・ Install Type (インストール・タイプ)
[Install (インストール)] をクリックします。
- ・ To Release (リリース (To))
リリース番号がb9に設定されていることを確認します。

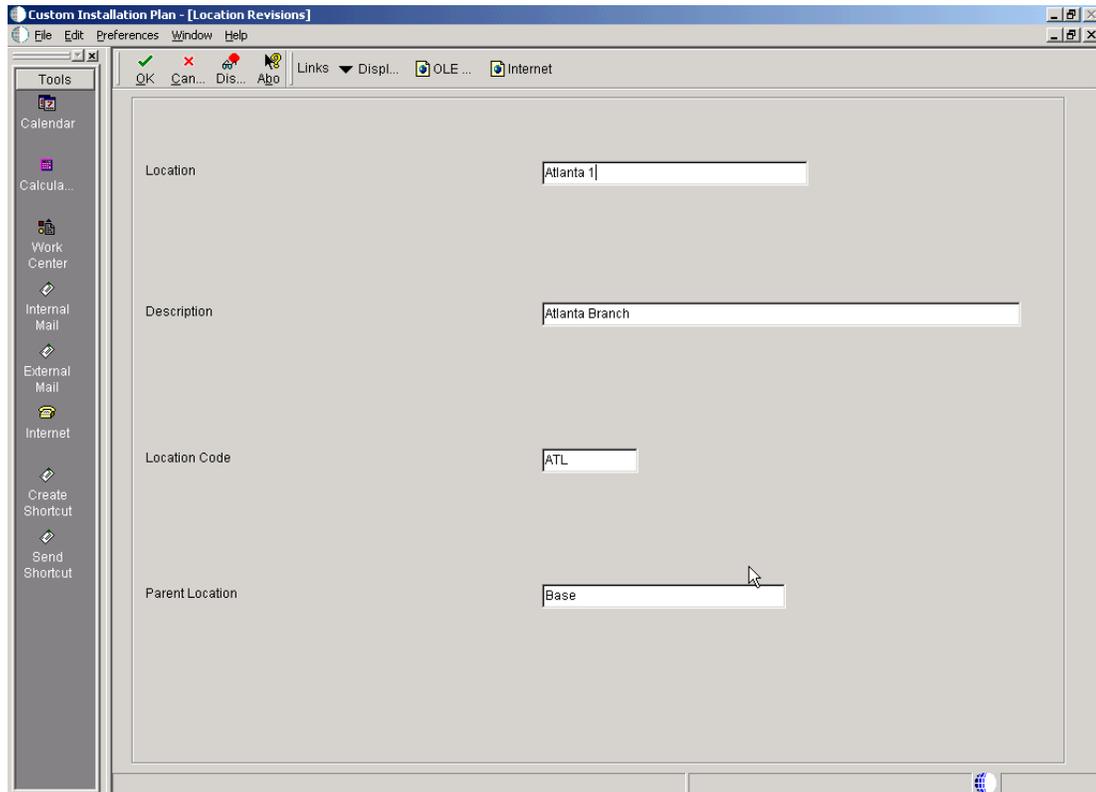
2. [OK] をクリックします。

プランのロケーション情報の入力

基本的なプラン・インストール情報の入力後に、新規プランのロケーションを入力するか、既存プランのロケーションを選びます。

▶ プランのロケーション情報を入力するには

1. 新規ロケーション情報を入力するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。新規ロケーション情報を入力できるように[OK]をクリックします。



2. <Location Revisions(ロケーションの改訂)>に次の情報を入力します。

- ・ Location(ロケーション)

このプランを適用するロケーションを入力します。ロケーションには、市、本社、または部門を指定できます。

- ・ Description

ロケーション名の記述を入力します。

- ・ Location Code(ロケーション・コード)

リモート・ロケーションの場合は、英数字3文字の識別コードを入力します。この3文字のコードは、リモート・ロケーションの環境のプレフィックスとして使用され、レプリケートされるデータ・ソースにはサフィックスとして添付されます。たとえばロケーションがテキサス州ダラスの場合は、DALを使用できます。その場合、プロトタイプ環境名はDALPY9となり、ビジネス・データ・データ・ソー

ス名はBusiness Data - CRPDALとなります。

- ・ Parent Location(親ロケーション)

リモート・ロケーションの場合は、このリモート・ロケーションの接続先となる親ロケーションを入力します。

3. [OK]をクリックします。

〈Deployment Server Revisions(デプロイメント・サーバーの改訂)〉フォームが表示されます。

デプロイメント・サーバーの指定

プランのロケーションを指定した後に、デプロイメント・サーバーに関する情報を入力します。新規デプロイメント・サーバーを入力するか、既存のデプロイメント・サーバーを選びます。ほとんどの場合は、リモート・ロケーション用に複数階層のデプロイメント・サーバーを使用することになります。

次のタスクを完了してください。

- ・ [手順 4](#) [348]
- ・ [手順 5](#) [350]

▶ デプロイメント・サーバー情報を入力するには

新規デプロイメント・サーバーの情報を入力するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. デプロイメント・サーバーを追加できるように[OK]をクリックします。

The screenshot shows the 'Custom Installation Plan - [Deployment Server Revisions]' dialog box. The 'Deployment' tab is selected. The form contains the following fields and values:

- Machine Usage: 15
- Machine Name: DEPLOY2
- Description: Deployment Server 2
- Release: B9
- Host Type: 50 Intel NT
- Location: Atlanta 1
- Primary User: JDE
- Primary Deployment Server: 1
- Server Share Path: \\B9

2. 〈Deployment Server Revisions〉フォームの上部分にある、次のフィールドに情報を入力します。

- Machine Usage (マシン用途)

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の15は、これがデプロイメント・サーバーであることを示します。
- Machine Name (マシン名)

デプロイメント・サーバー名を入力します。
- Description

マシン名の記述を入力します。この名前には、このデプロイメント・サーバーが関連するロケーションと、これがプライマリ・サーバーかどうかという情報を含める必要があります。
- Release (リリース)

インストールするリリース8.9のリリース番号を入力するか、ビジュアル・アシストを使用してリストから番号を1つ選択します。たとえばB9は現在のリリースです。
- Host Type (ホスト・タイプ)

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の50は、サーバー・タイプがIntel NTであることを示します。
- Location

このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

- ・ Primary User(プライマリ・ユーザー)

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [Deployment(デプロイメント)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Primary Deployment Server(プライマリ・デプロイメント・サーバー)

サーバーの階層を指定します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
1	プライマリ・デプロイメント・サーバー
0	2次デプロイメント・サーバー

既にこのロケーションのプライマリ・デプロイメント・サーバーがあり、これが2次サーバーの場合は、“0”(ゼロ)を入力します。

これがこのロケーションのプライマリ・デプロイメント・サーバーの場合は、“1”を入力します。

- ・ Server Share Path(サーバー共有パス)

デプロイメント・サーバー上でリリース8.9をインストールしたサーバー共有パスを入力します。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。たとえばリリース8.9の場合は、パスの最後が¥b9となります。

4. [OK]をクリックします。

トラブルシューティング
各タブのフィールドに無効な情報を入力すると、デプロイメント・サーバーなど、そのタブ名の横に停止アイコンが表示されます。エラーの詳細を確認するには、フォーム右下隅の停止アイコンをクリックしてください。

▶ デプロイメント・サーバーのセットアップを完了するには

1. 別のデプロイメント・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 別のデプロイメント・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。

「[デプロイメント・サーバーの指定 - ページ \[348\]](#)」のステップを繰り返してください。

- ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。
次のステップに進みます。
- 2. エンタープライズ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
 - ・ エンタープライズ・サーバーを追加する場合は、[OK]をクリックします。
「[デプロイメント・サーバーの指定 - ページ \[348\]](#)」に進んでください。

注意

リリース8.9のレプリケーション機能を使用する場合は、エンタープライズ・サーバーを追加してください。

- ・ エンタープライズ・サーバーのセットアップをスキップしてリモートの〈Installation Planner〉に進むには、[Skip(スキップ)]をクリックします。
「[マシン/サーバー・タイプの定義 - ページ \[357\]](#)」に進んでください。

エンタープライズ・サーバーの指定

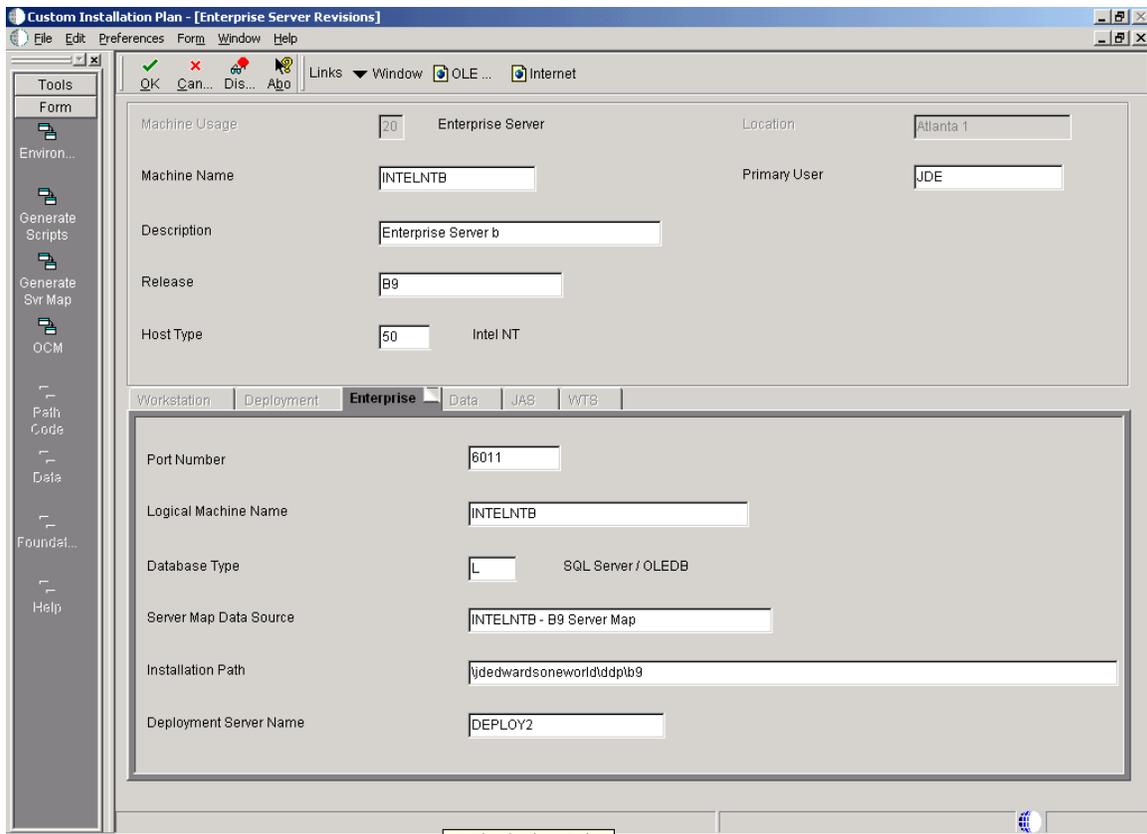
デプロイメント・サーバーを指定した後は、次の処理を完了してエンタープライズ・サーバーを追加します。

- ・ [エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ \[351\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力 - ページ \[354\]](#)

エンタープライズ・サーバー情報の入力

このプランに使用するエンタープライズ・サーバーの基本情報を入力します。

- ▶ [エンタープライズ・サーバー情報を入力するには](#)
-



1. <Enterprise Server Revisions (エンタープライズ・サーバーの改訂)>フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の20は、これがエンタープライズ・サーバーであることを示します。

- Machine Name

プライマリ・エンタープライズ・サーバー名。マシン名は、大文字と小文字が区別されます。

注意

クラスターソフトウェアを使用している場合は、マシン名ではなくクラスタ名を入力します。リリース8.9のインストール時には、サーバー名としてクラスタ名を使用してください。リリース8.9のコピーが1つ実行され、両方のノードに共有されます。

- Description

マシンの記述を入力します。

- Release

このプランを適用するソフトウェアのリリース番号を入力するか、ビジュアル・アシストを使用してリストから番号を1つ選択します。たとえば“b9”と入力します。

- Host Type

ビジュアル・アシストをクリックし、プランに追加するエンタープライズ・サーバーのタイプを選択します。

たとえば、Intel NTを選択します。

- Location

このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

- Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

2. [Enterprise(エンタープライズ)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- Port Number(ポート番号)

このフィールドのデフォルト値は、JDE.INIファイルから取り込まれます。このエンタープライズ・サーバーのポート番号を、固有の値(6011など)に変更してください。

- Logical Machine Name(論理マシン名)

このフィールドのデフォルト値は、ホスト・タイプの入力時に設定されます。

- Database Type(データベース・タイプ)

エンタープライズ・サーバーでデータ・ソースに使用するデータベースのタイプ。次の有効な値のうち1つを入力します。

値	データベース
O	Oracle
L	SQL Server OLEDB
W	DB2 UDB

SQL Serverの場合は、OLEDBを使用することをお勧めします。

- Server Map Data Source(サーバー・マップ・データ・ソース)

このフィールドのデフォルト値は、ホスト・タイプの入力時に設定されます。

- Installation Path(インストール・パス)

エンタープライズ・サーバー上でリリース8.9をインストールするインストール・ディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。

例: リリースB9の場合、パスの最後は**%b9**となります。パスにドライブx:の追加が必要になる場合があります。

- ・ Deployment Server Name (デプロイメント・サーバー名)

ビジュアル・アシストを使用して、このエンタープライズ・サーバーの接続先となるデプロイメント・サーバーの名前を指定します。このフィールドにはデフォルト値が設定されますが、必要に応じて変更できます。

3. [OK]をクリックします。

カスタム・データ・ソースを入力するか、またはデフォルトのデータ・ソースを使用するかを確認するメッセージ・ボックスが表示されます。次の「[共有データ・ソースのセットアップ情報の入力 - ページ \[?\]](#)」に進みます。

エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力

エンタープライズ・サーバー情報を指定した後に、このプランで使用するエンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報を入力します。サーバー・データ・ソースには、サーバーでUBEを実行できるようにシステム構成ファイルが保持されます。

次のタスクを完了してください。

- ・ [手順 7 \[354\]](#)
- ・ [手順 8 \[355\]](#)
- ・ [手順 9 \[355\]](#)
- ・ [手順 10 \[356\]](#)

▶ カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには

- ・ 追加したエンタープライズ・サーバーについて、カスタム・データ・ソースを入力するか、デフォルトのデータ・ソースを使用するかを確認するプロンプトが表示されます。次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ カスタム・データ・ソースを入力するには、[OK]をクリックします。

「[手順 9 \[355\]](#)」に進んでください。

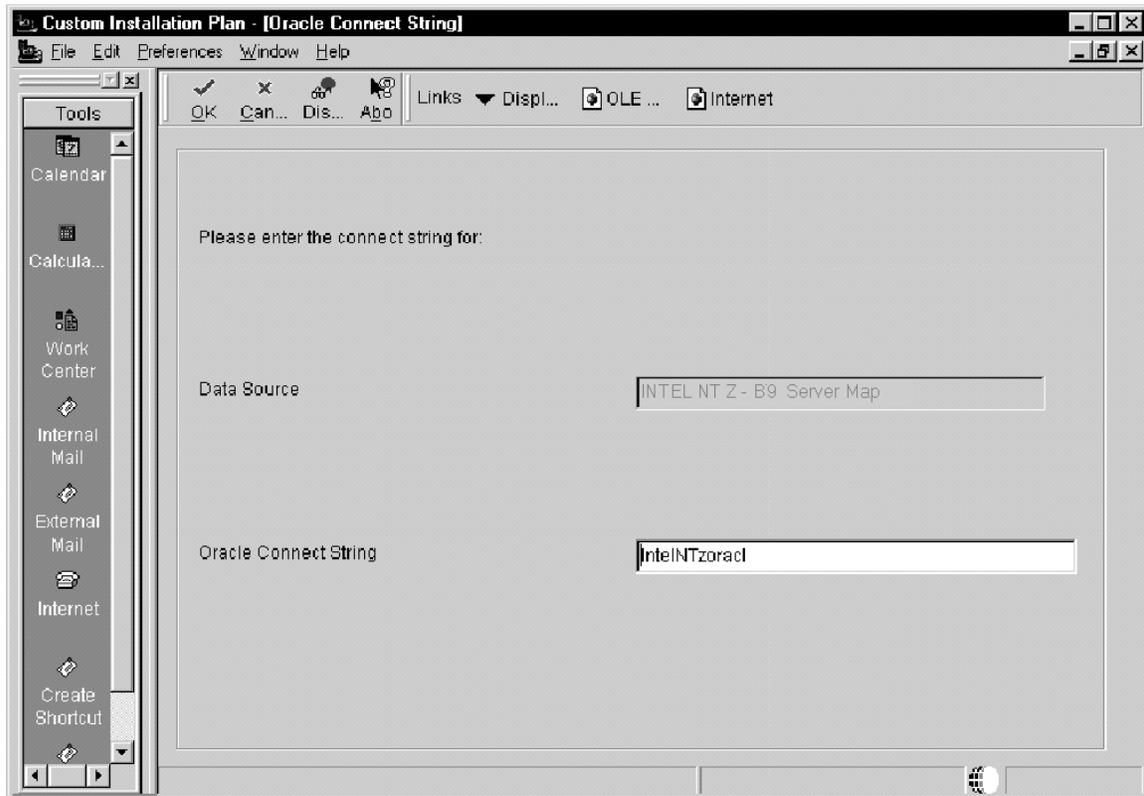
- ・ リリース8.9のデフォルトのデータ・ソースを受け入れるには、[Take Defaults (デフォルトを使用)]をクリックします。

このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。

Oracleを使用している場合は、「[手順 8 \[355\]](#)」に進みます。

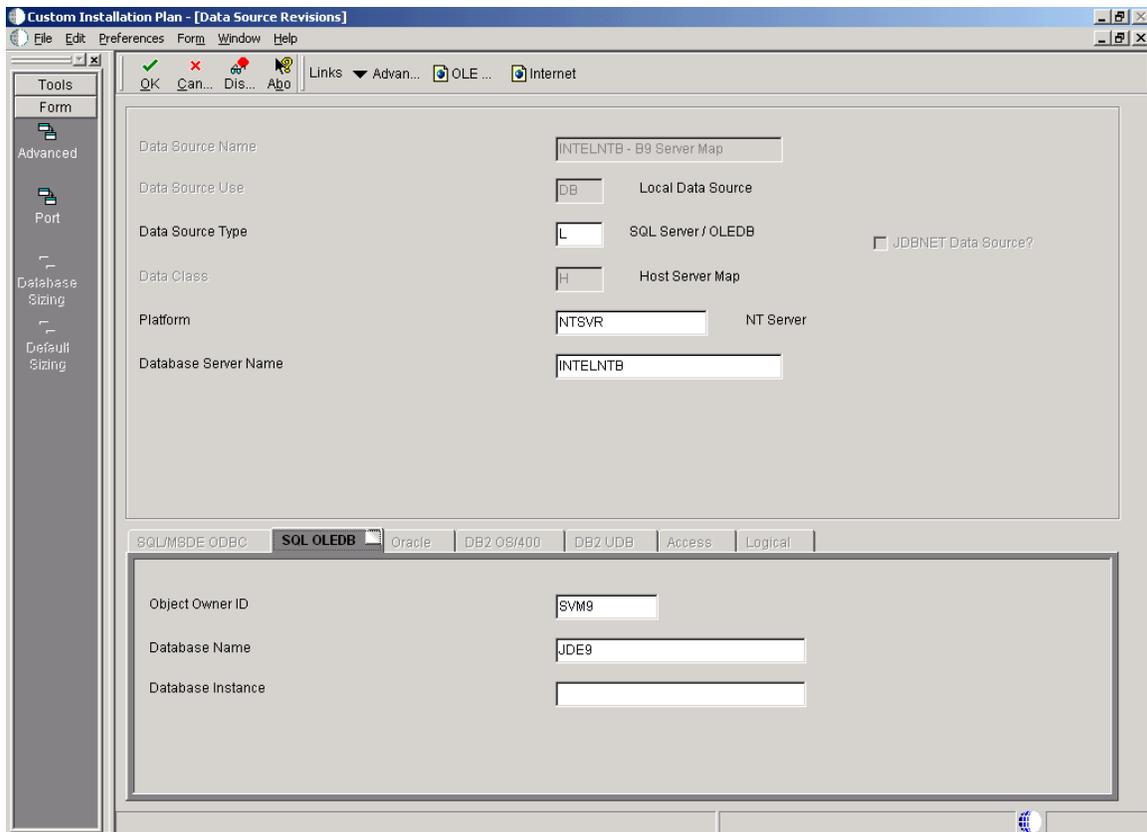
SQL ServerまたはDB2 UDBを使用している場合は、「[手順 10 \[356\]](#)」に進みます。

▶ Oracle接続文字列を入力するには(Oracleのみ)



1. <Oracle Connect String(Oracle接続文字列)>で、エンタープライズ・サーバーの接続文字列を入力し、[OK]をクリックします。
2. 「手順 10 [356]」に進んでください。

▶ カスタム・サーバー・マップ・ソース情報を検証するには



1. 〈Data Source Setup(データ・ソースの設定)〉で、サーバー・マップ・ソース情報を検証します。

データ・ソースに関する考慮事項
データ・ソースはあらかじめ定義されています。ただし〈Installation Planner〉の実行時には、使用中のシステム固有の構成が反映されるように、データ・ソース情報の一部修正を必要とする場合があります。

2. [OK]をクリックします。

▶ 別のエンタープライズ・サーバーを追加するには

別のエンタープライズ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ 別のエンタープライズ・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ \[351\]](#)」以降のプロセスを繰り返してください。
 - ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。
〈Machine/Server Types(マシン/サーバー・タイプ)〉フォームが表示されます。

マシン/サーバー・タイプの定義

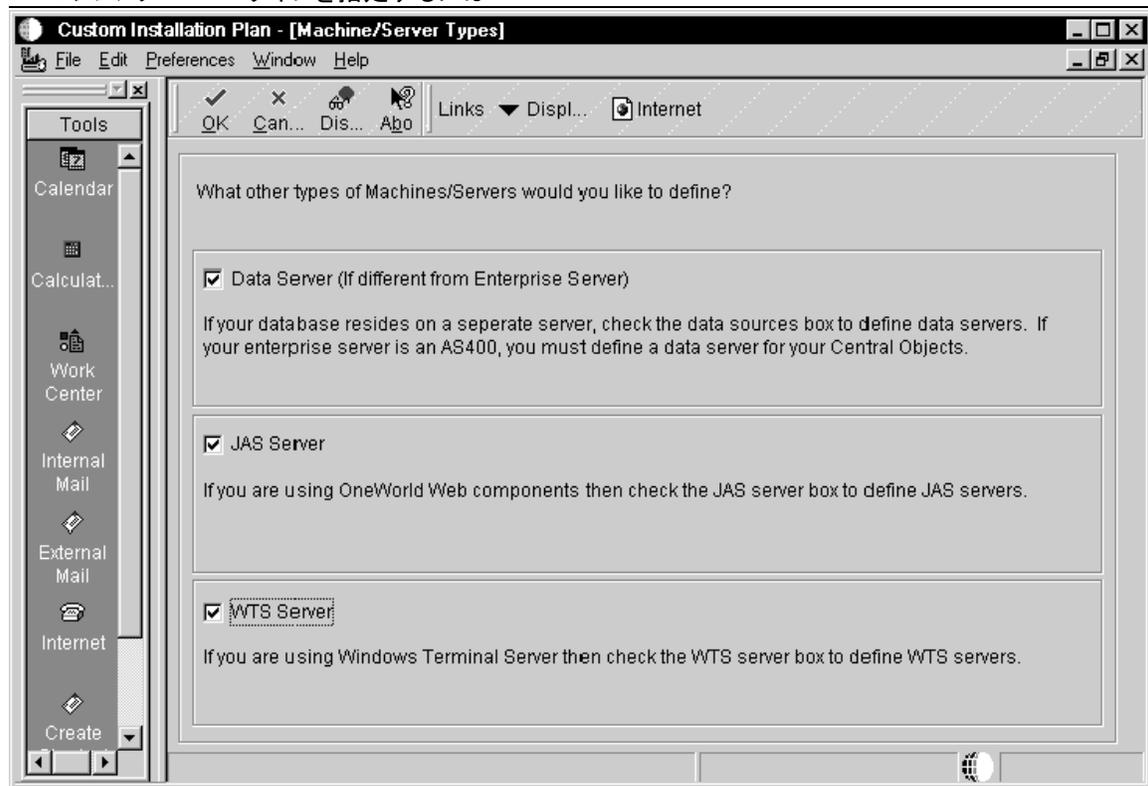
インストール・プランに対して、データ・サーバー、Javaサーバー、およびWindowsターミナル・サーバーという3つのマシン/サーバー・タイプを定義できます。この3タイプのいずれかまたはすべてを定義するには、該当する処理を完了します。

- ・ [マシン/サーバー・タイプの指定 - ページ \[357\]](#)
- ・ 「[データ・サーバーの定義 - ページ \[358\]](#)」(エンタープライズ・サーバーと異なる場合)
- ・ [Javaサーバーの定義 - ページ \[360\]](#)
- ・ [Windowsターミナル・サーバーの定義 - ページ \[362\]](#)

マシン/サーバー・タイプの指定

インストール・プランに追加するマシン/サーバーのタイプを指定して、マシン/サーバーの定義プロセスを開始します。

▶ マシン/サーバー・タイプを指定するには



- ・ <Machine/Server Types>で、次のオプションのうち1つを選択して、定義するマシン/サーバーのタイプを指定します。
 - ・ サーバーを追加するには、必要なサーバー・オプションを有効にして[OK]をクリックします。

次の関連タスクに進みます。

- これらのサーバーをどれも追加しない場合は、各オプションを無効にして[OK]をクリックします。
「[共有データ・ソースのセットアップ情報の入力 - ページ \[363\]](#)」に進んでください。

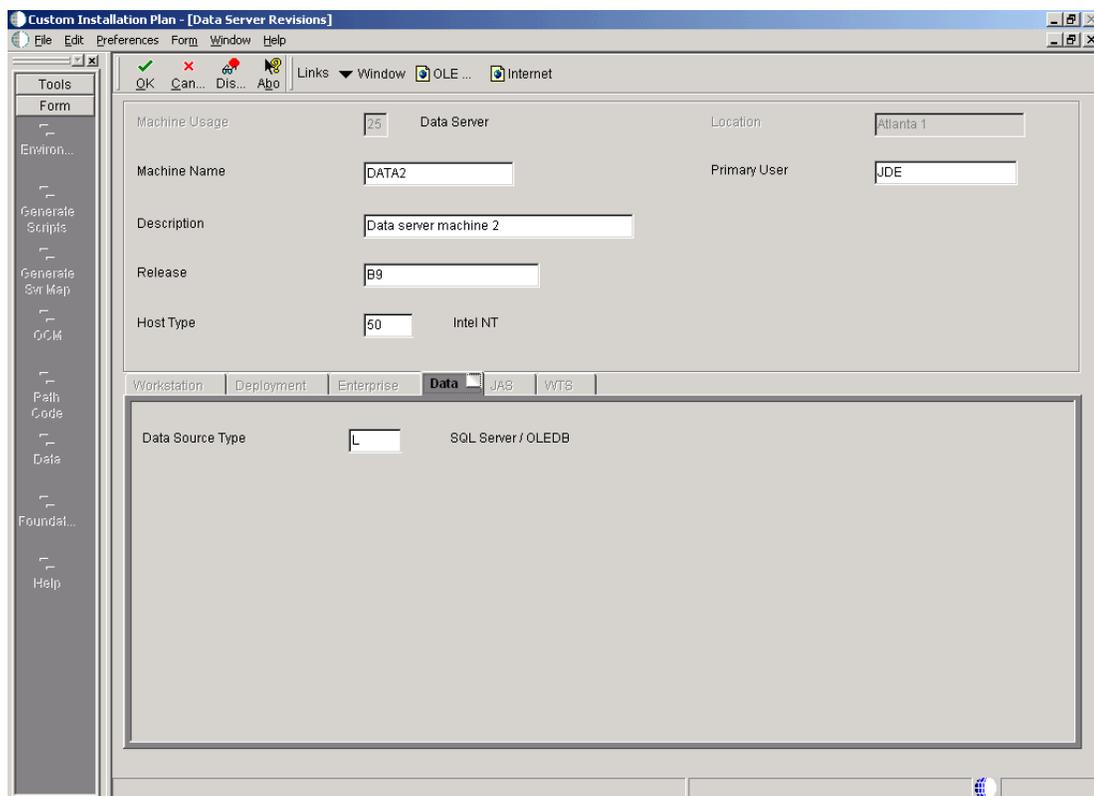
データ・サーバーの定義

インストール・プラン用のデータ・サーバーを定義するには、次のタスクを実行します。

▶ データ・サーバーを定義するには

〈Machine/Server Types〉フォームで[Data Server (データ・サーバー)]を有効にすると、データ・サーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- [OK]をクリックして次のタスクに進みます。



- 〈Data Server Revisions (データ・サーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の25は、これがデータ・サーバーであることを示します。

- ・ Machine Name
データ・サーバー名を入力します。
- ・ Description
マシンの記述を入力します。
- ・ Release
インストールするソフトウェアのリリース番号を入力します。たとえば“b9”と入力します。
- ・ Host Type
プランに追加するデータ・サーバーのタイプを選択します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
10	iSeries
20	HP 9000
25	Sun Solaris
30	RS/6000
50	Intel NT

- ・ Location
このプラン用に選んだロケーションがデフォルト設定されます。
- ・ Primary User
パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [Data(データ)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Data Source Type (データ・ソース・タイプ)
データ・ソースのタイプを選択します。有効な値は次のとおりです。

値	データベース
O	Oracle
L	SQL Server OLEDB
W	DB2 UDB

SQL Serverの場合は、OLEDBを使用することをお勧めします。

4. [OK]をクリックします。

別のデータ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

5. 次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ 別のデータ・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[データ・サーバーの定義 - ページ \[358\]](#)」のステップを繰り返します。
- ・ リモートの<Installation Planner>でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。

Javaサーバーの定義

インストール・プラン用のJavaサーバーを定義するには、次のタスクを実行します。

▶ Javaサーバーを定義するには

<Machine/Server Types>フォームで[JAS Server(JASサーバー)]を有効にすると、JASサーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [OK]をクリックして次のタスクに進みます。

The screenshot shows a dialog box titled "Custom Installation Plan - [JAS Server Revisions]". It has a menu bar with "File", "Edit", "Preferences", "Form", "Window", and "Help". Below the menu bar are buttons for "OK", "Can...", "Dis...", and "Ab...", along with "Links", "Window", "OLE...", and "Internet". The main area is split into two panes. The top pane has the following fields: "Machine Usage" (30), "Machine Name" (JAVA), "Description" (Java Server Machine), "Release" (B9), and "Host Type" (50 Intel NT). The bottom pane, titled "JAS", has the following fields: "Primary JAS Server" (1), "Protocol" (http), "Server URL" (jdedwards.com), "Port Number" (80), "Default Login" (jdedwards.html.login), and "Installation Path" (empty).

2. <JAS Server Revisions(JASサーバーの改訂)>フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Machine Usage
このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の30は、これがJavaアプリケーション・サーバーであることを示します。
- ・ Machine Name
Javaアプリケーション・サーバー名を入力します。マシン名は、大文字と小文字が区別されます。
- ・ Description
マシンの記述を入力します。
- ・ Release
インストールするソフトウェアのリリース番号を入力します。たとえば“b9”と入力します。リリース番号変更は手作業で変更する場合があります。
- ・ Host Type
このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の50は、サーバー・タイプがIntel NTであることを示します。
- ・ Location
このプラン用に選んだロケーションがデフォルト設定されます。
- ・ Primary User
パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [JAS]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Installation Path
JASサーバー上でリリース8.9をインストールするインストール・ディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。たとえばリリース8.9の場合は、パスの最後が¥b9となります。

4. [OK]をクリックします。

別のJavaサーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

5. 次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ 別のJavaサーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[Javaサーバーの定義 - ページ \[360\]](#)」のステップを繰り返します。
- ・ リモートの〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。

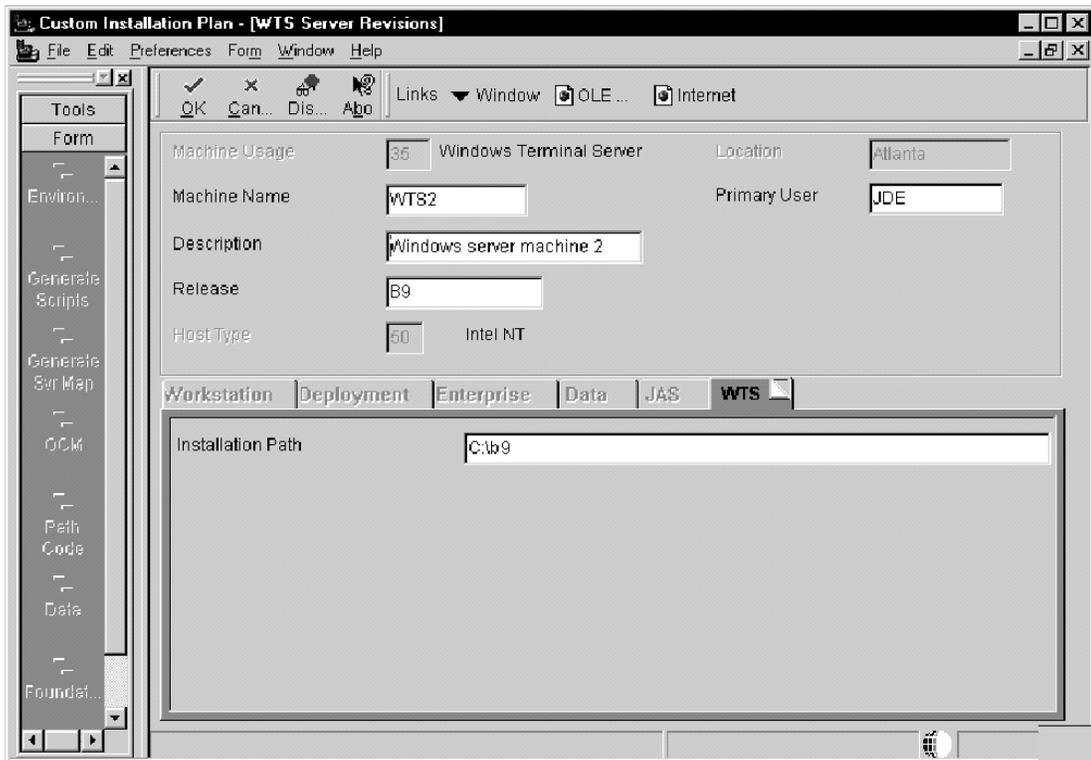
Windowsターミナル・サーバーの定義

インストール・プラン用のWindowsターミナル・サーバーを定義するには、次のタスクを実行します。

▶ Windowsターミナル・サーバーを定義するには

〈Machine/Server Types〉フォームで[WTS Server (WTSサーバー)]を有効にすると、WTSサーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [OK]をクリックして次のタスクに進みます。



2. 〈WTS Server Revisions (WTSサーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の35は、これがWindowsターミナル・サーバーであることを示します。

- Machine Name

Windowsターミナル・サーバー名を入力します。マシン名は、大文字と小文字が区別されます。

- Description

マシンの記述を入力します。

- Release

インストールするソフトウェアのリリース番号(b9など)を入力します。リリース番号変更は手作業

- で変更する場合があります。
- ・ Host Type
このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の50は、サーバー・タイプがIntel NTであることを示します。
 - ・ Location
現在作業しているロケーションがデフォルト値として設定されます。
 - ・ Primary User
パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。
3. [WTS]タブで次のフィールドに情報を入力します。
- ・ Installation Path
Windowsターミナル・サーバー上でリリース8.9のインストール先となるインストール・ディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのバージョン固有であることを確認してください。たとえばパスの最後は¥b9となります。
4. [OK]をクリックします。
別のWindowsターミナル・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
5. 次のオプションのうち1つを選択します。
- ・ 別のWindowsターミナル・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[Windowsターミナル・サーバーの定義 - ページ \[362\]](#)」のステップを繰り返します。
 - ・ リモートの〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。

共有データ・ソースのセットアップ情報の入力

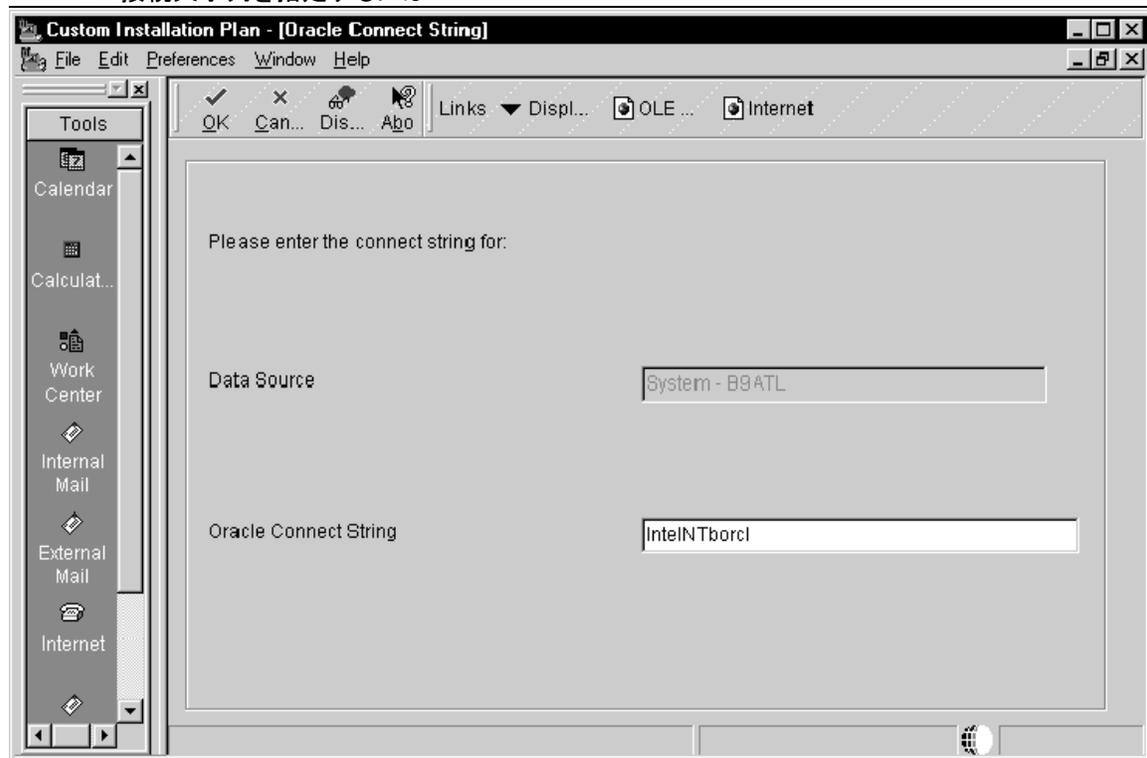
すべての環境間で共有されるデータ・ソースの情報を入力または確認するには、次のタスクを完了します。

- ・ [手順 15 \[364\]](#)
- ・ [手順 16 \[364\]](#)
- ・ [手順 17 \[364\]](#)
- ・ [手順 18 \[365\]](#)

▶ (カスタムまたはデフォルトの) 共有データ・ソース・セットアップ情報を指定するには

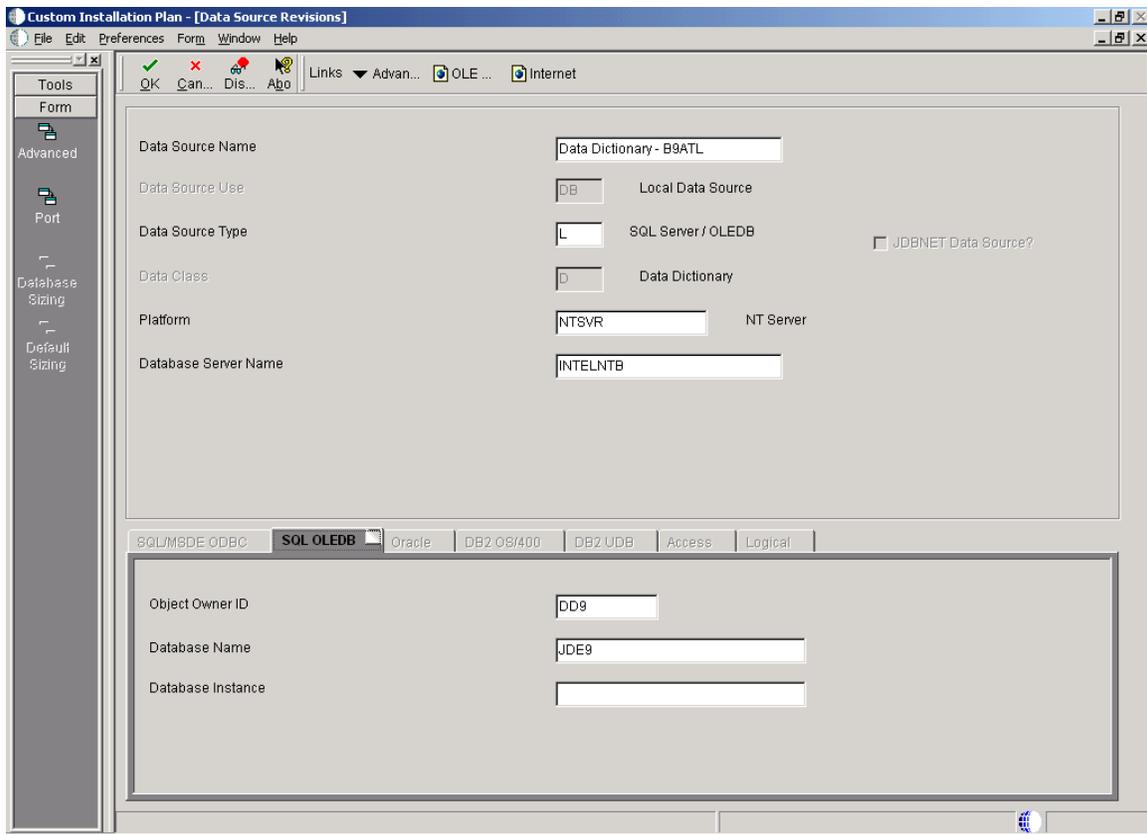
- ・ レプリケート用に選んだ共有データ・ソースの情報を求めるプロンプトが表示されます。次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ [OK]をクリックしてデータ・ソースを入力します。
「手順 17 [364]」に進んでください。
 - ・ [Take Defaults]をクリックしてデフォルトのデータ・ソースを受け入れます。このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。

▶ Oracle接続文字列を指定するには



- ・ 〈Oracle Connect String〉で、エンタープライズ・サーバーの接続文字列を入力し、[OK]をクリックします。
〈Data Source Revisions(データ・ソースの改訂)〉フォームが表示されます。

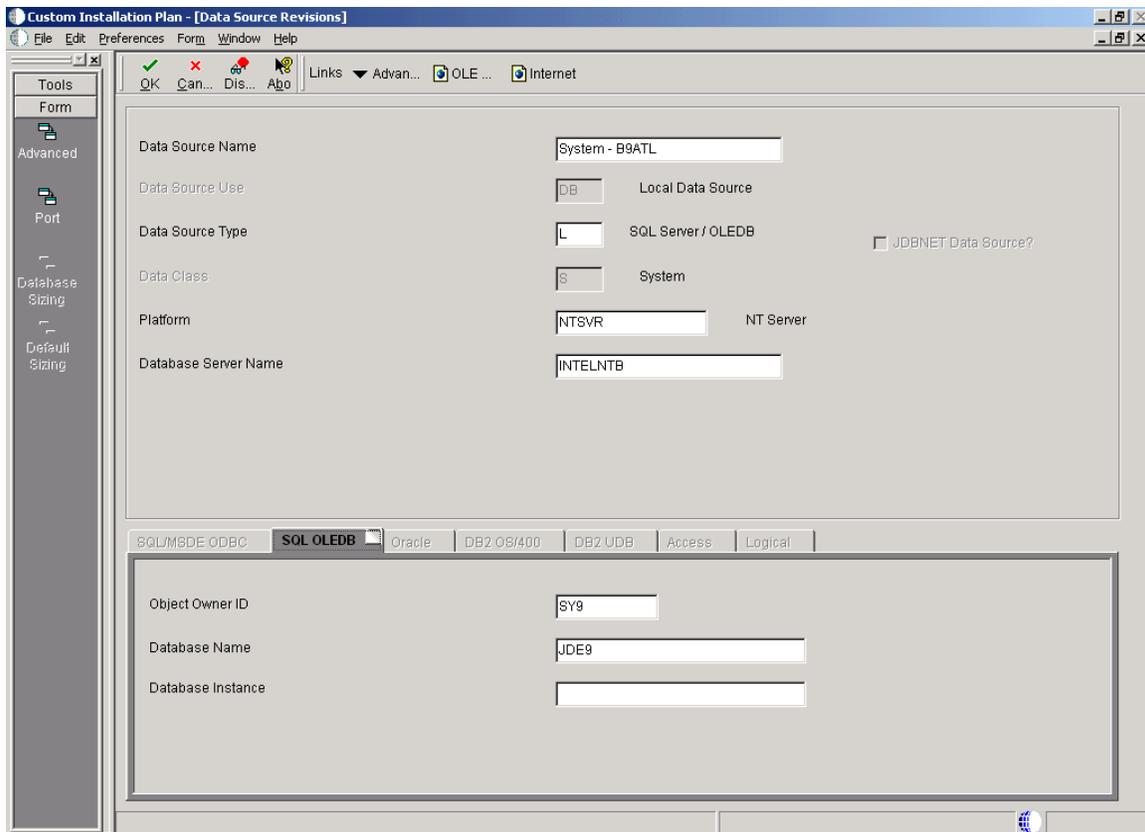
▶ データ辞書のデータ・ソースを検証するには



- ・ 〈Data Source Revisions〉で、データ辞書データ・ソースが正しいかどうかを検証し、[OK]をクリックします。

システム・データ・ソースの情報が表示されます。

- ▶ システム・データ・ソースを検証するには



- ・ 〈Data Source Revisions〉で、システム・データ・ソースの設定が正しいかどうかを検証し、[OK]をクリックします。

システム・データ・ソースのフィールドや、この手順で説明している他のデータ・ソースのフィールドについては、『インストール・リファレンス・ガイド』の「データ・ソース一覧」を参照してください。

環境のセットアップ

デフォルトでは、標準環境の値を使用してシステムが構成されます。プランのセットアップ時に選択したオプションに応じて、次の1つまたは複数のパラメータが表示され、次のタスクでカスタマイズすることができます。

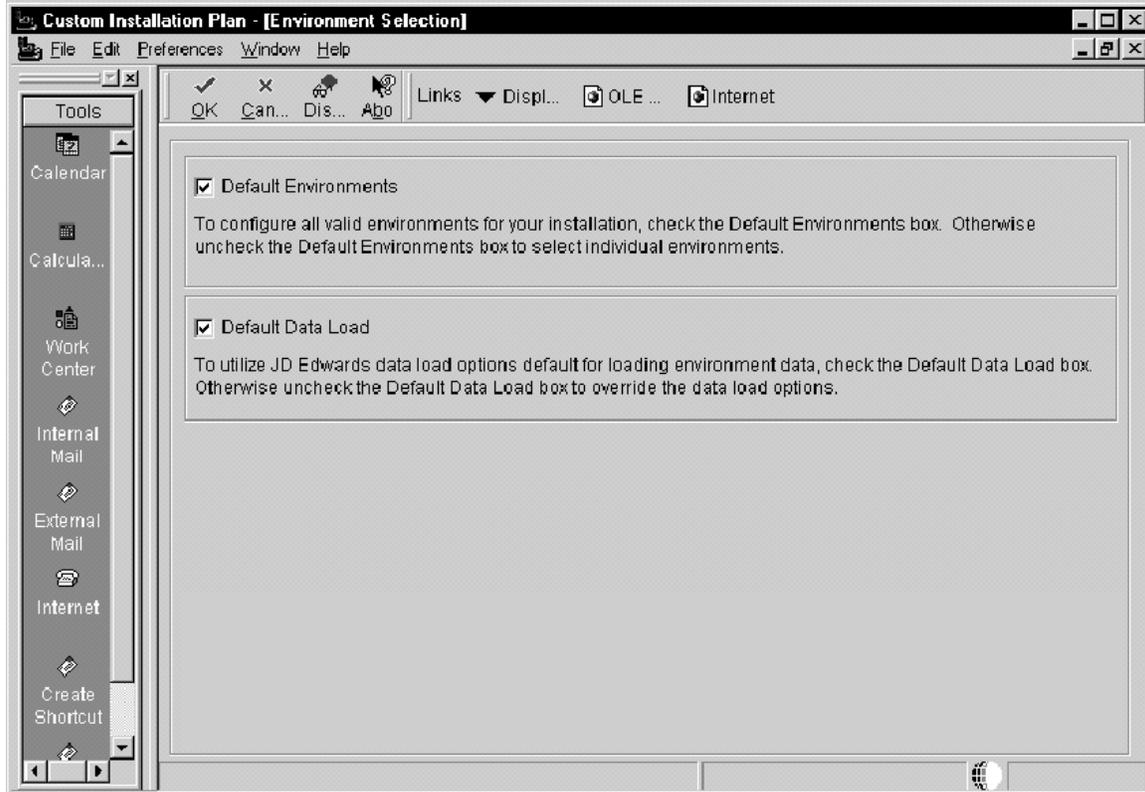
- ・ Environments (環境)
- ・ Data Load Options (データのロード・オプション)
- ・ Advanced Parameters (上級パラメータ)
- ・ Languages (言語)

次の手順に従ってインストール環境、データ・ロード・オプション、環境の上級パラメータおよび環境の言語について、デフォルトまたはカスタムのオプションを指定します。

- ・ [手順 19](#) [367]
- ・ [手順 20](#) [367]
- ・ [手順 21](#) [368]

▶ (カスタムまたはデフォルトの)環境パラメータを指定するには

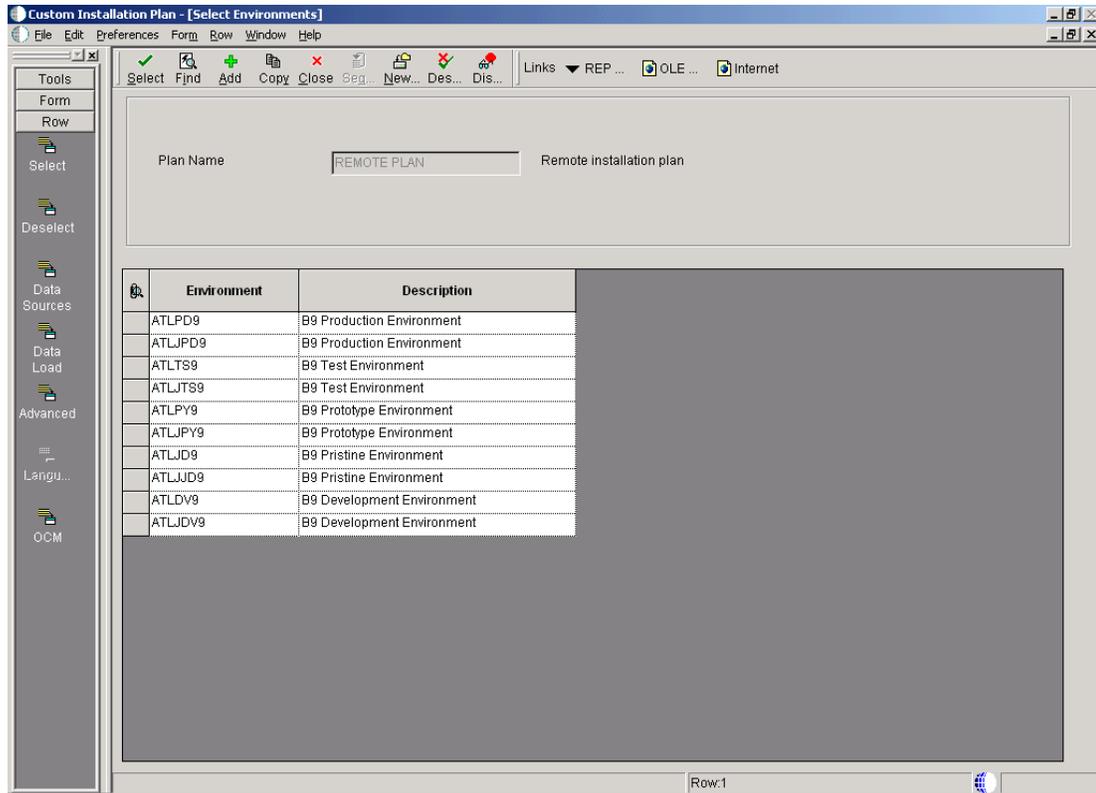
〈Environment Selection (環境の選択)〉フォームが表示されます。



1. 〈Environment Selection〉で、デフォルト環境を受け入れるか、オプションを無効にして独自の環境を入力します。
2. [OK]をクリックします。
3. 「[手順 20](#) [367]」に進んでください。

▶ 環境を選択するには

1. デフォルト・オプションを無効にすると、〈Select Environment (環境の選択)〉フォームが表示されます。
プランにJavaアプリケーション・サーバーまたはWTSが含まれている場合は、J xxxxxx環境が表示されます。

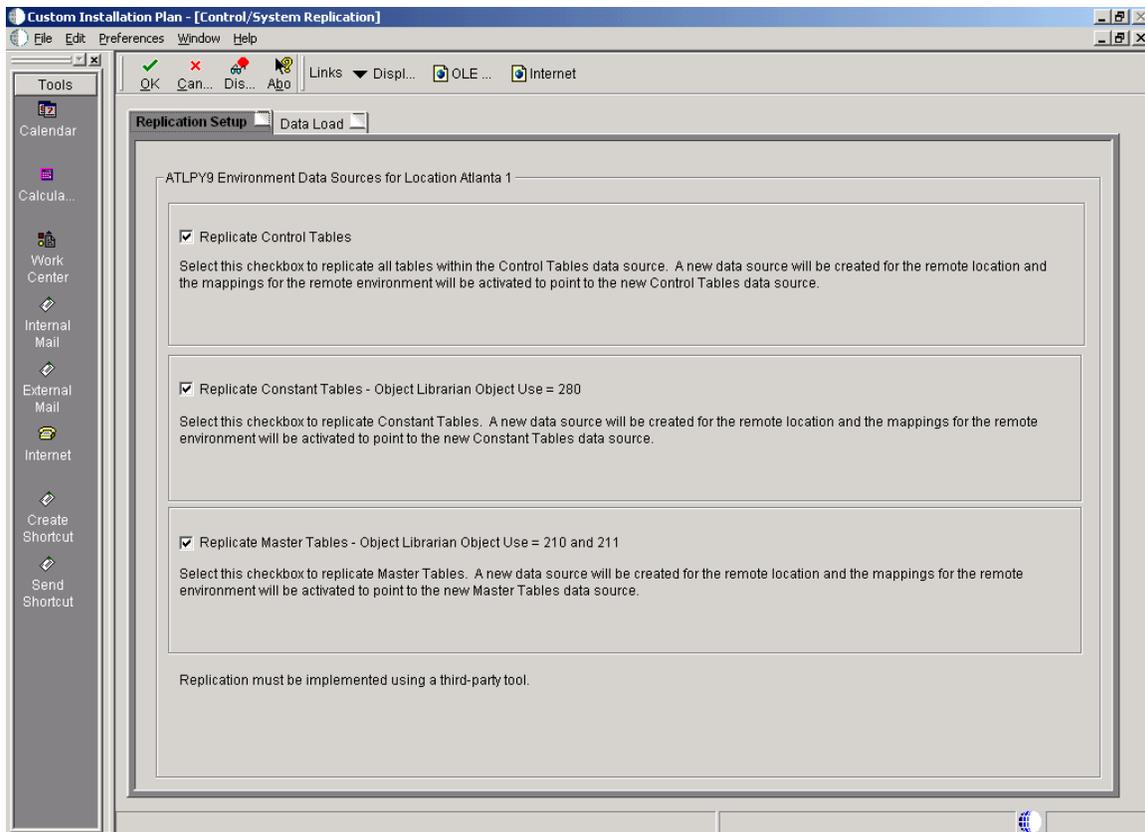


2. 〈Select Environments〉で、定義する環境をダブルクリックします。

複数の環境をセットアップする場合は、1つずつ選んで定義する必要があります。

▶ リモート・ロケーションに情報をレプリケートするには

このフォームで選択するオプションによって、リモート・ロケーションのデータ・ソースとマッピングが構成されるかどうかは確定します。進行中のレプリケーションには、サードパーティ・ソフトウェアを使用する必要があります。



1. <Control/System Replication (コントロール/システム・レプリケーション)>の [Replication Setup (レプリケーション・セットアップ)] タブで、リモート・ロケーションに関する情報のレプリケート・オプションを選択して [OK] をクリックします。
 - ・ Replicate Control Tables (コントロール・テーブルのレプリケート)

コントロール・テーブル・データ・ソースをレプリケーション用に構成するには、このオプションを有効にします。

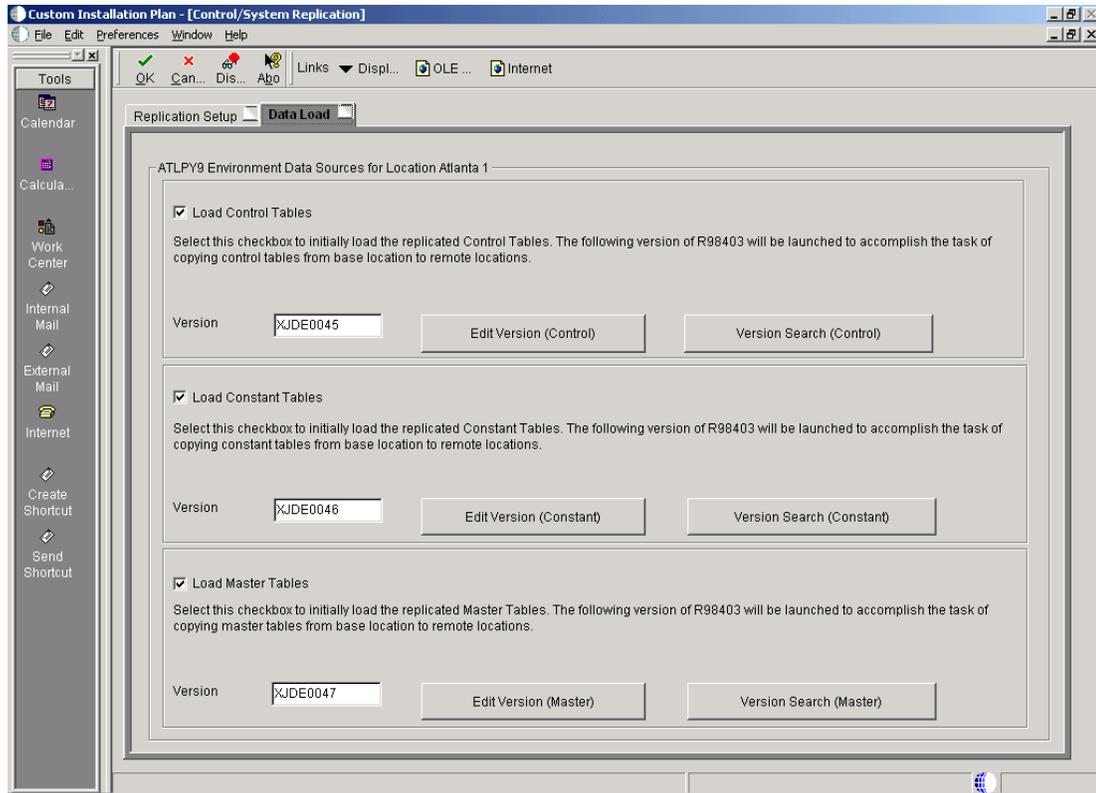
コントロール・テーブルをレプリケートしない場合は、このオプションを無効にします。
 - ・ Replicate Constant Tables (複製固定情報テーブル)

固定情報テーブルをレプリケーション用に構成する場合は、このオプションを有効にします。

固定情報テーブルをレプリケートしない場合は、このオプションを無効にします。
 - ・ Replicate Master Tables (マスター・テーブルのレプリケート)

マスター・テーブルをレプリケーション用に構成する場合は、このオプションを有効にします。

マスター・テーブルをレプリケートしない場合は、このオプションを無効にします。
2. [Data Load (データのロード)] タブをクリックします。



3. [Data Load]タブで、選択したテーブルをリモート・ロケーションにコピーするオプションを選択します。

- ・ Load Control Tables(コントロール・テーブルのロード)

コントロール・テーブルを基本ロケーションからリモート・ロケーションに自動的にコピーする場合は、このオプションを有効にします。

コントロール・テーブルを自動的にコピーしない場合は、このオプションを無効にします。

- ・ Load Constant Tables(固定情報テーブルのロード)

固定情報テーブルを基本ロケーションからリモート・ロケーションに自動的にコピーする場合は、このオプションを有効にします。

固定情報テーブルを自動的にコピーしない場合は、このオプションを無効にします。

- ・ Load Master Tables(マスター・テーブルのロード)

マスター・テーブルを基本ロケーションからリモート・ロケーションに自動的にコピーする場合は、このオプションを有効にします。

マスター・テーブルを自動的にコピーしない場合は、このオプションを無効にします。

注意

該当するバージョンの横の[Edit(編集)]または[Search(検索)]ボタンをクリックすると、コントロール・テーブル、固定情報テーブル、およびマスター・テーブルをコピーするR98403のバージョンをそれぞれ編集または変更できます。

4. [OK]をクリックします。

環境のデータ・ソースのセットアップ

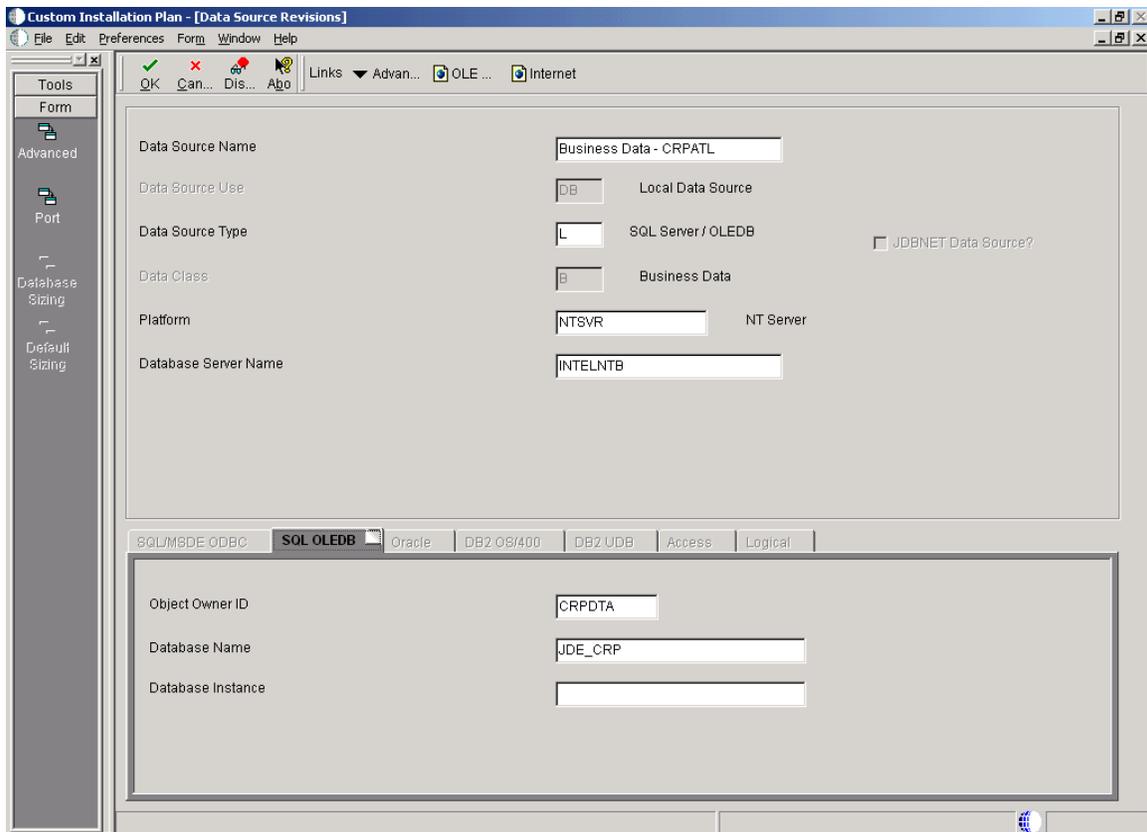
レプリケートするテーブルを指定した後に、次のプロセスに従って環境のデータ・ソースをセットアップします。

- ・ [手順 22](#) [371]
- ・ [手順 24](#) [372]
- ・ [手順 23](#) [371]
- ・ [手順 25](#) [373]

▶ 環境のデータ・ソースのセットアップを開始するには

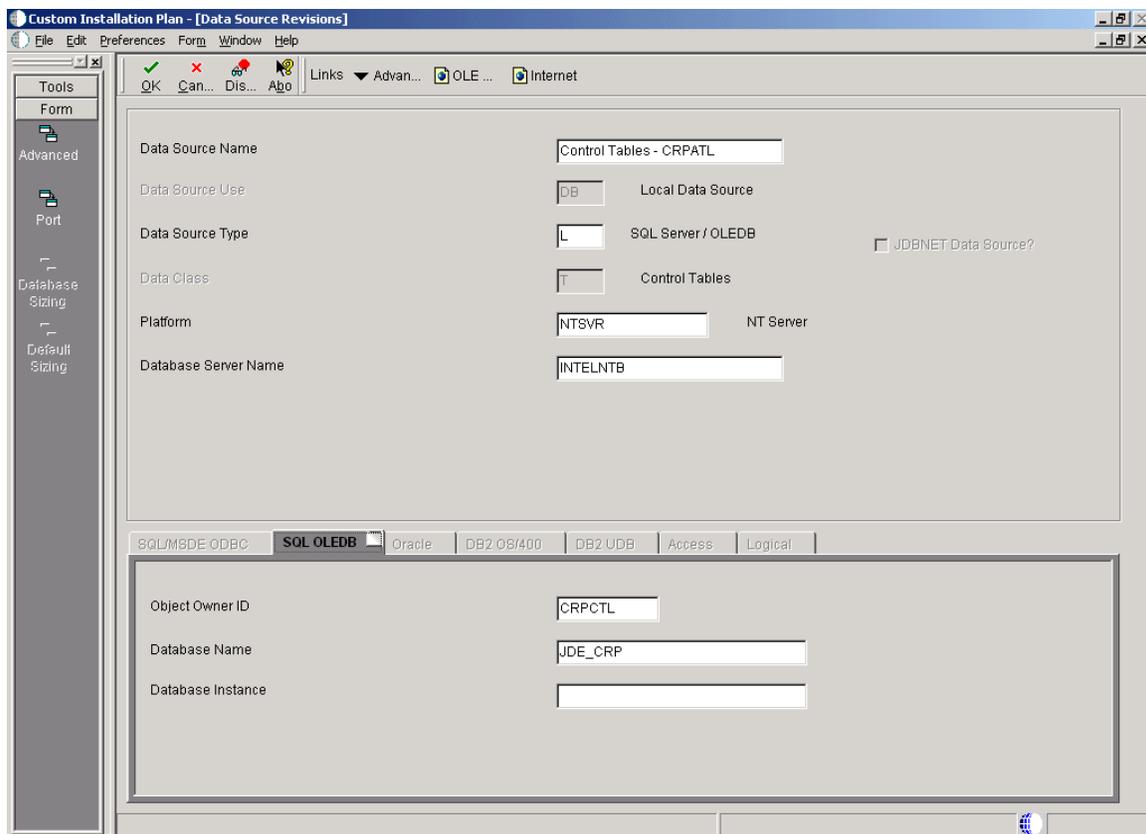
- ・ 選択した各環境のデータ・ソースをセットアップするかどうかを確認するプロンプトが表示されます。次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ データ・ソースを手作業で入力するには、[OK]をクリックして下記の「[手順 24](#) [372]」に進みます。
 - ・ デフォルトのデータ・ソースを受け入れる場合は、[Take Defaults]をクリックして「[手順 25](#) [373]」に進んでください。このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。

▶ ビジネス・データ・データ・ソースをセットアップするには



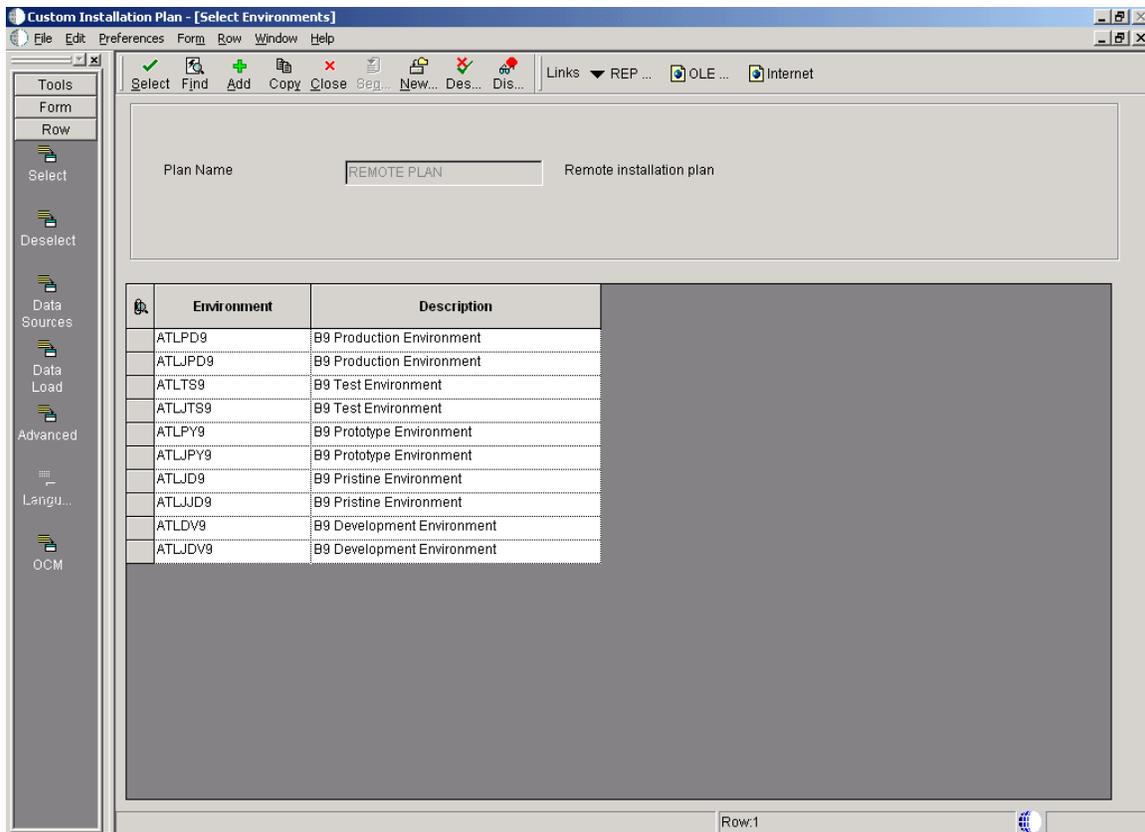
1. 〈Data Source Setup〉で、ビジネス・データのデータ・ソース情報をセットアップまたは検証します。
このデータ・ソースが、アップグレードまたはコピーする既存の本稼働データ・ソースを指しているかどうかを確認してください。
2. [OK]をクリックします。
〈Select Environments〉フォームが表示され、必要に応じて別の環境を定義できます。

▶ コントロール・テーブル・データ・ソースを検証するには



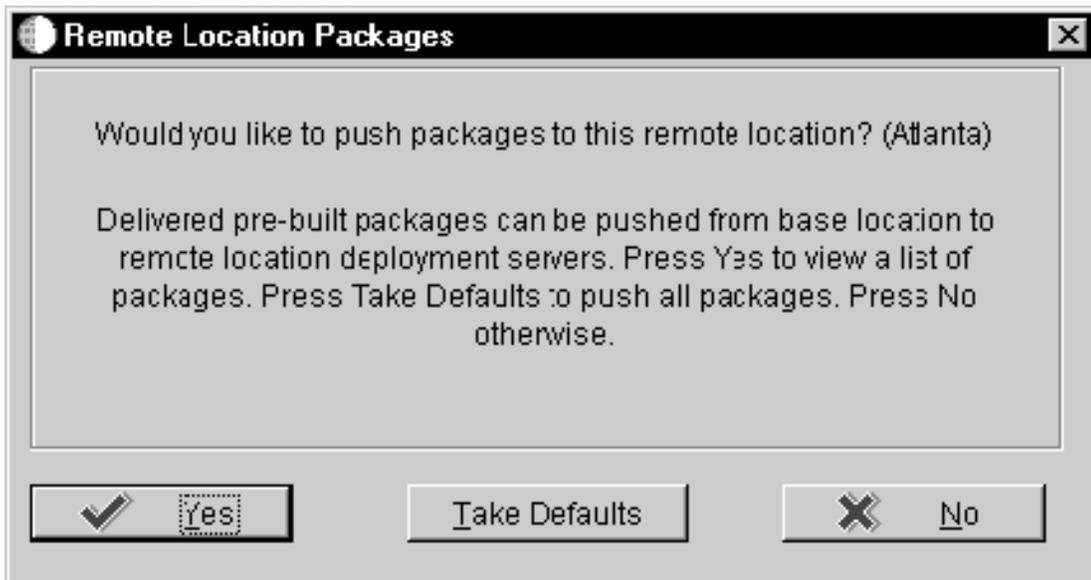
1. 〈Data Source Setup〉で、コントロール・テーブル・データ・ソースを検証します。
2. [OK]をクリックします。

▶ 別の環境を選択するには



1. 〈Select Environments〉で、次に定義する環境を選択します。
2. 「環境のセットアップ - ページ [366]」と「環境のデータ・ソースのセットアップ - ページ [371]」のすべてのタスクを繰り返します。
3. すべての環境を定義した後に、[Close (閉じる)]をクリックします。

次のウィンドウが表示されます。



〈Location Workbench (ロケーション・ワークベンチ)〉を実行すると、配信されたフル・パッケージをリモート・ロケーションにプッシュすることができます。

4. 次のオプションのうち1つを選択します。

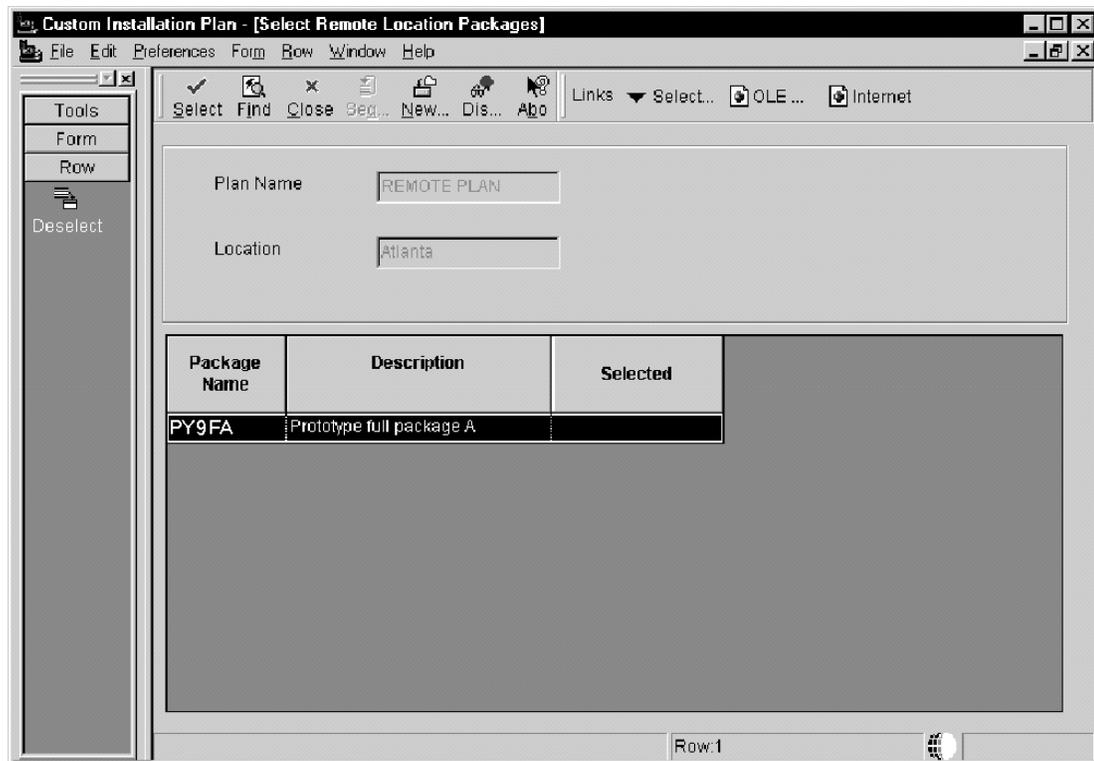
- ・ リモート・ロケーションにプッシュするパッケージのリストを表示するには、[Yes]をクリックします。
- ・ 使用可能なすべてのパッケージをリモート・ロケーションにプッシュするには、[Take Defaults]をクリックします。

「リモート・インストール・プランのセットアップの完了 - ページ [376]」に進んでください。

- ・ パッケージをリモート・ロケーションにプッシュしない場合は、[No]をクリックします。

「リモート・インストール・プランのセットアップの完了 - ページ [376]」に進んでください。

[Yes]をクリックした場合は、〈Select Remote Location Packages (リモート・ロケーション・パッケージの選択)〉フォームが表示されます。



5. 〈Select Remote Location Packages〉で、リストからパッケージを選び、[Row (ロー)]メニューで[Deselect (選択解除)]をクリックします。

注意

[Row]メニューで対応するアイコンをクリックすると、パッケージを選択または選択解除できます

。

6. [Select(選択)]をクリックし、選んだパッケージをプッシュします。

リモート・インストール・プランのセットアップの完了

環境のセットアップを完了後に、別のプランのロケーションを入力するか、リモート・インストール・プランを確定するかを選ぶことができます。

別のロケーションを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 別のロケーションを追加するには[Yes]をクリックします。

「[プランのロケーション情報の入力 - ページ \[346\]](#)」ロケーションを追加するには、すべてのタスクを繰り返します。

- ・ リモートの〈Installation Planner〉でのセットアップを完了するには、[No]をクリックします。

下記の「[インストール・プランの確定 - ページ \[376\]](#)」に進んでください。

インストール・プランの確定

〈Installation Planner〉によってインストール・プランが自動的に確定されます。

▶ インストール・プランを確定するには

1. メッセージが表示され、インストール・プランが確定されたことを確認できます。

プランが確定されるときには、次の処理が実行されます。

- ・ 状況が20に設定されます。この値は、プランに従ってOCMマッピング・テーブルが調整されたことを意味します。
- ・ 次のテーブルが更新されます。

リリース・マスター(F00945)

パス・コード・マスター(F00942)

オブジェクト構成マスター/OCMの作成(F986101)

パッケージ・プラン・テーブル(F98404)

マシン詳細テーブル(F9651)

ホストINI

テーブル変換スケジューラ(F98405)

言語テーブル(F984031) - 代替言語のインストール時

- 完了メッセージ・ボックスを終了するには、[OK]をクリックします。

[OK]をクリックすると、〈Planner Validation Report(プランナ検証レポート)〉が実行されます。

- ・ 処理オプションのデフォルトが選択されている場合は、〈Planner Validation Report〉でこのレポート作成を実行するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
- ・ 処理オプションのデフォルトが選択されていない場合は、プランのツリー・ビューで[Validate(検証)]をクリックして〈Planner Validation Report〉を実行します。

▶ 〈Planner Validation Report〉を実行するには

1. 〈Report Output Destination(レポート出力先)〉で、[On Screen(画面)]または[To Printer(プリンタ)]を選択して[OK]をクリックします。

2. レポートを検討し、すべてのレコードが検証されたことを確認します。

3. レポートを確認した後に、〈Batch Versions(バッチ・バージョン)〉フォームで[Close]をクリックします。

〈Planner Validation Report〉については、『インストール・リファレンス・ガイド』の「Planner Validation Report(プランナ検証レポート)」を参照してください。

4. 〈Work with Installation Plans〉で[Expand(展開)]をクリックし、作成したプランを確認します。

5. このインストール・プランに対して〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉を実行します。

〈Installation Workbench〉については、「Installation Workbenchの実行」を参照してください。

既存構成へのサーバーの追加

ここでは、構成に新規サーバーを追加するステップについて説明します。この手順を実行するのは、既に初期インストール・プランを実施しており、環境セットアップが完了している場合のみです。

ここで掲載されているフォームは、Intel NTエンタープライズ・サーバー上でデータベースとしてSQL Serverを使用することを前提としています。OracleまたはDB2 UDBを使用する場合、実際に各フォームに表示される情報は異なります。

既存インストール・プランへのサーバーの追加に関する基本情報

次の表は、既存の〈Installation Planner (インストール・プランナ)〉へのサーバーの追加フェーズ全体の基本情報を示しています。個々のタスクによって、条件が異なる場合があります。

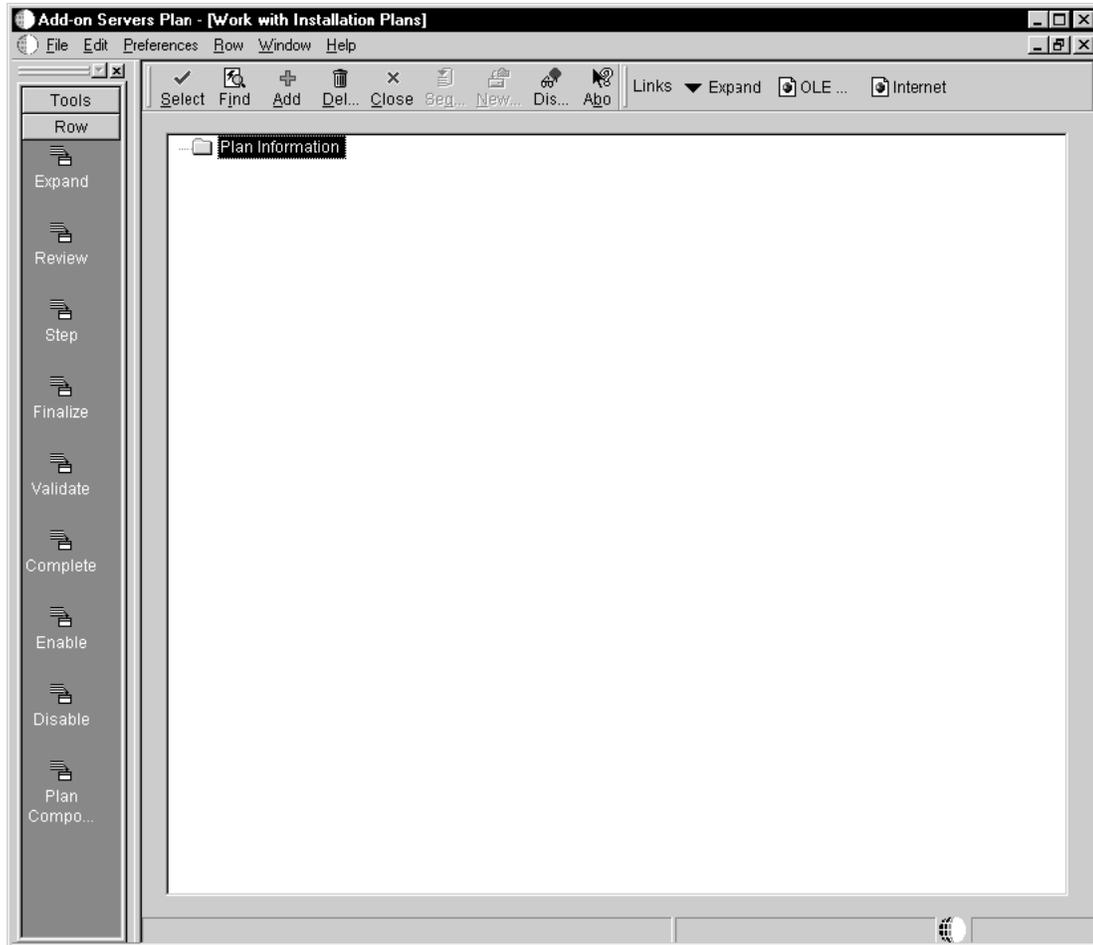
スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでプランナ環境にログオンします。
前提条件	デプロイメント・サーバーをインストール済みで、リリース8.9ディレクトリが共有されているかどうかを検証します。
同時に行うタスク	なし

Installation Plannerの開始

リリース8.9にログオンし、〈Installation Planner〉を開始してインストール・プランを開始します。

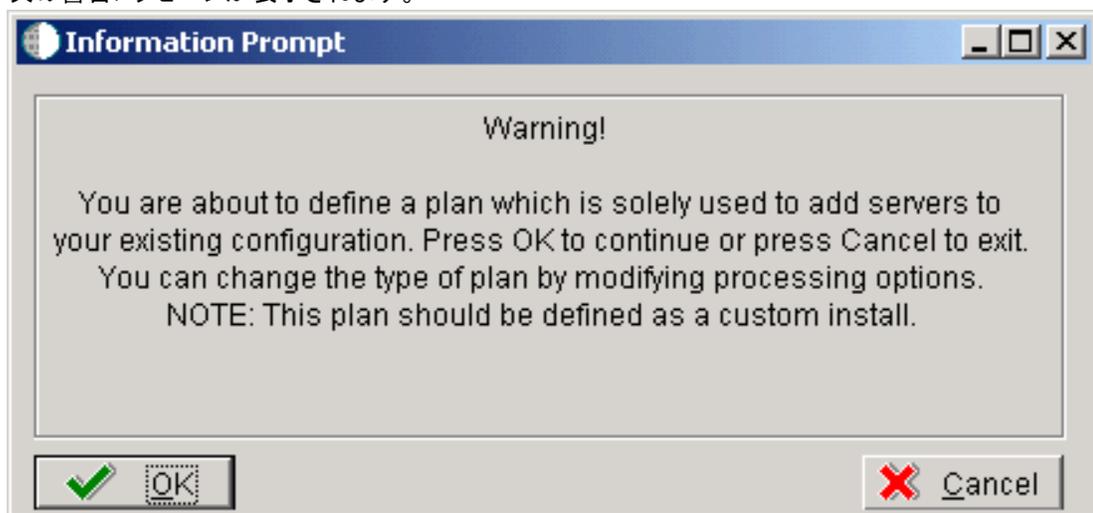
▶ 〈Installation Planner〉を開始するには

1. ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードで、リリース8.9にログオンします。
2. プランナ環境(JDEPLAN)にアクセスします。
3. 〈System Installation Tools (システム・インストール・ツール)〉メニュー(GH961)で〈Add-on Servers Plan (アドオン・サーバー・プラン)〉をダブルクリックします。



4. <Work with Installation Plans(インストール計画の処理)>で[Add(追加)]をクリックします。

次の警告メッセージが表示されます。



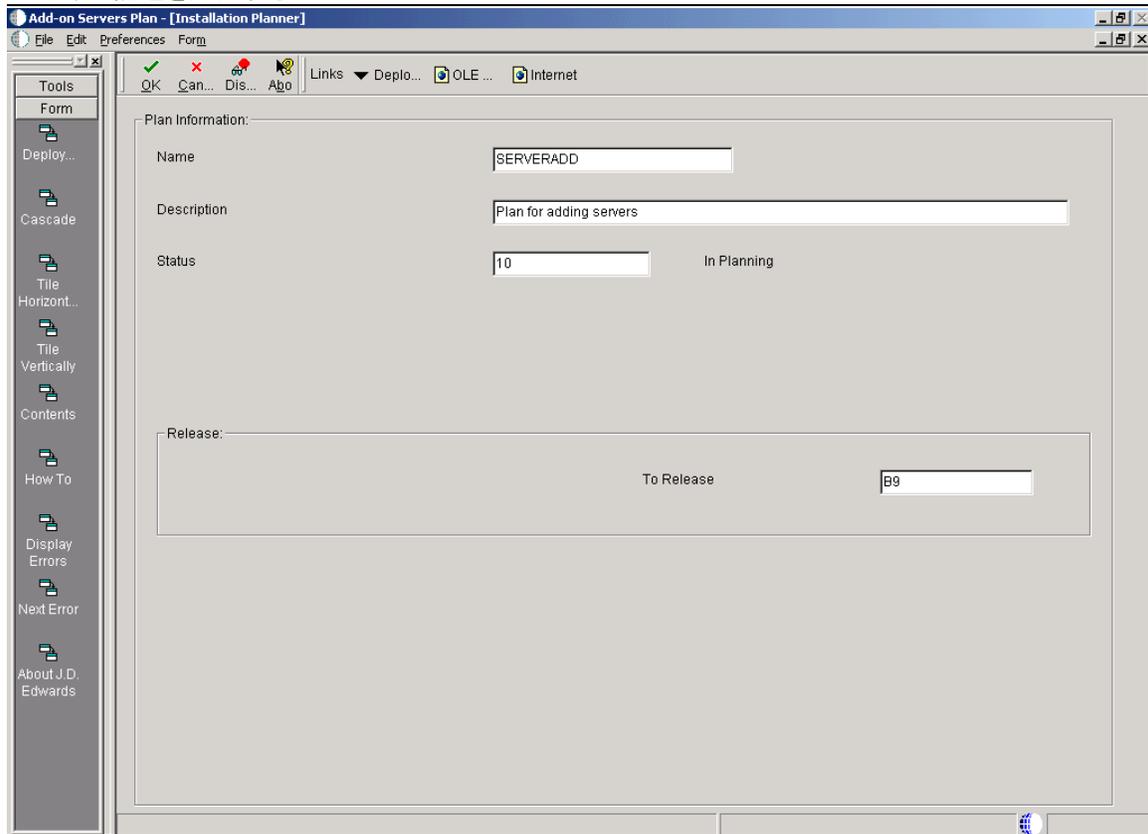
5. [OK]をクリックします。

〈Installation Planner〉フォームが表示されます。

プラン記述の入力

〈Installation Planner〉の開始後に、プラン名や記述など、基本プラン情報を入力します。

▶ プラン記述を入力するには



1. 〈Installation Planner〉で、次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Name (名前)
インストール・プラン名を入力します。
- ・ Description (記述)
インストール・プランの記述を入力します。
- ・ Status (状況)
インストール・プランの状況として10を選びます。
- ・ To Release (リリース(To))

リリース番号がB9に設定されていることを確認します。

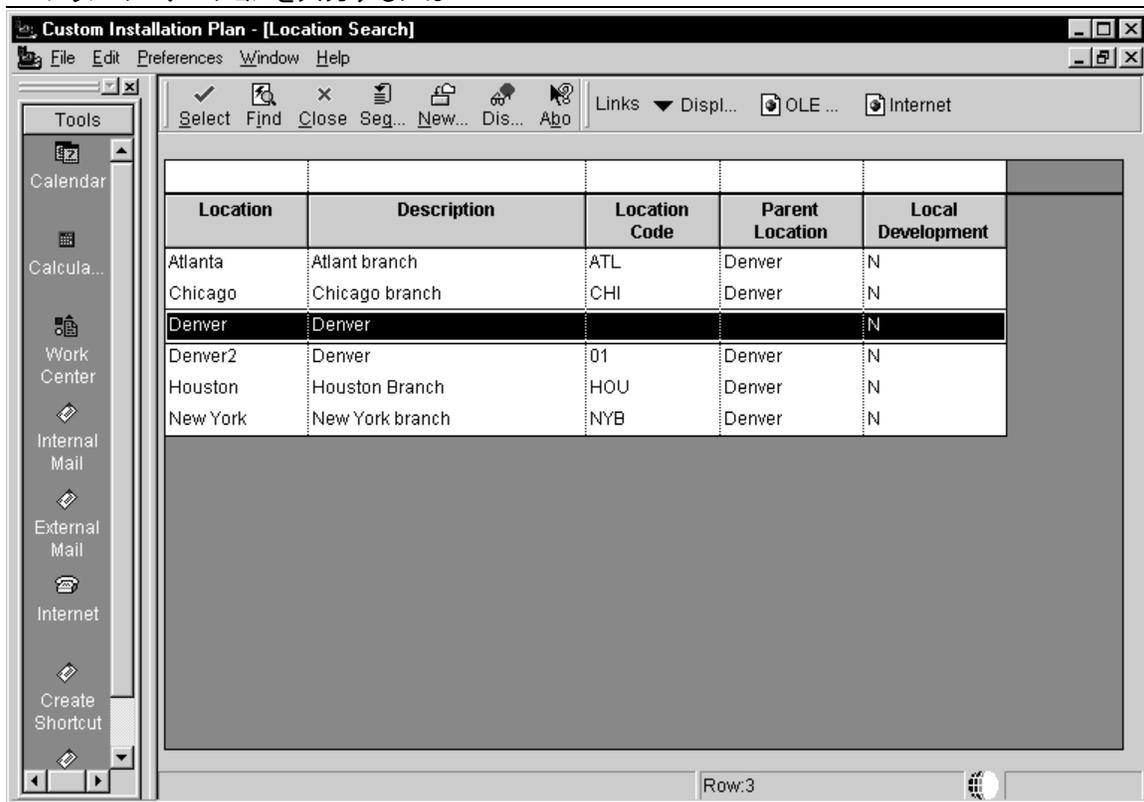
2. [OK]をクリックします。

〈Location Search(ロケーションの検索)〉フォームが表示されます。

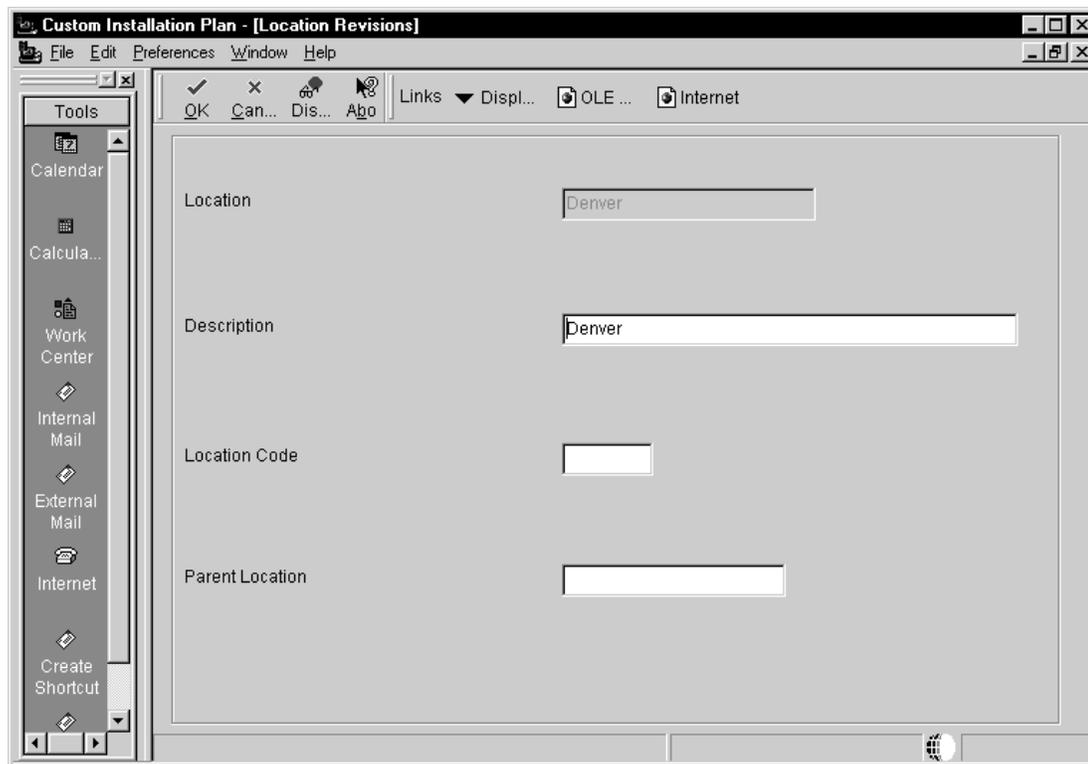
プランのロケーションの入力

基本的なプラン・インストール情報の入力後に、既存プランのロケーションを選択する必要があります。ほとんどの場合は、基本インストール時に定義したロケーションを選びます。

▶ プランのロケーションを入力するには



1. 〈Location Search〉で、ロケーションを選んで[Select(選択)]をクリックします。

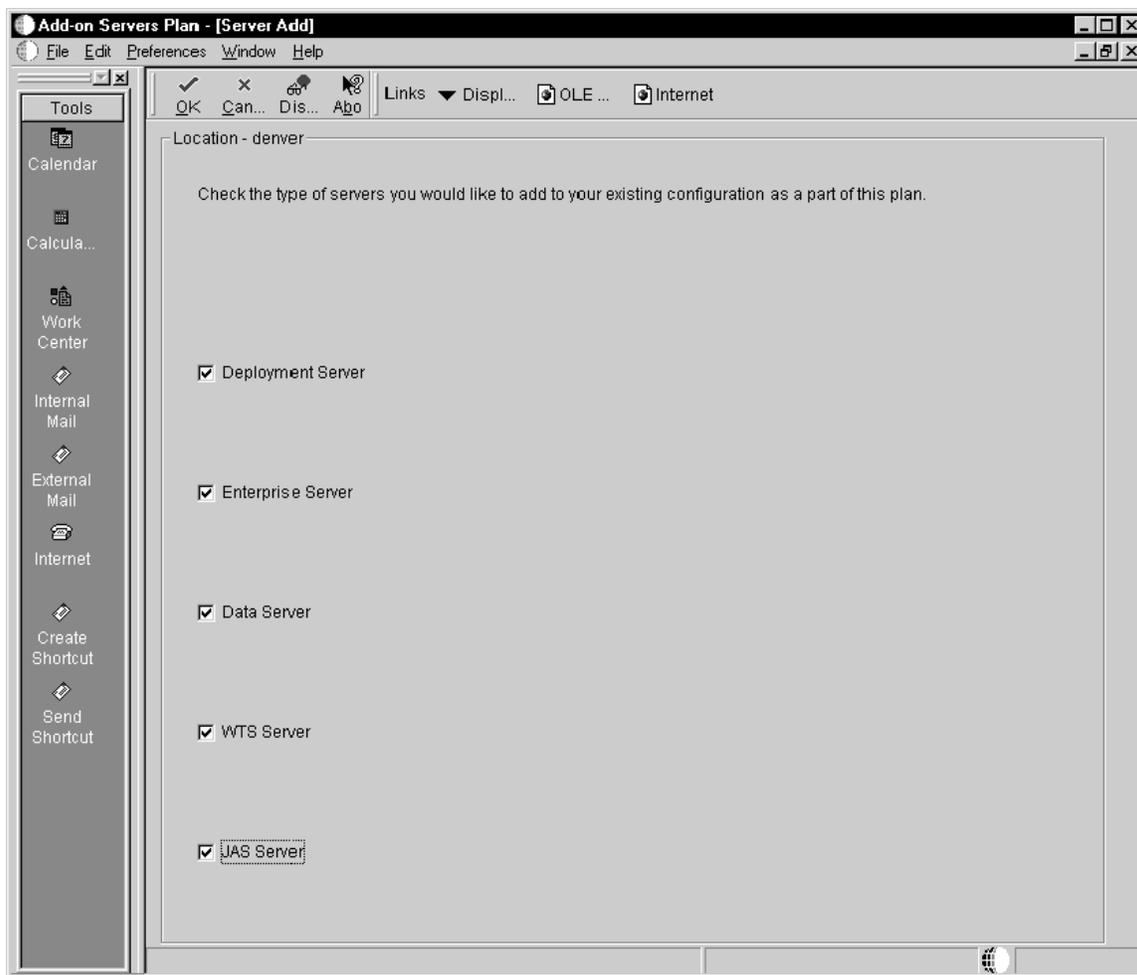


2. 〈Location Revisions (ロケーションの改訂)〉で[OK]をクリックします。

追加サーバー・タイプの選択

プランのロケーションを指定した後に、インストール・プランに追加するサーバーのタイプを指定します。

▶ 追加サーバーのタイプを選ぶには



1. 〈Server Add(サーバーの追加)〉フォームで、構成に追加するサーバーのタイプを有効にします。
2. [OK]をクリックします。

選んだサーバーのタイプごとに、〈Server Add〉フォーム上と同じ順序で〈Server Revisions(サーバーの改訂)〉フォームが表示されます。

注意

次の各タスクでは、データ・サーバーが既にセットアップされているものと想定しています。データ・サーバーのセットアップ手順については、「データ・サーバーの定義」を参照してください。

3. 下記の関連するセクションに進みます。

デプロイメント・サーバー情報の入力

プランに新規デプロイメント・サーバーを追加するように選んだ場合は、〈Deployment Server Revisions(デプロイメント・サーバーの改訂)〉フォームが表示されます。

▶ デプロイメント・サーバー情報を入力するには

The screenshot shows a software configuration window titled "Add-on Servers Plan - [Deployment Server Revisions]". The window has a menu bar (File, Edit, Preferences, Form, Window, Help) and a toolbar with buttons for OK, Cancel, Dismiss, and Abort. A left-hand sidebar contains various tool icons. The main area is divided into two sections. The top section contains fields for: Machine Usage (15), Machine Name (ADDDEPL), Description (add depl), Release (B9), Host Type (50 Intel NT), Location (Base), and Primary User (JDE). The bottom section has tabs for Workstation, Deployment, Enterprise, Data, JAS, and WTB. The Deployment tab is selected, showing Primary Deployment Server (0) and Server Share Path (\\B9).

1. 〈Deployment Server Revisions〉で、次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Machine Name (マシン名)
新規デプロイメント・サーバー名を入力します。
- ・ Description
マシンの記述を入力します。
- ・ Release (リリース)
"B9"を入力します。
- ・ Location (ロケーション)
このプラン用に選んだロケーションがデフォルト設定されます。
- ・ Primary User (プライマリ・ユーザー)
パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

2. [Deployment (デプロイメント)] タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Primary Deployment Server(プライマリ・デプロイメント・サーバー)
サーバーの階層を指定します。2次デプロイメント・サーバーの場合、デフォルト値は0です。
- ・ Server Share Path(サーバー共有パス)
デプロイメント・サーバー上でリリース8.9をインストールしたサーバー共有パスを入力します。このパスがリリースのバージョンと一致しているかどうかを確認します。たとえばリリース8.9の場合、サーバー共有パスは¥B9となります。

3. [OK]をクリックします。

トラブルシューティング
各タブのフィールドに無効な情報を入力すると、デプロイメント・サーバーなど、そのタブ名の横に停止アイコンが表示されます。エラーの詳細を確認するには、フォーム右下隅の停止アイコンをクリックしてください。

4. 別のデプロイメント・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 別のデプロイメント・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[デプロイメント・サーバー情報の入力 - ページ \[384\]](#)」のステップを繰り返してください。
- ・ 追加のサーバー・プランを続行するには、[No]をクリックします。
下記の関連するセクションに進みます。

エンタープライズ・サーバー情報の入力

プランに新規エンタープライズ・サーバーを追加するように選んだ場合は、次のタスクを完了してこのサーバーを定義します。

- ・ [エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ \[386\]](#)
- ・ [エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力 - ページ \[389\]](#)

エンタープライズ・サーバー情報の入力

次のタスクを完了してエンタープライズ・サーバー情報を入力します。

▶ [エンタープライズ・サーバー情報を入力するには](#)

1. <Enterprise Server Revisions (エンタープライズ・サーバーの改訂)>で、次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Machine Usage (マシン用途)

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の20は、これがエンタープライズ・サーバーであることを示します。

- ・ Machine Name

エンタープライズ・サーバー名を入力します。マシン名は、大文字と小文字が区別されます。

注意

クラスタ・ソフトウェアを使用する場合は、リリース8.9のインストール時に、サーバーのマシン名の1つではなく、そのクラスタ名をマシン名として入力してください。リリース8.9のコピーが1つ実行され、両方のノードに共有されます。クラスタ化する場合は、その他にも考慮事項があります。詳しくは、MicrosoftまたはHewlett-Packardのマニュアルを参照してください。

- ・ Description

マシンの詳細記述を入力します。

- ・ Release
 “B9”を入力します。
- ・ Host Type(ホスト・タイプ)
 ビジュアル・アシストをクリックし、プランに追加するエンタープライズ・サーバーのタイプを選択します。
 たとえば、[Intel NT]を選択します。
- ・ Location
 このプラン用に選んだロケーションがデフォルト設定されます。
- ・ Primary User
 パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

2. [Enterprise(エンタープライズ)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Port Number(ポート番号)
 JDE.INIファイルで指定されたデフォルト値が設定されます。このエンタープライズ・サーバーのポート番号を、固有の値(60 xxなど)に変更してください。
- ・ Logical Machine Name(論理マシン名)
 ホスト・タイプの入力時に、このデフォルト値が設定されます。
- ・ Database Type(データベース・タイプ)
 エンタープライズ・サーバーでデータ・ソースに使用するデータベースのタイプ。次の表から有効な値を入力します。

値	データベース
O	Oracle
L	SQL Server OLEDB
W	DB2 UDB

SQL Serverの場合は、OLEDBを使用することをお勧めします。

注意

リリース8.9のAutoPilotは、SQL Server OLEDBとMSDE OLEDBの両方をサポートしています。

- ・ Server Map Data Source(サーバー・マップ・データ・ソース)
 ホスト・タイプの入力時に、このデフォルト値が設定されます。

- ・ Installation Path (インストール・パス)

エンタープライズ・サーバー上にリリース8.9をインストールするインストール・ディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。

たとえばWindows NTの場合は、パスの最後が¥B9となります。パスにドライブx:の追加が必要になる場合があります。

- ・ Deployment Server Name (デプロイメント・サーバー名)

ビジュアル・アシストを使用して、このエンタープライズ・サーバーの接続先となるデプロイメント・サーバーの名前を指定します。デフォルトのデプロイメント・サーバー名が入力されますが、必要に応じて変更できます。

3. [OK]をクリックします。

カスタム・データ・ソースを入力するか、またはデフォルトのデータ・ソースを使用するかを確認するメッセージ・ボックスが表示されます。次の「[手順 7 \[389\]](#)」に進みます。

トラブルシューティング
各タブのフィールドに無効な情報を入力すると、エンタープライズ・サーバーなど、そのタブ名の横に停止アイコンが表示されます。エラーの詳細を確認するには、フォーム右下隅の停止アイコンをクリックしてください。

エンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報の入力

エンタープライズ・サーバー情報を指定した後に、このプランで使用するエンタープライズ・サーバーのデータ・ソース情報を入力します。サーバー・データ・ソースには、サーバーでUBEを実行できるようにシステム構成ファイルが保持されます。

次のタスクを完了してください。

- ・ [手順 7 \[389\]](#)
- ・ [手順 8 \[390\]](#)
- ・ [手順 9 \[391\]](#)
- ・ [手順 10 \[391\]](#)
- ・ [手順 11 \[392\]](#)

▶ カスタムまたはデフォルトのデータ・ソース情報を指定するには

追加したエンタープライズ・サーバーについて、カスタム・データ・ソースを入力するか、デフォルトのデータ・ソースを使用するかを確認するプロンプトが表示されます。次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ 次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ カスタム・データ・ソースを入力するには、[OK]をクリックします。
OracleまたはSQL Serverを使用している場合は、「手順 10 [391]」に進みます。
DB2 UDBを使用している場合は、次の「手順 8 [390]」に進みます。
- ・ デフォルトのデータ・ソースを受け入れるには、[Take Defaults (デフォルトを使用)]をクリックします。このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。
Oracleを使用している場合は、「手順 9 [391]」に進みます。
SQL Serverを使用している場合は、「手順 11 [392]」に進みます。

▶ DB2 UDBデータベース・オブジェクトのサイズを設定するには

DB2 UDBを使用し、2番目以降のエンタープライズ・サーバーを追加する場合は、次のステップ1~4を実行します。

1. P9861151フォームで指定した名前を使用して、新規サーバー上で新規のデータベースと表スペースを作成する必要があります。新規サーバー上に表スペースを作成するには、次の各データベース・スクリプトに新しい名前を付けて保存します。

- ・ create_db.bat
- ・ owsh9_tbsp.nt
- ・ crt_owsh9_tbsp.bat
- ・ Config_owsh9.sql

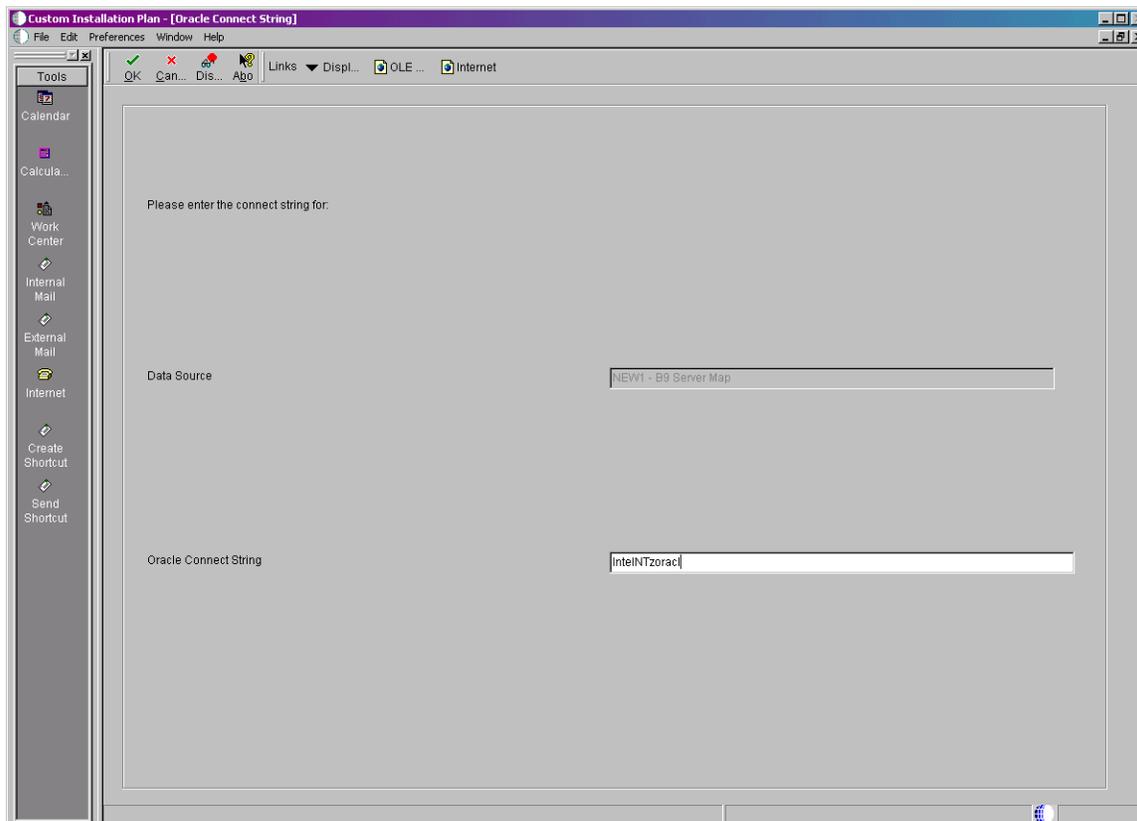
この操作により、各スクリプトのオリジナルと、それぞれ新規の名称を持つ同一コピーができることとなります。

2. 新規の名称を持つ各スクリプトを、指定した新規データベース名と新規表スペース名を使用して、新規サーバー上にサーバー・マップ・データベースが作成されるように編集します。
3. 新規サーバー上でOWSHAREグループを作成し、JDEおよびSVM9ユーザーを作成して、それをOWSHAREグループに追加します。
4. 新規サーバー上で、owsh9_tbsp .ntスクリプトのコピーで指定した内容に合わせてディレクトリを作成します。

また、新規サーバー上で、スクリプト用のディレクトリと、そのlogsサブディレクトリを作成します。新規サーバー上でインスタンス所有者としてサインオンし、スクリプトのコピーを新規ディレクトリに格納して実行します。logsにあるログをチェックし、必要に応じてスクリプトを再実行します。

タスク「手順 7 [389]」で[OK]をクリックしてカスタム・データ・ソースを入力した場合は、「手順 10 [391]」に進みます。[Take Defaults]をクリックした場合は、「手順 11 [392]」に進みます。

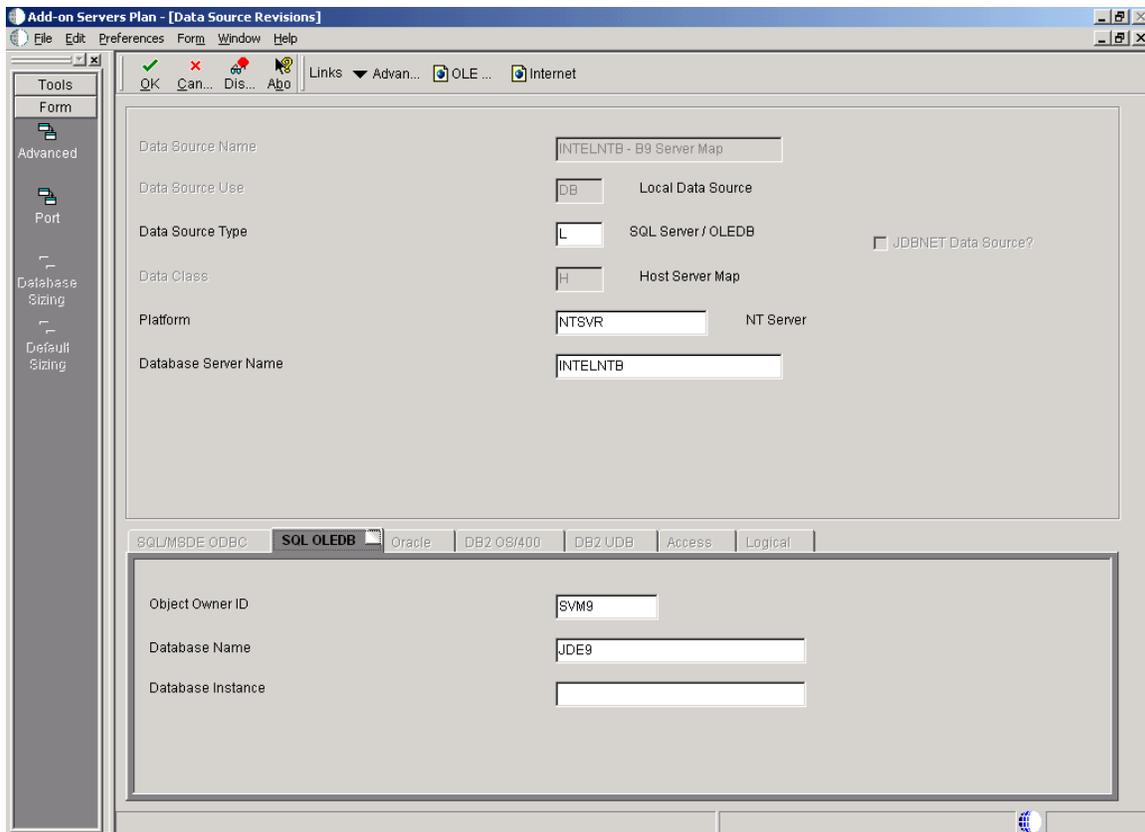
▶ Oracle接続文字列を入力するには(Oracleのみ)



- ・ <Oracle Connect String(Oracle接続文字列)>で、エンタープライズ・サーバーの接続文字列を入力し、[OK]をクリックします。

「手順 11 [392]」に進んでください。

▶ カスタム・サーバー・マップ・ソース情報を検証するには



1. 〈Data Source Setup(データ・ソースの設定)〉で、サーバー・マップ・ソース情報を検証します。

データ・ソースに関する考慮事項
データ・ソースはあらかじめ定義されています。ただし〈Installation Planner〉の実行時には、使用中のシステム固有の構成が反映されるように、データ・ソース情報の一部修正を必要とする場合があります。

2. [OK]をクリックします。

▶ 別のエンタープライズ・サーバーを追加するには

別のエンタープライズ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ 別のエンタープライズ・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。
「[エンタープライズ・サーバー情報の入力 - ページ \[386\]](#)」以降のプロセスを繰り返してください。
 - ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No]をクリックします。
下記の該当するタスクに進みます。

データ・サーバーの追加

▶ データ・サーバーを追加するには

〈Machine/Server Types(マシン/サーバー・タイプ)〉フォームで[Data Server(データ・サーバー)]を有効にすると、データ・サーバーを定義するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

1. [OK]をクリックして次のタスクに進みます。

2. 〈Data Server Revisions(データ・サーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の25は、これがデータ・サーバーであることを示します。

- ・ Machine Name

データ・サーバー名を入力します。デプロイメント・サーバー名は10文字以内で指定する必要があります。

- ・ Description

マシンの記述を入力します。

- ・ Release

インストールするソフトウェアのリリース番号(B9など)を入力します。

- Host Type

プランに追加するデータ・サーバーのタイプを選択します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
10	iSeries
20	HP 9000
25	Sun Solaris
30	RS/6000
50	Windows 2000 (Intel)
80	Client - NT
90	Client - Win NT

- Location

このフィールドには、このプラン用に選択したロケーションがデフォルト設定されます。

- Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

3. [Data(データ)]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- Data Source Type(データ・ソース・タイプ)

データ・ソースのタイプを選択します。有効な値は次のとおりです。

値	説明
O	Oracle
L	SQL Server OLEDB
W	DB2 UDB

SQL Serverの場合は、OLEDBを使用することをお勧めします。

注意

リリース8.9のAutoPilotは、SQL Server OLEDBとMSDE OLEDBの両方をサポートしています。

4. [OK]をクリックします。

5. 別のデータ・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- 別のデータ・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。

「[データ・サーバーの追加 - ページ \[393\]](#)」のステップを繰り返します。

- ・ 〈Installation Planner〉でのセットアップを続行するには、[No] をクリックします。

Javaサーバーの定義

プランにJavaサーバーを追加するように選んだ場合は、次のタスクを完了してください。

▶ Javaサーバーを定義するには

1. 〈JAS Server Revisions (JASサーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- ・ Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の30は、これがJavaアプリケーション・サーバーであることを示します。

- ・ Machine Name

Javaサーバー名を入力します。マシン名は、大文字と小文字が区別されます。

- ・ Description

マシンの詳細記述を入力します。

- ・ Release

“B9”を入力します。リリース番号変更は手作業で変更する場合があります。

- ・ Host Type

ビジュアル・アシストをクリックし、プランに追加するサーバーのタイプを選択します。このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値は50で、サーバー・タイプがIntel NTであることを示します。

- ・ Location

このプラン用に選んだロケーションがデフォルト設定されます。

- ・ Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

2. [JAS]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Installation Path

Javaサーバー上でリリース8.9をインストールするディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。リリース8.9の場合、パスの最後は¥B9となります。

3. [OK]をクリックします。

別のJavaサーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 別のJavaサーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。

「[Javaサーバーの定義 - ページ \[395\]](#)」のステップを繰り返します。

- ・ 追加のサーバー・プランを続行するには、[No]をクリックします。

Windowsターミナル・サーバーの定義

プランにWindowsターミナル・サーバーを追加するように選んだ場合は、次のタスクを完了してください。

▶ Windowsターミナル・サーバーを定義するには

Machine Usage: 35 Windows Terminal Server Location: Base

Machine Name: WTS2 Primary User: JDE

Description: Windows server machine 2

Release: B9

Host Type: 50 Intel NT

Installation Path: C:\b9

1. 〈WTS Server Revisions (WTSサーバーの改訂)〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- Machine Usage

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値の35は、これがWindowsターミナル・サーバーであることを示します。

- Machine Name

Windowsターミナル・サーバー名を入力します。マシン名は、大文字と小文字が区別されます。

- Description

マシンの詳細記述を入力します。

- Release

“B9”を入力します。リリース番号変更は手作業で変更する場合があります。

- Host Type

このフィールドに自動的に設定されるデフォルト値は50で、サーバー・タイプがIntelベースのWindows NTであることを示します。

- Location

このプラン用に選んだロケーションがデフォルト設定されます。

- ・ Primary User

パッケージの配布時に電子メールの送信先となるユーザー。プライマリ・ユーザーのデフォルト値は、JDE.INIファイルで指定されています。

2. [WTS]タブで次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Installation Path

サーバー上にリリース8.9をインストールするディレクトリ・パスを入力します。これがリリースのサービス固有のパスであることを確認してください。たとえばパスの最後は%b9となります。

3. [OK]をクリックします。

別のWindowsターミナル・サーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

4. 次のオプションのうち1つを選択します。

- ・ 別のWindowsターミナル・サーバーを追加する場合は、[Yes]をクリックします。

「[Windowsターミナル・サーバーの定義 - ページ \[396\]](#)」のステップを繰り返します。

- ・ 追加サーバーの環境を選ぶには、[No]をクリックします。

環境のセットアップ

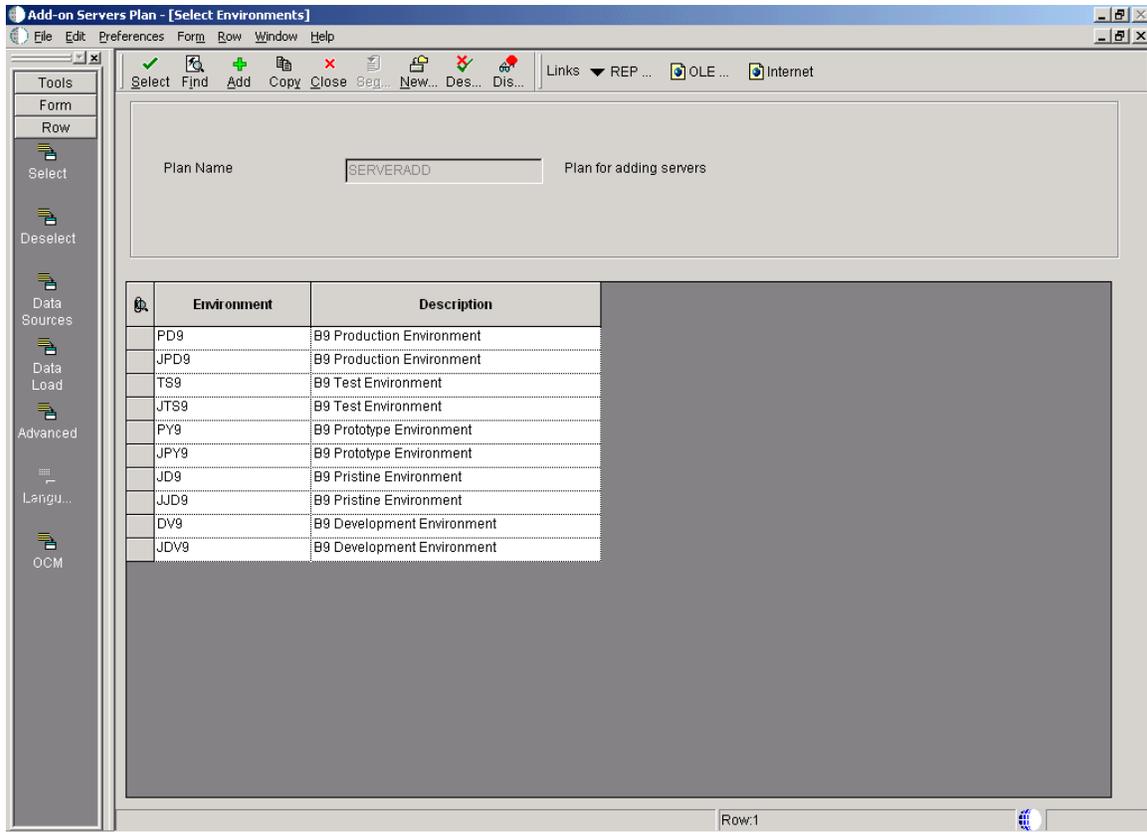
次のタスクを完了し、追加サーバーの環境をセットアップします。

- ・ [環境の選択 - ページ \[398\]](#)
- ・ [環境のデータ・ソースのセットアップ - ページ \[399\]](#)

環境の選択

〈Select Environment (環境の選択)〉フォームが表示されます。

プランにJavaアプリケーション・サーバーまたはWTSサーバーが含まれている場合は、J xxxxxx環境が表示されます。



- ・ 定義する環境をダブルクリックします。

複数の環境をセットアップする場合は、1つずつ選んで定義する必要があります。下記のタスクを完了すると、このフォームに戻ります。

環境のデータ・ソースのセットアップ

レプリケートするテーブルを指定した後に、次のタスクを完了して環境のデータ・ソースをセットアップします。

- ・ [手順 16](#) [400]
- ・ [手順 17](#) [400]
- ・ [手順 18](#) [400]
- ・ [手順 19](#) [401]
- ・ [手順 20](#) [402]
- ・ [手順 21](#) [403]

▶ 環境のデータ・ソースのセットアップを開始するには

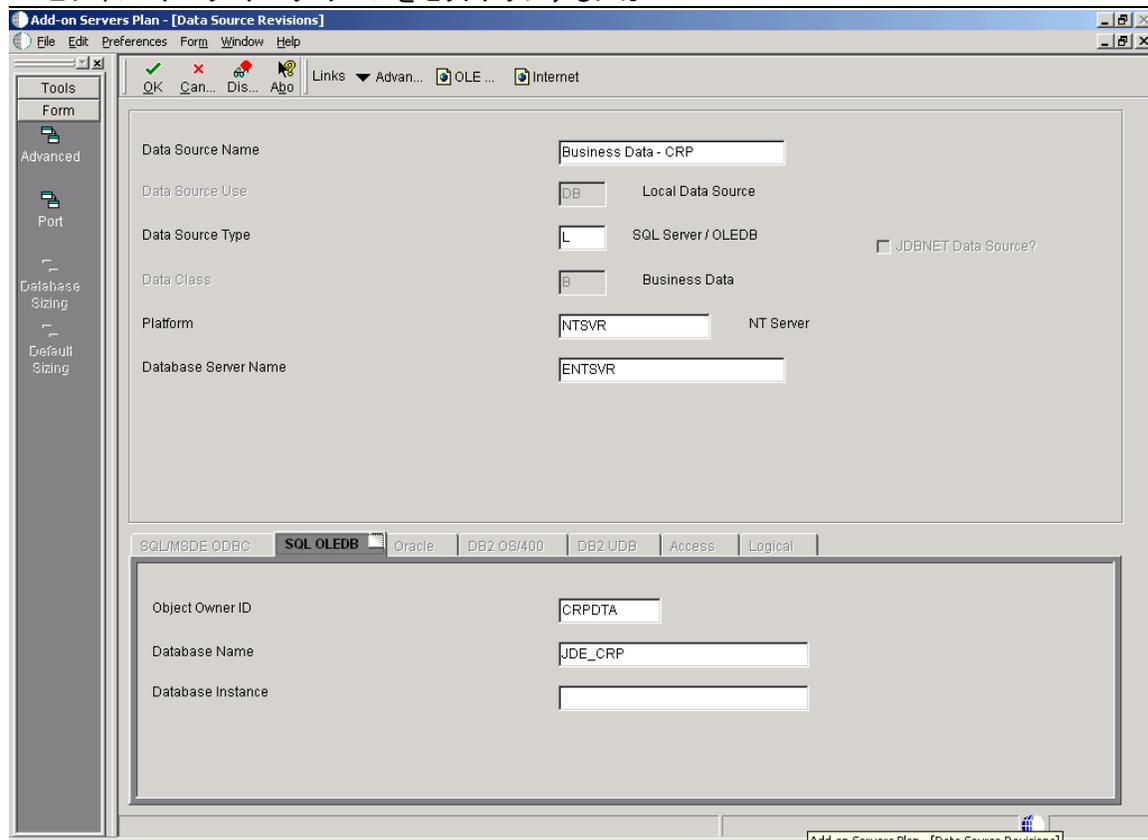
構成した各環境のデータ・ソースをセットアップするかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

- ・ 〈Data Source Setup〉で、次のいずれかのオプションを選択します。
 - ・ データ・ソースを手作業で入力するには、[OK]をクリックして次のタスクに進みます。
 - ・ デフォルト・データ・ソースを受け入れるには、[Take Defaults]をクリックして「[手順 21 \[403\]](#)」に進みます。

注意

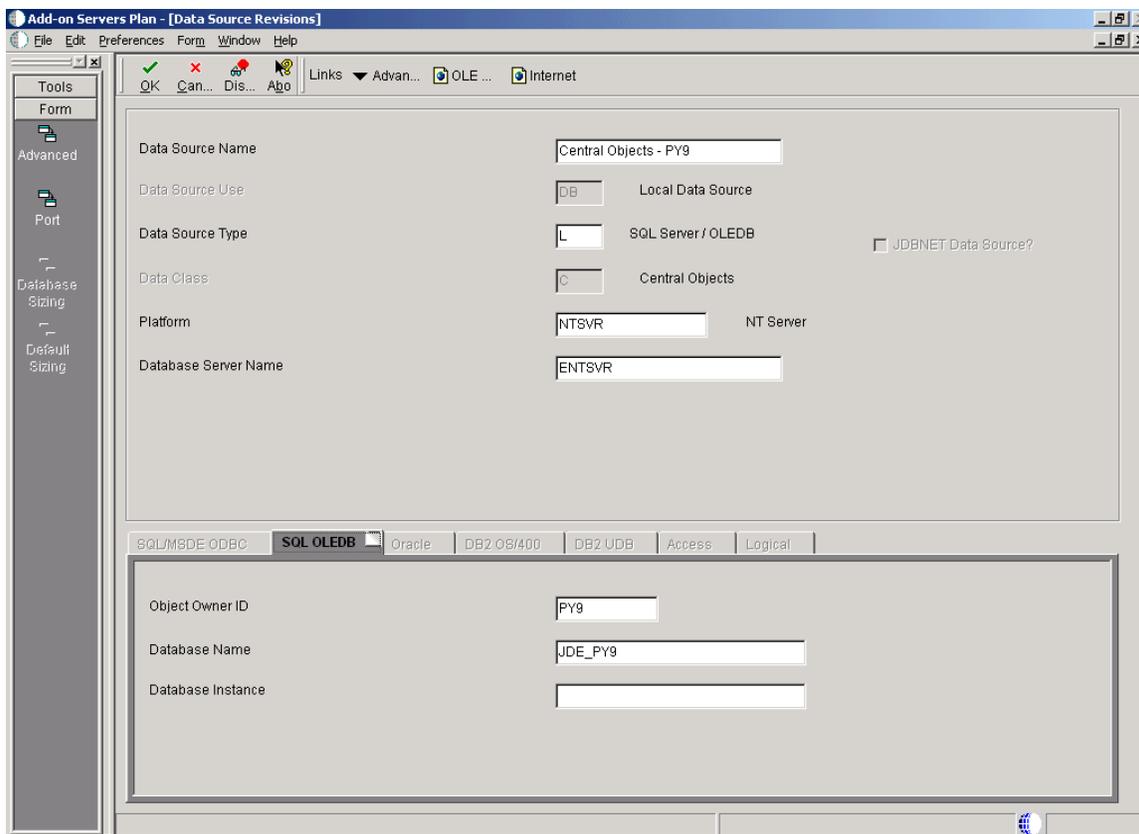
このオプションを選択すると、カスタマイズ時の選択が限定されます。

▶ ビジネス・データ・データ・ソースをセットアップするには



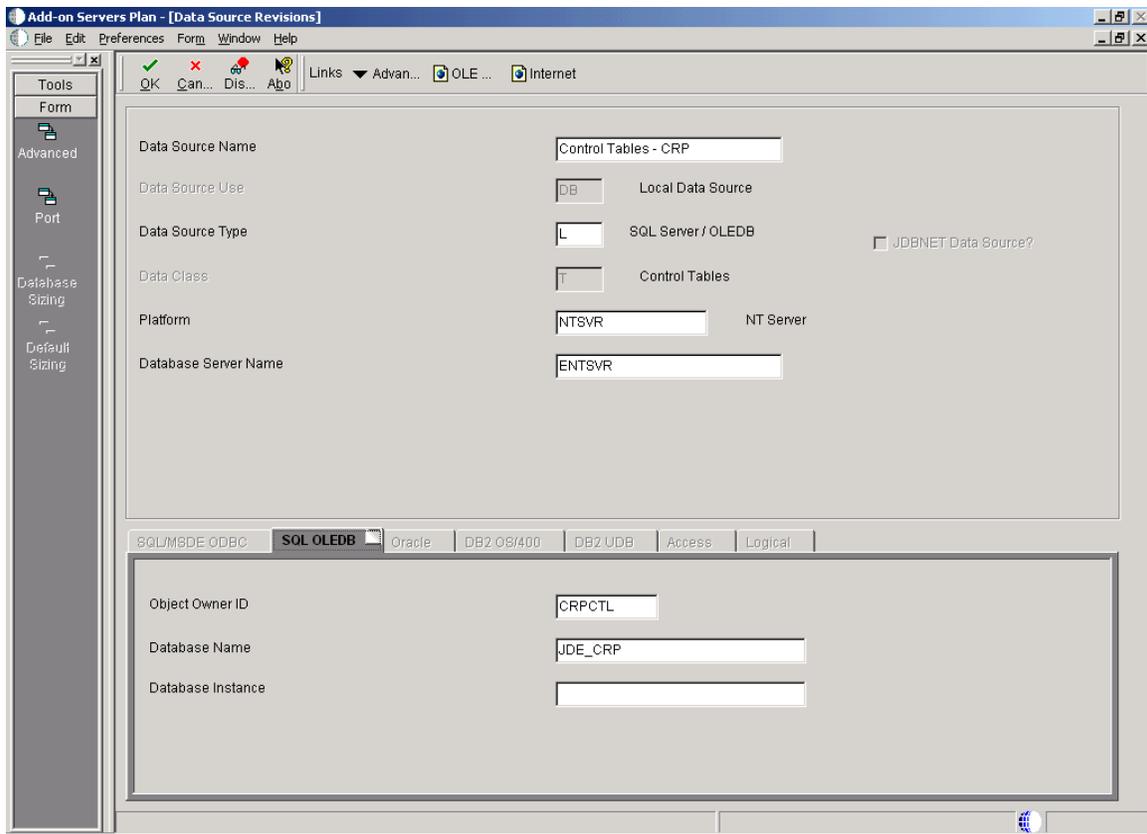
- ・ 〈Data Source Setup〉で、ビジネス・データのデータ・ソースをセットアップして[OK]をクリックします。

▶ セントラル・オブジェクト・データ・ソースをセットアップするには



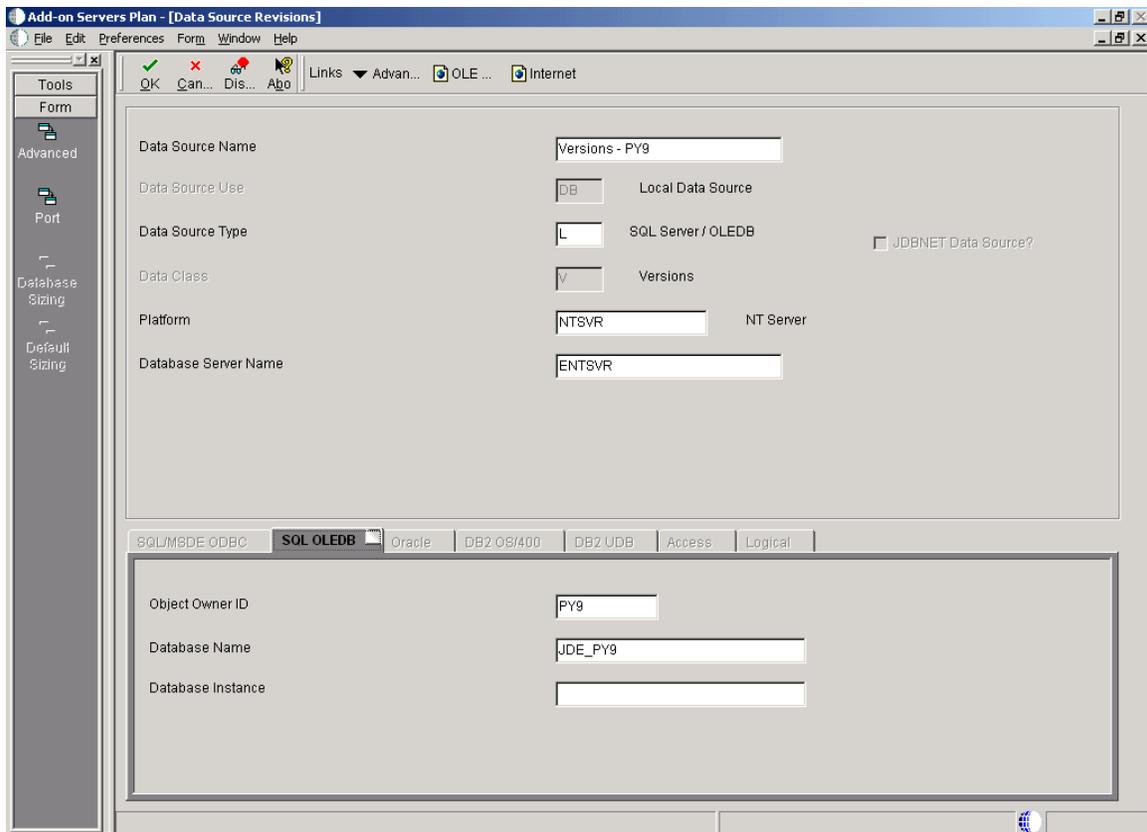
- ・ 〈Data Source Setup〉で、セントラル・オブジェクト・データ・ソースをセットアップして[OK]をクリックします。

▶ コントロール・テーブル・データ・ソースを検証するには



- ・ 〈Data Source Setup〉で、コントロール・テーブル・データ・ソースが正しいかどうかを検証し、[OK]をクリックします。

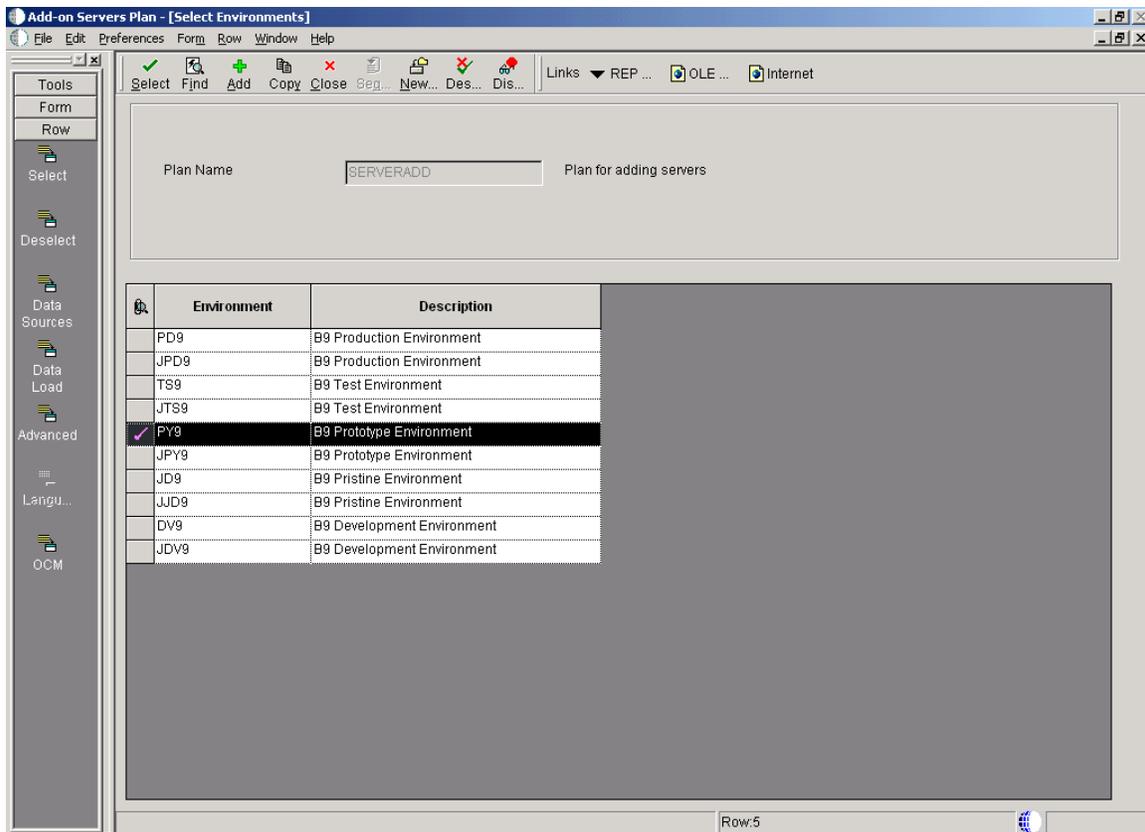
▶ バージョン・データ・ソースを検証するには



- ・ 〈Data Source Setup〉で、バージョン・データ・ソースが正しいかどうかを検証し、[OK]をクリックします。

〈Select Environments〉フォームが表示され、必要に応じて別の環境を定義できます。

▶ 別の環境を選択するには



- ・ 〈Select Environments〉で、次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ 次に定義する環境を選び、「[環境のセットアップ - ページ \[398\]](#)」のタスクを繰り返します。
 - ・ すべての環境を定義した後に、[Close(閉じる)]をクリックします。

インストール・プランの確定

〈Installation Planner〉によってインストール・プランが自動的に確定されます。

▶ インストール・プランを確定するには

1. メッセージが表示され、インストール・プランが確定されたことを確認できます。

プランが確定されるときには、次の処理が実行されます。

- ・ 状況が20に設定されます。これは、プランに従ってOCMマッピング・テーブルが調整されたことを意味します。
- ・ プランの確定時に更新されるテーブルは、次のとおりです。

リリース・マスター(F00945)

パス・コード・マスター(F00942)
 オブジェクト構成マスター/OCMの作成(F986101)
 パッケージ・プラン・テーブル(F98404)
 マシン詳細テーブル(F9651)
 ホストINI
 言語テーブル(F984031) – 代替言語のインストール時

- 完了メッセージ・ボックスを終了するには、[OK]をクリックします。

これにより、〈Planner Validation Report(プランナ検証レポート)〉が実行されます。

- ・ 処理オプションのデフォルトが選択されている場合は、〈Planner Validation Report〉からこのレポートを実行するかどうかを確認するプロンプトが自動的に表示されます。
- ・ 処理オプションのデフォルトが選択されていない場合は、プランのツリー・ビューで[Validate(検証)]をクリックして〈Planner Validation Report〉を実行します。

▶ 〈Planner Validation Report〉を実行するには

- 〈Report Output Destination(レポート出力先)〉で、[On Screen(画面)]または[To Printer(プリンタ)]を選択して[OK]をクリックします。
- レポートを検討し、すべてのレコードが検証されたことを確認します。
- レポートを確認した後に、〈Batch Versions(バッチ・バージョン)〉フォームで[Close]をクリックします。
 〈Planner Validation Report〉については、『インストール・リファレンス・ガイド』の「Planner Validation Report(プランナ検証レポート)」を参照してください。
- 〈Work with Installation Plans〉で[Expand(展開)]をクリックし、作成したプランを確認します。

追加サーバーの構成

新しくサーバーを追加した後に、次の構成タスクを完了します。詳細と手順については、「リリース8.9データベースのインストール」で該当するデータベースに関する考慮事項を参照してください。

▶ 追加サーバーを構成するには

- データベース・サーバーに該当する一連の操作を行います。

Oracleの場合:

- ・ サーバー・マップ用の表スペース(SVM9)を作成します。
- ・ 新規エンタープライズ・サーバー上で所有者(owsh9)を設定します。

SQLの場合:

- ・ データベースJDE9を作成します。

UDBの場合:

- ・ 新規エンタープライズ・サーバー上で所有者ログイン(owsh9)を設定します。

2. データベースとサーバーを構成した後に、〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉を使用してソフトウェアとリソースを割り当てて構成します。

〈Installation Workbench〉を使用してサーバーを追加する場合、〈Table Conversion Workbench(テーブル変換ワークベンチ)〉と〈Specification Merge Workbench(スペック・マージ・ワークベンチ)〉は不要なため表示されません。

3. サーバーの追加を完了するには、「エンタープライズ・サーバーへのリリース8.9のインストール」のステップを実行します。

Installation Planner処理オプションの検討

処理オプションによって、プランのセットアップ時の〈Installation Planner (インストール・プランナ)〉による処理内容が制御されます。また、カスタムの〈Installation Planner〉の処理中に表示される一部のオプションも、処理オプションによって制御されるので、これらのオプションが正しく設定されていなければ、〈Installation Planner〉の実行中に必要なオプションが表示されません。レプリケーション機能やビジネス関数のマッピングも、これらの処理オプションを設定して制御します。

プランの作成を開始する前に、〈Installation Planner〉アプリケーションのデフォルトの処理オプションを検討することをお勧めします。最初に使用する場合は、〈Installation Planner〉に表示される情報メッセージに従って、処理オプションを設定できます。これらのメッセージを表示しない場合は、無効にすることができます。

Installation Planner処理オプションの検討に関する基本情報

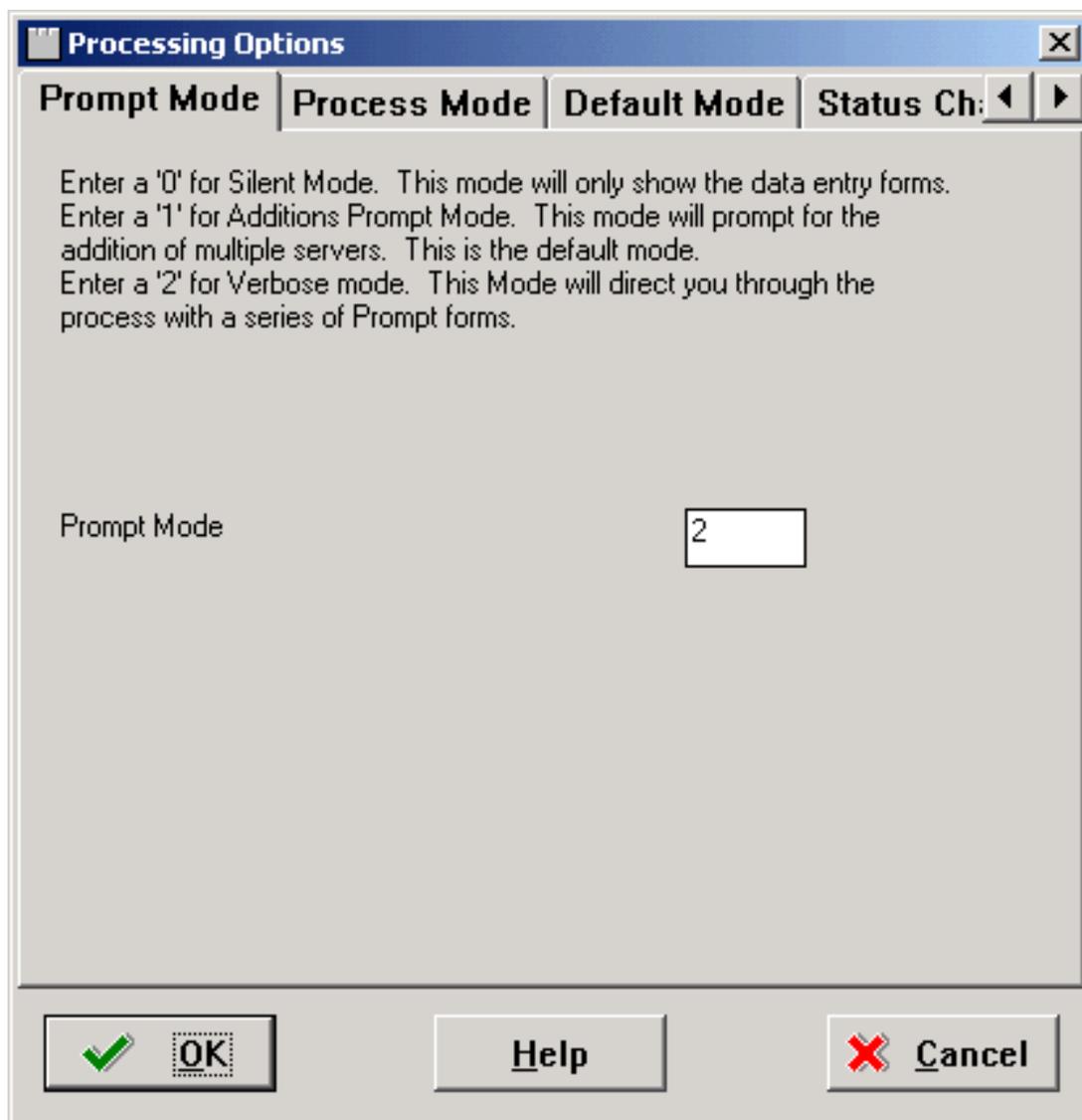
スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDEとして、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでプランナ環境にログオンします。
前提条件	デプロイメント・サーバーをインストールする必要があります。
同時に行うタスク	データベース作成スクリプトloadallを実行できます。

処理オプションへのアクセス

処理オプションを検討するには、リリース8.9にログオンしてインストール・プランのタイプを指定する必要があります。

▶ 処理オプションにアクセスするには

1. ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードで、リリース8.9にログオンします。
2. プランナ環境(JDEPLAN)にアクセスします。
3. 〈System Installation Tools (システム・インストール・ツール)〉メニュー(GH961)から、〈Typical Installation Plan (標準インストール・プラン)〉または〈Custom Installation Plan (カスタム・インストール・プラン)〉を右クリックします。
4. [Prompt for (プロンプト)]-[Values (処理オプション)]を選択します。
〈Processing Options (処理オプション)〉フォームが表示されます。



処理オプション値の選択

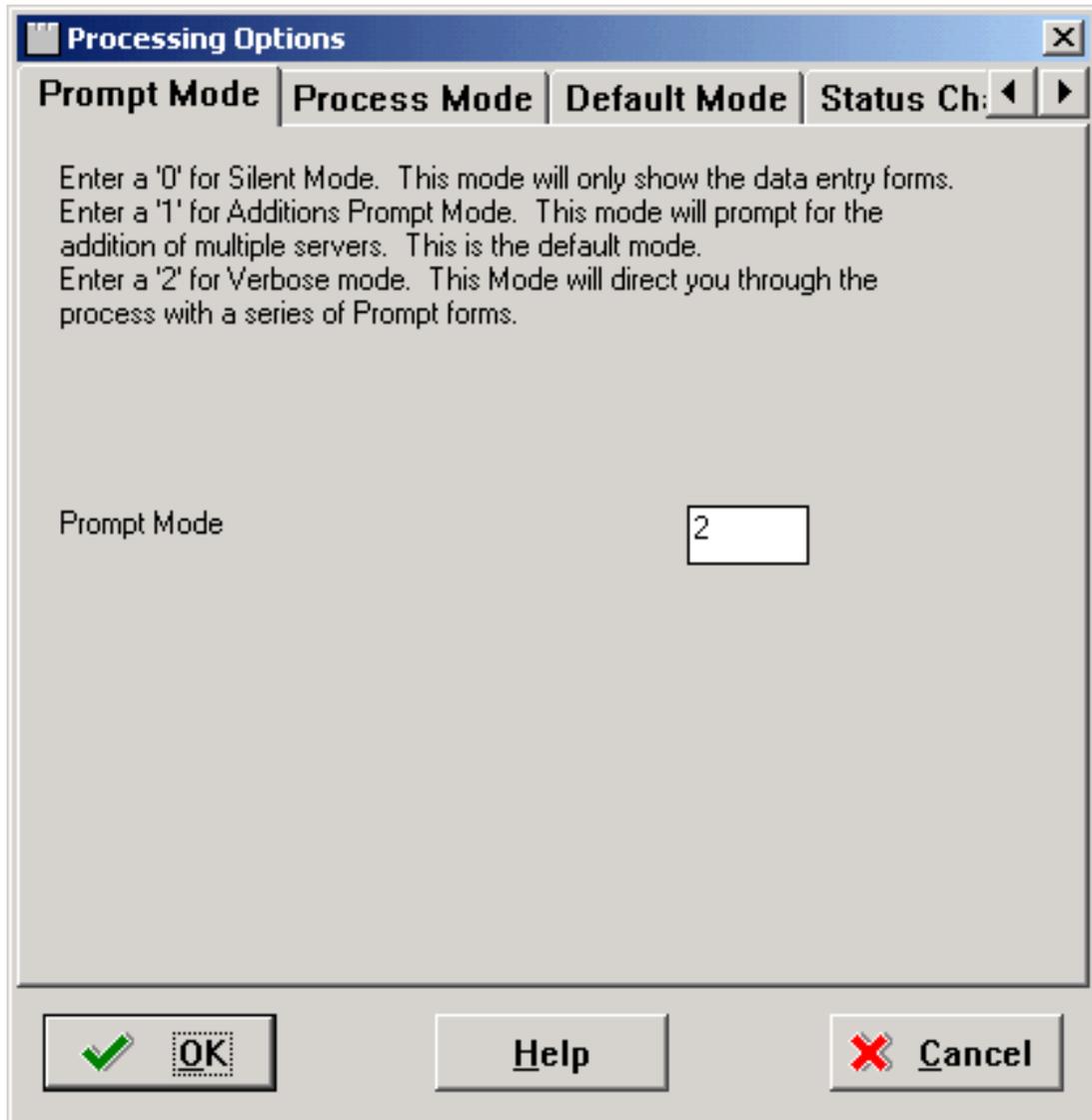
処理オプションにアクセスした後は、次のタスクを実行して処理オプション値を選択します。

- ・ [手順 2](#) [409]
- ・ [手順 3](#) [410]
- ・ [手順 4](#) [411]
- ・ [手順 5](#) [412]
- ・ [手順 6](#) [413]
- ・ [手順 7](#) [415]

・ 手順 8 [416]

▶ プロンプト・モードの指定

1. [Prompt Mode(プロンプト・モード)]タブをクリックします。



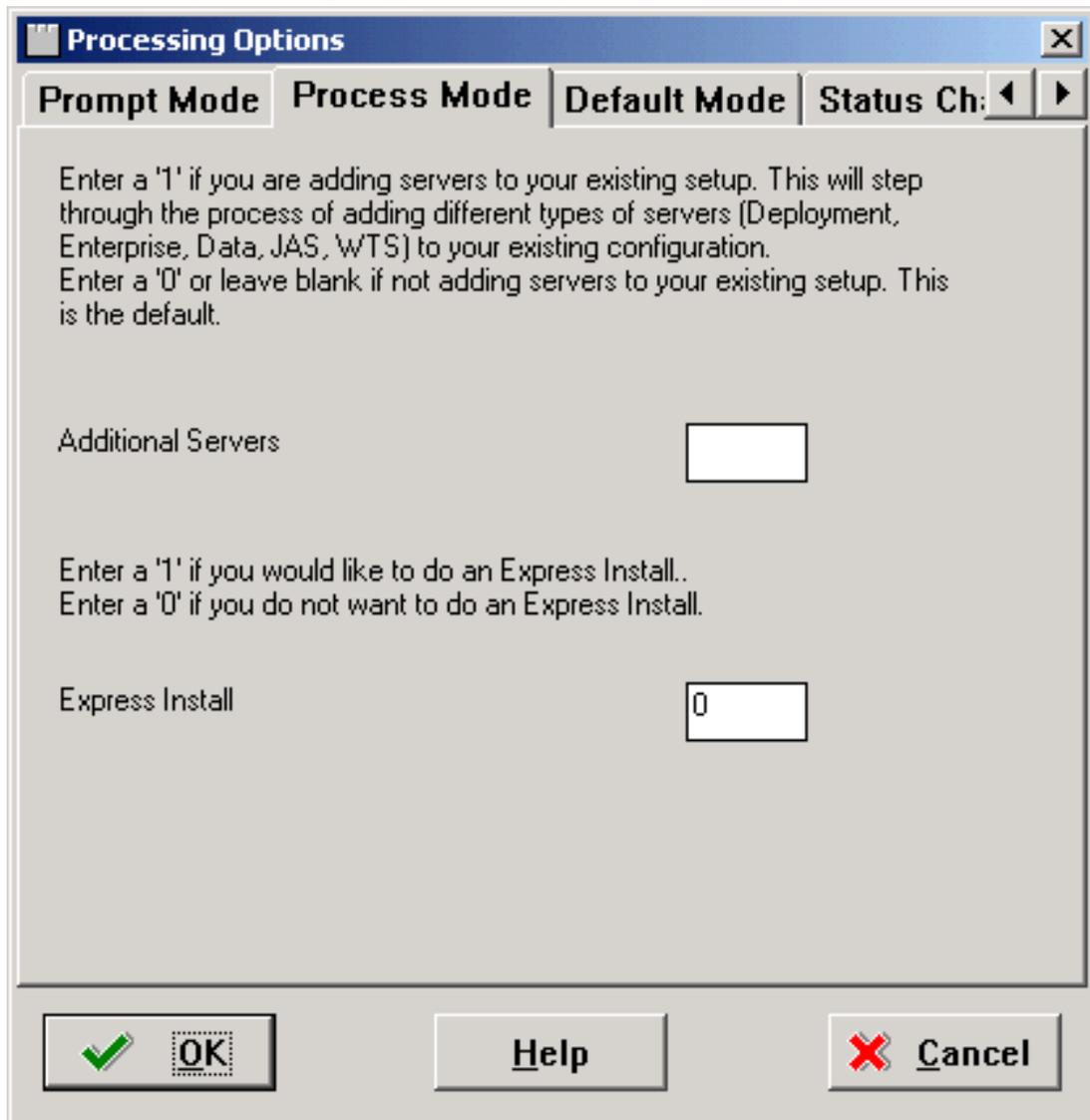
2. [Prompt Mode]タブで、次の値のうち1つを入力して、プランの作成時に必要なプロンプトのタイプを示すオプションを選択します。

値	説明
0	自動モード。このモードでは、データ入力フォームしか表示されません。
1	追加プロンプト・モード。このデフォルト・モードでは、複数のサーバーを追加するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
2	詳細モード。このモードでは、一連のプロンプト・フォームに表示される指示

値	説明
	に従ってプランを作成できます。

▶ 実行モードを指定するには

1. [Process Mode(実行モード)]タブをクリックします。



2. [Process Mode]タブで、プラン作成時に実行する処理を示すオプションを選択します。

- ・ Additional Servers(追加サーバー)

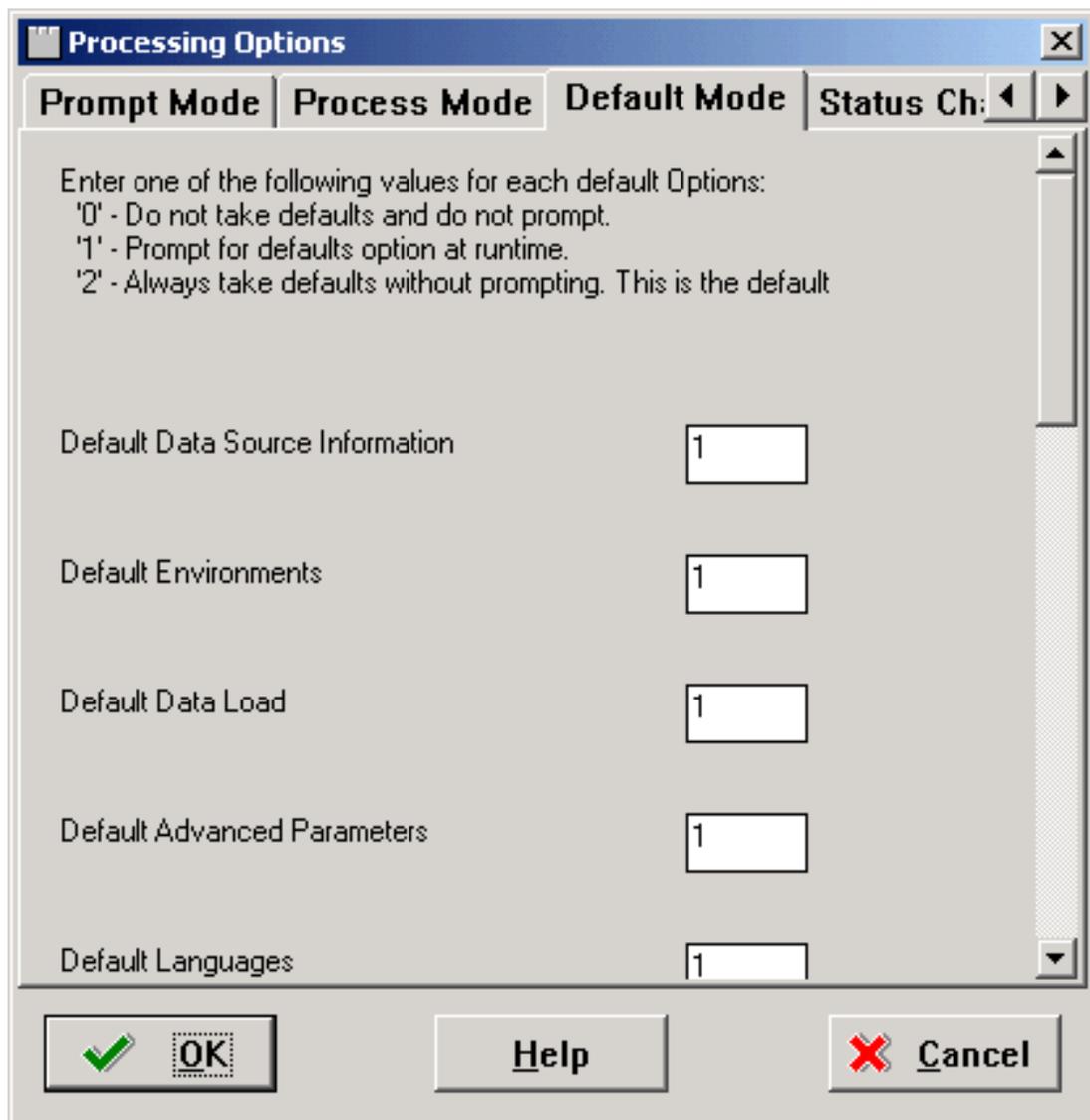
既存のセットアップにサーバー(デプロイメント、エンタープライズ、データ、JAS、およびWTS)を追加するには、“1”を入力します。通常のプランの場合は、“0”を入力するか空白のままにします。

- Express Install (高速インストール)

高速インストールを実行するには“1”、リリース8.9データベースを手作業でインストールするには“0”を入力します。このオプションの実行については『Express Install Guide (高速インストール・ガイド)』を参照してください。

▶ デフォルト・モードを指定するには

- [Default Mode (デフォルト・モード)] タブをクリックします。



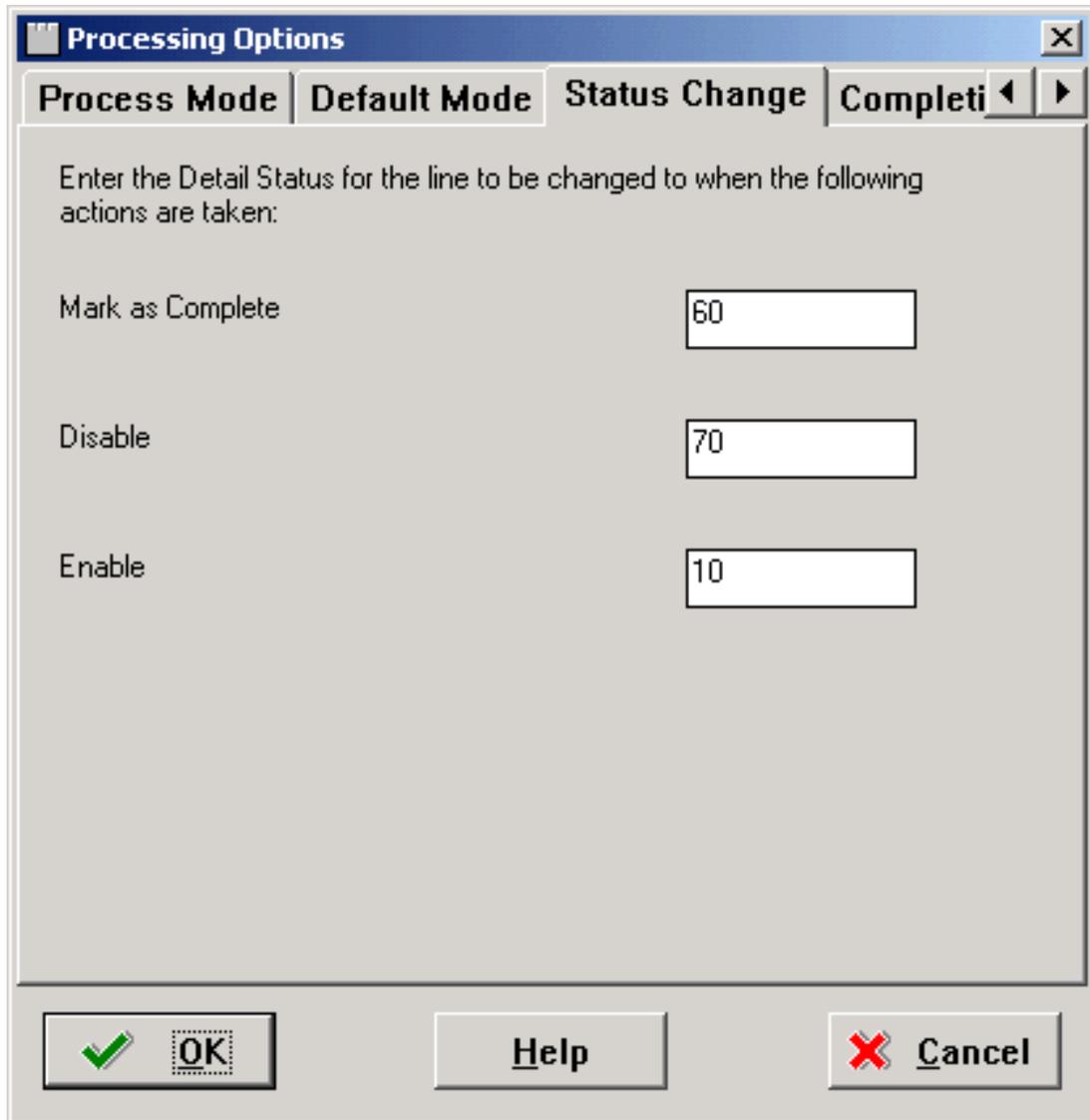
- [Default Mode] タブで次のフィールドに値を入力します。

値	説明
0	デフォルト値は指定されず、プロンプトは表示されません。
1	ランタイムにデフォルト・オプションを確認するプロンプトが表示されます。
2	デフォルト・モード。プロンプトは表示されず、常にデフォルトが使用されます。

- ・ Default Data Source Information (デフォルト・データ・ソース情報)
データ・ソース情報を修正可能にするか、デフォルト値を使用するかを選ぶことができます。
- ・ Default Environments (デフォルト環境)
環境を選択可能にするか、デフォルト値を使用するかを選ぶことができます。
- ・ Default Data Load (デフォルト・データ・ロード)
データ・ロード・パラメータを修正可能にするか、デフォルト値を使用するかを選ぶことができます。
- ・ Default Advanced Parameters (デフォルト上級パラメータ)
上級パラメータを修正可能にするか、デフォルト値を使用するかを選ぶことができます。
- ・ Default Languages (デフォルト言語)
代替言語を選択可能にするか、デフォルト値を使用するかを選ぶことができます。
- ・ Upgrade/Update Plan Generation (アップグレード/アップデート・プランの生成)
ソフトウェアの旧バージョンで定義したロケーションとマシンからプランを自動生成可能にするかどうかを選ぶことができます。

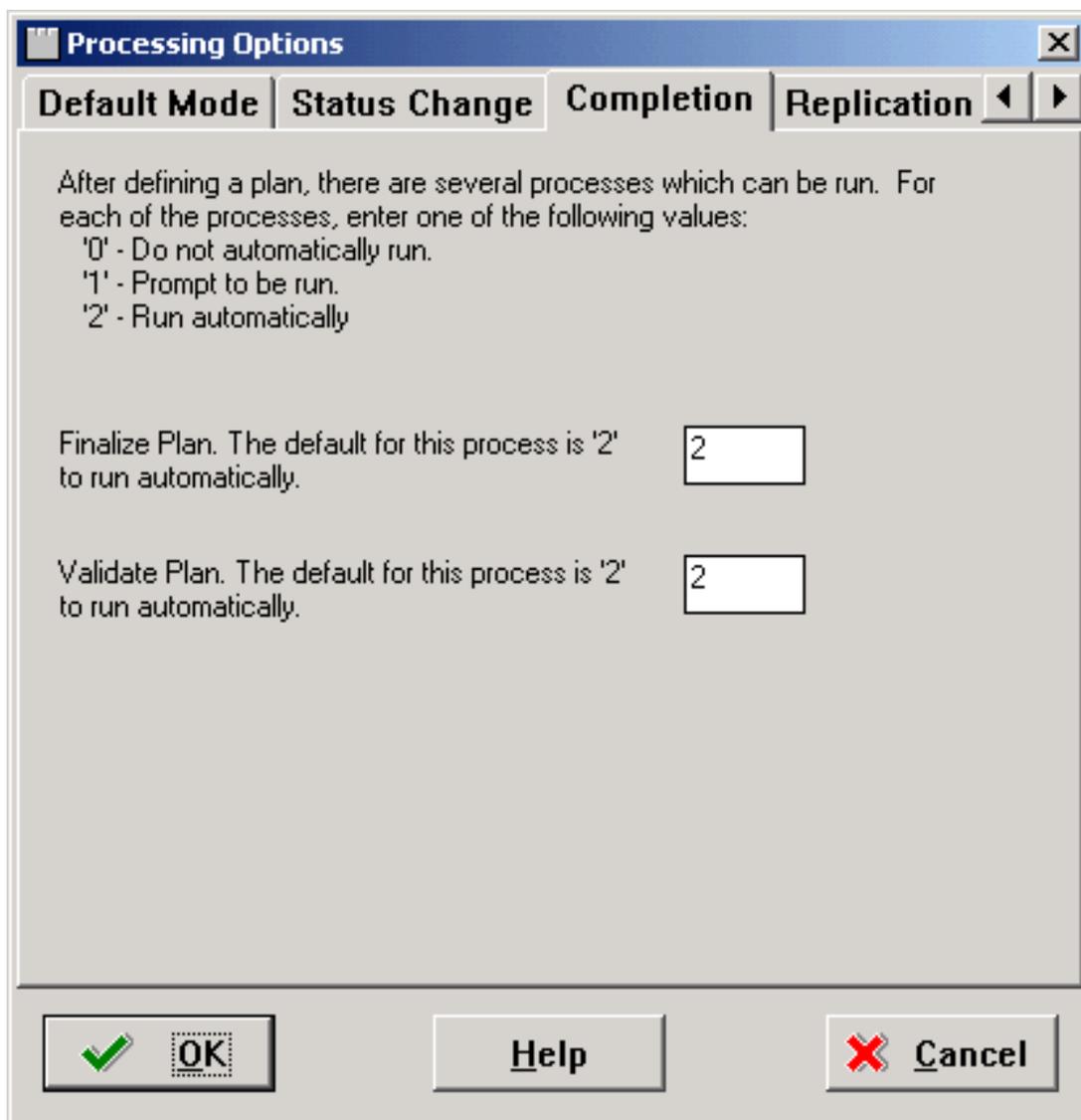
▶ 状況変更を指定するには

- ・ [Status Change (状況変更)] タブをクリックします。
[Status Change] タブが表示されます。



▶ プラン完了処理を指定するには

1. [Completion(完了)]タブをクリックします。



2. [Completion]タブで次のフィールドに値を入力します。

プランの定義後は、このタブのオプションによって、実行される処理が指定されます。次の値のうち1つを入力します。

値	説明
0	自動的に実行されません。
1	実行するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
2	自動的に実行されます。

- Finalize Plan (プランの確定)

自動的に実行するには、デフォルト・オプション"2"を入力します。

- Validate Plan(プランの検証)

自動的に実行するには、デフォルト・オプション"2"を入力します。

▶ レプリケート・オプションを選択するには

- [Replication(レプリケーション)]タブをクリックします。

The screenshot shows the 'Processing Options' dialog box with the 'Replication' tab selected. The dialog contains the following text and input fields:

Enter one of the following values for each remote location option:
 '0' - Do not use and do not prompt.
 '1' - Prompt for option at runtime.
 '2' - Always use without prompting. This is the default.

Replicate System Tables: 1
 Replicate Data Dictionary Tables: 1
 Replicate Control Tables: 1
 Replicate Constant Tables: 1
 Replicate Master Tables: 1

Buttons: OK, Help, Cancel

- [Replication]タブで次のフィールドに値を入力します。

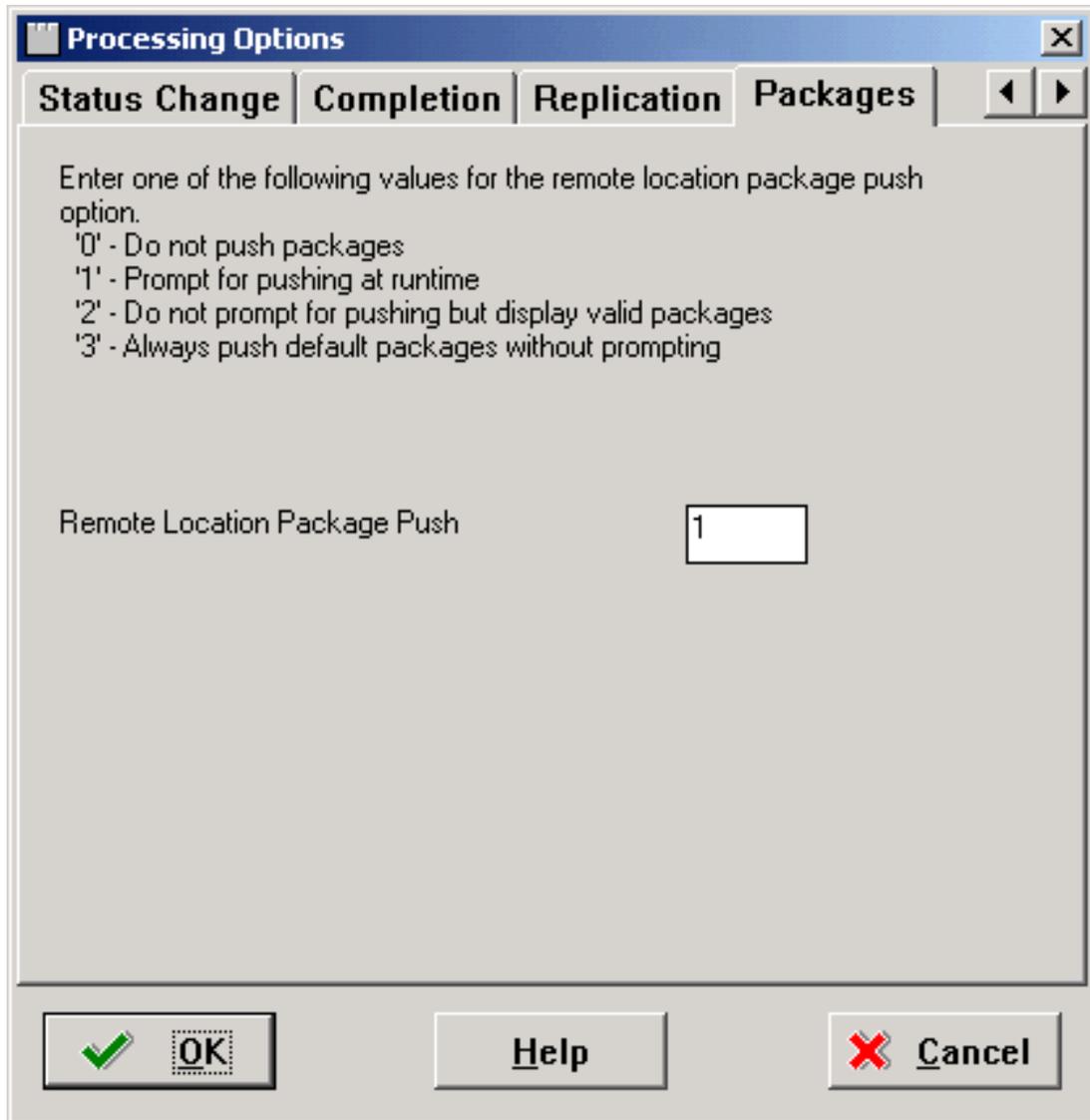
値	説明
0	プロンプトは使用せず、表示されません。
1	ランタイムにオプションを確認するプロンプトが表示されます。

値	説明
2	常にプロンプトなしで使用します。

- ・ Replicate System Tables (システム・テーブルをレプリケート)
リモート・ロケーション用にシステム・テーブルを自動的にレプリケートするかどうかを選ぶことができます。
- ・ Replicate Data Dictionary Tables (データ辞書テーブルをレプリケート)
リモート・ロケーション用にデータ辞書テーブルを自動的にレプリケートするかどうかを選ぶことができます。
- ・ Replicate Control Tables (コントロール・テーブルのレプリケート)
リモート・ロケーション用にコントロール・テーブル、メニュー、およびユーザー定義コードを自動的にレプリケートするかどうかを選ぶことができます。
- ・ Replicate Constant Tables (複製固定情報テーブル)
リモート・ロケーション用に固定情報テーブルを自動的にレプリケートするかどうかを選ぶことができます。ビジネス・データ・テーブルは、オブジェクト・ライブラリアン・タイプ280です。
- ・ Replicate Master Tables (マスター・テーブルのレプリケート)
リモート・ロケーション用にマスターを自動的にレプリケートするかどうかを選ぶことができます。ビジネス・データ・テーブルは、オブジェクト・ライブラリアン・タイプ210および211です。

▶ リモート・ロケーションのパッケージ・プッシュ・オプションを指定するには

1. [Packages (パッケージ)] タブをクリックします。



2. [Packages]タブで、リモート・ロケーション・パッケージのプッシュ・オプションに次の値のうち1つを入力します。

値	説明
0	パッケージはプッシュされません。
1	ランタイムにプッシュするかどうかを確認するプロンプトが表示されます。
2	プッシュを確認するプロンプトは表示されませんが、有効なパッケージが表示されます。
3	プロンプトは表示されず、常にデフォルト・パッケージがプッシュされます。

3. 必要なオプションを選択してから[OK]をクリックします。

インストール・プランの各部の削除

〈Installation Planner (インストール・プランナ)〉アプリケーションでの処理中に、作成したサーバーまたはマシンの削除が必要な場合があります。プランの個々の情報を必要に応じて削除できますが、データベース、共有エンタープライズ・サーバー/デプロイメント・サーバー、および関連レコードに影響することがあります。

▶ インストール・プランからサーバーまたはマシンを削除するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでプランナ環境にログオンします。
前提条件	インストール・プランが必要です。
同時に行うタスク	なし

1. リリース8.9のプランナ環境から、[Fast Path (略式コマンド)]に“P9654A”と入力して[Enter]キーを押します。
2. 〈Work With Locations and Machines (ロケーション/マシンの処理)〉で、[Find (検索)]をクリックします。
3. ロケーションを展開します。
基本ロケーションのロケーション、マシン、またはサーバーのリストがツリー形式で表示されます。
4. 削除するロケーション、マシン、またはサーバーを選択します。
5. [Delete (削除)]をクリックします。
6. アプリケーションを終了するには、[Close (閉じる)]をクリックします。

言語のみのインストール・プランの作成

代替言語または複数言語を初めてインストールする場合は、このセクションで説明する手順に従ってください。

- ・ リリース8.9のインストールと同時に、またはインストール/アップグレードの完了後に代替言語をインストールします。
- ・ 言語のみのインストール・プランは、言語がまだインストールされていない場合のみです。

言語のみのインストールをできるだけ簡単に短時間で完了するためには、上記のリストのタスクを完了してください。これらのタスクを実行しておく、言語のみのインストールに必要なインストール前の準備を整えることができます。言語を正常にインストールするには、すべてのタスクを実行してください。

言語のインストール要件の検討

言語インストールを実行するための要件を検討します。

▶ 言語インストールの要件を検討するには

1. 言語インストール・プロセスを検討します。

言語インストール・プロセスについては「言語プロセスの概要」を参照してください。

2. ディスク容量要件を検討します。

デプロイメント・サーバー/エンタープライズ・サーバーにインストールする各言語と環境に、ディスク容量が十分であるかどうかを確認します。

3. ディレクトリ構造を検討します。

ディレクトリ構造については、『インストール・リファレンス・ガイド』の「リリース8.9のディレクトリ構造」を参照してください。

デプロイメント・サーバーへの言語のインストール

要件を検討したら、言語をデプロイメント・サーバーにインストールします。次のタスクは、この処理の中でも言語関連の重要な段階です。

▶ デプロイメント・サーバーに言語をインストールするには

1. 「デプロイメント・サーバーへのリリース8.9のインストール」で説明したタスクを完了します。

言語をインストールするには、サーバー・インストール・プロセスを使用して、言語CDから該当する内容をデプロイメント・サーバー上のPeopleSoftディレクトリにコピーします。

2. 言語CD上のすべての該当ファイルが正しいPeopleSoftディレクトリにコピーされたかどうかを確認し

ます。

Installation Plannerの実行

デプロイメント・サーバーに言語をインストールした後に、〈Installation Planner (インストール・プランナ)〉を実行します。次のタスクは、この処理のうち言語関連の重要な段階を明確化したものです。

- ・ [手順 3](#) [422]
- ・ [手順 4](#) [422]
- ・ [手順 5](#) [423]
- ・ [手順 6](#) [423]

▶ 〈Installation Planner〉にアクセスするには

1. 「インストール・プランの作成」に戻ります。
2. プランの定義を開始します。「標準インストール・プランの定義」または「カスタム・インストール・プランの定義」のどちらかを選択します。

▶ 〈Installation Planner〉に情報を入力するには

Custom Installation Plan - [Installation Planner]

File Edit Preferences Form

Tools

Form

Deploy...

Cascade

Title

Horizontal...

Title

Vertically

Contents

How To

Display Errors

Next Error

About J.D. Edwards

Plan Information:

Name: LANGUAGE ONLY

Description: Language only plan

Status: 10 In Planning

Install Type:

Install Upgrade Software Update (ASU/ESU)

Release:

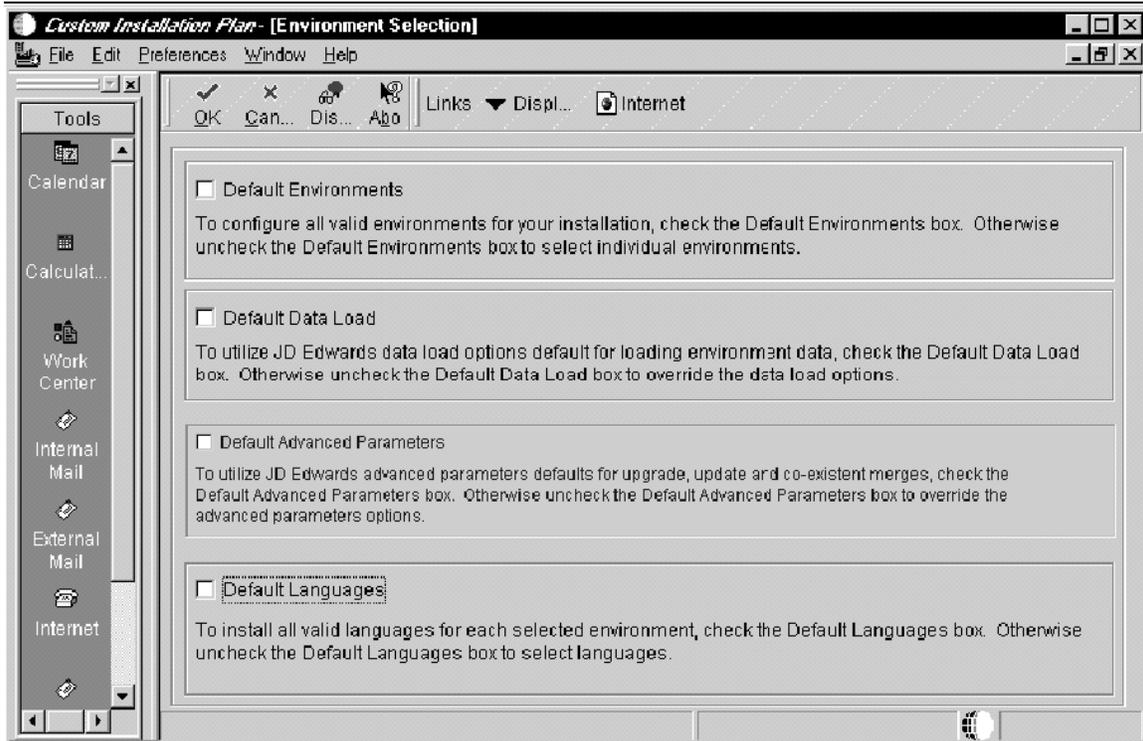
To Release: B9

Include Languages:

No Yes Language Only

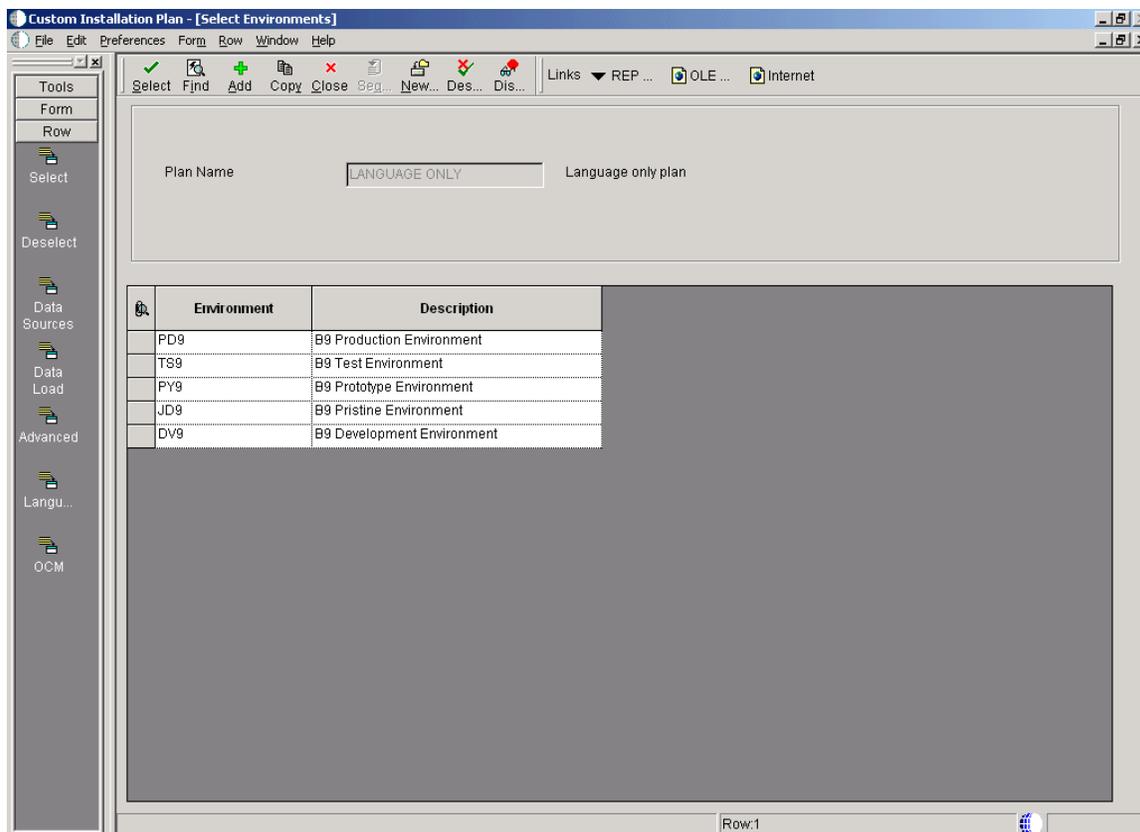
1. 〈Installation Planner〉で、基本プラン情報を入力します。[Include Languages (言語を含む)]で、[Language Only (言語のみ)]オプションを選択します。
2. [Include Languages]で、[Language Only]を有効にします。

▶ (カスタム/デフォルト)パラメータを選択するには



- ・ 〈Environment Selection (環境の選択)〉では、すべての環境と言語がデフォルト値に設定されています。インストールする環境ごとに言語を指定する場合は、[Default Environment (デフォルト環境)]および[Default Languages (デフォルト言語)]オプションを無効にします。

▶ 環境を選ぶには



- ・ 言語をインストールする環境を選びます。
 〈Language Selection(言語の選択)〉フォームが表示されます。

Installation Workbenchの実行

言語のみのプランを作成した後に、それを一連のワークベンチで実行し、言語テーブルを該当するデータ・ソースにロードする必要があります。言語インストール・プロセスは、どのデータベースの場合も同じです。次のタスクは、この処理の中でも言語関連の重要な段階です。

▶ 〈Installation Workbench(インストール・ワークベンチ)〉を実行するには

1. 「Installation Workbenchの実行」に戻ります。
2. 〈Control Table Workbench(コントロール・テーブル・ワークベンチ)〉と〈Specification Table Merge Workbench(スペック・テーブル・マージ・ワークベンチ)〉の手順を完了します。

コントロール・テーブル、データ辞書、およびセントラル・オブジェクトは、〈Control Table Workbench〉と〈Specification Table Merge Workbench〉によってロードされます。

エンタープライズ・サーバー要件の確認

次のタスクは、言語をインストールするためのサーバー要件を確認する処理の中でも重要な段階です。

▶ エンタープライズ・サーバー要件を確認するには

1. エンタープライズ・サーバーのハードウェアとソフトウェアが要件をすべて満たしているかどうかを確認します。
2. エンタープライズ・サーバーがディスク容量要件をすべて満たしているかどうかを確認します。
3. 「エンタープライズ・サーバーのインストール」に戻ります。

ローカル・コード・セットとコード・ページのJDE.INI値が使用言語に合わせて設定されているかどうかを確認します。これらの値については、「言語プロセスの概要」の「ナショナル・ランゲージ・サポート」の表を参照してください。

ワークステーション要件の確認

次のタスクは、言語をインストールするためのワークステーション要件を確認する処理の中でも重要な段階です。

▶ ワークステーション要件を確認するには

1. ワークステーションのハードウェアとソフトウェアが要件をすべて満たしているかどうかを確認します。
2. 「ワークステーションの構成とインストール」に戻ります。
3. 該当する言語の文字セットをワークステーションにインストールします。
4. デプロイメント・サーバー上で、Interactive Runtime、Install、およびNetwork QueuesのJDE.INI設定を確認するステップを実行します。
5. リリース8.9をワークステーションにインストールするステップを実行します。
6. グループ・プロファイルとユーザー・プロファイルが正しく設定されているかどうかを確認します。

言語インストールの完了

エンタープライズ・サーバーとワークステーションのハードウェアとソフトウェアが言語インストール要件を満たしているかどうかを確認し終わったら、インストールを完了できます。

エンタープライズ・サーバーに言語スペックを転送する方法については、『パッケージ管理』ガイドを参照してください。

代替言語パッケージのビルドと配布

インストールの完了後に、代替言語パッケージをビルドして配布します。言語の組込みまたは言語のみのパッケージの作成については、『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ・ビルド」を参照してください。

アップグレード・ユーティリティ

アップグレード・ユーティリティについては次の7つのセクションがあります。

- ・ サードパーティのODBCデータ・ソースの作成
- ・ ソフトウェア保護コードの再検証
- ・ ERPのインストール削除
- ・ エンタープライズ・サーバー上のERPの停止
- ・ データのみのアップグレード
- ・ Windowsのディスクとレジストリへのアクセス権の許可

これ以降は、上記のプランナ・ユーティリティについて個別に説明します。

サードパーティのODBCデータ・ソースの作成

Oracle以外のプランでセットアップしたERPデータ・ソースごとに、対応する32ビットODBC(オープン・データベース・コネクティビティ)データ・ソースがデフォルトで作成されます。ERPで指定したデータ・ソースのタイプに応じて、iSeries AccessまたはSQL Serverドライバを使用してください。これらのODBCデータ・ソースの名前は、対応するERPデータ・ソースの各datasource type項目と一致させる必要があります。

たとえば、セントラル・オブジェクトのERPデータ・ソースタイプがS(SQL Server)であれば、SQL Serverドライバを使用する32ビットODBCデータ・ソースを追加してください。Business Data - PRODのERPデータ・ソースがI(IBM iSeries Access)であれば、iSeries Accessドライバを使用する32ビットODBCデータ・ソースを追加してください。次の表に例を示します。

エンタープライズ・サーバーとデータベースの構成によっては、ERPデータ・ソースに関連するODBCデータ・ソースを作成する必要があります。次の表は、一般に環境ごとに作成するデータ・ソースを示しています。

SQLデータベースを搭載したWindowsエンタープライズ・サーバー用のODBCデータ・ソース

環境	データ・ソース	SQLデータベース	
プリスティン	Central Objects - JD9	JDE_JD9	
	Control Tables - JDE	JDE_PRISTINE	
	Business Data - JDE	JDE_PRISTINE	
	Versions - JD9	JDE_JD9	
本稼働用	Central Objects - PD9	JDE_PD9	
	Control Tables - Prod	JDE_PRODUCTION	
	Business Data - PROD	JDE_PRODUCTION	
	開発/テスト	Central Objects - DV9	
		Business Data - TEST	
		Versions - DV9	
		Control Tables - CRP	
	Business Data - CRP	JDE_CRP	
	Versions - PY9	JDE_PY9	

エンタープライズ・サーバーに関する考慮事項

エンタープライズ・サーバーがWindows 2000の場合は、デプロイメント・サーバー上でこれらのODBCドライバを追加するだけでなく、ユーザーJDEとしてエンタープライズ・サーバー上でSQL用のODBCデータ・ソースを作成してください。

SQL Server用のサードパーティ・データ・ソースの作成

ワークステーションまたはデプロイメント・サーバーごとに、そのアクセス先となる各サーバーのデータ・ソースを作成する必要があります。

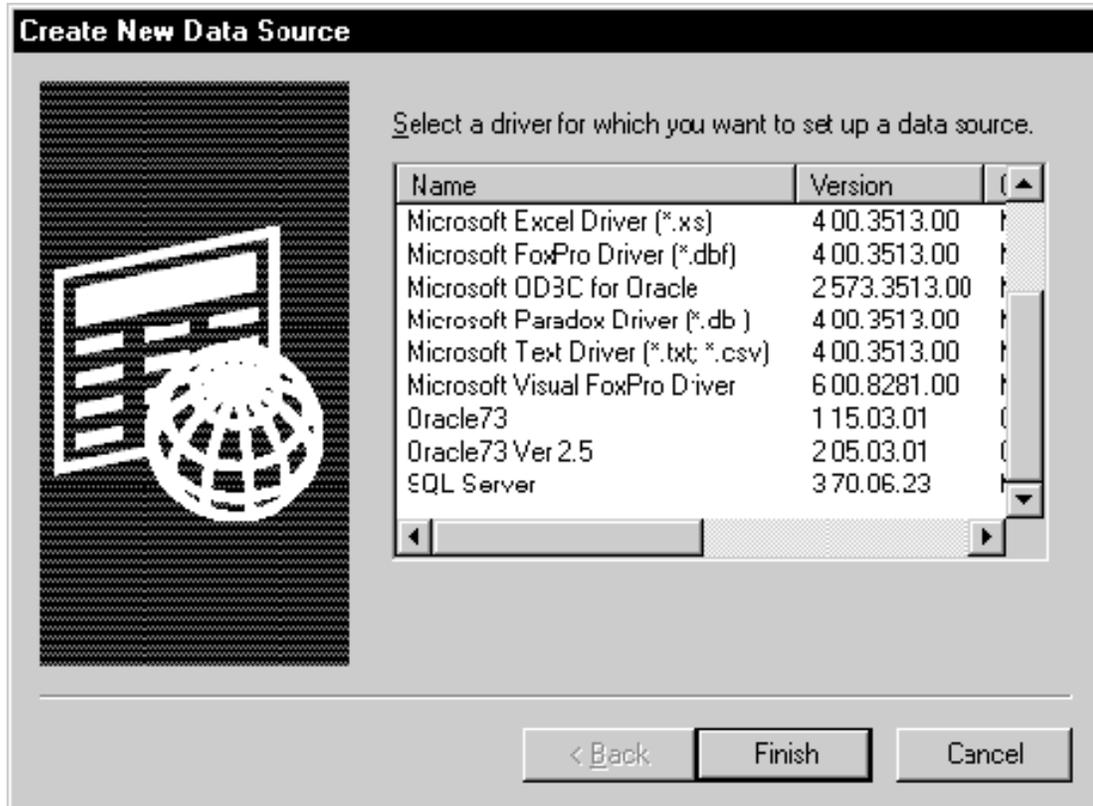
▶ 新規SQLデータ・ソースを作成するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、Windowsの[コントロール パネル]にアクセスします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

注意

ODBCデータ・ソースの作成を(Installation Planner(インストール・プランナ))の[Create New Data Source(新規データ・ソースの作成)]フォームから開始した場合は、下記の「[ステップ 4 \[?\]](#)」から始めます。

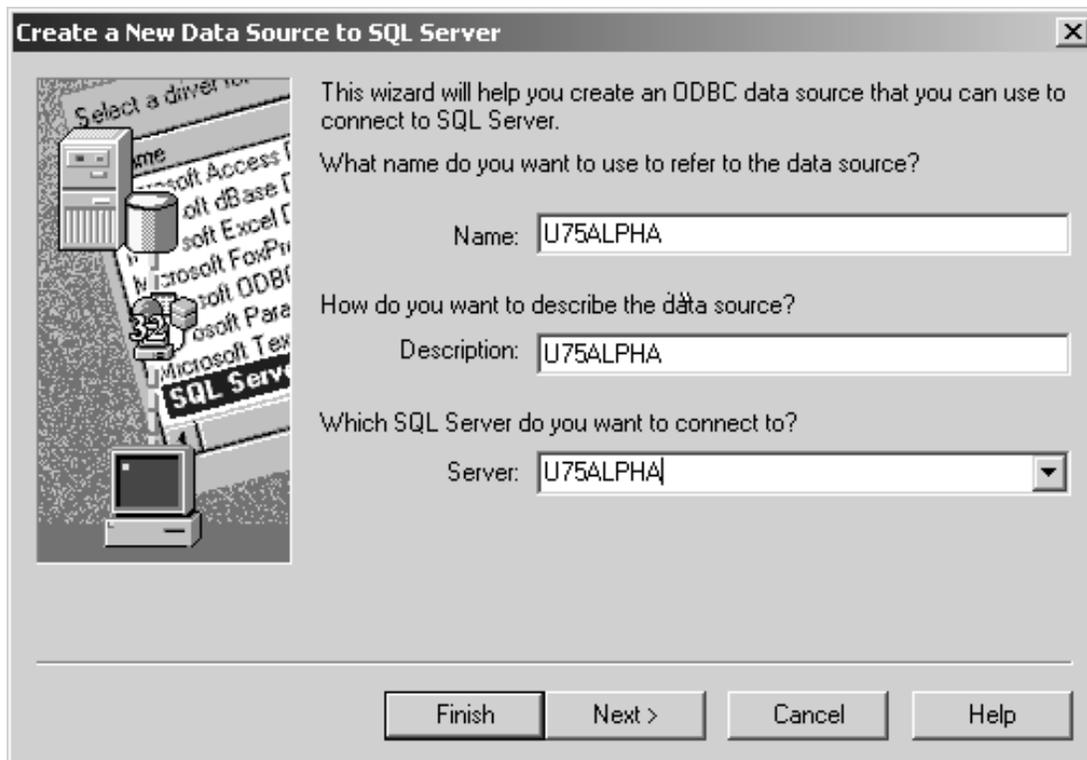
1. 次のオプションのうち1つを選択します。
 - ・ Windows 2000の場合:[コントロール パネル]から[管理ツール]をクリックし、[データ ソース(ODBC)]をダブルクリックします。
2. [システム DSN]タブをクリックします。
3. [追加]をクリックします。



4. [Create New Data Source]で、[SQL Server]を選択して[Finish(終了)]をクリックします。

注意

SQL Server ODBCドライバのバージョンは、3.70.06.23以上である必要があります。下位レベルのドライバを使用すると、データベースが破損する恐れがあります。



5. [Create New Data Source to SQL Server (SQLサーバーへのデータ・ソースの新規作成)]で、次のフィールドに情報を入力します。

- ・ Name (名前)

ERPの〈Data Source Setup (データ・ソースの設定)〉フォームの[Database Name (データベース名)]フィールドで割り当てたデータ・ソース名を入力します。このフォーム名は、〈Work With Data Sources (データ・ソースの処理)〉です。

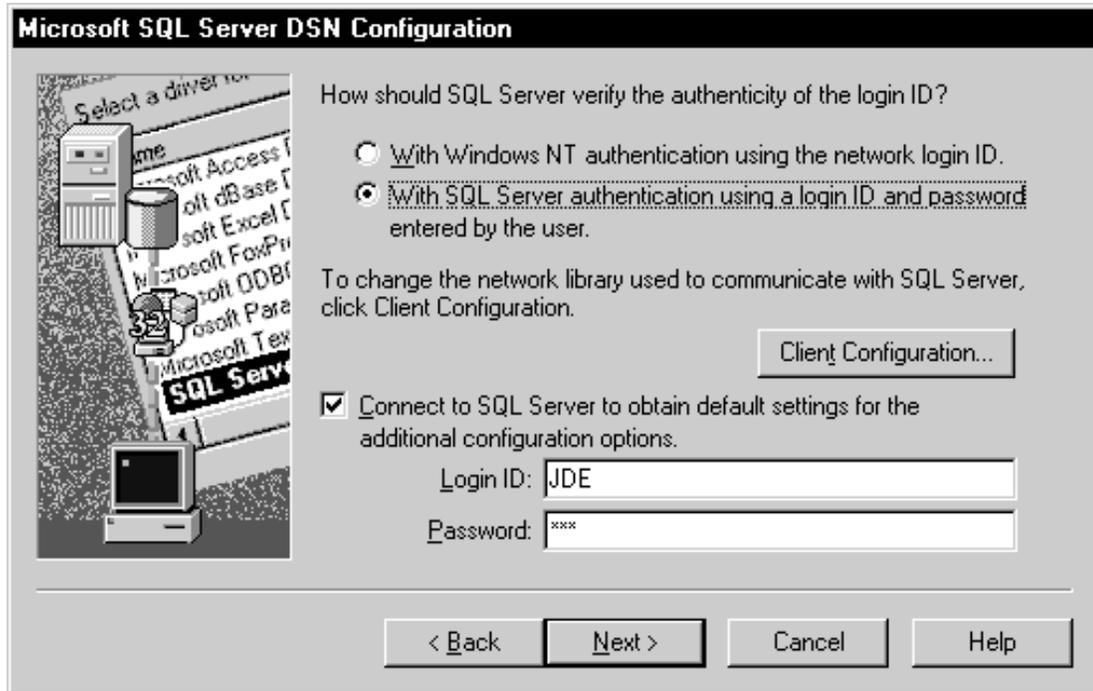
- ・ Description (記述)

データ・ソースの記述を入力します。これは必須フィールドです。

- ・ Server (サーバー)

接続先となるサーバーの名前を入力します。この名前は、HostsファイルまたはDHCPテーブルのサーバー名と一致する必要があります。

6. [Next (次へ)]をクリックします。



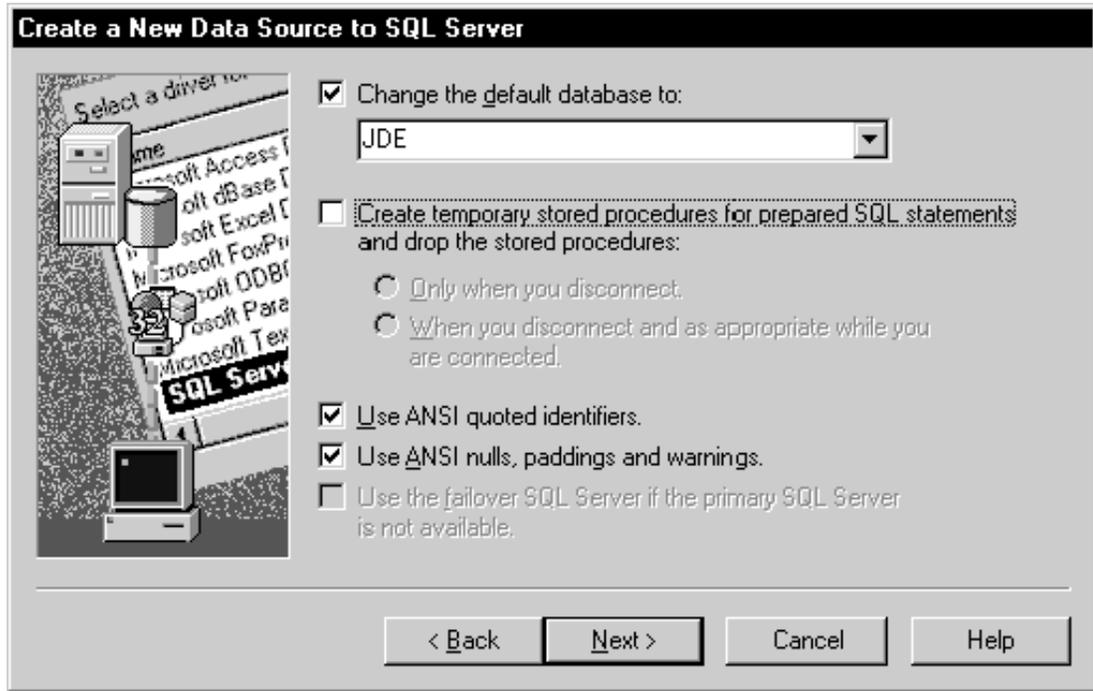
7. <Microsoft SQL Server DSN Configuration>で、オプション[With SQL Server authentication using a login ID and password entered by the user. (入力したログインIDとパスワードをSQL Server認証で使用)]を有効にします。
8. [Connect to SQL Server to obtain default settings for the additional configuration options. (SQL Serverに接続して他の構成オプションのデフォルト設定を取得)]オプションを有効にします。
9. [Login ID]または[Password]フィールドに入力が表示される場合は、それを削除してログオンおよびパスワード情報を入力します。
たとえば、ログオンIDにJDE、パスワードにJDEを使用できます。
10. [Next]をクリックします。

注意

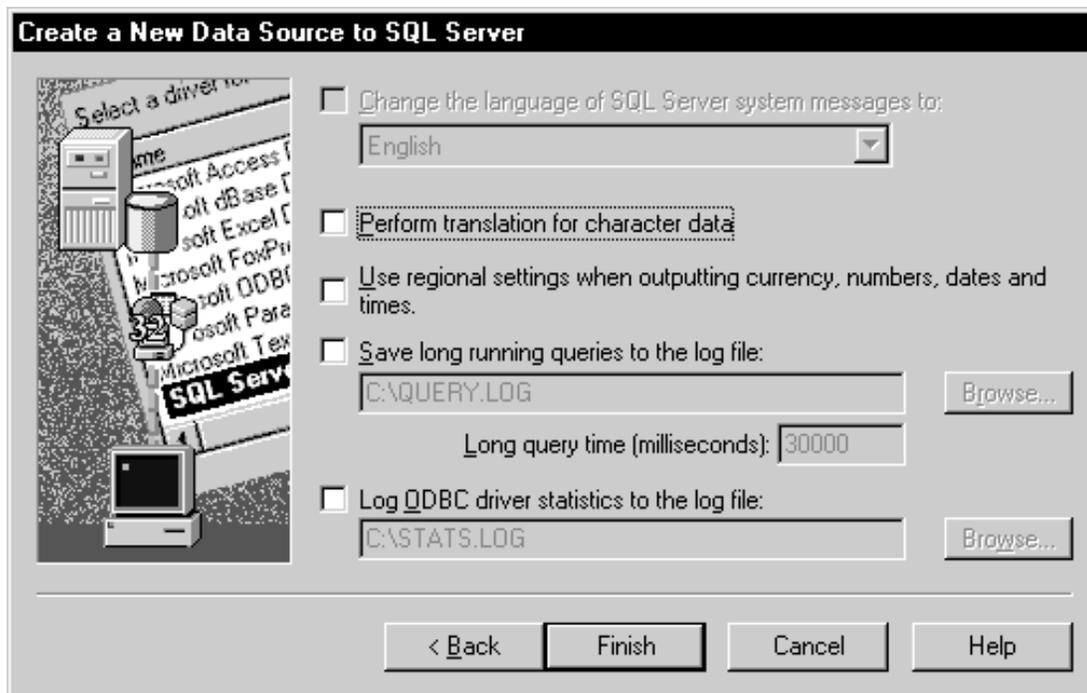
各データ・ソース用のデータベースを指定します。次の表を参考にして、ERPデータ・ソースで使用されるデータベースを確定してください。

データ・ソース	データベース名
System - B9	JDE9
Object Librarian - B9	
Data Dictionary - B9	
machinename - B9 Server Map	
Central Objects - PY9	JDE_PY9

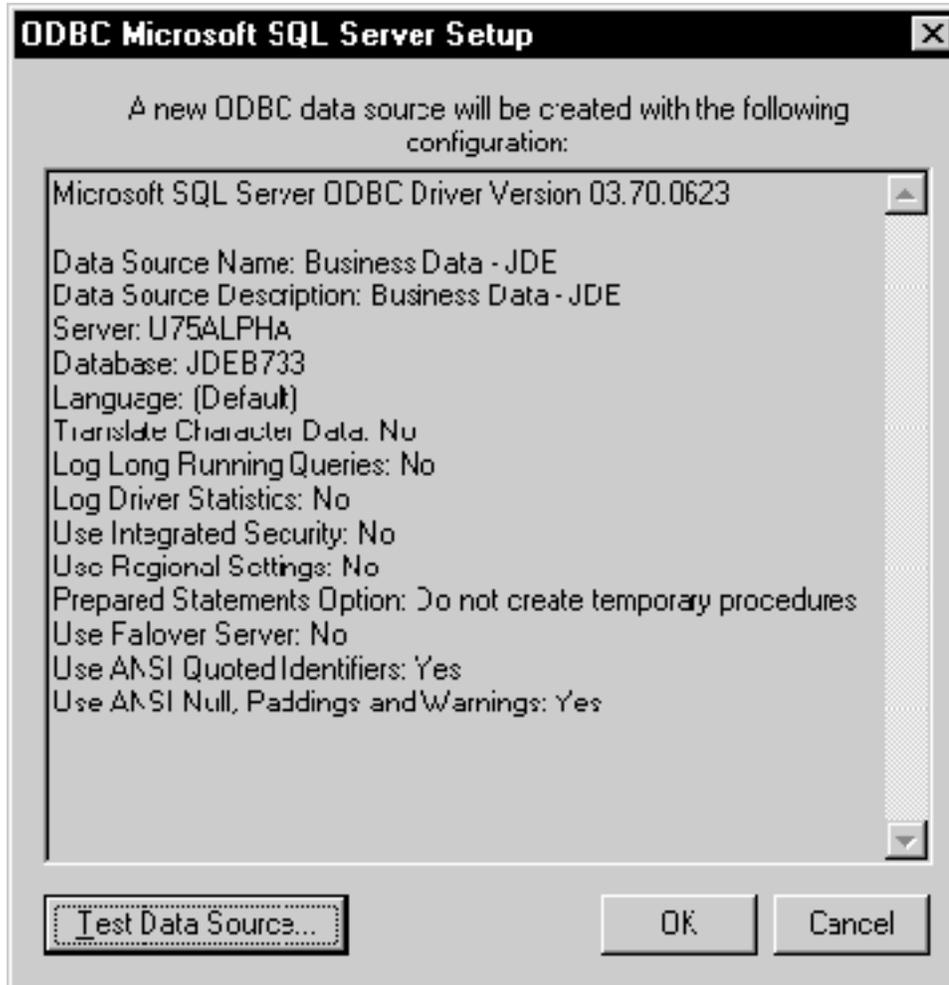
データソース	データベース名
Versions - PY9	
Control Tables - CRP Business Data - CRP	JDE_CRP
Central Objects - JD9 Versions - JD9	JDE_JD9
Business Data - JDE Control Tables - JDE	JDE_PRISTINE
Central Objects - PD9 Versions - PD9	JDE_PD9
Control Tables - Prod Business Data - PROD	JDE_PRODUCTION
Central Objects - DV9 Versions - DV9	JDE_DV9
Control Tables - Test Business Data - TEST	JDE_DEVELOPMENT



11. <Create a New Data Source to SQL Server>で、[Change the default database to(デフォルト・データベースの変更)]フィールドにデフォルトのデータベース名を入力します。
たとえば“JDE_PRISTINE”と入力します。
12. [Create temporary stored procedures for prepared SQL statements and drop the stored procedures(用意されたSQL文の一時保管プロシージャの作成および削除)]オプションが無効になっているかどうかを確認します。
13. [Next]をクリックします。



14. <Create a New Data Source to SQL Server>で、[Perform translation for character data(文字データ変換を実行)]オプションが無効になっているかどうかを確認し、[Finish]をクリックします。



15. <ODBC Microsoft SQL Server Setup (ODBC Microsoft SQL Serverのセットアップ)>で、[Test Data Source (データ・ソースのテスト)]をクリックし、[OK]をクリックします。
16. データ・ソースを作成するには、[OK]をクリックします。

注意

ODBCデータ・ソースの作成を[コントロール パネル]から開始した場合は、メイン画面に戻りません。

注意

ODBCデータ・ソースの作成を<Installation Planner>の[Create New Data Source]フォームから開始した場合は、<Installation Planner>プロセスに戻ります。

ソフトウェア保護コードの再検証

ERPソフトウェアの保護コードを再検証する場合は、デプロイメント・サーバーとワークステーションの両方を再検証する必要があります。たとえば、デプロイメント期間や有効期間を過ぎている場合や、ERPにモジュールを追加する場合は、このタスクが必要になります。ソフトウェアからは、有効期限の7日前に通知メッセージが表示されます。

デプロイメント・サーバーの再検証

次の場合には、デプロイメント・サーバーを再検証する必要があります。

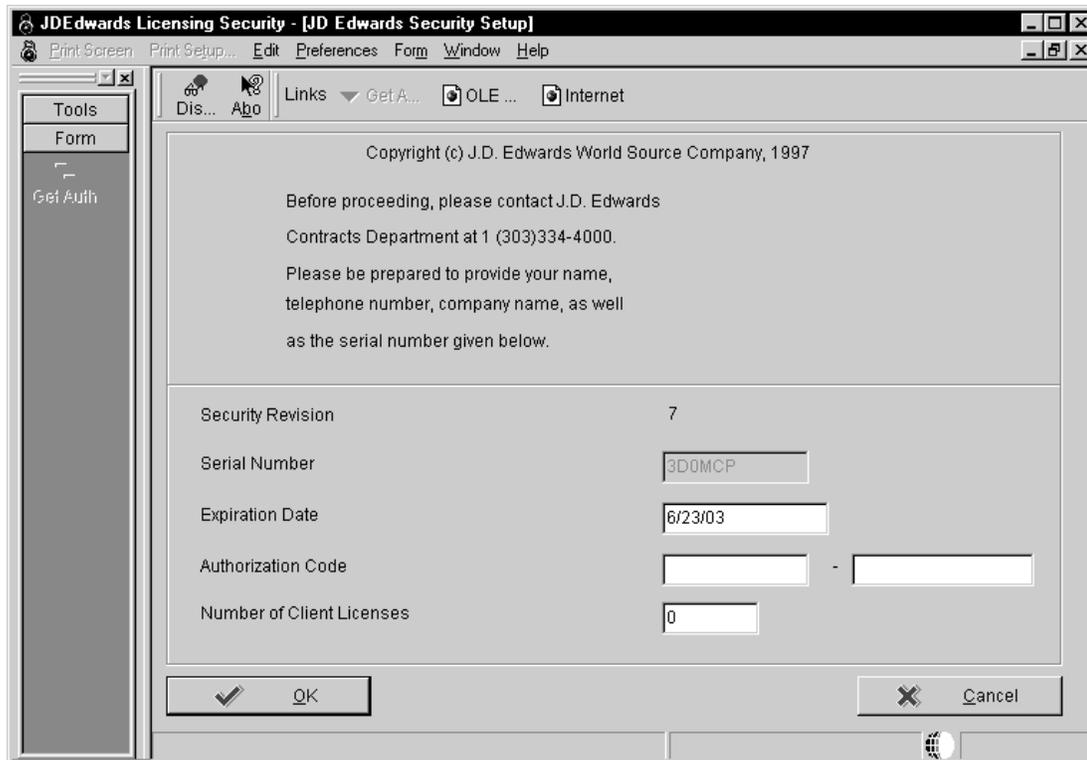
- ・ デプロイメントの有効期間がまもなく切れるか、切れた場合
- ・ ERPにモジュールを追加した場合
- ・ インストール・ライセンスを追加購入した場合

▶ デプロイメント・サーバーを再検証するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDEとして、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでプランナ環境にログオンします。
前提条件	ERPをデプロイメント・サーバーにインストールしておく必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. デプロイメント・サーバー上で、ユーザーJDE、ユーザーJDEのデータベース・パスワードでプランナ環境にログオンします。
2. 〈Advanced Operations (上級操作)〉メニュー(GH9611)から〈JDEdwards Licensing Security (J.D. Edwardsライセンス・セキュリティ)〉を選択します。
3. 〈Reset JDEdwards Security (JD Edwardsセキュリティのリセット)〉で[Reset Server Security (サーバー・セキュリティのリセット)]をクリックします。

〈JDEdwards Security Setup (JD Edwardsセキュリティの設定)〉フォームには、次のフォーム例の値とは異なる情報が表示されます。



4. 権限コードを取得する際は、日本のカスタマー・サポート(0120)174074に連絡してください。日本の営業時間外の場合には英語での対応となりますが、米国本社の303-334-4000に電話して、Contracts Departmentからその番号を取得してください。お問い合わせの際は、次の情報を用意してください。

- ・ シリアル番号
- ・ クライアント・ライセンス数

シリアル番号と権限コードは、ERPをインストールするたびに変更されます。

クライアント・ライセンスを追加する場合は、必要な合計数を入力してください。たとえば、現在のクライアント・ライセンス数が1000件でさらに300件を追加する場合は、“1300”と入力します。

5. デプロイメント・サーバーを再設定するには、[OK]を選択します。

ワークステーションの再検証

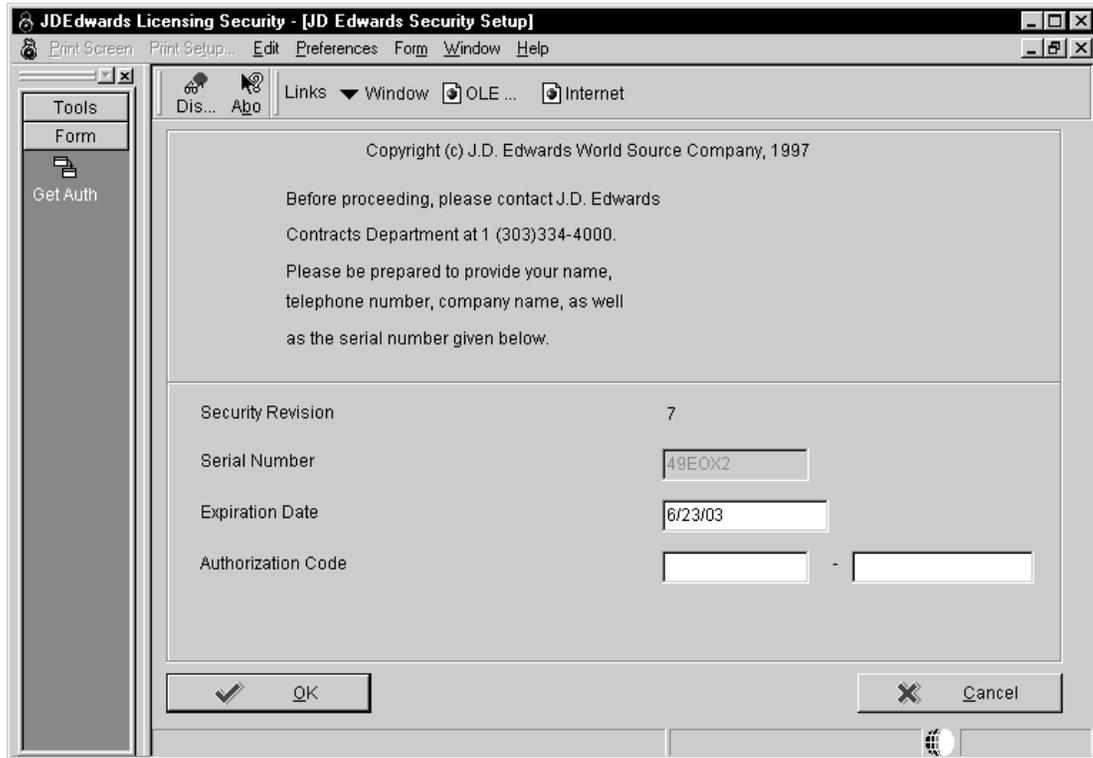
ワークステーションの再検証は、次のどちらかの場合に必要です。

- ・ 有効期間が切れた場合
- ・ ERPにモジュールを追加した場合

▶ ワークステーションを検証するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	正しいユーザーIDとパスワードで、ワークステーションにログオンします。
前提条件	ERPをワークステーションにインストールしておく必要があります。
同時に行うタスク	なし

1. 該当するユーザーIDとパスワードで、ワークステーションにログオンします。
2. ワークステーションで使用可能にする環境を選択します。
3. 〈Advanced Operations〉メニュー(GH9611)から〈JDEdwards Licensing Security〉を選択します。
4. 〈Reset JDEdwards Security〉で[Reset Client Security(クライアント・セキュリティのリセット)]をクリックします。



5. 〈JD Edwards Security Setup(JD Edwardsセキュリティの設定)〉で、[Form(フォーム)]メニューから [Get Auth(権限コードの取得)]を選択します。
[Authorization Code(権限コード)]フィールドに権限コードが表示されます。
6. [OK]をクリックしてワークステーションをリセットします。

ソフトウェアのアンインストール

インストール削除プログラムを実行すると、デプロイメント・サーバーとワークステーションから、以前にインストールしたERPを削除できます。

インストール削除プログラムでは、次の処理が実行されます。

- ・ PeopleSoftプログラム・グループの削除
- ・ ルート・ディレクトリからのjde*.*の削除
- ・ LOCALデータ・ソースの削除
- ・ パスの削除
- ・ サービスの解除
- ・ アンインストール・ディレクトリの削除
- ・ デプロイメント・サーバー上のライセンス数の追加
- ・ インストール・ディレクトリ・ツリーの削除
- ・ レジストリの削除

デプロイメント・サーバーからのソフトウェアの削除

デプロイメント・サーバーからERPインストールを削除するには、次のどちらかの手順を実行します。

スタッフ	インストール担当者またはシステム管理者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上でWindows Explorerにアクセスします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

▶ デプロイメント・サーバーからOneWorld B73.3インストールを削除するには

1. OneWorld Setup CDをCDドライブに挿入します。
2. Windows Explorerから、CDのルート・ディレクトリにあるプログラムuclient.exeを実行します。

▶ OneWorld B73.3.xインストールをデプロイメント・サーバーから削除するには

1. Windowsの[スタート]メニューから[コントロール パネル]を開きます。
2. [アプリケーションの追加と削除]をダブルクリックします。

3. 削除するOneWorldまたはERPのリリースに対応する項目を選択します。
4. [追加と削除]をクリックします。
5. B73.3.1の場合は、〈JDEdwards OneWorld Client Maintenance Setup (J.D. Edwards OneWorld) クライアント・メンテナンスのセットアップ〉で、[Remove All Components (全コンポーネントの削除)]を選択します(他のリリースの場合は、OneWorldのフォーム名が異なります)。
6. [Finish]をクリックします。
7. Windows Explorerを使用して、削除するOneWorldまたはERPのリリースに対応するJ.D. Edwards OneWorldまたはERPディレクトリを削除します。

ワークステーションからのERPインストールの削除

トラブルシューティング
インストール削除処理中にセキュリティ・メッセージが表示された場合は、無視してください。特定のオブジェクトを除去できないことを示すエラー・メッセージが表示された場合は、そのオブジェクトのプロパティ・シートで[Read Only]が有効になっていないことを確認してから、インストール削除プログラムを実行し直します。

▶ ワークステーションからB73.3.1以上のインストールを削除するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ワークステーション上でログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

OneWorldまたはERPをワークステーションから完全に削除するには、2つのプログラムを削除します。一方はJDEdwards OneWorld Client Listener、他方はJDEdwards OneWorldまたはJDEdwards ERPです。

1. Windowsの[スタート]メニューから[コントロール パネル]を開きます。
2. [コントロール パネル]で、[アプリケーションの追加と削除]をダブルクリックします。
3. [アプリケーションの追加と削除]で、[JDEdwards OneWorld]または[JDEdwards ERP]を選択します。
4. [アプリケーションの追加と削除]で、削除するOneWorldまたはERPのリリースに対応するJDEdwards OneWorld Client Listener項目を選択します。
5. [追加と削除]をクリックします。
6. B73.3.1の場合は、〈JDEdwards OneWorld Client Listener Maintenance Setup (J.D. Edwards OneWorldクライアント・リスナー・メンテナンスのセットアップ)〉で、[Remove All Components]を選択します(他のリリースの場合は、OneWorldのフォーム名が異なります)。
7. 〈JDEdwards OneWorld Client Maintenance Setup (J.D. Edwards OneWorldクライアント・メンテナンスのセットアップ)〉で、[Remove All Components]を選択します。

8. [Finish]をクリックします。

OneWorldまたはERP削除の進行状況がステータス・バーに表示されます。このプロセスを繰り返し、[アプリケーションの追加と削除]で[JDEdwards OneWorld or ERP]を選択してOneWorldまたはERPプログラムを削除します。

▶ OneWorld Setup CDを使用してワークステーションからOneWorld B73.3インストールを削除するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	デプロイメント・サーバー上で、Windows Explorerにアクセスします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. OneWorld Setup CDをCDドライブに挿入します。
2. Windows Explorerから、デプロイメント・サーバー上のOneWorld ¥Clientディレクトリにアクセスし、プログラムuclient.exeを実行します。
3. インストール削除の完了後に、CDドライブからOneWorld Setup CDを取り出します。

▶ Microsoft Windowsの[アプリケーションの追加と削除]を使用してワークステーションからOneWorld B73.3以上のインストールを削除するには

スタッフ	インストール担当者
ログオン状況	ワークステーション上でログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. Windowsの[スタート]メニューから、[設定]をクリックして[コントロール パネル]を開きます。
2. [コントロール パネル]で、[アプリケーションの追加と削除]をダブルクリックします。
3. [アプリケーションの追加と削除]で、削除するOneWorldのリリースに対応するOneWorld項目を選択します。
4. [追加と削除]をクリックします。

ワークステーションからOneWorldが削除されます。

エンタープライズ・サーバーでのソフトウェアの停止

ここでは、サーバー上で実行中のプロセスを停止する必要がある場合に、エンタープライズ・サーバーを停止する方法について説明します。たとえば、JDE.INIファイルのデバッグ中は、エンタープライズ・サーバーを停止する必要があります。デバッグを有効にしている場合は、ログインします。ファイルの保存後は、変更結果が有効になるように、エンタープライズ・サーバーを停止して再起動してください。

スタッフ	システム管理者
ログオン状況	エンタープライズ・サーバー上でソフトウェアにログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. [コントロール パネル]から[サービス]にアクセスします。
2. [JDE B9 Update 0 Network services (JDE B9アップデート0ネットワーク・サービス)]を選択します。
3. [Stop(停止)]を選択します。

注意

Windowsサーバー上でPeopleSoftのネットワーク・サービスを停止しても、一部のプロセスが停止しない場合があります。サービスを完全に停止するには、エンタープライズ・サーバーを再起動するか、次の手順を実行します。

- a. エンタープライズ・サーバー上で[タスク マネージャ]にアクセスし、まだ実行中のPeopleSoftプロセスを右クリックします。
- b. [デバッグ]を選択します。
これにより、Microsoft Visual C++のデバッグ・モードに切り替わります。
- c. デバッグ・プロセスを停止してVisual C++を終了します。
選択したプロセスがシャットダウンされます。
このプロセスを、実行中のプロセスごとに実行します。

データのみアップグレード

ここでは、新リリースへ移行する際、反映させるソフトウェア修正がない場合に使用できる簡易アップグレード方法について説明します。この方法では、カスタマーのビジネス・データのみが確保され、ソフトウェアをカスタマイズしていた場合もそれらはすべて上書きされます。これは、基本的にはビジネス・データ以外のすべてのデータ・ソースについてソフトウェアを新規にインストールする処理です。ビジネス・データは、このデータ・ソースに対してのみテーブル変換を実行することで新リリースに変換されます。

この簡易手順では、通常のアップグレードに必要なタスクの多くをスキップすることができます。場合によっては、通常のアップグレード・タスクも若干修正する必要があります。

データのみアップグレードの場合、「ビジネス・データ」という用語はアプリケーション・テーブルのみを指します。〈Environment Workbench (環境ワークベンチ)〉中に、コントロール・テーブル(ユーザー定義コード、メニュー、およびデータ辞書など)の変更内容がマージされ、オブジェクト・ライブラリに追加された内容が自動入力されます。ただし、スペック・テーブルの変更内容(バージョン・リストなど)は、新リリースにはマージされません。また、このプロセスでは、カスタム・テーブルや修正があったテーブル、ビジネス関数、およびアプリケーションも確保されません。

通常は、本書に記載されている通常のアップグレード手順を使用してください。修正を必要とするタスクについては、次のセクションを参照してください。

- ・ アップグレード前の処理
- ・ アップグレード・プランの作成
- ・ Installation Workbenchの実行
- ・ カスタム修正およびパッケージ
- ・ 本稼働用環境のアップグレード

アップグレード前の処理

コントロール・テーブルの変更およびカスタマイズ内容は新しいリリースに移行されないため、次の手順はデータのみアップグレードには該当しません。

次のステップはスキップしてください。

- ・ 「開発環境の準備」
- ・ 「修正フラグとマージ・フラグのチェック」
- ・ 「コントロール・テーブルのリフレッシュ」

既存のユーザー定義コード・テーブルとメニュー・テーブルは、〈Installation Workbench (インストール・ワークベンチ)〉の実行中に新リリース・レベルで再ロードされるように、リフレッシュするのではなく、削除する必要があります。F0002およびF00021テーブルは削除しないでください。自動採番機能が正常に動作するには、この2つのコントロール・テーブルがビジネス・データ・テーブルと一致する必要があります。代わりに、コントロール・テーブル(メニュー、ユーザー定義コード、およびデータ辞書テーブル)を保存し、コ

ントロール・テーブル・マージを実行して、各テーブルを新規のリリース情報で更新できます。

- ・ 「マスター・コントロール・テーブルのカスタム変更の検証」

デプロイメント・サーバーのインストール

使用中のプラットフォーム用の『アップグレード・ガイド』に掲載されている指示に従って、デプロイメント・サーバーをインストールします。次に、インストール先となる環境用のセントラル・オブジェクトをロードする必要があります(たとえば、本稼働用環境をアップグレードする場合は、loadedまたはreloaded実行可能プログラムを実行します)。

アップグレード・プランの作成

プランを定義するときに、次のタスクを実行してください。

- ・ [Upgrade Environment(環境のアップグレード)]オプションと[Table Conversions(テーブル変換)]オプションが有効になっていることを確認します。
- ・ 選択した環境がアップグレードされるようにプランを設定します。
- ・ [Specification Merges(スペック・マージ)]は有効にしないでください。
- ・ コントロール・テーブルを削除しないように選択した場合は、[Control Table Merges(コントロール・テーブル・マージ)]セクションをマージするよう設定します。

プランの定義後に、〈Work with Installation Plans(インストール・プランの処理)〉フォームに戻ります。プランを選択して[Expand(展開)]をクリックし、次のタスクを完了します。

- ・ テーブル変換セクションを選択して[Select(選択)]をクリックします。

アプリケーション・テーブルの変換のみ実行する必要があるため、次のテーブル変換レコードがプランに含まれている場合は削除します(プランに含まれるレコードは、アップグレードするソフトウェアのバージョンによって異なります)。レコードによっては複数存在している場合があります。

- ・ F89210
- ・ F98710
- ・ F9210(R8989210)
- ・ F98741 (R89IDVAR)
- ・ F9862
- ・ F98740
- ・ F98741(R8998741)
- ・ F98752

- ・ F98753
- ・ F98720
- ・ F9210(R899210)
- ・ F98711
- ・ F98743
- ・ F98762
- ・ F98745
- ・ F98760
- ・ F98750
- ・ F98751
- ・ F98761(R8998761)
- ・ F98761(R8998763)
- ・ F98762
- ・ F98950
- ・ F9860
- ・ F89210
- ・ F983051
- ・ F98306

Installation Workbenchの実行

通常アップグレードで行うように〈Installation Planner(インストール・プランナ)〉を実行し、次のすべてのワークステーション・タスクを完了します。

- ・ 〈Initial Workbench Tasks(通常ワークベンチ・タスク)〉
- ・ 〈Location Workbench(ロケーション・ワークベンチ)〉
- ・ 〈Data Source Workbench(データ・ソース・ワークベンチ)〉
- ・ 〈Environment Workbench〉
- ・ 〈Machine Workbench(マシン・ワークベンチ)〉
- ・ 〈Table Conversions Workbench(テーブル変換ワークベンチ)〉(ビジネス・データのみ)
- ・ 〈Package Workbench(パッケージ・ワークベンチ)〉

- ・ 〈Remote Location Workbench(リモート・ロケーション・ワークベンチ)〉

カスタム修正およびパッケージ

カスタマイズした内容を配布する必要はないので、次の手順は実行しないでください。

- ・ 「パッケージのビルドとテスト」

カスタム修正は移行されないため、新リリースをテストする場合は標準パッケージの1つを使用してください。

本稼働用環境のアップグレード

本稼働用環境をアップグレードする場合は、本稼働用プランの作成手順に従って操作します。〈Installation Planner〉に関する上記の内容に注意して、前述のように〈Table Conversion Planner(テーブル変換プランナ)〉で示されるテーブルを削除するステップを繰り返してください。

Windowsのディスクとレジストリへのアクセス権の許可

このソフトウェアは、完全な管理者アクセス権がなくてもWindowsワークステーションにインストールすることができます。ただし、インストールするにはディスクとレジストリへのアクセス権が必要です。ここでは、管理者が権限を持たないユーザーにディスクとレジストリへのアクセス権を許可する方法について説明します。

▶ Windowsディスクへの権限なしのアクセス権を許可するには

この手順を実行できるのはドメイン管理者のみです。この手順では、jdeinst.logファイルとインストール・ディレクトリへのアクセス権を許可します。

スタッフ	システム管理者
ログオン状況	Windowsワークステーション上で、管理者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

次の手順に従ってjdeinst.logファイルへのアクセス権を許可します。

1. c:\%のルート・ディレクトリにjdeinst.logという空のファイルを作成します。
2. Windows Explorerで、このファイルを右クリックして[プロパティ]を選択します。
3. [セキュリティ]タブをクリックします。
4. [アクセス権]をクリックします。
5. [追加]をクリックします。
6. [Add Users and Groups(ユーザー/グループの追加)]で、追加するユーザーをダブルクリックします。
7. [アクセス権の種類]フィールドでプルダウン・メニューをクリックし、[フル コントロール]を選択します。
8. [OK]をクリックします。

このユーザーにjdeinst.logファイルへのアクセス権が許可されます。

次の手順に従って、インストール・ディレクトリへのアクセス権を許可します。

1. ドライブ上にB9という空のディレクトリを作成します。
これがEnterpriseOneのインストール・ディレクトリとなります。
2. Windows Explorerで、このディレクトリを右クリックして[プロパティ]を選択します。

3. [セキュリティ]タブをクリックします。
4. [アクセス権]をクリックします。
5. [追加]をクリックします。
6. [ユーザー/グループの追加]で、追加するユーザーをダブルクリックします。
7. [アクセス権の種類]フィールドでプルダウン・メニューをクリックし、[フル コントロール]を選択します。
8. [サブディレクトリのアクセス権を置き換える]をオンにします。
9. [OK]をクリックします。

このユーザーにERPインストール・ディレクトリへのアクセス権が許可され、このディレクトリにEnterpriseOneをインストールできるようになります。

▶ Windowsレジストリへの権限なしのアクセス権を許可するには

この手順を実行できるのはドメイン管理者のみです。この手順では、HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥JDEwardsへのアクセス権を許可します。

スタッフ	システム管理者
ログオン状況	Windowsワークステーション上で、管理者としてログオンします。
前提条件	なし
同時に行うタスク	なし

1. regedt32プログラムを実行します。
 - a. Windowsの[スタート]ボタンをクリックし、[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
 - b. [名前]フィールドに“regedt32”と入力します。
 - c. [OK]をクリックします。
2. <HKEY_LOCAL_MACHINE on Local Machine>ウィンドウをクリックします。
3. [Software]フォルダをダブルクリックして開きます。
4. メニュー・バーで[編集]-[キーの追加]をクリックします。
5. [キー名]フィールドに“JDEwards”と入力します(大文字と小文字を区別して入力してください)。[クラス]フィールドは空白にしておきます。
6. [OK]をクリックします。
7. メニュー・バーで[セキュリティ]、[アクセス許可]をクリックします。
8. [レジストリ・キーのアクセス許可]ボックスで[追加]をクリックします。

9. [ユーザー/グループの追加]ボックスで、追加するユーザーをダブルクリックします。
10. [アクセス権の種類]フィールドでプルダウン・メニューをクリックし、[フル コントロール]を選択します。
11. [既存のサブキーのアクセス権を置き換える]をオンにします。
12. [OK]をクリックします。

これで、このユーザーにレジストリへのアクセス権が許可されます。

